

---

# 神々の黄昏《ユナセブラ》

三千広瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々の黄昏<sup>ユナヒツラ</sup>

### 【Nコード】

N1873E

### 【作者名】

三千広瀬

### 【あらすじ】

三つの大国がライサイル大陸の支配を争っている時代。辺境の地・小国ノストールに、月の女神の息子シルク・トトウ神の転身人誕生の予言が告げられる。太古の神々と、転身人、守護妖獣、王家の指輪が、ノストールの第四王子として育った少女ルナを過酷な運命の旅へと導いていく。長編ファンタジー。

## 第1章 誕生

「1」

ノストール王国の静かな夜。

アルティナ城、ラウ王家の居城の一角で異変は起きていた。

かすかな物音が、子供部屋のベッドの中でぐっすりと眠り込んでいた五歳の少年の目を覚まさせた。

「？」

クロトは寝ぼけまなこでむくりと起き上がると、どうして自分が目を覚ましてしまったのかわからず、ぼーっとしていた。

その耳に、廊下でなにかが動いているような、奇妙な音が聞こえてきた。

(……まさか、お化け?)

真っ暗な部屋の中で、クロトは今が真夜中だということに気がついて、全身に鳥肌が立った。

ラウ王家の三番目の王子であるクロトは、夜に目を覚ますのは、物心ついてからこの夜が初めてだったのだ。

昼は城の中を駆けまわり、夜はベッドに入ると同時に朝までぐっすりと眠ってしまう毎日をすごしているわんぱく王子だった。やんちゃ盛りであっても、本当は王妃である母と一緒に眠りたいと思っている五歳の幼子には違いなかった。

クロトは暗闇の中、一人で目を覚ましてしまったことに戸惑うように不安げな表情を浮かべる。

ただでさえ、シンと静まり返った闇の中の広い寝室は、いつもの自分の知っている世界とは違い、なにかが出て来そうな恐怖をさそう。

しかも、部屋の外ではなにかが動き回っているようなのだ。

アルティナ城の王族の居住部分へ続く扉の前には、昼夜、警護の

兵士がおり、決められた人間以外、怪しいものが勝手に立ち入ることとは当然、できないようになっていいる。

「見回りかな？」

クロトは毛布を頭からすっぽりかぶると、さらにじっと耳をすました。

だが、廊下から聞こえてくる音は人の足音とはまったく違う様だった。

布のすれるような本当に静かな奇妙な足音なのだ。

かすかなその音は、しだいにクロトの部屋に近づいてくる。

ゴクン。

クロトののどが鳴った。

怖いような、それでいて少しだけドキドキする感じが全身に広がっていく。

やがてその足音は、クロトの部屋の前まで近づいてきた。

が、そのまま通りすぎて行ったようだった。

（なんだろう？）

足音が自分の部屋を素通りしてしまうと、その安心感に、今度はドアを開けてその正体を確かめてみたい衝動にかられた。

（少しだけのぞいてみようかな……）

一度そう考えると、クロトの頭の中はもう「正体を見てやる！」という意思に変わっていた。

すでに恐怖心より、好奇心のほうが勝ってしまった。

アルティナ城は歴史のある古い城だったが、これまで幽霊が出るといった話は聞いたことはなかった。

クロトは、絵本や村の老人、子供たちが話す昔話を思い浮かべてみた。

（こわいお化け、幽霊かな？ それとも夜しか会えない妖精かな？）

小さな体はそっとベッドから抜け出すと、裸足のまま、ゆっくりゆっくり廊下へ出る扉に近づいていく。

（夜の妖精だったら、人間に見つかり消えちゃうって聞いた。で

もひよつとしたら友達になれるかもしれない。静かに……静かに…)

自分にそう言い聞かせながら、息が詰まるような緊張感の中、クロトは扉の取っ手に手をかけた。

足音はしだいに遠ざかっていく。

(ゴクン)

大きな深呼吸をして、扉を静かに押し開いてゆく。

そこにできたわずかなすき間から、廊下をのぞき見た瞬間、それを目にしたクロトの体が動かなくなった。

(おんなのこ?)

薄暗い通路を、薄い光りにつつまれた小さな少女の後ろ姿が、まるで滑るように廊下を進み、螺旋階段に続く扉のほうへと遠ざかって行く。

(あ、行っちゃう)

あわてて後を追おうとして、部屋から出ようとした時、背後から黒い影がクロトを覆った。

「お前にも見えるのか?」

いきなり頭上から声が降って来て、クロトは驚いて飛び上がった。

「い、う、う、ああああ……??」

「おチビの臆病者」

「静かにしろよ」

見上げると、そこには夜着にガウンを羽織った二人の兄の神妙な顔が並んでいた。

「兄上え……」

ホツとして泣きたいような、驚かされて怒りたいような、なんともいえない表情が交互にクロトの顔の上に現れる。

「おどろかさないでよお」

「勝手に驚いたのはおチビですよ」

四歳上の兄、アルクメーネがニヤニヤと笑う。

「いいから、そんなこと行ってるとおの子が…」

長兄、皇太子であるテセウスの指さす方向を見ると、少女の姿は扉の向こうに消えていくところだった。階段を下りれば、城の外へ出る広間へと行くことができる。

「あれ……女の子のお化け？」

二人の兄王子の出現に、しばまりかけていた好奇心が元気になってくる。

「足音はするんだから、お化けじゃないみたいだ。追いかけてみよう」

テセウスが目を輝かせて提案する。

その言葉にアルクメーネが、クロトの部屋の中からガウンをもつて来て末の弟に羽織らせ、靴をはかせた。

「正体を確かめるんですね」

三人は互いに顔を見あわせるとうなずき、少女の後を追いはじめた。

夜の城の中を、滑るように進んでいく少女の姿と、息を殺して尾行していく三人の王子たちの姿があった。

その幼い少女を追いかけるうちに、三人はあることに気がついた、かすかな足音がしているにもかかわらず、少女の体は床の上からほんの数ミリ浮いているのだ。しかも、行く手をふさぐはずの大きな扉さえ、少女が触れてもいないのに自然に開いていく。

「やっぱり、お化けなのかな？」

クロトは、十二歳の誕生日を迎えたばかりの長兄の手をしっかりと握りしめる。

やがて少女は、何にも遮られることなく、城の外を出て正面の門を抜け、森のほうへと進んでいった。

「テセウス兄上、やっぱり変ですよ。警護の兵士の姿がどこにも見えない。無用心です」

品のよい顔立ちのアルクメーネが、眉間にまゆを寄せる。

「外に出るの？」

普段はわんぱく坊主のクロトだが、さすがに夜の城外に出ること

に戸惑ってか、長兄の手を引く。

「行こう」

テセウスと、アルクメーネは両側から、クロトの手をしっかりと握りしめ、少女のあとを追うために歩き始めた。

「2」

月の光が煌々と輝いている。

だが、真夜中の森は、幼い兄弟たちにとって初めての心細さを味あわせていた。

空の暗さよりも、なお暗い闇でつつまれた森。

背の高い木々たちが天へ向けて背くらべをする森の中には、月の光もとどかない。

風にゆらめく葉や木々のざわめき、どこからともなく聞こえてくる鳥の鳴き声や羽ばたき、獣の遠吠え。

小動物が木の枝を駆け抜けていく音。

静かではあるが、確かに生き物たちが息づいている感覚、自分たちを同じ生き物として警戒し、見つめている意志がそこには存在していた。

しかし三人は体を寄せ合いながら、少女から目を離さないように夢中になって追っていた。

そのおかげで、その恐怖に足をすくませることなくつき進むことができた。

どのくらい歩いたのか、突然、少女の歩みが止まった。

テセウスたちは慌てて急停止し、大きな木の影にかくれて様子を見守る。

すると、それまで浮いているように見えた少女の足が静かに地面に着地し、同時に全身をつつんでいた金色の光が徐々にうすれていく。

「足がついたよ」

「シート」

クロトが少女を指さすとアルクメーネが、人差し指を顔の真ん中にもって来て、静かにするように命じた。

その時。

「え……う、う、うわあああああ　ん！」

三人は、目を丸くした。

「うわあああ　ん」

「テセウス兄上！」

「うん」

それは確かに、少女の泣いている声だった。

妖しの者の怪の鳴く声でもなければ、呪文を唱える叫びでもない。ただ子供が迷子になったとき、嫌な人間を寄せつけないために、そして庇護者を求めるために発する、心細くて悲しい、助けを求める泣き声だった。

「助けなきや」

誰よりも早く、クロトが木の陰から飛び出した。

「クロト！」

「だって、泣いてる」

クロトはそう叫ぶと、力いっぱい少女のもとまで走っていった。

「よし、行こう」

「はい」

二人の兄たちも、クロトに続く。

クロトが、少女のそばに近づいたとき、その小さな体は地面にぺたんと座り込んだまま泣きじゃくっていた。

「どうしたの？」

クロトはできるだけ優しく声をかけたつもりだったが、ビクリと少女の体は震えた。

そして、恐る恐る顔を上げ、クロトの顔を見つけると涙をいっばいにためた目をパチパチと瞬かせる。

「僕、クロト。君は……妖精？」



「わ、私？」

可愛らしい白色のネグリジェ姿の少女は、クロトよりも幼くみえる。

月の光の中で、白い肌に、肩までのびた黒い髪、そして紫色の大きな瞳の愛らしい顔が浮かび上がった。

「クロト、大丈夫か？」

末弟に追いついたテセウスが、あれっといった顔で、少女を見つめた。

「君、アンナの一族の子じゃないのかい？」

少女は、突然現れた三人の少年たちを見てしばらくの間、驚いていたが、テセウスの「アンナの一族」という言葉を耳にすると、もじもじしながらコクリと頭を下げた。

「えっ、じゃあ人間なの？ 夜の妖精じゃないの？」

クロトは驚いたように、二番目の兄を見る。

「残念だけど、そうみたいです」

アルクメーネは、がっかりするなというように、弟の肩に手をまわした。

「僕はテセウス。僕たち三人はノストール国ラウ王家の王子で、お城から出て行く君をずっと追いかけて来たんだよ。君の名前は？」

「エディ……」

「エディちゃんって言うんだ」

クロトが、少女を元気づけようと、にっこり笑う。

それを見て、エディと名乗った少女も恥ずかしそうにニコリと笑った。

「僕はアルクメーネ。エディちゃんはどうしてここに来たの？」

アルクメーネがしゃがみこみ、少女に視線をあわせて優しく聞くと、エディはどうしたらよいのかわからないといった表情を浮かべた。

「エディ……。夢を見てたの。ずっと……ずっと夢を見てたの。でも目があったら、真っ暗な森だった。ここ……どこ……？」

エディの顔がくしゃりと歪んで再び泣きそうになるのを見て、クロトはあわてて自分のガウンを脱いで少女に体に着せてあげ、一生懸命に「大丈夫だよ」と明るく声をかけてあやす。

その様子をほほえましく見ながら、テセウスがアルクメーネに声をかける。

「昨夜遅くに、父上からアンナの一族が来るからと聞いていたんだ。明日会わせてくれると聞いてはいたけど、こんなに小さな女の子がいるとは思わなかったよ」

「寝ぼけたのかな？」

アルクメーネが、エディの肩まで真っすぐのびた黒髪を撫でながら、問うとはなく問いかけると、アンナの少女は激しく頭を横に振った。

「違う。はじめて。こんなことないもの。ちゃんと、母様と一緒に眠ったもの」

「そう…なんだ」

幼い少女の真剣な表情にアルクメーネが、少し気押されているのを見て、テセウスが笑いながら、少女の前に立ち背中を向けた。

「でも、なにもなくて良かった。さ、おぶってあげるから一緒に帰ろう」

「ありがとう…」

エディを背に乗せ、テセウスが立ち上がったとき、背中の中の少女の体がピクリと震えた。

「どうしたんだい？」

テセウスが顔だけ動かして少女を見ようとすると、小さな声がかすかにつぶやいた。

「なにか…聞こえるの……」

「え？」

「何が、聞こえるの？」

少女の声を聞き逃すまいと、聞き耳を立てていたクロトがキョロキョロと周囲を見まわす。

「聞こえる……」

再びエディがつぶやくと、それまで夜の風にゆられていた森のざわめきも、動物たちの鳴き声も、すべての音が止んだ。

「3」

森に静寂が広がる。

「……………」

声が聞こえた。

「聞こえるよ兄上。でも……何だろう」

アルクメーネがテセウスを見る。

クロトが二人の兄を見上げた。

「何だろう……。呼んでるよ……。助けてって……。呼んでる」

「どこだろう……」

それは、小さな猫の声にも似ていた。

四人の影はそのかすかな声をたどりながら、再び森の奥目指して中を走りはじめた。

微かな声はやがて、力強さを保ちながら一定のリズムをとりながら呼んでいるようだった。

「うわああ……！」

森が途切れて突然視界が開けたとき、テセウスたちは立ち止まった。

そこには、大きな湖がひっそりとたたずんでいた。

輝く月の光を受けながら、湖が静かに湖面を揺らしていた。

「ドルワーフ湖ですよ。ちょうど、城と町の間にある美しい森の中の湖なんです」

驚くエディに、アルクメーネが指さし教える。

そのそばでは、クロトがはじめて見る夜のドルワーフ湖に感動していた。

「すごいよ！ 湖にお星様とお月様が映ってて、空も湖もお星様でいっぱいだよ。アル神の御加護がいっぱいあるみたいだってわかるよ」

クロトは、栗色の瞳を輝かせて体全身で跳びはねる。

「ねえ、聞こえるよね。呼んでる声が聞こえる」

三人に向き直って、クロトが笑顔を満面にたたえた。

「なんの声だろう？」

「おりたい」

テセウスが空を仰ぐと、少女はそう言った。

「いいよ」

腰をおとしたテセウスの背中からおりると、エディはゆっくりと目を閉じた。

静かな呼吸が、なにか厳粛な儀式を感じさせる。

エディの左手がゆっくりと上がり、湖畔の前方を指さした。

「あっち」

その声を聞くや否やクロトが駆け出していた。

「……ン……ヤア」

その声に向かって一直線に走って行く。

クロトの体は、なにかに気づいたのかあわてて体に急ブレーキをかけると、後ろ向きのまま、たったいま通り過ぎた場所に引き返し、振り返った。

「兄上えー！ ここだよ！」

その声に引かれて、三人はゆっくりと近づいていく。

「オギヤ……ア」

声が次第にはっきりと聞こえて来る。

「オギヤ……ア」

「テセウス兄上……」

アルクメーネの声が緊張していた。

「オギヤ……ア。オギヤア」

草かげから、元気な赤ん坊の泣き声が弾けていた。

「……………?!」

「赤ちゃんだよ」

クロトが自慢げに指をさした。

テセウスとアルクメーネは、驚いた顔を浮かべながら、湖畔の草むらの中で裸のまま泣き続ける赤ん坊を見おろした。

月の光が、赤ん坊の銀色の髪を輝かせる。

「赤ちゃん。赤ちゃん」

エディがしゃがみこみ、クロトと一緒にのぞき込む。

「どうしてこんなところに……」

アルクメーネは困ったように長兄を見つめる。

なんだかさつきも同じことを言ったばかりだな、と思う。

そしてこの問いに対する答えは、多分返ってこないかもしれないことも。

「捨て子かな」

テセウスはガウンを脱ぐと生まれて間もないであろう赤ん坊の体をつつみ、両手でそっと抱き上げた。

庇護者が現れたのを知ったように、赤ん坊は泣き止んだ。

その翠色の瞳にじっと見つめられると、まるで自分たちを待っていたように思えてテセウスは不思議な気持ちになる。

「弟だよ！」

突然クロトが、嬉しそうに兄の手に抱かれている赤ん坊をのぞきこみながらそう確信に満ちた声で叫んだ。

「一週間前に死んじゃった弟が帰ってきたんだよ！ アル神が僕の願いをちゃんと聞いてくれたんだよ！」

テセウスとアルクメーネは、そのクロトの言葉に思わず瞳を伏せた。

アルクメーネは、クロトが弟となる第四王子の誕生をどんなに待ち焦がれ、生まれたときは誰よりも瞳を輝かせて喜んでいたかを知っている。

そして、死んでしまったと聞かされたときのひどく落ち込んだ様

子も。

その日以来、クロトは泣きながらアル神に弟を返して下さいと、大好きなおやつを抜いて、ラウ王家の守護神である、月の女神・誕生の神・アル神に願いつけていたのだ。

その弟の姿に、アルクメーネ自身もおやつを抜いて、ともに祈りを捧げてきた。

「でも……、この子は女の子ですよ。それに髪の毛の色だって僕たちとは違う」

弟の気持ちはわかるが、アルクメーネは弟の誤解をしつかりと伝えなかった。

「弟だよ！ 一回死んじゃったけど、アル神が返してくれたから、髪が月の色の銀色に変わったんだ！ エディはアル神にたのまれて、僕たちを弟に会わせてくれたんだよ」

そう言つてクロトは、夜空に輝く銀盤の月を見上げ、指さした。

アル神は人の誕生をつかさどる月の神でもあった。

「アル神が返してくれたんだよ」

「そっか……なあ」

弟にそう言われると、そんな気もしてくるようで、九歳のアルクメーネもまた、首をかしげながら腕を組んで月を見上げた。

だが、その二人にはいまはまだ言えない出来事をテセウスは知っていた。

一週間前に誕生した弟は、ある忌まわしい予言のために、生まれてすぐに生命を絶たれ、この湖に沈められたのだ。

父のカルザキア王は、将来この国の王となることを定められた第一王子であるテセウスにだけは、事実を隠すことなく話して聞かせていた。

『国民のため、国のために、自分たちの幸せだけを願ってはいけないこともあるのだ。失わなくてはならない生命があるときもあるのだ。それが王というものだ』

涙をこらえながら、そうテセウスに言い聞かせた父の姿。

あの日以来ふさぎこみ、部屋から出て来ない母、ラマイネ王妃の姿。

その亡き第四王子の葬儀と、王妃の病氣回復祈禱のために訪れた占術士アンナの一族。

だが、大好きだった父が生まれたばかりのわが子を、兄弟たちが待ち焦がれていた生命を殺した事実が、テセウスには許せなかった。そんな話は出来ることなら知りたくなかったし、わかるわけがなかった。わかりたくもなかった。

同時に、それを聞いてもどうすることも出来ない子供の自分がどうしようもなく嫌だった。

『そんなことをしなくてはいけないなら、私は王になって、なりたくありません』

『お前も大人になればわかることだ』  
テセウスの必死の抗議にも、父王は言葉少なにそう答えただけだった。

「そっだよ。ねえ、テセウス兄上。アル神が僕たちのために返してくれたんだよ！ 母上のために！」

クロトの声に、はっと我に返ったテセウスは、赤ん坊を抱く自分の腕に小さな手を重ねて、エディがずっと呼んでいるのに気づいた。

「なに？」

「ル……ナ」

「え？」

テセウスはエディの顔を見て、ドキリとした。

エディが、初めて嬉しそうな笑顔をみせていたのだ。

「ルナ……。この子、ルナ」

腕の中で、赤ん坊が月の光を浴びて笑っていた。

テセウスの心は決まった。

「うん」

ノストール国の第一王子テセウスは、エディに笑顔で応えた。  
そして月の神・アル神を見つめ、誓いを立てるときのように頭を  
たれた。

エディが赤ん坊の名を呼んだのだ。

「この子は、私たちの弟です。われらがラウ王家の、すべてのノス  
トールの民の守護神、アル神よ。あなたが私たちへ贈ってください  
た大切な宝物を、私たちは今度こそ必ず、大切に守ってみせます。  
どうかこの子に祝福と御加護を」

「この子に祝福と御加護を！」

「アル神、月の神様。どうもありがとう！」

テセウスの言葉に続き、弟たちがアル神に感謝の言葉を捧げた。

（今度は守ってみせる、この子は僕たちの宝物。アル神からの贈り  
物なんだ）

テセウスは、この夜、何度も自分の心にそう誓った。

アンナの一族が名前を贈ること。

それは 祝福 をあらわす儀式でもあるのだから。



その言い伝えが一体、どこから伝えられたものかは、今となっては知るものもない。

だが歴史は、確実にすべての人々を、いにしえの時代の登場人物として、物語の中へと導きつつあった。

「ねえ、テセウス兄上。聞こえているんですか？ ルナがまたクロトと一緒に村へ行つてしまいましたよ」

品の良い顔立ちをした少年が、テラスにいる兄に抗議をした。

さつきから呼びかけているのだが、三つ離れた兄は、外をぼんやりと見ながら物思いにふけているのか、アルクメーネの声も耳にはいつていない様子だった。

「聞こえているよ。よく村にいつているみたいだから、友達でもいるんじゃないのかなあ」

その声には、うらやましいといった響きが隠すことなく含まれていた。

「でも大丈夫だよ。リユーザとダイキが一緒だから」

「テセウス兄上は楽天的でいいですね。私なんてルナが木登りをしているのを見ているだけでハラハラするのに」

アルクメーネのいかにも心配げな顔を横目でちらりと見ると、ラウ王家の王位第一継承権をもつ十七歳の青年は穏やかに笑いながら、大鷲が弧を描いて飛んでいる青空を見上げた。

「ルナは、おチビだけどアルクメーネよりは数倍も運動神経がいいし、クロトよりも利発だし、同い年の子供たちよりも剣の腕もいい。僕はルナやクロトたちの元気な姿がこの城で見られるだけでいいよ。それに第一、村へ行くことは悪いことじゃない。なんならアルクメーネもお忍びで行つて来たらどうだい？ 結構楽しいよ」

兄王子の笑い声に、第二王子は絶句して兄の顔をのぞき込んだ。

そして、ニヤリと笑いかけた。

「もちろん、経験済みですよ」

ふたりが顔を見合わせ声をそろえて笑ったとき、突然、正門のあたりが騒がしくなった。

「早馬が出て行く。昨日も、今日も別の早馬がやって来たり、出て行ったり慌ただしいんだ。なにか様子が変だとおもわないか？」

「最近、ダーナンとナイアデス、ハリアの三つの国では争いごとが絶えないと聞きます。その援軍の要請にでも来たのでしょうか」  
弟の言葉にテセウスはうなずく。

「うん、ありえないことではないけれど、こんな小さな王家にまで援助を求めるようじゃ先が見えたも同然だよ。ダーナンも、ナイアデスも、ハリアも」

「残念だが、どちらもはずれだ」

ふいに背後から、別の声が割り込んで来て、ふたりはやばいといった目線を交わしながら、出来るだけ笑顔で振り返った。

「ルナとクロトはどこにいる？」

そこには、このノストール国ラウ王家の長であり、テセウスたちの父親でもあるカルザキア王が、普段にも増して厳しい顔でふたりの王子を見つめていた。

「ここにはおりませんが……。どうかしたのですか？ 父上」

テセウスはただならぬ様子に、表情を改めた。

「一刻も早くルナを呼んで来てくれ……。国中の五歳になる少年たちとその家族すべてにも、城下に呼び寄せるように、たった今使いを出したばかりだ」

「なにごとなのですか？」

アルクメーネも不安な表情を浮かべる。

カルザキア王は、大きなため息を吐き出して首を横に振った。

「ダーナンとナイアデスの魔道士どもが不吉な予言をおこなって騒ぎだしたのだ。わがノストールの地に『戦いと勇気の神・アル神の唯一の息子シルク・トトウ神が誕生している。その子が今年五歳の

誕生日を迎える』とな」

「え…？」

ふたりは一瞬、父の言葉が理解出来ずに、ぼんやりとした表情を浮かべた。だが、やがて父の言葉を心の中で何度も反復させていくうちに、その言葉の重大な意味に気づき、息を呑み込んだ。

息子たちが疑問を口にする前に、カルザキア王は話を続けた。

「間もなくダーナンもナイアデスも、そしてハリアモアル神の息子を手中に収めようと動き出すだろう。シルク・トトウ神の転身人を自分のものにした者が、すべての戦の勝者となる、すべての世界の征服者になれる、とな。わがノストールは、奴らの標的となつてしまった。すでにダーナンからは、その子もしくは今年五歳になる男の子すべてをさしだせば友好国としてわが国と同盟を結ぶといってきた。ナイアデスからも、ノストールがナイアデスの属領となるならば、自治領として他国からの侵略から守つてやる、といった内容の親書が来た……。どちらにしる、予言の子を手に入れたいということだ」

その言葉を聞きながら、テセウスは、五年前の悲劇を思い出せずにはいられなかった。五年前の忌まわしき予言は無効になったはずではなかったのか。

だが、父王は厳しい表情の中に温かい瞳を宿していた。

「安心しろ、両方の申し出は断るつもりだ。だが、わがノストールは争いごとから離れて久しく、戦さを知る者もない。みすみす戦火を招くようなことはしたくないが、万が一、のことを考えれば、出来るだけの守りは整えなくてはならない」

「わかりました。それで狙われるだろう五歳の男児すべてを保護するのですね」

真剣な表情で聞いていたアルクメーネの顔が、ゆるんだ。

「うむ。特にいまはルナが真っ先に、シルク・トトウ神の転身人として狙われる危険がある。ルナは女だが、民も諸国の人々も第四子は王子と信じている。出来るならば、ルナの性が女であることを明か

すことが、あの子の安全のためには一番いいのだが、今それをする  
ことは返って、作為あることと受け取られかねない」

テセウスとアルクメーネは、気まずそうに顔を見あわせた。

五年前、父がルナを兄弟として暮らすことを許してくれたとき、  
ふたりは妹として育てたかったのだが、クロトが弟だと主張して譲  
らなかつたのだ。

それに、王女ともなれば、やがて政略結婚の巻き添えにならない  
ともかぎらないことから、ラウ王家はルナのために男の子として育  
てて来た。

「父上は、アル神の息子の転身人が誰なのか、ご存じでは？」

テセウスが半信半疑の面持ちで聞く。

「わしにも、まだわからぬ。それを知るためにアンナの一族を迎え  
にやった。集めた子供たちの中にシルク・トトウ神の転身人がいる  
ならば、見つけ出せるやもしれぬ。実は、両国の魔道士たちの予言  
の話もユク・アンナの使いの者から知らされたのだ。アンナたちが  
到着しだい 先読み をしてもらう。すぐにルナとクロトを連れて  
来るように」

「わかりました父上」

アルクメーネは、左胸に右手を当てて一礼するラウ王家の敬礼を  
すると、父王の横を駆け抜けていった。

「あの予言は無効になったのではないのですか？」

一人残ったテセウスが硬い表情で、カルザギア王を見つめた。

「ノストールの平和のために、不吉な予言を阻止するために、私た  
ちの弟、第四王子を手に掛けたのではなかったのですか？ 五年前  
のあの日、もし生まれて来るのが女の子ではなく男の子なら、その  
子が成長したときノストールを破滅させるだろう。そう言ったアン  
ナたちの 先読み を信じて、あの子を殺したのではないのですか  
？ もし五年前の予言が、いまこの時点で生きているというなら、  
あの子の死は一体なんだったのですか？」

テセウスは、五年前と同じ無力感が全身をむしばんでいく不快感

を押さえつけようとしながら、父王を睨みつけた。

「早く……ルナを……。戦の準備を整える」

だが、カルザキア王が答えたのは、それだけだった。

「わかりました。失礼します」

テセウスは、一礼すると駆け出した。

そして、廊下をかけながら激しい自己嫌悪に襲われている自分に気づく。

（今ここで、父上を責めてどうなるものでもないのに。父上がどれだけ苦しまれてきたか、僕が良くわかつているのに）

テセウスは、歯を食いしばった。

（だから父上は、あの日僕たちがルナを連れ帰ったとき、何も言わずに家族となることを認めてくれたじゃないか。ルナを僕たちと同様に、わが子と同様に育てて来てくれた、そんな父上の気持ちを僕は知っているのに……）

『戦の準備を整える』

父の言葉が耳を打つ。

自分と、父王を責めても、戦乱の火はやがてこの平和なノストールを襲うだろう。

（このまま、あの大国の両方から攻め込まれたらこんな小さな国は一日ともたずにのつとられてしまう。この国が滅ぼされてしまうかもしれない……。でも、むざむざとそんなことはさせるものか！）

「兄上、遅いですよ」

外へ出るとすでにアルクメーネが馬上で、テセウスの馬を連れて待っていた。

「アルクメーネ！」

テセウスは勢いよく馬にまたがると、弟の名を呼んだ。

「何ですか？」

「戦がはじまる。でもこの国は、僕たちで守る。どんなことがあっても守るんだ！」

「もちろんです。我らがノストールの民と、アル神に誓って！」

ふたりの乗る馬は、ムチを打つと猛然と走りだした。

なにも知らずに村の子供たちと遊び回っているだろう、ルナとク  
ロトたちがいるマーキッシュの村に向かって。

突然降りかかって来た運命という名の嵐に立ち向かうように。

ノストール国が第四王子を失いルナを迎いれた五年前、ダーナン帝国では血族による激しい権力闘争と内乱が勃発する。

病床にっていたボルヘス帝王が後継者を第二王子のエルローネに推挙したことから、第一王子のシーグルトとの間に確執ができたのだ。

「ロディよ。シーグルトはいまだにわしに会いにさえも来ない……」

病床の王は見舞いにきた三番目の息子ロディが枕元の椅子にすわると、その手をとった。

「父上。シーグルト兄上は、父上のお気持ちがおわかりにならないのです。父上がなぜエルローネ兄上を推してみせたのか。そのわけを直接聞きにこようともしない。それを父上がどんなにかお嘆きになっているかも、わかつてはくださらない」

十歳の誕生式を迎えたばかりの金色の髪をした少年は、その幼くも美しい顔を悲痛に歪ませて父の手を両手でそとつつみこんだ。

「エルローネ兄上も、なんだか今までの兄上とは別人のように人柄が変わられてしまいました。いつもシーグルト兄上をたてて、みんなを和ませていた兄上はどこへ行ってしまわれたのか……」

涼やかな高音の美しい声が歌のように優しく、だが憂いをもって響く。

「父上、早くお元気になってください。私も、母上も、フューリーまでも、毎日どちらの派閥につくのかと両方の兄上から詰め寄られています。どうか父上、早くお元気になってください」

少年の深い碧色の瞳から、薔薇色の頬に真珠のような涙がこぼれ落ちた。

「ロディ。男の子は泣いてはいかん」

王は、第三王子の金色の柔らかな髪をすきながら、寂しげにほほ

笑んだ。

「あのふたりにおまえのように温かな心が少しでもあれば、今回のようなつまらぬ誤解と疑心暗鬼で仲たがいすることもなかったのだが……。どうやら、このままふたりのどちらにも王位を継がせることは……しばらく慎重に考える必要がでてきたようだ」

ロディは父の言葉を困ったような表情で静かに聞いていた。

「シーグルトは勤勉でまじめだが、二十三歳になるというのに妃をめぐるともせんし、なにか噂を耳にしても直接本人に会って確認し、それが間違いであれば正すという勇氣も判断力もない。エルローネは行動力があるのはいいことだが、臣下のおだてに乗りやすい。自重することもせんとすぐに発作的に暴走する。本来なら、互いの欠点を補佐をしつつ国を豊かにしていくことこそがふたりの役割なのだ。わしはそれを自覚させるために、その機会を与えてやったのだが、まさかこんなことになるとは……。ロディ、お前が、あと十年、いや五年はやく生まれておれば……」

その言葉に少年は驚いたように目を大きく見開いた。

「なにをおっしゃるのですか、父上。わたしはこんなことになっても兄上たちのことを尊敬しております。わたしは兄上たちが父上の与えられた試練を乗り越えて、必ずや仲良くなられると信じております」

ロディは、ボルヘス王を碧い瞳でじつと見つめた。

「ですから父上、そのためにも一刻も早く病魔を退治しご回復ください。私も祈っております」

「うむ……」

王はうなずくと、ロディの手をそつと離してほほ笑んだ。

「おまえの成長した姿がはやく見たいものだ。いまはおまえの顔を毎日見られることが、一番の薬になる。すまんな」

「いいえ、父上には、申し訳ありませんが、ご健康でご政務にお忙しくてなかなかお話しも出来なかったときの父上より、こうして毎日会ってお話しできることの方が嬉しいです」



少年が、少しはにかみながらそう言って部屋を辞する姿を見送ると、王は涙ぐみながらうなずいた。

「王のお加減は……」

少年が部屋に入ると、黒装束の男が壁の中から音もなくあらわれた。

顔はマントにかくれて見る事ができないが、魔道士であることは明らかだった。

「順調だよ」

魔道士の出現がきっかけとなったのか、少年は感情のないどこか放心したうつろな瞳で、なにをすることはなく部屋の中央にたたずんだ。

「もうすぐだね」

少年は、少女のような夢見心地のほほ笑みを浮かべた。

「御意」

「もうすぐ、この世界がひとつになるんだね」

少女のようにみえる美しい顔は、徐々に恍惚としたものに変化していく。

「天の者にも、人にも、地の者にも、すべての者に ユナセブラが訪れる。僕に与えられた最初で最後の恍惚の時間。甘美の時。きつとすべての人々はその時を待っている。ね、そうだろう?」

見えない時間を見ているように、また天啓を受けているように少年は両手ゆっくりと広げ優美なほほ笑みをうかべた。

「イルアド、お前には見えるかい? これから世界がどうなっていくか。僕には、ほら、こうしてちゃんと見えている。こんなにも美しい世界がこの地上に満ちあふれるんだよ。なのにまだ、だれも気づいていないんだ。だからこそ、今すこし急ごうか。まだ誰もが目覚めていない今のうちに」

「御意」

イルアドと呼ばれた男はひざまづく少年のために、この世界にはあるはずのない別の次元の部屋へ続く扉をゆっくりとあけて、いざなつた。

「兄上様！ ロディ兄上様！ 大変です！」

二つ下の妹フューリーが顔色を変えて、ロディの部屋に飛び込んで来た。

「どうしたんだい？」

長椅子の上で歴史書を読んでいた少年は、驚いたように飛び込んで来た妹を見つめた。

人形のようにあどけない顔をした妹は、ひどく急いで走って来たのか母ゆずりの自慢の長い栗色の髪を乱し、息を切らして部屋に飛び込んで来た。

「シーグルト兄上様とエルローネ兄上様が、お父様を……、お父様を……」

少女は、次の言葉を告げようとして声を詰まらせた。

紅葉のような両手が口もとを押さえつけると、大きな空色の瞳から大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちてきた。

「フューリー？！ 父上に何があつたんだ」

ただならぬ様子にロディは本をとじて長椅子から立ち上がり、妹のそばに駆け寄るとその小さな肩に手を置いた。

フューリーは大粒の涙をこぼしながら、一番年の近い兄の胸に顔をうずめる。

震える唇を必死に押さえながら、幼い少女は自分の役目を果たそうと泣き声をこらえながら、一言一言絞り出すように告げた。

「さつきお母様と一緒に、お父様のお見舞いに伺ったの……。そうしたら、いきなり兄上様たちがこわい顔をしてお部屋に入って来

て、お父様を…お父様を…」

「フューリー……」

生まれて初めて、自分の感情を自分の意思で押さえつけ、自分に課せられた役目を果たそうと努めた少女は、その後は言葉もないままに泣きじゃくった。

「セラ！」

泣きじゃくる妹を抱きしめながら、ロディは隣の部屋にいる従者のセラを呼んだ。

その声にしたがつて、物静かな若い青年が現れた。

「フューリーを頼む。私は父上のところに行ってくる」

「いやあ！ 兄上様！」

兄がそこへ行くことを拒むような、自分のそばから離れることを拒むような悲痛な叫びが、ロディの体を突き刺した。

しかし後を追おうとするフューリーをやさしく、しっかりとセラが引き止めているのを確認すると、ロディはボルヘス帝王の寝室へと向かい走り始めた。

少年が父の寝室が近づくにつれ、臣下たちの様子に明らかに異変が起きていた。

「ロディ殿下！ お待ちください。行ってはなりません！」

ロディの部屋に向かっていたらしい、大臣のグラハイドが行く手を遮るが、ロディはその手を振り切る。

「誰かロディ殿下を止めてくれ！」

「殿下！」

「邪魔だ！」

ロディは、目の前を遮るいくつもの手を振り払い、かいくぐり、昨日訪れたばかりの父上の寝室に飛び込んだ。

「父上……」

寝台の上には真っ赤な血を大量に吐血したまま仰臥しているボルヘス王と、その王にすがったまま泣き叫んでいる母ナーディア王妃の姿があった。

「どうして？」

ロデイは、部屋の中で沈痛な面持ちのまま立ち尽くしている側近たちを睨みつけた。

「父上は昨日まで、お元気だったんだ。少しずつだけとお元気になっ  
ていられたんだ。なのに……どうして!？」

ロデイは、妹の言葉を思い出したように声を絞り出した。

「兄上たちは？ 兄上たちもここにいたのでしょうか？」

いままで美しいだけの王子として城中の寵愛を受けていた王子の悲痛な叫びと、逆らうことを許さないといった詰問の口調に、その場にいた誰もが言葉を失った。

「グラハイド！ 知っているのだろうか？ 父上に何があつた？」

兄上たちはどこにいるの？」

叱咤するような、厳しい口調に大臣のグラハイドは重々しい口を開いた。

「私が王妃様の悲鳴を聞いて隣の部屋から飛び込んだときには、すでに陛下は倒れられていて、シーグルト殿下とエルローネ殿下が、互いに『お前が父上を殺した』とのしり合い、つかみあいながら中庭から外へと出ていかれてしまわれたのです。ディアサスたちが後を追っておりますが、まだ戻って来ておりません」

「そんな……」

ロデイは、ベッドの上のボルヘス王をゆっくりと振り返ると、自分の襟元のスカーフをはずして、父親の口元についた血を拭い始めた。

「父上は、兄上たちに王としての自覚を促されるための試練をお与えになると、そう言われていたんだ。兄上たちがご自分の欠点を克服されるようにと……」

淡いブルーのスカーフが見る見るうちに血に染まっていく。

「仲たがいをさせようとしていたわけじゃない……なのに……」

まだ幼い王子のとつとつと語る言葉に、やがて女官たちのすすり泣く声がかさなる。

「父上、私はどうしたらよいのですか。兄上たちのどちらかにつくなんて、考えられません。私には、兄上たちのことも大切ですが、父上はずっとこの国の先行きを心配していらっしゃいました。父上が築き上げて来たこの平和なダーナン国をこわしたくありません…」

ロデイの双眸から、涙が幾筋も頬を伝って流れ落ちる。

「父上、目をお覚ましくください。父上！」

ロデイが、叫びながらその体にしがみついた、その時。

「ロデイ殿下……陛下の右手が……」

女官たちのすすり泣く声にまぎって、グラハイドのぼっぜんとした抑揚のない声が響いた。

「なに?!」

「陛下の右の手が……」

「父上!!」

グラハイドの声にしたがってその手を見ると、ボルヘス王の右手がかすかに動いていた。

「薬師を!!」

ロデイが叫んだ。

その顔に血の気がさしてくる。

「父上はまだ生きていらつしやる! 薬師と、それからルキナを呼んでくれ! 魔道士のルキナを! 早く、早く!」

ロデイの声をきっかけに、我を忘れていた人々が自分のそれぞれの役割を思い出したかのように慌ただしく動きはじめた。

薬師が寝室に駆け込み治療を、土の魔道士のルキナは回復のためのエネルギーを大地から呼び起こす呪術をはじめめる。

「母上……、父上は大丈夫です」

泣き続ける王妃を、少年のまだ細い腕が抱きかかえるように王の寝室から連れ出し、隣室のソファにそっと横たえると、グラハイドを呼んだ。

「グラハイド。父上と、それから母上をお願いします。それから、兄上たちのことも……。私は妹を連れて来ます。わたしの口からで

ないと、父上がまだ生きていられることを、あの子は信じないと思いますから」

生きていたとはわかって、瀕死の状態であることに変わりはない。まだ青ざめた表情で歩きだす王子を、その場にいた誰もがするよな思いでみつめていた。

「殿下、おつらいでしょうが、お気持ちをしっかりとおもち下さい。王はきつと助かられます」

ロデイが王の寝室から出てくるのを見つけると、幼いころからロデイの守役として面倒を見続けてきた、騎士のジュゼールが駆け寄って来た。

「内乱が起きてしまう……」

「えっ?!」

ひと目がなくなった場所まで来たとき、王子のつぶやいた意外な言葉にジュゼールは目を見開らいた。

「殿下、めつたなことをお言いになってはいけません。王はまだ……」

「ジュゼール」

まだ少年の輪郭が、背の高い騎士を見上げた。

「僕にはなぜかわかるんだ。父上はきつと助かられる。でも……きつと、いままでの父上には戻ることはない、って……。ルキナの目も死んでいく人を見つめるときの悲しそうな瞳だった」

ロデイの瞳が、みるみる涙であふれてくる。

「城の中は、もうシーグルト兄上と、エルローネ兄上につく者とは分かれているんだ。父上が、エルローネ兄上に後を継がせると言っていたから、エルローネ兄上は自分が跡を継ぐと思っ込んで、いろいろ動いておいでだった。でも、シーグルト兄上は、公式の場での言葉ではないから、自分こそが第一皇位継承者だと言ってゆずれない。それに、兄上たちの後ろにいるのは、戦で闘ってこの国を勝利に導いた立派な將軍たちを自分の邪魔になりそうだからといって、デタラメと中傷で城から追い出してしまった、よくない人たちばかり」

りだ」

「殿下……」

ジュゼールは、この幼い瞳が城の中で起きていることを正確に把握していることに脅威を覚え、息を呑み込んだ。

「みんなは、僕が子供だから何もわからないと思っっているんなことを話していた……。でも、ジュゼールとグライハドは信じられる。

あとの人はわからないけど、そのうち私も父上と同じように、兄上たちに生命を狙われてしまうのかな……」

「ロディ殿下！」

ジュゼールは耐えかねて、王子の背中を抱えるようにして、人気のない部屋には連れて入ると、ドアを閉めた。

「いいですか。そのようなこと、このジュゼール以外の人間の前では、絶対に言ってはなりません。殿下は私が命に代えてもお守りいたします。ですから、そのようなことお考えにならずに……、いまはただ、陛下のご回復だけをお祈りしましょう」

だが、そう言いながらジュゼールは、ロディの洞察力にどう答えていいのか混乱していた。

もしこのまま第一王子と第二王子が王位を争えば、やがてその渦は王妃はもちろん、第三王子のロディやフューリー王女をも巻き込んでいくだろう。

いまや権力の虜になっている両方の王子たちにとり、幼いとはいえ、王妃が一番かわいがっているもう一人の王位継承者ロディは、やがて自分を脅かす影となる。

ましてや、王が生命を止めたとわかればその危険はよりまずと思えた。

自分の命をねらった息子たちを、王は決して許さないだろう。

王位継承の第一人者はロディへと移らざるを得ないことは、明白だった。

「とにかくもうしばらく、様子を見ましよう。おふたりの王子たちも、このようなもめごとが諸外国にもれば、侵略の格好の材料に

なることぐらいおわかりになっているはずですよ」

ジュゼールは、そう言いながらはたしてそうだろうかと自問自答していた。すでにその諸外国が後ろから糸を引いていないと言えるだろうか、と。

「もし、万が一のときは、私にお任せ下さい」

ジュゼールは、うなずく王子を見つめながら、自分自身の考えがひと月と経たないうちに、現実化していくとはこのとき思いもしなかった。



内乱は起きた。

ボルヘス王は命をつなぎ止めたが、それはただ心臓が動いている状態にすぎなかった。時折、意味のわからないうわ言を繰り返すことがあるだけで、回復の見込みは遠いように思われた。

事件後、見舞いにも現れず、城からも姿を消したまま消息を絶っていた王子たちが、突如としてダーナンの国境から、軍隊を引き連れて姿を現したのは、その半月後のことだった。

第一王子のシーグルトは、王妃の故郷である隣国ゼルバの援軍をつれて、第二王子エルローネはダーナンのもう一つの隣国、ボルヘス王の姉の嫁ぎ先ハスランの助力を得て、ダーナンを舞台に戦争を始めたのだ。

はじめ、王妃とロディたちは、王と共にダーナン城で、二つの国に書簡をあてたり、戦さの中止を求めるなどして、動向を見守っていたが、城には、両王子の息のかかったものが満ちあふれ、やがて寝たきりの王や、ロディの身にも危険が何度となくふりかかりはじめた。

ふたりの王子たちは、王と共に城にいる第三王子ロディこそが、今や一番王位継承に近い存在になっていることに気づいたのだ。

シーグルトとエルローネにとり、王家を継ぐ最後の手段は、王をそのかしたのがロディとその側近であり、王を殺そうとしたのは自分ではないという証明を試みせること、もしくは王の呼吸を止めてしまうことだった。

すべての罪を、内乱罪として兄弟になすりつけ、意識を取り戻す見込のない父親の代わりとして、王位を代行する。

そのためには、ロディは邪魔な存在でしかなくなっていたのだ。

「父を殺そうとし、そして今また幼い弟王子を殺して、正義の仮面をかぶってダーナン王の座につこうと考えているというの？」

魔道士のルキナが、王妃の命によって占術をおこなった答えを得たとき、王妃は全身が冷たくなっていくのを感じていた。

このところ、ロディの周りで不可解な事故が続き、側近たちがケガを増えたために、心配になった王妃が、その原因を知るためにルキナを呼んだのだ。

「憎しみの血が、流れます」

小人族の流れを汲むザキ一族の土の魔道士ルキナは、土色のマントで全身を包んだ装束に、好堅樹・ニヤグローダから得たという杖を手にしたまま、静かに告げた。

好堅樹・ニヤグローダは、百年間もの間枝葉をのばしたまま地中にとどまり、ある日地上に姿を現すのだが、最初の日で、三千里の高さにまで達するといわれているが、その姿を見ることは万に久しい。

王妃は自分の体を両手で抱きしめながら、ふるえる唇で、ひとりつぶやいていた。

「息子たちは……あのふたりは気が狂ってしまったのだわ」

王妃ナーディアは、占術が終わるとすぐに、ロディとフューリーを自室に招き入れ、ふたりを抱きしめた。

「このままでは危険だわ。兄上たちは、お前が父上に策略を吹き込んで、仲たがいさせたという妄想にとりつかれてしまったのよ、ロディ」

「母上……」

「この城には、あなたがどれほど父上のことを大切にしていたか、どれほど兄上たちを慕っていたかわかっている者もいるわ。でもね……」

王妃は、ロディと同じ碧色の瞳で悲しげに息子をみつめた。

「でも、兄上たちはそう思っていないの。そして、この城のなかには、あの子たちの側についている者たちがいて、あなたの命を常にねらっているの。だから、お前はフューリーと共に、この城を出てどこか安全な場所に身を隠しなさい。母は、シーグルトとエルロー

ネをこの城で待ちます。そして、誤解を解いて、あなたたちが安心して帰れるような場所を準備しておきます。それまでの間の辛抱です。いいですね」

「母上え……」

フューリーが、真珠のような涙をポロポロとこぼしながら王妃の首にしがみついた。

「泣いてはなりません、フューリー。ほんの少しの間だけです。すぐに母が迎えにいきますから、それまでロディ兄様の言うことを良く聞いて待っているのですよ」

王妃はほほ笑みをつくりながら、ロディを見つめた。

「よいですね」

「はい。父上のこと、よろしくお願い致します」

少年は、この数日の間に急に大人びた表情を見せるようになっていた。

人というのは、環境の変化によってこうも変わるものなのだと、城内の者はしばし、畏敬の念をもってロディを見はじめるようになっていった。

「お迎えをお待ちしています。母上。その時は、もう一度抱きしめてくださいね」

「ええ……」

三人はその会話を最後に、別れを告げた。幼い王子と王女はジューゼルとグラハイドらに守られながら、王妃の部屋の隠し扉から地下道へと姿を消して行った。

二カ月後

国境に程近い、地下道に造られた隠し部屋の一角に身を隠していたロディたちのもとに、城からの使いが訪れた。

「母上が……兄上たちを道連れに、死んだ？」

「はい。シーグルト殿下の先遣隊が城に入場されたときに、内密にエルロース殿下を招き入れられ、ご兄弟として親子としての最後の

お食事を望まれたのです。シーグルト殿下もエルローヌ殿下も、ロディ殿下の行方を知りたがっている様子でしたし、その時に互いを殺してしまうよいチャンスだと思われるのでしよう。快くその申し出を受けられました。ですが、王妃様はそのお食事に毒を盛られて、おふたりの王子と共々……」

ロディは、目を見開いたまま、じつとうつむいていた。

その小さな肩に、ジュゼールがそつと手を添える。

「殿下。お悲しいでしょうが、いまとなつてはこの国の後継者は殿下お一人です。王妃様もそのことを願つて、兄上様たちを道連れになさつたのだと思います。陛下がお待ちです。さあ、城へ参りましよう」

「殿下、いえ……陛下のご病状が回復の見込みがない今は、ロディ様がダーナンの王として、国の立て直しをしていただかなくてはなりません。どうかダーナンの王となる、お気持ちをしっかりとおもちください」

グラハイドがロディの両手を取り、自分の両手で包み込む。

その言葉に、ロディは表情を堅くした。

「ジュゼール、グラハイド」

ロディは助けを求めるような瞳で、ふたりをじつと見つめた。

「僕はあの城には戻りたくない。母上、兄上たちが死んでしまった、あの城へなんて帰りたくないよ！」

「ロディ様！」

ジュゼールが驚いたようにロディを見つめる。

「ロディ様。ロディ様が、城にお戻になられ、民や臣の前で正式に王につかれなければ、どうやってフューリー様をお探しになるというのですか？」

ジュゼールの言葉に、ロディはビクリと体を震わせた。

「だって……父上は生きておいでだ。僕は父上のようににはできない」

「フューリー様は、隣国ゼルバかハスランか、それともハリア国か……いずれにしろ一筋ならぬ魔道士を抱える他国の者に、この機に

乗じて、わがダーナンをねらう目的のもとに、さらわれた可能性が高いのですよ。あなたさまが王にならねば、たった一人の妹君をどうやってお探しになり、国を守るのというのですか？」

「でも……」

ロディは大きく瞳を見開いたまま、ジュゼールをみつめた。

妹のフューリーは、城からの逃避行のさなか、ロディたちの目の前で、突如として出現した他国の魔道士と思われる者にさらわれてしまったのだ。

「フューリー様は、ロディ様がきつと探してくださると信じていらつしやるはずです」

ジュゼールの責めるような口調に、少年は呼吸をするのも苦しうに、言葉をつむぎだした。

「もし、僕が……あの城に戻り、王になることがフューリーを取り戻すことになるのなら……、妹を助け出す力を持つことができるなら、僕は王になります。だけど……それは、そのためにその国と戦うことを父上は、皆は許してくれるだろうか？」

「もちろんですとも」

グラハイドの、握りしめた手に力を込める。

「ダーナンの王女をさらったものがあるならば、国の威信をかけて取り戻すべきです。内乱につけこんでダーナンを乗っ取るうとした罪、幼い王女をさらった罪。どこの何者が行った行為にしる、断じて許すまじき行為です。なにを掛けても、フューリー様を救い出すことは、兄として、王として、親族として、当然のおふるまいです」  
「皆が怒りと、ボルヘス陛下への忠誠、ロディ殿下への忠誠をもつて、フューリー王女をお捜し出します。ロディ様の王位継承のお祝いのためにも」

「わかった。帰るよ。……ありがとう」

少年の憂いをおびた深い海の底のような色をした瞳に、かすかな明るさが戻った。

「私は、どんなことをしてもフューリーを取り戻します」

わずか十歳で王位に就くこの少年王こそが、その後の五年間、妹を求め、諸国を次々と征服、統一し、やがて小国ノストールにその姿を現す、ダーナン帝王ロディ・ザイネス、その人でもあった。

水の都と呼ばれるナイアデス皇国の首都コリンス。

西のダーナン帝国とは大陸の対極の東に大国を構える東のナイアデスは、この三百年間、繁栄を続けて来た大国である。

王家としての歴史は長く、始祖のコリンス王は約三百年前に悪政のもと苦しんでいた民を救うために、はじめ八人の同志と共に戦を起し、当時のイルハーフ国のアシュヴィン王を倒し、建国を行った英雄として誉れも高く、平和と友好を国の志として民を慈しんできた。

歴代の王もこの志を受け継ぎ、ナイアデスは、近隣の小国とも友好関係を結び、長い春を謳歌してきた。

だが、ここ数年、ナイアデス近隣の諸国の事情は変化を来し、小さなさざ波はやがて大きな波となり、ナイアデスを巻き込みはじめていた。

ナイアデスのオリシエ王は、息子が十八歳の誕生を迎えたその祝いの席で、開戦を告げた。

ナイアデスとは長い間 無言の戦 を続けて来たハリア国が、西のダーナンの隣接諸国と開戦。それを機にナイアデスと友好関係を結んでいる諸国に次々と侵略を開始したのだ。

王は、自慢の息子フェリエス皇太子と三万の兵と共に、ハリア国の前線が迫るセルグ国へ、援軍を率いて赴いたのだ。

「ハリア国に侵略された国の民は、財産を奪われ、家を奪われ、奴隷として、ハリア国の労働力としてのみ生かされている」

軍事会議が終わり、客室に戻ったフェリエス王子は、セルグ国の王宮のテラスから隣国リンセントースの山々をのぞむ夜空を見つめながら、後ろに控えるふたりの騎士にそう告げた。

「ダーナン帝国の内乱と政情不安定につけこんで、ハリアの年寄りももう一度夢みようとおがいている。その夢のために、どれほどの

民が犠牲になつて居ることか。絶対に許してはいけない」

そう言つて振り返つた若さに満ちたフェリエスの瞳に、セルグ国産のラセナ茶を飲んでいた幼なじみの姿が映る。

イズナとオルローは、ティーカップを傍らに置くと立ち上がった。ナイアデスの双壁とよばれ、国民から親しまれている長身のふたりは、自分たちを見つめる黒い髪と金色の瞳を持つフェリエスにならずいてみせる。

「もちろんだ。このナイアデスが立ち上がったかぎり、ダーナンの小僧にも、ハリアのもうろく爺いにも、好き勝手なまねはさせるものか」

黒髪の長髪を後ろで束ね、額にはトレードマークのバンダナをしたイズナが、陽気に笑う。

「伝統あるわがナイアデスが、なぜ戦を起さずして平和を保つて来たのか、それを忘れてしまったハリアの老人にお仕置きを与えなくてはなりません。そして、内乱に乗じてあつと言う間に王の座を手に入れるやいなや、他国へ侵略を開始した、こわいもの知らずのダーナンのお坊ちゃんにも」

物静かな表情をした薄茶色の髪のオルローが、温和な表情の中にも、厳しい瞳を宿してうなづく。

「これまでもハリアは、ナイアデスの目を盗んでナクロ国などの小国を掠め取つて来た。地理的に離れた場所ではあつたし、今回のように、われらが膝下でのあからさまな戦ではなかつたから、父も目をつぶつて来ていたのだ。だが、いま手を打たなければ、取り返しのつかなくなるような予感がする」

「それで、出陣はいつ？」

イズナの黒い瞳が、楽しくてたまらないといった表情で、フェリエスをみつめる。

「ああ、明後日にセルグの軍と陣営をととのえ、セルグ軍と、我が軍、そして囀部隊との三方向から前線のハリア本隊をはさみうちにする。すでにリンセントートス国には、間者を忍び込ませてあるか



ら、動向は筒抜けだ。前線を崩して、わが軍が囷として正面から挑み、リンセンタートスの地形を利用して山間からセルグ軍が、もう一方からは隣国のゴラ国側の山間からわがフェリエス部隊が攻め込む。決着は一週間内」

「では、明朝にはゴラの国境沿いへ移動ですね」

フェリエスがうなずくのを確かめると、オルローは、一礼をして部屋から出て行った。

その姿を見送ったイズナは、長椅子に座ると、長い前髪を右手でかきあげた。

「あいつも生真面目だね。これから寝ようとしている部下たちをたき起こして、市中を見回り、全員への指示徹底、配置場所への派遣などなどをやる気だよ。それでもう、今晚出発しても大丈夫だ」

「ずいぶんひどいほめ言葉だな。『明日出来ることは、今やってしまおう』という、あいつの方針には、部下も慣れている。それにその用心深さは、これからもっと必要になって来る」

フェリエスの顔が、未来をみすえるように厳しいものにかわる。

「俺だって、この戦いで今度こそ、ハリアの爺いを墓場に蹴落としてみせますよ」

フェリエスの右腕と自他共に認めるイズナは、戦意に満ちた笑顔で、フェリエスを見つめた。

その夜、フェリエスは奇妙な夢を見た。

ベッドに眠る全身が、やがて宙に浮き、黄金の光りに包まれている。温かく心地よい光の世界。

だが、その体をつかまえようと、背後から黒く巨大な手のひらが伸びてくるのが感じられる。

暗黒の闇の世界から、いくつもの巨大な手が、自分と同じように光の世界に浮かぶ人々を捕らえようと、うごめいているのがわかる。でも、大丈夫だ。

自分たちのいる光の世界と、その巨大な黒い手との間には、見え

ない壁が存在する。

決してあの闇の者たちが触れることのない、結界という壁があるのだから。

けれど、この不安はなんだろうか。

フェリエスの中の何かがつぶやく。

これまでにはなかった小さな不安が、シミのようにジワジワと心の中を侵食してくる。

大丈夫だ。この世界は光の世界。闇を消しゆく安楽の世界……  
……。何者にも侵されない……世界……。

(……フェリエス様)

どこかで、はかなげな声が自分を呼びかけている。

(フェリエスさま……)

聞き覚えのある細い声に、フェリエスは、はっとして目を覚ました。

「ミュラか？」

フェリエスは起き上がると、部屋の中を見渡した。厚いカーテンに閉ざされた窓の外は、まだ朝を迎えていないのか、暗い。

その窓辺の空気がゆがみだし、やがてそのゆがみの中から人影が浮かび上がり、現れ、床に倒れ込んだ。

「どうした！ ミュラ?!」

フェリエスがあわてて駆け寄り、抱き上げた腕の中には、か細い体をした少女がいた。

金色の美しい髪を腰までのばした白い肌の美しい少女は、ここへたどり着くことに最後の力を振り絞ったのか、顔も青ざめ呼吸すらひどく苦しげだった。

「申し……訳ござ……いません。結界が……闇の……に……壊され……まし……た……。王……が……王が、これを……と」

差し出された白く細い手には、ナイアデス王家に代々伝わる黄金の指輪 ラーブ が握られていた。

「一刻も……早く……国……へ……。ここは……すでに……危険で……

す

「もういい、なにも話すな」

「フェリエス様……」

ミュラは、フェリエスが自分の手を取り、握りしめるのを、遠のく意識のはざままで感じながら、必死に言葉を紡ぎだした。

「光と……闇が………に、満ち……はじめ……ます。フェリ……エス……さま……お気をつけ……ください。そして………を………その……手……に……」

少女の手が、フェリエスの手を滑りぬけ滑り落ちていった。

「ミュラ?! どうした、ミュラ?!」

その手をもう一度握りしめると、フェリエスは、瞳をとじたまま眠りについたようにも見えるか細いミュラの体をきつく抱きしめた。

「ミュラ、すまなかった……。ミュラ……」

フェリエスは、ミュラのなきがらを、自分の寝ていたベッドに横たえると、髪を整え、その額にそっと口づけをした。

「ずっと……お前には守られるだけだったね……わたしは……」

こぼれてくる涙を指でぬぐいとると、ミュラが最後の力をふりしぼって届けてくれた、黄金の指輪を自分の左手の中指にはめ、その手でミュラの頬にふれる。

「受けとったよ。確かに……」

「フェリエス殿下! フェリエス殿下!」

しばらくすると、ドアを激しく打ちつける音と声が響いた。

「はいれ」

フェリエスが応えると、イズナとオスローが部屋に飛び込んで来た。

「フェリエス殿下」

「国に引き返す。全軍に伝える」

ふたりは、すでに身支度を整えているフェリエスを見て驚いたように立ちすくんだ。

「結果が破られた。ここにはすでに敵の魔道士がもぐりこんでいる」

「なぜそれを?!」

そう言いながら、オスローはベッドに横たえられているミュラの姿を見つけて息を呑んだ。

「ミュラ殿……」

「え?!」

イズナがオスローの視線の先を見て、言葉を失った。

「敵は、ミュラを死に追いやるほどの者。父もすでに……」

フェリエスはそう言って、左指の指輪を示して見せた。

「ミュラが届けてくれた」

「ご存じだったのですか……」

ふたりは唇をかみしめたまま、うつむいた。

「陛下の側近として王の部屋にいた、キリカがミュラ殿に助けられたと言って、イズナの部屋に来たのです。キリカも瀕死の重傷を追っています」

「それで、すぐに陛下のもとへ駆けつけたのですが……。すでに、陛下の部屋の隣で警護をしていたものは、深く眠らされてしまっており、いまだ目を覚ましません」

「わかった……。イズナとオスローは、全軍に撤退の指示を出してくれ、わたしは父のもとに行ってくる」

「お待ちください」

フェリエスがふたりの間をすりぬけて部屋を出て行くこととしたとき、ドアが開いた。

「ユクタス將軍」

「わたくしも一緒にいたします」

白髭をたくわえた武骨な老將軍は、厳しい表情で言葉少なに、だが、断固とした口調で言い切った。

將軍の後ろには、栗色の長い髪をポニーテールにまとめている娘のリンドの姿があった。

「そうか。今夜の警備はリンドの小隊だったな」

「はい。外は静かでありましたが、ただならない気配が致しました

ゆえ、部下とともに陛下のもとへ向かう途中でした。その途中、イズナの部屋へ入っていくキリカ見ましたので、急ぎ父を起こしてまいました」

リスのように大きな瞳がまっすぐにフェリエスをみつめる。

「わかった。ではリンド、私とともに陛下の様子を確かめ次第、セ Луг王へこの次第を説明しに行ってくれ。わが軍は国に引き返すとな」

「御意」

闇が薄らぎ始め、新しい一日の始まりをつげる朝の日差しが射し込む部屋の中で、フェリエスは全身の毛穴から血を噴き出し、ベッドに背もたれるように死んでいるオリシエ王と、そのそばで息絶えている王の守護妖獣・大鷲ダヌの死体と対面していた。

「これは、わがナイアデスに対する宣戦布告だ」

それが、じつとたたずんでいたフェリエスの放った第一声だった。ユクタス将軍が、イズナたちが掛けたのであるう血のにじんだ白いシートを再びその亡骸にそつと戻す。

「ハリア国のヘルモーズ王か、ダーナンのプロディ・ザイネスか……、いずれにしろ、こうでもしなくては我がナイアデスに立ち向かえぬ卑怯者がいるということだ。だが……」

フェリエスのこぶしが堅く握り締められた。

「だが、そいつには、父上の守護妖獣ダヌやミュラほどの力をもつ水の守護妖精の結界を破り、死に追いやるほどの力をもつ者がいる……わたしのミュラを殺すほどの……」

透きとおる美しい肌をもったはかなげな少女は、水の妖精として巨大な力を自在に使いこなし、フェリエスが生まれたときから守護者として母のように、姉のように常に影の存在として守り続けて来てくれたフェリエスの守護妖精だった。

「ナイアデスの王を殺し、ミュラを殺したものを許しはしない。わたしのかけがえのない翼をむしりとった者を、許しはしない。必ずこの手でさばいてみせる！」

握りしめた拳は、血の気を失ってもまだ、フェリエスはその手を解き放そうとはしなかった。

ダーナンのロディ・ザイネスが新王の座についてから、まだわずか7カ月。

同じ年にナイアデスにも、国民の圧倒的支持を得た若き王が誕生することになるのである。

### 第3章 侵略への序章 - 1 -

「アル神の息子

シルク・トトウ

戦いと勇気をつかさどりし神

かの者 守りし大地に降りし時

巨大な渦の流転が始まる

聖なるアル神の慈悲のもと

その身を隠し

五つの年を過ぐる

かの者のもと

アル神の御加護

全天にあまねく満ちあふれたり

かの者のもと

勝利の光り満ちあふれたり」

ノストール王国アルティナ城の一室で、カルザキア王はユク・アンナの一族と対面をはたしていた。

「ダーナンとナイアデスで魔道士たちが告げたのは、このようなものです」

アンナの族長であり大神官のサーザキアは王の正面にひざをつき、低く頭をたれながら低くそう告げた。

そして、再会以来、堅く口を閉ざしたまま、アンナたち一行に視線を合わせず目を伏せたままの王の返事を、ひたすらじっと待っていた。

室内には、アンナの一行のほかは、カルザキア王とその側近、そしてテセウス皇太子という限られた者だけが集められていた。

「サーザよ」

長い沈黙の後、王は口を開いた。

「五年前、そちが告げた 先読み はいまだ無効になってはいないのか？ あの子の死は、無意味なことだったのか？」

「王よ」

サーザキアはゆっくりと頭をあげて、カルザキア王と瞳を合わせた。

「先読み には、さまざまな道がついてまわるのでございます。時には、その時においては、何の価値も、意味すら見いだせないような 先読み が、後に重大な意味をもつこともございます。もちろん様々な出来事が影響しあい、消滅してしまうものもございます。そして、王よ……われらの五年前の 先読み における出来事は、幼子の生命をもって確かに消滅してございます。」

「ならば……」

「その消滅をもって、新たな来たるべき日が誕生した……と、われらがアンナは感じております」

（新たな……来たるべき日の……誕生……？）

テセウスは、サーザキアの言葉を心の中で繰り返した。

（どうということだ？）

王は、大きなため息をついたあと、天啓を受けるようにまぶたをとして問いかけた。

「アル神の息子シルク・トトウ神の転身人が、ノストールに生まれ落ちているという予言が真のことならば……それは、このノストールにとり、幸をもたらすのだろうか。それとも……ラウ家にいかなるものを招くか？」

「……………」

「サーザ？」

静かな沈黙が室内を満たしていった。

だが、サーザキアは目したまま答えようとする気配を見せない。

老人は、唇を閉ざしたまま深く頭をたれているだけだった。

幸ではない。

大神官の様子に、その場の誰もが不吉なものを予感する。



「サーザキア、答えよ。アル神との契約のもと、ノストールの王はアンナのいかなる言葉も聞かねばならない。そしてアンナは答えねばならぬ。サーザ、答えよ」

カルザキア王の言葉は静かな口調であった。

だが、テセウスはまるで雷に打たれたように、父の言葉が自分自身を貫いていったのを感じていた。

（父上は、怖くないのだろうか。サーザキアが告げる言葉が、わたしたちにとって最悪のものかもしれない……）

「王よ。聖なる月の神アル神の息子シルク・トトウ神は、戦いと勇気を司る といわれし神、その神加護せしところ勝利に導かれる予言があります。けれど……アル神の加護受けし、われらユク・アンナの一族にのみ密かに伝わり続ける別の異名もございます」

カルザキア王は黙ってその続きをうながした。

「シルク・トトウ神は……破壊神でございます」

サーザキアは続けた。

「我らがユク・アンナには、古くから、シルク・トトウ神についての伝えが残っております。」

『アル神の息子シルク・トトウ神

戦いと勇気を司りし神

人々に愛されし神

だが

その力の巨大さゆえに

その言葉の穏やかならざるゆえに

神々の怒りをかい野に放たれる

マーセンテラー神の言葉に背きし者

ユク神の光りより逃げし者

ドナ神の懐を避けし者

ゼナ神の慰めを嫌いし者

エボル神の施しを拒みし者

すべてはその力の大きいなるゆえに

神々の怒り

災いの力をその身に与え

破壊の神と名づけたもう

かの者誕生せし大地

すべての破壊を招きよせる』

と

部屋の中がざわめいた。

「その子が誰なのか、そちたちにはわかるのか？」

王は静かに問いかけた。

「城下にて、多くのアンナに 先読み をさせました……」

サーザキアは答え続ける。

「けれど、ダーナンやナイアデスの魔道士のごとき 先読み は、  
いまだ我々には訪れておりません。それゆえ、われらがアンナの力  
では、見つけること叶いませぬ」

その場の誰もが、言葉を失わずにはいらなかった。

アンナたちにシルク・トトウ神の転身人の 先読み が訪れな  
ったこと。それにもまして、破壊神の誕生は、不吉な予言そのも  
であつた。

(シルク・トトウ神が……このノストールを滅ぼす……?!)

テセウスは、その衝撃の重さに、部屋からすべての人々がいなく  
なつた後も、一步も動くことができなかった。

夜の城を抜け出し、森を駆け抜け、ドルワーフ湖に一人馬を走らせたテセウスは、湖の前にたたずむ人影を見つけ、自分が先客でないことを知った。 > B R <

夜の空と湖には、煌々と輝く月と、星々が満ちあふれ、一枚の絵のようにみえる。 > B R <

「今日は、ちゃんと足がついているみたいだね」 > B R <

馬から降りて、その人影に近づくとテセウスはクスリと笑いかけた。 > B R <

「テセウス殿下」 > B R <

はじめ、驚いたように振り返ったその影は、月に照らし出されたテセウスの顔を見て恐縮したようになる。 > B R <

「三年ぶりだね。エディ」 > B R <

「はい、さきほどは失礼致しました」 > B R <

テセウスより七歳下の弟、クロトと同年の少女は、先程の広間では一番後ろでずっと顔をあげることはなかった。 > B R <

その腰までのびた黒髪と、夜に見る紫の瞳のせいか、クロトよりも少し大人びて見える。 > B R <

「こんな夜中に、女の子一人で来るのはぶっそうだな。それとも、また寝ぼけたのかい？」 > B R <

五年前、この少女が宙を浮いていたように見えたのは、夢だったのか、幻だったのか、テセウスには自信がない。 > B R <

「いいえ、その……」 > B R <

少し驚いたように、恥ずかしそうに胸元に手をあてて首を横に振る少女を、テセウスはなつかしそうに見つめて笑う。 > B R <

エディス・ラ・ユル・アンナ。 > B R <

それが少女の正式な呼び名だった。 > B R <

どこの王家にも属さず、古から諸国を巡り放浪の旅を続ける占術

士アンナの一族の末娘。 > B R <

ただ、どのような縁なのかテセウスは知らないが、彼らはラウ王家の使いがあつたときに限り、どのような場所においてもかならずその呼び出しに応じてやって来た。 > B R <

「戦さがはじまると、アンナはノストールにとどまれません。この美しい湖の姿も、しばらく見に来られなくなると思いましたので、アル神にご挨拶にうかがいました」 > B R <

やわらかく心地のよい少女の声が、夜の空気に解けていく。 > B R <

そして、その口調はやはり、大人びて聞こえる。 > B R <

「君も……シルク・トトウ神は、破壊神だと信じているのかい？」

> B R <

気づいたときテセウスは、この数時間ずっとひとり抱えていた言葉を吐き出していた。 > B R <

本来ならば、十歳の少女に問いかける言葉ではなかったが、アンナの一族にはその気遣いは無用なのだと思わせるものがあつた。 >

B R <

「ノストールの森と湖の精霊たちはそう言っていると……族長たちは言っています。でも、わたしにはまだ、わかりません」 > B R <

少し寂しそうに少女は月を見上げた。 > B R <

「すまない……。変なことを聞いた」 > B R <

「いいえ、いいえ……。お答えできずにいるのはわたしですから。

わたしも早く 先読み が出来るようになって、お役に立ちたいと思っと思っています」 > B R <

テセウスの言葉に、エデイスは困ったように瞳を地面に落とす。

> B R <

「うん、早くその日がくるのを待っているよ。僕はサーザキアの言葉を聞いても、まだ信じられない。いや、多分信じたくないんだ。

アル神はノストールの守護神だ。なのになぜその息子であるシルク・トトウ神が、破壊神なのか。ノストールを滅ぼすというのか。その

理由を知りたい」>BR<

「もし、私にその理由がわかる日が来ましたら、まっさきにテセウス殿下にお知らせ致します」>BR<

「うん、待ってるよ」>BR<

テセウスとエデイスが、白銀の月と湖を見つめていると。>BR<  
「あー、やつぱりここにいたあ」>BR<

テセウスにとって聞きなれた大きな声が無遠慮に湖に響きわたった。>BR<

「クロト……？」>BR<

振り返ると、一頭の馬に騎乗した三人の姿があつた。>BR<

「五年前のあの時も、今日のように満月の夜でしたね」>BR<

アルクメーネが笑いながら声をかけ、馬上からおり、クロトとルナを地面におろした。>BR<

「アルクメーネ、それに……」>BR<

テセウスが驚いている間にも、弟たちが笑顔をたたえながら二人のもとに歩み寄ってくる。>BR<

「ずるいなー、テセウス兄上つてば、俺たちに内緒で湖にくるなんて。しかもエディとふたりつきりださ」>BR<

すねたような口調でクロトがボヤク。>BR<

「残念ながら、エディが一番乗りだったよ。それより、お前たちこそ、どうした？」>BR<

テセウスは笑いながら、すねる弟の頭をひとさし指でツンとつつく。>BR<

「このおちびたち、兄上の姿が見えないといって、城中さがしまわっていたのですよ」>BR<

「それは、テセウス兄上だけが、父上と一緒にアンナたちと会っておいでだったから。なにを話したのか教えてもらおうと思っただけです。なのに、夕食にもいないし、部屋にもいない。おまけにエディの姿も見えなかったからさ。アルクメーネ兄上にも探すのを手伝わってもらったんだ。そうしたら、もしかしたらって、ここに連れて来

てくれたんだ」>BR<

クロトが唇をとがらせ、両手を腰にあてて、長兄に抗議のポーズをとる。>BR<

そんなクロトとは逆に、銀色の髪の毛の小さな影が心配そうに、その足にしがみつき、テセウスの顔を仰ぎ見る。>BR<

「アル神と、お話ししにこられたのですか?」>BR<

「うん……。これから戦が始まるとゆっくり、ここにも来られな  
いからね」>BR<

テセウスは、腰を落としてルナの緑色の瞳をのぞき込んだ。>BR<

「いいかい、ルナ。これからどんなことがおきても、ルナはラウ王家の子だから、泣いたりおびえたりしてはいけない。ルナが泣けばノストールの民みんなが泣くんだ。わかるかい」>BR<

テセウスは、ルナの両脇に手を滑らせると、その体を月に向かって高くかかえ上げ、肩車をした。>BR<

銀盤の月の輝きに照らされて、ルナの銀色の髪が夜の空にみごとに浮かび上がる。>BR<

「はい。父上も言っていました。ラウ家の王子が泣いたら、みんなの勇気が、しくじけてしまわれるからって」>BR<

「くじけてしまうから、だろう」>BR<

クロトが、テセウスの肩の上のルナをうらやましそうに見上げながらも、舌を出して見せる。>BR<

「勇気がしくじけてしまわれるって、父上がおっしゃられたんだもん」>BR<

「くじける、だ!」>BR<

「違うもん!」>BR<

ルナがほつぺたをふくらまして、クロトを睨みつけるのを見て、アルクメーネやエデイスが笑う。>BR<

「エディ。あなたの名付け子のルナは、言いだしたら負けを認めない頑固者になってしまったのですよ。ほら、クロトもあきらめなさ

い」>BR<

「だって、間違いは間違いと認めなさいっていうのはアルクメーネ兄上の口癖じゃないか。なんだよ。ルナには優しいくせに」>BR<  
そう兄に抗議するものの、ルナに対しては本気で怒れないのはクロト自身も同じだった。>BR<

銀髪に緑色の瞳を持つまだまだ幼い表情のルナは、見かけこそ少年であり、ラウ王家の王子として育てられたが、三人にとってはかけがえのない妹であった。>BR<

だが、それはそれとして、クロトだけは、「ルナは本当は男の子なんだ。アル神が男の子の体が死んじゃったから、残った女の子の体にくれただけで、本当は弟王子なんだ」と、いまだに主張し続けている。>BR<

「アル神とお話しはできたのですか？」>BR<

テセウスの顔を見ようと、ルナが肩の上から兄の顔を必死にのぞきこむ。>BR<

「うん。またみんなでここに来なさいって」>BR<

「本当に？」>BR<

驚いたように、目を丸くしてルナとクロトが同時に叫んだ。>B

R<

「本当です」>BR<

アルクメーネたちが現れてから、オドオドしていた少女が、ためらいながらもテセウスのかわりに返事をした。>BR<

「その……月の光が、語りかけるのです」>BR<

その言葉に、兄弟たちはしばらくじつと月を見上げた。>BR<

「あのさ、俺にもわかる気がするよ」>BR<

しばらくすると、クロトが腕を思い切り腕をのばして、月を指さした。>BR<

「声とか、そんなんじゃないけど、こんなに優しい光りは母上の瞳以外じゃみたことないから」>BR<

「五年前、みんなでここに来たときと同じぐらい、優しい気持ちで

満たしてくれるアル神の輝きですからね。私にも感じられますよ」  
> BR <

アルクメーネもうなずく。 > BR <

「ルナもわかります。みんなで来るとアル神が、喜ばれます。母上もアル神が大好きです」 > BR <

ルナもテセウスの肩の上から、月に手を振る。 > BR <

「そう……だね」 > BR <

テセウスは、このところやっと時折笑顔を見せるようになった母、ラマイネ王妃の顔を月にダブラせた。 > BR <

テセウスたちの母であるラマイネ王妃は五年前のあの出来事を境に、人前に出ることを極度に嫌うようになった。 > BR <

わが子を失い、ひどく心を傷めてしまった王妃は第四子を手放したショックから、夫であるカルザキア王をさげ続けた。五年もの月日が流れた今も、心因性ショックの為に、言葉を話すことができない。 > BR <

それでも、テセウスたちの慰めになったのは、ラマイネ王妃が、テセウスたちが湖でみつけ抱いて連れて来たルナをわが子以上に慈しみ育ててくれていることだった。 > BR <

乳母をつけることを拒否し、ラマイネ王妃はクロトの時以上に、ルナに愛情をそそぎこんだ。 > BR <

まるで、そうすることで自分の生きる意味を見いだそうとしているかのように、当時、まだ幼いテセウスにさえも感じられた。 > BR <

「でも……母上、戦さが始まるの？ って聞いたら、泣いていらっしやっただの。どうしてかな？ 兄上、戦さって剣術の見せあいっことですよ。マーキッシュの村で、みんなやってるんですよ」 > BR <

テセウスの顔をのぞき込んでいたルナの体が、さらに前かがみになり、落ちそうになる。 > BR <

「こら、おチビ危ないだろう」 > BR <

「でも、母上が泣くなら、ルナもうやらない」 > BR <



ルナの緑色の大きな瞳が、みるみるうちに涙であふれていく。 >  
BR <

「おチビ……」 > BR <

アルクメーネもクロトも困ったようにルナ見つめた。 > BR <

テセウスは、ルナの小さな体を抱きおろすと、その涙を両手で拭う。 > BR <

「戦さは剣術の大会ではないんだ、戦さは人と人とをバラバラにしてしまっただ。家族や、兄弟や、友達みんなと別々になってしまったり、会えなくなってしまう。だから母上は悲しまれたんだ」 > BR <

「バラバラ？」 > BR <

ルナはその言葉を聞くと黙り込み、次にテセウス、アルクメーネ、クロト、エデイスの顔をじつと見つめた。 > BR <

「ルナも、兄上たちとバラバラになるの？」 > BR <

「そんなことあるもんか！」 > BR <

それまで黙っていたクロトが大声を出した。 > BR <

「戦さがあっても、ラウ王家は負けない。誰もバラバラになんてならないんだ。だって、ノストールにはアル神がいるんだから！」 > BR <

そのクロトの言葉が、テセウスの胸に痛みを走らせた。 > BR <

シルク・トトウ神は……破壊神でございます。 > BR <

「兄上？ どうしたんですか？」 > BR <

その兄の様子に気づいて、アルクメーネが弟たちにわからないようにそつと肩に手をおく。 > BR <

「いや……」 > BR <

アンナの一族であるエデイスはともかく、テセウスにはまだ、アルクメーネに打ち明ける決心がこのときはついていなかった。 > BR <

(これ以上の不安を知らせてどうする……) > BR <

戦さがどのようなものなのか、テセウスたち兄弟はもちろん、父

のカルザキア王ですら歴史書や、兵法書、物語り等の中でしか知らない。祖父の時代にハリア国との戦さがあつたのが、最後だつた。  
> B R <

現実では、そのとき何が起きるのか、どうなつてしまふのか実感がなかつた。ただわかっているのは、最悪の事態、負けた王家は一族壊滅に追いやられると学んだことだ。 > B R <

「ルナの体重がまた重くなつたから、頭がクラクラしたのさ」 > B R <

「ルナ、重くないよ」 > B R <

アルクメーネに対する言い訳だつたのだが、ルナがほつぺたを膨らませた。 > B R <

さつきまでの泣き顔が消え、クロトを真似て両手に腰を当てるポーズで、抗議をする。 > B R <

「悪かつた。ルナは重くないよ。それより、早く母上に、おやすみの挨拶を言いにいこう。ルナが挨拶に来ないので、きっと母上が心配して待っていてられるよ」 > B R <

「はい。ご挨拶にうかがいます」 > B R <

ルナが涙をふきながら笑顔を浮かべる。 > B R <

「さあ、エデイも帰ろう。私の馬に乗せてあげるよ」 > B R <

笑顔をつくつてルナやクロトの背を押し、エデイスの小さな手を取ると、テセウスは歩き始めた。 > B R <

（兄上、まだ私は年下のエデイスのように相談相手になれないほど頼りないのでしょつかね……。ま、やりがいはでてくるけど） > B R <

ラウ王家の第二王位継承者は、兄の背中を見つめながら、夜空の月を振り返り静かに祈りの言葉をささやいた。 > B R <

「アル神、ノストールの守護神よ。わがラウ王家とノストールの民に御加護を。すべての民のもとに、平らかなる心を。守るべき者のためにあなたの力をおかし下さい」 > B R <

ノストール王国は、小国であったが隣国リンセントス国との間には自然の要塞として険しい山々が連なるエーツ山脈が横たわり、反対側は大海ニューズ海洋に囲まれており、ラーサイル大陸の中でも辺境地帯にあることもあり、ひさしく国と国との争いからは遠ざかっていった。

だが、いま城下には徐々に不安が広まり、人々の生活が変化をもたらせはじめていた。

「戦さがはじまりそうなんだって？」

ラウ王家の城下から一番遠くにある村、シャンバリアの村でも、男たちが納屋から刀や斧、弓矢などを出し、手入れを始める姿があちこちに見られるようになった。

「かあちゃん。王様のお城に行ったら、強い騎士になれるかな？」

それにね、面白い本もたくさんあるって聞いたよ」

母親に城に向かうための身支度をされながら、少年が眼を輝かせる。

「おまえったら、この状況がわかってないようだね」

六人の子供を産んだかっぶくのよい母親であるハンナは、女姉妹の中たった一人だけ授かった息子ののんきなはしゃぎぶりに、複雑な表情を浮かべながらため息をついた。

「いくらアンナの一族の先読みだからって、なにもまだ幼い子供を、それも男の子ばかり親元から引き離すこともないじゃないかね。それに、この子は小柄だし……」

小さいころから病弱だったサトニは、同じ年の子供たちからくらべると、体はふたまわりほども小さく、いつも女の子と遊んでいるか、一人で遊んでいることが多かった。

「わかっていないのは、お前の方だ」

隣の部屋から、夫がさやに収まったままの短刀を手にあらわれた。

「こんなことあ、この国がはじまって以来のことだ。カルザキア王が、好んで戦さをするとは思えんし、この間も、村に来た行商人が、中大陸での、きな臭い話をしておった。わしらのわかんところ、何かがおきとるんだらう」

「けど……なにも、うちの子を……」

「サト二」

ジムサは、妻の言葉を無視して、息子の肩に大きく温かな手を乗せ、左手の中の物をさし出した。

「これをもつていけ」

その手には、木製の短剣があった。

「これは、じい様の代からのお守りだ。城の人達の言うことを良く聞いて、立派に役目を果たしてこい。いいな」

「はい……」

父親の顔を伏し目がちに見上げながら、つぶやく息子に、父親は短剣を小さな手に握らせて笑顔をつくった。

サト二の支度が済んだころ、村の入り口にはすでに、子供たちを乗せて行く城の馬車が到着していた。

幌の中は、暗幕がたれていて中の様子は見えないが、そこが子供たちの乗る場所のようだった。

「村の方々はこれで全員ですか？」

馬から降りた青いマントの騎士が、村長に丁寧な物腰で一礼をした。

「はい。全員で見送りさせていただきました。そして、今年五歳を迎える子、迎えた子供たちは、この子たちです」

村長の声にしたがって、四人の子供たちが両親に従えられてオズオズと現れた。

「あんた、サト二、お迎えが来ているよ。グズグズしていると、いつもみたいにおいてかれちまうよ」

ハンナが、家のドアをあけてうながすと、ジムサの後にしたがって、五人の姉妹が笑い声を上げながら、外へ出て行く。

「あのね、ちよつとまつて、短剣を入れる袋をとってくる」

父からもらった短剣を手に、サトニは隣室のベッドへ戻るとゴソゴソと捜し物をしだした。

「ほら、急ぎな。騎士さまが村長とあいさつなさっているよ」

だが、息子をせかしながら、出迎えの騎士と家の中を交互に見ていたハンナの全身が、突然凍りついた。

「結構です」

村長の言葉に、一同を見回していた騎士は、あとから急いで走り寄つて来たジムサと、その娘たちを認めてうなずいた。

「これで、手間がはぶけます」

騎士の唇が笑みをたたえた時、村長の年老いた胴体と頭は別々に切り離されていた。

見送りに集まった村の人々は、何が起きたのか理解できなかった。

だが、騎士のふりあげられた剣と、村長の目を見開いたままの頭がスローモーションのように血飛沫を撒き散らして、彼らの中に転がり落ちたとき、絶叫が上がった。

それを合図にしていたように、青装束に抜き身の剣を手にした集団が、幌の中から次々と飛び降り、村人たちに襲いかかった。

女たちが悲鳴をあげ、逃げ惑う村人たち、子供たちの泣き叫ぶ声が村に響き渡った。

「ごめん、かあちゃん」

何も知らないサトニが、準備を済ませて外へ飛び出そうと、自分の部屋から出て来たのだ。

その声を聞いて我に返ったハンナは、あわてて家の中に入りカギをかけると、サトニを奥の部屋に押し込んだ。

「どうしたの？」

外で聞こえる悲鳴や物音に、サトニの顔からさつきまでの笑顔が消えていた。

「いいかい、お前はベッドの下の板を外して、床下に隠れるんだ。

かあちゃんがいいって言うまで、出るんじゃないよ」

そう言いつけると母親は強引に、サト二を床下に押し込み、その板の上にベッドをずらした。

「かあちゃん？」

床下で、サト二が母親を呼ぼうとしたそのとき、家のドアを壊す音と、家の中を歩き回る大勢の乱暴な足音と大声、物を壊す音が、サト二の言葉を失わせた。

見えない恐怖に全身が総毛立ち、サト二の全身から血の気が引いて行く。

何が起こったのかわからない恐怖に襲われたまま、サト二は震えてカチカチと音を立て始めた歯と、全身の身震いを止めようと、父から譲られた短剣をきつく握りしめる。

村の中では、誰ひとりとして反撃する余裕もないままに、老若男女を問わず、残虐な殺戮が行われていた。

どれほどの時が流れたのか、どのくらい気を失っていたのか。意識を失っていた少年が、床下からはい上がって見たものは、破壊されつくされた部屋だった。

玄関のそばには、母親の血に染まった死体があった。

「かあちゃん……？」

サト二は、ぼうぜんとした足取りで母親のそばに近づくと、顔のぞき込み、静かな声で二、三度母を呼んでみた。

だが、すでにこと切れてから数時間たっている母親の体にふれたとき、少年は初めて、その体が冷えきっているのを知って驚いた。

「かあちゃん！ かあちゃん！！」

サト二の目から涙がこぼれ落ちた。

いくら母親の名を呼び続けても、目覚めないとわかったとき、少年は外に飛び出した。

助けを求めようと。

だが、夕やけ色に染まりはじめた村には、長い影が地面に伸びているだけで、いつもの村の姿はそこにはなかった。

あるのは、逃げ惑った姿そのままに、村中に倒れているたくさん

の傷だらけの死体だけだった。

数時間まで、笑顔でいた人達だった。

みんな、サトニの知っている人達ばかりだった。

父親もまた、姉たちをかばい、一番下の妹を抱いたままの姿で殺されていた。

変わり果てた村の中で、小さな少年は涙に顔を濡らしたまま、いつまでも、いつまでも、夕暮れの空に向かって泣き叫び続けていた。シャンバリア村での殺戮。

それは、ノストール王国に襲いかかった侵略の序章だった。

ノストールの城下の兵舎に自分と同じ年の少年たちの姿が目を追うごとに増えていくのを見るうちに、ルナは自分も城下に行きたいと父や兄たちに何度かお願いをしたのだが、あっさりだめだと言いつ渡されて、海に見えるテラスで空を見上げてすねていた。

『ルナ様、いかがなされました？』

だれもいないはずのテラスで、どこからともなく声が呼びかける。

「ねえ、リユーザ」

ルナは姿の見えない声に語りかけた。

「お城から出たらいけないって、父上も兄上もいうの。それって、戦さがはじまるから？」

『はい。戦さになるとは、まだ決まっていますませんが、そうなるかもしれない。』

女性のような優しい声が応える。

「どうして、ルナと同じ五歳だと、町に集まるの？ おとうも、おかも一緒じゃないって言ってたよ」

ルナは、マーキツシュの村へ遊びに行つて、村の子供達が両親のことを、そう呼ぶのを知っていた。

『アンナたちがそうするようにと告げました』

ルナはじつと海を見つめていた。

「戦さは、みんなバラバラになるってテセウス兄上が言いました。まだ違うのに、どうして、おとうやおかあとバラバラなの？ どうして、そんなこと言うの？ ルナ、わかんない……」

ルナの翠色の目から涙があふれ、いまにもこぼれ落ちそうだった。

『それは……』

影の声は答えようとして、急に声をひそめた。

『ルナ様、グシュター公爵がまいります。お気をつけください』

リユーザがそう告げて気配を消すと、ほぼ同時に、部屋のドアを



ノックする音が聞こえて来た。

「だれ？」

「セレナです。失礼致します」

そう告げると、ルナの世話係の侍女頭であるセレナがドアを開けて入ってきた。

「ルナ様。グシュター公爵がルナ殿下にごあいさつをと、うかがわれております。客間にお通しいたしましたが、いかがなさいますか？」

ルナは、がっしりとした体格で長身の白いあごひげをたくわえた強面の老人の顔を思い浮かべた。

カルザキア王よりも高齢の老人は、亡くなった先王ま時から王家につかえていた。

今もカルザキア王の信厚い臣下であり、ラウ王家の王子たちを臣下の立場から敬いつつも、自分の孫以上の存在として幼いころからかわいがってくれていた。

だが、ルナはグシュター公爵の視線が、常につま先から頭のとっぺんまで自分を値踏みするように見つめているのを感じて、その視線を漠然といやな目だと感じていた。

「あの人きらい」

ルナは逃げるように寝室に走り、ベッドに飛び込んだ。

「変な目でルナのこと見るから。きらい」

セレナは、困ったようにため息をつきながらその姿を視線で追う。ルナが少女であると知っている城の中の数少ない人物の一人であるセレナは城の侍女の長として、王家にかかわる身の回りの世話に従事してきた。

それだけに、他人のルナに対する視線には人一倍敏感であったし、ルナの言葉どおりグシュター公爵がルナに対し懐疑的であることも気づいてはいた。

ノストール王国の人々の髪の色が、金髪や茶色、黒や緑といった色がほとんどで、ルナのように銀色の髪をもつもの一人としてはい

ない。

一度、大病で死にかけた子なので、そのときに髪の色が変わってしまったのだ。これこそ、わが守護神アル神の御加護の証だ。カルザキア王はそう、臣下たちに告げていた。

セレナはもともと、王妃付きの第一侍女長としてラマイネ王妃の身の回りの世話をしていた。

第四王子を取り上げるときも、つきつきりだったのだ。

だから、生まれたのが男児であることも、その目で見ていた。

けれど、その嬰兒は、誕生と同時にひと目を避けて、すぐに別の部屋に移され、病気であることを告げられた。

誕生の祝賀もないままに、翌日には病死したと聞かされたのだ。

その時のラマイネ王妃の嘆きはひとかたならないものだった。

一刻も早く胸に抱くことを待ち望んでいた王妃は、その手で触れることもないまま、夫であるカルザキア王からわが子の死を告げられた。直後、哀しみのあまり声を失ってしまったのだ。

その事實は、セレナにとっても大きなショックとなった。

しかも、王族の死は、まず占術士であるアンナの一族に知らせられて後に、公に知らされることとなっているため、それまでの間、第四王子の死は伏された。

そのアンナの一族が城に訪れた夜、三人の王子たちが赤ん坊を連れて来たのだ。

「アル神が、弟を返してくれたんだよ」

黒い瞳を大きく輝かせながら、セレナにそつと教えてくれたクロトの満面の笑顔が蘇る。

気が触れるのではないかと思われていた王妃の様態も、ルナを手渡されてからはみるみるうちに良い方向へと変わっていった。

ルナの性が女であることを知っている者。

それはすなわち、ラウ王家の秘密を共有している者のことであつた。

そのことを知っているのは、カルザキア王とラマイネ王妃、三人

の王子たちと、大臣のイオカステ、シグ二將軍、アンナの一族の数人、そして、セレナだけだった。

第四王子をとりあげたケーナ術士は、老衰で三年前に亡くなっている。

王子の誕生、病死、アンナの一族による蘇生。アル神の加護による、奇跡を印した銀色の髪。

王家の秘密の一部は、知らない間に漏れ伝わり、自由な風のように人々の好みのままに形を変え、脚色を加えて流れていった。

ルナの銀髪を、ノストールを加護する月の神・アル神の輝きと重ねあわせて国の誰もが敬愛と誇りを持って語りあつた。

だが、グシュター公爵だけは、王家のほかの誰にも見せない視線をルナには向けていた。王や、王子たちの知らないところで。

「兄上たちは、いらっしやらないの？」

ルナはうつ伏せになったベッドの上で、顔だけそつと出してセレナを見る。

「ええ、お出掛けしております。クロト様はお勉強のお時間ですし、ルナはそれを聞くと、よけいに顔を曇らせた。

「ルナ、病気」

唐突なルナの言葉に、セレナは思わず吹き出しそうになった。

最近まではそんなウソを言ったことがないルナに、仮病を教えた人間がいるらしいとわかつたのだ。

その当人は、すっかり仮病がバレて、いつもの倍の勉強量をもたらつて、今頃うんうん苦しんでいる真つ最中のはずだ。

「ルナ様」

セレナが呆れたように、ベッドへ近づこうとしたとき、ノックの音と同時にドアが開いた。

「グシュター卿。勝手に部屋まで来て、ドアを開けるとは失礼ですよ」

セレナが驚いて、眉間にしわを寄せる。

「いや、ご病気とは知らず、ご無礼しました。なかなかお取り次ぎ

していただけないようなので、こちらから出向いた方がよろしいか  
と思いましてな」

一見、温和な表情で一礼する。

ルナは、ベッドの上で眠ったふりをしていた。

これも、勉強中の誰かさんの入れ知恵かと思うと、セレナは天を  
仰ぎたい心境にかられた。

「いくら陛下と親しい中とはいえ、ずうずしさにもほどがあります  
わね、公爵さま」

「なに……？」

侍女頭からのぶしつけな物言いに、グシュター公爵の温和な表情  
に一瞬かげりがさす。

「ずうずしいと……？ それは、このわしに言ったのかね？」

「そのとおりです。陛下の許可ない者は、陛下や殿下方のお部屋に  
直接通すことはできないのがしきたり。いくらあなたが、亡き先王  
陛下の側近だった時代に出入り自由の身だったとはいえ、それ  
は昔の話。いまは半分ご隠居の身ではありませんか。謹んでくださ  
いませ」

自分が若者だったときから、この城で侍女としてつとめているセ  
レナの毅然とした言葉に、グシュターは穏やかな表情を保とうとす  
るが、ついに失敗し、にがにがしい顔をあらわした。

「貴様……身分をわきまえてものを言っておるのか？」

「殿下をお守するのが私のつとめですから」

「この……」

グシュターの腕が、セレナにつかみかかろうとしたその時、グシ  
ユターの肩を掴んで、強引に廊下に引き出したものがいた。

「何をするか！ わしは、グシュター公爵だぞ」

「存じてます。ですが、わたしはノストール王国ラウ王家の第二王  
子です」

「アルクメーネ殿下！」

セレナが驚いて小さな声で叫んだ。

そこには、アルクメーネとテセウスが無表情に、グシュターを見つめている姿があった。

「兄上？」

寝ているふりをしていたルナが、がばつとベッドから跳び起きる。

「テセウス皇太子殿下……アルクメーネ殿下……」

グシュター公爵が、作り笑顔でこの場をとりつくろうとするが、アルクメーネの視線はこれまでになく厳しいものだった。

「ここは王家の私室であるルナの部屋です。その部屋に無断で入り込み、侍女頭のセレナに手をあげようとするとは、どういうことですか？ ご説明願います」

「いや……、その、こ、困ったことにな。ルナ殿下のお見舞いにかがったのに、この侍女が無礼な口の利き方をするのでな……ハッハッハッ。まあ、今日のところは寛大に許してやろうと思っておったところだな……。では」

グシュターは、なにごともしなかったように、王子たちの脇をすり抜けたあと、振り返って深々と一礼した。

「テセウス皇太子殿下、アルクメーネ殿下もごきげんうるわしゅうございます。また、あらためてごあいさつに……」

「グシュター公爵」

去ろうとするグシュターをテセウスが穏やかな声で呼び止めた。

グシュター公爵の体が、ビクリと震える。

「まさか、あなたがここにいらっしやるとは驚きました。わたしも、のちほど降りていきますので、それまで中庭でおくつろぎください。ああ……昼食をいっしょにいかがですか……？」

「あ……はっ。よ、喜んで……」

落ち着いた様子をとってはいるものの、顔をこわばらせながら、再度一礼をしてグシュターは去って行った。

その後ろ姿が通路から消えるのを見ると、テセウスたちはルナの部屋に入りそつとドアを閉めた。

「大丈夫かい？ セレナ」

アルクメーネが心配そうに、セレナの肩を抱く。

「ご心配いりませんわ。お心遣いありがとうございます」

侍女頭は、朗らかな顔で片目をとじる。

「それよりも……」

セレナはため息をつきながら、部屋の真ん中に立っているルナを振り返った。

「仮病と、眠たふりなんて反則技は、このセレナ、お教えしておりませんよ」

「え?!」

テセウスとアルクメーネの目が丸くなる。

「おチビ?」

「あの……ルナね……」

ルナの顔がみるみるうちに涙目になる。

「ウソ泣きもお教えしておりません」

セレナのすべてを見通したような駄目押しに、ルナは泣き顔をやめると、三人の脇を駆け抜け、部屋の外に逃げ出そうとする。が、ドアの方向に駆け出したところを、テセウスの腕に遮られ、抱き上げられてしまった。

「悪い子はお仕置きだぞ」

「ルナ、悪くないもん」

テセウスの肩にかつがれて、ジタバタしているルナのほっぺたを、アルクメーネが人差し指でつつく。

「では、理由を聞きましようか?」

「ルナ、グシュターきらいだもん」

その言葉に、テセウスとアルクメーネは再び顔を見あわせる。

テセウスはルナを肩からおろしてひざ床に付けて、その緑色の瞳に自らの目の高さを合わせ、じつと見つめた。

「いつも、ルナのことならむもん。ルナ、悪いことしてないもん」

「今までは、何度そう言われても信じられなかったんだけど……」

テセウスが、セレナを見上げてため息をつく。

「ですが、さっきの場面を見てしまったからには、ほおっておくわけにはいきませんね」

アルクメーネは、ルナとセレナを見ながら、グシュター公爵がおりていったらう中庭の方角を親指で指さした。

「実は、私と兄上を昼食に招きたいとグシュター公爵からの使いがあつて、公爵邸に行くところだったのでですよ。ところが途中、父上からの使いがあつたので城へ戻つて来たら、当のグシュター公は城についてこの騒ぎ……」

アルクメーネがルナの銀色の髪をそつと手でなでながらその顔へのぞき込む。

「まあ、今日は緊急避難として無罪放免にしてあげます。おチビ」

「ありがとうございます！」

「でも……」

テセウスは親指をあとに当てると、ニヤリと笑つた。

「入れ知恵の犯人には、少しばかりお仕置きが必要だな」

ぶ厚い本と家庭教師に囲まれた勉強部屋で、クロトが大きなクシヤミに見舞われていた。

テセウスとアルクメーネが、ルナの部屋を後にして、カルザキア王の執務室に入ると、王の側近のシグニ大將が起立したままで静かに一礼をした。

豊かな白髪を肩のあたりまで伸ばした、もの静かなこの將軍は、一見学者肌に見えるが、剣をとればノストールの五本指にはいるほどの剣豪で、五十代後半とおもえぬほどの腕前をもっている。

ノストールの王子たちは皆、このシグニ將軍に剣術指南を受けており、武術の上での師匠であった。

シグニ將軍がいるのは問題ないのだが、ここにいるはずのカルザキア王の姿がなかった。

「父上より、至急城に戻るようにとの使いを受けましたが……」

いぶかしげに問う二人に、手で座るように促しテセウスたちがソファに座るのを待ってから、シグニは立ったまま話を始めた。

「陛下はテセウス殿下とアルクメーネ殿下を呼び戻されるように告げられて後、兵をともないシャンバリア村に向かわれました。現地を確認次第すぐ戻られるとのことですが、話の要点については、私からするようにとおおせつっております」

シグニ將軍の表情は平静そのものだったが、テセウスはいやな予感が高まって行くのを拭いきれなかった。

その不安感は、アンナたちが来てからおさまることがなく日を追うにしたがって高まるばかりだった。

テセウスがシグニにも席に着くように目で示すと、將軍は一礼をし、真向かいに腰を下ろしす。

そして、深く息を吸い込み、ため息をつくように吐き出した後、静かに告げた。

「一昨日、シャンバリアの村が何者かに襲われ、村人全員が惨殺されました」



「な……」

テセウスとアルクメーネは、シグニの言葉に息を呑んだ。

「何者かのしわざかはいまだ不明です。シャンバリアの村に少年たちを迎えに行つたはずの兵士らは、村へ行く途中の街道で殺されておりました。村を襲つた者は、その馬車を奪い、城からの使者と偽り村に入り込りこみ、村人を一カ所に集めたうえで殺戮におよんだようです」

「いつ……わかつたんだ？」

テセウスは信じられないといった表情で、たずねた。

「村の五歳になる男子を集める最終日でした。遅くとも昨日の夕刻には戻る予定となつておりましたが、兵が夜半を過ぎ、朝になつても戻らないことから、早駆けで調べに行かせたのです」

シグニの言葉は淡々としていたがそれがよけいに惨劇のひどさを物語つていて、二人の王子は血の気が引いていくのを感じる。

「その早駆けの兵が、シャンバリア村の隣村であるテルザ村付近で、服を血に染めた姿のままぼうぜんとして歩いている子供を見つけたので、声をかけたところ、村が襲われたことがわかつたのです。どうやら生きのびたのはその子供一人だけ。村には村人たちの死体が、逃げ惑う姿そのままに残っていたそうです。」

シグニの言葉を食い入るように聞いていた二人は、しばらくの間シヨックのあまり、次の言葉を告げることができないまま、瞳を閉じ、あるいは唇をかみしめていた。

「陛下は、ついさきほど兵士たちの死体発見の報告を聞かれると、お二人を陛下の名で呼び戻すように私に言われ、そのままシャンバリアの村に向かわれました。そこで……」

「では、わたしたちもすぐにシャンバリア村へ行く」

話しが終わらないうちに、席を立ちかけたテセウスを制して、シグニは隣の部屋にいる部下を呼んだ。

「カイ、部屋にほかの者を近づけぬように」

「はっ」

シグニの部下であるカイが一礼して部屋を出て行くと、將軍は二人の王子を交互に見つめた。

「実は、今回の出来事以外にも憂慮すべき出来事がございます。陛下にはまだ申し上げておりませんが、殿下がたのお耳には入れておく必要があるかと……。実は他国と内通している者がいるようなのです」

「どうということなんだ？」

テセウスは、王にさえ話していないことをなげ、自分たち王子にするのか、シグニの真意をはかりかねた。

「ルナ殿下の出生の秘密を探っている者がいると、亡きケーナ術士の弟子たちから知らせが入りました」

「なんだって？」

それまで、黙っていたアルクメーネが身を乗り出す。

「これは、例のナイアデスとダーナンに降りたという予言の時期に前後しております。もし、アル神の子が誕生しているという予言をわがノストールの民が耳にすれば、誰もがルナ様のことだと思ってしまう。たとえ、その御子を探すとしても、ルナ様の出生を探る必要はないはず。この時期にルナ様のことを探るといのが何か別の目的があるように思えて仕方ないのです」

その時、警鐘を強く打ち鳴らす甲高い鐘の音が響きわたった。

「シグニ將軍！」

將軍の言葉を遮るように、突然ドアが開いて、形相を変えたカイが飛び込んで来た。

「どうした？」

「山火事です。エーツ山脈のわがノストール沿いの山から、炎と煙があがっていると北の塔の見張り番から報告が！」

「ばかな！？」

カイの言葉に、その場の全員が部屋を飛び出し、エーツ山脈を望むことの出来る城の北端にある北の塔に向い走り出した。

石造りの大城塞として築かれたアルティナ城には、四方を常に見

張るために造られた象徴的な東西南北の四つの円塔が存在する。その四塔の他に大小様々な十数基の円塔がはりめぐらされた外壁でつながり城を防御している。

テセウスたちは、外郭の外壁の上層部分、胸壁を走りぬけ、北の塔に到着すると、らせん状の石階段を一気に駆け上がった。

外郭に向う途中で、勉強部屋から抜け出して来たクロトも合流する。

その塔には、既に数人も兵士たちがエーツ山脈を指さし大声で叫んでいた。

ノストールを守る自然の要塞として、人々から畏敬の念をもつてたたえられている山の麓。

いまノストールに近い比較のおだやかな斜傾の小さな山々のあちこちから、オレンジ色の光が山を侵食するように広がり始め、白や黒い煙が舞い上がり、青い空をくすぶらせていくのが遠目でも確認出来る。

見張りに立っていた兵士たちは、シグ二將軍とテセウスたち王子の姿を確認すると、敬礼をしながら報告した。

「昨夜は無風でした。今は乾燥期ではありませんので、野火は考えにくいと思われます。陛下がエーツ山脈ふもとに最も近い、シャンバリア村へ出立されるとの触れがありましたので、特に注意してエーツ山脈付近、およびノル・シュナイダー城を警戒しておりましたが、つい先程までそのような兆候は一切ありませんでした。それが、方角としてはシャンバリア村方向から山越えの道を中心とした場所で、十数力所から突然一度に火の手が上がったように見えました」

「断言はできないがシャンバリア村を襲った者らが、追っ手を防ぐために火をはなった可能性もある。このままでは、麓に山火事が広がり、さらに田畑や村にまで日が燃え移る危険がある。陛下の身も案じられる……騎馬隊、海兵隊の兵士たちを集め、全力で消火作業に当たらせる」

シグ二將軍の言葉のもと、テセウスたちはアルティナ城を出発し

た。  
エーツ山脈の麓からいく筋もの煙立ちのぼるシャンバリアの村に向って。

テセウスがシグニ將軍の騎馬部隊と共にポンプ式の消火台を馬車に備え付けて、シャンバリアの村にたどり着いたときは、既に何十人という村人たちが水を入れた桶を手に、エーツ山脈の消火にあたっている真つ最中だった。

カルザキア王の姿を探すと、火の広がり方が一望できるシャンバリア村の高台を拠点に、兵士や村人、駆けつけた近隣の人々を指揮して、消火にあたっていた。

「火の届いていない先の草を切り、堀を作れ！ 木を倒し、火が燃え広がるのを防ぐんだ！」

村から見上げる山の麓に点在し、広がり続ける炎は、なぜか山道もないような場所から出火しているようにも見える。

「陛下」

テセウスたちは、王の下に駆け寄った。

「遅くなりました。城では、アンナたちも降雨の祈禱を始めています」

「うむ。村の火はほとんど鎮火したが、麓の火は一刻も早く消さねばならん。今の火の勢いならば、まだ消し止められるやもしれん。これからすぐに火の勢いの激しい場所へ行く！ クロト、ダイキと共に走り、兵士等の走る道をつくらせる。」

三番目の王子の守護妖獣は風のように走る大きな黒馬であることからその力を發揮することを命じたのだ。

テセウスやアルクメーネに対しても具体的に指示を与え、命じる父王にテセウスやシグニ將軍、兵士たちはうなずくと、消火に向か

って散って行った。

しかし、その場を離れようとしたアルクメーネは、カルザキア王のそばで所在無げに立ち尽くしている、少年に目をとめ、立ち止まった。

「陛下、その子は？」

「シャンバリア村の生き残りだ。村での出来事を聞くために連れて来ていたんだが、それどころではなくなってしまった。すまんが、配置に着く前に安全な場所に連れていってくれ」

そう告げると、カルザキア王はポンプ台の部隊を自ら指揮して、火の粉を空に舞い上げている山の麓へ向かい進み始めた。

「シャンバリア村の、生き残り……この子が……」

アルクメーネは、子供の顔を見下ろした。体つきはルナと同じくらいだった。

「名前は？」

アルクメーネは、うつむいたままの栗色の髪の毛の少年をのぞき込むように見、その顔を見てなぜかハツとした。

少年は少しおびえた硬い表情で、一度ちらりとアルクメーネを見つめたが、すぐに視線を地面に落としてしまい、唇を堅く結んだまま何も答えようとはしなかった。

アルクメーネは、側近の兵士にその少年を馬車に乗せ、城へ連れて行くように命じながら、心臓の鼓動が不安に高まるのを感じずにはいられなかった。

（なぜ不安になる……？ なぜ……）

少年の瞳は、ノストールでも一般的な髪の色と同じ栗色だった。

だが、その瞳の奥から一瞬放たれた光の色は、確かに違ったような気がしたのだ。

消火作業が始まって数日後、シャンバリア村でたった一人だけ生き残ったという少年は、城の離れにある小部屋を与えられた。

山火事の消火がすみ、詳しい話が聞けるようになるまでは、侍女が看護につき心身ともに癒すようにとカルザギア王が命じたのだ。

城も町もそして近隣の村々も、多くの男たちが山火事の消火に昼夜交替制で駆り出される日々がいやおうなく続いた。

そんな中、消火活動の手伝いに参加することもできず、兄弟の中でたった一人だけ城の留守を言いつけられていた幼いルナは、その少年のうわさを耳にした。

(どんな子だろう)

興味をひかれ、ルナたちの居住部からは少し離れた中庭の向こう側にある、侍女たちが寝泊まりする棟にやってきたのだ。

少年がいると聞いた一階の小部屋をみつけると、ルナは周囲に人がいないのを確認して忍び寄った。

背伸びをしながら、そつと窓の枠に手をかけて部屋をのぞき込むと、ベッドの上にルナと同じくらいの子供の姿があった。

少年は、部屋の奥の寝台の上で仰向けになつたまま、ただ天井の一点だけをじつと見つめ続けていた。

(どうしたんだろ……)

声をかけよう思つて来たのだが、身じろぎひとつせず目を見開いている少年を覗いているうちに、何か来てはいけない場所に来たような気分に襲われていく。

そんな理由のわからない感情に戸惑い、立ち去ろうとルナが窓枠から手をはなしかけた時、少年の瞳だけが動き、窓の外にいるルナをみつめた。

「あ……」

ルナはあわててぎこちない笑顔をつくる。

少年は無表情のまま、ゆっくりと上半身を起し、ベッドから起き上がると、ルナのいる窓に近づいてきた。

「ごめんね。その……元気かなって……」

困ったように、言い訳をするルナを窓越しに見下ろしていた少年は、窓の取っ手に手をかけて扉を静かに開くと、感情のない声でつぶやいた。

「……見つけた」

「え？」

自分に向けられた冷たい栗色の瞳に、ルナは一瞬、背中を向けて逃げ出したくなる衝動に駆られる。

「なに？」

「僕の……返して」

「……」

少年の言葉に、ルナの体が後ろへ一歩下がろうとした時、少年の体が窓枠に上半身を乗り出してルナの左腕をきつく掴んだ。

「返せ！」

それは、動物のような低いうなり声のようにも聞こえた。

「返せ！ 返せ！ 返せ！」

「はなしてよ」

ルナが必死になって手を振りほどこうとするが、少年の手はゆるむどころか、徐々に強い力がくわえられていく。

「はなして……」

ルナが必死にもがいて、もう一方の手で引きはがそうとするが、びくともしない。

逆に体が、ぐいぐいと窓枠に引き寄せられていく。

「はなせよ！」

ルナの口から期せずして大声が放たれた。

少年の目が、意外そうに見開かれる。

「どうして……逃げようとするんだ？ 会いにきたんだろう？」

ルナの全身が総毛立った。

頭の中の暗闇の部分で、危険を知らせる信号が点滅した。

理由はわからなかった。だが、興味深そうにルナを見つめ続ける、無表情の中の妖しく輝く瞳に、何かが変わたと警戒を起こさせる。

「逃げる必要はないだろう。もっと、話をしようよ……」

声が、楽しそうに笑いかける。だが、無表情のままの顔がルナに不気味さをより強く感じさせる。

ルナはその問いかけには答えずに、少年をにらみつけ大声で叫んだ。

「いやだ！ はなせよ！」

「会いに来たんだろう？」

表情のない少年の口から、楽しくてしかたないといった笑い声がもれる。

「もういい！ いやだ！ 助けて！」

ルナの声が大声から悲鳴に変化した時、突然、大きな影があらわれ、二つの影を一瞬にして引き離れた。

その反動で、ルナの体が勢い余って後ろに倒れそうになるのを、影がすばやく背後に回ってささえる。

『ルナ様、おかげがございませんか？』

「リユーザ……」

ルナの背後には、日差しに透けて見える体をもった大鳳がいた。

猛禽類と酷似した大人ほどの大きさを持つ鋭い眼光の美しい鳥の姿をしたルナの守護妖獣リユーザだった。

守護妖獣とは王家の一人一人を護るための最強の護衛として従う妖精獣で、王直系の一員は誕生の時、占術士や魔道士たちからの《祝福》をうけ守護妖獣の主人となる。

どの妖精や妖獣が守護者となるかは、その主人の人格や魂によって様々であり、通常は主以外にはその姿を見せることはない。常にそばに従い、守り、主人の呼び出しとその危機に応じて出現をする。ルナの守護妖獣リユーザは、妖獣の中でもめずらしい透明な妖獣であるという話をアンナの一族から聞いたことがある。



だが、その能力はルナ自身にも、そしてリユーザ自身にもまだわかってはいない。

王家の守護妖獣の中でも、比較的ルナが良く知っているのは、すぐ上の兄三男クロトの守護妖獣ダイキで黒い馬の姿をしており、クロトの命令でよくルナを背中に乗せてくれた。

次兄アルクメーネの守護妖獣カイチは白い山羊の姿をしている。賢者のようになんでもよく知っていてルナに様々な話をしてくれる。

長兄であるテセウスの守護妖獣ザークスはめつたに姿を見せることはない。

「……帰る……」

少年は突然の守護妖獣の出現に驚いたのか、それ以上は何もせず、ただ走り去っていくルナの後ろ姿をじっと見つめていた。

ルナはその日から、二度と少年の部屋に近づこうとしなかった。けれど、あの時の少年の言葉がなぜか心に焼きつき、耳から放れなかった。

『……見つけた』

無表情な顔。

『僕の……返して』

焦点を結んでいない瞳の奥の妖しい輝き。

『どうして……逃げようとするの？ 会いに来たんだろっ？』

そして、大人びた、からうような笑い声。

恐怖心。

それは、ルナが初めて知った感覚だった。

いつも、必ずだれかに守られてきた。

両親や、兄たち。そしてリユーザにも。

だが、体の芯から冷たくなっていくような感覚から、自分の心を守るにはどうしたらいいのか、ルナにはわからなかった。

頼りになる大好きな三人の兄たちは、いま山火事の消火に追われていて、とても話ができる様子ではなかった。

ルナが相談をすれば兄たちは時間を割いてでもつきあってくれ、ことはわかっていた。

だが、自分のわがままで邪魔をしてはいけないときがあることを、ルナは学んでいた。

ルナはその夜からひどい悪夢にうなされた。

返せ……僕に返すんだ。ここは……

黒い闇の中で、見えない影がルナを崖から海へ突き落とそうと、じりじりと近づいてくる。

それは、子供の影。

(誰? 誰なの?)

影の巨大な力に抵抗できず、徐々に後ずさるしかないルナは、必死になって目の前のその人影の顔を見ようとする。

近づく影。

ふいに深く悲しげな瞳をした少年の、感情のない顔が浮かぶ。

しかし、それは一瞬のことで、すぐにすべては闇に溶け込んで影の動きをとらえることはできない。

返せ……僕の……を……奪った……。

「違う。僕は……僕は……まって……」

返せ……そして……お前なんか死んでしまえばいいんだ……

「待って!」

死ね……!

見えない手が、ルナを思い切り突き飛ばした。

ルナの体が宙に投げ出され、闇の中に落下していく。

「助けて　！！」

声にならない悲鳴と共に、ルナは目を覚ました。

ルナは、目の前で自分を見下ろしている母ラマイネ王妃の心配そうな顔を見ても、何が起こったのかわからないままキョロキョロと視線をさまよわせていた。

「ルナ様、大丈夫ですか？」

ラマイネ王妃が背中をそっと支えながら、ルナの上半身を抱き起こす。

ぼうつとした表情のまま、全身に汗をびっしょりとかき、ハアハアと荒い息をしているベッドの上のルナは、まだ夢と現実の境界線がついていないようだった。

それでも時間がたつにつれて、自分が夢の中にいたこと、母の寝室で寝ていたことを思い出した。

『どうしました？　こわい夢を見たのですか？』

ラマイネ王妃の横で、王妃の守護妖獣ティアドッグのネフタンが静かに問いかける。

ルナは母とネフタンを交互に見つめると、おびえたような瞳でうなずいた。

ティアドッグは真っ白な長い体毛をもった賢くおとなしい守護妖獣で、特にネフタンは言葉の話せなくなったラマイネ王妃のかわりに王妃の思考を読み取り、必要な言葉だけを他者に伝える役目を果たしていた。

もちろん、それを行うのは王妃の意志が決めることであり、ネフタン自身が王妃以外の者に姿を見せることは他の守護妖獣同様、親族以外には稀なことなのだ。

ルナは、シャンバリア村の少年と出会ってからこの三日間、ひどい悪夢にうなされ続けていた。そして四日目の今日は、一人で眠ることさえこわくなり、ラマイネ王妃のベッドにもぐりこんだのだ。

「ルナ……ここにいちゃいけないの？」

「？」

唐突な言葉に、ラマイネ王妃は首をかしげた。

「……夢でね……死ねって……言うの」

ルナの緑色の大きな瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。不安に揺れる瞳は、助けを求めるように母だけを見つめる。

王妃の瞳が驚いたように見開かれ、心配そうにルナをのぞき込む。『誰が、そんなひどいことを？』

「え……」

ルナは、言いかけて唇をかんだまま、うつむいた。

なぜだかルナは、あの少年だと言えなかった。

あの出来事の後、ルナは侍女頭のセレナに少年のことを聞いたのだった。

するとセレナはため息をつきながら、ルナに言ったのだ。

『あの少年は家族も村の人々や友達が殺されてしまい、たった一人ぼっちになってしまったかわいそうな子供なのです。きっと今は周りの誰も信じられないくらい心が深く傷ついているようです。あんな暗い目をした子供を見たことはありません』と。

それを聞いてしまって以来、ルナは少年のことを悪く言うてはいけないような気がしてしまったのだ。

ルナが黙りこんでしまったので、ラマイネ王妃はその幼い体を優しく抱き締めて頬にキスをした。

「母上……」

あなたが眠るまで、こうしていてあげますよ。

ネフタンが伝えなくても、母の言葉はルナの震える心に、あたたかなスープのように染み込み、痛みをやわらげていく。

だが、そのやわらかな胸に顔をうずめ、しがみつきながらも、ルナは見えない視線がじつと自分を見つめているような気がしてならなかった。



山火事は三十七日かかって、完全に消し止められた。

ノストール中の民と軍による懸命な消火作業と、火の発生から二十日目に小雨が降り出したのが功を奏したのだ。これには国中が、アンナの一族が眠りを断つように行なった降雨の祈祷のおかげだとアンナたちを讃えた。

「今日は、ゆっくりと家に帰って眠ることができるな」

夜明けを目前に、兵士たちは山を見上げながらススだらけの顔に笑顔を浮かべ、互いの健闘をたたえあっていた。

それは、国中の誰もが安堵の息をつける一日の始まりとなるはずだった。

だが。

「なんだ……あれは……」

港の兵士たちは、愕然とした面持ちで朝焼けの空の下、立ち尽くした。

ノストールに面する湾の沖、ニュウズ海洋の水平線に、一夜にして訪れた無数の黒い船影に。

「母上！ 母上！」

ラマイネ妃の寝所に続く私室のドアをテセウスは拳でたたきつけた。

鍵がかかっているドアの向こう側には誰もいないかのように静まり返ったままだ。

「兄上」

ドアをたたくテセウスの背中に向かってアルクメーネが声をかける。

「他の部屋には母上の姿はありません。それから理由はわかりませんが、このところルナは毎晩のように母上の部屋に来て一緒に寝ていたとセレナが言ってます。ルナの姿もどこにも見当たりません。きつと母上と一緒にだと思います」

「母上！ ルナ！」

ドアにはカギがかかっていて、何度呼んでもだれも出てくる気配がなかった。

「だめだ。出て来ない。侍女達はみんな外にいて鍵がかかったことすら知らないというんだ。こんなことは初めてだ」

テセウスの横顔に、汗がうつすらとにじむ。

顔を見合わせる二人の耳には、静まり返った王妃の部屋の様子とは裏腹に、ざわめきかえる城内外の喧騒が聞こえて来る。

「すべての兵をたたき起こして、城と港に集め、上陸だけは絶対に阻止するんだ！」

「海湾と各河口部の防御砦からの情報はどうなっている！」

「第五、第十一部隊を城の強化にまわせ！」

「火矢部隊は海上に出ました！」

朝焼けのニューズ海洋に出現した無数の船影。それは西の大国ダニンの大艦隊の姿だった。

まるで、山火事の消火作業で疲労こんぱいしているノストールの背後に忍び寄り、気配もなく咽に突きつけられた刃に似ていた。

ノストールのアルティナ城は、海を背にして立っており、海上からの攻撃に対し最大級の防壁となる造りとなっていた。

万が一にも城が陥落し、海上が封鎖されれば、逃げる陸路はエーツ山脈を越えるほかない。

過去の長きにわたり小国であるノストールが平和と繁栄を続けてくることができた理由の一つには、この切り立った崖が難攻不落の防壁であり、岩を削り取るほどの荒れやすい海が存在があったから

だ。

この二つの自然の脅威を相手に戦を挑めば、多大なる犠牲を出すことは目に見えている。また、そこまでして陥落させる意味を持つほどの大国でもない、辺境の土地だったからともいえる。

加えて、海からの侵略には妨げとなる海賊の存在もあつた。

ノストールのニューズ海洋の外洋には、海賊がすみかとしている孤島が無数にある。

ノストールはその海賊たちと、さまざまな形で取引をし、協力関係を結んでいたため他国からの敵襲に関してはいち早く情報を得られた、奇襲を受けることはあり得なかつたのだ。

だが、それも昔の話だつた。

ダーナンとナイアデス、ハリアの三大国が微妙な均衡を保ち、大きな戦さがなくなつたように信じられてからは、侵略行為は極減し海賊たちとの関係も薄れ、忘れられていったのが現状だつた。

『城の中には王妃もルナ様の姿も見えませんが』

アルクメーネのそばを離れていた守護妖精獣カイチが戻つて来て答えた。

「嫌な予感がする」

テセウスはそう口にする、厳しい瞳で真つすぐにアルクメーネを見つめる。

「ルナは今までどんな時でも母上の寢所で眠ることはなかつたし、そんなわがママを言ったこともなかつた。僕たちが城を留守にしていた火事の間になにかあつたのかもしれない……。アルクメーネ、僕はこれから父上の後を追って迎撃に備えなくてはいけない。だから、お前は引き続き母上とルナを探してくれ」

「わかりました。兄上もしつかり」

「わかつた」

二人は目でうなずき合うと、その場を離れた。



その頃、ラウ王家三番目の王子クロトはアンナの一族をノストールから脱出させるべく一族の大長老・サーザキアに事態の様子を伝えていた。

「わかりました。私どもは自力で国を離れますゆえ、お氣をしまいせんように」

サーザキアは、静かな口調で幼い王子に一礼した。

「すまない。山火事の降雨の祈祷も無事終わり、本当なら労をねぎらい、ゆっくり休んでもらったうえで、国境まで見送るのが礼儀だけれど、父上も兄上も港で敵を迎撃する準備に追われていて、挨拶をする時間のゆとりがないんだ。ゆるしてくれ」

アンナの一族は、戦さの中には身を置かないという決まりごとがあった。常に国と国の争いことからは一線を画して、存在する一族なのだ。

「当然の事態です。今回のこと 先読み できなかったことこそ、我らが落ち度、お許しくだされ」

クロトは、首を横に振った。

アンナたちは、降雨の祈祷に全身全霊を捧げてきた。サーザキアを筆頭に眠りを絶ち、水以外を口にせず、ひたすら降雨を招き寄せ、降らし続ける祈りに集中していたのだ。ほかの 先読み をするよくな余裕はなかったことはクロトも報告を受けて、よく知っている。すべてのアンナの顔に疲労の色が激しい。このままエーツ山脈を越してくれと告げること事態が感謝すべき人々に言う言葉ではないのだ。ひどい仕打ちをしていることを幼いクロトにも充分理解できた。

何度も頭を下げながら目に涙が滲んで来るのが、また悔しかった。出立するアンナの一族を、城門の前まで見送りに出たクロトは、

サーザキアの大きく暖かな手と握手をかわした。

「クロト殿下」

サーザキアは、大きな体を折る様にしてクロトの目を、顔をのぞきこみ、見つめながら、低くささやくように言葉を発した。

「われらがアンナの一族はここを離れますが、今後ともラウ王家がお呼びのときにはいつでも足を運びますゆえ、それをお忘れなく。われらを哀れむことはございません。殿下方を残して去ることのほうが心残りではありますが、これも掟。双方の理ことわりにございます。

「

「ありがとうございます」

「そして、ノストールには、アル神の御加護がございます、そのことを重々お忘れなきよう」

「わかっている」

サーザキアが馬車に乗り込むと、アンナの一族の人々はそれぞれの馬車や馬に乗り込んでいった。

クロトは、その最後の馬車から自分を見つめる瞳があることに気がつき、振り返ると笑顔をみせて声をかけた。

「エディ、また会おうね」

同い年の少女は、クロトの瞳をじっと見つめたまま、かすかにうなずくと、胸元にかけていた小さな石がついた首飾りはずして、クロトに手渡した。

「これをルナ様にお渡ししてください」

そこには、ルナの瞳と同じ翠色をした小指ほどの大きさの石がついていた。

「ありがとうございます。ちゃんと渡すから。エディも元気で」

エディスが「はい」と小声で返事をするのとほぼ同時に、馬車は動き出した。

「また、あの湖にみんなで行こうな」

クロトが独り言のようにつぶやく。が、エディスはまるでその声が聞こえたように、窓から顔を出してクロトに手を振った。

「絶対に……また、会おう」  
クロトとエディスは、互いの姿が見えなくなるまで、その姿を見守り続けていた。

少年は、その日早朝から、海の方角を見つめていた。  
その部屋の窓から、海は見えない。

だが、明け方から騒然となりはじめた城の様子に気づいたのか、少年はベッドから目を覚まして起き上がるとそのままじっと、海の方角を見つめていた。

少年は、服のボタンを外して、左胸に浮き上がる三日月の形をしたアザにそつと右手をあてた。

「……僕が、必要になる」  
そばでこの声を聞くものがあれば、感情のない言葉とは裏腹に、揺るぎない自信が満ちていることに気づいたかもしれない。

「ここは……僕の、国だ……」  
少年の脳裏に、数日前に訪れた自分と同一年頃の、王子のおびえた表情が浮かんだ。

口元に笑みが浮かぶ。

「さよなら……。もう、いらないよ……」

最後の言葉をつぶやいたとき、

「さようですとも」

別の声が部屋の中から答えた。

「誰？」

静かに少年は振り返った。

誰もいないはずの部屋に、髪も髭も白くなった体格のよい男の姿があった。

「私はグシュター公爵というものにございます。さる方からあなた

さまの存在を知らされた者です」

すでに部屋の中央に入り込み、立ったまま、軽く頭を下げて初対面の挨拶をすると、グシュター公爵は少年に近づいた。

そして、その胸のアザを見つけると、ゆっくりとほほ笑んだ。

「時が満ちました」

「そう?」

少年は他人事のように応える。

「あなたさまの力が必要になります」

孫ほど年の離れた子供に、グシュター公爵は膝を折り深々と頭を下げた。

「我らはあなたをお待ちしておりました。どうか私とともにおいで下さい」

少年は、人形のような瞳でその老人を長い間、見つめていた。その沈黙がどのくらい続いたのか、やがて少年は口を開いた。

「《祝福》を」

グシュター公爵の瞳に笑みが光った。

「あなたさまの、新たなるお名前……で、ございますな。すべての用意はととのつてございます」

グシュター公爵は、自分が入って来た開け放したままのドアの外に向かって呼びかけた。

「メイベル」

グシュター公爵がその名を呼ぶと、一人の女性がドアの外から現れた。

頭から全身まで、青色の薄い布とフードに覆われて、わずかに見えるのは、白い肌と紫色の瞳だけだった。

「メイベル・ソル・アンナと申します」

落ち着いた美しい声が響き、メイベルは両手を胸の前で交差させるとゆっくりと両膝を床につけ、腰をおって少年に頭を下げた。

「このお方に《祝福》を」

グシュターの言葉に、メイベルはさらに頭を低くすると、ささや

くように、だが、はつきりとした声で《祝福》を告げた。

「これからは、『アウシュダール』とお名乗り下さい」

少年は、新たな自分の名をゆっくりとつぶやいた。

「アウシュダール」

テセウスが海岸防御を担うイスト港に馬で駆けつけると、父カルザキア王は、港湾部の防御砦の一角で海軍の各將軍たちに指示を出しているところだった。

「陛下」

テセウスが大声で呼びかけながら、馬から飛び降り將軍達の間へ歩み寄る。

その姿な気がつくと、シグニ以外の將軍らは礼儀正しく一礼をして、各々の持ち場へと散って行った。

母ラマイネ妃のこと、ルナのことを話さなければと思っていたのだが、現場は張り詰め、異様な緊張感に充ち、それを口に出る空気がどこにもなかった。

兵士達の声、馬のいななき、武器を運ぶ巨大な荷車の数々。甲冑や武具を身に着けたいくつもの部隊が騎馬、歩兵を引き連れて移動するさまはノストールが戦場となることを現実のものとし、テセウスは全身が総毛立つのを感じた。

「約三十隻だ」

緊迫した雰囲気の中、カルザキア王は海をじっと見つめたまま、テセウスに応じた。

「そんなに……」

黒い大艦隊は外海を塞ぐように不気味に存在し、こちらをにらんでいるようだ。

「ダーナンのロディ・ザインスは、三十もの大艦隊を繰り出して来た。こちらの予想をはるかに上回る行動力だ。気がついたときには海の出口は塞がれていたことになる」

テセウスは、迎撃のための準備に走り回る兵士たちを見つめながら、唇をかんだ。

將軍をはじめ、その一つ一つの表情は、緊張感で張り詰め、戦意

高揚に満ちてはいるものの、心身ともに連日の消火作業で疲れ果てているはずだ。

「この小さな国にあれほどの大群で攻城戦を仕掛けてくるということは、ダーナンが本気だということだ」

「海から攻めることは不可能といわれるこのアルティナ城と知っていないがら？」

テセウスは海に面し、断崖絶壁上に二重、三重の城壁に守られ築かれているアルティナ城を見上げる。

遠い先祖の時代に築かれた、小国には似合わないほどの重厚な外観と城壁を持つ堅固な石造りの城塞。

海からの攻撃には完璧な防御を誇るとテセウスは幼い頃から聞かされてきた。

「長期戦も辞さず……、ということですよ」

カルザギア王の隣にいたシグ二将軍がテセウスを見ながら、厳しい表情で言葉を続ける。

「壊滅状態に追い込まれるまで戦うか、さもなければ開城してシルク・トトウ神の転身人を差し出せ、という二者択一がダーナンの要求です。返事が明朝までになれば、即時開戦する、との使者がきました」

テセウスはカルザギア王を見つめた。

「父上、援軍を頼めないのですか？ エルナン公国は」

その問いにカルザギア王は、低い声で答える。

「時間がない。たとえ時間があったとしても、頼めば借りができる。ナイアデスに援軍を求めれば、見返りはダーナンと同じく、シルク・トトウ神の転身人……。もしくは、五歳の男児すべてを差し出さなくてはならん。仮にどこの国に援軍を頼んでも、シルク・トトウ神がノストールに生まれ落ちたという予言を耳にすれば、結果は同じことだ。手に入れたがる」

「しかし……」

テセウスは、水平線に浮かぶ艦隊をにらみつけながら、拳を握り

しめた。

カルザキア王は続けた。

「戦って……たとえ万が一持ちこたえることが出来たとしても、その国力が落ちたのを待って、ほかの国が次々にわが国を攻めてくるだろう。ナイアデスも、ハリアも……シルク・トトウ神を得るまでわが国は持ちこたえられん」

「……」

テセウスは言葉を失った。

それは、ノストールにある未来が孤立化、そして滅亡を意味する言葉だったからだ。

シルク・トトウ神は破壊神でございます。

サーザキアの言葉が脳裏に響き渡る。

（たとえ開城したとして、ダーナンはノストールをそのままにしておくるだろうか？）

テセウスは自問自答した。

シルク・トトウ神を得た者が、次に考えることは……。

『霸道』。

それは、ノストール一国の滅亡どころではすまない予感がたかまる。

「父上！シルク・トトウ神の転身人を誰にも渡してはなりません！そんなことをすれば……」

テセウスは、カルザキア王に向き直ると訴えるように叫んだ。

「わかっている」

「え……?!」

王は、テセウスの考えていることなど見通しているように落ち着いた声で答える。

「ダーナンの帝王ロディ・ザーネスは、内乱後の即位後も、次々と近隣諸国と戦さを始め勝利を収めている。最近ではハリア国にも国境線で、もめごとを起こしていると聞く。戦いと勇気を司る神

シルク・トトウ神を得れば、その勢いはいや増し、さらに他国への



脅威となる。征服者に翼を与えるようなことは、避けねばならん……。だが……。どちらにしろ、わが国自身が転身人を見つけ出せなでいる今、選ぶ道は限られている」

王の顔は苦渋に満ちていた。

しかも、たとえシルク・トトウ神を見つけたとしても、ノストールに待っているのは不吉な予言への道。

三人が押し黙ったとき、遠くから馬蹄の響きが近づいてきた。

振り返えると、伝令の兵士が馬から降りて、駆けて来るところだった。

「陛下、グシュター公爵より至急の手紙を預かってまいりました」

「グシュター公爵から？」

シグニ将軍が伝令から手紙を受け取ると、王に渡した。

渡された書面を見つめていたカルザキア王は、長くその文字をにらみつけた後、無言のままきびすを返した。

「陛下？」

「すぐに城へ戻る」

驚くテセウスに王は、厳しい口調で続けた。

「シルク・トトウ神の転身人が見つかったと、グシュターが言ってきた」

テセウスと、シグニ将軍はその言葉に、思わず顔を見合わせた。

(これは朗報だろうか？ それとも……)

互いの顔に浮かんでいたのは、喜びとは程遠いものだった。

海上のダーナンの軍艦を一度見据えたあと、テセウスたちは馬に騎乗すると、先を行くカルザキア王のあとを追って走りだした。

ルナは、ラマイネ王妃とともに、王妃のベッドの中で眠っていた。村人が惨殺された村から、ただ一人だけ生き残り城に預けられている少年と会って以来、夢でうなされる日々が続く、母の腕の中でなくては眠ることができなくなっていったからだ。

しかも、日頃城中を活発に動き回るルナが、一日の大半をラマイネ王妃の部屋で過ごすほどふさぎ込むようになっていた。

母と長い時間過ごすことで、ルナは最近になってやっと安心して眠りにつくようになっていた。

だが、その日は朝からなにかが違っていた。

ルナが目覚めてしばらくたつというのに、ラマイネ王妃がいつまでも眠りから覚める気配がないのだ。

たとえ真夜中にルナが目を覚まして、その気配で王妃もまたすぐに眠りから覚め、ルナを気づかせてくれた。

その王妃が、よほど深い眠りにしているのか、ルナの不安げに呼ぶ声にも、朝の日射しが部屋のすみずみを満たす時刻になっても、まったく目覚める気配がないのだ。

さらに、ルナを不安にさせていることがあった。

王妃の寝室の隣の部屋には常に侍女たちが待機している。

ふだんであれば、ラマイネ王妃の着替えや支度をおこなうために、定刻になると侍女たちがノックの音と共に姿を現すのだ。

しかし、どれほど待っても誰かが現れる気配はおろか、物音一つ聞こえてはこない。

異様なほどの静けさが部屋を包みこんでいた。

「母上……」

ルナは、我慢しきれずに悲鳴のような大声を上げて、ラマイネ王妃の体を揺さぶった。

「母上、起きて……、母上……？」

ラマイネ王妃の穏やかな寝顔と静かな寝息に異常は認められない。だが、ルナの顔はしだいにこわばっていく。

「セレナを呼んで来るね」

ルナは、ベッドの上から飛び降りると、ドアに向かって飛び出した。侍女頭であるセレナならば、この奇妙な事態をなんとかしてくれるような気がしたのだ、

勢い込んで扉の金の取っ手をつかもうとした時、急にドアが開いた。

「セレナ？」

ルナは助けを求めるように、ドアを開けた人物を見上げた。

だが、そこにいたのはセレナでも、王妃付きの侍女たちでもなかった。

青色の薄い布とフードで、頭から足元まで全身を覆い隠した女性  
が、ベールの下からほほ笑みながらルナを見下ろしていたのだ。

「誰？」

ルナの顔に警戒の色が浮かんだ。

王妃の私室は城の中でも奥に位置し、許された者しか立ち入ることとはできないように、その通路には見張りの兵士も配置されている。王妃に謁見を求めるならば、侍女が取り次ぎ王妃の許可を仰ぐのがしきたりだ。

見知らぬ人物が王妃の寝所に無断で入って来ることはあってはならない。

しかも、王妃はまだ目覚めていない。

「ルナ殿下ですね」

女は落ち着いた声でそう言いながら部屋の中に歩を進めると、後ろ手でドアを閉めた。

ルナは、その動きを注意深く見つめる。

「わたしはメイベル・ソル・アンナというものです」

「アンナ……？」

ルナの心から一瞬、警戒心がとけそうになる。

それは、アンナの一族に対する絶対的な信頼ゆえであった。

確かに、装束はアンナの一族のものであり、口元を隠しているベールとフードのわずかにあいた目元の部分からのぞくメイベルの瞳は、アンナの一族に多く見られる紫色の瞳をしていた。

「母上に……御用……？」

だが……ルナは、メイベルを見た記憶がない。

それ以前に、アンナの一族であっても、王妃の寝所に無断で訪れることは許されていない。

その疑念が、とつさにラマイネ王妃の様子が変わっていると告げることを、ためらわせる。

「いいえ、ルナ殿下に御用があつてまいりましたの」

メイベルは妖しくほほ笑むと、天蓋付きのベッドの中で眠り続ける王妃を横目でかいま見た。

「そのために王妃様には、お休みになっていただきました。何の危害も与えませんので、ご心配なく」

「……用つて？」

危害　という言葉が、ルナの心に再び警戒心呼び起こさせた。

(本当に……アンナの一族……?)

疑問はふくらみ続ける。

「わたしの用は、ルナ殿下に、今日限りこのラウ王家の王子をやめていただくことですわ」

女の口から飛び出したのは、ルナの想像もしていない言葉だった。メイベルが何を言っているのか、わからないまま、ルナはその紫色の瞳をただ見つめていた。

「もともと、あなたは王妃の子供ではないのでしょうか。拾われ子のくせに、大きな顔して、王子の待遇に甘んじているのは、どうなのかしら」

メイベルの口から辛辣な言葉が、次々と飛び出して来る。

「まだ小さなあなたにこんな話をするのは酷だと思うわ。坊やは何

も知らないようだし……。でもね、あなたは、カルザキア王とラマイン王妃の本当の子供じゃないのよ」

ルナは、突然の来訪者の無礼な言葉が終わらないうちに叫んでいた。

城の中で、両親や兄たち以外に、王子であるルナにこのような態度をとって許される人間は存在していないはずだった。

「出ていけ！ 母上の部屋から出ていけ！」

ルナは、メイベルをにらみつけた。

「ルナは父上と母上の子供だ。嘘つき！ 嘘つきはいけないんだ！ 悪い人だ！ 出て行け！」

毅然と言い放ちながらも、見知らぬ人間から突然、突きつけられた言葉に、ルナの心は激しく震えていた。

「そう？ なら、教えてちょうだい。あなたは女の子なのに……。本当なら王女様なのに、王子として育てられたのはどうしてなの？ わたしは知っているのよ……」

女の言葉はまるでお伽噺を読むようにやさしく、だが冷淡さを秘めて続く。

「あなたが、父と呼ぶカルザキア王は、五年前にある予言の成就を恐れて四番目の王子を殺してしまったの。そして、それを隠すためにまだ生まれてまもない子供をどこかから拾ってきて、育てたのよ」

ルナは、メイベルの声を聞くまいと目を閉じ、耳をふさぐ。

「だからルナ、あなたはここにはいけない人間なの」

メイベルは、左手を城の外に向けて指さした。

「ラウ王家以外の人間は、ここから出ていってもらうわ」

このとき、王妃の部屋の外では、兄のテセウスがドアを激しくたたきつけていた。

だが、メイベルの張った結界が、すべての空間からこの部屋だけを別の空間へ切り離していたため、部屋の異変は守護妖精たちさえ知ることができなかつたのだ。

ルナは、目の前に立つメイベルのもとから後ずさると、いきおい

身をひるがえして、ベッドに駆け寄り飛び乗ると、眠り続けるラマイン王妃の体に覆いかぶさって叫んだ。

「そんなの嘘だ。ルナは母上と父上の子供だ。母上は、ルナの母上だ！ ルナは悪いことしてない。出て行け！ おまえなんて、出て行け！」

ルナの緑色の瞳にじわりと涙がにじむ。

今のルナに、メイベルの言葉が真実か否かは問題ではなかった。

そこにあるのは、ただ、どうして自分がこんなことを言われなければならぬのかという、言いようのない怒りと、見知らぬ他人と対峙している恐怖感だけだった。

自分を見下すように見つめる女の視線にさらされながら、ルナの小さな心は、不安で今にも押しつぶされてしまいそうだった。

「坊や……お嬢ちゃんと呼んだほうがいいのかしら……？ そりゃあ、すぐに信じられないでしょう。でもどんなに信じたくなくても、真実はひとつなのよ」

その言葉と同時に、ルナのからだは背中から、突然後ろに引き上げられた。

「?!」

みえない巨大な力が、徐々に、そして確実に、ベッドの上のルナを持ち上げるように、ラマイン王妃の体から引きはがしはじめたのだ。

「いやだあ！ 助けて！ リューザ、助けて！ リューザ！」

だがどうしたのか、その声に応えるべき守護妖獣はあらわれない。

「さあ！ 出て来なさいルナ王子の守護妖獣！」

メイベルは声高に叫んだ。

ルナの体に危害を加えるものがあれば、守護妖獣は現れる。

メイベルはそれも熟知しているようだった。

だが、ルナがどれほど、助けを求めようと、守護妖獣リューザは姿を見せない。

「ちっ」

メイベルが短く舌打ちをする。

守護妖獣を呼んでも助けに現れないという初めての出来事に、ルナは戸惑いと衝撃に襲われながら、それでも必死にラマイネ王妃にしがみつこうと抵抗する。

けれど、自分の気持ちとは反対に、体からは徐々に力が失われていく。

あらがうルナの体は、ラマイネ王妃から引き離されると、ベッドから転がり落ち、メイベルの足元へと向って毛の長い絨毯の上をズルズルと引きずられていく。

「助けて！ 助けて、リニューザ！ 母上！ 兄上！ 父上 っ！」

ルナの叫び声は泣き叫ぶ悲鳴になった。

だが、ルナを助けてくれる存在は現れない。

「なかなか頭のいい守護妖獣のようね。わたしがなにを考えているのか、まるで見抜いているようね」

自嘲ぎみにメイベルはつぶやいた。

しかし泣き叫ぶルナの耳に、メイベルの言葉は耳にとどかない。

「それじゃ」

メイベルはいやがるルナを抱き上げると、ほほ笑んだ。

「いやでも、出て来たくなるようにしてあげるわ」

ルナは身体を縄で拘束され目隠しにさるぐつわをされたまま、ひと目につかないように、馬車にのせられ城から運び出された。

その間、いくら心の中でリユーザやラマイネ王妃の守護妖獣ネフタン、兄たちの守護妖獣に助けを呼びかけても、答えるものは誰もいなかった。

長い間、暗く冷たい馬車の中、古びた木箱の中に閉じ込められ、ほかの荷物と共にゆられ続け、泣き叫ぶ気力もなくなったころ、蹄の音が止んだ。

「さあ、目隠しをとってあげるわね」

メイベルのやさしげな声が、箱の蓋が開くのと同時に頭上からささやきかけてくる。

暗い馬車から引きずり下ろされ、体のいましめをすべて解かれたルナが最初に目にしたのは、海だった。

潮風がルナの額にかかった銀色の前髪を吹き上げる。

メイベルがルナを連れて来たのは、港を一望することのできる、海に突き出した入江の岸壁だった。

ルナは、思わず目で城のある場所を探した。

しかし、石造りの要塞城として堅固な姿を誇るアルティナ城の姿は四方を見渡しても、どこにも見ることはできなかった。

しかも振り返れば、自分の体は海を背にしている。

けわしく切り立った崖の先端に寝ころがされていたルナは、メイベルに両肩を痛くなるほど締め付けられながら、無理やり立ちあがらされた。

「わたしはね、あなたの守護妖獣がほしいの」

メイベルはルナの瞳をのぞき込むように背をかがめると、静かに頼みごとをするように、そして脅すようにささやいた。

「そうね…守護妖獣さえ渡してくれれば、あなたの生命を助けて上



「でもいいわ」

「リユーザは……あげるとか、できない」

ルナは、涙をポロポロとこぼしながら、メイベルをにらみ返した。「それは、アル神が決めるって、兄上が言ったんだから……。アル神が、ノストールのみんなを守るように……。神のお使いだ……。ルナにリユーザがいるのは……。アル神からお願ひされたんだもん。父上と母上の子供だから……。だから、リユーザは誰にもあげられない……」

泣きじゃくりながら訴えるルナを、メイベルはつまらなさそうに見下ろしながら、顔を隠していたフードとベールを後ろにとりはらった。

そこには、あごのラインに沿ってきれいな切り揃えられた黒髪と、猫の瞳を思わせるような切れ上がった大きな紫色の瞳があった。

ルナの名付け親であるアンナの一族の少女、エディスと同じ紫色の瞳と黒い髪。

メイベルは、アンナの一族の人間だ。ルナは改めて確信した。

その顔立ちの少しずつが、自分の知っているアンナの人々とよく似ているのだ。

しかし、このときのルナはアンナの一族がすでに城を離れて旅立ったことを知らない。

「いいわ。坊やがだめだというなら、奪い取るまで」

メイベルは、帯のあいだに挟んでいた短刀をさりげなく鞘ごと抜き出し、ゆっくりとルナの眼前に突き出した。

そして柄を握り締めると、色とりどりの小さな宝石で装飾された鞘から、剣をゆっくりと引き抜いていく。

陽の光が刃に反射して、ルナの瞳を射る。

「どうして、リユーザがほしいの？」

ルナは、まぶしげな表情で光から目をかばおうと片手を顔の前にかかげながら、メイベルに聞く。

だが、問いかけながらも、ルナの頭の中は混乱していた。

アンナの一族は、ノストールを守るために様々な予言をしてくれる存在だった。

ルナや、そして兄たちの名付け親もアンナである。

なぜそのアンナの一族のメイベルが、こんなことをするのだろうか……と。

「坊やに話してもわからないだろうけどね」

メイベルは、涙で顔を濡らして恐怖にただただ震えている無力なルナを見ながら、クスリと笑った。

「もうすぐ坊やの代わりに、アル神の御子がラウ王家の王子として戻ってこられるの。だから、もうあなたはここに必要はない、というわけ。ただ、彼があなたの守護妖獣が気に入ったらしくくてね。どうしても欲しいとおっしゃるから、アル神の息子にお返しして差し上げようと思ったのよ。アル神から遣わされた守護妖獣なら、アル神の御子に返すのは当然でしょう？」

メイベルが一步前に出る。

右手に握られた剣が、ルナに向かって突き出される。

ルナは、後ずさった。

「アル神の……みこ？」

「そう、このノストールを救うお方よ」

返せ……僕の……を奪った……！

ふいに、なぜかあの少年の顔と声がルナの頭の中に蘇った。

シャンバリアの村で生き残ったという少年。

あの部屋の窓で、そして悪夢の中で、ルナを責める少年の声。

「違う……ルナは……」

ルナは、思い出した。

ここは、この場所は……そして、この状況は、何度となく悪夢の中で繰り返し返された、あの場面そのままではないのか、と。

夢で幾度となく追い込まれたその場所に、自分が今いる……。

お前なんか……死んでしまえばいい。

ルナの脳裏に、暗闇の中へ突き落とされる自分の姿がよみがえる。

「待つて！」

ルナは叫んだ。

「母上と父上と兄上に会いたい……！！ ルナは、なんのことかわからないよ……知らない！」

たとえ、アル神の子が現れたとしても、父王なら、そして兄たちならばこの恐怖から、自分を助けしてくれるとルナは信じて叫んだ。

「残念だわ……」

ルナの言葉など、聞こえていないように、メイベルはさらに一歩前へ出る。

「坊やは素直に守護妖獣を渡してくれなさそうだし、その守護妖獣も出て来たがらない。残念だけど、これからここでゆっくりと、守護妖獣が出て来なくなるまでいたぶってあげる」

ルナの足が、メイベルから一歩後ずさる。

メイベルは、ルナの緑色の瞳を直視したままどこへともなく呼びかけた。

「出て来なさい！ ルナ王子の守護妖獣！ お前が今すぐこの場に姿を現すなら、お前の主人を傷つけるをやめてあげてもいいのよ！」

長い静寂がメイベルとルナの上に訪れた。

だが、守護妖獣リユーザが現れる気配はない。

メイベルは短く舌打ちをすると、つぶやいた。

「守護妖獣が主人を見殺しにするなんてね。自分の主人が王家と関係のない捨て子と知って守護妖獣も見捨てたのかもよ」

紫色の瞳が残忍そうに笑う。

ルナは黙った。

母の部屋でも、リユーザが自分や母を助けに現れなかったという信じられない出来事にルナはひどく傷ついていた。

なのにメイベルは、その傷口をさらに広げようとするように残酷な言葉を言い放ったのだ。

「母上に……会いたい……合わせて……」

ルナは後ずさりながら、メイベルに懇願した。だが、返ってきた

のは、冷たい宣告だった。

「もう逃げる地面がないわよ」

ルナは思わず足元を見下ろして、自分が崖の端まで追い詰められていることに気づいた。

「落ちないように、気をつけなきゃ……ね」

メイベルは、左手でルナの右肩をきつくつかむと、右手に持った剣先でルナの首筋をそつとなでつけた。

「助けて……」

ルナは首に当てられた冷たい刃先から逃げようと、顔をそらせる。安心して。すぐには殺さないわ。あなたの守護妖獣が我慢出来なくなつて、わたしたちの前に現れるまで、ゆっくりじわじわと傷つけてあげる。あなたの命はわたしの手の中。せいぜい死なないように心がけてあげるわ」

優しい声が、一層恐怖をあおっていく。

ルナは自分がどうすればいいのか、考える力を失いはじめていた。体から抜けていく力を保つのがやっとで、崖下から吹き上げてる強い潮風に小さな身体は今にも崩れ落ちてしまいそうだった。

もしも、肩をつかんでいるメイベルの手が少しでも押したなら、そのまま奈落の底に落ちてしまうに違いなかった。

「まずはその顔……そうね、その緑の目から……」

メイベルがルナの目元に短剣をあてがった。

「いやだ……」

ルナの顔がのけぞり、声がこわばる。

「いやなら、守護妖獣をお呼び」

「い……や……」

白い刃が、無慈悲にルナの白い肌を引き裂こうと動いたまさにその時、ルナの顔がスローモーションのように剣先から離れた。

「な……?!」

ルナは両手でメイベルの身体を突き飛ばし、その反動でその身を宙に投げ出したのだ。

予想しなかった突然の出来事に、崖下の海面へ落ちていくルナを、メイベルは呆然とした表情で見つめるしかなかった。

はっとして我に返った時は、すでにルナの身体は海面に向けて一直線に墜落していた。

「母上え　！！」

ルナは落下しながら、叫んでいた。

風の唸る音が耳を打ち続ける。

見開いたままの目には急激に遠ざかっていく青い空と、崖の上のメイベルの驚いた表情がはつきりとみえた。

そのメイベルの表情がさらに変化する。

ルナの体が突如海の上から、かき消えたのだ。

「……リユーザ？」

あお向けの体勢のまま、ルナは救い主の名を呼んだ。

鼓動が激しく鳴り響き、その声は声にならない。

『申し訳ございませんでした。ルナ様』

ルナの体を海面ギリギリで、衝撃を与えないように受け止めた守護妖獣は、メイベルがその正体を見極め、声をあげる間すら与えず、ニユウズ海洋の沖を目指して猛烈なスピードで飛び出していた。

一刻も早くノストールから離れようとするかのように。

『あの魔道師は、妖獣を捕らえるすべを知っております。姿を現すことができませんでした』

海の上を猛烈な速度で飛びながら、リユーザは背に乗せた主人にそう説明をした。

ルナが崖に追い詰められたとき、リユーザはメイベルに気づかれないような弱い思念で、怖がる幼い主人に勇気を出して崖の下へ飛び降りるよう説得し続けていたのだ。

「どこに……行くの？」

ルナは、上半身を起こすと、自分たちが城からどんどんと遠ざかっていくのを見て、か細い声で問いかけた。

『いま城に戻るのは危険です。ルナ様のお命が狙われます』

「でも、母上が心配する。父上も、兄上も……」

『アルティナ城には、危険で巨大な力があふれています。いまは戻ることができません。城に帰ったならば、わたしは捕らわれ、ルナ様は殺されるでしょう』

「……」

ルナはリユーザの背にしがみつくと、顔をうずめた。

悲しみと孤独感で胸が張り裂けそうだった。

今まで生まれてから一度も、ルナはノストールを出たことがなかった。

一度も一人で城の外に出たことすらなかったのだ。いつも兄たちの誰かが一緒だった。

リユーザの温かな体温だけを頼りにすがりつく。

そして、振り返るたびに離れて行く故郷を何度も振り返り、見つめながら、悲しみに肩をふるわせ、また静かに泣きはじめることしかできなかった。

アルティナ城に戻って来た、カルザキア王、テセウス、アルクメーネ、シグニ將軍らは、カルザキア王の執務室にグシュター公爵を呼び寄せていた。

一人で現れたグシュター公爵は、挨拶をするとゆっくりとした動作で椅子に腰をおろした。

そして、王が問いかけるまで自らは一言も発しようとはしなかった。

だが、ものいわなくとも、その瞳は勝利によったように異様な輝きを帯びている。

「シルク・トトウ神の転身人を見つけ出したとは本当のことか？」

「はい陛下」

カルザキア王に問われて、はじめてグシュターはもったいつけるように、ゆっくり一言一言をくぎるように答えた。

「アル神のお導きにより、この危機迫るノストールにシルク・トトウ神が転身人としてご出現あそばされました」

「その子供は連れて来ているのだろうか」

カルザキア王は表情を表さないと臣下たちの間で囁かれるその眼差しで、グシュター公爵をじっと見つめた。

「はい。別室にてお待ちいただいております。謁見の間へお通し致しますか？」

「いや、この部屋でいい。だが会う前に……」

王は、低く響く声で疑問を投げかけた。

「なぜその子を、転身人と思ったのか。また知ったのか、その理由を聞こう」

グシュターはその言葉を待っていたといわんばかりに、口元の両端を引き上げ笑みをつくった。

「もちろんでございます。陛下」

良い意味でも、悪い意味でも自分の心に正直な男だ、とカルザキア王は思う。

グシュター家は、父の先々王の代から王の側近として付き従うようになり、現当主のロイド・グシュターも先王の時代、当然のようにその諸侯の列に並んだ。

カルザキア王は、亡き父の年齢に近い、口うるさく傍若無人なこの老人を好ましく思ったことはないが、側近の座からはずそうと考えたことはなかった。

人間を観察する能力が国の中で、誰よりも優れていたからだ。

どの地方にどのような人物があり、領民に慕われているか、不正を行なっていないか、文武のいずれに秀でてしているか、どの一族とつながりがあるか、など正確に情報を把握していた。

人物登用の際には、グシュターの言葉が最後の王の決定に比重を持ったことは間違いないのだ。

グシュター公爵は、うやうやしく告げる。

「まず、夢にてアル神よりお告げをいただきました」

その言葉に、テセウス、アルクメーネ、シグニ將軍は思わず目を合わせた。

「わたしが夢の中で、夜の月を眺めておりますと、銀色の光に包まれたアル神が突然目の前に現れたのです。そして、アル神はこう仰せられました。

『ノストールの平穏な日々が間もなく終わる。』

ハリア、ダーナン、ナイアデスの大国をも巻き込んだすべての国を巻き込む戦さが、始まりの時を告げた。

われが加護せしノストールを守るため、五年前に、ノストールの大地に生まれしわが子を見つけよ。

わが子の名は、シルク・トトウ。

勝利のために生まれし生命。

シャンバリアの虐殺からわれが守りし、愛し子。

かの生命の証しを、見つけよ。



われが刻みし三日月の証し。

愛しきわが子、シルク・トトウを』と……」

その場の空気が緊張に包まれた。

グシュターは続ける。

「その夢の後に、あのシャンバリアの村での大虐殺……。あの知らせを聞いたとき、わたしにはわかったのです。あの夢がただの夢ではなかったことを……。そして、その大虐殺から逃れた少年とこの城で会い、確信したのです」

「すると……」

王が発した言葉が、誰を指しているのかは、その場にいた誰もが知っていた。

「あの子どもが、そうだというのか？」

カルザキア王は、シャンバリア村でわずかの時間ではあったがそばにおいていた村の少年の顔を思い出す。

「そうでございます。陛下」

グシュターは、カルザキア王の瞳を真っすぐに見て答えた。

「シルク・トトウ神の転身人でございます」

テセウスとアルクメーネは互いの顔を見た。

アルクメーネの脳裏には、村で出会った暗い瞳をした少年の面影がよぎる。そして、そのとき感じたいいような不安感も……。

だが、とアルクメーネはふと疑問にかられた。

なぜ、今回のアル神のお告げの夢が、アンナの一族ではなく、グシュター公爵の夢に現れたのだろうか。

なぜ、アンナの一族を帰した後になって、グシュターはそのことを言い出したのだろうか、と。

シルク・トトウ神人は、破壊神でございます。

テセウスの頭の中では、アンナの一族の長、サーザキアの言葉が、渦を巻いてこだましていた。

カルザキア王が一体その少年をシルク・トトウ神の転身人をどうするつもりなのか、王の顔色を見ても予測がつかない。

それは、シグ二将軍も同じだったらしく、カルザキア王をじっと見たまま顔をこわばらせている。

「まず、会おう」

カルザキア王は、長い沈黙を破って、グシュター公爵に告げた。

グシュターは、立ち上がるとうやうやしく腰を折り一礼すると、部屋を出ていった。

「アルクメーネ」

グシュターの姿がなくなるのを確認して、テセウスはラマイネ王妃とルナが見つかったのかを王に聞こえないようにたずねた。

「それが……」

アルクメーネは顔を曇らせて、首を横に振った。

「二人の姿を見かけたという者はまだ誰も……。きつとどこかに出かけていているのでしょうか。夕食までには、帰ってきますよ。ただ、このようなことは、今までありませんでしたからね。ネフタンもリユーザもいるのですし心配はないのですが、引き続きクロトを中心に、極秘に探させています」

「そうか……」

ルナはともかく、ラマイネ王妃はここ数年特別な事情がなければ、病気静養中であるとして城の外に出ることがなかった。それだけに、ふたりの心には、時が経つにつれて焦燥感が募っていく。

ふたりが話している間、カルザキア王は両腕を組み、じっと目を閉じたままであった。

シグ二将軍もまた、窓の外をみつめたまま、一言も発しようとはしない。

待つ間の時間は、実際の時間よりもはるかに長く感じられるものだった。

そして、扉は開いた。

グシュターに招かれるように、栗色の髪をした少年が入室して来た。その瞬間、なにか言いようのない力が部屋中に満ちるのを、その

場の全員が感じた。

(以前に、この少年に会ったときは、こんな力は感じなかった……) アルクメーネは、見えない力の圧迫感に耐えようとするように少年を見つめてた。

少年は、顔をあげ、カルザキア王をじっと見ていた。

その顔には、村で見たときの暗い表情はどこにも見当たらなかった。

口元はほほ笑んでいる。

だが、茶色の瞳は笑っていない。

「名前は何と申すのだ？」

シグニ将軍がそう問うと、少年は無表情だった瞳に徐々に笑みを満たしながら、服のボタンを外していく。

そして、その胸に浮き出している三日月のアザを見せた。

小さな唇が開く。

「アウシュダールです。父上」

はっ、と誰もが息を呑んだそのときに、空気が異様な力に染め上げられていくのを、テセウスとアルクメーネは感じた。

アルクメーネの脳裏に、危険を知らせるなにかが呼びかける。

だが。

アウシュダールの瞳が、ふたりにゆっくりと向けられると、ふたりの目はその三日月アザに注がれていく。

「アウシュダールです。兄上」

「アウシュダール……」

アルクメーネは、自分の中からもなにか、大切な存在が薄らいでいくのを感じていた。

「なんだ……」

うつろなテセウスの声が横で響いていた。

「城のどこにもいないから、心配したじゃないか。母上も一緒だったのかい？ アウシュダール」

「はい」

アウシユダールはにこやかにほほ笑んだ。

「母上は寢所にてお休みになられました。心配かけてごめんなさい」  
「良かった」

アルクメーネは自分の口から放たれた言葉に驚き、そして何かを喪失した。

「アウシユダールがここにいることを早くクロトに知らせないと」

「アルクメーネ兄上にもご心配をおかけしました」

アウシユダールの茶色の瞳と、三日月のアザから目をそらすことが出来ない。

強烈に惹き付けられ、脳裏に焼きつくようにとらわれ、視線を離すことが出来なかった。

「シグ二将軍も」

シルク・トトウ神の転身人として目の前に存在する少年に名を呼ばれて、ぼう然としていたシグ二将軍が、我に返ったように「そうですね。そうですね」と感激した面持ちをたたえてアウシユダールを見つめる。

「まさか、わがラウ王家の第四子アウシユダール殿下が、ご幼少よりおそばにいらっしやられた殿下が、シルク・トトウ神の転身人だとは思いませんでした」

「さようで」

グシユターは口元に、妖しい笑みをたたえながら、カルザキア王に語りかけた。

「これで、ダーナンは敗れたも同じでございますな。わがノストールはアル神の息子を手にしたのですから」

「うむ」

カルザキア王はアウシユダールの肩に手を乗せて、うなづいた。

「ダーナンには、開戦をつける」

「父上」

アウシユダールは王を見上げてほほ笑んだ。

「何もしなくても、ダーナンは滅びますよ。わたしたちはただ見物

をしているだけで大丈夫です」

「そうか…」

「はい」

ふたりのやりとりに、テセウスとアルクメーネは、何か不自然なものを感じながらも、ただすべてはこれで良くなると、思い込みはじめていた。

うす暗い空間の一室で、クスクスと楽しげに笑う声が響いていた。「人は、こんなにも愚かだ……」

鈴の音のような魅惑的な美しい声が、音楽を奏でるように言葉をつむぎだす。

「あの魔道の女も、感情が先走りすぎましたな」

黒装束の男が、主の座る椅子の隣りにひざまづき、同意を示す言葉添えた。

ふたりが見つめる正面には白い光の壁が浮き上がり、ノストールでの出来事を映し出していた。

「本当に……」

妖精獣 末の王子の守護妖精を捕り逃がして海に向かい大声でののしっているメイベルの姿が消え、場面が変わる。

「すべての人間が……シルク・トトウに振り回される。あれの存在ばかりに気をとられる……ささやかな、はかない光に」

若く美しい青年は、陶醉するように、次に現れたアウシユダールの横顔を、穏やかに、そして楽しげな瞳で見つめる。

「シルク・トトウ……か」

青年は、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「さあ、イルアド。駒を進めよう。この世界の人々が……わたしたちの世界を待っている」

「御意。すべては順調でございます」

イルアドと呼ばれた魔道士は光の壁を消し去り、身を起すと、主を導くように闇の世界の歩を進めていった。

青い海原の上、三十隻もの大船団が、ノストールのイスト港をじつとにらみつけるかのように静かな沈黙を保ったままたずんではなかつた。

五年前まで、ダーナン帝国に海軍は存在しなかつた。

西の中原に位置しており、海に面していない国に当然海軍の必要はなかつた。

だが、この五年の間で海洋国家旧イリア国を侵略し、征服。同時に勇壮無比といわれる海軍を手中に収めたのだ。

静かに揺れる船内の一室で、ロデイ・ザイネス　ダーナン帝国の若き帝王と呼ばれる青年は、窓際に立ったまま、黄昏時の空をじつと見つめていた。

「アル神の息子……か」

視線の先には、ノストールの緑の大地と、石造りの難攻不落と呼び名も高いアルティナ城がとらえられていた。

その城のはるか遠くには、エーツ山脈の最高峰エーツ・エマザーの頂かがかいま見える。

ロデイは黒の布地に金の刺繍がほどこされた軍服を身にまとっていった。

それは黄金色のロデイの髪の色に映えて、十五歳の若い少年王を凜々しく美しくみせる。

「陛下、ジュゼールです」

ドアをノックする音がした。

「入れ」

ロデイの声が応えると、ジュゼールが現れた。

「ノストールからの返事は？」

「まだです」

「そうか……」

ロデイは窓の外を見つめたまま、黙り込んだ。

「お疲れなのではありませんか？」

ジュゼールは、気遣うようにロデイに声をかけた。

五年前の国を揺るがす大惨事があつたあの日から、さらわれ行方不明となつた妹王女フューリーを取り戻すことだけを目的に、休むことなく、諸外国に戦いを挑み、勝つことだけを自らに与えた義務として歩み続けて来た。

本来なら、帝王、帝妃である両親の下、なに不自由することなく成長し、優秀な知識人より学問を学び、乗馬や武術で野を駆け回り、社交界の主役として華やかな日々を送っていたはずなのだ。

しかし、突然帝国の未来を背負わされた十歳の少年には、その身を庇護してしかるべき頼れるべき存在は皆無に等しかった。

母は、国を内乱状態に陥れ、王の命さえ狙つた二人の兄を道連れに命を絶ち。父は植物状態となつたままであり、妹王女の行方はようとして知れない。

それでもロディは起つた。

妹を取り戻す、というその一点の執着の中に生きる意味を見出し、帝王としての棘の道を踏み出したのだ。

己の好奇心や甘えというすべてから一線を画し、血で血を染める戦場のみに身を置いて来た。

常に緊張状態にあり、張り詰めた精神状態を維持している精神力には誰もが圧倒された。

だからこそ、ジュゼールは常にその身を案じる一方で、別の不安を抱くようになっていた。

「ジュゼール、アル神の息子さえ手に入ればわたしも少しは気持ち楽になるのだろうか。その力はわたしを助けてくれるのだろうか？」

「もちろんですとも」

ジュゼールは、頼りなげな顔で振り返つた主人を見て、自分の中に生まれかけたわだかまりが溶けていくのを感じていた。

「信じてもいい？」

その表情は、十歳の時のロディのままだった。

ロディは、時折こういつた危うさを見せた。



ほかの臣下や国民の前では、その期待を一心に浴びても動じず、穏やかな表情を浮かべ、決して不安を感じさせることはない。

しかし、ジュゼールやグラハイドなどの幼少時代から傍で仕え、信頼してきた側近を前にしたときだけ、あの地下道で、王になるのはいやだと言った少年の顔に戻るときがあるのだ。

兄たちの醜い争いに傷つけられ、痛めた心を取り出しては見つめ、なにも知らなかった五年前に戻りたがってるようにも思える。

「もちろんですとも、陛下」

ジュゼールは、ロデイの碧く美しい瞳を見つめて、力づけるように言葉を重ねた。

「それに、なんといつてもロデイ様にはカラギ殿という名軍師がついているではありませんか」

「そうだね……。ジュゼール。お前がそう言ってくれると安心できる」

ロデイの儂げなほほえみを見るたびに、ジュゼールはどんなことがあってもこの無垢なる心を守り抜いてみせる、と己に誓うのだ。

「ラージ・デイルムツドを呼んできてほしい」

だが、こうしてひとたびラージ・デイルムツドの名がロデイの口から出ると、その度にジュゼールの中に、見えない不安が胸の中に広がっていくのだ。

けれど、それを顔に出すことは決してすることはなかった。

「かしこ参りました」

一礼すると主の言葉に従うべく、部屋を退出する。

(デイルムツド殿か……)

ジュゼールにとってのぼんやりとした不安の種は、ロデイが王位に就いて一年後、ダーナン国の宮廷魔道士として突然召し抱えられたラージ・デイルムツドの存在だった。

どこから流れ着いた魔道士なのか、その素性や過去を知るものはいない。

にもかかわらず、その呪術能力と予言の確かさを耳にした宰相グ

ラハイドが、ロディに進言して召し抱えたのだ。

ジュゼールは通路を歩きながら、窓越しに見える沈みゆく夕日に目を向ける。

（実際、あの魔道士がいたからこそ、カラギという名軍師を得ることでもでき、戦さにも勝ち進んで来た）

だが……と、ジュゼールは思う。

（このところのロディ様は、ディルムツドやカラギをおそばに置きすぎる。今回の出陣もディルムツドの意見だというし……）

これは自分の嫉妬だろうか、ジュゼールは己の心に問いかけた。幼いときから守役としてそばに付き従い、ロディの横には自分がいることが当然と自負してきた。

しかし、ロディが即位し、戦さがはじまってからはさまざまな面ですべてが変わっていった。

得体の知れない魔道士ラージ・ディルムツドが現れた。

そして、そのディルムツドが田舎から見だし連れて来たジュゼールよりも一歳年上のカラギが軍師として登用された。

最初はいかがわしく思われていた商人出身の男は、軍師としてみるみるうちにその能力を発揮し、それまで統率のとれていなかった占領国の軍まで見事に動かし、戦さにかかるあらゆる負担を軽減させたのだ。

その、臣下になって間もないカラギが、ジュゼールと肩を並べ、自分がロディの右腕としてそばにいるのが当然のように振舞う。

軍師なのだからしかたないと、頭ではわかっているけど、どろりとした嫌な感情が心の中に沈殿し、うごめく。

そんな抱え込んだわだかまりを許せない自分が、さらに許せなくなり、ジュゼールは深いため息を吐き出す。

ロディがダーナン帝王になって以来、二人きりで話をする時間は確実に失われ続けていた。

（ロディ様は戦を好まれるご性格ではなかった）  
ジュゼールはふと立ち止まると、瞼を閉じた。

開戦はデイルムツドの占術が始まりだった。

あの時から、ロディは帝王の剣を高々とかざし、馬上の人となったのだ。

ジュゼールには、今日までのこの急変は、すべてが魔道士として現れたデイルムツドにあるように思えてしかたがなかった。

考え過ぎだろうと思えば思うほど、れに反発するようにデイルムツドやカラギに対する漠然とした不信感がつのつていく。

(それに、アル神の息子など得なくとも、わがダーナンには、ゼナ神がおわしますではないか……)

人の心の闇や死をその身である大地に呑み込み、海の彼方へ返して安住の地を築くという、地界と円環の神ゼナ。

ダーナン国の人々はゼナ神に祈ること、おのれの心の闇の部分を取り除けると信じる。

ジュゼールはデイルムツドらに対する不信感をできるだけ追い払おうと、ダーナンの方角に向かって、両の手のひらを胸の前で組み、瞳を閉じてゼナ神に祈りをささげた。

(これは、嫉妬だ……)

ジュゼールは自分の心を戒めようと努める。自分の中に凝固し始めた闇を排除する祈りを捧げる。

(ロディ様は変わられぬ……)

閉じた瞳の中に、さきほどのロディの不安そうな顔が浮かぶ。

デイルムツドやカラギには決して見せない一面をジュゼールにはみせるのは、誰よりも頼られ、信頼されている証なのだと信じたかった。

「なにが起きてても、わたしはロディ様のためだけに戦います」  
そう心に誓う。

心の平静さを取り戻したジュゼールは、デイルムツドの部屋に行くのと、ドアをノックした。

「デイルムツド殿。陛下がお呼びです」

すぐにドアが開き、中から灰色のローブを身につけた人物が姿を

見せた。

宮廷魔道士ラージ・デイルムツド。

その顔はしわに刻まれ、長く伸びてひとつに束ねられた髪は、黒髪に白髪がまじわり、一見、老人に見えるのだが、もつと若いのではないかと思わせる時もある。しかし、実際の年齢を知る者は誰もいない。

すべてが謎に満ちた存在だった。

一瞬ジュゼールは、デイルムツドの正装用のローブ姿を見て、この男は自室でもローブを着ているのだろうかといぶかしむ。

だが、謎はすぐに解けた。

「ジュゼール將軍。遅れをとりました。いまして、いいよつのない大きな力が発する衝撃を感じました。すぐに術を行ったところ、ノストールはシルク・トトウ神を見つけ出し、手中に収めたのでました。わたくしごときの力では、目覚めたばかりとはいえシルク・トトウ神の転身人の力に対抗出来るとも思えませぬ。今回は引き返し、策を練り直すべき時であると陛下に申し上げるべく支度を整えていたところです」

くぐもつた低い声が、小声でささやいた。

「ノストールがシルク・トトウ神を見つけたというのか?!」

ジュゼールが思わず声をあげるのを、デイルムツドは片手をあげて制する。

「大いなる力は、他の 先読み を無効にいたします。それが神の転身人の力とあればなおのことでございます。しかもいまその力は封じられていた力が一気に解き放たれ、火山の噴火のような激しい勢いを持っております。しばらくは、なにがおきても不思議ではありません」

デイルムツドが、ダーナンの宮廷魔道士としてロディから与えられたローブをまとっていた意味を、ジュゼールは理解した。

一度、人に対し猜疑心をもつと、すべてを悪い方向に解釈する自分にジュゼールは内心舌打ちする。

「わかりました。わたしも一緒に行きます」  
ジュゼールは、神妙に一礼をすると、ディルムッドとともにロデ  
イの部屋へと踵を返した。

暗雲立ち込める低い雲と、灰色に染まり荒れ狂う海との間に、あるものが形をつくりつつあった。

はじめ、それは脅威すら感じさせない糸のような細いものだったが、だがそれは、徐々に空中に渦を描きながら成長を遂げ、やがて天と海とを結ぶ垂直な柱となっていく。

ひとつ誕生すると、もう一つ。

それは次々に誕生していった。

海の水を呑みつくすような勢いで水を巻き上げるいくつもの巨大な水柱は、凄まじいスピードで回転し、生き物のように身をうねらせながら移動していく。

巨大な竜巻。

ニユウズ海洋で発生した竜巻の群れは、ノストールに向け、急速に接近しつつあった。

「竜巻だあああ！！！」

陽が沈み闇に包まれた海上の中、竜巻を発見したのは、ダーナン船団最後尾のミルト号の中央マスト大檣楼で見張りをしていた船員だった。

海洋国家としての歴史深い元イーリア国海軍の目が、闇夜の海上はるか沖に出現した竜巻を見逃さなかったのだ。

その知らせは、すぐにロデイのもとに届いた。

「すぐにこの海域から本国方面に向けて避難する！ フィゴル、すぐに全艦に伝える」

ロデイは報告を聞くと同時に、即座に決断した。

ロデイの船室の中には、ジュゼールや軍師のカラギ、魔道士のラージ・デイルムッド、そして海軍大将フィゴルたちがそろっていた。今回、海軍全艦隊の実質的指揮をとるフィゴルと、ジュゼールはその言葉を聞くとすぐに部屋を出ていった。

フィゴルは、元イーリア国の海軍中將であつたが、ダーナンとイーリア両国の交戦時は隣国ハスラン国からの防戦にあつており、直接ダーナン軍と剣を交えることのないままに敗戦を迎え、その後能力を請われてダーナンの海軍大將として登用されたのだ。

「陛下」

大柄なフィゴルの後ろ姿がドアの向こうに消えるか消えないうちに、デイルムツドが口を開いた。

「わたくしは、これから最後尾の艦にまいり、竜巻の進路を変え、少しでもその力弱める努力を尽くしたく思います」

「なにを言うデイルムツド」

ロデイは驚いたようにデイルムツドを見た。

「今回のこと、どれほど大きな力が働いたにせよ、陛下の御身を危険の中に巻き込んだこと、一重にわたくしの責任でございます」

「しかし、竜巻さえやり過ぎることができれば問題ない。なにもお前が危険な場所に行く必要はないだろう。魔道士としてのお前の力はこれからもダーナンにとっては必要だ」

「お言葉ですが……」

デイルムツドは、ロデイの碧い瞳を見つめた。

「シルク・トトウ神の転身人の出現と、この突然の竜巻。わたくしには無関係には思えません。この海洋にはただならぬ大いなる力が満ちあふれております。しからば、我が身をもってしても陛下をお守りするのがわたしのつとめ。わたくしのすべての力をもって……きつとお守りして見せます」

「しかし……」

「時は一刻を争います。お許しください」

デイルムツドは、深々と頭を下げると、ロデイの言葉を待たず部屋から出て行った。

「待て、デイルムツドー！」

「陛下」

デイルムツドを止めようとする若き王を、カラギがやんわりと制

した。

「カラギ……」

ロディよりも十二歳年上の軍師は、首を横にふった。

「陛下。われわれはどのようなことがあるうとも、万全の策を持って挑み、そして時には退かなくてはなりません。特に自然とシルク・

トトウ神の転身人の力が敵とあつては、フィゴルの長年の勘とディルムツド殿の魔道士としての力にかけられるほかはございません。われわれはこれまで、海の上の竜巻に出会ったことがないのでから。

ディルムツド殿ならば、必ずや竜巻の進路を変え、生きてお帰りになりましょう」

黒い髪と黒い瞳、褐色の肌をした鋭い瞳をもつカラギの言葉がロディの足を止めさせた。

ロディは無言のまま、きびすを返すと窓辺に近づき、まだこれから起きる災難を予感すらさせない、静かな海面をみつめていた。

巨大な水柱となった幾つもの竜巻は、生き物のように海を引き裂く勢いで、ノストールを、そしてダーナンの船団目がけて突き進んでいた。

「ディルムツド殿！」

最後尾を守るミルト号までようやくたどり着いたディルムツドの小舟に、ミルト号の左舷甲板から縄ばしごが降ろされた。

すでに波のうねりは大きく、雨が上空から振り出し、小舟のなかは海水が足首までつかるほどあふれ危険な状態になっていた。

ディルムツドを先頭に小舟を操って来た二人の兵士は、強風に大きく揺れる縄ばしごに翻弄され悪戦苦闘しながらも、なんとかミルト号の手摺りに手をかけ、乗り込むことができた。

大きな波がミルト号に何度も体当たりをするたびに、水しぶきがはねあがり、雨も手伝って甲板は水浸し状態だった。

ディルムツドや兵士たちも頭の先からつま先まで、全身ずぶ濡れになってしまっている。



空には雷光がきらめき、轟音が響く。

風は勢いを増し、いよいよ激しくなっていく。

デイルムツドたちが乗って来た小舟は、大海のなかの木の葉のように大きく揺れたかと思うと、あっと言う間に暗い海の中へ消えていた。

「逃げ切れそうか？」

デイルムツドは右に左に大きく揺れる甲板の上で、強風にあおられながら二人の兵士に両脇を支えられ、出迎えた副船長に聞いた。

船長は必死の形相で、舵輪を操縦していて、話をする余裕などまったくないのだ。

副船長は、デイルムツドの言葉に青ざめた顔で首を横に振った。

「あのようなおそろしく巨大竜巻は、これまで見たこともありませんが。まるで海竜の化身そのものです」

副船長の指し示した方向には、夜であるにもかかわらず、暗い海と空の中に浮かぶようにうごめくいくつもの白く太い柱があった。

「海の女神ドナ神が妨害をしているようだ。このような事態となつては、デイルムツド殿のお力だけがたよりです。これほど海が荒れていては……」

甲板がぐらりと大きく傾斜して、副船長の言葉が途切れた。

デイルムツドの体が激しく床に打ち付けられた。

彼を支えていた兵士のうちの一人の体が吹き飛び、転がるように甲板舷にたたきつけられる姿が目に見えび込む。

「デイルムツド殿、はやくこちらへ！」

何度かの大きな揺れをじつとこらえた後、わずかに静まった一瞬をぬって、副船長が雨と海水で濡れびたしになった甲板からデイルムツドを抱き起こし、船室へ降りる階段のある昇降口へ連れていく。だが、船の揺れと風の勢いはさらに激しくなり、海水が二人を追うように昇降口から階下へ流れこんでくる。

「速度が落ちてるぞ！」

「だめだ！ もっと速度を上げると漕ぎ手に伝える！ あの渦に引

き込まれたら最後だ！」

「おい、あれを見る！！！」

「なんだ？！」

「右前方だ！」

船員たちの叫び声、怒号が、デイルムツドの背後で飛び交う。

「どうして、ホーク号が近づいて来るんだ！？」

その声に、木の階段をおりるデイルムツドの足が止まった。

「このままじゃ、ぶつかるぞ！」

「船長は何をやってる！ 回避！ 回避！」

「逃げろ！」

「間に合わない！」

「だめだあ！！！」

船員たちの悲鳴とも叫びともつかない声がいたるところであがる。デイルムツドが振り返り、甲板へ出る昇降口を見上げたとき、激しい衝撃が船体を襲った。

巨大な波が甲板に襲いかかり、逃げ惑う船員たちを呑み込み、船を襲う。

前方を進んでいたホーク号が速度を失いバランスを崩して、側舷からミルト号に激突したのだ。

もつれあいながら、荒れ狂う海のなかへ沈み行く二つの船と、ダーナン船団を追尾するように、巨大な竜巻はすぐ後ろまで近づいていた。

同じころ、同時発生した別の竜巻に追われるひとつの影があった。

「リューザ、真っ暗だし……空も、海も怒ってる……」

まだ竜巻の接近を知らずにいたルナは、城へ戻れず一人きりになった不安と、悪天候の真っ只中に身をおく恐怖で、震えていた。

守護妖獣リユーザは、その背にルナを乗せたまま、陽が落ちて夜になっても休む様子もみせず、ただひたすら海面を滑るように飛び続けていた。

リユーザの背の上は風の抵抗も微弱であり、体温が低下することはない。

だが、家族と引き離された孤独感と、殺されかけた衝撃が、この闇夜の中、ルナの心をどうすることもできないほどの不安と恐怖で締め付けていた。

最初に竜巻に気づいたとき、それはまだ、か細く長い白い糸のように上空に浮いたまま渦巻いていた。

ルナとリユーザはそれを横目で眺めながら、近くを通過したが、まさかそれが数分とたたないうちに巨大な竜巻に変貌するとは思ってもいなかった。

だから、一度追い越した竜巻が急速に巨大な竜巻に成長し、自分たちを襲うように追いついてくるとは想像もしていなかった。

気づいた時は、すでに手遅れの状態だった。

リユーザは、自分たちを猛追してくるようになり、迫り来る竜巻から必死に逃れようと全力で飛び続けた。

しかし、風は暴風となり、大粒の雨が矢のように降りかかり、リユーザの翼を激しく打ちつける。

「リユーザ！ こわいよ！ リユーザ！」

大鳳リユーザの体に両手を回してしがみつきながら、ルナは叫び続けていた。

ルナは背後を何度となく確認するが、巨大竜巻の姿は振り返るたびに急速に成長し、近づき、迫っていた。

「ルナ様、しっかりおつかまり下さい！」

リユーザの体が巨大な風にあおられる。

竜巻の荒れ狂う怒りをふくんだような風の咆哮が轟き、響き渡る。

「決してわたしから離れられませぬように！」

「リユーザ！ 死んじゃうの?! いやだー！こわいよー！！ 助

けてえーっ!!」

「大丈夫です、ルナ様！ 必ず、カルザキア王、ラマイネ王妃、兄上様がたに再びお会いできます！ ルナ様！ しっかりおつかまり下さい！」

リユーザの言葉に、ルナは目をかたく閉じて、優しくほほ笑むラマイネ王妃の笑顔を思い浮かべようと努力する。

「母上！ 母上！ 母上えーっ!!」

横殴りの突風がリユーザの体を襲った。

守護妖獣の翼から、羽が飛び散り、均衡を失った体が、傾いたまま失速していく。

「母上ええーっ!!」

ルナの叫びは、竜巻のうなり声にかき消された。

そして、一對の姿は、そのまま巨大竜巻の渦の中へとのみこまれていった。

東のナイアデス皇国、西のダーナン帝国、そして中央のハリア国。それが、このラーサイル大陸をほぼ三分する大国の名であった。

これに小国、中国を加えると約十五の国がひしめき合いながらも、約三百年もの間、小規模な紛争をのぞけば、ほぼ安定した関係を続けていた。

だが、数年前よりその状況に確実な変化が起きていた。

わずか十歳でダーナン帝国の新王として即位したロディ・ザイネスが、近隣諸国の侵略を開始したためだ。

最初に犠牲になった国は、第二王子エルローネの王位継承を強く望み、シーグルトを謀殺しようとしたハスラン国。次いで第一王位継承者と考えられていたシーグルト王太子側についたゼルバ公国だった。

二人の王子は、王位継承への強い執念から、互いを牽制し合い、ついには王である父のボルヘス帝王の命を狙った。

王妃ナーディアは、その息子たちから王や第三王子ロディ、フューリー王女の生命を守るため、シーグルトとエルローネを道連れに死を選び、ボルヘス王は命は取り留めたものの、ただ生きているというだけの体になりはて、妹は行方不明となった。

ロディは兄たちに加担し、内乱の原因ともなった両国に対し、容赦をしなかったのだ。

そして、両国平定後は海洋国家イーリア国へ侵略、ハリア国を大きくしのぐ強国となっていった。

わずか五年という短い時間の流れの中で起きた嵐のような出来事だった。

だが、いまだフューリー王女の行方はようとして知れず、ダーナンはその侵略という名の歩みを止めようとはしない。

ハリア国とダーナンとの間には、カヒロ山脈の長く険しい尾根が横たわり、南端に深い森と起伏のゆるい山々に囲まれたイルリアン湖がある。

その湖の南西にハスラン国があった。

ハリア国は、その隣国ハスラン国の豊饒な土壤に目をとめ、少しでもその領土を掠め取りたいと、たびたびちよっかいを出していた。しかし、その度にハスラン国の隣国であり親戚筋でもある大国ダーナンが外圧をかけてくるため、攻めては、退くこと数知れず、ハリアは常に苦々しい思いをしてきたのだ。

それが、ダーナンの内輪もめという絶好の機会を得て、意気揚々ハスランへ一気に攻め入ろうと舌なめずりしていたところ、当のダーナンが突然ハスランに侵略するという事態を目の当たりにすると同時に、今度はいつダーナンが自国を責めてくるかもしれないという危機迫られる立場になったのだ。

当時ハリアは、北西のナク口国を八年前に侵略したその足で、リンセンテートス国へも触手を伸ばし、交戦と休戦を繰り返している最中だった。しかし、事態の変化に、あわててリンセンテートスから兵を引き、ハスラン側前線の防備を強化することとなった。

ハリアの首都モルカの王宮では、ヘルモーズ王の掛け声のもと、政治的・軍事的にも急速な方向転換に追われていた。いや、少なくとも臣下たちはそうであると信じていた。

「リンセンテートスへは和解の証しとして、シーラを嫁がせようと思っておる。向こうもこの話には興味を示して来ておる」

薄い幕の向こうから、玉座に座るヘルモーズ王の年老いてかすれた声が響いた。

王宮にある「合議の間」の王と臣下の間には、常に玉虫色の幕が垂れ、直に王の姿を見ることができないようになっていた。

この布は王の側からは拝礼する臣下の姿が良く見えるのに対し、臣下の側からは王の影が見えるだけという、特異な織り方が施されていた。

幕越しでない王の姿を直接見ることができるのは、王の間に入ることが許されるごく限られた人間だけであった。

乳白色の大理石で築かれた細長い合議の間には、二十人ほどの国を預かる重臣たちが集められていた。赤い絨毯が敷き詰められた床の上には、背が高く、座が低めにできたクッションの充分にきいた豪華な布張りの椅子が重臣の数だけ、壁に沿うように左右一列、双方が向かい合う形で並べられている。

意見を述べるものだけが、立ち上がり、王に対峙するのだ。

「陛下。シーラ姫を……リンセントースの王の側妃として……ですか？」

大臣のダルクスは、立ち上がると思わず聞き返した。

「そうだ」

重臣たちのあいだにどよめきがおこる。

参列した重臣たちが驚きの色を隠さなかったのは、無理からぬことであった。

リンセントースのラシル王には正妃や子息たちがおり、すでに齢五十を過ぎている。ラシル王がヘルモーズ王より年下であるとはいつても、十七歳のシーラ姫とは離れすぎている。しかも、側妃としての輿入れでは、あまりに不憫な婚約と、だれもが感じたのだ。

ヘルモーズ王自身にも三人の側妃の間に九人の子供があった。

第一側妃メイヴには二人の娘がいたが、二人とも他国へ嫁ぎ二十年近くたつ。

第二側妃エスニアには、十年前に嫁いだターラ王女、ファージル王子、カーデイス王子、そして、十七の誕生日を迎えたばかりのシーラ姫がいたが、エスニア妃と二人の王子は今亡き人であった。

そして第三側妃のミディール妃には、十四歳のミレーゼ姫と、十二歳のエリル王子、八歳のグリトニル王子の三人の子がいた。

いまヘルモーズ王が、告げた姫の名は亡きエスニア妃の子、シーラ姫のことであった。

エスニア側妃は、華のように美しい容姿と、鈴のような美しい声でハリアの歌物語を詠むことから、若いころは歌姫として国の人々からも愛された。その故エスニア妃うりふたつの面差しをしたシーラ姫を、王は溺愛していた。

その王が愛する姫を、二十歳以上も年の離れた王のもとに側妃として嫁がせようと言うのだ。しかも人質同然の結婚を。

重臣たちの間からは、にわかには信じがたい王の言葉に戸惑い、疑問の声が漏れる。

「そこまでする必要があるのか、と。」

「無論……わしも、考え抜いたすえの決断だ……」

臣下たちの、あまりの動揺ぶりにヘルモーズ王は、それを静めるように沈痛な声を響かせた。

「だが、ダーナンがハスランを落とした今は、急ぎリンセンテートと和解し友好関係を結ばなくてはならん。かといって、この数年リンセンテートスへ攻めいったのはわしらの方じゃ。ラシル王は爪ほどの領土を譲渡したとて、和解には応じぬだろう。仮に和解したとしても、いつ反故するかわかったものではない。確固とした友好関係を結び、なおかつリンセンテートス内の中央の情報をわしらが常に手中に収めるには、シーラを嫁がせるのが最良の策なのだ。ミディールがわしのもとに来たのも、わしが五十二歳、あれが十七の時。シーラも承知しておる。愛する娘を嫁がせるわしの……胸のうちも察してくれ……」

王の沈んだ声に、それ以上意を唱える者は現れなかった。

全員が立ち上がると、王に向きあった。

そして腰を落とすと左足を床につけ、右腕を胸の前にかかげ、それにかぶさるように深く頭を沈めた。



それが、王への忠誠をしめす礼節だった。

ダルクス大臣をはじめとした居並ぶ重臣たちは、影絵姿の主人から、自分たちの表情が見えぬように、低く、低く頭をたれた。

その中には華のように美しく国民から愛されるシーラ姫を思い浮かべ、またその行く末のあまりの不憫さを思い、涙を浮かべる者たちが少なからずいたのだ。

第6章 失われし誓約 - 2 -

「姉上様！ 姉上様！」

シーラ姫の部屋の両開きの扉が勢いよく開き、瑠璃色の髪をした少女があわててはいるものの蝶が舞うような可憐な足どりで、女官たちを従えて現れた。

「ミレーゼ」

長椅子の上で、細く長い指の上に白い小鳥をのせて遊んでいたシーラは、何の前触れもなく突然部屋におとずれたミレーゼを見て、美しい眉を寄せた。

「いけませんわ、すぐお戻りください。わたくしと会うことは禁じられているはず……」

シーラは、三つ下の腹違いの妹の来訪に戸惑いの色を隠せない様子だった。

「いいの。お母様の言うことばかり聞いていたら、姉上様とお会いできなくなるもの」

ミレーゼはその言葉をシーラにはなく、女官たちに言い聞かせるように大きな声で強くはっきりと言う。

「ここには、わたしの意志で強引に姉上のもとまでまいったのです。罰せられるならこのミレーゼよ」

その妹の様子に、シーラは困ったように、だが優しくほほ笑んだ。ミレーゼよりも薄く柔らかかな色調の瑠璃色の長い髪、そして琥珀色の瞳、長いまつげに、赤い唇。

悔しいけれど、妖精のようにきれいだとミレーゼは素直に認めている。

この優しい姉は特別なのだと物心ついたころから、そう思って来た。そう、その特別な何かさえなければ、ミレーゼだって決して引けをとらないのだ、と。

実際、ミレーゼはまだ幼さが目立つ少女であったが、数年たてば

美しく可憐な王女に成長していくだろうことは、だれの目にも明らかだった。

「困った方ですね。いったいなにをそんなに急いでこられたのですか？」

シーラは優美な仕草で小鳥を鳥籠へ入れると、ミレーゼを長椅子に招いた。

「人払いを」

ミレーゼは自分の女官たちはもとより、シーラ姫の女官たち全員を部屋から下がらせた。そして、だれもいなくなると、姉の両手をとってささやく。

「お父様のお話し、本当なのですか？」

リンセンタートスのラシル王の側妃として輿入れするという話を耳にしてミレーゼは飛んできたのだ。

真剣に問いかける碧い瞳に、シーラは静かにうなずいた。

「そんな……」

ミレーゼは言葉を失ったまま、母の異なる姉を見つめていた。

「わたしくのことは、いいですよ。お父様が国のことを考えて決められたことですもの」

シーラは力なくほほ笑む。

「心配して来てくださったのね。ありがとう」

「お母様だわ」

ミレーゼが自分の母の名を叫びかけたが、シーラの人差し指が、ミレーゼの唇にそつとあてられた。

「めったなことを口にされてはなりません」

「でも……」

ヘルモーズ王には、現在二人の側妃がいる。

第二夫人メイヴ妃と、第三夫人ミディール妃だ。

正妃の座は正妃レイア妃が亡くなって以来、王の固い意志で空席のままとなっている。

正妃レイア妃は十四歳の時、十五歳のヘルモーズ王へ嫁いだが十

九歳の若さで病死。

シーラの母、エスニア妃もまた六年前、当時十四歳のカーデイス王子とともに馬車の事故で落命している。

ミレーゼが母と呼んだのは、実母のミディール妃の名前だった。

ヘルモーズ王には、長く世継ぎの男子が誕生しなかった。

王が四十半ば近づいた頃、初めて第一王子ファージル、二年後にカーデイス王子が相次いで生まれた。

これで、ダーナンは安泰だと誰もが大いに喜んでいただけだが、二人の王子は、ともに王位継承の儀式を迎える前年に亡くなる。

その後ミディール妃がエリル王子、グリトニル王子をもつけたことから、いまミディール妃の発言力は、後宮はもとより王宮でも大きくなっていた。

「いいえ、いいえ」

ミレーゼは声をおさえると姉の手をとった。

「お母様は、姉上様を……亡きエスニア妃の血を憎んでいますもの。それは姉上様が一番よくご存じではありませんか。そして……わたしも……」

シーラ姫は長いまつげをとじると、小さく首を横に振った。

「それ以上は、お言葉に出して言われませんように」

「いやよ」

ミレーゼは立ち上がると、隣の部屋に控えている女官たちを呼びつけた。

「これから、姉上様と遠乗りにでかけます。わたしの乗馬服をもってきて。ここで着替えます。早くなさい」

女官たちは困ったように返事に迷い、ミレーゼ姫のわがままを止めようとしたり。ミディール妃から、ミレーゼをシーラに近づけないように厳しく言い渡されていたからだ。

だが、ミレーゼが言い出したなら聞かないこともまた女官たちは充分承知していた。

一度、強引にミレーゼの言葉を無視して妃のいいつけに従ったと

き、三カ月にわたって公務を投げ出したのだ。

それも「ひどい女官たちにいじめられて、食事も喉に通らないほどつらい」と、見舞いにきた王に泣きついて。

シーラ姫とリンセントートス国王との婚約の話が進められようとしているいま、ミレーゼ姫が癩癩をおこして、さしさわりでも生じれば、女官たちすべてが厳しい処分を受けるに違いなかった。

「ただいまお持ち致します」

女官たちは、目配せをするミレーゼの乗馬服を用意すべくそそくさと部屋から出て行った。

ミレーゼは満足そうにうなずくと、今度はシーラ姫の女官たちに指示をした。

「さ、今度は姉上様のお支度をしてさしあげて」

乗馬服に着替えた二人の姫と遠乗りに行きする女官たちが、馬に乗るために廐舎へ赴くと、何やら騒ぎが起きていた。

四、五人の廐番たちが青い顔をして、右往左往しているのだ。

「一体どうしたのです？」

姫のきげんを損ねてはと、ミレーゼの女官が急いで廐番に駆け寄ると詰問する。

だが、声をかけられた中年の廐番は二人の姫の姿を目にしたとたん、その青白い顔をさらに青くさせた。

「いえ……それが……その……」

廐番はしどろもどろになり、ろくな返事すらできない。

「ふうん」

ミレーゼは、うるたえる廐番の横を素通りして廐舎の中へ入り、馬をいちべつした。そして、よく通る声で歌うようにどこへともなく問いかけた。

「わたしの愛馬ライラ号はどこかしら。廐番の王子はどこなのかしら。これからとーっても楽しみにしていた遠乗りにでかけるのに」

「ひ、姫。申し訳ございません」

厩番は、厩舎の中のミレーゼの足元に駆け寄ると帽子を脱いでひざまづき、額を地面にすりつけて謝った。

「すべては、わたしの不注意でございます」

「エリルはどこ？」

「そつ、それが……」

「厩舎の王子は、わたしのライラ号をどこへ連れていったの？」

ミレーゼは、自分の足元にぬかずく男を冷めた目で見下ろしながら、再度問いかけた。

「エリルがまたライラを連れ出したのでしょうか！」

答えに窮する厩番に、ミレーゼは鋭く叱りつけた。

「何度言ったらわかるの？ あの子から目を離してはいけないってあれほど言いきかせたでしょう。どうしようもないわね、本当に」厩舎の外では、シーラと女官たちがどうしたものかと、顔を見あわせていた。

エリル王子はミレーゼのふたつ下の実弟であり、三年後に十五歳を迎えればハリア国の第一王位継承者として承認を受ける身分だった。

ところが五年前に階段を踏み外して転げ落ち、頭を強打するという事故に見舞われてからは、ひどい情緒不安定と意味不明の行動をとるようになってしまったのだ。

食事の時にいきなり大声で笑い出す、式典の最中に奇声を発すことなどはしばしばで、最近では目を離せば厩舎に入り込み、まるで厩番のように馬の世話に夢中になっていた。

しかも、油断をすれば馬にのったままふらりと姿を消してしまい、その度に王子の探索で大騒ぎとなるという始末だった。

エリル王太子殿下は尋常ではないと、だれもが気づいていても、ゆくゆくは王位継承者となる人物。

実母がミディール妃ということあり、直接その振る舞いについて王に進言し、諫めようとする者はいなかったのだ。

ミレーゼは、自分を心配そうに見つめるシーラと女官たちの視線

に気づいてにっこりと笑った。

「姉上様、ご心配なさらないで。遠乗りのついでです。みなで手配してエリルを探しましょう。そうね、あなたたち、もしもだれを探しているのかと聞かれたなら、わたしを探しているとしてもいえないわ。わたしがあなたたちを撒いたことにもしましょう。いい？ 夕食までにエリルを見つけることができたなら、今日の落ち度には目をつぶります」

張り詰めていた空気が解け、廢番も恐る恐る顔を上げた。

その後、ミレーゼの指示で遠乗りの準備を素早く終えると、女官や廢番たちは方々へ散っていった。

「じゃ、姉上様はわたしと一緒」

ミレーゼはシーラの脇へ馬を寄せながら片目を閉じた。

「セルの森にある二条の滝の流れる場所まで、参りましょう」

木立の中に二頭の馬の蹄の規則正しい音が軽快に響く。  
澄み切った空気と、木漏れ日が心地好い。

穏やかな表情のシーラとその馬の横に並びながら、ミレーゼは唇をきゅつと結ぶ。

(母上……)

自分の母がついにシーラに手を伸ばしてきたのだ。

表面的には父であるヘルモーズ王の言葉だとしても、裏には母の存在が大きく影響していることはわかっていた。

心は、怒りで爆発しそうだった。

四歳の時、ミレーゼは大好きな母を失った。

(忘れるものですか)

忘れてしまいたいはずの出来事をミレーゼは回想する。

普通の少女であれば、心の奥底の見えない部分に封印をして決して思い出さないように、見ないように、忘れるように闇に葬り去る忌まわしき出来事だった。

九年前のあの夏の終わりの日もミレーゼは、シーラとともにいた。馬車にゆられ、避暑のために過ごしたカルル城から、首都モルカに帰る途中だった。

ヘルモーズ王の配慮で、夏の間、湖のそばにあるカルル城で過ごすことになり、ミディール妃、四歳のミレーゼ王女と二歳のエリル王子、そして十四歳のファージル王子と七歳のシーラ王女がひと夏を過ごしたのだ。

第一側妃のメイヴ妃は祖国であるナクロ国とハリアが政治的対立



状態にあつたため、休暇を過ごす気分にはなれないとカルル城での避暑を遠慮し、シーラの母エスニア妃はカーディス王子がひどい肺炎にかかってしまったため、首都にとどまったのだ。

楽しい時間はあつと言う間に過ぎていった。

ミレーゼにとつても、これまで同じ宮殿にしながら言葉をかわす時間が限られていたシーラやファージルと、母親の目はあつたものの一緒に過ごせたのは貴重な思い出となった。

母は何かにつけて、エスニア妃とその子たちのことを非難したが、城の花苑で出会う違うたびに、ほほ笑みかけてくれる三つ年上の姉シーラ王女は、母の言葉を越えて憧れにも似た存在だったのだ。

むしろ、母が会うことを妨げようとすればするほど、一緒に歌をうたい、花苑で遊びたい思いにかられた。

その願いが、カルル城でかなえられたのだ。

母もいつになく大目に見てくれるようで、ミレーゼはすっかりごきげんだった。

そして、三日ほど早くシーラがモルカへ戻ると知ったときは、自分も一緒に帰りたいと言い出す始末だった。

初めはミレーゼの言葉にも耳さえかさなかつたミディール妃も、とうとう折れて、王子たちよりもひと足早く帰ることをしぶしぶ許してくれた。

カルル城を出た馬車は、おしゃべりに興じる小さな二人の王女を乗せて走り続けた。

その途中の花畑でミレーゼは、母ミディール妃の大好きな薄紫色のアインの花畑を発見して馬車を止めさせた。

「お母様に、アインのお花を差し上げたいの」

「ここでもミレーゼ姫はわがママを發揮して、お供の者たちを困らせた。」

「お母様のところに戻って！ お花をさしあげるの。そしたら、あとはわがママ言わないから」

ミレーゼは侍従に、怒り、命令し、泣きながら懇願した。

侍従は困った顔で説得を試みたが、ミレーゼは頑としてその言葉をきかない。

まだ城からそう離れていないこともあり、側近の侍従はあきらめてカルル城に引き返すことを決めた。

夏の間、おつきの者たちは四歳のミレーゼ王女のわがままにさんざん振り回されて、心身ともにヘトヘトになっていたのだ。

首都モルカまでは七日間の旅路である。

一度カルル城に戻って、ごきげんさえ取り戻してくれれば、帰りの旅は楽になるだろう。

そう考えて引き返すことにしたのだ。

カルル城に到着すると、幼い王女はシーラを馬車に残し、両手いっぱいのアインの花を侍女と自らの腕に抱えて、裏門からカルル城に忍び込んだ。

母を驚かせるのだと笑顔で花を見せる王女の愛らしい姿に、カルル城に残っていた女官たちもすすんでミディール妃が私室にいることを教えてくれた。

「エリル殿下はお休みされていますし、来客の予定もございません。午前中はお一人でいらっしやいますよ」と。

ミレーゼは、そつと近づいて母を驚かせようと浮き浮きしながら、部屋の扉を静かに開けた。

だが、そこに母の姿は見えなかった。

どうやら部屋の奥のテラスのある寝室にいたようだった。

ミレーゼは、侍女たちに待っているように命じると、寝室のドアを音を立てないように押し開いた。

そして、目撃してしまう。

母以外だれもいないはずの寝室のテラスのそばで、ミディール妃と男がなにごとかを親しげに囁きながら、抱擁を交わしている姿を。

そして、聞いてしまう。

「ファージル王子の命は、今日の遠乗りで失われます」

「頼みましたよ。ガーゼフ」

ミレーゼは身を翻して、駆け出していた。  
何が起きたのかわからなかった。

ただ、一刻も早く母のいるこの場所から逃げ出したかったのだ。  
気がついたときには、門の前で待っていたシーラ王女の馬車の前に茫然と立ち尽くしていた。

両手に抱いていたはずの薄紫色のアインの花は、一輪も残っていなかった。

「いかがされましたの？」

ミレーゼと後から息を切らしながら追いついて来た女官のただならぬ様子を見て、シーラは驚いてたずねた。

「つきり大はしゃぎしながら戻ってくるとばかり思っていたのだ。」

「帰る……」

うつむいたままのミレーゼの瞳からは、涙がとめどもなくあふれ出していた。

自分が何を見たのか、何を聞いたのか、小さな王女はわけがわからなかった。

ただ、鼓動が大きく胸を打ちつけていた。

心が悲鳴をあげていた。心が……痛かった。怖かった。悲しかった。戻らなければよかった。

（あれは、お母様じゃない。あんなのは、お母様じゃない）

ミレーゼは小さな唇をかんだ。

なにか大切なものが崩れて行く予感が包む。

シーラ王女や女官たちが、どんなになだめても、あやしても、モルカへの帰路の間、ミレーゼはただ泣き続けるだけだった。

そして、王宮へ帰った一行を迎えたのは、ファージル王子逝去の悲報だった。

遠乗りに出た際、突然ファージル王子の馬が暴れだし落馬したのだと、同行の侍従はヘルモーズ王に報告した。

それを知ったとき、ミレーゼの小さな体はガクガクと大きく震え出した。

(わたし……聞いた……)

だが、それはだれに告げることもないまま時は流れていった。

三年後、公務に出たエスニア妃とカーデイス王子の乗った馬車が、崖からの落石の下敷きになって不慮の死を遂げたとき、七歳になっていたミレーゼは、小さな胸にずっと押さえ込んできた秘密をシーラに打ち明けたのだ。

ファージル王子の死が自分の母と、ガーゼフ伯爵のたくらみごとだったということ。そして、今度の二人の死もきつと事故死などではないということ。

あの日から、ミレーゼは母を常に懐疑的に見るようになっていた。母の前では良い子を装っていたが、裏切られたシヨックはいやせるものではなかった。

母とガーゼフ伯爵が密会するのを目にするたびに、嫌悪感が生まれた。

その上、一年前に生まれた弟のグリトニル王子がガーゼフ伯爵との間にできた子供ではないかという、下びた噂を宮廷内の夫人たちが囁くのを耳にするたび、ミレーゼは花苑の中で泣き続けた。

「お母様なんて大っ嫌い！」

澄み渡った青い空に向かい、ミレーゼは耐え切れなくなってついに大きな声で叫んでいた。

「ミレーゼ、母上様のことをそのように言ってはなりませんわ」

馬上の二人は、軽快なリズムでセルの森を速足で駆けていた。

「だって、本当のことだもの。いいの、だれも聞いてやしないもの。姉上様から母上様や兄上様方を奪っておいて、今度は姉上様をリンセントートスなんてちっぽけな国の側妃にするなんて許せないわ。しかも、ラシル王なんて年寄りじゃない」

ミレーゼは吐き捨てるように一気にまくし立てる。

が、それでも困ったようにただ微笑むシーラを見て、ミレーゼは何かを決意したように厳しい表情をつくる。

「お父様と会って、姉上様のかわりに、わたしがリンセントスへ嫁ぐといえますわ。だれが行ってもいいのなら、わたしがまいります」

「ミレーゼ」

シーラは手綱を引くと、歩みを止めた。あわててミレーゼも姉に習う。

「リンセントスへ嫁ぐのは、わたくしの務めです。今のお言葉は決してこの先、父上にも申し上げることはありません」

「姉上様？」

いつになく厳しい姉の口調に、ミレーゼは戸惑った。

「あなたがわたくしを思ってくださいださるのとはとても嬉しいのです。ですが、あなたにはご自身の道が用意されております。わたくしのことは気になさらずにいて。その優しいお気持ちだけで充分ですわ」

ほほ笑みを浮かべると、シーラは再び歩を進めはじめる。

ミレーゼは、その姉の後を追いながら唇をかんだ。

しばらく二人は無言のまま、ひずめの音だけが森の中に軽快に響いていた。

やがて水の勢いよく流れる音が聞こえてくると、前方に滝が現れた。

「姉上様方！」

滝の落ちる音にまぎって、少年の声が聞こえて来た。

見ると滝壺のそばに真っ白な馬と、上等な布地で織られた紺色の上着を来ている少年が手を振っていた。

シーラとミレーゼ、二人の王女は少年に近づくと、馬から降りて手近な木に手綱を結んだ。

「うまくいきましたね」

「あたりまえよ。それにしても臭くつてよ。馬小屋の臭いがするわ、エリル」

ミレーゼは辛辣な言葉を放ちながらも、弟王子のしばらくぶりに見る明るい笑顔にホツとした気分になる。

ここにいるのは狂態を演じるエリル王子ではなかった。青みがかつた髪は風にそよぎ、その澄んだ碧い瞳は知性さえも映し出していた。

「これは失礼。姉上様も気になりますか？」

エリルは、五つ離れた美しい姉に遠慮気味に聞いたが、シーラはゆっくりと首をふった。

「とんでもないわ。あなたこそ、おつらいでしょう。よく辛抱なされて……」

エリルはあわててその言葉を遮った。

「こうして生きていられるのも、姉上様方のおかげです。わたしはこれでも結構楽しんでいきますから」

エリルは笑った。

四年前に、実の母から命を狙われたことなどみじんも感じさせない笑顔で。

「それでどうなの、エリル」

ミレーゼの問いかけに、弟王子は真顔に戻ると、深いため息をついた。

「父上は……以前の父上とは違います。なんというのか……たまに……わたしのことを知らない人間のように見えるかと思えば、突然いつもの父上に戻られるのです。でも、またすぐに、そのご自身の言

われた言葉を忘れられてしまつて……」

三人は岩場に腰をおろすと、頭上から降り注いでくる力強い滝の流れに視線を注ぐ。

「ご病気なのかしら」

ミレーゼはポツリとつぶやいた。

五年前、エリルは七歳のとき、宮殿の大階段から落ちて十日間も意識不明の重体となったことがあった。

人々は王子が階段を踏み外した不幸な事故だと認識していた。

だが、真実は違った。そして、それを知っている者がいたのだ。

自分の背を突き飛ばした者がいた。エリルは、はつきりと覚えていた。

階段の最上階から転がり落ち、全身を強打して痛みと苦痛で意識を失いかけている自分の姿を、薄笑いを浮かべながら見ている男の顔を。

エリルは意識がもどり、死線を越えた自分をみて喜びに涙ぐむ人々をみても、男の薄笑いと背中に残る手の感触が今にも蘇り襲いかかってくるようで、自分が突き落とされたことを知らせたくても、思うように声が出せなかった。

治療にあたつていた術士や侍従に問いかけられても、うなずいてみせるだけの状態が続いた。

そんな時に、仲のよい姉のミレーゼが心配して見舞いに訪れたのだ。

ミレーゼは、エリルの寝所からお付きの人々をすべて隣の部屋に追い払った。

そして、涙をポロポロとこぼしながら、弟の手を両手で握りしめて笑顔をつくり、何度も「よかったね、よかったね」と繰り返し言った。

エリルの心にミレーゼの優しい心が伝わって来て温かなものが全身に広がった。

そういえば、母ミディール妃はこんなふうに自分を見舞ってくれただろうか……とエリルはぼんやりとして意識の中で感じていた。

回復を祝う人々の中、ひとり脅えたような瞳をエリルに向けていた母。

それを思い出したとき、エリルは姉に自分が階段から落ちたときの話になにげなく喋りはじめていた。

最初は、エリルが話せるようになったのを見て喜んでいたミレーゼだったが、話を聞くにつれ今度ははひどく動揺しだした。

エリルの話をひととおり聞き終わったミレーゼは弟王子にあることを約束をさせた。

ひとつは、階段から突き落とされたことを、だれにも話さないこと。ふたつめは、しばらくの間、言葉が話せないふりをして過ごすことだった。

そして三日後に再び見舞いに訪れたミレーゼは、理解不能な難題をエリルに持ちかけた。

すなわち、「これからは気が触れた王子を演じるのよ」というものだった。

まだ当時七歳のエリルには、それがどういうことなのか全くわからなかった。

しかし、それをしなければ再び命を狙われるかもしれないこと、それがハリアの未来に役立つことなのだと、涙ながらに訴えられ、姉の気持ちに應えるかたちで、教えられたとおりに、食事の最中に大声をだして歌ったり、笑ったり、奇声を発したりして見せるようになった。

奇態を演じはじめたころは、多少ぎこちなかったものの、徐々に侍女や臣下たちが驚く顔をみるのが楽しくなり、エリルの演技には磨きがかかっていった。

宮中の人々はエリルの姿や奇行を見るたびに、階段から落ちて頭を打ったの原因で、王子の病が悪化している、王家の王子には不幸がつきまといっているのでは、といった不吉な噂をするようになった。



第一、第二王子を事故で亡くし、第三王子までがひん死の重症をおったとなつては、無理からぬことでもあつた。

重臣たちも、式典などの公の行事にはそれとなく理由をつけては、エリルの出席を控えさせるようにしていた。

これ以上噂が広まり、国民や、しいては他国にまでそのことが届くことを恐れたためである。

日を追うにつれエリル王子に対する人々の反応が変化を見せはじめた。腫れ物に触るのを恐れるように近づくのを避ける者、エリルの存在に氣づいても礼さえしなくなる者、病いが良くなると信じて以前と変わらず接してくる者。

幼いエリルは、孤独を味わうとともに人間の本性をいやというほど知ることになった。

何度か見舞いに來た母のミディール妃さえも、三歳になった弟のグリトニル王子へ関心を向け、日に日に対面に来る日が減つていった。

そうした生活を送りながらエリルは時々城からふらりと姿を消しては、姉たちと密かに会い、悲しいことやつらいこと、見聞きしたこと、廷臣の人柄などを話してきた。

自分を突き落とし、そして発見者をよそおつて王から厚く遇せられた男がガーゼフ伯爵だということも、しばらくしてミレーゼから聞き知つたのだ。

「この四年間、姉上様方から言われた通りにして來たおかげで、わたしがどんな場所に入入りしても、怪しむ者はいなくなりましたからね。父上の部屋や、合議の間へもふらふら入っていきます。よほどのことがなければ、ミレーゼ姉上の次に手がかかる王子ですからね、誰も相手にしたがりませんよ」

ミレーゼの眉がピクリと動いたが、エリルは氣づかないのか自嘲気味に笑つて見せる。

エリルに、十五歳の王太子認証を正式に受ける日まで氣が触れた

王子を演じるように、という案を出したのは、ミレーゼに相談を受けたシーラだった。

ハリアでは第一王位継承者が成人と認められる十五歳になると、王太子として国の政治に対しても王に次ぐ発言力を持つことが許されるのだ。シーラは「兄たちのような運命を、歩ませたくはない」と言って、この案をミレーゼとともに考えたのだった。

「でも、父上だけはずっと変わらないで接してくださいました。執務中に部屋へ入れば厳しく叱られましたし、中庭でお会いすれば王としての大切なことを真剣に話してくださいました。それが……最近は今折、わたしに向かつて、『レイアはどこだ』『その小姓、レイアを呼んで来なさい』と他人を見るような目で、激しく訴えられるのです。姉上、レイアという名の方はあの亡くなられた……？」  
エリルから見つめられたシーラは、「そう」と小さくつぶやいてから、静かに応えた。

「レイア王妃のことだわ。十九歳の時、病いで亡くなられたこの国の正妃だった方。父上のお部屋の奥の書斎、書棚机の横に壁飾り布があるでしょう。その布に隠すように、ある女性の肖像画がかけてあるの。母上が亡くなった後、『なぜ、正妃をとられないのですかとちよつぱり意地悪な質問をしてしまったとき、一度だけ見せてくださったことがあるの。とても愛らしくて美しい若い女性だったわ。それがレイア王妃。『自分が生涯愛し続ける妃は彼女だけだ』と言ってられたわ。レイア王妃の肖像画をじつとご覧になりながら……』  
それを聞いたミレーゼとエリルは、複雑な面持ちで川の水面に映る自分たちの姿を見つめた。

シーラには、二人の胸の中の思いが自分のもののように感じとれた。

お父様は母上を愛しては下さらなかったの？

ヘルモーズ王に聞きたくて、聞けなかったもうひとつの質問。

あるとき浮かんだ同じ疑問を、今この二人の王女と王子は感じているに違いなかった。たとえ、実の母をうとましく思っていて、

母を愛していない父との間に、自分たちが生まれたとは考えたくない。自分は愛されて生まれたと、そう信じたいのだ。

「大丈夫よ。父上は、わたしたちをとて愛して下さっているわ。わたしたちの母上以上にね」

シーラは、ほほ笑んでふたりを見つめた。

「本当に？」

ミレーゼが心配そうに問いかける。

「ええ」

二人の姉はにこやかにほほ笑んだ。

ヘルモーズ王のレイア王妃の肖像画を見つめる瞳と、そのあとで自分を見つめた瞳は確かに違った。だがそれは愛情の種類が違うからなのだという事をシーラはその時、なぜだかわかってしまったのだ。

父の瞳がそう語っていたように覚えている。

「それも、平等に」

「でも、ならどうして、姉様をリンセントースなんて、侵略を仕掛けた国にお嫁に行かせようとするの？　せめてナイアデスのフエリエス王なら許せるのに。あそこなら国としてもまあまあだし、王だつて二十三歳にもなるのにまだ后をめとっていないのでしょうか。姉様となら、きつとお似合いだわ」

ミレーゼは、納得いかないといった顔で怒ったように言う。

「そのことなんですけど」

話がシーラの婚約のことにおよんだ時、エリルが、二人の姉に真剣な視線をなげかけた。

「さきほど話した、父上の様子が最近変だということと関係あるように思うのです。その亡くなられた正妃を探されたり、わたしのことを忘れてしまうようなご病気になられているとしたら……だとして、政務をなにごともなくされているのは、逆に不自然ではないでしょうか」

「奇妙なわが子に普通に接する……っていうのも、変といえば変よ」

ミレーゼは、さきほど何気なくエリルに言われた言葉を根にもっていたのか、厭味をこめて空に向かってボソリと口にした。が、エリルはハツとしたようにミレーゼを振り返った。

「そういわれると……そうなのかもしれない……父上が普通に接して下さるのがとても嬉しくて……やはり、父上だけはわかって下さっているんだと思いたくて……。気がつかなかった。」

その顔があまりに思い詰めたものだったので、ミレーゼとシーラはなんとか弟王子を元気づけようと、おもしろい話をたくさんしてみせたが、その日エリルは考えこんだまま笑顔をみせることはなかった。

気がつくくと、ヘルモーズ王は執務室の自分の椅子に腰かけていた。王はキヨロキヨロと琥珀色の瞳を動かした。

（わしは、なぜここにいる？）

起きたばかりで中庭を散策しているところだった。たったいま、あずまやに腰かけ、朝のひんやりとした空気に身をおき、鳥の鳴き声に耳を傾けようとしていたのだ。それが、まるで魔法にあったように、いま、執務室の椅子に座っている。

しかも、立ち上がり、窓の外を見つめれば、陽が傾き一日が終わろうとしているではないか。

王は片手で拳をつくり、額に手を当てた。

（また……か……？）

自分の身になにかが起きているのを、年老いた王は感じていた。だがそれは、途中の記憶がないというよりは気がつくと突然、自分の体だけが別の時間と場所へ移されているといった感覚だった。

自分の記憶に途切れがあるかもしれない、という疑いすらもっていなかった。

（何者かが、わしをどこかへ遠ざけて、その間にこのダーナンを滅ぼすか、乗っ取ろうとしている……）

王は、場所と時間の突然の移動に出会うたびに、その思いを強めはじめていた。

（あの指輪さえあれば……）

王は亡くなつた父、先王ヒューリツヒへの恨みを思い返していた。王位継承時に、王家代々に伝えられていた《エボルの指輪》をヒューリツヒ王は、ある魔道士の予言に従いどこかへ隠してしまったのだ。

（あの指輪さえがあれば、わしや亡き王子たちにも守護妖獣が下つたものを……。父はハリアを滅亡に導く狂王じゃった。この国がい

とおしくはなかったのか……)

王は自分の手の甲をじつと見つめながら、あるはずもない指輪が、おのれの指にはめられているところを想像しては、重いため息を吐いた。

(あれさえあれば、わしを狙う何者かに脅えることはない。王子たちもむざむざつまらない事故などで命を落とすこともなかった。そして、指輪さえもたないダーナンなど恐れるに及ばんだ……。父は一体どこへ隠したのか……)

陽が沈むのをじつと見ていたヘルモーズ王は、第一側妃の居館へ足を運んだ。

「まあ、ずいぶんとお早いお越しですこと。めずらしいですわね」  
側妃メイヴは王の訪問に、よそよそしげに応えた。

レイア正妃を失い、生気のない王のもとに側妃として嫁いだのが十五の時だった。

二人の娘をもつけたが、世継ぎの男の子を生むことができず、王が次々と若く美しい側妃を娶るのを屈辱の思いで眺めてきたのだ。

しかも、八年前にはハリアの侵略によって祖国さえ失った。

そして今は王子を生んだ自分の娘と変わらない年齢のミディール妃が、城の中で大きな顔をして居座っている。

レイア妃が亡くなってもなお、自分は第一夫人と呼ばれることもない。

メイヴ妃は、すでに王の寵愛を得る願うことをあきらめ、自分のために建てられた宮殿と、隣接の居館で世捨て人のように静かな暮らしに甘んじる日々を送っていた。

王は二人きりになると、疲れたように居間の長椅子に座り込んだ。

「いやみを言うものではない」

「あら、本当のことですもの」

王の隣に並んで座ったメイヴはまるで、隣人と話をするような笑みをこぼして、飲み物用のサイドテーブルにおかれたラセナ茶を一口ふくんだ。

深い緑色の髪を結い上げ、鳶色の瞳をしたメイヴ妃は、齢五十の半ばを迎えたとはいえ、凜とした美しさを秘め、宮中でもその年を重ねた美しさに賛辞をおくるものも少なくなかった。

「わしの命を狙っておる者が宮中におる」

ヘルモーズ王は、前置きもなしに本題に入ったが、メイヴは眉ひとつ動かさなかった。

「魔道士の輩のせいかはわからぬが、わしは最近気がつく」と別の場所や、別の時間にいるのだ。奴らはなんらかの術を使い、邪魔なきにわしをその場所や時間に送り、その間にはかりごとを巡らせておるに違いない。そのことをおまえには知っておいてほしくてな」  
ヘルモーズ王が震える手でティーカップを持ち上げ、茶をすすった。

メイヴはそのカップが受け皿に戻るのを確認してから、にこりともせずに口を開く。

「あなたのご相談も、今月に入って三回目ですわ」

「なにをいっておる。わしがそなたに会いに来たのは三年ぶりではないか」

王は笑いながらメイヴを見たが、側妃の瞳はじつと王に注がれていた。

「最初は奇怪なことをおっしゃると思っておりましたわ。ですが、陛下がわざわざ私のところへ嘘をおっしゃられるためにおいでになるとも思えませんでしたので、わたくしなりにお調べいたしました。陛下、シーラ王女をリンセントスへ輿入れさせるといってお話します？」

ヘルモーズ王はメイヴの最後の言葉に、目を見開いたまま言葉を失っていた。

「本日の合議で、陛下ご自身が決議されたと重臣たちが口々に言っております。次の合議では、シーラ王女出席の下、陛下直々に正式な発表とリンセントス宛の書簡にサインをされると聞いております」

「わしは……合議になど出てはおらん」

王の声は震えていた。

「いましがたまで朝の中庭におったのだぞ。それが気がつけば、執務室にいたではないか……。わしを騙るものがあるのか……。愛するシーラを、リンセントートスなどにくれてやるわけがないではないか……。だれだ……。一体だれが……」

「しっかりして下さいまし」

メイヴはヘルモーズ王の背中をゆっくりと手でさすった。

「陛下のおそばの者にそれとなく聞きましたが、陛下と別の誰かが入れかわっているとはどうしても思えません。それに信じていただけるかわかりませんが、陛下は時折、亡きレイラ様をお探しになって、侍従たちを困らせているとか。先日などは、エリル殿下にむかって『小姓』と呼ばれたと聞きました」

「わしがそんなことをするものか！」

ヘルモーズ王はメイヴの手を振り払い、声をあげた。

「知らん、知らんぞ！ そんなことがあるわけが……」

王は立ち上がろうと中腰になったまま、突然動かなくなった。

「陛下？」

いぶかしむメイヴ妃が、再び手を差しのべると、王はその手を見て逃げるように身をひるがえした。

「だれだ……。おまえは……。だれだ？ なぜわたしのそばにいる……。ここはどこだ？」

「陛下？」

「だれを見てそのようなことを言っている！ わたしはまだ王ではない。陛下は父上に決まっているではないか。それよりも、おまえ、わたしのレイラを知らないか？ レイラはどこへ行った？」

メイヴは目を丸くして、年老いた王が若者のような態度を示すのを不思議な面持ちでみつめていた。

「これほどまでとは……」

王が部屋から出て行くと、しばらくして隣の部屋から男が現れた。



三十代前後の切れ長の藍色の瞳をした男は、鋭い瞳に、涼しげな笑みを口元にたたえて優雅なしくさで側妃に敬礼をして見せる。

「メイヴ妃殿下」

男はそれだけ言うと、メイヴの次の言葉が投げかけられるまで、じつとたたずんでいた。

仮に、メイヴが声をかけなければ、その間ずっとその場に立ち続けることを男は苦ともしないだろう。

だがメイヴ妃は男を認めると、自分の向かい側の椅子にかけるようにすすめた。そして男の一挙一投足を楽しげに見つめながら、艶のあるため息をついて見せた。

「ようやつと、わたしの夢が叶う番が回って来たのう」

男も、真剣なまなざしに魅力的なほほ笑みを浮かべる。

「はい。八年の長き時でございました」

「そなたにも、ひとかたならぬ苦勞をかけた」

メイヴは男をいたわるようにじつと見つめた。

「もったいないお言葉です。妃殿下のお気持ちを察すれば、私ごとき者の立場など苦勞と呼べるものではありません」

だが、メイヴはその声を聞いているのか、遠くを見るような瞳でただ男の顔を見つめながら、静かにささやいていた。

「ガーゼフ、次の合議の日を楽しみにしておるぞ」

「御意のままに」

真夜中の宮殿。

地下通路へと続く扉の前で、エリルはしばらく前からじっと立ちつくしていた。

暗い闇の中、ランプの光だけが少年の横顔を浮かび上がらせる。エリルの右手には古びた鍵の束が握られていた。大きく頑丈な鉄製のドアには三つの鍵穴が取り付けられている。

エリルは、この扉にたどり着くまでに、何人もの見張り番の兵士の目をかいくぐり、鍵束をこっそりと持ち出して、ここまでたどり着いた。

この扉が開けられるのは十日に一度だけと決まっており、昨日がその日であったため、もう今日はだれもここへは近づくことはないはずだった。

エリルは、鍵束の中から一つの鍵を選び出すと、一つ目の小さな鍵穴へ鍵を差し込んだ。

カチリという小さな音が響く。次いで、二番目、三番目と、迷うことなく鍵を解いていく。鍵をすべてあげ終わると、エリルはドアに体を預けて、ゆっくりと押し開いた。

ドアは、低くきしむ音をたてながら、開いていった。

同時に、なにかが腐乱したような異臭が空気を染めていく。

エリルは指で鼻をつまみ息をこらしながら、手に持ったランプを扉の向こう側に突き出した。

漆黒の闇の中、かすかな灯火に照らされて浮かび上がったのは、地下へと続く石段だった。

エリルは石段を降りはじめた。

階段の脇には燭台を置くための棚が一定の間隔でつくられていたが、そこに明かりが灯されるのは、見回りの兵士が訪れるときだけ

だった。それに、彼らがここを立ち去るときに、灯火も消されるようになっていたため、周囲は常に闇に包まれていた。

慎重な足どりで、壁伝いに暗闇の中を一步一步進んで行くと、やがて水の流れる音が聞こえて来た。

(水路だ……)

エリルが、目的の場所に近づいたことを感じとった時、石段が終わりをつげた。

悪臭はさらにひどくなっていたが、嗅覚が麻痺しているのか、最初の時の吐き気をとまなうほどのものではなくなっていた。エリルは暗闇の中で目をこらした。

自らの記憶と頭に焼きつけた図面に誤りがなければ、この先に、いくつもの通路と部屋があるはずだった。

ハリア王宮の地下牢獄。

鉄格子がはめられた囚人のための住い。一つ一つ仕切られているが、大人一人が体を伸ばして眠れるだけの広さがあればましな房から、一人がやっと立っていられるだけの狭い房まで、用途により種類はさまざまだった。

ハリア国に忍び込んだ他国の人間、捕虜、犯罪者、王に逆らった者など、特に罪の重い人間がこの地下に捕らわれ、拷問を受けた。ここへ入れられれば最後、生きて出ること脱獄さえ不可能と恐れられる地下牢獄。

エリルはランプの明かりを頼りに、息をこらして牢獄の通路を歩き始めた。極力足音をたてない靴をはいているものの、漆黒の闇の中である。わずかな灯火にも虫が吸い寄せられるように、侵入者に気づいた住人たちが鉄格子のいたるところから手を差し出し、言葉にならないうめき声をあげ、エリルの気を引こうとうごめく。

エリルは自分を求める囚人たちの見えざる目を全身に感じ、内心おびえながらも、無関心を装って歩き続けた。

やがて、囚人がほとんどいない無人の房ばかりの通路にたどり着くと、エリルはその房一つ一つを確認しながら歩き、ある房の前で

足を止めた。

「デイルーラ」

エリルは、鉄格子にランプを近づけ、房の中をのぞき込みながら、そつと小声でささやいた。

「デイルーラ……」

房の隅には人とおぼしき黒い塊が横たわっているのだが、エリルの声に反応する気配はない。

「デイルーラ？」

三度呼びかけたが、その塊は一向に動く気配がなかった。

( やっぱり、もう……死んでる……？ )

エリルは、予想していたことではあったものの、肩を落とし唇を噛んだ。

王宮の地下牢獄に送られた囚人は、十日に一度パン一切れを与えられるほかは、満身に食事を与えられることもなく、各部屋の鉄格子の外側に流されている細い水路の地下水だけをたよりに命をつないでいた。その水は飲料水として使用されたが、同時に汚物処理としても使用され、不衛生極まりないものだった。時に牢番の気まぐれで毒が流されることもあった。

「ごめん……助けられなかった……」

しばらくじつと立ち尽くしていたエリルがそう言って、引き返そうときびすを返そうとした時、突然、頭の中に低い男の声が響いた。

エ……リ……ル……さ……ま……

それは、しわがれた老人の声だった。

「デイルーラ？」

エリルはあわてて、牢の中をのぞき込んだ。

だが、黒い塊が動いた気配はない。

お待ち……し……て……お……り……ました。

ときれとぎれに届く声は、やがて徐々に聞き取りやすいものへと変化していく。

「デイルーラ……なんだね」

エリルは房の中の塊をじつと見つめた。

そこに……ある……わたしの……体は……すでに……腐りはじめ……  
て……おります。けれど……わたしの心は、あなた様が……約束どおり……  
来てくださるのを、ただお待ちしてありました。

エリルは戸惑いながらも、うなずいた。

エリルがこの地下牢獄へ忍び込んだのは、今回で二度目だった。

三年前、王宮の中のある場所を探索していたときに、偶然この地下牢獄の存在を知ったのだ。

その時は、ただの好奇心から見回りの兵士たちのあとをこっそりつけてもぐりこんだのだが、かなりの距離をおいていたので、気がつくといよいよ牢獄の中で兵士たちの姿を見失い、すっかり迷子の状態になってしまっていた。

薄明かりだけが灯る闇の中で、迷路のような牢獄から出られなくなってしまうかと思ひ込んだエリルは、恐慌状態に陥りはじめた。

子ども心に、とにかく気を落ちつけようと自分に言い聞かせ水を飲もうと、水路の水に手を伸ばした時、厳しい声が制止した。

「その水に触れてはなりません」と。

声の主は、エリルの真後ろの房にいたディルラだった。

ディルラは、エリルが王子であることを知っていると告げると、出口への道順を覚えてくれたのだ。

そして、自分が先王に使えたこともある魔道士であったこと、大切な杖をとりあげられ能力を失ったこと、《エポルの指輪》に亀裂が生じつつあることをエリルに話した。

だが、そのときのエリルは心身ともに憔悴しきっており、一刻も早くこの牢から抜け出すことだけに心を奪われていたので、なぜ囚人である者が自分を助けてくれるのか疑問さえも持たずに、逃げるように立ち去ったのだった。

「僕が王になったら、あなたをここから出してあげる」と言葉だけの約束だけを残して。

だが、それから三年の間、エリルは闇の中で迷った恐怖と牢獄の

酷い様子が頭から離れず、地下へ降りることさえ出来なくなっていたのだ。

それでも、ディルラと交わした約束を果たすためにも、自分が王になる前に牢獄へ再び足を運ばなければいけないと考えていた。そして、牢獄内の凶面を覚え込むなどの準備を続けてきたのだ。

「三年前、助けてくれたお礼をまだ言っただけでなかった」

エリルはディルラであったものに静かに語りかけた。

いいえ……光を見せてくださいましたので、そのお礼をしたま  
でのこと……。

「光？」

懐かしき温かな光でありました……あなた様がわたしをここへ捕らえ、つないだ王家の一員であることさえ、かまわなくなり、つい教えてしまっておりました。

老人の声は静かに流れていく。

王子よ……《エボルの指輪》の亀裂ははまだ止まってはいない様子……。

「そのことなんだ」

エリルは小さく息を吐いた。

「父上は《エボルの指輪》を探していられる。指輪さえあれば、国は守られ、守護妖獣を得られると聞いた。教えてほしいんだ。祖父ヒューリツヒ王が隠された指輪がどこにあるのか」

《エボルの指輪》はハリア国の守護神、夜と闇を司りし安らぎの神・エボル神より、ハリアを治める王に与えられたものでございます。そして、そこにはエボル神から指輪を与えられるとき、ハリアの初代王グルディが交わした誓約が存在いたしました。

「誓約……？」

エリルは初めて聞く言葉に戸惑った。指輪に関してはさまざま  
な書物を読み、調べていた。

代々の王が継承すべき神器の一つであり、王直系の一族に守護妖獣を与える力を持つものが《エボルの指輪》であるということ。だ

が、指輪に関する記述はすべてにおいてその点に限られており、由来や誓約について書かれたものを見たこともなかったのだ。

ディルラは、エリルの問いに答える。

初代王グルディは「国と民を守るためのみの力」をエボル神に誓うことで、指輪を得たのです。

「国と民を守るため…のみの力…？」

民を慈しみ国をおさめる力…王家の血を守るための力…を、神から受けるかわりに、決してほかの国へ刃を向けることはしない…という誓い。

エリルはその言葉に強い衝撃を受けた。

「なぜ…そんなことを…知ってる？」

わたしは諸国を旅し続ける魔道士でありました。神々の物語を語り、先読みを告げること。それがすべてでございました。ヒューリツヒ王に仕えはじめたころ、わたしにはいくつもの先読みが訪れたのです。そのうちのひとつが、ハリア王家が滅亡の道を歩んでいるというものでした…。すでに先の王の代より民へ圧政を始めていたこともあり、わたしは指輪にまつわる誓約の話とともに、先読みの内容を王に告げたのです。ところが、新参者のわたしが王の厚い信頼を得るにしたがい、それを妬んだ他の魔道士たちの画策により、わたしの王家滅亡の先読みは王の怒りをかい、その結果、地下牢へ投げ込まれたのです。

「その時…まだ指輪はあったの？」

神との誓約を破ると、まず初めに守護妖獣の力は失われ、次に王が《祝福》を受けても現れなくなってしまうのです。その時に王は神からの警告に気づくべきでした。しかし、守護妖獣を得られなかったヒューリツヒ王は自分を認めぬ指輪に憎しみを抱き、どこかへ隠してしまった様子。わたしがこの国へ来たときには、その指に指輪はございませんでした。

エリルは初めて聞く、神と指輪の話にただ衝撃を受けるだけだった。

「それで……エボル神との誓約を破ったままになつたなら……？」  
エリルは動揺を隠せずに聞いた。

わたしの 先読み はいまだ無効となつてはおりません。ですから、守護神との誓約を破れば、国が滅びることは必定。

「……………」  
エリルは自分の体を揺さぶるように、体内を大きな波が打ちつけるのを感じた。

「その……前に会ったとき、指輪に亀裂が入っていると聞いていたけど……………」

見えるのです。ハリア国が圧政を行うたびに……他国へ侵略の戦さを起こすたびに、《エボルの指輪》の黒く輝く石の中に、少しずつ細かなひびが入っていくのが……。

「ハリアを守るためにはどうすればいい？ 指輪を元に戻すにはどうすればいい？」

エリルの声が震えていた。全身が汗で冷たくなっていくのがわかる。

指輪を得る資格を持つのは”民の安らぎを求める者”。誓約を破りし王のままでは、国は滅びます。新しい王をたて圧政をやめ、侵略した国や王、人々を元のままに返すこと。

「……………できない」

エリルの喉はカラカラに乾き、声はかすれていた。

「侵略した国の王も…王妃も……………多くの民も殺してしまっている……………」

指輪の亀裂を止め、元に戻すのも同じこと。指輪を見つけだし、新王が国の平定に力を注ぐことをエボル神に誓い、侵略した国の王人々を元のままに返すことができたとして、果たして、許されるかどうかは……………エボル神のお心ひとつ。

「……………」

エリルは言葉を失っていた。

（ハリアが滅亡する……………？）



強国を願い圧政を敷き、小さな侵略を始めていたヒューリツヒ王の時代から、いやもつと前の王の代からののだろうか？ 守護神との誓約は忘れられ、失われ、破られてしまっていたのだ。

だが……。

デイルーラの言葉を簡単に信じるべきなのか……という、疑念もエリルの心の中に沸き起こってくる。

（嘘であってほしい……。ヒューリツヒ王に、牢獄に入れられて、死んでしまったから……）

真実か否かはご自身で確かめることです。

デイルーラはエリルの逡巡を見透かしているようにそう告げた。

《エポルの指輪》は、はるか南、水のない大地を越えた山の中、巨大な迷路の中、深い闇の中に……眠っております。

「南の、山の中……」

デイルーラの声が再び聞き取りにくいものへとなっていく。

約束どおり……来ていただけ……感謝をしております……わたしの役目は……これまで……。

デイルーラの消えかかる声に、エリルはあわてて叫んだ。

「待ってくれ、そこはどこなんだ？ もっと詳しく教えてくれ……！」

わた……に見える……伝え……られること……れが……すべ……て……。

「なら……！ あなたのことをだれに伝えればいい？ 一族の名は？」

……わ……が……一族……の名は……アン……ナ……。

「デイルーラ？ デイルーラ！？」

それっきり、デイルーラの声はエリルの呼びかけに二度と応えることはなかった。

ひっそりとした暗闇の中で、エリルは茫然と立ち尽くしていた。

（嘘なのか……真実なのか……）

ランプの灯火に照らされたエリルの顔は、人形のように白くうつろだった。

合議を翌日に控えた夜、エボル神へ祈りを捧げる薄暗い礼拝室に、静かに祈りを捧げる人物の姿があった。

正妃のために特別につくられた後宮の礼拝室。

代々の正妃はここでさまざまな祈りを、夜と闇を司る安らぎの女神・エボル神に捧げて来たのだ。

礼拝室の正面には、エボル神を描いた彫刻画が真っ白な壁一面に描かれている。

長いまつげと瞳をとじた美しい女神の横顔。どこまでもゆらめく長く細い髪。祈りを捧げる組んだ細い指。それらすべてが、揺らめく幾つものろうそくの明かりに照し出され、幻想的に浮き上がっていた。

暗い室内には、燭台用の小さな棚穴が壁のあちこちにつくられ、そこに絶えることなく灯されているろうそくの小さな灯が、まるで宇宙にきらめく星々のように瞬いている。

いま、その礼拝室の長椅子にミディール妃の姿があった。

「なにを祈っておいでですか」

低く響きのよい男の声が、後ろの扉から呼びかけた。

「ガーゼフ、待っていたのよ」

ミディール妃はほほ笑みを浮かべながら椅子からゆっくりと立ち上がり、待ち人を見つめる。

そこには、ガーゼフ伯爵のすらりとした長身がたたずんでいた。

ガーゼフを見つめるミディール妃の碧い瞳は、臣下に対峙する時とは明らかに違った色を帯びている。

「いよいよ明日よ。明日の合議で、あのエスニアの娘がリンセンテートスへ嫁ぐ正式な承認を得られるのよ」

ガーゼフは、ミディールの少女のようにはしゃぐ口調にほほ笑みをたたえながら歩み寄ると、側妃の白くしなやかな手を取り、そっ

と口づけをした。

「なにを、よそよそしいことを……」

臣下の礼をとるガーゼフを妖艶なほほ笑みを浮かべながら見下ろしたあと、ミディールは男の頬を両の手の平で包みこみ、魅惑的な男の深い藍色の瞳をうつとりとした表情で見つめた。

そこには、この数年間、男とかわし続けた時間と、自分へ向けられた愛情に対する自信に満ちあふれていた。

「ですが……ここは神聖な場所でありますから」

ガーゼフは、壁に彫られたエボル神を横目で見ると、躊躇したように瞳を伏せる。

「かまうものですか」

ミディール妃は、愛する男の瞳に自分の瞳を重ねるようきのぞき込んだ。

「神への誓いなど、あの時二人で捨てしまったではないの。それに、ここであなたを待つことを決めたのは、わたくし……」

ささやく赤い唇が、男の唇に触れようとした時。

「ミレーゼ姫が、こちらにお越しになられるご様子……」

ガーゼフの口から娘の名が出た瞬間、ミディール妃は唇を固く結びと男から顔をそむけ、なにこともなかったかのように椅子に腰を下ろした。

「また、シーラのことね……。シーラ、シーラ、シーラ。あのエスニアの娘のせいで、わたしの子達までわたしから遠ざかっていく。

そして、こうやってわたくしとあなたとの時間まで奪っていく……」

「それも、もうすぐ終わりでございます。シーラ王女の婚儀が終わったあかつきには……」

「陛下のご病気を公にして、とりあえずエリルを後継にたてる。そうすれば、すべてはわたくし達の思いのままに……」

ミディール妃はエボル神の像に手を合わせて、形式的に祈りを捧げる姿勢をとった。

「あの古いぼれを……王宮の奥深くへ幽閉する日が来るのね。ガー

ゼフ、あなたはエリルの補佐役として、わたくし達親子のそばに常にいることができるのよ。それに……グリトニルが玉座に座ることだって……」

夢見るような瞳が、臣下としての距離を保つガーゼフに注がれ、男もまた熱いまなざしをミディール妃に返す。

「ミディール様……わたしはこれから、シーラ王女とともにリンセントートスへいく女官を連れに領地へ戻ります。ですから、明日の合議には出られません、魔道士のノアにすべてを任せていただきますので、ご心配なさらぬよう。五日後の夜には戻ります」

「その女官は……直接あなたが迎えに行かなくてはならないような娘なの？」

ミディール妃の眉がピクリと動いた。どんな理由であれ自分の恋人のそばに、他の女が近づくと気がいらぬのだ。

「ミディール様のお役に立つ娘です。シーラ王女が二度とリンセントートスからハリアへ戻ることができないようにするには、わたした達の息のかかった者をシーラ王女に同行させる必要があります。ご心配なく、命令に忠実な、まだ青臭い小娘ですよ」

ガーゼフの言葉に冷静を装いながら小さくうなずいたものの、ミディール妃は不満な様子だった。

だが礼拝室の外がざわめき始めたのを耳にすると、その表情もきれいに消し去り真摯に神に祈りを捧げる表情をつくりだす。

ミレーゼが女官たちの制止を振り切り、シーラ王女の婚儀を取り消させようと母のいる礼拝室に向かっていているのだ。

「では、明日の夜」

ガーゼフは、静かに一礼すると、ミレーゼと顔を合わせる事のないように別の扉から退出して行った。

翌日、ミディール妃はヘルモーズ王と二人きりで朝食をとっていた。

これは忙しい王とのつかの間の時間をもつために、王がつくりだ

した側妃との語らいの時間だった。だが、それはミディール妃にとってさして楽しいものとは言えなかった。なぜなら、この二人きりの朝食はシーラの母であるエスニア妃が亡くなってから自分にまわって来た役割であったからだ。

「ミディール」

食後のラセナ茶をミディール妃が自ら注ぐのを眺めながら、王は苦々しい顔で一番若い夫人の顔を見た。

「今日の合議で、わしはシーラの婚儀を取り消す。だれにも邪魔はさせんぞ」

「陛下……もちろんですとも。だれにもあなたの言葉に逆らうものなどおりませんわ」

ミディール妃はヘルモーズ王の言葉に、王自身が自分に起きている変調を自覚しはじめているらしきことに内心驚きながら、しかし穏やかな表情のままにこやかに答えた。

「おまえが、エスニアを憎んでおったことはわしとて知らぬわけはない。息子たちの死も事故だと思っではおるが……」

「陛下」

ミディール妃は、ティーポットを台に戻すと、王が自分に疑いを抱いていることにシヨックを受けたように涙ぐんだ。

「では……エリルが階段から落ちた事故も事故ではないとおっしゃるのですか？ わたくしのエリルも、あの事故で死んでいたかもしれないのですよ。わたくしの知らぬ亡き殿下方の事故が、わたくしのせいだとおっしゃるのなら、エリルの事故もわたくしのやったことになりますわ。なぜわたくしがそんなひどいことを……」

真珠のような涙が頬を濡らすと、王はあわてたようにとりなした。「すまん……最近、気が高ぶっておってな……」

そう言うと、一気にラセナ茶を飲み干す。

「シーラのこと気がなつてな……。シーラの婚儀はわしの本意ではない。あの子の婚儀はわしが、じっくりと……決めてやりたい……。のだ。兄も……母も……いなく……な……っ……」

ヘルモーズ王の言葉が、途切れるとほぼ同時に、その指からティ  
ーカップがコトリと落ちた。

「陛下？ どうなされたのですか？ 陛下！」

ミディール妃が王のそばに駆け寄る。

だが、耳元で呼びかけても王は眠ったように目を覚まさない。

ミディール妃の口元から笑みがこぼれた。

「ノア、入ってらっしゃい」

側妃に呼ばれて隣室から姿を現したのは、王の身边に仕え雑用な  
どをつとめている青年だった。

外見は大柄なヘルモーズ王とほぼ同じような体型で、一見物静か  
に見えるが、ミディール妃は逆にどこか陰湿さをただよわせるその  
容貌があまり好きにはなれなかった。

「合議の時間はもうすぐよ」

「はい」

ノアはうなずくと、慣れた仕草でヘルモーズ王の首にそつと手を  
添え、なにごとか呪文のような言葉を唱えた。

ノアが魔道士であるということは、ガーゼフとミディール妃しか  
知らない、

王の記憶の病ははじめ軽い老人特有のものであったのを、ノアが  
術をもちいてさらに進行させ、悪化させたのだ。

いつもなら、ガーゼフも一緒にいるのに……と、ミディール妃は  
心細く感じる。

ノアはその心を読んだかのようにミディール妃を振り返った。

「ご安心ください。いつものとおりうまくいきます」

見つめるノアの灰色の瞳を、ミディール妃はうなずきながらなぜ  
か不安な面持ちで見つめていた。

縦に細長い合議の間くに、再び重臣たちが集った時、宮殿の鐘が高く鳴り響いた。

今日の合議でシーラ王女のリンセントースへの輿入れが正式なものとなり、書簡が送られることになる。

ダルクス大臣は髪の毛がまだ今ほど白くなっていなかった若きころ、敬愛の念をもって接してきたエスニア妃の面影をシーラ王女に重ねて、大きなため息を幾度も吐き出していた。

「近頃の陛下のおふるまいは、ミディール妃の影響おおいにありと見ざるをえないな」

ダルクス大臣の横の席で、旧友でもある國務長官のバジルが独り言のようにささやいた。

「だが、ダーナンの動きを考えれば、リンセントースとの関係は無視できんか……」

冷静に割り切るその言葉に、ダルクスは思わずバジルをにらみつけ、苦虫を噛み潰したような表情でヘルモーズ王が現れるだろう幕越の玉座へ視線を戻した。

「ならばラシル王ではなく、せめてリンセントースの王子たちのうちいずれかの妃にというのが本当ではないか。若い身空で陛下に嫁いだミディール妃の恨み返しを見せつけられているようで胸がむかむかしてくるわ」

ダルクスは再び大きなため息をついたが、その時、王が現れたことを知らせる合議の間の鐘が打ち鳴らされた。

同時に、天幕の向こう側にいくつも小さな灯火がつけられる。そこにはすでに玉座についている王の姿が影絵のごとく映し出されていた。

ダルクスはあわててきまじめな表情をつくる。

「これより、合議をはじめる」

ヘルモーズ王のくぐもった特長のある声が低く室内に響き渡った。左右の席についていた重臣たちが立ち上がり、王に敬礼の姿勢をとったその時。

「お待ちください」

突然、女性の高い声が静まった室内に響いた。

ダルクスをはじめとする重臣たちは驚いてその声の主を探そうと、あちらこちらに視線を泳がした。合議の間の入り口には、見張りの兵も配備されており、関係のないものが立ち入ることは、よほどの緊急時でない限り起こりえないのだ。

「この合議は認められません」

だが、そんな多くの予想に反して、合議の間の扉は勢いよく開かれ、数人の兵士に周囲を警護させて現れた人物がいた。

「メイヴ妃……」

ダルクスの隣で、バジル長官が息を呑んだ。

合議の間へ物々しく現れたのは、王の第一側妃であるメイヴ妃だった。

メイヴ妃は、驚きあわてる左右の大臣たちに目もくれずに真っすぐに玉座に座る王へ向かって進んでいった。

「メイヴ様、お待ちください」

王の側近や室内の兵士たちが、状況を把握できないながらも、とにかくメイヴを止めようと駆け寄るが、メイヴの従者や一緒に入ってきた守護の兵士たちにすべて制せられ、制止することさえできない。

ダルクスや他の大臣たちも、メイヴ妃の突然の行動にただ茫然としていた。

「何のようだ！？ 止まれ！ メイヴ、止まれ！！」

ただヘルモーズ王の声だけがメイヴ妃に命じる。

しかし、彼女は無表情のまま天幕越しの王の影へ向かって歩み続ける。

「兵はどうした？ メイヴを止める！ ここはわしの許可なく入っ



て来ることは許しておらんぞ 何をしている!？」

威厳のある声ではあったが、その声にわずかに狼狽の色を感じとり、ダルクスはただならぬ事態がこれから起こるだろっことに気がついた。そして、自分に指示を求めて集まる重臣たちの視線を受けて、黙ってことの成り行きを見守るよう目で制した。

「陛下!」

メイヴ妃は天幕の前で立ち止まると、落ち着いた声で正面の玉座に座ったままの王に呼びかけた。

「わたくしは陛下とのお約束どおり、今日ここへ参りました。そして、お約束したことをさせていただきます」

「な……なんのことだ……」

メイヴ妃の『王との約束』という言葉に、ざわめいていた室内が徐々に静けさを取り戻し、やがて水を打ったように静まり返った。

その場にいたすべての臣下たちは、王と側妃の間にこれから起こるやりとりを聞き漏らすまいと、メイヴ妃と幕越しの王の影を息をこらして見つめていた。

「陛下ご自身に頼まれたことをするだけです。おまえたち」

メイヴ妃がそばの兵士たちに合図を送った。すると、数人の兵士たちが一斉に天幕に駆け寄り、天幕を引きずり下ろした。

だれもが「あっ」と叫んだが、もっと驚いたのはそのあとだった。ダルクスには何が起きたのか、すぐにはわからなかった。

なぜなら、玉座に座っていたのはヘルモーズ王ではなく、別の人間、ノアだったからだ。

天幕越しでは、ヘルモーズ王と同じ体型をしたノアと区別がつかなかったのだ。ダルクスたちに訪れた衝撃は並大抵のものではなかった。

「皆様方」

メイヴ妃は、ダルクスたちの方を振り返ると威厳を込めて声高に叫んだ。

「ご覧のとおり、今日の合議、いいえ……これまでの合議や政務を

行っていたのは、この者です。ヘルモーズ王の従者としてそばにいた魔道士でございます。王の声色を写しとり、その術をもって王のようにふるまいたくし達を欺いてきたのです。そして……」

メイヴ妃は大きく息を吸い込むと、一呼吸おいて言葉を続けた。

「このようなことを行って来た影の首謀者は、ミディール妃なのです」

メイヴ妃のその言葉に合わせたかのように、合議の間の隣室から兵士に連れられた青ざめた顔のミディール妃が現れた。

唇はわななき、今にも倒れそうなほどその顔からは血の気が失せている。

「一体……これはどういうことですか？ 陛下はどこに……？」

ダルクスは一歩前に出ると、まず最初にメイヴ妃に王の安否を問いかけた。

メイヴ妃はその質問に満足げにならずと、毅然とした面持ちで、説明をはじめた。

「陛下はご無事です。隣室の長椅子に眠らされたままではおりませんが……」

おお、という安堵のざわめきが広がった。

「ですが……大変に重い心のご病気にかかっていらつしやいます」  
静寂が再び訪れた。

「最近、陛下は何度もわたくしのもとへいらつしやられて、ご自身の身に起こるさまざま異常を訴えられておりました。そして、何者かが陛下に代わってハリアを間違った方向に導こうとしているということも。わたくしは陛下の言葉を受け、陛下のご病気のこと、陛下の周辺や身辺の者のことなど調べて参りました。その結果、ミディール妃が陛下の病を利用して、合議ではこの魔道士に陛下の声を写しとらせる術をつかい、陛下の声でハリアを自分の思いどおりになしようとしましたのです」

「な……なにを証拠に……」

ミディール妃は、メイヴ妃の背中に向かい悲鳴にも似たかん高い

声で叫んだ。

「証拠？ なにを今さら……」

メイヴは横目でミディールを見ると、冷やかな声でそれにこたえる。

「ファージル王子、そしてエスニア妃とカーデイス王子を事故と見せかけて殺したのも、あなたの仕業だというのはわかっていのですよ。自分の子を王位につかせたいというそれだけで。しかもあなたは、ガーゼフとの間に身ごもったグリトニル王子を陛下の御子だと偽り、その子を即位させるために実の子のエリル殿下まで殺そうとした……酷い女……」

いまや、合議の間は衝撃の渦に呑み込まれ、人々は事態を呑み込み切れないまま、茫然と立ちすくんでいた。

「陛下のご病気も……その魔道士の術」

「嘘よ、違うわ！ わたくしはなにもしていないわ！ エリルもグリトニルも陛下とわたくしの子よ。わたくしが自分の子を殺そうとするはずがないわ！ 違うわ！！ あの女が言っていることはすべて嘘よ！ わたくしを信じて！！ わたくしはなにもしていないわ！ だれか、助けて！！」

だが、いくらミディール妃が叫んでも、青ざめた表情のまま、震えながら力なく玉座に座っているノアの姿がある限り、その言葉はむなしく響き消えていくだけだった。

この日を境に、ハリア国の内政は激変に次ぐ激変を遂げた。

王と国を裏切ったミディール妃は、病死と内外には伝えられたが、毒による自決を求められた。

王を偽り術にかけた魔道士ノアは一生出られることのない地下牢獄へ送られた。

しかし、ミディール妃と策謀したガーゼフは合議の前日から姿を消したままであり、その行方はようとして知れなかった。

そして、ヘルモーズ王は別の術士による治療を受けはじめたが、

症状は一向に回復せず、逆にますます悪化の一途をたどり続け、病身の身として扱われるようになった。

そのため、エリル王子が十五歳を待たずに即位を求められるはずだった。

ところが、そのエリル王子が日突然、宮殿内から姿を消してしまっただ。

最初はいつもの失踪騒ぎではと楽観視していた廷臣たちも、一日経過しても所在が一向につかめないことから、ミディール妃の後を追って自殺したのではないかと憶測をするようになった。

探索は中断されることなく続けられたが、ついには半年をすぎても見つけだすことができなかった。

シーラ王女は、リンセントースとの政治的背景もあり結局婚儀はそのまま進められることが決まった。

そしてミレーゼ王女はエリル王子の消息がわかるまで、ハリア国の暫定王としてその座におさまることとなった。

出生を疑惑視されている八歳のグリトニル王子ともどもメイヴ妃後見の監視下におかれて。

ナイアデス皇国のフェリエス皇帝のもとに、ノストールがシルク・トトウ神の転身人を得たこと。そして、ハリア国での内政異変と新王の即位がおこなわれたことが知らされた。

突然飛び込んで来た二つの国の異変にフェリエスはただならぬものを感じながらも、側近たちを円卓の間へ呼び寄せた。

「……以上のことから、ダーナン軍は、シルク・トトウ神の転身人の力が起こしたと思われる巨大な竜巻の群れに大打撃を受け、撤退した模様です」

探索部隊長のロクノアが、最初にノストールの情勢について説明するのを聞きながら、フェリエスは楕円状の円卓に座る人々の表情を、その黄金色に輝く瞳で静かに見つめていた。

通称 皇帝会議 と呼ばれるこの会議では、皇帝とその側近、そして皇議院の議長など数人が集い、国内外情勢に関するあらゆる事柄に関する審議や検討が行われる。ここで報告、検討、決定された事柄が、皇議院に下り、議長を中心に諸長老たちによって承認を受け、諸公たちに告知されるのだ。

フェリエスの左側には、ユクタス將軍長、オルロー將軍、クラン將軍、ケイヴ長老が、右側には、魔道士キリカ、イズナ將軍、ウイルシップ皇議院議長、そしてロクノアが円を描くように座っていた。「竜巻を起こす力か……それがシルク・トトウ神の転身人の持つ力ならば、怖ろしいことだな」

フェリエスの隣に座っているユクタス將軍が、腕を組みながら低くうなる。

「転身人の出現がわが国で 先読み されていたものとはいえ、どのような人物、そしてどのような力をもっているのか、誰ひとりとして知るものがいなかったのですからな……」

小太りで頭のはげ上がったケイヴ長老が、釈然としない表情でた

め息を吐き出した。

「それで、シルク・トトウ神の転身人はどのような人物なんだ？」  
オルローが、自分の親とかわらぬ年齢のロロノアに、穏やかだが感情のない口調で質問を投げかける。

「それが……」

ロロノアは答えにくそうに、言葉を詰まらせた。

その様子に、一瞬その場の空気がざわめく。

ロロノアは、人が良さそうで穏やかな顔立ちをしている外見には似合わず、探索にかけては鋭い能力を発揮し、発言も要所を押さえた端的な物言いをする冷静な人物である。諜報探索という役目柄、自分や部下に対しても冷静沈着でかつ迅速な行動とより克明な情報収集能力を要求し、その統制の厳しさはオルローと並び評されるほどのものであった。

ナイアデス建国以来、王の探索部隊は『デイガー 闇の瞳』として恐れられ、畏怖され続けてきていた。理由はその探索能力の高さだけではない。デイガーにはロロノアを隊長とする部隊と、別にもうひとつおおやけに知らされていない影の部隊が存在していると人々の間で信じ続けられていたからだ。

いずれにしろ、国外はもとより国内の人間にさえ恐れられている探索部隊デイガーたちは、文字通りフェリエスもう一つの目となっているのであった。

その探索部隊デイガーの隊長であるロロノアがいいよどむということ自体が、珍しいことだったのだ。

「ロロノア」

フェリエスは、答えに窮する部下におだやかな笑顔をなげかけた。「心配せずに報告しろ」

そして、円卓の廷臣や部下たちに視線を投げかける。

「まず、頭に入れておかねばならないのは、今回のノストールの事態は、シルク・トトウ神の転身人の大いなる力が関与しているということだ。キリカをはじめ我が国の魔道士たちの力をもって、

わからぬことが多すぎる。その点、ノストールへ足を運び、実際に起きた出来事を見聞きして来たロロノアの部下の報告は貴重だ。わたしもすでに聞いていているが、今回はその真偽もふくめ、探索不足とは思わないでほしい。彼の報告だけが、われわれが知ることのできる唯一の手がかりだ。たとえ、それが裏打ちのされていない、ささやかな噂、風聞であつてもだ。正確さを第一とする信条はわかるが、今回はあえて見聞きしたことをそのまま、気にせず報告しろと言つてある。皆もそれを承知していてくれ」

「はっ」

フェリエスの言葉に、全員が姿勢を正した。

それを見たロロノアは厳しい顔で、円卓の前の人々の顔を一人ひとり見つめた後、意を決したように口を開いた。

「ノストールに現れしシルク・トトウ神の転身人はラウ王家の第四王子、五歳のルナ王子であるとのことです」

「ほう……」

その場がざわめいた。

「ですが、これには奇妙な事柄がいくつかございます」

報告する細面のロロノアの眉間にしわが刻まれる。

「ラウ王家がこれまで公として来たノストールの第四王子の名はルナ・デ・ラウであります。しかし今、ノストールでは、アウシユダール・デ・ラウと呼ばれはじめている様子。この変更に関し、ラウ王家では、転身人としての新たななる 祝福 を受けての命名であるとふれているようです。」

ロロノアは一度小さく息を吐き出したあと、言葉を続けた。

「ご存じのとおりラウ王家は、ニューズ海とエーツ山脈という自然の城壁をもち、小国ながら独立した歴史を歩んで来ております。そのため、他国との行き来も限られた国とのものだけという状況です。しかも、ノストール王国へ訪問してカルザキア王やテセウス皇太子、アルクメーネ王子と対面したことがあるという人間は比較的多いのですが、幼いクロト王子や、特に末のルナ王子のことに関する情報

は極めて少ないというのが現状であります。これには、ラマイネ王妃が五年前より病いとなり、公式行事への出席を控えていることも密接に関係しているようにも思われます。」

円卓に座る人々は初めて聞くその話に息をこらし、耳をすましていた。

「ルナ王子誕生後、リンセンタートスのラシル王がノストールへ訪問していますが、ルナ王子に乳母をつけずに育てていたラマイネ王妃が体調をくずしていたため、結局会うことができなかったと言われております。そのほかの情報としては、生まれたときの大病がもとで髪の色が銀色に変わったという噂があり、ノストールの民たちはアル神の加護を受けた王子として、誇りにしているとのこと」

ロロノアは一度、ここで言葉を区切り、円卓の人々の顔を再び見つめた。

それは、自分の言葉が、それぞれの中にどのように受け止められているのかを確認するもののようにもみえる。

ロロノアは再び息を吐き出すと、言葉を続けた。

「しかし、アンナたち、ユク・アンナの一族は、この王子をシルク・トトウ神の転身人であると公言してはおりません。誕生の際の祝福、王妃の病気平癒の祈願、そしてこの度わがナイアデスとダーナの魔道士がシルク・トトウ神転身の先読みを告げたことに対してノストール来訪。ルナ王子誕生後、五年の間にアンナの一族は三度ノストールを訪れておりますが、第四王子がシルク・トトウ神の転身人と気づかなかった……いえ、アンナたちには先読みがおりなかったことになりました。しかも、このたび王子自らシルク・トトウ神の転身人であると名乗りを上げたのは、ダーナの進攻を目前にアンナの一族が出国したあと。なぜアンナたちが、第四王子が転身人だと気づかなかったのか。そして、アンナの一族の去りした後、いったい何者から転身の祝福を受けたのか、アウシユダールという名への改名はなにを意味するものなのか、いくつもの疑問が残るのです」



ロロノアが大きく深呼吸をし口を真一文字に結ぶ。

報告がひと段落したときの癖だった。

イズナが軽く手を挙げると、ロロノアがうなづき発言を認める。

「つまり、アンナはシルク・トトウ神の転身人がノストールに降りることすら気づかなかった。しかも、その王子はアンナでない者から 祝福 を受けている…ということか？ わけがわかんねーな」

「ラウ王家ではアンナの 祝福 を受けての命名であると国中にふれているようです。が、宮廷占術士や魔道士を自国に抱えるのは、わがナイアデスとダーナン、そしてハリアのような大国と、あとは数えるほどの国にしかおりません。ノストールのような小国は、アンナの一族を頼るのが常。その占術士なくして、 祝福 を受けたというのは、いささか不自然かと」

フェリエスは椅子の肘かけに腕を乗せ、ゆったりと両手を胸の前で指を組ながら、金色の瞳を興味深そうに輝かせながら、言った。

「だが、わざわざ偽る必要もないだろう」

一同の視線が、フェリエスに注がれる。

「考えてもみる。シルク・トトウ神の転身人を名乗ったノストールの王子は、その力をもって竜巻を起こし、ダーナン艦隊を撃退して国を守った。仮に王族以外の民の誰かがシルク・トトウ神の転身人であったとしても、わざわざ偽る必要はない。転身人が王子であるという 先読み が降りていたわけでもないのだから」

「なるほど、妙な話ですな」

ウィルシップも顎にたくわえた豊かな口ひげを手でなでつけながら、うなづいた。

「でも、どっちにしるそのシルク・トトウ神の転身人を、早いところ味方に引き入れたほうがいいんだろ。敵には回したくない相手だからな」

イズナの言葉に、人々は虚を突かれたように言葉を失った。

「確かに……。シルク・トトウ神が覚醒する前にノストールとの交渉が済み、わがナイアデスに迎えることができておりさえすれば、

面倒はなかったが……」

ユクタス将軍がフェリエスを見つめながら首を横に振る。

「シルク・トトウ神を得たノストールが、今後どのような動きをして行くのか目を離すことはできない。王子がまだ幼いとはいえ、その力は図りしれない。これまでの疑問も含めて、慎重により詳しい探索を続けさせよう」

フェリエスは、ノストールの話を一度まとめると、ロロノアに次の報告へ移るように指示しかけて、思い出したように克蘭將軍の名を呼んだ。

「克蘭。漁船に扮してノストールのイスト港に入らせていたロロノアの部下が、竜巻に遭遇して大破し沈没したダーナン軍の船員ら数名を拿捕したそうだ。順調にいけば、ひと月後には帰って来る。その後の処置は、卿に任せるので頼むぞ」

「ダーナンの……。これはまた思いがけぬ土産が手に入りましたな。お任せください」

フェリエスは、この線が太い精悍さを漂わせる將軍の豪快な笑い声を耳にしてほほ笑むと、ハリア情勢の報告へ議題を移すよううながした。

その夜、フェリエスが城の中の居館へ戻ると、母のロマーヌ皇太后が一通の手紙を携えて訪れた。

ロマーヌ皇太后は、亡きオリシエ皇帝との間に五人の子をもうけながらも、美貌はおとろえることなく、宮廷でもその知的な美しさは常に話題の的となった。しかも、皇太后はオリシエ皇帝存命時から、有能な助言者として施政に情熱をかたむけ続け、ナイアデスのためにであれば、私心を捨てても尽くして来た女性であった。

そして、それは皇帝が亡くなり、フェリエスが皇帝の座についても変わることなく続いている。

誕生した時から、皇位につくことを当然のように望まれ、その教育に心血を注がれ、国に尽くす両親を見て育ったフェリエスにしてみれば、母の貢献は当前のことあり、けっして異を唱えるような事柄ではなかった。

オリシエ皇帝の突然の不慮の死ら衝撃を受けながらも、混乱することもなく皇王位継承が行われ、内政に支障が起きなかったのは、ロマーヌ皇太后の影の手腕によるところが大であったのだ。

そのロマーヌ皇太后がフェリエスの居館へおとずれるのは月に二、三度と決まっており、特別なことではなかった。

「セラから手紙が届きましたよ」

居間にある金糸で刺しゅうをほどこされた豪華な長椅子にゆつたりと腰をおろすと、ロマーヌ皇太后は向かい側に座るフェリエスにその手紙を渡した。

セラはフェリエスのただ一人の姉で、三年前にリンセントース皇太子妃としてクラン皇太子に嫁ぎ、二人の王子をもうけている。

手紙はその姉からだった。

そこには、ラシル王とシーラ王女の結婚式が正式決定したことと、近々その招待状を送ること。側妃の結婚式としては異例であるが、

ノストール王家も招くことなどが、綴られていた。

フェリエスは手紙に目を通し、満足そうにほほ笑んだ。

「用意が整ったようですね」

「ええ、予期せぬ事態もありましたが、ほぼあなたの計画通りになりそうですよ」

ロマーヌが笑顔でおうじると、フェリエスの従卒が赤色の果樹酒に満たされたグラスを運んできてテーブルにおき、一礼をして隣室へと姿を消した。

広い居間にはフェリエスとロマーヌ皇太后の二人だけとなる。

「たとえ側妃の結婚式とは言ってもリンセントースからの正式な招待を受けては、ノストールは簡単には断れない。式には、多分テセウス皇太子が足を運ぶでしょう」

ロマーヌはグラスを口に運びながら、息子の顔を見つめた。

「ええ、ノストールとリンセントースは古くから協定を結んでおり、同じユク・アンナの一族を頼りにしている国です。数少ない友好国の一つとして、公式行事の招聘には互いに王族の出席を欠かしたことがない様子。三年前の姉上の結婚式の際もテセウス皇太子が王の名代で出席しています。ただし、今回の問題は、第四王子が一緒に現れるかという点です」

フェリエスの疑問にロマーヌは穏やかに、だが自信をもって明言した。

「第四王子がシルク・トトウ神の転身人と名乗りをあげたのなら、当然出席するでしょう。自らの存在を他の国々に知らしめるのに絶好の機会です。ノストールがこれから覇道を歩むにしろ、しないにせよ……、その王子にとリンセントースやハリア、招待国の人々を直接自分の目で確かめる機会ですからね。逃すはずがありません」  
母の言葉に、フェリエスはゆっくりとうなずきながら、自らの左手の中指に輝く指輪を見下ろした。

帝位継承の証である黄金の指輪 ラーヴ。五年前に父王と守護妖精のミュラを失ったときに、フェリエスが受け継いだ指輪だ。

「わたしは一刻も早く父上の仇を探し出したい。そのためにも、そして国々の安定を守るためにもシルク・トトウ神の転身人をわが手にいれてみせます」

「フェリエス」

ロマーヌ皇太后は、凜とした口調で息子の名を呼んだ。

「父上の仇をうつつ相手を探すことは大切なことです。しかし、そのことのみ心奪われて、民を忘れては国はなりたちません。あなたが四年前に亡き陛下の弔いとして、リンセントースの都をハリア軍から奪い返したことは、みな高く評価しています。ですから、国の中へももつと目を向けてくれねば……」

「内政のことはもうしばらく母上にお手伝い願います」

フェリエスは、硬い表情で果樹酒を一気に飲み干した。

「母上のおっしゃることも、重々承知しております。けれど、あとしばらく。シルク・トトウ神の転身人を手に入れるまで、わたしにもうしばらく時間をください。戦いと勇気を司りし神、シルク・トトウ神の転身人をダーナンが諦めるとは思えません。ハリア国もしかり。ならば、必ずや我が国に迎われなくては、諸国の平和が乱されます」

黄金の双眸が、じつと皇太后をみつめる。

「わかりました」

ロマーヌ皇太后は、小さなため息を唇からこぼすと、にこりとほほ笑んだ。

「とはいえ、あなた自身の婚儀も決まったのですから、自身の身辺にも充分に気をお配りなさい。あなたときたら、皇妃よりもシルク・トトウ神を迎えることばかりに関心を向けているせいで、ユクタス將軍やケイヴたちはやきもきしてるのですよ」

「母上」

フェリエスは困ったように、手の中のグラスをもてあそんでいた。「皇妃選びにわたし自身が時間を割いている時間がなかったのはご存じではありませんか。それにキリカもこの数年は皇妃をめとらぬ

が善策といっております。とにかく、相手と日取りがほぼ決まっただけでも、ご安心ください」

「そうね。これで、オルローも喜ぶでしょうし」

母が意味ありげに笑うと、フェリエスはますます困ったように天井を見上げた。

「あいつの頭は固すぎるんです。なにも、わたしが皇妃をめとらないからといって、自分もそれまでは結婚しないと決めなくてもいいんだ。けれど、いくら言っても頑として聞き入れない」

ローマ又皇太后は王位に座する息子に、愛情あふれたまなざしを注ぐと、グラスを目線まで軽く持ち上げて、残りの一口を静かに飲み干した。

ひと月後、ナイアデスの船着き場に一漕の漁船が錨をおろした。ナイアデスには幾百もの商船が停泊する大きな港があるが、その漁船が帆をおろしたのは、それとは別の小さな港だった。

「あれか」

漁船が港内に入港する前から、船の到着を待っていたクラン将軍が、かたわらのロロノアに問いかけるように言葉を発した。

だが返事をしたのは、漁船が船着き場に着岸する様子を二人の後ろで見守っているクラン将軍の部下たちの中からだった。

「よく竜巻に巻き込まれずにすんだなあ……」

クラン将軍が肩越しに向けた視線の先には、腕を組みながら感心そうに声をあげているイズナの姿があった。

黒髪の長髪を後ろで束ね、額にはトレードマークのバンダナをした長身の若者は長い前髪をいつものようにかきあげながら漁船を見つめる。

イズナは、今回の探索で拿捕することができたダーナン兵を、誰よりも先に見たいからとクランに頼んで同行したのだ。

二人よりもはるかに若く優秀な将軍は、やってくるそうそうクラン将軍の部下たちの列の中に混ざり込むと雑談をはじめたのだ。

軍服の肩に記されている記章を見なければ、将軍とは気がつかないほど溶け込んでしまってる様子に、クラン将軍は内心苦笑しながら漁船に視線を戻した。

長い航海に耐えて来た漁船は、探索用とはいえ外見は普通の漁船となんら変わることはない。

ナイアデスもそうだが、ノストールも沿海交易を行っており、許可した国の漁船や商船などが港に寄港することを許している。

特にノストールとニューズ海洋の海賊が協定を結んでいた時代は、海賊に襲われかけた商船や漁船はノストールのイスト港に逃げ込む

ことさえできれば、王家から水先案内人の権利を買った漁師たちを雇って、安全な海域まで案内してもらうことができたのだ。

現在ではその協定も有名無実のものとなり、海賊たちはノストールの旗を立てた船であろうとなかろうと、襲いかかり金品財宝を奪い、殺戮を行い、暴れ続けた。そのため、イスト港には避難のため港内に逃げ込んで来る船は絶えることはなかったが、逃げて来たとしても助かる保証はどこにもなかったのである。

ロロノアの探索部隊も、海賊に追われた漁船を装ってイスト港に停留するという作戦をとったのだが、他の漁船や商人たちに疑われることのないよう、魚を積み込み、数人の漁師を同行させたのだ。

イズナの目には、いま接岸した船から陸に降り立ち自分達に向けて一礼をしたあと、ロロノアらのもとへ駆けてこようとしている男がデイガーだとはとても思えなかった。

褐色の肌をもつ筋骨隆々とした男は、その風貌だけを見ると漁師以外のなにもでもない。

吹きさらされた焦げ茶色の髪と不精髭をたくわえ、笑みをたたえた上半身裸の男はクラン將軍とロロノアの前までで歩み寄り、で立ち止まると敬礼をした。

「おひさしぶりです。レルグ小隊全員、無事帰還致しました。隊長！」

すっかり体に潮のにおいを染み込ませたレルグがロロノアとクラン、そしてイズナを見て敬礼をすると、笑みをたたえて報告をした。「大漁であります」

(やれやれ、報告まで漁師言葉か……)

イズナは内心呆れていたが、ロロノアはレルグの笑みと言葉になんを感じ取ったのか、挨拶もそこそこにノストール沿岸で拿捕したというダーナン兵たちを船から降ろすようにと命じた。

最初に到着したロロノア部隊の早駆けは、シルク・トトウ神の転身人に関する報告をナイアデスにもらした。それが、皇帝会議でのロロノアの一連の報告である。



次の伝達では、必要最低限の情報が暗号で伝えられたにすぎず、  
拿捕したダーナン兵に関する詳細な事柄に関しては何ひとつ伝えら  
れていなかった。

「意味深だな」

クラン将軍があごひげをなでつけながらロロノアに視線を送るが、  
人の良さそうな顔をした探索部隊長はにこにここと楽しそうに笑みを  
たたえているだけで、その言葉に答える様子はない。

しばらくすると船の中から腕を後ろ手に縛られ腰に縄をかけられ  
た十数人のダーナン兵たちが、船の中から次々と姿をあらわした。  
彼らの足どりは一様に重く、顔にはひと月余りの捕虜生活に憔悴し  
きつたのだらう、無感情な表情が張りついている。

クラン将軍は、部下に命じると捕虜を受け取りに向かわせた。

「あきらかに兵士じゃないのがいるなあ……」

イズナが片目を閉じてクランを見ると、ふだん陽気な将軍は頭を  
かきながら面倒臭そうにため息をついた。

「年寄り子供は苦手だが、ダーナンの者である以上手加減はせんよ。  
問題は何が『大漁』なのかだ。まさか、あの中にダーナンでも名の  
知れた大将がいるわけじゃないだろうな……」

「ふむ」

クランの言葉にあいづちを打つと、イズナの視線は捕虜たちから  
離れ、漁船の手入れや修理をはじめするために船の外に連れ出された  
上半身裸の赤毛の男たちに移った。

「レジーか……」

レジーとは、ナイアデスの北端にあるユオホリス大山脈の反対側  
の奥地に暮らすレジディア人の蔑称である。

ナイアデスの漁船や商船では、赤い髪や赤い瞳をもつレジディア  
人が漕ぎ手奴隷として酷使されていた。

レジディア人たちが、商人たちによって連れて来られ、奴隷とし  
て売買の対象になったのはナイアデス建国以前のイルハーフ国時代  
がはじまりだった。

それ以降、赤い髪と赤い瞳をもつレジディア人は奴隷としての刻印を焼きつけられ、逃れることもできずに、自分を買収した主人たちの下で人間以下の扱いを受け続けてきたのだ。

レジーは、恋愛や結婚することはもちろん、彼ら以外の人々との同じ水飲み場、公園、住居の共有、夜間の外出、商売、教育、集会など人間として与えられるべき権利がことごとく禁じられた。そればかりか、主人のもとを脱走したレジーが殺されたとしても、その犯人が罪に問われることはないに等しい。

やがてナイアデス皇国が誕生し、人々がイルハーフ国の悪政から解放され自由を謳歌したときでさえ、レジディア人たちの奴隷という立場と激しい差別はなんら変わることはなかった。

いまイズナの目に映っているレジーたちも、長く苦しい航海を終え、眠ることのない漕ぎ手作業から解放されたと思ったのもつかの間、休む間も与えられず漁船の清掃や修理に追われているのだ。それはイズナにとっても見慣れた光景であり、特別関心を示すほどのことでもない風景だった。

ナイアデスの貴族のすべてがそうであるように、イズナの生家であるマイリージア家でも多くのレジーたちが奴隷として、主人やその家族のために働いているからだ。

「整列！」

クランの大声にイズナが正面を向くと、クラン將軍の部下たちが上官たちの前に連れて来た金髪のダーナン兵たちを、横一列に整列させたところだった。

ロロノアが笑みを消して彼らを一人一人なめるように見つめ、クランは大声で何ごとかを捕虜らに向かって大声で、命令を下している。

（今度は、金髪レジーの誕生か……）

ダーナン兵たちの顔をながめながら、イズナは内心つぶやくと、その視線をあきらかに兵士ではないとわかる人物のところまで止めた。

（これは……ひよっとすると、ひよっとするなあ）

大漁です。

その言葉の意味を考えながら、イズナは思わず口笛を吹いていた。

リンセンテートスとの婚約式が終わり、ふた月後にシーラ王女とラシル王の結婚式を迎えるばかりとなつたハリア国では、慌ただしく準備が進められていた。

シーラは、あふれるほどの豪華な生地や宝石に囲まれながら婚禮衣装はもちろんのこと、夜会や舞踏会、日常で身につける衣装、装身具を新たに仕立てるための採寸や生地合わせのために、一日中立つたままでいなくてはならない日があると思えば、画家たちによる肖像画の作成のために椅子に腰掛けたままの日があるなど、目まぐるしい日々を追われていた。

くわえてリンセンテートスの作法の習得など様々な準備も万事怠ることのないよう進めなければならず、就寝時以外は一人の時間をもつことさえできない状態だった。

「立場は側妃とはいえ、このハリア国王女の婚儀ですからね。見劣りすることのないよう、そしてわが国の威厳を十二分に思い知らせるためにも、万全の用意をしています。正妃としての婚儀よりも地味であることはいたしかたないものの、心配することなど何もないのですよ」

婚礼衣装の仮縫いの着付けが終わつた合間を縫って、シーラはメイヴ妃からお茶の時間に招かれていた。

押し寄せる多くの人々の言葉にただ黙つて従い、人形のように立ち振る舞う毎日であつたシーラは精神的な疲れもあり、メイヴ妃の招待に応じれば、ミレーゼに会えるのではないかとどこかで期待しながら、王宮内に新たにもうけられたメイヴ妃の私室に訪れたのだ。けれど、そこにミレーゼの姿はなかつた。

「お心遣い感謝いたします」

いまや暫定王とはいえ、ミレーゼ女王の後見人として確固たる地位を築きつつある父の第一側妃に、シーラ王女は疲労の色を隠しな

がらほほ笑んだ。

淡く柔らかな色調の青く美しい髪がサラリと揺れ、長いまつげの奥の琥珀色の瞳が穏やかな笑みを浮かべてメイヴ妃を見つめる。

(エスニア……?!)

メイヴは一瞬、目の前に座っているのが亡き正妃のエスニア妃であるような錯覚にとらわれた。

もちろんそう思ったのは、今日が初めてだったわけではない。シーラ王女が幼い頃より、面差しは良く似ていると思っていた。

だが、今こうして向き合ってみると、驚くほど似ていることに気づかされるのだった。

特にミディール妃の一件が起きるまでは、他の側室の王子や王女と好んで親しく話したいと考えたことすらなく、儀礼的なあいさつや会話をかわす程度でシーラともお茶の時間を過ごすことはなかに等しかった。

(エスニアが陛下のもとに嫁いで来たのも、シーラと同じ年頃………  
本当に生き写ししたこと………)

メイヴはシーラの中に、王に寵愛され人々から愛された美しい歌姫、今は亡き正妃の面影を重ねながらそう心の中でつぶやいていた。「それで……お話があるとうかがったのですが」

ティーカップに二杯目のラセナ茶が注ぎ終わるのを待って、シーラは控えめに切り出した。

シーラは、メイヴ妃が自分のことをどのような目で見ているのか、まるで想像がつかなかった。

リンセントースへの輿入れがミディール妃の策謀であり、ヘルモーズ王の意向ではないと知っていながらも、この婚儀を中断させることもなく進めている。

けれど、婚儀にあたっては、正妃として嫁いでもおかしくないほどの規模で準備を整えてくれている。その心中が察しかねた。

そして、ふたたびシーラを戸惑わせる言葉が、メイヴ妃の口からもたらされた。

「実はシーラ様がリンセントースへ嫁がれるにあたり、少しの間でも寂しさをまぎらわせていただければと思い、お話し相手を招いたのですよ」

メイヴが側近に命じると、女官に付き添われた少女が部屋に通された。

その少女は、淡い若草色のドレスに身を包み、メイヴとシーラの前に姿を現すと、優雅にハリア式の挨拶をする。

シーラよりも年下の、貴族の子女のようだった。

陶器のような白い肌と、薔薇の花びらのような淡紅色の唇、長い栗色の髪、そしてミレーゼと似た明るい碧色の瞳。

(どの貴族のお嬢さんなのかしら……)

少女の身のこなしや漂う気品から貴族の出であるだろうことは違いないとわかるのだが、シーラはどの貴族の娘なのか思い出せない。だが、一度出会ったならば忘れることがないほど印象的な少女だと感じていた。

(ミレーゼと同じ年頃かしら……)

メイヴはまるで戸惑うそのシーラの心を読んだかのように、ニコリとほほ笑みを向けた。

「シーラ様はミレーゼ陛下と仲がおよろしいでしょう。ですから、リンセントースでの暮らしに馴れるまでの間、年下のお話し相手がいらしたほうがよろしいかと考えて、最良と思われる人物を捜しましたのよ。この娘の名はアインといって、ローゼの領地で行儀習いをしてきたセルシアン家の一族の者です。シーラ様とは初対面ですわね。アイン、こちらの方がシーラ王女です」

「アイン……」

ミレーゼと、その母ミディール妃の好きだった薄紫色の美しい花の名前　アイン。

シーラが、アインの名をつぶやくと、少女はほほ笑みながらシーラにゆっくりと頭をたれた。

「よろしくお願ひします」

そう言って再び向けられたアインの碧い瞳と視線が出会った瞬間、シーラの心の中に何かいいよのない予感めいたものが満ちあふれた。

(この子……)

それがどのようなものなのか、シーラ自身はつきりとしなかったが、この少女との出会いが自分の運命を変えるように感じたのだ。

しかし、シーラはその予感を受け入れようとはしなかった。

自分の運命はすでに定まっているのだ。ふた月後には、父ほど年の離れたリンセントートス王のもとに側妃として嫁ぎ、子を生む。それ以外のなにかが起きることはありえないのだと。

『ハリアを守るために行きたい所があるから』

その言葉だけを残して王宮から消えてしまったエリル。

メイヴ妃の監視のもとで母を失い、自由さえも失いながら望まぬ王座に収まっているミレーゼ。

病氣療養で王宮の奥に拘束されているヘルモーズ王。

そして、亡くなった母と二人の兄王子たち。

すべての優しかった人々が、自分から引きはがされていく。そして、今度は自分が母国ハリアから去らねばならないのだ。

(望んでは……いけない……)

幼い頃から胸に刻んで来た言葉が浮かんだとき、ふいに、シーラの心の奥底に押し殺していた感情があふれ出そうになった。

(望まない……。望んでは……。いけないのだから……)

シーラは大きく深呼吸をすると、これまでもそうして来たように、その想いを心の奥に封じ込めるためにほほ笑みをつくった。

それはハリア国の王女として生まれた者の運命。王家の王女として誕生した瞬間から、道は定められているのだ。

国のために従う。それ以外の道など、シーラは考えたことすらない。

だから一瞬、自分を取り巻いた不思議な予感すら、シーラには無意味なものではなかったのだ。

シーラは、小さくうなづく。

「よろしくね。セルシアンのアイン」

アインは笑顔を浮かべた。それは、高貴な花が咲いたようなほほえみだった。

同時に、シーラは心の中に、その笑みとは別の見えない空気が溶け込んできて、癒されるような感覚をおぼえた。

(ほんの、短い時間でも……)

シーラは自らに言い聞かせた。

たとえ、アインがメイヴ妃とどのようなつながりをもっていたとしても、たとえ監視役として自分のそばにいることになっても、シーラはアインならば不思議と許せるような気がした。

やがて来る別れを覚悟しても、この少女の笑顔が今は必要だと心に訴えるものがあった。

それはシーラに許された、数少ない小さな幸せにつながるかもしれない。

シーラはアインのその花のような笑顔を見ながら、いつしかそう考えるようになっていた。



どんよりとした灰色の雲がダーナンの帝都ディアサのリレイン城上空に、低く垂れ込めていた。

軍師のカラギ、グラハイド宰相、ジュゼール將軍らは、ロデイに呼ばれ王の執務室に集まっていた。だが、三人が揃ったにもかかわらず、肝心のロデイは窓際にもたれかかったまま長い間、黙り込んでいた。

「陛下……」

長い沈黙の時間にカラギが気遣わしげに声をかけると、ロデイの碧い瞳が机の上の一通の手紙と小さな肖像画を示した。

「読んでみる」

ようやく発せられたロデイの言葉に、一礼をして手紙と肖像画に手を伸ばそうとしたカラギがの指先が、肖像画に描かれている人物を目にした瞬間ぴくりと止まった。

「陛下、まさか……」

カラギははっとした表情で、若き帝王を見つめた。

「その、まさかだ」

三人は互いの目を見つめてうなずきあうと、恐る恐る手紙と肖像画を手にした。

「一体何者が……」

手紙に目を通したグラハイドがその視線をロデイに向けた。

ロデイのもとにこの手紙が届けられたのは、ノストールでの予想さえしなかった撤退から後、再度ノストール攻略のための新たな戦略の練り直しにとりかかっていた矢先のことだった。

『フューリー王女。ハリア国にて』

書面にはその一行だけが書かれていた。

そして、手紙とともに成長したフューリーを描いた小さな肖像画が添えられていたのだ。

母ゆずりの長く美しい栗色の髪と、ロディと同じ碧色の瞳。ワインレッドのドレスの襟元だけが描かれた横顔は、どこか遠くを見ているようだった。

「これで、三回目ですな」

グラハイドがうなる。

ロディ宛てにフューリー王女 of 消息を示唆する手紙と肖像画が送りつけられて来たのは、三回目だった。手紙の文面は常におなじ。違うのは、記された国の名だけだった。

一通目の時、国の名はイーリア国であった。二回目ではキルルーサ国、そして今度はハリア国、というように。

「一体、だれが何の目的でこのようなことを」

ジュゼールが拳をきつくにぎりしめる。

「イーリアにも、キルルーサにもフューリー様はいらっしゃらなかったではないか。陛下のお心をもてあそぶとは、絶対にゆるせない」

ジュゼールは奥歯をギリギリと噛み締めながら叫んだ。

「陛下、同じ策にのってはいけません」

「しかし……」

ジュゼールの声を、グラハイドがさえぎる。

「魔道士たちに手紙の主の居所を探らせたが、変化の術がかけられていて、辿りに失敗したことは、承知しているだろう。たとえどのような罠が仕掛けられ、存在しているとしても、差出人はフューリー様の所在をつかんでいることに違いない。我々をたぶらかし、謎かけのような小さな手がかりでも、無視するわけにはいかないのだ。それに、デイルムツド殿も一通目の手紙を読まれたとき、これがフューリー様に通じていることは確かだと、そう言っていたではないか」

「わかっていますが……」

ジュゼールは、ロディの思い詰めた表情をみながら、やるせない気持ちになった。

妹を助け出す力をもつことができるのなら、僕は王になります。

だけど……そのためにその国と戦うことを父上は、皆は許してくれるだろうか？

五年前の地下道でロディは、妹フューリーを捜し出す可能性だけを求めて、わずか十歳の少年の肩には重すぎる王位の座に就いた。

イーリア国を侵略する際も、事前に密偵に調査をさせ、「フューリー王女、確認」の知らせを受けた上でイーリアに王女の身柄明け渡しを求めた。だがイーリア側はまったく身に覚えのないことであると、使者に口頭で答えただけで、ダーナンに対し正式な返事をしてくることはなかった。

結果、ロディは武力でフューリーを取り戻す道を選択し、戦さは起きた。

二通目に記された国キルルーサは、イーリア侵略の事態を目の当たりにし、若い帝王をあなどることの恐ろしさを我が身のものとして受け止めた。そして王女の行方に対してキルルーサは関わっていないことを訴えた上で、それでも疑いをもたれるのであれば、ダーナンの属領国と下ることもいとわないと自らその軍門に下ることで、戦さを避けた。

いまやロディは、覇道を歩む帝王として、国々から恐れられはじめている。

ロディの本意ではなかっただろう　とジュゼールは戦さになるたびにその心中を察し心が痛んだ。だが、ロディに帝位を求めたのも自分たちであった。

戦さを司る神シルク・トトウ神の転身人を得たいと望むのも、ひとえに妹と国を想うゆえであるとジュゼールはわかっていたが、他国はそうとは思わないだろうということも、また知っていた。

ノストール出陣では、ダーナン艦隊に襲いかかった巨大な竜巻群が、魔道士デイルムツドをはじめ多くの兵士たちを海の底に沈めた。幸いロディたちの船の周辺には竜巻の接近がなく、ことなきを得たが、後尾艦五隻は壊滅し、残りの半数は大なり小なり被害を受けた。ジュゼールはため息が出そうになるのをこらえた。それでも、う

つむいた視線は自然と机の上のフューリーの肖像画に注がれる。

ダーナンの王女の行方を暗示する手掛かりに。

重苦しい雰囲気部屋に満ちようとしたとき、カラギがロディの前に歩みでた。

「陛下」

その声は、さきほどまでのロディを気遣っていた時の口調とは明らかに違っていた。

「手紙の主はフューリー様を利用して、わがダーナンの国力の消耗を狙っていると考えられます。最初の手紙が届いた時のわが国の状況を思い出してください」

カラギの漆黒の瞳が、若く美しい主を真つすぐに見つめる。

「一通目の手紙は、内乱後すぐにゼルバ、ハスランを攻め落とした後でした。陛下にとっても、わたしにとっても初陣であり、多くの犠牲者を出しました。内政の乱れも大きく影響し、国財も低下していた時期です。『フューリー王女。イーリアにて』と、記された手紙を読んだとき、ゼルバとハスランが姫様を人質として抗戦しなかったことに疑問を抱いていた我々の疑問は氷解しました。イーリアの国が、何者かが、フューリー王女の安否に関わる情報と自分の存在を誇示してきたのですから」

ロディはうなずいた。

自分をあざ笑うように送りつけられた手紙。フューリーを救い出すための戦さ。だが、イーリアに勝利はしたものの、結局フューリーを見つけたすことはできなかった。

カラギは続けた。

「イーリアとの戦さの後、わが国は多くの地を得、兵士たちも領地や報酬に潤いました。けれど、ゼルバ、ハスラン、イーリアの統治に多くの人員がさかれ、陛下は常に戦場に身を置いていられたために、土地の分配や報酬、新たな役人などの任命など、さまざまな分野の整理が十分にできず、混乱も多々ありました。二通目が届いたのは、そのような時期でした」

ロディはカラギの言葉にじつと耳を傾けていた。

「当分、戦さはしたくないな」

ジュゼールは、ロディがそう言っただけで苦笑いをしたことを覚えてい  
る。

「キルルーサとの戦さは回避できましたが、フューリー様の安否は  
結局、確認できませんでした。そして、多くの犠牲を出しノストー  
ルから退いたこの時期に、三通目の手紙」

カラギの言葉にジュゼールも、ようやく彼が何を言おうとしてい  
るのがわかりはじめた。

「手紙の主は、ダーナンがフューリー様のためならば何を恐れず  
に動くことを知っているとしか考えられません。わが軍が次々と近  
隣諸国を襲い、疲弊し国力が弱まったところを襲撃し、利を得よう  
とたくらんでいる……と」

「つまり……今度はハリアと戦わせようか？」

ロディの言葉に、ジュゼールをはじめ、その場の誰もが息を呑ん  
だ。

「御意にございます」

カラギはうなずき、低く良く通る声でささやいた。

「陛下、この件に關しましては、わたしに策がございます」

カラギの言葉に、初めてロディの表情が動いた。

ロディの美しい横顔は、褐色の肌をもつ彫りの深い横顔と対峙し  
ていたが、黄金の髪がサラリと揺れた次の瞬間には、窓辺にもたれ  
かかっていた青年の体は、執務机の椅子におさまっていた。

「聞こう」

ロディは、自信に満ちたカラギの黒い瞳に、主としての表情で向  
きあった。

十五歳の若く美しい帝王の一言に、三人の幕僚たちは、再び休む  
ことのない歩みに身を投じる覚悟を決めたロディの気持ちを、わが  
身のごとく強く感じたのだった。



リンセンテートスでの結婚式の当日。

シーラは結婚式までの数日を過ごしたレインマーレ宮を出て、六頭立ての馬車に乗り、結婚式を挙げるセイルーズ大聖堂へ向かっていった。

シーラを乗せた黄金色に縁取られた白い豪華な馬車と、侍女たちなどの乗った馬車六台の前後には、式典用の軍服を着たリンセンテートスの警備兵たちの騎馬隊がつき従っている。

花嫁の馬車には、今後シーラ付きとなるリンセンテートスの執事とアインが同乗していた。

しかし、華やかな純白の婚礼衣装に身を包んだシーラはだれと言葉を交わすことなく、ただ馬車の揺れに身を任せたまま窓の外に視線を向けていた。

王家同士の結婚式　とはいつても、しょせんは側妃の輿入れである。

しかも、この数年間リンセンテートスをおびやかし続け、一時は占領すらしたハリア国の王女である。憎まれはしても、歓迎はされるはずもないことは覚悟を決めていた。

それどころか今後しばらくは当然のように、側妃として年の離れた王に嫁いだ敵国の王女に対する悪意のこもった話が、口さがない人々の口に上るだろう。そうした非難の目や声にも、シーラは絶えていかなくはいけないのだ。

ハリアの王宮で、ミディール妃の陰口や噂話を耳にするたびに、ミレーゼやエリルが心を痛めていたことをシーラは知っている。

今度は自分がその矢面に立つのだ。耐えていけるかと問われてもその自信が、いまはまだない。

しかも、この短い数日間の滞在期間において、考えてもいなかったことがシーラの心に大きな落胆と悲しみを与えた。

リンセントートスでは、母国で当然のように受けていた暮らしも、保護も、すでに手の届かないところへ行ってしまったということを、思い知らされたのだ。

リンセントートスがシーラ滞在のために選んだ、自慢の白亜のレインマーレ宮すら、大国ハリアの王女の身にとってみれば、中級貴族の邸宅並みとしか感じられず、庭園の広さ、室内の様相、調度品などどれをとっても今まで自分を取り巻いていた環境と格差がありすぎた。

決して豊かではないが、小さくもない国。それは知っていた。

だが、それを現実にも目の当たりにし、ここが生涯の自分の住まいとなるのだと肌で感じたとき、シーラは初めて不安の中で混乱し内心大きく取り乱した。

側妃としての立場、これから自分がこの環境に身をおかなくてはならないという事実にも、惨めさとやるせなさ、寂しさがとめどもなく押し寄せ、涙で枕を濡らす夜を過ごした。

国の以降に沿って生きるのが自分の運命なのだと言いつつも聞かされてきたシーラが、いまずここから逃げ出したいという衝動にさえ駆られたのだ。

いま自分に乗せている豪華な馬車は、婚礼品としてハリア国からの贈り物であるため、シーラにとっては居心地の良いものでありわずかな慰めにはなつたが、徐々に快調に走る駿馬の蹄の音すら重苦しい鼓動の音に聞こえてくる。

身の置き場のない不安だけがシーラの胸を埋めつくしていた。

「シーラ様」

どれほどぼんやりしていたのか、シーラは正面に座っているアイロンが何度も自分の名を呼んでいることに、ようやく気がついた。

「執事殿がさきほどから、お呼びしておりますよ。この森をぬけると、もうすぐリンセントートス城と大聖堂が見えてくるそうですよ」

シーラに乗せた馬車は森の中の小道を軽快に駆け抜けていた。冬



の季節が近づいているため、森は赤や黄色、緑などとさまざまな色で彩られ、暖かな木漏れ日が木々の間から降りそそいでいる。

「すばらしいお天気ですわね」

ほほ笑みながらシーラを見つめたアインの顔から、ふと笑顔が消えた。

「シーラ……様……？」

シーラはおびえきった表情で、その視線はアインに外を見るように促した。

「？」

シーラの視線を追って窓の外を見たアインと執事、二人の表情が凍りついた。

二人がそれを目にするのとほぼ同時に、馬たちの激しいいななきが森の中に響き渡った。

馬車の動きが止まる。

いつの間に現れたのか、森の中に潜んでいたのだらう四、五十人の男たちが、丸太や剣、弓を手に、シーラたち一行の周辺を取り囲むように近づいて来ていたのだ。

彼らから発せられる殺意は、まごうことなく花嫁の乗る豪華な馬車に向けられている。

「何者だ？」

「道をあける。どけ、さがれ！ さがれ！」

「暴徒どもだ！ 気をつけろ！」

「シーラ王女の馬車をお守りしろ！ 指一本触れさせるな！」

静かな森は一転して、騎馬隊の兵士たちの怒号と馬車の回りを駆け巡るひづめの音、暴徒たちの大声、侍女たちの悲鳴が飛びかい、騒然となった。

「おれの息子はハリアとの戦いで殺されたんだ！ 仇をとってやる！」

「あそこに乗っているのは、ハリア王の娘だ！」

「ぶっ殺せ！！」

「馬車から引きずり下ろして、八つ裂きにしてやる！」

「おまえらのせいで、おれ達は町を失い家族を殺されたんだぞ！  
殺してやる！」

「殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ ！」

怒りを含んだ男たちの声が、シーラの乗る白い馬車めがけて襲い  
かかる。

「なんてことだ……」

いかめしそうな顔をした執事だったが、このときばかりは突然の  
襲撃に青ざめ、額からは汗が吹き出し、次の言葉を失っていた。

「シーラ様……」

アインが青ざめた顔でシーラを見つめたとき、大きな石が馬車の  
壁にぶつかり、激しい音をたてた。

三人はビクリと震えると、反射的に自分の体を手で押さえた。

「やっちなまえ！」

先頭に立っていた男の声を合図に、男たちは一斉に馬車に向かっ  
て走りだした。

「暴徒どもから馬車を守るんだ！ 何があってもお守りしろ！」

兵士たちが、剣を抜いて男たちに立ち向かっていく。

「アイン、わたしの隣に」

シーラはアインを横に座らせると、その体を守るように抱きしめ  
た。

「シーラ様……」

「ごめんなさい。あなたを巻き込んでしまったわ……」

シーラは、次々と石や弓矢が激しい音をたてて襲いかかる馬車の中  
で、自らも身を震わせながら、妹のようなアインを気遣っていた。  
「ハリアの王女を引きずり下ろせ！」

兵士と暴徒たちの争う声が、三人の乗る馬車に近づいてくる。

「に、逃げなければ……」

執事が悲鳴にも似た上ずった声で叫ぶと、馬車の扉に手をかけた。  
「だめです。いま馬車から出ては……」

だが、シーラの制止を振りきり外へ逃げたそうとした執事の喉に、馬車めがけて飛んで来た矢が突き刺さった。体は仰向けにひっくりかえり、シーラたちの足元に倒れ落ちた。

「キヤッ！」

二人が悲鳴を上げたとき、今度は反対の窓のガラスが大きな音を立てて碎け散った。ガラスの破片とともに拳ほどの大きさの石が床に転がる。

「アインはここにいて」

シーラはアインから体を離すと、開け放たれていた扉の取っ手をつかんだ。

「わたしが馬車の外へ出れば、馬車の中は安全になるはず。いいわね」

（死ぬのかもしれない……）

母や兄たちに訪れた突然の死が、自分にも目前に迫っていることを知る。

シーラは暴徒の襲来を目の当たりにしたときに、そう感じ、覚悟をしなければいけないと全身が訴えた。

そして次の瞬間心に浮かんだのは、アインだけは逃がしてあげたい、という思いだった。

（もう……わたしのそばにいる人が死んでいくのは見たくない……）

だが、馬車の外へ降りたシーラの手を、追いかけて来たアインの手がつかんだ。

「アイン？」

驚いたシーラがアインを振り返る。

「一緒に行きます。独りぼっちにしないで……！」

アインは震える声で、涙をこぼしながら叫んでいた。

「女が逃げるぞ！」

純白の婚礼衣装は一瞬にして、暴徒たちの標的となった。

「行きましよう」

シーラは小さくうなずくと、アインの手を取り反対の手でドレス

のすそを持ち上げて森中を走りだした。

それを見た警護の兵士たちがシーラたちの後を追い、暴徒たちの行く手を阻もうとする。

しかし、細い道と木々が邪魔をして思うように反撃ができない。そればかりか、男たちの騒ぎに驚いて暴れだした馬から投げ出される兵も続出した。

シーラとアインは、獣から追われる小動物のように森の中を逃げた。息をきらせ、倒れそうになりながらも、すぐ後ろまで来ている男たちの手から逃れようと、振り返り振り返り、必死に走った。

純白のドレスは木の根や枝葉に破れ、裾は泥だらけになっていく。  
(逃げ切れない……)

シーラは死を覚悟した。

森を抜け草原に出たものの、最終的に追い込まれた場所は崖であった。

崖下には川が流れており、見上げる目の対岸は近くにあっても渡る橋はない。

逃げることは不可能だった。

二人は来た道を振り返った。

そこには森を抜けた十四、五人の男たちが、怒気をふくんだ様子で二人に近づいて来る姿があった。

男たちは、逃げる場所を失ったシーラたちを見て、その足取りをゆっくりとしたものにかえる。

「てこずらせやがって」

太った男が、手にした斧を両手でかまえ直した。それを見た仲間も自分の手にした武器を持ち直す。

「この数年間、ハリアのせいで、おれ達は家や家族を失った。傷つき血を流しても、手当することもできず死んでいく仲間をたくさん見て来た。そんなときでも、おまえらはなに不自由することなくおれ達の国から奪い取った財産でぜいたくさんまいの暮らしをしていたんだ。その国の王女が今度は、おれ達の国に王の側妃としていす

わるだと？ 冗談じゃねえ！」

男はつばを吐き捨てる、片手で半円を描くように大きく斧をふった。ブンと空気のうなる音が響く。

シーラはその音に震えた。

「八つ裂きにしても飽きたらねえ！ やっちまえ！」

シーラとアインは抱き合ったまま目を閉じた。

男たちの手にかかる前にこのまま谷底へ身を投げ出そう、そう覚悟を決めたとき、ヒュンという独特な音が空気をさいて二人の横をかすめていった。

直後。

「ぐわあああ！！！」

男の悲鳴が響き渡った。

ヒュン、ヒュン、ヒュン。

「うわあっ！！」

続けざまに音が駆け抜けていく。そのたびに、次から次へと男たちの叫び声上がる。

なにが起きているのだろうかと目を開いたシーラの目に映ったのは、矢に射ぬかれて地面に倒れている何人も男たちと、われ先にと森の中へ逃げるように戻っていく後ろ姿だった。

「……………?!」

シーラは自らの足元で血を流して息絶えている男たちを茫然と見つめたまま、立ち尽くしていた。

やがて矢が自分たちの背後から放たれたことを思いだし、あわてて後ろを振り返った。

対岸に、馬にまたがった数人の男たちの姿があった。

だが、逆行となっていて顔が見えない。

「お怪我は、ございませんか？」

若者らしき一人が、大声でシーラに呼びかけてきた。

シーラはうなずいた。

腕の中で震えていたアインもその声に顔を上げる。

若者は片手を高くかかげると、二人に後ろへ下がるように合図した。

「いま、そちらに行きます」

若者の指示にしたがい崖から離れたシーラたちは、次の瞬間、谷間を高々と飛び越えて二人のいる岸にわたってくる馬の姿を見ていた。

(だれ……?)

敵なのか、味方なのか、それを見極めようとシーラはアインの手を握りしめたまま、彼らの一挙一動をじっと見つめていた。

全部で五頭の馬がシーラたちの前にやってくる、先頭の栗毛の馬に乗っていた若者がふわりと馬から飛び降りた。

少しはなれて馬を止めた後ろの男たちも、それに習う。そこには子供の姿もあつた。

背が高く、濃い緑色の髪をしたシーラと同じ年頃の青年は、一見して貴族の出身だとわかる服装をしている。

「森の中での騒ぎを耳にして駆けつけたのですが、助けるのが遅れて申し訳ありませんでした」

若者がすまなさそうに一礼をする。

だが、シーラとアインの固くつなげられたままの手に目を止めたとき、青年は二人がまだ緊張とおびえの中にいることに気がつく。そして、自分のうかつさに内心舌打ちをした。

「名乗るのが遅れました。申し訳ありません」

若者は深い鳶色の瞳にあたたかい光を宿しながらほほ笑んだ。

「わたしは、今日のあなたとラシル王の婚儀に招待されて来た、ノーストル王国ラウ王家のテセウス・デ・ラウです。そして……」

テセウスが振り返ると、五歳ほどの小さな男の子が歩み寄り、彼の横にならんだ。

「一番下の弟王子アウシュダールです。シーラ王女」

兄王子に紹介されるたアウシュダールは一礼をし、大人びた笑みを浮かべたままシーラたちを見上げていた。

「ノストールの……」

シーラは、自分たちの国からはるか南端にあるという小国の名を思い出した。

「ああ、声が出るなら大丈夫ですね」

テセウスは冗談とも本気ともとれない言葉を言うと、シーラの前に手を差し出した。

「さあ、式まで時間がありません。居心地はよくありませんがわたしの馬で大聖堂の近くまでお送りしましょう。ラシル王へは、王女の身に起きたことをに伝えるように供の者をさきほど走らせました。何も心配することはありませんよ」

そのあたたかい声と瞳に、シーラとアインは互いの目を見つめあった。

「もう……大丈夫ですからね」

シーラは、おずおずとテセウスの手に自分の手を重ねた。大きくあたたかい手だった。

「わたしたち……」

シーラのつぶやきに、テセウスがシーラの琥珀色の瞳を静かに見つめた。

「わたしたち……助かったのですね……」

日が沈みはじめた夕刻、セイルーズ大聖堂の鐘の音が鳴り響き、すでに堂内に参集していた賓客たちは、定刻よりかなり遅れている式の開始にざわめいていた。

だが、パイプオルガンが演奏を開始し、大聖堂の正面の扉が開かれると堂内は一瞬にして静まり返った。

先頭には白の軍服に身を包んだ王のラシル・レーゼア、その後ろにメイヴとミレーゼがシーラを間にはさむようにして祭壇までのじゆうたんの道を歩いていく。

白い薔薇の花束を手に司祭の前まで来ると、シーラはラシル王に続いて祈祷台に歩を進め、そこにひざまづいて頭をたれた。

大聖堂の正面には、リンセントースの守護神ビアン彫刻像が壁から顔だけが突き出した形で、堂内の人々を見下ろしている。目も鼻も口もはつきりとは描かれていない。顔のない像が。

リンセントースは国の三分の二がミゼア砂漠であり、ノストールと国境を分けるエーツ山脈、セルグ国と国境を分けるミゼア山と接することから、多くの旅人たちがリンセントースへ立ち寄り、旅の無事を旅人の守り神であるビアン神に祈るようになった。

そうしたことから、ビアン神はいつしかリンセントースの守護神として崇められるようになっていった。

『われは、旅人に身を変え、旅人となり、旅人の中にある』

そう言ったビアン神の言葉にしたがい、人々は徐々にビアン神の顔を詳細に描くことをやめ、いつしか描くこと自体が禁忌とされるようになっていったのだった。

そのビアン神の像に見守られるように、指輪の交換と書簡へのサインが順序よくとりおこなわれていった。

けれど、シーラは頭の中がぼうつとしていて、自分がいま何をしているのかさえ自覚できていなかった。



あれほど心を悩ませていた人々のさまざまな視線に対してさえ、無関心になっていた。

シーラの美しさにため息をつく者、側妃としての末路をひそかにあざ笑う者、無関心をよそおい拍手だけをおくる者。

すべての視線も言葉も夢の中のざわめきのようだった。

テセウスに連れられ、大聖堂のそばにある式典までの休息室となるはずだった居館へたどり着いたときも、泥だらけのシーラの姿に驚いたメイヴとミレーゼがリンセントスに激しく抗議をしているのを見ても、なぜそれほど怒っているのか理解できないでいた。

シーラは、それを暴徒たちに襲われて自分が激しく動揺しているせいだと思っていた。

(何も感じないのなら、そのほうがいいのかもしれない……)

ラシル王の腕に手を添わせ、大聖堂をあとにしながら、どこか遠くでシーラの心がつぶやく。

(このまま何も感じないままなら……)

だから、シーラは気がつかなかった。

何かが欠け、何かが違っていったことに。

ハリア国でミレーゼやエリルとともに過ごして来た慎重なシーラであれば、決して見逃すことのなかったはずの重大な出来事を見落としていたことに、この時のシーラは気づくことさえなかった。

結婚式と晩餐会が終わり、明日まで滞在するローレン宮に戻ったミレーゼは怒りを爆発させていた。

「冗談じゃないわ！ 姉上様にあんなひどい目にあわせておいて、式を延期しようとしてもしないなんて、なんて王よ！ ひどすぎるわ！」  
宝石で輝く髪飾りも、レースの手袋も、シヨールも、扇も、広い居間にすべて投げ捨てながら、ミレーゼは後ろから歩いてくるメイヴを振り返った。

「花嫁の行列が襲われるなんて！ リンセントースは一体何をしているの？ もしも偶然に助けが現れなかったら、姉上様は殺されていたかもしれないのよ……！ おまけに、寢所までの付き添いは遠慮してほしい？ 馬鹿にしすぎだわ！」

そこまで言うと、ミレーゼの碧い瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「陛下」

メイヴはハンカチを取り出すと、ミレーゼの前に差し出した。

「今日中に、嚴重申し立てとハリア国側妃の待遇申し立ての書面を書かせましょう。明日の早朝には陛下にお見せします。そしてラシル王へ面会を申し入れ、書類へのサインをさせるのです。ですから陛下はゆっくりとお休みになられて下さい。わたくしは側妃の身ではありませんが、お父上様からは手厚くもてなしていただいております。どうか、わたしにお任せ下さい」

メイヴ妃の真剣な表情と有無を言わせない言葉に、ミレーゼは唇をきつく結ぶと、身をひるがえして自分のために用意された二階の部屋へいくための階段をかけたのぼっていった。

あわててあとを着いてくる女官たちに「のんきに歩いてるんじゃないわよ！」と八つ当たりをしながら、居室に戻ると、着替えと湯浴みを命じ、さっさと寢室にこもってしまった。

不機嫌なときわまりない小さな女王に、いつもはあきれる女官たちも、シーラ王女の一見を目の当たりにしたこの日だけはミレーゼの気が済むようにと、どんなにひどい罵声を受けても、あたたかい配慮をおこたらなかった。

だが、ミレーゼはベッドにもぐりこんでも、安眠にきくというセラ茶を飲んでみても、いつこうに眠ることができなかった。

真つ暗な部屋の中に灯るロウソクの小さな炎をじっと見つめていだけで、シーラの身に起きたさまざまなことが思い出されて、よけいに目がさえわたってくるのだ。

大好きな姉が殺されかけたというのに、夫となるラシル王は式の直前まで姿を現さなかった。

「許せない……」

ミレーゼはおもむろにベッドから起き上がりローブを羽織ると、バルコニーへ出ようとした。

「とにかくこの苛立ちを、風に当たって沈めなきゃ、仕返しの名案なんて浮かんで来ないわ」

そう一人言をつぶやきながらバルコニーの扉に近づいた、ミレーゼの瞳が二度、三度大きく瞬きをした。

ガラスの向こう側、バルコニーに人影を見つけたのだ。

（なに？）

ミレーゼは、急いでロウソクの灯を吹き消すと、大声を上げて助けを呼ぼうとした。

だが、突如バルコニーの扉が勢いよく開き、冷たい風がミレーゼの肌を吹き抜けて瑠璃色の髪をゆらすと、驚きの方が先立ち声を出すことすらできなかった。

暗闇の中でバルコニーの人物の髪の毛が黄金色に輝いた。

（金髪……？）

息を殺し様子をみていたミレーゼの耳に、影が突然指を鳴らすのが聞こえた。

「だ……」

今度こそ声を上げようとしたミレーゼの思いは、再び消えてしまった。

部屋に突然あかりが灯ったのだ。

その光りは口ウソクにゆれる炎でも、月明かりでもなかったが、侵入者の姿をはつきりと映し出した。

「女性の寝室に夜分訪れるのは失礼なことだとわかってはいます。ですが、あなたと直接お話しするには今日、この場所ではなくては無理でしたので……非礼と承知でうかがいました。ハリア国のミレーゼ女王陛下」

ミレーゼは、寝室に突然侵入し、勝手な言葉を並べながら優雅にあいさつをするその人物を見て、呆気にとられていた。

光源のわからない部屋の明かりは、黄金の髪の整った顔立ちの美しい青年を浮かび上がらせる。

彼の青い瞳がミレーゼを見つめるとほほ笑んだ。

「あなたは、だれ？」

「名前はお教えます。けれどそれは最初の問いに答えていただいたあとでいいでしょうか？」

「問いつてなによ」

「では申し上げます。よろしいですね」

ミレーゼは迷ったが、しぶしぶながらうなずいた。

手のうちが読めないうちは、相手を怒らせてはいけない。それが王宮での暮らして学んだ外交手腕のひとつだった。

ミレーゼの反応に、青年は満足そうにうなずくと、一枚の絵をミレーゼに差し出した。

「この女性を知りませんか？」

ミレーゼは女性の横顔を描いた小さな肖像画を受け取ると、戸惑ったように青年の顔を見た。

「名はフューリー、わたしの妹です」

「妹……？」

ミレーゼは再び、その絵に視線を落とした。

「名前に聞き覚えはないわ……でも、この子……見覚えがある……どこでだろう……」

青年の目が驚いたようにミレーゼを見つめた。

「私は妹をずっと探してきました。妹を探す協力をしてほしい」

「待ちなさい」

ミレーゼは、時間が経過することに自分に落ち着きと余裕が戻って来ているのを感じた。そうになると生来の気の強さが自然と頭をもたげてくる。

つんとすました顔で、相手にその絵を突き返すと片手を腰にあてて相手をくらみつける。

「質問には答えたわ。約束よ。あなたの名を言いなさい」

「そうでしたね」

美しい顔立ちをしたた侵入者は、絵を大切そうに受け取ると、静かに自らの名を告げた。

「ロディ・ザインス。フューリーは五年前に行方不明になったわたしの妹。ダーナンの王女です」

ミレーゼは目を丸くした。

「まってよ……そんなこと……あるわけ……ないじゃ……ない……の……」

だが、目の前に立つ青年はミレーゼが知っているダーナンの若き帝王に関する条件すべてを満たしている。

「では、これを」

ロディはさやに収まった短剣と、二つに折られた手紙をベルトの間から取り出すと、両方を一緒にミレーゼに手渡した。

ミレーゼは短剣の柄に彫られたダーナンの紋章を確認すると、次にその手紙を読んだ。

「なによ……これ……」

「わたしのもとに届いた三通目の手紙です。一通目はイーリア、二通目にはキルルーサの名が記してあります」

ミレーゼは、真剣な瞳で自分を見ているダーナンの若き帝王をじ

つと見つめた。

幼くして帝位につき、霸道を歩むという王を。

「なぜ、危険を冒してまでわたしに会いに来たの？ 姉上の結婚を阻止すらできなかった、ただのおかざり王よ」

「わたしが帝位に就いたのは十歳だった。だが、王同士が話し合えば、戦さをしなくてすむ場合もあることも経験してきた。おかざりと思うか、思わないかは、王自身の気持ち次第では」

ロディの言葉を受け、ミレーゼはしばらく考え込んだ後、ゆっくりと息を吐き出した。

「とりあえず、会いに来た理由は了承したわ。わたしの……弟も行方不明なの。まあ、こっちは自分の意思だけどね。わかったわ、とりあえずお話しをお聞きしましょう」

ミレーゼが手紙と短剣を返すと、ダーナンの帝王はにこりと美しい笑みをたたえた。

「では、ご協力願えるのですね」

「まずは、話を聞くと行っているのよ。先走らないでちょうだい」

「お噂どおりのかただ」

「いい噂は聞かないでしょう。あなたと一緒に」

ミレーゼの返事にロディはクスリと笑った。

結婚式を終えたシーラは、その後ラシル王とともにリンセンテートス城へ赴き、謁見の間で次から次に現れる近隣諸国の賓客や大使や公使、廷臣の貴族たちから一人一人祝辞を受けたあと、式典用広間で晩餐会の席に着いていた。

本来であれば、シーラは側妃として緊張の中にいるはずだったが、頭の中に霧がかかったようにぼうつとした気分は依然続いており、自分を中心に進行しているはずの式次第のすべてがどこか遠くで行われているように思っていた。

そんな中、ある人物と言葉をかわし、視線がふとあった時だけ、シーラの心の霧が晴れ、現実の自分を強く感じるのだった。

けれど、晩餐会はシーラのなかで起きている変化に関係なく進行し、気がつくといつまでも終わらないように感じられた晩餐会はお開きとなり、賓客たちはすべていとまを告げて消えていた。

シーラはこれから自分が側妃として過ごすこととなるだろう、城の一画にあるホールデイン宮に馬車で案内され、寝室への扉にいざなわれた。

侍女たちがシーラの夜の支度をして去っていく扉の閉じる音を耳にしたとき、はじめてシーラはわれに返った。

一人きりになった寝室のなかで、戸惑ったように辺りを見ると、豪華な天蓋付きの寝台が目飛び込んで来る。

(わたし……)

シーラは、晩餐会でミレーゼやメイヴと会話をしたのはぼんやりと覚えているが、二人やアインが、いつの間になくなったのか思い出せなかった。

だが、意識が鮮明になってくると同時に、シーラはなにか様子が変であることに気づきはじめた。

本来であれば、新郎新婦が揃うまで、両国の王族の代表が付き添

い人として寝室までついてくるのがしきたりであるはずなのだ。

だが、寝室にはだれも残っていない。

寝室のもう一つある扉を開いて現れるはずのラシル王も、どれほど時間がたつても来る気配すらなかった。

シーラは立ち尽くしたまま、ことの異常さにどうすればいいのか戸惑っていた。

見知らぬ国で花嫁でありながら一人寝室に取り残された不安は、次第に、朝起こった暴徒たちを思い出させ、シーラは全身に鳥肌が立つのを覚えた。

殺されそうになったのだという実感が、今はじめてシーラの中にまざまざと蘇ってくる。

（あの時自分を守ってくれた兵士たちは……？　一緒に乗っていた執事は……？）

シーラは自分がそのことに無関心のまま、式に望んでいたのだということを知り、愕然とした。

けれど、その一方で死の直前から自分たちを救い出してくれたノストールの人々の顔が浮かんでいた。

もう、大丈夫ですよ。

なぜかシーラは今ここであの言葉を、自分を助けてくれたテセウスのあたたかい声をもう一度聞きたいと思った。

式の最中も、謁見のときも、晩餐会のときでさえ、シーラの視線はテセウスをさがしていた。

もう二度と会うことはないだろうということも、わかっていた。

だがシーラは、テセウスの腕の中に守られて、大聖堂へ着くまでの馬に乗っていた時間が、とても心地のよい大切な時間だったように感じられてしかたがなかった。

気がつくと、シーラの頬を涙が伝っていた。

（この気持ちは……なに……？）

シーラの手が口元を押さえたとき、王が現れる予定の通路側の扉がゆっくりと開く音がして、シーラは涙をいそいで拭くと、扉の方



向に振り向いた。

「！」

シーラは自分の目を疑った。

寝室に一步足を踏み入れたのは、ラシル王ではない、見知らぬ男だった。

シーラは夜着と羽織ったローブの胸元を両手で押さえると、もう一方の反対側の扉の方へと後ずさった。

「あなたは、この国の側妃にはならずには済むのですよ」

男は断言するようにそう言うと、穏やかな笑みを浮かべた。

「あなたにはこれから一週間後に、ある場所へ身を隠し。そしてある期間をおいた後、わたしと結婚するのです」

シーラは男の言葉の意味がわからなかった。

自分はたったいま、リンセンタートスの王と結婚式をあげたばかりなのだ。

しかし、男はシーラの様子にかまわずに、次の言葉を告げていた。「すなわち、このナイアデスの皇帝フェリエスの后となるのです」と。

数時間前、フェリエスは晩餐会を終えたその足でルイマーレ宮を訪ねていた。

そこに、今回の招待客、ノストール王国のテセウス皇太子とアウシュダール王子ら一行が滞在していると聞いていたからだ。

シルク・トトウ神の転身人といわれる王子を実際に見ておきたかつたし、大国ナイアデス皇帝の突然の訪問にどのような反応を見せるのか、知りたかつたのだ。

フェリエス来訪を耳にして、当然テセウスは驚きと同時に警戒心をもった。

シルク・トトウ神の転身人をナイアデスに差し出せといってきたのは、つい最近のことなのだ。

テセウスは緊張を隠せない面持ちで、アウシュダールとともに客間に向かう。

そこには、くつろいだ様子で椅子に深々と腰掛け、肘あてに左右の肘をのせ、かるく両手を組んで待っているナイアデス皇帝と、そのかたわらには側近らしき男の立っている姿があつた。

「おまたせしました」

互いに儀礼上のあいさつをかわしつづける間、フェリエスの目はアウシュダールに注がれ続けていた。

「アウシュダール殿下はシルク・トトウ神として覚醒をされたとうかがいました」

全員が席着し、ひと通り挨拶が終つたところで、フェリエスは単刀直入に切り出した。

テセウスの顔に緊張感が走る。

「それで、一度お目にかかつて、ごあいさつをとつかがつた次第です」

若き皇帝は、目の前に大人びた表情で自分を直視している幼児に

ほほ笑みかけた。

(銀色の髪ではない……)

フェリエスが最初に思ったのはそのことだった。

しかし、自分をまっすぐに見つめ続ける意志の強烈な印象を与える瞳はその疑問を消すだけの力があつた。

アウシュダールの瞳が穏やかにフェリエスに注がれた。

「あなたのために、ナイアデスへは行かない」

「……！」

フェリエスは、いきなり発せられた言葉に、動揺を隠しながらアウシュダールに問いかけた。

「わたしのため、とは？」

「あなたにはまだ、シルク・トトウ神を得る資格がない。なぜなら、信じていないから。ほしいのはただ、シルク・トトウ神を得たという自分の力。それを誇示することの喜び。戦さの象徴としての飾り」

幼子の小さな唇からこぼれる言葉は、部屋の中の空気を見えない力で支配し始めているようだった。

フェリエスの横の椅子に座るオルローは、アウシュダールの子供の姿に違和感を抱く。

だがオルローが、その違和感を感じたまさにその瞬間、アウシュダールの瞳がオルローを見つめた。

口元には意味ありげな笑みが浮かぶ。

オルローの背中に冷たいものが走った。

「予言をあげるよ。あなたが神にそむく行為をひとつでも行つたなら、国には簡単に戻れなくなる。ぼくの助けなくしてはね」

フェリエスは、アウシュダールの傲慢ともいえる言葉に息をのんだ。

「でも、きつとあなたは最初この言葉を疑う。仕方ないよね。ぼくを信じていないから。だけど、きつと頭を下げる。ぼくの足元にひざまづいて力を請いにくる。その時にやっと神の力を知るんだ」

アウシュダールの言葉とその存在感に、フェリエスの顔はこわば

っていった。

けれど、アウシュダールはまるで意に介していないかのように、話し続ける。

「でも、もしも万が一、この言葉をくつがえす時が来たなら、ナイアデスへいつてあげる。ありえないことだけどね」

フェリエスは、今までに味わったことのない見下されたことによる屈辱感と、大きな不安が自分の心にじわじわと広がっていくのを感じていた。

見えない力が自分の心を圧しようとしてくる感覚が拭えないのだ。アウシュダール本人に問いただそうと考えて来たさまざまな言葉すら、意味のないもののように感じられてくる。

フェリエスは、自分を屈服させようとする見えない力に抵抗し続けることが、精一杯だった。

「気をつけてね。あなたがリンセントースにいる限り、この国の神ビアンが見つめている。もしあなたがビアン神の怒りにふれることをしたなら、その身に災いが起こるよ」

アウシュダールの瞳は妖しく笑っていた。

フェリエスは全身がゾクリと波打つのを感じていた。

(これが……神として転身した者なのか……)

それは、ともにいたオルローも同じ思いだった。

「ねえ、そうだよね兄上」

アウシュダールはテセウスに小首をかしげながら問いかける。

その様子はあまりにも自然で、普通の幼い子供にしか見えない。

「ノストールの民は、アウシュダールの言葉に従います」

テセウスは最初の緊張が嘘のように消えていることを知った。

目の前にいるのが、大国の皇帝フェリエスだとわかっていても、アウシュダールの言葉がその不安を取り除いてくれているように、落ち着いてふるまうことができるのだ。

「ノストールの守護神であるアル神の息子、シルク・トトウ神の転身人の言葉に」

フェリエスは、テセウスのその言葉を聞き終ると、おもむろに立ち上がり退出の辞をのべて、帰っていった。

「アウシュダール殿下にはわがナイアデスでお会いできる日を心待ちにしております。ナイアデスの守護神ユク神の待つわが都で」  
威厳をもった笑みと、その言葉を残して。

フェリエスの去った扉をしばらく見つめていたテセウスは、時間が経つにつれ、ふとまずいことになるかもしれないと思いはじめた。自分は、わざわざたずねて来たナイアデス皇帝の用件さえ聞かずに返してしまったのだ。

だが、

「ご心配いりませんよ、兄上」

テセウスの考えなどわかっていているというように、アウシュダールがテラスの扉を開け放ち、門を抜けて帰って行くナイアデス皇帝一行の馬車を見下ろしながら、テセウスを招く。

窓の外はすでに闇深く、下弦の月だけが夜の空に静かに輝いていた。

月の輝く銀の光りを見つめるたびに、テセウスはいいようのない気持ちにかられた。

それは夢の中の記憶のように、思い出そうとすればするほど遠ざかっていく。

「兄上」

自分を呼ぶ小さな姿はいつもそこにあるのに、テセウスはいつもなにかを探しているような、もどかしい気分にかられていた。

「兄上、ほら月を見て」

だが、月明かりに照らされて振り返ったアウシュダールの顔を見ると、テセウスのなかからその想いは消えてしまう。

「アウシュダール。あれは？」

テセウスは、アウシュダールの指さす月を再度見つめて、息をのみ込み、そして小さく声を上げた。

雲でも、霧でもない何か月が月の表面を遮りはじめていた。

月だけではない。夜の空全体を何か、塵のようなものが舞い、漂っているようだった。

「ビアン神が怒りで、震えているんだ」

アウシユダールは神託を告げるように、夜空を見上げていた。

「あの人には、教えてあげないとね。ぼくたちの存在の意味を」

テセウスとアウシユダール、そしてハリア国のミレーゼ一行が、リンセンテートスを出国した翌日の昼過ぎになって、都は前触れもなく突然襲った砂嵐に包まれ、町は砂漠色一色に染まり上がった。

これまでも、強風が砂漠の砂を運んでくることはしばしばあった。だが、緑茂る首都セイルにまで砂嵐が足を延ばすことは、考えられないことだったのだ。

風はうなり声を上げながら吹きすさび、砂塵は風に舞い、建物や外を歩く人間、動物たちに容赦なく降り注ぎ襲いかかった。

かつてない出来事に、人々は恐れおののいた。

目を開けて歩くことさえできない砂の嵐は、人々から陽の光を奪い、昼間であっても町は薄暗く、街路は川のように黄色い砂が流れていく。

その街中の建物のひとつ、セイルーズ大聖堂では、年老いた司祭が日課としての祈りを行うべく、聖堂正面のビアン神に祈りを捧げていた。

いつもと同じ単調な祈り、いつもと同じ日々、いつもと同じ礼拝の面々。

彼は町が砂嵐に包まれることがあるうとも、自分の日常だけはどうなのかなことがあっても変わることなく、続いていくであろうことを信じていた。

だが。

祈りの半ばで、壁面の中央からその顔のみを突き出すように見下ろしているビアン神像を見上げた時、司祭の目が大きく見開かれたまま動きをとめた。

ビアン神がうなずいたのだ。

「……」

司祭は奇跡の瞬間を目の当たりにして、ただ驚きと感動の中に身

を置いていた。

だが次の瞬間、その目に映ったのは、真下にいる自分めがけて崩れ落ちてくるピアン神の顔のない巨大な彫像だった。

「陛下、この砂嵐では出立は無理です」

リンセントレートス城の一室で、オルローはフェリエスを説得し続けていた。

砂嵐が起きてから既に十日が過ぎた。

けれど、天候が回復する兆しはまったく見られないのだ。

「この砂嵐で、もう十日以上も足止めをされているんだぞ。いつまでも手をこまねいているわけにはいかないだろう。いつ止むともわからないのに」

ナイアデスの皇帝は表面では冷静に答えているが、実は不機嫌が頂点に達しているのを、幼いころからとも成長を重ねて来たオルローは知っていた。

出国はもちろん、城の外へさえも一步も出ることができないのだ。外出すれば最後、全身は砂に打ちつけられ、強風にあおられ、息さえできなくなる。

（強行突破を試みるならば、シーラ王女をあの場所まで連れて行くのは無理か？）

建物の壁を砂が激しく打ちつける音を聞きながら、フェリエスは帰国と同時にシーラをリンセントレートスのある場所へ移そうとしていた計画を、断念せざるを得ない状況になったことを感じていた。

予言をあげるよ。

耳元に、突然アウシュダールの声が響いた。

フェリエスは驚いて椅子から立ち上がると、部屋の中を見渡したが、部屋には自分とオルローがいるだけで、ほかにはだれもいない。



あなたが神にそむく行為をひとつでも行つたなら、国には簡単に戻れなくなる。ぼくの助けなくしてはね。

それは、昨日の夜告げられた言葉ではなかったか。

「陛下？」

突然立ち上がったまま、動かなくなつた主人にオルローは内心驚きながら声をかけた。

「……するものか……」

「は？」

「わたしが神に背くことなどするものか……。オルロー！ 国に帰るぞ」

「しかし、陛下……！」

「砂漠に詳しい者を捜し出し、案内役をさせる。その前にシーラ王女のホールデイン宮へ立ち寄る」

「ですが……！」

しかし、フェリエスのこれまでとはどこか違った様子を見てとつたオルローは、主を制止する言葉を告げることができないまま、唇をかみしめていた。

フェリエス一行がホールデイン宮へついたのは、リンセントレート城から出て半刻をすぎたころだった。

通常であれば、目と鼻の先であるホールデイン宮まで、これほどの労苦を要する必要はないのだ。

だが、城を出るときの予測は見事に裏切られた。

砂嵐に怖じけづいた馬は厩舎から一步も出ようとせず、フェリエスたちはあきらめて徒歩で出向くことにしたのだ。

しかし、荒れ狂う砂嵐は尋常ではなく、目には砂が入り目を痛めて咳き込んだまま立ち尽くす兵が次々とでた。

それでも、何度となく民家へ避難を繰り返しては、やっとの思い

で到着したのだ。

全身砂まみれのフェリエスたちが、玄関内のロビーに倒れ込むようにホールデイン宮へたどり着いたのは半刻も過ぎたころだった。

フェリエス到着の知らせを受けて、シーラは一緒にいたアインとともに、一行を迎えるべく部屋を出た。

だが、二階からホールに降りる大階段を降りようとしたシーラの足は、頭から足先まで黄色い砂一色となり、侍女や兵士たちの手をかりて、全身の砂をたたきおとしているフェリエスの姿を目にした瞬間、すくんでしまい動けなくなっていた。

「シーラ様？」

アインが不思議そうに、シーラの横顔を見つめた。

「どうかされたのですか？」

シーラはただ、黙ったまま首を横に振った。

自分でも理由がわからないのだ。

「シーラ様……」

アインは困ったように、シーラとフェリエスの姿を交互に見つめていた。

そのアイン視線が、階段の上の二人を見つけて顔を向けたフェリエスの黄金色の瞳と交差した。

「?!」

フェリエスの表情が凍りついた。

「ミュラ……!」

「え？」

その言葉にオルローがフェリエスの視線の先へ目を向ける。

そこには、階段のてすりにつかまっただまま立ち尽くしているシーラとそして……。

「ミュラ殿？」

オルローは自分の目をうたぐった。

五年前にオリシエ王と、フェリエスを守るために亡くなったフェリエスの守護妖精ミュラと生き写しの少女の姿がそこにあったのだ。

フェリエスとともにいた他の兵士たちもざわめいた。  
側近や親衛隊でミュラを知らない者は一人としていなかったから  
だ。

ミゼア砂漠へ向かう町外れの道。

数台の馬車と、その周りを幾重にも囲みながら一步一步、這うように先へ急ぐ騎馬部隊の姿が、砂嵐の中に見ることができた。

中でもひととき大きく豪華な馬車の中に、フェリエスとシーラ女王、そしてアインの姿があった。

かよい女二人を連れて砂嵐の砂漠を抜けるのは危険だと、強固に主張するオルローの言葉を退けてまで、フェリエスはシーラを本国に連れて帰ると断言した。

フェリエスの馬車の後方で、砂漠の民が着るといふ砂漠越えの服とフード、そして目元だけをわずかにだし、覆った布で身を固め馬にまたがっているオルローは、複雑な思いで砂の壁に向かって進んでいた。

（あれほどにミュラ殿と生き写しでは……。あのアインという娘……）

そう戸惑い考えあぐねていたが、そうした時間もつかの間で、目さえも開けていられないほどの黄色い砂の闇が襲いかかり、気をゆるめてしまえば目の前の馬車さえ見失しないかねなかった。

リンセントースからナイアデスへ向かうためには、隣国のセルグへ入国しなくてはいけなかった。

その途は二つあり、一つはセルグとの国境にあるミゼア山側を越える方法だが、最近山賊や盗賊がひんばんに出没しているため、フェリエスたちはあえて来たときと同じくミゼア砂漠を越える途を選んだのだ。

リンセントースの配慮もあり、砂漠の民 リーラの男が案内人としてついた。

男が言うには、ミゼア砂漠にさえたどり着けば、砂嵐は止んでおり、おだやかな青空が広がっているとの話だった。

(だが……)

オルローは一向に途切れることのない砂嵐に、危機感だけを高めていた。

フェリエスが、最初の意志を曲げてまでシーラを、特にアインをつれて帰りたがるわけをオルローたちは、何も聞かずともわかっていた。

だがこの悪天候の中、王女らを伴い強行突破しようとしているフェリエスの行動は危険極まりない。

(長い旅になるか……)

オルローがそう思ったとき、影のように自分の脇を擦り抜け、フェリエスらの乗る馬車の扉に手をかけようとする何者かの姿が突然現れた。

自国の人間ではない。

「何者だ？」

オルローは叫びながら剣を抜き、フェリエスの乗る馬車を守るために馬上の人物に切りかかった。

「馬車をとめろ！」

全身黒い布に身を包んだ男の、くぐもった声が叫びながら手にしていた剣で、襲いかかるオルローの剣を迎え打った。

一合、二合と、剣のぶつかり合う音が、砂塵の飛び交う中で響き渡る。

「……様……を……返せ……！」

男が叫ぶが、その声は砂嵐の轟音でかき消される。

男の顔も、オルロー同様布で巻きつけてあるため、何者なのかさえ判別がつかない。

「陛下を、お守りしろ！」

男と激しく剣を交えながらもオルローは、口を覆っていた布を引き下げ、大声で叫んだ。

だが、その声は剣の響きあう音や馬のいななきでかき消される。

馬車の前ではすでに激しい攻防が続けられていた。

「陛下！」

容赦なく顔をたたきつける砂塵が目にはいり、オルローは片目を閉じたまま剣をふるうが、戦おうにも状況がほとんどつかめず、切りかかってくる男の剣を受けるのだけが精一杯だった。

「フェリエス様……」

馬車の中では、シーラとアインが突然の襲撃に身を震わせていた。剣の激しくぶつかりあう音が馬車の中にまで響きわたり、二人は数日前に暴徒に襲われた出来事を思い出し、言葉を失ったまま互いに身を寄せ震えていた。

シーラの震える声に、フェリエスは静かにうなずくと、剣を抜き扉に向けて携えた。

まさにその直後、扉が開かれ、吹き込む砂塵とともに黒装束の男が馬車の中に入り込んで来ようとした。

「何者だ？」

フェリエスが剣を男に突きつけたとき、それを自らの剣で受け止めた男の碧い双眸が、アインのほうに向けられた。

「……ユリー」

男のくぐもった声がかすかにそうつぶやくと、アインの瞳が大きく見開かれた。

だが次の瞬間、フェリエスが剣を交差したまま、男を押し出すように馬車の外へ飛び出していった。

だが、さらに予期せぬ事態が起こった。

シーラとアインを乗せた馬車が突然走りだしたのだ。

「？」

さきほどまで走ることさえできなかった馬車の馬たちが砂嵐の中を猛然と走り出したのだ。

「止まれー！！」

オルローは叫んだが、声は風にかき消された。

馬車の御者台にすわった男は振り返ることさえせず、馬に鞭をふるい走り去った。

後を追おうとするオルローらの馬は砂嵐にとおびえて馬車を追うことはできない。

「なにがおきたんだ……」

黄色い砂壁は、瞬く間に馬車の姿を消し去っていた。

黒装束の男たちもいろめきたち、口々叫びながら馬車を追いはじめていた。

（仲間じゃないのか？）

オルローは心を落ち着かせて冷静に状況を把握しようとするが、この嵐の中ではそれさえも無駄な努力のように思えた。

「フェリエス様」

オルローは砂の大地に倒れこみ、立ち上がったまま動かない主人のもとに駆けつけた。

今までに見たことのない、凍りついた瞳で馬車の消えた方角をみつめている主君の無表情な横顔がそこにあつた。

オルローは、砂塵の中のフェリエスに何を言うべきか見つからない言葉を探したまま、肩を並べてただ立ち尽くしていた。

深淵の闇の中にきらめく夜空の星々。

そのはるか下には、より深い静寂にその身を染める黒い海がどこまでも広がっていた。

はるかはるか遠い昔、神々の最初の子として誕生した海の女神ドナ神の司りし大海。

青空の中でまばゆい陽を受け、青い水面に美しい光をきらめかせながら、人々の心を魅きつけ、そして癒し続ける海。

だが、陽が沈むとその様相は一変する。

まるで闇へと続く巨大な入り口のように、人の心に小さなさざ波を引き起こし、揺さぶり、招き寄せようとするような不気味さを漂わせる存在となる。

「夜の海に漕ぎ出してはいけない」

それが海に生きる者たちの暗黙の掟だった。

彼らは語り続ける。

昼間は陽の光を嫌い海底深く眠っている多くの妖獣たちが、闇の訪れと同時に目を覚まし夜の波間に現れるのだと。

そして、暗い海に漂う船を見つけては波音に紛れて静かに近づき、時に幻覚で惑わし、時に幻聴で誘い出しては襲いかかる。

なかでも、巨大な海蛇の姿をした妖獣ファージルはドナ神の住処を守る海の番人として、人々から最も恐れらる妖獣だった。

夜、女神の静かな時間を妨げようとする者を見つけると容赦なくその牙を向け襲いかかる。

だから、人々は海に船出をするとき、自分たち母国の神々に祈り、次に海の女神ドナに尊敬と忠誠の志を示すために、航海の無事を祈り、大地に咲く色とりどりの花を海面に捧げる散華の儀式を行う。

海で、恐るべき住人たちの眠りを妨げることがないように、そしてドナ神の加護を得られるようにとの願いをこめて。



万が一、夜の海に漕ぎ出さねばならなくなった時、船上で夜を越さねばならなくなった時、女神ドナ神の加護を少しでも受けた者は無事に過ごすことができた。

しかし、女神に祈りを捧げぬ者に、航海の安全を保障するものはどこにもいない。

さらに、その海には人々を恐怖におとしいれるもうひとつの存在があった。

海賊。

ニュウズ海洋には、海賊たちの住処となる小島が多く浮かぶ。

昼夜を問わず様々な海賊が出没し、船を見つけては襲いかかり蛮行の限りをつくした。

今、そのだれもが恐れる闇夜の大海を、いくつもの篝火を明々と灯し、悠然と進み続けるひとつの船の姿があった。

船首に巨大な海蛇・妖獣ファージルがかたどられ、マストにたなびく旗には砂時計に絡みつく大海蛇ファージルの絵が、黒い布地の中央に大きく描かれていた。

ハーフノームの海賊。

それが、この旗を掲げる者たちの呼び名だった。

ニュウズ海洋のなみいる海賊の中でも、時に同業の海賊船にさえ平気で襲いかかることから、「海の暴君」としてひととき恐れられている海賊たちの船だった。

荒れ狂う高波にさえびくともしない船乗りたちが口々に言う。

「広い海のどこかで万が一、妖獣・ファージルの印を目にしたなら、一刻も早くその場から立ち去れ」と。

ハーフノームの海賊は小さな船影さえ見落とさない。

目に止まれば最後、どれほど全速力で逃げてもあつというまに追いつかれてしまい、全財産を奪われ、身ぐるみをはがされて海のもくずと消えるか、一生海賊の奴隷として生きていく運命が待っている、と。

その誰からも恐れられるハーフノームの海賊たちを乗せた船は、

いま数週間ぶりに彼らの住処であるハーブノーム島へ還る航路をたどっていた。

甲板の上では、海の静かさと相反した賑やかな酒盛りがいたる場所ので繰り広げられていた。

浴びるように酒を飲み続けるもの、賭け事に興じるもの、ケンカをはじめもの、高いびきで眠り込むもの。

それぞれが思い思いの楽しみ方で酒宴に浸っていた。

彼らの船は数日前、嵐の中で航路を見失いさまよっていた商人の船を見つけて襲撃し、宝石や金貨などを手にしたばかりだった。

それらは船を降りれば分け前として配分される。

島には家族をもつ者も多く、また賭け事に興じる酒場にも不自由はしない。

まさに海賊たちはこの夜、凱旋帰還に酔いしれていた。

やがて夜空が徐々に白み始めたころ、ハーブノーム島の方角から、海賊船に向かって突き進んでくる小さな船影　グート艇　があった。

グート艇は二枚の三角帆を張ることで、風を最大限に利用し走り回る小型の快速艇の通称である。

その小舟の帆には、ハーブノームの海賊の印、妖獣ファージルと砂時計の絵が真紅の布地に染め抜かれていた。

「あのぶつ飛び走法は、ネイだな」

マストの最上部の見張り台で見張り番をしていたロツシュが、グート艇の走りをぼそりとつぶやいた。

短く刈り上げた頭と不精ヒゲ、陽に焼けた肌と逞しい筋肉質の体が、若いながらも海賊らしい風貌と精悍さを漂わせる。

「もうすぐ到着だっていうのに何しに来たんだか……」

ロツシュはそこまで言うとはっとしたように、自分の隣で同じようにグート艇を見ている少年にその視線を向けた。

けれど、深緑の髪をした少年は、ロツシュの言葉に特に反応もしめさずに、巧みに海風と帆をあやつり風のように近づいてくるグート艇を無表情にみつめている。

(あいかわらず、無口な奴だな……)

ロツシユは静かに息を吸い込むと、船首付近で酒盛りをしている一団に向かって大声で叫んだ。

「かしらあ！ ネイが来ますぜー！」

ロツシユの声に、甲板上の男たちがざわめきながらロツシユの指示す方向へ視線を走らせた。

「なにか……あつたのかあ？」

数人の男たちが立ち上がり、手に酒ビンをもつたままふらふらとした足取りでその方向へ歩み出す。

「おお、あのぶつとび走りはネイに違いありませんぜ、かしら」

かしらと呼ばれた、眼光の鋭いあごひげをはやしたひとときわ体格のよい男が、酒を飲む手を止めたままじっと島の方向をみつめていた。

頬からあごにかけて長い傷痕をもち、口元を覆う髭が実際の年齢を一層隠して見せる。

その男こそが、人々から恐れられている海賊ハーフノームの頭領ジル・モーガルだった。

そのジルと一緒に酒を飲んでいた小太りの男は、千鳥足で右舷甲板のてすりにもたれ掛かり、上半身を乗り出してネイのグート艇を見下ろすと、大きなあくびをしながら、おおげさに敬礼をした。

「出迎えごころう！」

だが、まだ少年のような肢体をしたネイと呼ばれた少女は、男の言葉など耳にはいつていないように、グート艇を海賊船の真横にぴたりとつけ併走させながら、甲板を仰ぎ見て張り裂けんばかりの声で叫んだ。

「かしらーあ！ ジーン！！！」

その切迫したただならぬ声の響きに、酔いどれていた男たちの顔つきが真顔に変わる。

「イリア姉さんが！ イリア姉さんが、危篤だー！ 危篤なんだよ

お  
「！！！」

どよめきが起こり、視線は自然とジルに集中した。

「イリア姉さんが……？」

見張り台のロツシュは、隣でジーンが立ち上がる気配に振り返るが、その表情が驚きに一変した。それまでロツシュの横にいた無口な少年は、見張り台を飛び出し、マストの上を駆け出していたからだ。

「おいジーン！ やめろ！」

ロツシュは少年が何をしようとしているのかに気づいて思わず止めようと叫ぶ。

だが、ジーンはマストの端においてあった太いロープを両手に掴むと、ためらうことなく足場を蹴りつけ、そのまま宙に飛び降りたのだ。

その様子を誰もが驚愕に目を見開き見つめた。

明け方の虚空へ飛び出した少年の小さな体は大きく弧を描くようにして降下し、鳥のように滑るように甲板に着地した。

「お、おい、ジーン?! 大丈夫か？」

ロツシュは見張り台から身を乗り出し、はるか下のジーンに向かって呼びかけた。

少年の身軽さや敏捷性は知っているものの、見張り台から甲板まで十五ルーレルもの高さがある。大の男でもロープ一本で飛び降りるのは相当の度胸が必要だった。

しかも、ジーンが飛ぶのを目にしたのは皆この日が始めてだった。

ジーンの突然の行動に船上が水を打ったように静かになる。

少年はそんな周囲のことなどまったく目にはいらないのか、そのまま側舷からネイの待つグート艇を確認すると、躊躇することなく海面に飛び込んだ。

「あいつ……」

啞然とするロツシュや海賊船の男たちを尻目に、ネイは海面に浮かんできた少年を引き上げると、風を巧みに利用してグート艇のを

一気に方向転換させ、島に向かって走り去って行った。

朝焼けに染まりつつある空を背に、ネイのグート艇が入江に姿を見せると、それを待ち受けていた数人の女たちが接岸を待ち切れなように口々に少年の名を呼びながら、膝を海水に浸しグート艇に集まってくる。

「ジーン、馬を用意してある。早く行きな」

「イリアがうわ言で、あんたの名前ばかり繰り返し呼んでるって。急ぐんだよ」

「本当に突然だったんだよ。昨日の夜、容体が急変したんだ。テルグがずつとつきっきりで診てるから」

女たちは、グート艇から降り立った全身濡れたままの少年の体に用意していた厚い柔らかなファシム地の大きな布で体を覆うように次から次へとかけていく。

ネイもグート艇をその女たちにまかせると指笛をならした。すぐに岩場で待っていた自分の馬が駆け寄ってくる。その手綱をとるとジーンのを馬上に乗せ、自分もその後ろにまたがった。

「はあっ！」

ピシリという手綱の音が響き、馬の横腹を蹴る。

「行くよ！」

その声に合わせてるように、馬がいななき走りだした。

ジーン之母、イリアの待つ家に向かって。

部屋の扉が勢いよく開くと、集まっていた大勢の女たちは一斉にその方振り返った。

そして、そこにネイに付き添われるように立っている少年の姿を認めると、悲しみの中に安堵の表情をたたえながら彼にベッドへ続く道をゆずった。

「ジーン……。ジーン……」

ベッドの上の女性が、意識のない荒い呼吸の中で少年の名を呼び続けていた。

「かあさん……」

ジーンはそのそばに駆け寄り、イリアの手をとり叫んだ。

「かあさん！ 今帰って来たよ！ 僕だよ。かしらもすぐに帰ってくる。わかるよね？ 目を覚まして！ 僕はここにいるよ！ かあさん！」

「ジー……ン……」

その必死に呼びかける声が届いたのか、イリアの様子が徐々に落ち着いたものに変わっていく。

長く伸びた緑色の髪は肩でひとつに束ねられ、血の気のひいた青白い顔は、母とはいつてもまだ若く、少女のような雰囲気を漂わせている。

「僕だよ。わかる？ かあさん！！」

母の顔を見つめる少年の緑色の瞳にじわりと涙があふれる。

「だめだ、かあさん。死んだらだめだ！ 目を覚まして！」

ジーンは救いを求めるように、真向かいに立つテルグを見つめるが、年老いた白髪の療法士は静かに首を横に振るだけだった。

もって半年の命だったんじゃ……。それが、三年も寿命をのばしておる。不思議なこともあるものよのお。

三週間前、港を立つときにテルグがジルにそう語るのをジーンは聞いていた。

その日はイリアの体調も安定していたこともありネイと一緒に笑顔で見送ってくれたのだ。

それだけに、ジーンにとってイリアの体調の急変は、予想もしていない出来事だった。

ジーンは、イリアの両肩をつかむと必死に揺り起こそうとした。

「だめだよ、かあさん！ 死んだらだめだ！ 僕はここにいるよ。かあさん！！」

「ジーン、無茶しちやだめだよ」

ネイがジーンの手をとって止めようとする。だが、少年の耳には届いていなかった。

周囲の人々は、その様子を心を痛めながら見守るしかなかった。しばらくすると、部屋にひととき大きな体格をした人物が現れた。そして、イリアにしがみつくようにしている少年の肩を大きな手でつかみ、その動きを止めさせた。

「かしら……」

ジーンは自分の肩をつかむイリアから引き離す存在に振り返り、そこにイリアを見下ろすジルの姿に気づく。

この家の主であるジルが現れると、それまでイリアを見守っていた人々は、ジルとジーン、そしてテルグ療法士の三人だけを残して部屋から姿を消していった。

それが何を意味することなのか、ジーンはその意味を知り視線を落とす。

家族の人間が亡くなる時、最後の別れを家族だけですごせるようにするのが島のならわしだった。

ジルは、ベッドの傍らにある粗削りだが丈夫に作られた木の椅子を引き寄せて腰をおろすと、妻の手をとり、その上にジーンの小さな手を重ねた。

「イリア」

ジルの低く響く声がとどいたのか、イリアのまぶたがゆっくりと開いた。

「かあさん」

少年の声にイリアの意識が徐々に鮮明なものになっていく。

「ジーン……、ジル……来てくれたのね……」

イリアは天井を見上げたまま、静かにほほ笑んだ。

その黒く美しい瞳は三年前のある嵐の夜を境に、視力を失ったままだった。

三年前　イリアは目の前で、幼い息子が巨大な竜巻にさらわれるのをどうすることもできずに見ているしかなかった。

イリアはそのまま竜巻を追いかけジーンを捜し求めた。

くる日もくる日も、病弱なイリアが寝食を忘れ、島の海岸線を辿

りただひたすらに息子を探し続けたのだ。

しかし、島の人々はそのことを知らなかった。

竜巻はハーフォーム島全体に襲いかかり、多くの人々から家や家族を奪い、鋭い傷痕を残して去ったのだ。

誰もジーンが行方不明となり、イリアが一人で探していることに気づいていなかった。

しかも頼りの男たちは、海に出たまま無事かどうか分からない状況だった。

数日後、海賊船が島へ戻り事態を知った男たちがイリアと息子を探しはじめ、海辺の岩陰で幼子を抱き締めたまま倒れているイリアを発見したとき、彼女は瀕死の状態だった。

衰弱が激しく「もって約半月の命」と、療法士のテルグはジルにそう宣告した。

イリアの両親はすでに亡く、ジルとジーンだけが彼女の唯一の家族だった。

海賊の頭領の妻とはいえ、島では目立つことのない女性であり、誰もがその短い命を哀れに思いながらも、受け入れていた。

だが、イリアは奇跡的に命をつないだ。

死の宣告をも乗り越え、同じように衰弱し意識の混濁状態にあったジーンが回復するのに同調するかのようになり、イリア自身もまたよくなっていったのだ。

しかし、その一方で視力は急激に失われていった。

息子を抱き締めることができるまでに回復したとき、すでに光は失われていた。

けれど、イリアはこれまで以上にジーンに愛情を注ぎながら、穏やかな日々を暮らして来たのだった。

「あたしね……楽しかった……」

イリアは左の手で、ジーンの肩、首、そして頬を愛しげになでながら、苦しげな息づかいの中、ほほ笑んだ。

「本当に……ありがとう……ジーン……。……ジル……」



「かあさん……」

「それと……ずっと謝りたいことがあったの……ごめんね……。ジーン」

イリアの言葉に、ジルが一瞬目を見張った。

「イリア……？」

「わかってた……。ジーンは……。本当のあの子は、あの時に……。もう死んでたってこと……」

今日までジーンと呼ばれて来た少年は、その言葉を耳にしたと同じ時に体をこわばらせた。

「でも、信じたくなかった……。信じられなかった……。あの子を失ったことを認めてしまったら、あたしは……。生きていられなかったから……」

イリアの手は、ジーンの頬、鼻を、唇をその体温を確かめるように優しく優しく触れていく。

「だから……。毎日……。毎日……。あの竜巻にさらわれたジーンを……。探し続けた……。ただどね……。どこを探しても、ジーンはいなかった。ジル、あなたにそのことを話したくても……。ずっと海に出たつきりで……。あの竜巻であんたが無事かどうかもわからなかった。だから……。ジーンがいなくなったとき……。あたしは独りぼっちになつてしまう気がしたんだ……。どれほど辛かったか……。寂しくて……。苦しくて……。辛くて……。自分を責めて、責めて、気が狂いかけた。それでね……。死のうと思つて、海に身を投げたんだ……」

妻の突然の告白にも、ジルはただじつと耳を傾けていた。

「なのに、不思議だよ……。崖から飛び降りたその時に、『あの子を助けて……』って、そう呼びかける声を聞いたような気がした……。そして落ちて行くあたしの目に、海に浮かんでいたおまえの姿が飛び込んで来たんだよ……。ジーン」

イリアはその時のことを思い出しているのか、嬉しそうにほほ笑んだ。

「ドナ神が、海に消えていったおとうや、おかあが、あたしにジーン」

ンを返してくれたんだ……って、そう思った。それに……その声はずっとあたしと一緒にいてくれた。『あなたは……まだ、死んじやいけない……』って、ずっと励まされた。だから……あたしは、今日まで生きて来れた……」

「イリア……」

体を気遣って、話を止めようとするジルをイリアは小さく首を振って拒む。

「それまでのあたしは……だめな母親だった。弱い体をいいわけに、ジーンを大切にしていあげられなかった。ジル、あんなことも恨んだ。家族よりも、海と船ばかりを見ていたあんなに……。ジーンを海賊にしようとしたあんなに……。海賊なんて……。好きじゃなかった。でも、あたしはこの島で生まれ、育った。おとうも海で死んだ……。あんなも、ジーンもそうなるのかと思うと……。毎日がただ空しくて、悲しくて、生きているのが辛かった……」

イリアの瞳から一粒の涙がこぼれ落ちた。

それまで、黙ってたたずんでいたテルグ療法士が、一礼をすると部屋から退出した。

窓のカーテンの間から、明るい日差しが射し込んでくる。

「でもね……。目が見えなくなったのに、この三年間は本当に楽しくて、嬉しくて、幸せだった。ジーンのおかげだね。あんながいてくれたから、あたしに生きる力を注いでくれた。ジル……。あんなも島にいるときは、家にいてくれるようになった。やさしくなった」

「イリア……」

ジルの大きな手が、イリアの頬につつまこむように触れた。

「ありがとう……。ジーン……。幼いあなたは戸惑いながら……。息子になってくれた。本当はあんなを探してるはずの親に悪いと思ったこともあったけど……。この手からあんなを離すなんて、考えられなかった……。ごめんね、ジーン」

イリアの目から涙があふれ、次々とこぼれ落ちていくのを、ジルの親指がそっと拭う。

「僕、かあさんのこと大好きだよ。ずっと前のことなんて覚えていない。だから、かあさんは、早く元気になって！ また、いろんな話しをしてよ」

「やさしい子だね……ジーン……。いいや、ルナ……」  
「え？」

突然、その名を呼ばれたとき、少年の鼓動がドクンと音をたてた。忘れていたわけではなかった。

だが、その名を呼びかけるイリアの声を聞いたとき、ルナは聞こえるはずのない別の声が共に呼びかけるのを聞いたような気がしたのだ。

ルナ……と。

イリアは、ルナの動揺を感じ取ってか、優しくそして力強くその手を握りしめた。

「夜うなされるとね、『ルナ……悪くない……』って、泣きなきごらしがみついて来たことが、何度もあったんだよ……。きつと、こわいことが、たくさんあったんだろうねえ……」

イリアは、夫の手とジーンの手を重ね合わせ、自分の両手で包み込むように添え重ねると、呼吸を整えるために何度も何度も深呼吸を繰り返した。

「あたしのジーン……あたしのルナ……。強く生きるんだよ。かあさんの分まで……ずっと……ずっと……見守ってるんだからね……。それから……ジル、この子のこと、頼んだよ。あたし……あんたのことね……ずっと愛してたよ……ありがとう……」

その言葉を最後に、イリアの手から力が失われ、まぶたがゆつくりと閉じていった。

「イリア！」

「かあさん……？ かあさん……！」

二人はそう言ったまま言葉を失った。

イリアの瞳が開くことはもうなかった。

あまりにも静かな死だった。

窓からは、ジルとルナ、そしてほほ笑みを残したまま逝ったベツドの上のイリアを包み込むように、朝の日射しが清涼さとともに静かに注ぎこんでいた。

その日の夕暮れ、浜辺で多くの人々が見守る中、一漕の小舟が海に沈みゆく夕日に向かうように船出した。

真っ赤に燃えるような夕焼け空は、海の色まで血の色に染めて行くようだった。

小舟に向かい一本の火矢が天空に向かって高々と放たれた。

矢は大きく弧を描き、やがて小舟に積まれていたワラに突き刺さる。

火は徐々燃え移り、炎となって小舟の上に広がっていく。

「イリア姉さん……」

ネイが唇をかみしめながら、じっと炎に包まれる小舟を見つめていた。

ジル、そしてルナもまた無言のまま、イリアの亡骸の乗った小舟をその瞳に映し続けている。

海賊たちの葬儀。

海に生きる者は死んで後、舟に乗って旅立つことで海の女神ドナ神のもとにたどり着き、海の一部となって生き続け、海に出る家族や仲間を守り続けると信じられて来た。

イリアもまた海になるのだと、人々はルナに声をかけ、静かにほほ笑んだ。

ルナは煙をあげながら、海中に沈み消えていく小舟を無言のまま見つめ続けていた。

ジーンとして暮らして来た三年間。

ルナにとっては、長い夢のあとに訪れたまったく別の人生だった。  
長い夢。

闇の中で、自分をつき落とそうとする影。

嵐の海に投げ込まれ、沈んでいく体。

大好きな人々と自分とを引き裂く地割れ。

出口のない森の中を果てしなくさまよいつづける自分の姿。

それらの夢が繰り返し、繰り返し訪れては、幼い心に恐怖と孤独を烙印のように焼きつけた。

兄上？ 父上は？ 母上……母上え……。

どれほど呼んでも叫び続けても、ルナの声に応える者は現れなかった。

誰の救いの手も差し伸べられることはなかった。

果てしなく繰り返される悪夢

だが、やがて夢の中の情景が変化を見せた。

燃えるように熱い体と潤む瞳、ぼんやりとした意識の中で、ルナはベッドの上に眠る自分の姿をみた。

そこは、天井も壁も木で出来ている小さな部屋だった。

見知らぬ場所。見知らぬ世界。

夢の続きだと、ルナは思った。

長い悪夢の中で、時折訪れる別の夢なのだ。

ルナの隣にはもう一つベッドがあり、そこにも眠っている女性の姿があった。

ほかに、部屋を出入りする日に焼けてたくましい女たちと、筋肉隆々とした男たち。

白い髭をはやし腰を曲げた老人、療法士のテルグ。

頬に傷をもつ大きな体格をした「かしら」とよばれるこの家の主人らしき男。

自分と隣に眠る女性を看病するために交代で看病に当たっている陽気な女たち。

それが、夢の中の登場人物だった。

やがてルナは、繰り返し訪れる夢の中の住人たちの顔と名前、そして部屋の様子を徐々に覚えていった。

長い悪夢の狭間で見るつかの間の静かな夢の中で、ある時隣のベッドにいたはずの女性がルナの手を握りしめ、心配そうにのぞき込んでいる場面に出会った。

ジーン。良くなるのよ、ジーン。かあさんがついてるからね。

(ジーン……?)

ルナは、その人が自分のことを別の名で呼んでいるのを不思議な感覚で聞いていた。

重い目を閉じるとそこに、母ラマイネ妃の姿が重なった。

ルナ……早く良くなるのよ。

(母上……)

ルナの綴じた瞳から、涙がこぼれた。

ルナは覚えていなかった。

母の部屋から見知らぬアンナの女性に連れ出されて崖に追い詰められたことも、守護妖獣に助けられて逃げる途中で竜巻に巻き込まれたことも、ルナの記憶から消えていた。

悪夢の中から出られないまま、一人さまよい続けて来たのだ。

ルナは意識の回復と共に、その静かな夢が、夢ではなく現実に自分のいる場所なのだ気づき、そして受け入れはじめていた。

高熱が去り、体に力が戻りはじめ、ベッドからようやく起きることができるようになった頃、そこはルナの良く知る居心地の良い空間となっていた。

ジーン。

女性がルナを抱きしめる。

眠り続ける意識の中で、耳に届いていた自分と呼ぶ声。

実際には、あまりにも弱々しく消え入りそうであったにもかかわらず、ルナはその声の温かさを知っていた。

目を閉じるといつもそこにラマイネ妃のほほ笑みが重なった。

かあさん……と呼んで、ジーン。かあさんよ……。

か……あ……さん……?

ルナの唇から自然に言葉がこぼれていた。

なぜ、そう応えたのかは自分でもわからなかった。

ただ、イリアの中にだけ母の姿を見ることができた。

見知らぬ場所、見知らぬ人々のなかで、イリアといると安心する

ことができた。

不思議と「ジーン」と呼ばれることに抵抗さえ感じなかった。

ベッドから起き上がるほどまで回復するなると、ルナは家を訪れる人々と言葉を交わし、外で遊ぶことにも慣れていった。

もちろん最初の頃は、アルティナ城の家族のもとに帰ることだけを考えて暮らしていたのだが、幼心に自分がどこかまったく別の世界に来てしまったのではないかと感じて、そのことを口にする事が出来なかった。

しかし、家に入入りする男たちの口から、「ニューズ海洋」「ドナ神」「ノストール」という言葉を聞くうちに、家の近くの小高い丘から見える山の頂がエーツ山脈であり、自分がいる場所は海賊たちの暮らす島なのだという事を知っていった。

ルナは帰ることが出来るのだと、知った。

そして、必ず誰かが自分を探して迎えに来てくれるはずだとルナは信じて、毎日のように丘の上の木に上っては、エーツ山脈の見える海を眺め続けた。

だが、どれほど待っても願っても、あの悪夢の中と同じように、ルナを迎えに来る者も探しに来る者もなかった。

それどころか、耳に入ってくる海賊たちの話はルナにとって信じがたい話ばかりだった。

ノストールの第四王子が神の転身人として名乗りをあげ、ダーナの侵略から国を守った、と。

自分以外の誰かが、自分として家族のそばにいる。

それを耳にした時、ルナは寂しさ、孤独と悲しみ、そして混乱の嵐に襲われた。

どうして誰も自分がいなくなったことに気づいてくれないのか、探し出してくれないのか。

誰が、自分のふりをしているのか。

一刻も早く帰りたい、家族に会いたいという思いで、胸がはりさけそうだった。



海を越えれば、母に会える。  
船に乗れば、家族に会える。

海賊船に乗れば……。

海賊船に乗れば、ノストールに帰れる。

ある日、ルナはその思いに突き動かされて、ジルの海賊船にもぐりこんだ。

目立たないように、銀色の髪の毛を木の葉の染料で緑色に染めて。だが、海賊船はノストールに立ち寄ることはなかった。逆に、もぐりこんだことがばれて、ジルから大目玉を食らったのだ。

ルナはあきらめなかった。

機会をみつけては何度も密航し、見つかつては叱られ、時には海に投げ込まれたこともあった。

それでもルナは止めなかった。家族のもとへ帰りたいという思いは強まる一方だった。

やがて努力が実り、ルナはノストールの噂を詳しく知ることができるところになった。

しかし、それはノストールに自分の居場所がないという現実を、自らに突きつける結果にしかならなかった。

ノストールに第四王子はいる。

竜巻をおこして国を守るといって、シルク・トトウ神の転身人の王子がいる。

ごめんなさい。ごめんなさい。

ルナは、自分が何かいけないことをしたのだと思った。

いけないことをしたから、ルナの代わりに別の子がきたんだ……。ルナ、病気のふりや、うそ泣きしたりしたから……いらなくなっちゃったんだ……。

アルティナ城にいた自分が、どうして海賊島にいるのか。守護妖獣リユーザが、なぜ何度呼びかけても姿を現さないのか。ルナにはわからないことばかりだった。

リユーザ……どこにいったの……

半身のように寄り添い続けて来た守護妖獣がいなくなったことは、ルナを絶望的な悲しみに追い詰め、幼い心は自分を責めることしか考えつかなかつた。

ごめんなさい……ごめんなさい……。

何度もジルの家を抜け出しては行くあてもなくさまよい歩き、家族と守護妖獣の名を呼んでは一人で泣いた。

そのたびに、イリアは柔らかな布でくるむように、傷ついた幼い心をそつとやさしく抱き締めてくれたのだ。

「ジーンは泣かない。強い子なんだから」

温かい胸に抱きしめられながら、優しい声でそうささやきかけられると不思議とルナは、どれほど不安な夜も安心して眠りにつくことができた。

だれも助けしてくれない独りぼつちの場所で、イリアだけがどんなときもルナを優しく迎入れ、抱き締めてくれる存在だった。

島の人々は大らかで気のいい人ばかりではあったが、いつしかルナにとり、イリアはかけがえのない存在になっていた。

自分がなぜ、ジーンと呼ばれるのかわからなかったが、ここには確かにジーンだけに許された居心地の良い場所がある。

時が経ち、ハーフノームの海賊の頭領ジルとイリアの息子ジーンとして、ルナはこの島で生きはじめていた。

同時にノストールでの記憶は、徐々に薄らいだものになっていった。

泳ぎや魚釣りを覚え、グート艇を操れるようになった。

海賊船には、イリアの体調が良い時と、島からあまり離れないニユウス海洋に出る行とくに限り乗船を認められた。

ジルや仲間が商船に襲いかかり、切りつけ、人を殺し金や宝石を奪う姿を、マストの上でロツシュに支えられながら見た初めての夜。衝撃と恐怖のあまりに眠ることも、仲間の顔を見ることも出来ずに震え続けた日があった。

だが、襲う相手と出会えぬまま空腹を抱えて海をさまよう日々、

嵐に出会い何度も乗り切り海と戦うことを覚えた日々、また他の海賊と鉢合わせをして死闘を乗り切った日々など、あらゆる経験がルナに海賊としての生活を染み込ませていった。

伝令役として働いたこと。海賊同士の戦いのなかで仲間の窮地を救う活躍をしたこともあった。

そして、三年の年月が流れた今となつては、ノストールの王子としての日々は記憶の底に静められ、ふとしたときにぼんやりと思い浮かべることはあつても、その記憶が正しいのか夢だったのかさえ、あいまいになつていった。

イリアの死は、慣れ親しんだ日々の中に突然訪れた。

イリアを見送るために浜辺に集まっていた人々が、やがて一人去り、二人去り、徐々にその数を減らしていても、ルナとジル、そしてネイの三人だけは、空に満点の星がきらめき、夜空に月の姿があらわれるまでその場を動かさずじまつた。

「あたしさ……」

どれほどの時間が流れたのか、ネイがポツリポツリと話し出した。

「イリア姉さんのこと……本当の姉さんみたいに思つてきた……」

小麦色に焼けた肌に、くせのある長い黒髪を後ろで一つにまとめ、中性的な面立ちをしたネイは、イリアの妹と言ふには年が離れており、どちらかといえばルナに年齢に近い年頃だった。

「あたしは親の手で商人に売られて、船で別の国に連れて行かれるところだった。狭くて汚くて暗い船底の船室に何十人もの子供と一緒に詰め込まれた。長い間、窓のない部屋からは出ることも許されなかった。その船が海賊の襲撃を受けて……今度はあたしたちは海賊の奴隷になつて、毎日一人ずつ殺されていった。あたしの番が来たあの日、今度は海賊船が襲われた」

ネイはおかしそうに笑う。

「あの時、ハーフノームの海賊があつた海賊たちを襲わなかったら、ジーンがいなかったら……あたしは死んでいた。島に連れて来られ

て、病人の……。イリア姉さんの看病をしると言われたときは正直驚いたけど……。イリア姉さん……。こんなあたしにさえ……。やさしい人だった……」

ネイの碧い瞳から涙がこぼれた。

「いままで良く世話をしてくれた……」

ジルの低く太い声が、ボソリとつぶやくように響いた。

ネイは驚いたように、ジルを見上げた。

これまで、命令以外の言葉をかけられたことなど一度もなかったのだ。

「かしら……」

ネイがその先の言葉をさがそうと口をひらいた時、さらに思いもかけない言葉がジルから飛び出した。

「ジーンはもういない」

「かしら？」

ネイはジルの言葉に戸惑った。

驚きのあまり、ジルとルナを交互に見つめる。

けれど、二人は硬い表情でイリアの消えた海をただ見つめているだけだった。

「おれの息子は三年前に、この海で死んだ」

「どういうことですか？」

ネイは初めて耳にする言葉に、驚きのあまり声を震わせた。

「イリアのために今日まで息子としてそばにおいて来た。だが、イリアはもういない」

「まって……かしら！」

ネイの困惑した視線の先で、ルナは表情をみせずただ夜空を見上げていた。

その小さな唇がきつくかみしめられているのを、ネイは戸惑いの瞳で見つめていた。

「イリアはジーンのもとへいった。おれの家族はみんなドナ神のもとだ」

「わ、わかんないよ、かしらがなんでそんなこと言い出すのか。それじゃあ、まるで、ジーンが……」

「息子は死んだ……」

「かしら……」

ネイは言葉を失った。

もともと島の住民でなかったネイは、女の子であるジーンを島の人々が男の子同然に扱っていることに疑問を感じていた。

だが、イリアの看病をするために命を助けられたネイはその疑問をだれかに問うことはなかった。

ただ、ジルが男の子がほしくて、そのように育てているのだろうと自分なりに解釈していたのだ。

「で……でも、イリア姉さんが亡くなったばかりだし、そんなこと言わなくても……」

「そいつには島から出て行ってもらおう」

その言葉に、ルナの体がビクリと震えた。

「な……」

信じられない厳しい言葉に、ネイは目を見開いたままジルの顔を凝視した。

「……ジーンは今日イリア姉さんを亡くしたばかりなんだよ……なにも今そんなこといわなくても……。その……かしらが一緒には暮らせないってうなら、ジーンはあたしが面倒を見るよ……だから……出て行けなんて……」

うるたえるネイを無視して、ジルは二人に背を向けた。

「今日は好きにしてい。だが、海が荒れない限り、明日中に島から出ていくんだ」

それは命令だった。

何者もであっても、言葉を挟むことのできない。また、逆らうこととの許されないハーブノームの海賊の頭領の言葉だった。

「かしら……」

ネイは去っていくジルの大きな背中を、ただぼうつ然とみつめるこ

としかできなかつた。

翌日、だれもない入江のグート艇の前でルナは一人立っていた。空はルナの心とは裏腹に快晴で、海も穏やかだった。

遊びで乗り、帆を操ったこともある乗り慣れた小舟。

けれど、幼いルナ一人の腕力では、強い風に対抗することはまだ不可能に近い。

ハーフノーム島から一番近い大陸はノストールだったが、そこへ渡るにも小舟では三日はかかる。

まして風がなくなれば、漕ぎ棒を使わなければ進むことが出来ない。

それでも、自分が扱える小舟はグート艇しかない。

今日中には島から出ていかなくてはならないのだ。

ルナは唇をかみしめながら、後ろを振り返った。

険しい山と切り立った崖に囲まれた緑の島。

ハーフノームの海賊たちの住処。

イリアと過ごした島。

ジルは一度たりとも自分のことを父と呼ばせたことがなかった。

「『かしら』と呼べ」

とうさんと、呼びかけようとするたびにジルはそう言った。

だからジルから出ていけという言葉聞いたとき、ルナはその言葉を受け入れるしかなかった。

いつかこの日がくることを漠然と感じ恐れていた自分がいたことを、改めて思い知る。

「ジーン！」

声のする方に視線を向けると、ルナの緑色の瞳に走ってくる二頭の馬の姿が映った。

ネイとロツシユの馬だった。

「よかった、間に合った」

ルナの前までやってきた二人は、背中に荷物を背負い笑顔で馬から降り立った。

そして、そのまま馬の尻を打ち帰らせてしまう。

「？」

ルナの問いかけたような視線を受けてネイが笑う。

「ノストールまであたしらが送ってくよ」

ルナはその言葉に、驚いたように首を横に振った。

拒否するルナの頭の上に軽く手を置いたロツシユは真剣な表情で、緑色の大きなルナその瞳をのぞき込む。

「いいかジーン。かしらは確かに出て行けと言ったかもしねえ。

けど、おまえ一人でこの島を出て行けとは言っちゃいねえだろ。誰かが近くの港まで送ってやったって命令違反じゃない」

ロツシユの言葉に、ルナは視線を下におとす。

「それにみんなからもおまえのことを頼まれた。この荷物がその証拠だ」

ロツシユは背中に背負っていた小さな袋をルナに差し出し、見ると言うように自慢げに口元に笑みを作る。

「これはみんなからだ。昨日の真夜中、ネイが泣きながら、かしらの言葉を一件一件回って伝えたんだ。おまえを島に残してほしいと訴えながらな。けど、かしらの言葉は絶対だ。だれにも逆らえない。だからその代わりに、あの強欲者どもがおまえの旅立ちを祝うために餞別を持たせてくれた。それがこれだ」

ロツシユは強引にルナの手を引き寄せて一抱えを持たせる。

ルナの手に、ズシリとした重さが伝わる。

「おまえを無事大陸まで送り届けると、念をおされた。だから、このままのこのこ帰ってみろ、おれが半殺しの目にあう。わかるだろ」ルナはその袋に視線を落としたまま、うつむいた。

仲間たち一人一人の顔が脳裏に浮かび、船の上での出来事が次々と蘇ってくる。

殴られ、怒鳴りつけられ、海に突き落とされ、帆柱に逆さ吊りに



されて笑い者になったこともあった。

けれど、海賊流の剣の扱いを教えられ、仲間内での格闘に勝った頃から、伝令役となり、海賊船の隅から隅まで知り尽くし、酒も、ケンカも賭け事も、そして海の掟も学んだ。

陽気な顔、沈んだ顔、厚顔不遜な顔、豪傑そのものといった顔、海賊たちの思い出がその袋の重みとともに浮かび上がる。

黙ったままのルナの思いを知ってか知らずか、ロツシユとネイはルナの腕をとり、背を押し、強引にグート艇に乗り込んでしまった。「行くよ！」

ネイが帆を張ると、吹きつけるさわやかな海風を真つ赤な布地に砂時計の描かれた帆が広がる。

潮風をいっばいに受た帆とグート艇は、勢いよく海に漕ぎ出した。波にのりグート艇がぐんぐん島から離れていく。

ルナは船の縁につかまり、その大きな瞳に島の姿を焼きつけようとするように海賊島を見つめ続ける。

最初はあれほど島から出ることばかり考えた島。

その島をついに離れ、ただただ恋い焦がれたノストールに帰る時がきたのというのに、ルナに嬉しいという気持ちはなかった。

あるのはハーフノーム島への不思議なほど親しく離れがたいという、強い思いだけだった。

いまのルナにとってやすらげる場所はハーフノーム島以外になかった。

仲間の乗る海賊船以外になかった。

その島を去らなくてはならない。

イリアと過ごした思い出の場所から引きはがされることは、心が張り裂けるほどの悲しみをルナに与えた。

その悲しみが深ければ深いほど、ルナは今以上にもつと辛いことがあったようないいようのない気持ちに駆られるのだ。

だが、ルナの心は島を離れる辛さだけが心を占めていた。

やがて海賊たちの島、ハーフノーム島の姿が遠ざかり、水平線だ

けが見えるようになっても、ルナは目をそらすことを恐れるように、島の方角をただ見つめ続ける。

「ジーン」

ロツシュが静かに呼びかけるが、ルナは微動だにしない。

「ジーン」

何度か呼びかけた後、ロツシュはあきらめたように動かないルナの背中に向かって話しはじめた。

「いいか、ジーン。実は、お前が島に戻れる方法を考えたんだけどな」

「え？」

その言葉に、帆を操っていたネイの手が止まる。

だが、ルナは振り返らない。

「これは、ジーン、おまえがいるからこそ成立する作戦なんだ」

ロツシュは片目を綴じてネイを見ると、自信ありげな笑みを浮かべる。

「いいか、おれたちハーフノームの海賊は、ずっと昔に、ノストール王国と海賊許可協定を結んでいるんだ。それは、おれ達ハーフノーム海賊が、ノストール近海に現れる商船や海賊船、国籍不明の船、敵船を襲つたことを見過ぎすかわりに、ノストールが通過許諾状を発行した船は襲わないという約束事だ。その代わりにおれ達は、海賊稼業で儲けた五分の一をノストールにくれてやる。反対に、ノストールがその許諾状を発行して得た金の三分の一をおれ達海賊に譲渡する、という取り決めだ。

まあ、今じゃその協定も有名無実、許可状だってあってもなきに等しい代物だが、それでもやっかいな代物であることには違いない。その証拠に、過去に何度も歴代の頭たちが、協定状を取り返そうとアルティナ城にもぐりこんでるんだが、いまだに成功していない。俺にはそこまでして取り返そうっていう理由は知らないけどな。とにかく、その協定状は存在するだけでどうにも寝つきが悪いってことらしい」

ロツシユは大海に漂う小さなグート艇の中で、まるで誰かに聞かれはしないかと言うように、思わず声をひそめる。

「だからあ？　それがなんだってどういうの？　前置きはいいから、結論を言つてよ」

ネイが先をせかすと、ロツシユは呆れたように大きく息を吐き出した。

「普通はここまで話せばピンとくるもんだが、あいかわらずにぶい奴だな」

ロツシユはそつばやきながら、視線をルナの背中に戻した。

「その協定状をおれ達で取り返すつていのはどうだ？」

ロツシユは名案だろう、と言わんばかりにニヤリと笑った。

その提案に、ルナは驚いたように振り返った。

大きく見開かれた緑色の瞳と、固く結んだままの唇。そこには、今までに見せたことのない表情が張りついていた。

しかし、その様子に気づかずないネイが帆を操りながら首をかしげる。

「どういうことさ？」

「おまえ、人の話を聞いていなかったようだな」

ロツシユは三白眼の瞳で、ネイをジロリと睨みつけた。

「代々のハーフノームの頭領が奪いたくても奪い返せなかった海賊協定状だぞ。それを、おれ達小物が盗み出すことに成功してみる。

おれ達の名は一躍有名になり、代々海賊ハーフノームの英雄とし称えられることは間違いない。しかも、それがジーンの手柄だと知れば、かしらだつておまえを一人前の仲間として認めざるを得ない……だろ？」

ロツシユの提案を、ルナは複雑な心境で聞いていた。

アルティナ城へ行く……。

過去に自分が存在した記憶の場所　そこに、忍び込むことができる。それは魅力的な提案であったが、同時に、得体のしれない恐怖が全身を襲ってくるのを止めることが出来ない。

一方のネイは、他人事のように大きなあくびをしていた。

「そりゃあ名案だろうけど、代々のかしらが失敗してるんだろ。そんな所に乗り込んだって、あたしらが簡単に盗めるわけないだろ。そんなのは、かしらに任せておけばいいんだよ」

ネイがハーフノーム島の方角を親指で示す。

「だから言っただろ。この話はジーンがいるからこそ成立する作戦なんだって」

「？」

ネイはしばらく考えこんでいたが、降参したと言うように片手をあげてみせた。

「降参するよ。あんたの話を黙って聞くことにする」

「おお、いい心掛けだな」

ロツシユは得意げだったが、ルナは二人のやりとりに居心地の悪い気分を駆られていた。

「大陸の西外れの山奥に住んでいたネイは知らないだろうけどな、ノストールの一番下の王子が銀色の髪だっていうのは、この辺りじやそりゃあ有名な話なんだぞ。アル神の加護を受けた子供だつてな。だから、ジーンの銀色の髪があれば、多少顔や服を隠しても王子のふりをする事が出来るとにらんだんだ。城の中に忍び込むことさえ出来れば、万が一誰かに見つかったても、顔を隠してりゃ王子だと思つてそう簡単には手出しができないだろう」

ロツシユは、今は緑色に染められているルナの髪の毛をやや乱暴にくしやりとかき混ぜるようにする。

「俺の情報じゃ、いまノストールはリンセントースというエーツ山脈を挟んだ隣の国が、ダーナンの攻撃を受けるとか受けないとかで、その援軍に出るらしい。その準備で慌ただしい城の中なら、本物の王子と鉢合わせしない限り、おまえを見つけても、捕まる可能性は低いはずだ。だから、ジーンは城にもぐりこんで、王の部屋や重要な書類を隠していそうな部屋を見つけて、協定状を盗む。おれ達は、ルナの作戦成功の合図を受けて逃げる算段を整える」

「あんたね」

ネイは帆を操るのをやめて、ロツシユの前に座り込むと、怒りを含んだ目つきでにらみ返した。

「そんな危険なことをジーン一人でさせようっていうの。見つければ殺されるんだよ」

「それはどうかな」

「え？」

ロツシユはネイのその問いを待っていたと言わんばかりに、ルナをあごで示した。

「ノストールにとつては、銀色の髪の子はアル神の加護を受けた子どもと信じられている。たとえ盗っ人といえど、そう簡単に殺すことはできないはずだ。だから、ジーンが仮に捕まったなら、その騒ぎに乗じて今度はおれ達が城に忍び込んで、協定状を盗み、その上でジーンを助ける。二段構えの作戦つてわけだ。どうだ？」

「うーん。でも、それにしてもおおざっぱすぎる作戦だよ……危険も大きいし……。第一、城の見取り図は？ 協定書つてどんなもんなのかも検討つかいなだろう」

ネイは仰向けに倒れると、気乗りのしない表情で、一面の青空を見ながら考え込んだ。だが、ロツシユはひかない。

「見取り図ならかしらが持っていたのを見たことがある。協定書の表にはノストール、ラウ王家の紋章とハーフォームの海賊の旗印が描かれているらしい。絵なら文字が読めなくなっただっていい目印だ。いか、もしこの作戦を成功させればジーンは仲間に戻れるし、おれ達も英雄になれるんだぞ」

ロツシユは真剣な表情で、黙ったままのルナをじっと見据えた。

「まあ、おまえは別に英雄なんてなりたかない口だろうけど、一か八か、やるしかないだろう。みんなも、おまえと一緒にまた海に出たいと言ってた。おまえだっておれ達といたいだろ？ おまえが今までジーンとして、イリアさんのために、かしらのためにどれほど必死で頑張ってきたのかということとはみんなよく知っている。だから

ら、イリアさんを亡くしたばかりのおまえを、たった一人で追い出しちまうような真似だけはしたくないんだ」

その言葉と真っすぐな瞳が、口を閉ざし続けるルナの瞳に突き刺さる。

「帰りたい……」

ルナは、そうつぶやいている自分の声を聞いていた。

待っていてくれる仲間のところ、かあさんの眠る海と、かしらのいる……ハーフノームの島に帰りたいたい……！

ルナの心の中には、その声が響いていた。

島に帰ることだけを望む自分の声を。

「やる……」

ルナはロツシユの瞳を、睨むようにそう答えていた。

「やるよ」

ロツシユや仲間たちの所に帰るため、自分の居場所を守るために、わずかに残るノストールの記憶を断ち切ろうとするかのように、そう返事をしていた。

三日後、三人の乗るグート艇は、ノストールの海域に入り、イスト港からはかなり離れた東側の切り立った崖の続く岩場にむかって進んでいた。

そこに船を停泊させるような場所はどこにも見当たらない。

だが、ロツシユは迷う様子もなくその崖壁に向かって進むような針路をネイにとるように命じた。

グート艇が進むにつれ迫ってくる眼前の絶壁の、いりくんだ岬の崖の下を這うように進むうちに、上から下にむかって真っすぐに亀裂が走っている岸壁にネイは気づいた。

その亀裂の下、海と接する部分に遠目からではまったく気づくことのできない細長い入口があるのがはっきりと見えた。

「そのまま行ってくれ」

ロツシユの声の命じるままに、グート艇は穴に吸い込まれていった。

穴をくぐり抜けると、そこは横に二十隻は並んでくぐれるほどの広い穴だった。

「ロツシュ、あんたよくこんな場所見つけたね。これなら、かじらの船だつて入れるよ」

ネイが、広々とした洞窟の中を進みながら感動の声を上げる。

ルナも、はるか天井の隙間から降り注ぐ陽光と左右に広がるように傾斜をつくつている岩壁を見上げたまま、ぽかんとした表情をしていた。

ロツシュは、驚きをかくせない二人の様子に、片方の眉をあげてしてやつたりしいう表情を見せた。

「そうだろう……と自慢したいところだけど。残念ながらここは、代々海賊ハーフノームのかしらがノストールに忍び込むときに使ってきた秘密の洞窟だ。奥に行くと、たいまつを灯したあとがあるんだ」

その言葉にルナとネイが洞窟の中を見回すが、どこにたいまつのおかげがあるのかわからない。

「まだだ。もつと先に行かないとな。この光ももうすぐなくなる」  
ロツシュは森の中の木漏れ日を見るように天井を眩しそうに見上げながら、明かりが失われないように、自分の袋から携帯用のランプを取り出し火を灯した。ネイも風がなくなったことから、帆を閉じ、漕ぎ棒でルナとともに船を漕ぎはじめた。

進めば進むほど闇は濃くなっていく大水路を、グート艇は進み続けた。

迷路のようにいくつもの枝分かれした水路をロツシュの指示に従いながら小舟は進む。

目が闇に慣れてくると、ランプの明るさも手伝い、洞窟の中の様子が徐々にわかってくる。

たいまつを灯したと思われる場所もわずかではあるが、見つけれられるようにもなった。

ロツシュは船先に立ち、ランプを高く掲げながら、次々と枝分か

れして行く洞窟の中を、水先案内人よろしく的確に針路を指示していく。

「かしらはまだ実行に移しちやいないが、いずれはその協定状を取り返す計画をたてているんだ。それでおれ達は下見もかねて、何度ここには来ているってわけだ。ひとつ間違えば方向転換出来なくなるし、急流や滝に巻き込まれる場所もある。海賊が自分の縄張りで見失うわけにはいかないだろう」

しばらく進むとグート艇は、これまでで最も大きな空間に出たようだった。

小さなランプひとつでは周囲の様子はまったくといっていいほどわからないが、声の反響の仕方や波の揺れ方がそうだと感じさせるのだ。

ロツシュはたくみに船を先導すると、岩場に舟を接岸させた。

「ちよつと、まってる」

そう言うと、ランプをもったまま船を降り、闇の中へと消えて行く。

やがて、ランプのわずかな灯火だけが螢火のようにポツンと揺れているのが見えるだけとなった。

だが、その灯火が、ひとつふたつと増えはじめ、ロツシュの全身を照らし出すほどに明るくなる。

そこに浮かび上がった光景が目飛び込んできた時、ネイとルナは驚いたまま瞬きひとつすることが出来なかった。

巨大な洞窟の中に、人工の港が現れたのだ。

海賊船二隻が楽に方向転換できる広さと、接岸するための波止場までもがあった。

その上、数十隻のグート艇が、波にゆられながらも停泊していたのだ。

岩棚に次々と灯されたロウソクに火以外にも、さまざまな仕掛けがあるのだとロツシュは自分の手柄のように自慢をする。

「それにここは海の満ち引きがあっても、波が荒れても比較的安



な場所だ。そうなるように工夫もしてあるが、たまには壊れちまう船もあるらしい。まあ、それもご愛嬌ってもんだろっ」

ロツシユは二人がまだグート艇の上に座り込んだまま茫然としているのを見ると、船から降りるようにながす。

「驚くのはまだ早いぜ。海賊ハーフォームの秘密基地っていうのは伊達じゃないからな。まあ、ついてこいよ」

ロツシユは、二人が船から降りるのを確認すると岩に隠された仕掛けをいじる。と、どこからか風が吹き込みろくそくの炎が一瞬にしてかき消された。

漆黒の闇が蘇り、ロツシの掲げたランプの火だけが通路を照らし出す。

闇の中で揺れるランプの小さな灯火。

なんだか不思議な生き物のようだ、ルナは思った。

小さな炎は揺れる。

三人をノストール国の奥へといざなうように。

ひっそりとした空気が、アルティナ城の中に漂っていた。

つい数日前までのざわめきも、人々の走り回る足音も、声も嘘であつたように静まり返っている。

テセウス皇太子率いる援軍が、リンセントートスへ向けて城を出たのは五日ほど前のことだつた。

国の人々の期待を一身に受け、王の名代であるテセウスと、第四王子アウシユダールが旅立つた。

三年前、シルク・トトウ神の転身人として名乗りをあげたのが、ルナではなかつたことなど人々は知るよしもない。

出立する軍を見送つた第二王子アルクメーネと第三王子クロトは、そのままカルザキア王とともに国に残つた。

本国の戦さであれば王の出陣は当然であつたが、他国の援軍に王自身が出向くほど、ノストールの政情は安定していなかつた。

アルクメーネはエーツ山脈入口の外門付近一帯を警護するために山の近くにあるシャンバリア村から離れた場所にあるノル・シユナイダー城に拠点を設け、駐留軍を統率していた。

シャンバリア村 それは、一人の少年を除くすべての村人が、王家の兵士を装つた謎の集団に惨殺された悲惨な過去をもつ村の名だつた。

しかしその村も、いまは新しく住人となつた人々の手によって、活気に満ちた村に生まれ変わつていた。

ノル・シユナイダー城の執務室で、クロトはアルクメーネとしばらくの間口論を交わしていた。が、日が高くなつたのに気づくと、ひじ掛け椅子から立ち上がり帰りの辞を述べた。

「兄上、わたしはもう城に戻りますからね」

言い捨てるような言葉と、やり切れない表情が弟王子の顔に張りついたままなのを見て、アルクメーネもまた静かにため息をはいた。

クロトは怒りっぱくなくなったとアルクメーネは思う。

いつもイライラとしていて、何が気に食わないのか折あることにつっかかってくる。

「言いたいことは聞きました。今後わたしは、クロトの言葉にきちんとうるをかたむけます。ですから……」

「ほかの人々の前で不満は絶対に言いません。不愉快な顔も見せません。八つ当たりもしません。アル神に誓って！」

「よろしい」

若竹と同じような勢いで伸びるその身の丈と、少年から青年へと成長する過程にある弟王子を前に、アルクメーネは静かにうなずいてみせた。

「わたしも城へは折りを見て顔を出すようにします。父上ともども城は頼みましたよ。海の警備にも気を抜かないように。兄上たちが援軍に出ている隙に、国で異変が起きるような事態になつては大変ですからね」

「わかりました」

そう言つて、クロトは唇を噛み締めたまま一礼をして部屋を退出した。

「納得はしていないんでしょうね」

アルクメーネは座っていた椅子から立ち上がると、エーツ山脈を仰ぎ見ることが出来る窓際に近づいた。

ラマイネ妃によく似た優しく、そして知的な面差しをもつノストール国ラウ王家の第二王子の横顔に憂いがあらわれる。

（わたしもあなたのように、思ったことを遠慮なく言える相手がほしいと思うときもあるのですよ）

アルクメーネはクロトの怒った表情を思い出して、寂しげな瞳を揺らしながら静かにほほ笑む。

（でも……）

その碧い瞳が、雪に染まるエーツ山脈を見つめる。

自分の心もあの雪のように、クロトは冷たく感じているのだろう

かと、アルクメーネは思った。

（いま、兄上とアウシュダールたちは、あの山を越えようとしている。リンセンテートスを救うために、危険な山越えにはいつているのです。あなたは、なぜ他国のために危険をおかしてまで行く必要があるのかと言うけれど……。アウシュダールはそのために、人々を救うために、アル神の子としてこの国に生まれて来たのですから……）

クロトの顔を思い浮かべながら、そう心の中で語りかけていたアルクメーネは、ふとあることに気がつき苦笑を浮かべた。

「なんだか……。自分に向かって言いきかせている言葉みたいだ」

そう口に出してつぶやくと、静かにまぶたを綴じた。

（アル神、ノストールを守りし神よ。われらが民に御加護を。どうか全員が無事に役目を果たして帰って来られますように、お守り下さい）

夜の空に浮かぶ銀盤の光を心に描きながら、アルクメーネは祈った。

兄上……。

心の中の月の輝きの中で声が聞こえ、アルクメーネはハツとするとともに、冷えていた心があたたかくなっていくのを感じた。

アル神に祈りを捧げるアルクメーネの耳に、その声が聞こえるようになったのはいつの頃からだったのか。

アルクメーネ自身もはつきりとは覚えていない。

声はクロトでも、アウシュダールの声もでないのはわかっていた。

だが、聞こえてくる自分を兄と呼ぶその幼い声を、アルクメーネはいとおしく感じていた。

そして、その声を聞くたびに励まされ、自分がすっかりしなくてはと思えるようになっていた。

「そうですね。テセウス兄上が安心して下さるよう、クロトにもわかってもらえるように、さらに努力をするようにしましょう」

アルクメーネはつぶやいていた。

その世に暮らした。

どこまでも青く澄んだ空の下で、クロトは守護妖獣・黒馬ダイキににまたがり、アルティナ城へと向かって走り続けていた。

普通の馬であれば、たとえ休むことなく走り続けても丸三日はかかる城までの行程を、ダイキの足なら、わずかの時間で帰り着くことができた。

だから、クロトはダイキに乗るときは部下を連れずに、自由に国中を走り回った。

「兄上はああいうけど、俺にはわからない」

「不平は言わない約束では？」

道なき道を通れるように、風のような速さで駆け抜けながら、ダイキは主人に問いかけた。

「ほかの人々の前では言わないけど、おまえは人じゃないだろう」  
「承知」

まるで、お目付役のようなダイキの口ぶりに、クロトの表情はがぜん不機嫌さを増していく。

「だいたい、援軍に行くのにどうして俺は行けなくて、あいつらが行けるんだ！……っていうより、今度の特別部隊のことに對してどうしてだれも異を唱えないんだ。まるで反対している俺だけが、変なことを言ってるみたいじゃないか」

「成る程」

「だろ？ お前の力を最大限に発揮できるまたとない機会なんだ。万が一、リンセントースの旅の途中で急な事態があれば俺はあつという間にノストールに戻って、父上の指示を仰ぎ、兄上に伝えることができる。それなのに……」

普通であるならば、その驚異的な速さにしがみついているのも精一杯であろうダイキの馬上で、守護妖獣の主であるクロトは心地よい風を頬にうけながら会話を続ける。

「父上のお考えに楯突こうっていうわけじゃない。でも、納得いかないもんは、いかない」

『承知』

ダイキのそっけなく聞こえる言葉に慣れてはいるものの、クロトはなんだか空しくなり深いため息を吐き出した。すっかり話を続ける気持ちがなえてしまって、しばらく黙ったままでいたが、城が近づくとつれクロトは急に寄り道をしたくない誘惑に駆られた。

「ダイキ、マーキッシュの村によってくれ」

『御意』

子供のころによく遊んだ村だった。

城に一番近い村であることから、城下の町に商売をしに来た商家の息子と偽って、村の子供達とよく遊んだのだ。

ケンカや、木登り、木の棒で剣術ごっこ、近くの泉で水遊びをしたりと、思いきり遊ぶことができた場所だった。

だが、戦さのきな臭い煙がノストールへ向かって流れはじめたころから、そういったお忍びごとは禁じられ、またクロト自身も約束を破ってまで村に行こうという気持ちが薄れていたのだ。

「あんなに楽しかったのになあ……」

クロトの脳裏に弟と遊び回った頃の記憶がよみがえる。

だが、不思議なことに、いつもそばにいた弟の表情だけがどうしても思い出すことが出来ないのだ。

その現象は今も続いていた。

両親やテセウス、アルクメーネ、二人の兄たちの顔はいつでも思い浮かべることが出来るのに、弟のアイシュダールの顔だけは、なぜだに思い出すことができないのだ。

「あいつも、転身人になってから、性格も変わったみたいだし……。そりゃ、いろいろとあって遊ぶひまもなかったのは事実だけどさ」

『……………』

そして不思議なことがもうひとつ。

こと、アイシュダールに話が及ぶと、ダイキは返事をする事が

なくなっていた。

さらに、アウシユダールがどれほど望んでも、以前のようにその背に乗せることをしなくなったのだ。

「気に入らないことがあるなら、はっきり言えよ。」

何度もクロトは自分の守護妖獣に問いかけたが、ダイキは何も答えない。

本来、守護妖獣は自分の主しかその背に乗せることはないらしい。よくよく考えれば今までクロト以外の人間を乗せるという行為のほうが不自然だったのだ。

だから、主人の度重なる命令に守護妖獣が従わないからといって、咎める理由はクロトにはなかった。

「はい、はい」

答えない黒馬に自分で返事をしながら、村に入ろうとしてクロトは思わず逡巡した。

村人たちや一緒に遊んだ仲間と会いたい気持ちがいっぱい、いまの自分が一目で王族とわかる服装をしていることを、すっかり忘れていたのだ。

「みんなが本当のことを知ったら、前みたいには話しかけてもらえなだろうし、遊びに来ることもできなくなるかもしれないもんなあ」

しばらく村の周囲をウロウロと行ったり来り繰り返した末に、せめて、村の外れにある泉にだけ立ち寄ることにした。

「ひと泳ぎしていこうかなあ」

「人払いは？」

「いいよ」

村人たちが泉に来るのは、陽が傾きはじめる少し前と決まっていた。

「今なら、だれもないはずだから」

村を迂回して林に囲まれた泉へと駆けるダイキの小気味いい足音が響く。だが、泉が見えてくる場所まで来たとき、守護妖獣は突然立ち止まり微動だにしなくなった。



「人がいます」

「え……？」

抑揚のないダイキの言葉に驚いて耳をすますと、確かに人の声が聞こえて来た。

「誰だろう……」

クロトは、誰が泉で遊んでいるのか見るために、動かないダイキの背から飛び降りると、気配を消させて泉のそばに近づいていった。「なかなか落ちないね」

少女とも少年のものとも、とれる少し高い声が聞こえて来た。

「色が落ちるまで、気長に何度も洗うしかないだろ。それまでに準備しておくことは山ほどあるしな」

次の声はあきらかに男の声だった。

好奇心を押さえられずに、木々の間からその様子を見ようと、のぞき込んだクロトの目に三人の人物の姿が飛び込んで来た。

泉のそばの大きな石に座り込んでいるポニーテールの少女と髪を短く刈り上げた若い男、そして後ろ向きで水浴びをしている緑色の髪の子供の姿だった。

その子供の姿を見た瞬間、クロトの目が釘づけになった。

泉の中に潜っては浮かび上がり、水浴びをしているをしている子供の背中にある、左側の腰から右肩にかけて長く大きく流れるようなアザに。

（まるで大鳥が、空を舞っているみたいだ……）

クロトが目をごするしぐさをしたとき

「ジーン。今日はこの辺にしよう。もう出てもいいぞ」

男が呼びかける声が出て、子供が振り返った。

「？」

クロトは裸のまま泉から出て来たのが女の子であると知って、思わず視線をそらせようとしたが、少女の顔を見た瞬間、その瞳から目を離すことが出来なくなっていた。

印象的な大きな緑色の双眸。

クロトの右手が、知らず知らずのうちに自分の胸元を押さえつけた。鼓動が激しくなっているのがわかる。

(誰だ……?)

心の中でそう問いかけながらも、そう思うこと自体が不自然なものであるような奇妙な錯覚に陥る。

「ダイキ……」

もっと三人に近づいてみたいという衝動に駆られ、守護妖獣の名を呼んださの時、突然クロトの頭を激痛が襲った。

「うっ……!!」

あまりの痛みにこらえ切れず、クロトは地面に両膝をつき、体を二つに折るように地面に突っ伏して、苦悶の声をあげた。

「やべえ、誰かいるぞ」

「行こう。ほら、ジーン服を持って」

クロトの声に気づいた三人は、あわてたように泉から立ち去ろうとしていた。

「まっ……て……」

だが、頭を締めつけるような、呼吸さえままならないほどの激痛は、クロトがそこから一歩でも先に進むことを拒むように急激に激しくなる。

(待ってくれ……!)

自分がなぜこれほどまでに強く心を揺さぶられるのか、クロトには説明が出来なかった。

行かないでくれ……。

けれど、その思いは声にならない。

しかも、ダイキは自分がこんなに苦しんでいるというのはそばに来ようともしない。

……。

やがて激しい痛みが去ったときには、三人の姿はどこにもなかった。

クロトは、誰もいなくなった泉の前まで歩き立ち尽くすと、ジーン

ンと呼ばれていた少女がいた場所をじつとみつめた。

気がつくと一粒の涙が頬を伝わっていた。

その涙が先程までの痛みによるものなのか、それとも他の感情によるものなのか、自分でもわからない。

(ジーンと呼ばれていた……)

クロトは襟元を探り、胸にかけていた細い金の鎖を取り出すと、その先に輝く小指ほどの大きさの翠色の石を見つめた。

三年前、アンナの一族の末娘であるエディスから預かった首飾り。石は、たったいまそこにいた少女の瞳と同じ色をしていた。

これを……渡してください。

そう言われて受けとり、クロトも必ず渡すと約束をしたはずだった。

だが、誰に渡す約束をしたのか思いだすことの出来ないまま、クロトはその首飾りを身につけていた。

翠色の石。

アル神の息子シルク・トトウ神の転身人がノストールに生まれているという予言、シャンバリア村での虐殺、エーツ山脈の山火事、そしてダーナンの進攻。

そのときに来ていたアンナの一族が国を去るときに、エディスから預かった小さな石。そして、アウシュダールがシルク・トトウ神の転身人として目覚め、国を救った。

しかし、クロトは他の人々のように目覚めて後のアウシュダールに、以前と同じように接することが出来なくなっていた。

それは、シルク・トトウ神の転身人として、竜巻を起こすほどの力をもつようになった弟を特別な存在として見つめはじめた自分の気持ちの変化が原因だと思っていた。

そんなわがままにも似た感情を持て余すたびに、クロトはこの石を取り出して見つめた。すると不思議に心のささくれた部分が消えて、静かで心地よい空気がクロトを包み、落ち着いた心を取り戻すことができたのだ。

「エディ……」

クロトは泉の前に立ち尽くしたまま、助けを求めるように、三年前に別れた少女の名をつぶやいていた。

ルナ、ロツシユ、ネイの三人はひよんなことから、マーキツシユの村の村長の家で夕食によばれることになってしまっていた。

泉から逃げ出した後、今度は反対側から現れた村人たちに出くわしてしまつたのだ。

「ルー坊かい……？」

顔を伏せたまま、村人たちとすれ違おうとしたルナの腕を、いきなりがつしりとした体格の中年女性がつかみ、おもむろにその顔をのぞき込んだ。

「え……？」

ぎよつとする三人の様子とは対照的に、数人の村人たちはおお、と歓声を上げてルナを取り囲んだ。

「タカイ村のルー坊だろ？ 昔はよく兄ちゃんと一緒に遊びに来てたじゃないか。クロノアは元気かい？」

ふくよかなその中年女性はルナの頭を軽く押さえてなで回すと、ひざまづいてなつかしそうに抱きしめた。

「ごめんよ、久しぶりに来てくれたのにエルドはいなかっただろう。ラズもフィッグも、みんなアウシユダール様と一緒に行ってしまつたから」

（アウシユダール……？）

その言葉にルナの体がビクリと震える。

だが、女はそれを別のことにとらえたのか、ルナの顔を見ると何度もうなずいた。

「あんたの村でも、アウシユダール様と同年の男の子はみんな、リンセンテートスを救うために行ったんだろう。そりあね、アウシユダール様がついていらつしやるし、子供達が戦さ場に駆り出されるわけじゃないんだから、大丈夫だってみんな思ってる。けど、わが子を出した家じゃ、出立した日から毎日、身の刻まれる思いで過

ごしてるよ。どんなにしつかりしていたって、この時期のエーツ山脈を八歳の子供の足で越えなきゃならないんだからねえ」

ルナはその言葉にただ女の顔を見つめ続けていた。そして……つぶやいていた。

「エルドのおかあ……」

その自分の言葉とともに、村での記憶が少しずつよみがえって来るのを感じていた。

クロトと二人でよく遊びに来ていたマーキッシュの村。

身分を隠すために他の村から来た行商の家族の子供と名乗り、ルナは目立つ銀の髪の色をやはり木の葉の染料で染めては、城を抜け出して日が暮れるまで遊んだ。

見知らぬ人々の顔は、徐々になつかしい顔へとかわっていく。

「ラズのおとう……それと……村長……」

その出会いから数時間後、三人は村長の家に招かれて今日は泊まってしまうようにすすめられたのだ。

ルナが村に来たことを聞きつけた子供達や他の村人たちが村長の家に押しかけてきたおかげで、気がつくときすっかり日暮れ時になってしまっていたからだ。

「おまえ……ノストールの出身だったんだ。じゃあ、タカイ村とか……に両親や兄弟もいるのか？」

村人たちはそれぞれの家に帰ったが、ルナたちのテーブルの上には人々が持ち寄った手料理が並べられていた。

ロツシユは、村長が席を立つのを見計らって、小声でルナに話しかける。

「わからない……」

「わからないってなあ……そりあ、うん……そうかもしれないけどよ。兄貴が一人いることは間違いないんだろ？ よかったじゃないか」

ロツシユの言葉に、ルナはうつむいた。

なつかしい村人たちと再会し、ルナはノストールで育った自分の

記憶を少しずつ、とりもどしはじめていた。

その一方で、いまの自分はラウ王家の両親や兄たちを家族だといふことができない存在なのだと思うと、悲しみもまたふくらんでいた。

どうしてアルティナ城からハーフォーム島に自分がいたのかも、自分の代わりとしてアウシュダールが存在する城には、もう二度と帰ることは出来ないのかも、わからないことが多すぎて、ルナは小さなこぶしが白くなるほどきつく手を握りしめた。

「やめなよ、ロツシュ」

ルナの様子に気づいて、ネイがロツシュをにらみつけた。

「あんだだつて人に言えない過去があるだろう？ 家族がいたからつて素直に喜べるとは限らないんだ。ジーンは忘れていたほうがよかったことを、ここに来たことで思い出したのかもしれないんだよ。自分の家族に二度と会いたくない人間だつて、世の中にはごまんといるんだ」

それは、親の手で金と引き換えに奴隷商人に売られたネイの血を吐くような言葉だった。

「わるい……」

気まずい空気が漂いはじめたとき、村長が戻つて来て、麦酒と杯をロツシュの目の前に置いた。

「わしのとつておきの酒だ。今日はルー坊のおかげで、久々にみんなの嬉しそうな顔を見ることができたし、わしもうまい料理にありつけた。さあ、わかいの呑めるだろう。」

ロツシュは差し出された木の杯を見て、顔をほころばせた。

「おっいいねえ、御馳になるぜ」

ロツシュが酒を口にふくんで、一気に流し込むと村長は「おお」と感嘆の声を上げてうれしそうに杯に二杯目を注ぎ込み、自分も手酌で呑みはじめた。

「ところでよ、俺は漁に出てしばらくぶりに帰つて来たばかりよくわからないんだけどよ。なんでまたアウシュダール様と同じ年に生

まれた男の子が、援軍に加わったんだい？」

したたか酔ったころ、ロツシュが何気なく城の様子を探ろうと水をむけた。

村長は、うんうんとうなずきながら木の器で出来た杯をかたむける。

「リンセントートの砂嵐のことは知っているじゃろうて」

ルナとネイは、食事をしながらで二人の会話に耳をそばだてる。

「ああ、もう二年以上も城も町は砂塵に包まれてる上に、今はダーナンから狙われているらしいじゃないか」

ロツシュは海賊仲間の話を思い出しながら、話をあわせる。

「おお、あれはビアン神の怒りをつたためたための災いだともっぱらの噂じゃ。詳しいことはわしらにはわからんのがな、リンセントートスはビアン神とダーナンの両方から責め立てられて瀕死も寸前。ナイアデス王も援軍を出してはいるらしいものの、ますます状況は悪くなっているようじゃ。それで、アウシュダール様になんとナイアデスの王が援軍の要請をしたというわけじゃ」

「なんでまた、リンセントートス王じゃなくナイアデス王なんだ？」

「さあなあ……」

村長は赤くなった顔をなでつけたあと、考えるように腕を組んだ。「それだけアウシュダール様のお力がすばらしいということじゃろう」

「そりゃあ、そうだ。アウシュダール様は素晴らしいお方だあ」

酔っているふりなのか、本当に酔ってしまったものなのか、調子よく村長に同調するロツシュを見ながら、ネイはあきれた顔をする。ルナは食事をする手を止めて、うつむいていた。

「で、子供達は……」

ロツシュが麦酒をグビグビと喉に流し込みながら、村長の顔をのぞき込む。

「それがなあ……」

村長は、ルナに対しても同情して見せるようにため息をついた。



「なんでもアウシュダール様と同じ、今年八つになる男子にもアル神のお力が注がれているらしいんじゃ。そこで、その子供達と一緒に行くことがアウシュダール様のお力をますます引き出し、ピアン神と言葉を交わすことが出来るようになるらしいと、言われたからじゃ」

そう語る口調は誇らしげに聞こえたが、目は寂しげだった。

村長の孫もまた、その部隊の一員としてリンセンタースへ向かっていたのだ。

「ルー坊がせっかく来てくれたのに、わるかったなあ。フィッグがいたらきつと喜んだじゃろうに。あの子は、女の子のおまえさんにいつか剣で勝てたら、嫁さんにしてやってもいいと言っとったからなあ。勝てっこないのにのう」

村長は手を伸ばすとルナの頭を包み込むようにそつとなでた。

「わしは女房を早くに亡くし、息子夫婦も病で失った。あの子だけが自慢でな……毎日の生きる張りあいだったんじゃが……」

そう言っつてルナをみつめる瞳は寂しげに揺れる。

「なにも国中の子を連れていかんでも……」

「?!」

ロツシュ、ネイ、そしてルナの三人の顔がこわばった。

(アウシュダールと同じ年に生まれた国中の男子が、リンセンタースへ赴く特別軍に加わっている)

ルナの、全身の毛が逆立った。

底知れない寒さと震えが一気におとずれ、心の中まで冷水が一気に染みこんでくるような感覚が襲う。

それは、予感だったのかもしれない。

だが、ルナにはその理由がわからなかった。

ただ心の中に波紋を描くように広がっていく恐怖心が、自分を通り過ぎて行くのをじつと待つことしかできなかった。



下弦の月が夜空に浮かぶ空の下、ノストール王国アルティナ城の庭園から、周囲を警戒しながら城内に忍び込む小さな影があった。

影は、城内の通路のところどころに灯されている小さな口ウソクの灯火を頼りに歩き続け、やがてある場所にたどりついた。

それは、王の寝室へと続く階段。

影は、一步、二歩と階段を上がって行く。

迷うことのない足どりで。

『王よ』

浅い眠りについていたノストール国王カルザキア・デ・ラウは、自らの守護妖獣・雷獣イルダーグの警戒を呼びかける声に、ベッドの中で目をさました。

『城に忍び込む者あり。御身の姿を求め近づいている……』

「何者だ？」

カルザキア王は、すぐに起き上がりガウンを羽織ると、ベッドの横に備えつけてある長剣を鞘ごと手にした。

『……』

「どうした？」

まるで、戸惑っているようなイルダーグの気配に王は静かに問いかけた。

『奇妙な力……空間のゆがみ……わが視覚が役に立ちません。この力は……まさか……』

王は守護妖獣の今までに出会ったこともない反応の仕方に、かつてないほどの緊迫した状況を察知し、厳しい表情をたたえた。

王の身を守るべき者　その守護妖獣が警戒を発するとすれば、それは主であり、王である自分の身に危険が迫っているということの意味した。

「何者だ？」

『……子ども……の影……』

イルダーグは見えないものを見ようとしているのか、意識を集中させながらその様子を王に語り続けた。

『どうか、ご警戒を……。警護の兵たちは……。その者の……。見えない力で操られているように、持ち場を離れております……。』

イルダーグの言葉どおり、各通路や階段を警護する兵士たちは無意識のうちに持ち場を離れ、侵入者から遠ざかり、やがて意識を失いその場に眠りこんでしまっていた。

『それに……。妖獣の臭い……。』

「子ども……妖獣……」

カルザキア王は、イルダーグの言葉を吟味するようにゆっくりとつぶやき、手にした剣を握りしめた。

「まさか……。イルダーグ……。おまえはその者のことを知っているのか？」

『わかりません……。』

王の問いかけに自信なさげにそう言ったまま、守護妖獣は沈黙した。

重苦しい空気が部屋の中を満たす。

「アウシュダールが、引き返して来たのか？」

『いいえ』

ベッドの下から、その姿を現したのは金の毛をもつ小さな猫だった。

その猫はカルザキア王と寝室の扉の間にその身を置くと、やがて王の三倍はあるほどの巨大な猛獣の姿に身を変えていった。

扉から入ってくるだろう侵入者から王を守ろうとするかのように、黄金の守護妖獣は、銀色に輝く瞳で扉を見据える。

「王妃と……。クロトは無事か？」

主の言葉に、イルダーグは残念そうに首を横に振った。

『……深い闇が覆い……。様子がまったくわかりません。……。けれど、

この力は王のみを指している様子』

イルダーグは、城の中にいるはずのクロトの守護妖獣ダイキが、いまもって王の部屋に姿を現さないことに迷いを感じていた。

守護妖獣は、互いに主である主人を守るために存在しており、通常は守護妖獣同士が自らの意志で言葉を交わしたりすることは、ないとされている。

カルザキア王の守護妖獣イルダーグが、クロトの守護妖獣ダイキに呼びかけたとしても、互いの波長が微妙に異なることから思念での会話ができないのだ。

しかし、王の身に危険が迫ったときは、他の守護妖獣は継承の指輪を守るために王の下に集結する。

守護妖獣たちは常に、王の安全に常に注意を向けていた。

だが、他の守護妖獣はだれもあらわれない。

ならば、この力は王に危害を与えるものではないのか……？

イルダーグは迷った。

(まさか……)

一方、王は頭をよぎる考えを打ち消すことができないでいた。

『王よ……ご警戒を。この力には、ただならぬもの……わが力と互角のものを感じます。王の姿を消すための結界を張ります』

イルダーグの警告に、王はゆっくりと口を開き、命令を告げた。

「その者がこの部屋に入るのを妨げてはならん。何者かをこの目で確かめるまで、手を出してはならん」

『……王よ。それは」

「手出しはならん！」

守護妖獣の抗議を含めた、低いうなり声が響き渡ったが、カルザキア王は譲らない。

「この目で、確かめるまで待つのだ」

緊迫した空気の中、カルザキア王はぐっと目を見開き、扉を見つめた。

かたわらのイルダーグは目を閉じ、侵入者の奇妙な力から王を守

ろうと、全神経を集中させていた。

やがて。

扉がゆっくりと開き、子どものシルエットが浮かび上がった。

同時に、闇に溶け込んだままの圧倒的な力が、その子どもを守るように部屋に入り込むのがイルダーグには見えた。

しかし、悪意が存在するのか否か、読み取ることができない。

わかるのは、その力の波動は間違いなく、守護妖獣のものであり、自分と同種の者ではないということだけであった。

カルザキア王はベッドのそばで揺れるロウソクの小さな炎だけを頼りに、薄暗い部屋の中で子どもの姿を確かめようと、自らその子どもに歩み寄ろうとする。

『王よ！ 近づいてはなりません！』

イルダーグは、カルザキア王を制止しようとした。

（手を出すな！）

王の心の中で下された命令は絶対であり、相手に悪意が感じられない以上、イルダーグは力を放つことができない。

そのとき、子どもの影がカルザキア王に向かって走りだした。

イルダーグは動けなかった。

そして、カルザキア王も。

！！

アルティナ城ラマイネ王妃の寝室にいたルナは、その瞬間、突然落雷が全身を貫いたような衝撃を受けて、体を強ばらせた。

「父上！？」

考えるよりも、その言葉が口をついて出ていた。

疑問をもつことさえ出来ない直感が全身に訴えかける。

「父上 ！！」

見えない恐怖に貫かれ、母の部屋から飛び出す。

そしてルナは何かを考えることも、自分が何をしようとしているかもわからないまま、父カルザキア王の部屋へと矢の如く走りだしていた。

この夜、ルナは、泊めてくれたマーキッシュの村の村長の家をつそりと抜け出して、アルティナ城まで来ていたのだ。

ノストールの記憶は、懐かしい人々、風景、風の流れに包まれるうちに徐々に蘇り、自分がいた場所なのだという確認するたびに、家族への思いがつのりあふれた。

会いたい。

はじめは、城の見える草むらに身を忍ばせ、城の中に入ることをためらう心があった。

だが、それも母にひと目会いたいと思う気持ちには勝てずに、見張りの兵たちの目をかいくぐって、城の中へ入り込んだのだ。

（もし、だれかに見つかったら、あきらめて逃げよう）

ルナは賭けにも似た思いで、城に忍び込んだ。

だが奇妙なことに、城の中はまったく無防備で、どこにも兵士の姿が見当たらなかった。

王妃の私室へ続く通路にも、ロビーにも、階段の出入り口にも、警備の兵士がない。奇妙な状況だと思えた。

けれど、だれにも邪魔されることなく母に会える道が、見えない力によって開かれていくようにも思えた。

ためらっているとその道が閉じてしまいかもしれない。

そう考えると、ルナはこの機会を逃さずに、母のもとへ行こうと決めて走り続けた。

「母上……」

ラマイネ王妃の私室の一番奥にある寝室の扉が目の前にあつた。覚えていないはずの城の中を、体が勝手に目的の部屋へと導いてくれたのだ。

真つ赤な絨毯の敷かれた階段を上り、歴代の王や王妃の肖像画の並ぶ廊下を駆け抜け、母の部屋の扉を見つけたときには、ルナは自分が確かにここにいたのだという実感に包まれていた。

ルナは暗闇の中、扉を静かに開けて、部屋の中にそっと入り込む。手にしているランプを部屋の中にある備え付けのロウソクの燭台の脇に置き、火を灯し、再びランプを手にするもう一つの奥の部屋へと続く扉の前に向う。

静かに息を吐くが、心臓がトクントクンと高鳴り、苦しくなる。

この向こうに母上がいる。

暗闇の中、やわらかなランプの灯が緊張にこわばるルナの横顔を照らし出す。

深呼吸をすると、そのまま息を潜めて寝室の扉を音を立てないように、静か静かに開き、わずかな隙間をつくり、滑り込むように寝室に入り込み、再び扉をとじた。

中央の奥、天蓋付寝台に歩み寄る。

静かな寝息をたてて眠っているラマイネ王妃の寝顔がそこにあつた。

ルナは息を殺して、長い間静かに眠り付ける母をじっと見つめて



いた。

夢の中でさえ、忘れることのなかったやさしい母の顔があった。

「母上……。ルナ……。ただいま帰りました」

そう言葉にした途端、ルナの緑色の大きな瞳から、真珠のような涙がポロぽろとこぼれ落ちた。

「母上……。ルナのこと、好き？ 忘れてない？」

声は、声にならなかった。

やっと会えて嬉しいという思いと、一方で目を覚ました母が自分の存在を否定するのではないかという恐怖心が頭を離れない。

ルナはちからなく床に座り込むと、ベッドの端に顔をうずめ、必死に嗚咽をこらえた。

こわい夢をみるのが嫌で母のベッドにもぐりこんだ時、ルナが夜中にうなされると、ラマイネ王妃はすぐに目を覚ましてくれたものだった。

だが、これほどそばでルナが泣いているというのに、その瞼は綴じたままだった。

何かが違う。

ルナは気づいた。

母の部屋では常に、ラマイネ王妃の守護妖獣ネフタンが迎えてくれ、言葉をかけてくれた。

それが、いまは何も起こらない。

まるで、ルナがそこに存在しないかのように守護妖獣は現れない。ルナは知らなかった。

ルナがラマイネ王妃の部屋からさらわれたあの日から、王妃が深い眠りについたままであったことを。

「ルナがいけない子だったから、嫌いになったの？ 母上……。嫌いでいいから……。ルナのこと忘れないで……」

暗い森の中で、どれほど泣いても、だれの名を呼んでも一人だった悪夢が、突然よみがえる。

夢から覚めても、生まれ育った城の中に帰って来ても、ルナは悪

夢から解放されてはいなかった。

「母上……ルナ帰って来ました……」

うつ伏せた顔は涙で濡れ、声は嗚咽になる。

そのとき、ルナの髪に何かに触れた。

ルナの心臓が激しく鼓動を刻みはじめ。

(母上……?)

軟らかな髪をすくようになでる優しい手。

期待と不安が交差した。

ルナは顔を、恐る恐る上げた。

「母上？」

涙で濡れる緑色の瞳に、ラマイネ王妃のほほ笑みが映った。

「母上！」

戸惑いと信じられないことが起きた気がして、ルナは茫然とそのほほ笑みを見つめていた。

ルナ……。

母ラマイネ王妃がそう呼びかける碧い瞳を見たときに、ルナは初めて、はっと胸をつくものがあることを知った。

ルナを見つめる温かい母のまなざし。

いつもその瞳とともに、ルナはあつたのだ。

城にいたときも、ハーフノーム島で泣きながら過ごした日々も、

その瞳はルナを見守り続けていたのだと。

唐突に、イリアの死の間際に言い残した言葉が駆け抜けていく。

不思議だよね……崖から飛び降りたその時に、『あの子を助け

て……』って、そう呼びかける声を聞いたような気がした……。

その声は今日までずっとあたしと一緒にいてくれた。『あなた

は……まだ、死んじやいけない……』って。だから……あたしは、

今日まで生きてこれた……。

イリアはそう言っていた。

ルナ自身、時折、イリアと過ごしているときに、だれかが自分を見つめていると感じたこともあったのだ。

だが、それは時に頬をすりぬけていく春風のように、あまりにも自然だったために、その存在に気がつかなかったのだ。

「イリアかあさんを……知ってる？」

ルナは思わずそう聞いていた。

ラマイネゆっくり微笑みながら、上半身をベッドから起こし、限らない愛情をそそぐように温かな手でルナの涙で濡れた顔をそっとぬぐっていく。

その瞳は、「ルナの身に起きたことすべてを知っていますよ」と語っているようにも思えた。

「母上は、ずっと、ルナのこと見ていてくれたの？ イリアかあさんを助けてくれたのも、母上だったの？」

ラマイネ王妃は驚いたまま戸惑っているルナに、両手を小さく広げた。

「母上……」

ルナは、迷うことなくラマイネ王妃のあたたかな腕の中に飛びこんだ。

夢にまで見た母の腕の中に。

なつかしい母の匂い、軟らかな胸、そして頬や額に愛情とともに注がれる唇が、母といるのだということを実感させる。

「ルナ……帰って来てもいいの？」

夢の中にいるみたいだ、とルナは思った。

涙はとまることなく流れ続けていたが、それは先刻までの絶望と隣り合わせの涙ではなかった。

顔を上げると、ほほ笑むラマイネ妃の頬にも涙が伝っていた。

そして、そのあたたかな眼差しはルナだけを見つめていた。

あなたが泣いていたときに、助けてあげられなかった。苦しんでいるのも、頑張ったことも、優しくなったことも、強くなったことも、全部見ていたけど、何もできなかったことを許して。

そう碧い瞳が、ルナの心に語りかけるのをルナは何度も何度ももうなずいて応えた。

「母上……母上……」

もう、苦しむことはないんだ。

ルナの心が喜びに満ちあふれていったとき、それは起こった。

「!？」

突然、稲妻が全身を貫いたような衝撃がルナを襲ったのだ。

ルナは、翠の瞳を驚愕に大きく見開き、母を見つめた。

「父上が……」

そう言葉にした瞬間、ルナは父カルザキア王の身になにかが起きたのだと直感した。

ラマイネ王妃は堅い表情でうなずいた。

行つて。

瞳はそう語りかけた。

ルナは、ラマイネ王妃にすぐ戻るからと告げると、カルザキア王の部屋目指して走りだしていた。

なぜ父のことだと思ったのかはわからない。

ただ、それは疑うべき余地のない確信だった。

ルナは走った。

そして、同じ階にあるカルザキア王の部屋へと続く角を曲がろうとしたとき、突然現れた人物と出会い頭に勢いよくぶつかり、反動でそのまま後ろにひっくり返ってしまった。

あわててルナは立ち上がると、ぶつかった相手に視線を走らせる。そこにはルナとほぼ同じ背丈の少年が、ひどく驚いた顔でルナを見たまま立ち尽くしていた。

が、ルナと目が合うと、はっとしたように来た通路とは反対方向に走りだしていった。

そのことが、ルナの胸騒ぎをひどくした。

衝動的にその子どもを追いかけようとする自分を押し止どめて、ルナはカルザキア王の部屋へ向かった。



「父上　！！」

いくつもの扉を開き、部屋を抜けて、カルザキア王の寝室の扉を開けたルナの目に飛び込んできたのは、全身を血に染め床の上に仰向けに倒れている父の姿だった。

「父上！　父上　！！」

ルナはカルザキア王のそばに駆け寄り、そのそばにひざまづいた。父の脇腹には短刀が深々と突き刺さり、大量の血が流れ出ていた。瞬間、いまぶつかったばかりの少年の顔が浮かんだ。

「あいつ……………」

ルナが少年を追いかけようと立ち上がりかけた時、その腕をカルザキア王の手がつかんだ。

「父上！」

ルナは驚いて振り返ると、父の顔をのぞき込む。

「ルナ……………か……………？」

自分の名を呼ぶなつかしい父の声に、ルナは「はい」と返事をするとともに、涙があふれていくのを感じた。

「……………どうして……………父上がこんなことに?!」

カルザキア王は痛みをこらえるように首を横に振ったあと、ふと珍しい笑みをこぼした。

「おまえが帰って来たものだとはかり思ってたな……………油断した……………」

だが……………あながち外れたわけではなかったようだ……………」

しかし、そこまで話すと痛みをこらえようとするように、苦悶の表情を浮かべる。

「父上……………大丈夫ですか……………」

ルナはただうろたえるしかなかった。

そのルナを安心させるようにカルザキア王はほほ笑みを浮かべてみせる。

次いで、真剣な光がその瞳に宿った。

「気をつけなさい……あの者は、王のみが許された指輪を所持しておる……。それも……禁忌となった指輪だ……。でなければ……イルダーグが敗れるはずはない……」

王の目が、部屋の隅で血を流したまま床に倒れている、小さなネコを見つめた。

「あの子どもは、闇の妖獣の力に振り回されておる」

王はそこまで言うと、苦しげに咳き込んだ。

「大丈夫ですか？ 父上、父上」

ルナの涙で濡れる瞳を見て、カルザキア王は何度か深く呼吸をすると、心配するなというように握られている手をしっかりと握り返す。

「……おまえに頼みがある」

「はい」

ルナはこれ以上泣き出さないように、齒を食いしばった。

「アウシュダールを……許してやってくれ……」

「え……」

思いもよらなかった言葉に、ルナは息を飲み込んだ。

「父上……？」

カルザキア王は握りしめたルナの腕に手の力をこめると、じっとその緑色の大きな瞳を見つめ続けた。

「この城にいる……四番目の王子……アウシュダールの噂は知っているな？」

「はい」

ルナは唇を結び、小さくうなずいた。

父が何を言おうとしているのか怖くもあり、戸惑ってもいた。

「私は八年前……アンナたちの予言にしたがい……四番目に生まれた王子を殺したことがある……」

父の口から飛び出した言葉に、ルナは何を言われたのかわからなかった。

だ  
が  
。

あなたは、カルザキア王とラマイネ王妃の本当の子どもじゃないのよ……あなたが、父と信じるカルザキア王は四番目の王子を殺してしまったの。そして、あなたをどこからか拾って来て、身代わりにしたのよ……。

忘れていた記憶。

メイベルに連れ出され、崖から落ちて嵐の中にリユーザとともにのまれていった記憶が突如として蘇り、嵐のように忘れていた出来事が襲いかかる。

カルザキア王の言葉が、メイベルの言葉を呼び覚ましたのだ。すべての記憶が鮮明となり、ルナは叫び出したい衝動に駆られた。それをしないですんだのは、ルナの心が崩れ落ちないように支えてくれようとしている目の前の父のじつと見つめる瞳と、腕に込められた温かく大きなその手があったからだ。

「本当の……なの……？」

ルナは逃げ出したい思いに駆られながらも、小さく問いかけた。カルザキア王は、その心を知っているというように、さらにルナが逃げてしまうことを恐れるように、か細い腕を握りしめ続ける。

「四番目に生まれた王子には、左胸に三日月のアザがあった……。」

アウシュダールにはその子と同じところに……同じアザがある……。「ルナは、びくりと震えた。

父の口からアウシュダールのことが語られるのが嫌だった。

耳をふさいで聞くのをやめてしまったかった。

「あの子がシルク・トトウ神なのかは私にはわからん……だが……大きな力をもっているのは確かだ。その力でおまえを追い出し、テセウスたちからお前の記憶を奪った……。王妃はお前がいなくなつた日から眠り続けたままだ」

「母上に……お会いしました……。」

「目覚めたのか？」

「起してしまいました。でも、抱きしめてくれました」



ルナの言葉に、小さく少し驚いたような表情をみせたあと、安堵したようにうなづいた。

「あの子のアザを見たときに、巨大な力が動いているのを感じた。この手にかけて子が……生きて目の前に現れたのだから……。一日たりとも忘れたことのなかったことだ。自分の子と認めないわけにはいかなかった。わたしに術など……はじめから無用だったのだ」  
そこまで苦しげに語ると、ルナを見つめる表情が悲しげに揺れた。  
「だが……同時に、ルナ……お前のことも忘れるわけにはいかなかった。ずっと私なりに探してきたが……見つけだしてやれなかった……。すまなかつた……。恨んでいるだろうな……」  
「そんなこと……父上のことをそんなふうにしたことは一度もありません」

ルナは、父の言葉に胸の中につかえていたものが消えていくのを感じていた。

「だって……ルナは……ルナがいけない子だったからだって、ずっと思っていました」

「お前は……いい子だ……かけがえのない大切な私の子だ……。年頃になったら……一人の娘として改めてラウ王家に嫁がせ、一生この城に……私たちの手元におきたいと……そう願っていた。お前だけは……手放したくなかつた。不思議だな……アウシュダールよりも……お前が愛しかつた……」

王は苦しげに呼吸をしながらも、優しくルナを見つめた。

「アウシュダールを……受け入れることで……お前を別の方法で城に呼び戻せるかもしれないとも……考えた……。だが……あの子の心は病んでおる……このままでは……この国が……が……滅びる……」

ルナは、カルザキア王が消えそうな声で語る言葉を、一言一句聞き漏らすまいと耳を傾けた。

「アウシュダールがいても……おまえは、私たちの子だ……でなければ……。ラマイネが……目覚めるはずはない……。お前が戻るのだけを待っていたとしか思えん」

「本当に……？」

「そうだ」

ルナの不安を打ち消そうとするように、王はうなずく。

「それに……お前にはリユーザがいる。守護妖獣は王家の一族の証しだ。民を守り、王家を守り、指輪を守るための……私の子であるという確かな証しだ……」

カルザキア王は、ルナの気持ちが落ち着くのを見ると、そのつかんでいた手を離し、震える左手の中指から金と銀の交差する白い石のついた指輪をはずして、ルナの手握らせた。

「これを……お前の手から、直接テセウスに渡してくれ。即位の証しの指輪だ……アルディナの指輪。わかるな……」

「父上……」

カルザキア王の息づかいは苦しげなものにしだいにかわっていった。

「お前が必ず、直接、テセウスに渡すんだ……いいな……」

苦しげな様子と、咳と同時に口から血が吐き出されるのを見て、ルナは自分の心臓が激しく鼓動を打ち、大きく揺れるのを全身で感じた。

「待ってください……いま誰か呼んできます」

涙声で顔をゆがませて、助けを呼びに立ち上がるうとするルナの手首を、カルザキア王の手が再び引き留めた。

「いい……もう……助からん……だからここに……もう……二度と、私のそばから消えるな……」

父の悲痛な言葉に、ルナは立ち上がることができなかった。

父の血の気のない顔をじっと見つめるうちに、ルナの脳裏に突然ハーフノームの海賊島で亡くなった育ての母、イリアの死の瞬間が蘇り、父の姿と重なる。

悲鳴を上げそうになる心を懸命にこらえながら、ルナはそれから逃れようとするかのように父の手をとり、すぐるように強く強く握りしめた。

「それから……ルナ、昔……祖父の側近をしていた男に……わたしと同じ年の息子がいた」

カルザキア王は遠い目をした。

「名はディアード……。ディアードだ。彼を探して、国に戻るようにと伝えてほしい……。国の行く末を案じ……。そのために……。父親が祖父の怒りをかい……。親族ともに国を追放された男だ……」

ルナは戸惑いながらも、父が語る言葉を一言でも聞き漏らさないようじつと声に聞き入った。

「私はディアードと約束をしていた……。私が王になった時には……呼び戻すと誓った……。だが……。わかっているのは……。ミゼア砂漠かセルグ……。で、一族の者を見かけたという噂だけだ……」

「ディアード……」

ルナは初めて聞くその名を声に出してつぶやいた。

「子どものくせに、きまじめな奴だった……。そういえば……」

カルザキア王は、ふと言葉をとぎらせた。

苦しい息づかいの中で、忘れかけていた記憶の糸をたぐり寄せようとすると、目のように、目を細め、眉間にしわを寄せる。と、その瞳がカッと突然見開かれた。

「……ルナ」

弱々しく息の狭間に自分の名を呼ぶ父の声に、ルナは涙声で「はい」と返事をする。

「私は……どうして……忘れてしまっていたのだろう……。だが……  
……思い出しているも……。あの言葉を信じてることなど……。到底、でき  
なかつただろう……。今ならば……。いや……。もう遅い……。」

「ディアードの言葉……?」

ルナは、なぜだか父がその言葉を告げるときを、ひどくためらっ  
ているように思えた。

「『アンナの……。一族を……。用いてはならん……。その神の言葉を……  
……信じては……。ならん……。』と……。ディアードの父が別れ際に祖  
父に言い残した言葉だ……。」

「アンナを信じてはいけないの?」

それは衝撃的な言葉だった。

ノストールは長い間、アンナの一族たちの言葉を礎として歩んで  
来たのだ。

「それが……。国を救う道だ……。とな」

ルナは、大きく息を吐き出し瞼をゆつくりと綴じる父の顔を、食  
い入るようにつめ、その手を握り締めた。

「父上……。」

「ルナ……。最後にお前の……。その髪の毛の輝きを見たかったな……。葉で  
染めたのか?」

カルザキア王が力なくつぶやいた瞬間、部屋の端で倒れていたイ  
ルダグの体が発光し、部屋中に雷電を放った。

青白い光や銀色の光がパチパチという音を立てながら縦横に走る。  
やがて、その突然の光が消えたとき、カルザキア王の瞳にルナの  
銀色の髪が映し出されていた。

「イルダグか……。すまん……。」

王は死に瀕した自分の守護妖獣が、主の望みをかなえるために放  
った光だった。

それは、ルナの緑色に染めた色を取り去り、見事な銀色の髪をよ  
みがえらせたのだ。

「ルナ……。」

カルザキア王は満足したような笑みを浮かべていた。

「民を……この国を……そして……母を……頼んだぞ……」

「はい……父上……」

「……………」

「父上？」

ルナは呼びかけても返事をしない、カルザキア王の手を両手で握り叫んだ。

しかし、その大きな手は二度とルナの手を握りかえすことはなかった。

「父上！ いやだ……いやだ、父上！ ルナは……ルナは、まだ、帰りましたのごあいさつをしません。父上！ 父上！」

どれほど体をゆさぶっても、カルザキア王はルナの叫びにこたえてはくれなかった。

あまりに突然すぎる出来事に、ルナは茫然とするしかなかった。

イリアの死から、三日とたたない間に、今度は父の死を受け入れなければいけなくなったのだ。

突きつけられる死という見えない力の前で、ルナは体中から何かが失われていくのを感じていた。

その時、ルナの背後で突然、男の叫び声が上がった。

それは、意識をとりもどしてあわてて王の部屋へ戻った警備の兵士が上げた叫び声だった。

「だれかー！ だれか来てくれえーっ！ 陛下が、陛下が大変だあー！ 陛下が襲われたー！ だれかー！ 誰か来てくれー！」

兵士はその場の様子で、ルナがカルザキア王を襲ったと思い込んだのだ。

兵士は、ルナが子どもであることで一人で取り押さえられると判断したのか、部屋に飛び込むと床に座り込んでいるルナに背後からつかみかかった。

しかし、その手は空を切った。

急にルナの体が、操り人形のように王の体を飛び越えて部屋の窓

辺まで跳躍したのだ。

「待てえ！」

兵士は逃がすものかといった必死の形相でルナに詰め寄る。だが、当のルナにはその兵士の声すら耳に届いていなかった。

自分の体が見えない力で父のそばから引き離されたときに、初めてその力の存在に気がついたのだ。

「いやだ！ 父上のそばからはなれない！」

ルナの叫びに兵士はギョツとしたように一瞬立ちすくんだ。

『ご辛抱ください……このままでは……あなたは王殺しの罪人として捕らえられます』

低い声がルナの耳元でささやく。

「もういいんだ！ 離れない！ 父上から離れるのは、もういやだ！」

『指輪を……テセウス様にお渡しする約束を、ディアード殿を探す約束は、どうされるのか？』

その言葉にルナは、指輪を握ったままの手を見つめた。

『王の指輪、アルディナの指輪 は邪悪なものの手に落ちれば……』

…国は滅びます』

厳しく叱責する声にルナは、父と交わした約束を思い出した。

「指輪を兄上に渡して……。ディアードを探す……？」

『そうです……このまま捕らえられれば……約束は守れません……それでもよろしいのか？』

ルナは首を横に大きく振った。

声は、それを確認すると、間を置かずにルナの体をいきなり王の部屋の窓辺の厚いカーテンに体当たりさせた。窓ガラスは砕け散り、ルナの体が三階の部屋から外へと飛び降りていった。

「イルダーグ」

ルナは飛びながら叫んでいた。

父の守護妖獣の名を。

『お気づきでしたか……』

守護妖獣はルナの体を少しも傷つけることなく地面に着地させると、姿を現した。

それは部屋で倒れていた、ルナの知っている子ネコの姿ではなく、大人の三倍はある大きな猛獣の姿をしていた。

しかし、イルダーグの自慢の黄金色の体毛は、巨大な爪に引き裂かれたように、無残にも皮が剥ぎ取られ、青い血がその体を染めていた。

「大丈夫……なの？」

イルダーグは既に瀕死の状態だった。

いや、一度は深い闇の中へその身をゆだねかけたのだが、カルザキア王の死とともにイルダーグは最後の力を得た。

ルナを守り、指輪継承の守護をせよ。そのために残された私の命をお前に託す。指輪を守護すべき者として、ノストールの代々の王との誓いをここに果たすのだ！

主であるカルザキア王の魂の叫びが、イルダーグに届き守護妖獣は奇跡的に命をわずかに留めたのだ。

『まだ大丈夫です……。ですが……。この命も……。あとわずかにて尽きます……。指輪を守るのが……。王との約束……。最後のつとめ……。王を守れなかった不覚……。無念……。せめて……。あなたを少しでもテセウス様の近くに……。お運びせねば……。どうか背にお乗りください。そして……。私の体にしっかりとお捕まりください……。』

「うん」

ルナは、城の騒ぎが大きくなっていくのを知って、イルダーグの背中にのり、体を伏せてその首に手を回した。

「陛下を刺した子どもが、外に逃げたぞー!!!」

カルザキア王の部屋から叫ぶ兵士たちの声にルナは反射的にふりかえった。が、その目は母の部屋でとまる。

ラマイネ王妃の姿が窓際にあっただ。その心配げな瞳がルナの翠の瞳の中に映る。

「母上!」

だが、視線を交わしたのはほんの一瞬で、妖獣の中でもその俊足を誇るイルダーグの足は、瀕死の状態であるにもかかわらず瞬きをする間に城から遠ざかっていた。

「ごめんなさい……絶対に……帰って来ます……」

ルナは父からあずかった アルディナの指輪 を握り締め、イルダーグの背に揺られ続けていた。



アルティナ城の城内では、突然のカルザキア王逝去という出来事に直面し、騒然とした空気と殺人という事態に驚愕と緊張が満ちあふれていた。

「一刻も早くテセウス兄上にご帰還いただかなくては……」

クロトは父の亡骸に突き刺さったままの短剣を自らの手で取り去り、血に染まったガウンを真新しいものに替えさせたあと、カルザキア王の遺体を別の寝室に移した。

カルザキア王が倒れていた寝室は、王の大量の血と、守護妖獣のものらしき青い血が点在し、窓のガラスは粉々にくだけ、とても父の遺体を安置するわけにはいかない状態だったのだ。

クロトは身体が小刻みに震えているのを止めようと努めたが、震えは収まることがなかった。

信じたくない出来事に直面しながら、いま王子として城に留まっているのが自分一人であるという重圧に、クロトは自分の感情を表に出すことを必死に押さえ、耐えながら、出来る限りの指示を臣下たちに出し続けていた。

(もう少し……アルクメーネ兄上が来てくださるまで……)

クロトはすぐにも城から飛び出し、父を殺めたという子供を自分の手で捕まえたかった。

ダイキの足であれば、どこへ逃げようとも必ず捕らえることは間違いないのだ。

しかし。

「どうしてなんだああ　！」

クロトの突然の怒声に、そばにいた誰もがギョツとして身動きをとめた。

懸命に押さえていた感情を、こらえ切れずに放ってしまったのだ。

「どうして……なんだ……」

自分にも父王にも、守護妖獣がついている。

王の身に危険が迫ればそれを感知し、その生命をかけて王を守護するイルダーグが、そしてその父の子であるクロトを守るダイキがいた。

眠り続けるラマイネ王妃のネフタンが動きがとれないのは別としても、なぜ父を死なせてしまったのか。

そんなことが起きてしまったのか、クロトは誰にぶつけていいのかわからない怒りに自制がきかなかった。

なぜ、ダイキは何も感じなかったのか。

なぜ、見張りの兵たちが眠り込んでしまったのか。

なぜ、ほかの兄弟たちがいない時にこのようなことになってしまったのか。

なぜ、自分が父の盾になることもできずに眠り込んだままだったのか。

なぜ……なぜ……なぜ……なぜ？！

父が殺されなければならなかったのか！

心が怒りで支配されそうだった。

それを避けるためにも、クロトは荒い呼吸を何度も繰り返す。

目撃した兵士の話では、王を殺めたのは銀色の髪をした子供だったという。

父の守護妖獣を操り、三階の部屋から飛び降り逃げ去ったと言うのだ。

(銀色の髪……)

それは、クロトの心に少なからず説明しがたい動揺を与えた。

決して触れてはいけないものに触れてしまったような気がする。

しかし、ノストールの王カルザキア王を殺した者であれば、どのような不可解な感情が渦巻いても、その子供を絶対に捕らえ、断罪に処さなくてはならなかった。

たとえ、どのような理由があろうとも許すわけにはいかないのだ。(どうして……イルダーグは……父上から離れてしまったんだ……)

アルティナの指輪はなぜ消えたんだ。守護妖獣を操る人間？）  
謎は深まるばかりで、クロトは膨らみ続ける疑問に混乱し、わけがわからなくなりそうだった。

王の所持する指輪は、王の意志がなくてはその指からはずすことはできない。

たとえ王が亡くなったとしても王の血統につながる者たちの守護妖獣たち、王の望んだ継承者にその指輪を渡すべく、あらゆる手段を講じて行動をおこすのだ。

だが、カルザキア王の守護妖獣イルダーグは行方不明となり、ダイキは王を守るために動くことさえしなかった。

わずかな望みと言えば、イルダーグが指輪を守り続けているか、自分以外の他の三人の兄弟の守護妖獣が指輪を受け取っているかもしれないという可能性だけだったが、それはないように思えた。

仮に指輪が継承されたならば、なんらかの瑞相があつてしかるべきなのだ。

瑞相 指輪が王に継承されたとき、新王の誕生を告げるために現れる瑞獣が、一昼夜、国中に咆哮をとどろき渡らせるのだ。

その時に出現した瑞獣は、新王の守護妖獣と融合し、新王の守護妖獣は次の段階へと成長を遂げる。

一方、瑞獣の出現とともに、逝去した王の守護妖獣は守護者としての役目から解き放たれ、野へと帰って行く。

なかには王の死とともに、自らの命を終える守護妖獣も少なくない。それほどまでに、王と守護妖獣のつながりは深い。

だが、瑞獣はいまだ出現していない。  
それは、指輪の継承が行われていないということの意味した。

このままでは、王位継承問題を引き起こすばかりではなく、国全体が守護神の加護を得られず、国に天変地異などの災いが起こることをも意味する。

「なんとしても……捕まえて、指輪を取り返すんだ！ 国中をくまなく探し、絶対に見つけだせ！」

クロトが怒りを込めて、城に残っていた全兵を出動させるように、留守の將軍たちに命を下した。

自分が城から動けないもどかしさに、いらだちが頂点に達しようとしたそのとき、王妃付きの侍女長が顔色を変えてクロトの前に現れた。

「王妃様が……王妃様が……お目覚めになられました……！」

「母上が……！」

怒りの心は一瞬にして喜びと、そして混乱、迷いへと変化を遂げた。

（どうする……）

目覚めたばかりの母が父の死を知ればどうなってしまうのか、クロトには予想できなかった。

夫が亡くなり、指輪は消えた。その上……。

（その上……？ なんだ……）

クロトは、自分が何を言いかけたのか戸惑った。

「どういたしましたよう……」

侍女長が助けを求めるように両手を胸の前で合わせながら、クロトの指示を仰ごうと声をかける。

「ああ……」

皆の前で感情にまかせて怒鳴ってしまったことで自己嫌悪にかられながら、兄たちやアウシュダールが城にいればこんなときも平然とこの混乱を静められるかもしれないと、クロトは考えながら天井を仰いだ。

このところ、国の難事はアウシュダールがすべて解決へと導いていた。

だが、そのアウシュダールさえ、このような事態を予想できなかったことになる。

クロトは目を閉じると、服の下にいつも身に着けている首飾りのペンダントヘッドの小さな石に左手を当てて大きく深呼吸をした。

その胸の奥がひどく痛む。

信じられない悲しみと痛みの中、一人で決断し、この一大事を乗り越えないといけない。

大声を張り上げて、父にすがって泣き伏すことは、まだ許されない。

「わかった。これから母上のところへ伺う」

クロトはそう言うとカルザキア王の遺体から離れ、母ラマイネ妃の部屋へと歩きだした。

城の外では雷鳴が轟いていた。

大粒の雨が、ひと粒、ふた粒と窓を打ちはじめ。

(兄上、早く戻ってきてください)

あふれそうになる涙を見上げてこらえながら、クロトは呼びかける。

ノル・シュナイダー城からもうすぐ戻るはずの、アルクメーネの一刻も早い帰りをただひたすら祈りながら。

暗闇のなかで不気味に光り続ける雷雲と、轟きわたる豪雨のなか、  
ずぶ濡れになったアルクメーネが城にたどり着いた。

守護妖獣カイチの力で全速力で城に帰って来たために、供は誰ひ  
とりとしてつけていない。

アルティナ城から最も離れたシャンバリア村からでは、供の者た  
ちが城にたどり着くのは当分先の話だった。

「兄上！」

全身、雨に打たれて水をしたたらせたまま、臣下の案内でカルザ  
キア王の寝室にたどりついたアルクメーネを、クロトの声が迎えた。  
その声には、絶望的な悲しみと、わずかな安堵、そして救いを求  
める響きが含まれていた。

「……………」

アルクメーネはうなずくと、カルザキア王の遺体を横たえたベッ  
ドに歩み寄る。

そこには、アルクメーネの覚悟と予想を越え、あまりに穏やかな  
表情をした父王の死顔があった。

「父上……………」

微笑さえ浮べているような表情は、いまにも目を覚ましそうだっ  
た。

暴漢に襲われ命を落としたとは到底考えられないほど、穏やかな  
空気をまとっているように感じてしまいアルクメーネは戸惑う。

生前の父は、こんなふうには微笑んだことがあっただろうか……と  
アルクメーネは知らず知らずのうちに記憶をたどっていた。

どうしても厳しい表情をたたえた父の顔だけが印象に残っている  
せいかもしれない。

「クロト……………」

兄は弟を呼び寄せると、その耳にそつとささやきかけた。

「指輪はどうしました？」

「兄上……」

父の突然の死の報に接して帰って来た兄の口から飛び出した最初の言葉に、クロトは一瞬たじろいだ。

自分のように取り乱すのを期待していたわけではなかったが、クロトがみた限り兄は普段の冷静沈着な兄とかわらないようにみえる。「クロト」

叱るような囁きに、クロトはハツとして申しわけなさそうにうつむいた。

「わたしが駆けつけたときには……すでにありませんでした。盗まれたのかも……」

「……………」

アルクメーネはあごに親指と人差し指をあてて、なにごとかを思い巡らしているようだった。

「アルクメーネ殿下」

数人の侍女が部屋の前で、雨に濡れたアルクメーネのために軟らかな厚手の織物布を山ほど抱えて立っていた。

アルクメーネは、視線をあげる。

「お風邪を召されては大変です。お着替えを……」

気遣わしげに小声でそうつぶやく侍女の声に、アルクメーネは小さくうなずいた。

「すまない」

そして目でクロトにも、共に部屋の外へ出るようにと促す。

アルクメーネは、着替える余裕すらなかったクロトとともに喪に服するための服に着替え、目覚めたという母ラマイネ王妃の部屋へと出向いた。

「母上のご様子は？」

アルクメーネに問いを投げかけられるたびに、クロトは複雑な気持ちにかられる。

なぜ兄は、こつも冷静でいられるのか理解できなかった。

父の死が悲しくないはずがないのに。

「窓辺にたたずみ、外を見つめられたまま動かれません」

「……………」

アルクメーネは無言だった。

そして、二人はラマイネ王妃の部屋を訪れた。

そこには、クロトの言葉どおり窓辺に立つ母の姿があった。

「母上……………」

アルクメーネの表情が一瞬だけゆるむ。

そして、振り返らないままの母に近づき、その手を取って、母の  
見つめる視線の先を追う。

それは、カルザキア王の部屋の真下だった。

外は止むことのない雨が激しく降り続ける。

アルクメーネは、窓の外に父を襲ったという銀色の髪をした子供  
が窓を破り飛び降りる場面を思い浮かべてみようとした。

だが、三階の部屋からではアルクメーネさえ無傷で飛び降りるの  
は無理に思えた。

しかも、その子供が見張りの兵士達が見つける間もなく姿を消し  
たというのも、妙な話だった。

城は外部からの侵入はもちろん、中から闘争することさえ出来な  
いまで堅固な造りとなっている。

ましてや、父には守護妖獣イルダーグがいた。

子供が侵入と脱出を容易に成し遂げられるはずがないのだ。

しかも。

（母上は、その子供の姿を見たのでは……………けれど、なぜこうして、  
ずっと見続けていらっしやるのだろうか……………）

母が目覚めたということは、守護妖獣ネフタンもその出来事に接  
しながら、父を助けなかったことになる。

「母上」

アルクメーネの背は、すでに母を見下ろすほど高くなっていた。

ラマイネ王妃の瞳が、約三年ぶりにアルクメーネをとらえる。



その碧い瞳が悲しげに揺れる。

「え……？」

一緒にいたクロトも思わず、兄のそばで母の顔を見つめる。  
ラマイネ王妃はそのクロトにも視線を移すと、一筋の涙をこぼした。

その瞳は、何かを訴えているようでもあった。

「母上……」

クロトは声を詰まらせた。

母は父のことを知ってるのだ。だから、長い眠りから目覚められたのだ。

クロトの瞳からも涙が流れ落ちる。

アルクメーネはそんな弟王子の肩をそっと抱いた。

再び窓の外に視線を投げかける母の横顔を見つめながら。

真夜中のノストロールの空に、いくつもの警鐘の響く音が鳴り響いていた。

振り続ける大粒の雨のように止むことを忘れたように打ち鳴らされ続けるその音は、不吉な音色を宿し響きわたる。

アルティナ城からは、馬にとび乗った大勢の兵士たちが小隊を組み、あわただしくたいまつをかがげて方々に飛び出していく。

「村長はいるか！」

家の外で大きな声と頑丈な木の扉を激しくたたく音が家中に響き渡り、居間の長椅子で飲みつぶれて眠っていたネイが目覚めた。

「そんちよー、誰か来たよ」

大きなあくびをしながら隣の部屋にいる村長を呼ぶが、大きなびきが聞こえるばかりで起きる気配がない。

「ったく……」

ドアをひっきりなしに叩く音を止めるために、仕方なくネイは眼をこすりながら起き上がると、まだ暗い家の中を歩いて、木の扉を開けた。

「なんだよ、まだ明け方前だろ。村長さんは寝てるんだけど、一体……？」

文句を言おうと不機嫌な顔で目をこすりながら相手を見る。

するとその寝ぼけた瞳に、ひと目で兵士とわかる男たちの殺気立った表情が飛び込んで来て、ネイは一発で目が覚めた。

「城からの急用だ。村長はいるか？」

「あ、ああ」

ネイは何度も小刻みにうなずくと、返事もそこそこにきびすを返し、隣の部屋に飛び込んだ。

そして、ロッシユと一緒に高いびきをかいたまま雑魚寝をしてい

る村長を見つけると、つかみかかるように強引にゆり起こした。

「村長！ 村長！ 城から兵士が来てるよ！！ 急用だって！ そんなちよーおおお！！！！」

「城？」

耳元で叫ぶネイの大声に、半分意識朦朧とした状態の村長が、ふらふらと起き上がる。

「急用だって、すっげー怖い顔したヤローが外で待ってるよ」

村長は大きく伸びをすると、深呼吸をして、玄関に向った。

兵士は村長が現れるのを見るや否や、大声でまくし立てた。

「深夜、城に侵入した子供が陛下に危害を加えて逃走した。城から一番近いこの村に逃げ込んだ可能性が極めて高い。村人たちを総動員し子供の捜索を行なえ。万が一、かくまっている者がいれば、村人全員を処罰する。いいか、必ず捜し出すのだ。特徴は……」

怒りを含んだ大声が家中に響き渡る。

ネイに蹴り起こされたロツシユは大きなあくびをしていたが、そのあくびが途中で止まった。

「陛下に危害を加えたのは、銀色の髪をした子供だ」

部屋の中から村長と兵士の会話に聞き耳を立てていた二人は思わず顔を見合わせた。

ルナの姿が、ずいぶん前から家の中のどこにもいないことに気がついていたのだ。

「ジーンの奴……」

村長と兵たちが、村人を起こしに家を出て行くのを見送りながら、ロツシユは舌打ちをした。

「もう少し待ってって言ったのに……」

「でもさ……あの子、髪の色どうやって落としたんだろう」

腕を組んでうなるネイに、ロツシユは首を横に振った。

ハーフノーム島にあるセリユート草の染料で緑色に染めた髪の色は、簡単に落ちない。

「そんなことは、あとで本人に直接聞けばいい。いまはそんなこと

悠長に考えてる場合か」

「う、うん。そうだった。そうだよ、相当やばいんだ……。王に危害を加えたとか言ってたもんね。さっきの感じじゃ、見つかったらただじゃ済まない様子だ。どうしよう……。ジーンはそんなことする奴じゃない」

ネイが、助けを求めるようにロツシュをじっと見つめる。

「でも、海賊協定状を盗みに城に忍び込んだことを王様に見つかった可能性はある。捕まえられそうになったら、攻撃するだろうな。普通」

「海賊協定状があれば、島に戻れる。ジーン、手に入れられたのかな」

「一人で行くなんて無謀もいいところだ。けど、かしらに認めてもらうために、焦ったに違いない。イリアさんのことで随分思い詰めていたからな……。それに、城から海賊協定状を盗み出す話をした責任は俺にもあるし……」

ロツシュはしばらく黙り込んだ後、ネイに視線を返した。

そして、ふたりは同時にうなづく。

「行くか」

「うん」

荷物を手に村長の家の裏口からこっそり抜け出したロツシュとネイは、家の外に出て来た村人たちの目に触れないようにと、村を後にした。

風になびく銀色の髪が、細く輝く月のわずかな明かりに照らされて、流れ星のように、地上という暗闇の中を流れていく。

イルダーグの背に必死にしがみつきながら、ルナの体はガタガタと震えていた。

その震えは、奥歯をかみしめても、目をきつく閉じても、体はいっこうにいうことを聞かない。

「イルダーグ……ごめんね……ごめんね……」

「謝る……必要は……ありません」

ルナの自分を責める言葉に、イルダーグは冷静に思念を返した。

「責めるべきは……私自身……」

その思念は、ルナが自分を責める以上の大きな悔恨と、そして極度の疲労に覆われている。

「イルダーグ、止まって！」

突然、ルナは叫んだ。

「止まって！ イルダーグ！ 止まって！」

その叫びに、イルダーグは不承不承速度をおとし、人目にふれない森を探して走りを止めた。

『どうされたのか……ここで、走りを止めてしまえば、エーツ山脈を抜け切ることはお約束できない……』

月明かりにうつすらと闇の中に黒い姿を浮かばせるエーツ山脈をルナとイルダーグは見ていた。

ふもとの境界は間近に迫っている。

ノストールの最北端である最後の村シャンバリア村を過ぎれば、あとは険しい山へと続く樹海への道が待っているのだ。

ルナの父、カルザキア王守護妖獣イルダーグは、その瀕死状態の体でエーツ・エマザー山脈を越えて、ルナをテセウス皇太子たちのもとに連れて行くこうとしていた。

「いいよ。もうここで……イルダーグはもう休んでいい。こんなにたくさん血が出てるのに……もう走れないのに、我慢しなくていいよ……」

ルナは震える手で、イルダーグの大きな顔を両手を大きく広げてそつとだきしめた。

その瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。

ルナの服も、イルダーグから流れ出る大量の青い血で染まっていた。

「ありがとう……ここまで、連れて来てくれて……あとは、自分の足でいくよ」

『それは……無理です……。この季節のエーツ山脈は雪が覆っています。とても……あなたの……足では……越えられません……』

イルダーグはそう言いかけて、自分の体が震えていることに気がついたが、それはルナの震えが伝わって来たのだと知る。

幼い子供の震えは、ただ我が身を案じる心細さから来ているものではないことを王の守護妖獣は悟った。

恐れている。自分に降りかかる出来事ではなく……自分以外の者の身におこる死に対して震えている……。

それを感じ取ったとき、闇夜に光る瞳が穏やかなものに変化した。『では……しばし休息を……』

「うん……うん……。ありがとう……」  
ルナは、そのままイルダーグの大きな顔に頼ずりをした。

『では……少し……お話しをしましうか……』  
イルダーグは、体を地面に伏せると、ルナにもそばの大木にもた

れかかり休むように告げた。  
『酷なことをお話し致します。いまの城であなただけのことを覚えてい

る者はいません』

「……」  
ルナは父の守護妖獣の言葉に、激しく首を振った。

「違う。そんなことないよ。母上も父上も、ルナのことを忘れてい

なかった。イルダーグだつて知ってるよね。母上は、前みたいに一緒にいていいと言ってくれた。兄上たちだつて、きつと忘れてないもし忘れていても、お会いすればきつと思ひ出してくれる……」

『王は第四王子の誕生したばかりの命を断つたその日より、ご自身を責め続けられておりました。その悔恨の強い思いが、突然現れたアウシュダール王子の偽りの術を受け入れなかったのでしょうか。あなたの記憶を消されるということは、王子の死さえを忘れてしまうことを意味する。王は、偽りの記憶に塗り変えられることを拒まれたのです。ですが……他の人々にはそれほど強固な意志は……』

ルナは、両の手の平をじつとみつめた。

月の光が小さな手を浮かび上がらせ、そこに受け取った金と銀に輝く指輪が輝いていた。

しかし、ルナが見ていたのは、イルダーグの青い血とともに、こびりついていた赤い血だった。

カルザキア王の手を握り締めたときについた、父の赤い血だった。イルダーグの言葉は、父王がルナに語った言葉をたどり、事実を受け入れることを幼い子に求めた

「偽りの術……つて？」

ルナは不安という見えない力に押しつぶされそうだった。

もう、父の大きな手の平が自分の頭を優しく包み撫でてくれないことを誰よりも知っていたのは、ルナ自身だったからだ。

『偽りの術とは、銀色の髪をもつ王子の記憶を人々の記憶から消し去り、自分を生まれながらの第四王子としての記憶を植えつける術です』

ルナはそんな術で、兄たちが自分を忘れることなど到底信じられなかった。

どんなときもルナをあたたかく守ってくれたテセウス。

優しく気品があり、いろいろな話をしてくれたアルクメーネ。

そして、毎日どこに行くのも、笑うのも、怒られるのも、いつも一緒だったクロト。

大好きな兄たちが自分を忘れることがあるはずがなかった。  
しかし……。

「アウシュダール……って……子が、本当に父上と母上の子供で、ルナは拾われた子なの……？」

だから、自分が家族として一緒にいられなくなったのかもしい、と不安がよぎる。

けれど、それは、どうしても認めたくない出来事だった。

認めればノストールから自分の存在が消えてしまいそうで、ルナは父の血がついた手をきつく握りしめると、救いを求めるようにイルダグを見つめた。

「イルダグ」

「わかりません……」

イルダグはルナの心にこたえられないことに、申し訳なさそうに首を横に振った。

「……皇太子、殿下たちをはじめ、国の人々は銀色の髪を持つ王子のことは忘れ去り、アウシュダール様を弟王子として……また、シルク・トトウ神の転身人として認め、信じておられる……。ただし……ライネ王妃は……あなたがいなくなったあの日から今日まで、深い眠りについたままでした。アウシュダール様の存在すらご存知ないでしょう。ただ、それも、王妃にかけられた術であるのかも知れません。が……いずれにしても、真実はわれわれ守護妖獣にはわかりません……」

「でも、兄上に会えば、絶対に思い出ししてくれるよ……」

「ルナ様。アウシュダール王子はあなたの存在を許してはおかないでしょう。あなたが生きていると知れば放ってはおかないでしょう。もし万が一知るところとなれば……あなたの命が危険になります」

イルダグの間髪おかない返答に、ルナはそれがどれほどの意味をもつことなのかを感じ取った。

「でも……兄上に……、兄上には……指輪をお渡ししないと……」

ルナは、再び指輪を握ったままの手を開いた。



イルダーグは優しい瞳でうなづく。

『その手の中にある……カルザキア王よりあなたがあずかりし  
ルディナの指輪 は……二つの指輪からできおります』

「え……？」

初めて聞く指輪の仕組みに、ルナは驚いて指輪を夜空にかかげた。  
『私の言葉通りに指輪を動かしてください』

「うん……」

その言葉に従いリングを両方の指で持ち、上下左右にゆっくりと  
ひねっていくと、ある部分で簡単に二つにわかれた。

白く輝く宝石のついた金の指輪と、平打ちされた細かな装飾が施  
されている銀の指輪とに。

『金の指輪はあなたのその左手に、銀の指輪は……』

イルダーグは薄れていきそうになる意識を懸命にこらえる。

『決して人に奪われることのない場所へ……』

その言葉と同時に、指輪が銀色の光を放った。

強烈な光は、ルナやイルダーグの姿さえかき消していく。

「イルダーグ？」

ルナは思わず小さな悲鳴を上げた。

あまりに光が強すぎて、目の前が真っ白になったのだ。

『ご心配されませんよう……』

その言葉どおり、やがて光は徐々に薄らいでいった。

「なに……？」

『指輪は、眠りにつきました』

イルダーグの言葉にルナが手のひらを見ると、金の指輪を残し、  
もうひとつの銀の指輪は消えてしまっていた。

『ノストールは小国であるがゆえ、その国を護るアル神は王位継承  
の指輪が、正式な王の指に収まるために様々な秘密をもつけました。  
二つにわかれる指輪……王が世継ぎの王子へ直に渡すことができな  
い場合、指輪を二つにわけて、邪な気持ちをもつ者から指輪を守る  
ことができるようにしました。王の意志に従い次の王へ受け継がれ

れば、片方の指輪は自然に新王のもとに現れます……』

「もし……兄上に指輪を届けられなかったら……?」

『……………』

ふいにイルダーグが黙り込んだ。

「イルダーグ……」

『来ます……』

「え……?」

ルナは追っ手に見つかったのかと、当たりを見回した。

だが、森の中は暗く人の気配もない。

『王を襲った……妖獣です……』

イルダーグの思念が直接ルナに届く。

緊張が走った。

ルナは武器になるものがないかと、着ている服をまさぐった。

その手に、何かが触れる。

(これは……)

鞘に収まったこぶりの短剣。

それはアルティナ城の城内で、父を殺めたに違いない少年とぶつかったとき、その子供が落としていったものだった。

ルナを見たときの驚いた表情がはつきりと浮かぶ。

……あの者は、禁忌となった指輪を所持してある……あの子どもは、闇の力に振り回されておる……

父の言葉が蘇る。

ルナは、父を殺した顔を絶対に忘れまいと、決めた。

『……私の血の臭いを嗅ぎつけたのでしょ……お逃げ下さい』

イルダーグはゆっくりと大きな体を起こすと、攻撃の態勢をとった。と、まさにその瞬間、大きな黒い影が突然イルダーグに襲いかかった。

二つの影は、暗闇の中でからまりあうように濃い一つの影となり、ルナの視野から消えた。

それは、目の前の空間から突然現れたような唐突さだった。

「イルダーグ?!」

ルナは叫びながら立ち上がり、手にした短剣の鞘を抜きながらイルダーグと影が消えた方向へ追うように走りだす。

『お逃げ下さい……!』

イルダーグの思念が弱々しくも、ルナを逃がすことのみを願って響く。

「いやだ!」

ルナは走った。

イルダーグと影は思った以上に遠くに移動していて追いつくことができない。

ルナが懸命に走り続け、やっと追いついた瞬間、目の前でその影は二つにわかれた。

ルナの前の影がふらつきながら立ち上がる。

「イルダーグ……」

そのイルダーグに、再び影が襲いかかる気配を感じたとき、ルナは咄嗟にイルダーグの前に飛び出し、突進してくる影めがけて剣を突き出していた。

息が止まるほどの激しい衝撃がルナの全身を打ちつけた。

体はそのまま弾き飛ばされ、地面に叩きつける。

鋭い痛みが全身を突き刺し、痛みと苦しさで声すら出ない。

さらに、倒れたと同時に鋭い空気を切る音が耳元をかすめた。

ルナは無意識のうちに体をのけぞらせて、後ろに飛びのく。

一瞬、影の気配が消える。

だが、それは一時的に身を潜めただけで、次の攻撃の機会をうかがっているのはあきらまなかった。

ルナは、手にした短剣の刃先から生ぬるいものがしたたり落ちる感触を得てはいたが、手ごたえがまるで感じられなかった。

張り詰めた神経が、ルナの首筋を走り抜ける。

闇の中での争いは、海賊暮らしのなかで慣れてはいたが、突然あらわれた正体不明の妖獣は闇そのものであるかのようにまったくつかみどころがない。

（でも……父上の仇だ……！ イルダーグを殺そうとしてる……敵だ……）

ルナの心の中に、純粹な怒りが沸き上がる。

その怒りが千々に乱れた心がひとつにして、守護妖獣イルダーグに致命傷を与えた得たいの知れない妖獣に対する恐怖心をさえ消し去っていく。

(死ぬかもしれない……)

ルナは血まみれになって横たわり、死んでいく自分を思い浮かべた。

(でも、こいつだけは)

悲しみも、痛みも、恐怖心も怒りがすべてを消し去り、全身を満たしていく。

これまでに味わったことのない凄まじい怒りの感情が、ルナ自身の中で荒れ狂い、解き放たれるようと膨らみ続ける。

(許さない……)

やっと母と父に再会し、あたたかい家族のもとに帰れるはずだった。

両親は、自分のことを忘れないでいてくれた。

きらいになつたわけではなかった。

見放されたわけでも、見捨てられたのでもなかった。

父は、自分が城に帰って来たことをわかってくれていたのだ。

だから、イルダークの守護の結界を解き、待っていてくれた。

(それを……その父上を……。絶対に許さない！)

怒りに満ちた心は、ただ父の仇の命を断つことのみ願ひ、突き進む。

ルナは全力で走ると、高く跳躍した。

暗闇の森の中、揺れる高い草むらの中、なぜそこだとわかったのか理由はなかった。

ただ、体が引き寄せられたのだ。

ルナは剣を高くかけると、着地する闇に向かって剣を突き刺した。

闇の中のさらに深い闇の影を。

オモシロイ……

ふいに、イルダークのものではない思念がルナの中に飛び込んでくる。

「え？」

ルナは思わず、その声に気をとられた。

モット……怒れ……

(何だ……?)

剣で突き刺した物体は、まるでその剣を飲み込む様に吸い込んでいく。

両手で剣の柄を握り締めていた手は、剣と一体化してしまったようにピタリとくっついて離れなくなっていた。

「くっ……」

片足を立てて、剣を引き抜こうと力いっぱい引くが、反対にガイと正体不明の妖獣の中に引きこまれていく。

憎イノダロウ……コノ程度ノ傷ハカスリ傷……ソノ程度の怒リデハ倒サレハシナイ

「うるさい!!」

ルナは大声で叫んだ。

「許さないって、言っただろう!」

怒りが頂点に達し、目の前が真っ白になる。

まさにその瞬間、矢のような雷が二つの体を直撃した。

ルナの体は激しい衝撃とともに、手にした剣ごと吹き飛び空へ弾き飛ばされた。

大地に叩きつけられようとしたその体は、飛び込んできた影に直前で受け止められる。

イルダーグの姿がそこにあった。

『お逃げ……くだ……さい……』

雷獣の名をもつ守護妖獣は、文字通り最後の力を振り絞ってルナをかばったのだ。

イルダーグの放った雷の衝撃はルナに傷ひとつ負わせてはいなかった。

「いやだ!! もうこれ以上、目の前で誰かが死ぬのを見るのは、もういやだ!」

ルナは、涙を浮かべ怒りを込めて叫んだ。

ソウダ……殺サレタノダカラナ……

ルナは同調する声があることに気づいたが、怒りはその声に苛立つようにさらに膨らんでいく。

「父上を殺した奴を、やつつけてやるんだ！」

ソウダ……人間八簡單二死又……。

父、カルザキア王の死の瞬間がまざまざと蘇る。

再び、ルナの頭の中が怒りで染まりかけたその時……。

ばかやろうが！

突然、聞き慣れた声が耳元で響き、ルナはハツとした。

ジルの恐ろしい顔が眼前にあらわれたのだ。

ハーフノームの海賊の頭領であり、ジーンとして暮らした歳月中で、父のような存在だったジルの怒りに満ちた顔。

何度か海賊船同士の戦いがあった。

仲間たちにも多くの死人がでるほどの死闘を繰り広げた戦いとき、ルナも目の前で仲間が次々と殺されていく姿に我慢できずに飛び出し、仲間を助けるために、何人の男たちを手を掛けた。

それは海賊たちから見ても、仲間の窮地を救った英雄的行為であり、一人前の海賊として認められる出来事だったはずだ。

だが、死闘のあと、ルナを待っていたのはジルの罵声と、強烈な平手打ちだった。

小さな体は吹き飛び、甲板に打ちつけられてルナは気を失った。

なぜぶたれたのか、それは今もわからない。

しかし今、ルナは頭から冷水をかけられたように冷静さを取り戻していた。

「イルダーグ……ごめん……」

『お謝りくださるな……』

イルダーグは用心深く周囲を見回していたが、ふと困惑したようにつぶやく。

『……消えました……』

「あいつが？ どうして……？」

ルナも驚いて辺りを見回す。

『わかりません……直前まで殺気が満ちておりましたが、たちどころに消えて……しまいました』

そうこたえた後、イルダーグの大きな体がどつと、草むらの中に崩れるように倒れた。



「イルダーグ！」

本来であれば、イルダーグの体は立っていることさえできない瀕死の状態だったのだ。

イルダーグ自身の生命の炎は主人であるカルザキア王を守りきれずに床に伏した時点で終わっていたはずだった。

そのロウソンに灯されていた生命の炎がすべてのロウを使い果た切ったにもかかわらず、こうしていまだ燃え続けている不思議さを、イルダーグ自身が感じていた。

それは王の最後の望みが与えた力だと感じてもいた。

だが、闇の妖獣が自分達の前から立ち去ったと確認した直後、気がつくとも体は地面に倒れていた。

自分の体ではないように重く、忘れていた激痛みが全身に襲いかかり、意識が遠のく。

「イルダーグ……！ だめだ、死んじゃだめだ！ イルダーグはずっと、父上の代わりにそばにいるんだ！ 守護妖獣じゃなくてもいいから！ ただ一緒にいてよ！そばにいてよ！」

ルナは大声で叫んだ。

『おやさしいところは……かわつておられない……安心しました……』

ルナはイルダーグの顔をしっかりと抱きしめた。

「お願いだから……死なないでよ……」

そう訴える涙声はすでに死の訪れを予感して、震えていた。

どれほど自分が望んでも、引き留めても、目の前のこの温かい瞳は綴じてしまうことをルナは誰よりも否定しながら、わかっていた。『……指輪の継承の時を迎えるまで……ほかの王子と会ってはいけません……』

カルザキア王の守護妖獣は、ルナの翠色の瞳をじっと見つめる。

死に瀕した体の中で、いまは唯一生きていることを示す銀色の瞳が綴じようとする瞼をこらえるように大きく見開いた。

『この国の守護妖獣には、あの者の術がかけられております。アウシュダール王子の存在を脅かす者……あなたを城に呼び戻そうとする者には……封印と術をほどこし、貴族でも力のない者は、あらゆる手段をこらえて城を追われました……』

「じゃ……父上は……ぼくを忘れなかったから……殺されたの？」  
ルナの顔におびえの表情があらわれる。

『それは違います……王の前にあらわれたあの者は……禁忌となった王の指輪を持つ者……。アウシュダール王子の封印さえ利用し……わが主の前にあらわれ……し者……あなたのせいではありません……』

そう言葉にしながら、イルダーグは薄れゆく意識の中でふと疑問を覚えた。

(それでもなぜ……王には……わかったのだろう……)

あの子が帰ってきたような気がする。

あれほどのイルダーグが警戒を呼びかけたにもかかわらず、王は無防備に徹した。

ルナを向かい入れるために……。

でなければ、王を守ろうと抗うイルダーグの意志を押さえつけてまで、その身をさらす必要がなかったのだ。

『わが……命尽きし後は……わが牙を……身につけて下さい……』

「イルダーグ……」

『わが一族は……雷獣……あなたとともに……ルナ王……じ……』

イルダーグがルナの名を口にした瞬間、突然の雷鳴が稲光とともに轟きわたった。

驚いて空を見上げたルナの目に、次から次に湧くように現れた雨雲が頭上に広がっていく。

暗闇の中、まぶしいほどの稲妻が、頭上で閃光を放った。その光の槍は轟音を立てて大木めがけて落ち、木の幹を貫く。大地が揺ら

ぎ、大気が震える。

さっきまでルナがもたれかかっていた大木が根の部分まで真っ二つに切り裂かれる。

やがて暗黒の雲は一粒、二粒と、大粒の雨を降らしはじめ、それは次の瞬間、豪雨となった。

「イルダーグ！」

激しく降り注ぐ雨からイルダーグを守ろうとかばったルナは、その時、すでに妖獣が息絶えていることを知った。

「イルダーグ……」

ルナは打ちつける冷たい雨の中、その屍を抱きしめた。まるでそうすることで、自分を守ろうとするかのように。

命の灯火を消した父の守護妖獣を抱き締めたまま、雨の中、気を失うように悲しみの眠りについた。

同じ頃、豪雨の中を茫然とした表情で歩き続ける子供の姿があった。

暗い夜道、体は雨で全身濡れていたが、その瞳はまるで魂の宿らぬ人形のようにうつろだった。

約束八、果タシタ。次八、我が望ミヲ叶エヨ。

少年の耳に、何者かの声が呼びかける。

コノ国ノ王八殺シタ。次八我ニ…ソノ体ヲ与エヨ……。

少年はただ声に操られるように、コクリとうなずいて首から下げている布製の細い紐に触れた。

服の中から手繰り寄せたその紐の先には、おおよそ少年には似つかわしくない高価な指輪がぶら下がっていた。

金の台座に埋め込まれた黒曜石の指輪が。

(全部……終わったんだ……)

指輪をそつと握り、石の部分をただ見つめるその瞳に、雨が降っていないければ、流れ出ている大粒の涙を見ることができたかもしれない。

(もう……生きてたってしかたないんだ……)

少年は、ずつと四番目の王子アウシュダールが国を不在にするのを待ち続けていた。

二年前にも一度その機会があった。だが、そのとき少年はまだヴアルツと出会ってはいなかった。

アウシュダールたちがリンセントースでの結婚式から帰って来た頃、エーツ山脈の比較的身を隠しやすい場所で過ごしていた少年の身に何かが呼びかけた。

才前ノ願イヲ…果タシテヤロウ……。

我ヲ……見ツケヨ……。

少年は声にからめとられてしまったように、大人の足でさえ登る

こののできないといわれるエーツ山脈を登りはじめた。

断崖を素手で登り、エーツ山脈の険しい山の尾根を何日も何日も気の遠くなるほど歩き続け、越え、そこにたどりついたのはどれほどだったときだったのか、少年は、ぼんやりとしか覚えていない。

覚えているのは、ノストールの王を殺すという復讐心だけ。

声に導かれてたどり着いた場所がどこだったのかもおぼろげだった。

あの日、疲れ切った足をとられて、急斜面を転がり落ち、そのまま深く急な溪谷に転落した少年はなぜかかすり傷ひとつおっていないかった。

仰向けになつた目には、切り取ったように細長い青い空。

光さえ届かないような溪谷の底で、少年はあるものを見つけた。

ヨク……来タ……。オ前ノ望ミヲ叶エテヤロウ……我トトモニ

行クノダ。我ガ名ハ、ヴァルツ。

そう思念を発したのは、少年が手にしている指輪だった。

少年の体は雨で冷えきっていた。

だが、神経がマヒしてしまっているのか寒くはなかった。

逆に、現実ではない世界を歩いているような浮遊感が広がる。

「あげるよ……ぼくの体をつかっていいよ……ヴァルツ……」

(もう……生きている目的も……なくなってしまったから……)

心はとうの昔に空っぽになっていた。

ソレニシテモ……アノ子ドモ……アノ憎シミト、怒リニ満チタ

瞬間ノ……闇ノ心八面白イ……

ヴァルツの囁く言葉に、少年の脳裏に城で出会った緑色の瞳をした子どもの顔がよみがえる。

服装から見ても、貴族の子息や、騎士となるために貴族の家に行儀習いに出され騎士の身の回りの給仕をする小姓にはみえなかった。城にいるにはあまりにも不自然な格好をした少年。

しかも、ヴァルツがつくったはずの結界を破って目の前に現れたのだ。

どうして結界が効かなかったのか妙だった。

あの城には最初、シルク・トトウ神の転身人といわれるアウシユ  
ダール王子が不在の間に城を守るために張り巡らした結界が存在し  
ていた。その結界を破って自分たちは城に入り込んだ。

そして、だれにも出会うことのない為の強力な結界をヴァルツは  
作り上げたと言った。

なのにあの少年は目の前に現れた。

まるで、結界が破られたこと知っていたように城に入り込み、王  
の部屋へ向かって来たのだ。

なぜ、ここに……という驚きは、意志の強そうな翠の瞳がまっす  
ぐに自分を見つめたとき、少年に別の感情を呼び起こした。

少年は、あの時はじめて、自分がなにを起こしたのかを知ったの  
だ。

自分の手で、ノストールの王を殺した事実を。

後悔はしていなかった。

ずっと、憎しみ続けて来た殺すべき対象。

カルザキア王を殺すことだけを生き続ける理由にして来たのだか  
ら。

だが、あの翠色の瞳が、すべてをあきらめ乾き切ったはずの自分  
の心に、鋭く突き刺さったまま消えない。

自分の体を望んで来た妖獣はその暗く沈む心に面白そうに囁きか  
けた。

アノ……雷獣ノ血ノ臭イヲ追ツテミヨウカ。と。

あの子供も殺してしまおう……と。

だが、目的は果たせなかった。

あの強い光の瞳をもつ少年が、自分の落としていった短剣で闇の  
妖獣を突き刺したとき。

それを別の場所から見ていた自分の目から、突然涙が堰を切った  
ように流れ出たのだ。

(もう……戻れない……どこにも、ぼくの居場所なんてない……)

ぼくは生きていたくない……)

雨に打ちひしがれたたまま、ただ歩き続ける少年の心に、ヴァルツと呼ばれた妖獣が嬉しそうに囁きかける。

デハ行コウ……エーツ山脈ヲ越エテ……我ヲ追放セシ国へ……  
報イヲ与エルタメニモ……。ソシテ……オマエヲ闇に導ク為ニ……。

少年は再びうなずいた。その瞳には空虚さだけが宿る。

少年の名はサトニ。

三年前、大虐殺が行われたシャンバリア村で、唯一生き残びた子供、いまは忘れられし名前だった。

鳥のさえずる声と、まぶしい朝の日ざし、そして火のはぜる音がルナの目を覚まさせた。

「イルダーグ……」

ルナは目覚めた場所が森の中ではないことに気づいてハツとして体を起こすとあわてて周囲を見回す。

目の前には意識を失う前とまったく違う光景があった。

ルナは小屋の中にいた。

目の前には出来合いの小さな囲炉裏があり、残り火が燃えていた。この火のそばで、一晩中眠っていたらということだけがわかる。

「目がさめたか？」

ぶつきらばうな声が背中から投げかけられ、ルナは警戒する間もなく声の方を振り返った。

そこには壁に寄りかかりつつたま腕を組んで立っている年上の姿が少年があった。

「あいにくここには着替えも、体を暖める布きれひとつない。でも雨の中、地面でずぶぬれのまま眠っちまって死んじまうよりはましだろっ」

ふてぶてしい表情をした少年は、ルナの顔をのぞき込むと少し満足そうにクルリと背を向けた。

長い琥珀色の髪を束ねた後ろ姿は、扉を開けると小屋の外に出て行ってしまふ。

「食いもんぐらいわけてやるよ。まってな」

そう言葉を残して。

少しすると少年は、木の実や肉のくんせいにしたものを両手一杯にもち抱えて戻って来た。

「おれはラクスだ。この森で一人で暮らしてる」

ルナの前に食料を広げると、遠慮せずに食べるようにすすめる。



だが、ルナは父やイルダーグのことが頭から離れず、食べる気持ちになれなかった。

そんな沈み込むルナをじっと見ていたラクスは、静かにルナにある言葉を投げかけた。

「おまえ……追われてるだろう」

反射的にルナは向かいあったラクスから、飛びのいていた。

「ぼくじゃない」

「わかってるよ」

「え……？」

意外な答えをするラクスは、さらに驚くべき言葉を放った。

「おまえ……ルナ王子か……？」

「どうして……？」

ルナは頭が混乱しはじめるのが止められなかった。

「おれは両親がいなくてさ。物心ついたときには城下で物取りをして暮らしていたんだ」

動揺するルナを知ってか知らずか、ラクスは大きく赤いブツフェの実をガブリと噛むと、むしゃむしゃと食べはじめた。

「ところがだ、アウシュダール王子がシルク・トトウ神の転身人として名乗りを上げたときから、おれらみたいな盗っ人のガキは城下にはおけないと追い出されちゃった」

今度はもう片方の手に、干した肉をもってその口で肉を食いちぎると、残った切れ端をルナに投げつける。

それを受け取ったルナは、いきなり身のうえ話をはじめたラクスに、少々毒気を抜かれてしまい、しかたなくその場に座り込んだ。

「ちょうど、お前ぐらいの時だよ」

切れ長の黒い瞳が、ニヤリと笑う。

「けど……そのころから、国は身元の明らかでないものは村にさえおいてくれなくなつた。おかげで、おれたち孤児は飢えて死ぬか、人様から食い物や金を奪ってでも生き延びるかのどちらかだ。おれはもちろん盗っ人になってやったけどな」

ラクスはガブリとブツフェの実をほお張る。

「どんなに警備の目が厳しくたって城下は商人がたくさん集まるんだ。来るなといわれても、行くにきまつてるだろう」

口の中を食べ物でいっぱいにながら、ラクスは話続け、ルナはぼかんとした表情で、その話を聞いていた。

「そのときに頭の少し変なばあさんに出会ったんだ」

ラクスが、ふと言葉をとぎらせた。

「ばあさん、自分は城勤めをしていた高い身分だ。あの城にいるのは、本当の王子じゃないって、通る人を見つけては誰かれかまわずにつかまえては話し、泣きはじめるんだ。最初はおれたちも、変なばあさんが現れたもんだと相手にしなかった。でも……」

その目がどこか遠くを見つめた。

「おれが盗みを見つかって、こてんぱんにやられてぼろ雑巾のように町外れに捨てられているのを拾ってくれたんだ。自分の家につれて帰って、養ってくれた。まあ、おれも今よりずっと小さかったから、少しばかり嬉しかったかな……」

ルナは、どう答えていいかわからずに、もらった干し肉を口にくわえる。

「でも一緒に暮らしてわかったのは、ばーさんは頭がおかしいわけでもない。ああしろこうしろ、あいさつはどうだ、作法はどうだと口はガミガミうるさくてかなわなかったけど、狂ってなんかいないかった。でも、毎日、毎日、日が暮れるまで城や城下へ出向いては、『王子を探してくれ』と泣きながら訴えていたよ」

ルナは、よく似た女性を思い出して懐かしい思いにとらわれつつたが、その瞳がしだいに真剣味をおびたものに変わっていく。

「ある日さ、いつものように出て行ったとき、帰って来なかった」  
ポツンとラクスがつぶやいた。

「セレナ……っていう名前のばーさんだった」  
ルナの顔が凍りつく。

「セレは……死んだの？」

ルナの問いに、ラクスの顔が曇る。

「帰って来なかった……あの日は、町でアウシュダール王子の誕生日祝い盛大に行われてたけど、ばあさんは、消えた王子の誕生日だから、せめて二人で祝おうって、今日はおいしいものを作ってあげるからって、そう言っただけで家を出て行ったんだ。でも……帰ってこなかった……」

ラクスはそう言うと、天井を見上げた。

「言っとくけど、おれは泣いてなんかいないからな」

鼻声まじりの声とは裏腹に、片手でこぼれそうになる涙をあわててぬぐう。

「昨日の夜、兵士がこの小屋までやってきて銀色の髪の子どもを見たら、城に突き出せって、賞金がでるって話を聞いたとき、おれはばーさんの話を思い出した。ばあさんの話はでたらめじゃなかった。銀色の髪と緑色の瞳をしたルナという王子の話は本当だったんだって、わかって嬉しかった。」

その目から涙が一筋零れ落ちる。

「ばーさんが何度も話して聞かせてくれた王子なら、父親を殺すはずがないんだ。だから、おれは夜の間、ずっとお前を捜し回っていた。ばあさんが見守ってくれているなら、望んでいるなら、もしかして見つけられるかもしれないと思って」

ラクスは赤くなった目で、ルナをにらんだ。

「いいか。おれは、ばーさんとの約束があったから、お前を見てみたかったんだ。会って見たかったんだ。べつに助けるつもりなんか、これっぽっちもないからな」

「……………」

ルナは無言のままだった。

自分を忘れないでいてくれた人が、妖獣が次々と消えていってしまふ事実、ルナは自分の存在自体を否定されているように感じはじめていた。

「もしどこかで、銀色の髪と翠の瞳をもつルナという子どもに出会

「つたら、『ディアードを探して力をかりるように伝えてほしい』と、俺にいつも言ってた」

ディアードを探して、国に戻るようにと伝えてほしい。

父の死ぬ間際の言葉が耳朶に蘇る。

(ディアード……)

ラクスが語ったセレナの話に衝撃を受け沈みかけていたルナの心に、いま再び耳にしたディアードの名が、何かを湧き上がらせようとしていた。

「だからよ」

ラクスは泣き顔をみられたことに照れるように、立ち上がるとまとも、食べかけのブツフェの実をルナに放った。

「おれはばーさんとの約束を守ったからな。お前も守れ。それだけだ」

食事のあと、ルナは自分が倒れていた場所に連れて行って欲しいと頼み、二人は森の中へ戻った。

ルナの気がかりはイルダーグのことだった。

だが、そこに大人の三倍はあるはずの巨大な妖獣の屍はどこにも見あたらない。

「おれがお前をみつけたとき、そんなものはいなかったぞ」

ラクスが下唇を突き出して、疑うようなルナの翠色の瞳をにらみかえす。

「ばーさんに誓って、獣なんていなかった」

ルナは視線を草の根元から平らに倒れている状態の草むらに移し、じっと見つめた。

その目が大きな草の葉のかげに隠されるように転がっているあるものを見つけた。

「これは……」

拾い上げたそれは、ルナの手のひらよりも大きな猛獣の牙だった。「でけえ……」

ラクスも目を丸くする。

「イルダーグの牙……」

自分の牙をもって行けとイルダーグは死に際に言い残したのだ。

ルナは、イルダーグの牙と、父から預かった指輪を身につけていた小さな布袋の中にそっとしまいこんだ。

「いろいろ、ありがとう」

ルナはラクスに向かって頭を下げた。

「礼はいいから、約束は守れよ」

最初に見たときの、ふてぶてしい表情がルナを見下ろしていた。

「おれが出来るのはここまでだ。まだ休んでいくならそれでもいいぞ」

ルナは真一文字に口を結んで、首を横に振った。

「ここで、いい」

ルナは森の外れでラクスと別れた。

次に会うことがあるのかさえ、想像もつかなかった。

けれど、ルナは一人であの山を越えねばならなかった。

高くそびえるエーツ山脈を。

アウシュダールの目をやり過ぎしてでも、テセウスに会わなくてはならなかった。

母と亡き父、世話係だった侍女長のセレナのためにも。

そしてもう一度、自分の居場所を作るために。

いまは前に進むしかない、それしかないのだと、心に言い聞かせていた。

広大な砂漠の上を乾いた音とともに風が走り抜け、細やかな金色の砂を吹き上げていく。

細やかな黄色い粒たちは、熱く輝く太陽の輝きをうけながら、海に波打つさざ波のように、時に芸術的な流砂の波紋を作り出し、神秘的なまでに美しい光景を描き出す。

しかし、ミゼア砂漠でその永久に続くような静かな時間がゆつたりと流れているのは対照的に、北に位置するリンセントートス城を中心とする城下一帯では、黄色い悪魔と口々に恐れられるようになった砂塵の暴風竜が、街全体を包み込み、人々や、農作物など、生きとし生けるものすべてを襲い続けていた。

その止むことのない砂嵐は、まるで狂気にとりつかれた獣が、狙いさだめた獲物を執念深く追い続けるにも似て、あまりに執拗であり、長すぎた。

ビアン神がお怒りになられている。

神の怒りがあったのだ。

王がハリアの王女などを側妃に娶ったからだ。

その側妃は結婚式のと、行方不明になったままとか…。

このままでは国は死んでしまう……作物も家畜も砂にやられてしまった。ダーナンもこの砂嵐が止むと同時に襲って来るといふ噂が流れておる。

はやく、ビアン神のお怒りをとかなくては……

一刻もはやく……お怒りをとくのだ。だが……。

どうやって……？

だれが……？

だれが……。

一体、だれが……。

この二年半近く、街が突然、黄砂の嵐に襲われて以来、止むこと

のない砂嵐にリンセントースの国は、まさに死に瀕した状態となっていた。

食料は、近隣諸国からの援助を受けて配給制度が設けられたが、絶対数が足りなく飢え死にするものが後を絶たない。

疫病が蔓延し、死者や病人は増え続けるのに、嵐は一向にやむ気配をみせなかった。

ビアン神への祈りも、魔道士や占者たちによる祈祷も、まったく効果はないのだ。

それどころか、砂以外に、時折大粒の小石が空から降り注ぐ日もあった。

当然、城下や街から逃げようとした人々も多い。

しかし、黄色い悪魔という異名を授かった砂嵐たちは、まるで意志をもっているかのように、街の外へと逃げ出そうとする人々の足を止めるような暴風を巻き起こし、家以外に逃れることを阻止し続けた。

それでも、奇跡的に街を離れることのできた者たちは、逃げて来たその道を、自分の故郷を振り返り見たとき、誰もが一様に戦慄を覚えたという。

まるで、夜の灯火に群がり続ける無数の虫たちのように、黄色い霧に呑み込まれているリンセントース城一帯があることに。

やがて、王命を受けた兵士たちが城下からの命がけの脱出に成功する。

ビアン神の怒りを解く唯一の方法は、神にすがるしかない。

ラシル王は手紙を託しながら、光の弱まった瞳で苦しげにそう言ったのだ。

あの王子が本当の転身人ならば、その力があるはず。それ以外に手立てはない。

王使の一行は、リンセントース最大のミゼア砂漠を目指した。

そして、さらに南下し自然の要塞エーツ山脈を越えて、その向こ

うにある小さな国に向わなくてはならなかった。

月の女神アル神の息子、シルク・トトウ神の転身人がいるという  
国へ。



テセウスとアウシュダール率いるノストールの友軍が、リンセンテートスの国境を越え、ミゼア砂漠にさしかかったころ、ノストールからの早駆けの伝令がテセウスのもとを訪れた。

「父上が……?!」

馬上で突然告げられた父の訃報に、テセウスは耳を疑った。なにかの間違いではないのだろうか？

出立前にはそんな兆候は何一つなかったはずだった。

様々な思いが頭の中をぐるぐると駆け巡る。

そして、兵から手渡されたアルクメーネからの書簡を受け取り、読み進めるうちに、その顔から血の気が引いていった。

「わかった……すぐに引き返す……」

緊張した面持ちの伝令に、テセウスは硬い表情でそう応じた。

テセウスは第一王位継承者である。

国王の身に万が一のことがあれば、なにをおいても国へ戻り、

『アルディナの指輪』を継承し、即位の儀式を行わなくてはならない。

そして、一体何が自分の出立したあとのノストールに起こっているのか確かめなくてはならなかった。

動揺を隠しながら、彼は第四王子であり、いまやシルク・トトウ神の転身人としてその力をさまざまな場面で行使しているアウシュダールに視線を送る。

自分同様、驚いているだろう弟王子を気遣って。

「アウシュダール」

声をかけると、馬上の弟王子は不審そうな表情を浮かべたまま、ノストールの方角を見つめていた。

それは驚いているというより、ノストールに起こった事態を見通そうとしている鋭い眼差しにも見える。

「アウシユダール、全軍に帰還することを伝えてくれ。リンセントスには後日使者を立てて、事情を説明しよう」

馬首を返すために手綱を引こうとしたテセスウだったが、アウシユダールの言葉に、思わずその手を止めた。

「兄上、申し訳ありません。わたしは帰れません」

「アウシユダール？」

思ってもいない言葉に、テセウスは驚いて弟王子を見た。

利発で大人以上に物事をわきまえ、国を守って来たシルク・トトウ神の転身人。

ノストールの守護神アル神の唯一の息子。

そのアウシユダールの言葉とは思えない発言だった。

「兄上……。父上が亡くなられたのはわたしの責任です。わたしの不在中、アルティナ城には不審の輩を遠ざけ、城には侵入できない為の万全の結界を張り巡らせました。その城で、父上を死から守ることができなかったのは……。このアウシユダールの責任です……」

アウシユダールは肩を落として、テセウスに深く頭を下げた。

「アウシユダール……」

「ですから……。兄上」

弟王子は顔を上げ、静かに兄を見つめた。

「兄上は国へお戻りください。わたしは一人でリンセントスへ行き、ビアン神と言葉を交わし、神の怒りを解いてまいります」

「アウシユダール？」

何を言っているのだろう……。

テセウスの心に疑問があふれていく。

（父上が亡くなられたと聞けば、誰よりも早くおそばに駆けつけようとする子なのに……）

「テセウス兄上」

まるでテセウスの心を知っているように、アウシユダールは兄の名を呼ぶ。

その声に、アウシユダールと瞳を合わせた瞬間、テセウス視線は

その目に絡みとられた。

自分の心はその瞳に吸い込まれ、包み込まれ、そして麻痺していくような感覚。

それは自分の神の力　なのだと、アウシユダールの瞳は告げる。『兄上に必要なのは、エーツ山脈を越え、歩んできたこの道を引き返すことなく突き進む意志です。我等に引き返す道はないのです。目的を果たすために今、わたしたちはここにいるのです』

テセウスはその瞳を見つめ、その力強い瞳の光と出会った際に、巨大な力が自分の中に宿り、強靱な意志が自分に宿るのを驚愕の思いで受け止めてきた。

その一方で、何かを失っていく喪失感をぼんやりと感じてもいた。離すまいと握り締めていたものが、目覚めると実は夢の中のもので、現実には手の中にはなにもない時のように。

夢の中の出来事だったのだと言いきかせるたびに、手の平の感触は現実味を帯びていき、ふいに見えない不安が襲いかかってくる時のように。

どちらが現実で、どちらが夢なのか、いても立ってもいられない焦燥感だけが取り残される。

今もまたその感覚がテセウスを襲っていた。

「……………」  
自分が今なにを何を決断したのか、何をしようとしていたのか、突然思い出せなくなっていたのだ。

引き返そう！

テセウスは、エーツ山脈のどこかでそう告げる自分の悲鳴に近い声を遠くに聞いた。

このまま、先に進むことは出来ない。引き返す！

エーツ山脈の山中で、テセウスは何度もそう繰り返して叫び、そう主張し、行動しようとしていたのではなかっただろうか、と。

だが、それは夢の中で見た奇妙な出来事なのかと思いついて、本当に引き返そうと決断をしたのなら、そうするだけの原因が当

然あるはずだった。

あるならば、山を越え、国境を越えてこの場所に立っていることはありえない。

どれほど考えてみても、途中で目的を果たさずに国に引き返すほどの重大な事件や事故はなかったはずだ。

ノストールを出て以来、一人のけが人もなく順調にここまで来たのだ。

けれどテセウスは、自分がとんでもない大きな過ちを失念しているように思われてしかたがないのだ。

「テセウス兄上」

テセウスが疑問をもち不安にさいなまれるたびに、アウシュダールは優しく兄の瞳をのぞき込んだ。

「兄上は、なにもご心配などされなくていいのですよ。」

琥珀色の大きな瞳がテセウスをとらえる。

「兄上のご決断には、今までも、これからも微塵の過ちなどございません」

そして、アウシュダールは左胸の少し上に自分の右手をあてる。

そこは、アル神の息子である証の三日月のアザがある場所だった。

「私がそばにいます」

アウシュダールの言葉は、テセウスの中で大きな支えとして染み込んでいく。。

自分に前へ、前へと進む力を与え、押し出していく力を与えてくれる存在。

だが、同時に、大きな両手の中につつまれ、周囲を見ることもできぬまま、見知らぬどこかへと運ばれて行く無力な自分がいるような錯覚に襲われる。

どちらが夢で、どちらが現実なのか、一瞬顔をのぞかせる疑問もアウシュダールの言葉に消え去っていく

なぜ、自分はあらがわないのだろう……。

どこかで執拗に自分の声が問いかける。

「兄上、テセウス兄上」

しかしその声は、アウシユダールに名を呼ばれて、再び消えた。

次に訪れるのはアウシユダールのまだ幼い声だけ。頭の芯から全身へと広がる心地よいしびれがテセウスを支配していく。

あらがう必要がなど何もないではないか。

アウシユダールの瞳、言葉は、やがてテセウス自身のものとして浸透し、意識の変化を遂げていった。

アウシュダールは、テセウスと側近の將軍らを見渡した。

「このままではリンセントートスは、砂嵐とダーナンに滅ぼされる。ダーナン帝国は、リンセントートスが砂嵐に襲われ、国としての力が奪われていくのを、いまは何もせずに見ている。けれど砂嵐が止んだとき、ダーナンはその刃をリンセントートスの咽元に突きつけることは明らか。我々が救う国は、今すべてを砂塵に覆われ、外では口を覆うものがなければ、息さえできない死の空間と変じている。鳥たちは飛ぶ空を奪われ、口にするべき虫も獲られず、死の骸となつて砂の大地にその姿をさらしているのが私には見える」

少年特有の少し高い声は凜と響き渡り、あふれるほどの説得力をもち、兵士達の心をとらえていく。

「民も同じだ。ただ、閉ざされた建物の中で、死の恐怖におびえ、神に祈りをささげ続けている。病人を励まし続けながら、死者の骸をかき抱きながら、死に行く自分の姿を横たえながら……。だが、祈る人々の声はビアン神には届くことはない……」

アウシュダールの神の子としての言葉が厳しく、そしてひととき大きくなる。

「なぜなら、リンセントートスを守護すべきビアン神こそが、彼らを恐怖に陥れる荒ぶる神と変じたからだ。ビアンは、怒りの原因となった者が恐怖の中で死を迎えるまで、暴れ続けるだろう。いや、怒りで染まった神は、やがて自分でもその怒りを制御することすらできず暴走し、歯止めの効かない存在、他の諸国をも恐怖におとし入れる悪神へと変じる」

アル神の息子、シルク・トトウ神の転身人の琥珀色の瞳は、まだ見ぬ未来を見ているようにリンセントートスの方角を怒りを持って見つめていた。

「神の怒りは人の祈りでは止められはしない。なぜなら、人が神を

裏切ったからだ」

数百人のノストールの兵士の目がアウシュダールを見つめ、その声だけをわが心として受け入れていく。

「リンセンタートスを、そしてラーサイル大陸の諸国を、ピアンの怒りの嵐から守り、くい止められるのはアル神の子である私しかない。われわれノストール王国、ラウ王家においては存在しないのだ」

大声で叫ぶわけでも、声高に訴えるわけでもないアウシュダールの澄んだ声が心の中に響き染み込んでいた。

遠く離れた場所にいる兵士たちまでも、その声は一人ひとりに一言一句漏れることなく届いた。

見えないはずの馬上のアウシュダールの姿が眼前にあるものように大きくくつきりと映し出され、その存在に陶醉しきった視線を向けてる。

アウシュダールの語る言葉こそが神の言葉であった。

同時に、それはまさに自分自身の考えていたことなのだ、と誰もが思い込んでいた。

そうだ。リンセンタートスを救えるのは、神の子を王子にもつ我々だけなのだ。

アウシュダール殿下はノストールをダーナンから救ってくださった。ダーナンを追い払えるのはアウシュダール殿下をおいてほかにいるものか

神の怒りを解くのは、神以外にはいない。

我々にはアル神の御子がいる。シルク・トトウ神の転身人がピアン神からラーサイル大陸を救うのだ。

自分の意識が操られていることを、一人として感じる者はいなかった。

アウシュダールの言葉は、そのすべてが自分の思いと同じであり、それこそが真実だと彼らは信じていた。

「父上は……我らが王、カルザキア陛下は……」

兵士達の陶醉しきつた表情を冷静に見つめながら、アウシュダールは耳に心地よい声で語り続ける。

「たとえ自分の身に万が一のことがあるうとも、かの国を見殺しにすることなど望んではおられません。我が転生の母アル神もそれを望んではおられません。父上の子としても……アル神の息子シルクトトウの身としても、砂塵に埋もれたまま死を待っている国を、ピアン神の怒りの嵐に巻き込まれ助けを求めている民を、見殺しになどどうしてできるだろうか」

アウシュダールはそう言うと、自分を見つめている馬上のテセウスにゆっくりと琥珀色の瞳を向けた。

テセウスの瞳は、アウシュダールだけに注がれていた。

「国を破壊へと導くピアン神を放つてはおけません……。このまま引き返せば、父上もなぜ帰って来たとお叱りになるはずです。兄上も……本当は引き返すべきではないと、そう思われていたのではありません?」

瞳の奥の光が妖しげに輝いた。

「ああ……そう……思っていた……」

そう言葉にした瞬間、テセウスはまさにその言葉こそが自分の真実の言葉なのだと思った。

「兄上、リンセンテートスへ私とともに参りましょう。我々の目的はリンセンテートスへ行くことです」

そう、目的はリンセンテートス。

テセウスは重荷のひとつが心の中から消えていくような感覚に包まれる。

しかも、初めてではない感覚だった。

「陛下の……ノストール国王、父の遺志を受け、私とアウシュダール、われらはこのままリンセンテートスへと進む」

テセウスの言葉に、アウシュダールの口元に笑みがこぼれた。

瞳には強い光が満ちあふれ、満足そうな大人びた表情が一瞬横切る。



それは、一種異様な光景だった。

だが、気づくものはいない。

だれもが己の心に純粹に従っているのだと信じていた。

ただ一人を除いて。

アウシュダールは、ノストールの方角を仰ぎ見、何者かに語りかけるようにつぶやいた。

「もちろんカルザキア王を殺した者は許してはおかない。私の結界を破り、私の国に土足で踏み入り、汚す者など……見過ごすわけにはいかない……」

そして何かを思い出したように、幼い顔に不釣り合いな妖しい笑みを浮かべた。

「それが何者のもも容赦はしない。奈落の底に突き落とす。そのほうが気分がいいからな……」

だれもその表情に気づく者はいない。

アウシュダールの微笑みは、畏敬する神の御子の神々しくも魅力的な微笑としか映らなかつたからだ。

エーツ山脈を見ながらルナは育った。

ノストールのアルティナ城にいる時には、あの山の上に立つと何が見えるのだろうか、山の向こう側には何があるのだろうか、子供らしい空想に心を沸き立たせた。

海賊たちの住処であるハーフノーム島に身を移してからは、故郷の場所を唯一示すエーツの山々の頂を見つめながら、ルナは成長してきた。

けれど、そのエーツ山脈の尾根を越える自分の姿を考えたことは、一度もなかった。

この指輪を、おまえの手から、直接テセウスに渡してくれ。即位の証しの指輪を……。

それはリンセントートスへ向かった兄を追い、一刻も早く指輪を渡すこと、すなわちエーツ山脈を越えることを意味した。

父の死際に交わした、いくつかの約束は、ルナに目的を与えたが、同時に大きな不安を背負うことでもあった。

自分はカルザキア王殺しの人間として国中から追われている。

ルナは父上を殺してなんかいない。

大勢の人の前で大きな声でそう叫びたかった。

だが、そうすれば捕らえられ、アウシュダールに自分が生きていたことを知られてしまう。

そうなれば、アウシュダールは絶対に兄たちには会わせてはくれないだろう。

今度こそ、殺されてしまうことをルナは嫌と言うほどわかっていた。

何も悪いことをしていないのに、父の死が悲しいのは、悔しいのは自分なのに、無実を叫ぶことさえ許されない。

人目を避けなるために、森林や自分よりも背の高い草むらを選び、

その中をかきわけて、ただ前へ前へと歩き続けている自分がひどく悲しかった。

あいつが父上を殺したんだ。

ルナの脳裏に、城でぶつかつた少年の驚いた顔がよみがえる。

絶対に許さない。絶対に……。

ルナは怒りと悲しみと涙を胸にあふれさせながら、エーツ山脈へと続く道なき道を歩き続けた。

意識を失い倒れていた自分を助けてくれた山小屋のラクスと別れてから丸二日、ルナはエーツ山脈へ入るための国境への外門をめざし、寝ることさえ忘れて歩き続けた。

しかし、どれほど歩き続けても最後の村となるシャンバリア村はまだ見えて来ない。

山は徐々に近づいてくるのに、村の姿は現れないのだ。

ルナは足を引きずりながらも、歩き続けた。

その足は、すでに草の葉で切り傷だらけとなり、船乗りの履く布製の簡易靴は擦り切れ、足にまとわりついていたボロボロの布きれにしかみえない。足の裏は赤く腫れ上がり、マメはつぶれて血がにじみ、赤く染まっていた。

いまにも倒れそうな体を支え、地面を一步、そして一步と歩き続ける。

足が休ませてくれと悲鳴を上げた。

気が遠くなるほどの疲労と痛み、痺れがその一步ごとに襲いかかる。

「父上……」

ルナの緑の瞳は虚ろで、生気は失われていた。

激痛に耐えながら、気力だけでエーツ山脈を目指し、歩き続けるその痛々しい姿は、まるでエーツ山脈そのものが、意志をもって幼い体を引き寄せているようにさえみえる。

だが、それにも限界はあった。

おい、ルナ一人でどこへ行くんだよ。  
意識が遠のく中で、ルナはクロトの声を聞いた。

兄上……。  
顔を上げると、そこにクロトの笑顔があった。

あまり遠くへ行くと父上からまた大目玉をくらうぞ。ほら、兄上も心配して迎えに来た。

クロトが、エーツ山脈の方から笑顔で歩いてくるテセウスとアルクメーネを指さす。

テセウス兄上、アルクメーネ兄上も……。

二人はルナの前までくると、その銀色の髪をクシヤリとかきませ、頬にやさしく触れた。

出て行っただけ帰って来ないから、心配したんですよ。

アルクメーネがほほ笑む。

一人でよく頑張ったね。さあ、帰ろう。

テセウスがルナを抱き上げると、いつのまにかクロトがまたがっている守護妖獣、黒馬のダイキの背にルナをそっと乗せた。その両脇にテセウスとアルクメーネの馬も並ぶ。

父上も、母上も、おチビの帰りが遅いとお待ちになられてるんですよ。

アルクメーネの言葉にクロトが不満げに声を上げる。

おれのおときは心配しないのになあ……。

軽やかに三頭の馬の蹄が鳴り響く。

テセウスはクロトの言葉を耳にして、わざと大きな声で、アルクメーネに話かける。

そんなことはないよな。クロトの身がとーっても心配だから、朝昼晩と優秀な家庭教師たちに護衛をさせてあげているんじゃないか。

そうですね。ご不満ですか？

ちえーっ！

クロトが言うと、テセウスとアルクメーネが明るい笑い声を上げ

た。やがてクロトも笑いだし、三人の兄たちに囲まれたルナも笑っていた。

馬の蹄の音の響く中で、ルナはただ無邪気に笑っていた。

なんだかとても幸せで、ルナは兄王子たちの笑い声に囲まれて、笑っていた。

「ジーン！ しっかりしてよ、ジーン……」  
誰かが呼んでいた。

夢……だったのだと、意識の遙か彼方で、もう一つの名前が悲しげにそう告げる。

「ジーン！」

気がつくのと、ルナは口元に注がれる冷たい水を呑んでいた。

何が起きているのかわからなかったが、ただ、カラカラに乾き切っていたルナの喉は、与えられた水を一気に呑み干していった。

熱をもった体が、染み渡る水の冷たさに少しだけほてりを静めていく。

水をすべて呑み終わると、ルナは大きく息を吐き出し力無く重いまぶたをゆつくりと開いた。

「ジーン？ 大丈夫かい？」

そこには、心配そうにのぞき込むネイの顔があった。

「ネイ……？」

ルナは自分が歩き続けたことを思い出す。

エーツ山脈を越え、兄テセウスにあって指輪を渡さなくてはいけないのだ。

ハツとして肩から下げていたはずの袋のある場所を手で探る。

父から渡された アルデイナの指輪 の金の指輪を布で包んでいてあったのだ。

自分の指にはめるにはまだ大きすぎる指輪。あとで何があっても失くさないように身に着けなければいけないと思っていたが、それを考える余裕はなかった。

それに気づいたネイが、ルナの傍らにおいて置いた袋を持ち上げて見せた。

「大丈夫。みんながくれた金貨はちゃんとここにあるよ」

ルナは手をのばして、中の物をまさぐると、安心したように大きく息を吐いた。

そして、思い出したようにつぶやく。

「歩く……」

だが、上半身を起こそうとしたその瞬間、ルナの全身が悲鳴を上げた。

腫れ上がった皮膚が、化膿した傷口が、筋肉が、腰が、腕が、背中が、足が、火がついたように痛みを訴え出したのだ。

あまりの激痛にルナの顔がこわばる。

喉まで押し寄せた叫びを、奥歯をかみしめたが代りにうめき声もれた。

「お前さあ……なんで山になんかに向かっているんだ？ おかげで、さんざん探したぞ。見当違いの場所ばかりな」

ルナは声の方を振り向く。

海賊仲間のロッシユの姿があった。

怒っているようにも、呆れているようにも見える顔。

その顔を見て、ルナは荒い息をしながらあきらめたように仰向けに倒れた。

「……………」

ルナはこの瞬間まですっかり忘れていたことを思い出した。

ロッシユとネイの二人に、何もつげずに村長の家を抜け出してきたことを。

「ごめん……」

しぼり出した声はかすれて、まるで自分の声ではないようだった。声だけではない、今は、全身のあらゆる部分が自分のものではないもののように、言うことをきいてくれなかった。

「お前、城にもぐりこんだらう？ どこへ行っても、銀髪の子供が王を刺したって大騒ぎになってるぞ。兵士は血眼になって町や村を捜し回っているしな。俺らはつきり、お前はグート船のある場所に戻ったとばかり思っていたんだが、港に戻った様子もない。し

かたないから、村から馬を拝借してあつちこつち探し回ってたら、その村外れの草むらで倒れたままピクリとも動かないおまえを発見したわけだ」

ロツシュの言葉に、ルナは父カルザギア王を殺した少年の顔、そして突如襲いかかって来たあの黒い生き物のことを思い出した。

もし倒れているところを襲われたなら、殺されていたかもしれない。

背筋にゾクリと悪寒が走った。

「でもさ、よかったよ。倒れているゾーンを見つけたときはもうだめなのかと思つたからね」

ネイが胸に手をあてて、大きく深呼吸をする。

「とりあえず、今日はこのままここで野宿だ」

ロツシュの声にあらためて辺りをみると、暗い森の木々の間からのぞく空はすでに夕暮れ色に染まっていた。

うつそうとした木々と草が覆い茂り、少なくとも人が近づいてくるような雰囲気はない場所のようだった。

パチパチと木のはぜる音が聞こえる。

焚火の音だ。

時折、枝をくべる音、人の歩き回る音が、ルナの視界からは見えない場所で聞こえていた。

この数日間は、ハーフォームでも味わったことがないほどの、長く長く果てしなく辛い時間だった。

一人きりで、自分を捕らえようと追う人々の影におびえ、いつ襲ってくるかもしれないイルダークを襲ったあの黒い影を恐れ、逃げ続けた。

いままで眠ることなく歩き続けることが出来たのは、張り詰めた神経が、眠ることを許さなかったからかもしれない。

限界が訪れるまでは。

いまルナは仲間がそばにいますというだけで、心から安心することができた。



しばらくすると動けない体が、再び熱をもちほてりはじめた。全身に走る痛みを我慢しながら横わっている、ルナはふとイリアを思い出した。

竜巻に襲われ、海に漂っていたルナを助け、高熱でうなされ眠り続けていた間、そばに付き添い自分を看てくれたイリアの温かなまなざし。

「ジーン。良くなるのよ、かあさんがついているからね。黒く美しい瞳が、いつもルナを見つめていてくれた。

だが、そのイリアは死に、父カルザキア王も死んだ。

「ジーン、あんた本当に王様を殺しちゃったのかい？」

唐突な、そして簡単明瞭なネイの問いかけに、ルナは堅く口を結んだまま、大きな緑色の瞳で抗議するように首を横に振った。

「違うの？」

ネイは声を上げて、ロツシュの方を振り向いた。

「ロツシュ、やっぱりあんたの言ってたとおり、ジーンじゃないって！ ジーンはやってないって！ え？ あれ……じゃあ、なんでジーンは逃げてるのさ？」

ネイが混乱したように、ルナの顔と、ロツシュを交互に見ながら視線をさまよわせる。

説明する気力が今はなかった。

「ジーンは海賊とラウ王家が交わした海賊協定状を盗むために城に忍び込んだ。自分のことは自分で始末をつきたいガキだからな。ところが、運悪くその時にカルザキア王が殺された。偶然ジーンの様子を見た奴が犯人だと思ひ込んだ、ってなところだろう、そのあたりの詳細は、食いながらも聞かせてもらおうとするか」

足音が近づいてくると、ルナの体がふわりと地面から浮き上がった。

ルナは、自分をひよいと抱き上げた人物と視線をあわせると、ロツシュが「おう」と片目をとじてうなづく。

「海から背を向けたって言うことは、協定状の奪取はできなかった

「んだろっ」

精悍な顔立ちに力強い瞳に笑みを浮かべ、口元の口角が片方だけ上がる。

焚き火のそばに集めたやわらかな干し草の山を背もたれにするように、ルナの体を座らせる。

ロツシュがルナのために、村の馬小屋から拝借して来た草をかき集めてつくったのだ。

「寝るときは頭の上からどかーんと草を山ほどかぶせてやるよ。いい隠れ場所にもなるだろう」

「ありがとう」

二人はルナがハーフォームの海賊島に戻るために城に侵入し、協定状を盗もうとしたと信じている。

そのために頭のジルに無断でルナと行動を共にしてくれたのだ。

その二人に黙って消え、勝手な行動をしたにもかかわらず聞いただそうとしない二人にルナはそれしか言えなかった。

「最初にあんたを見つけたのはあたしなんだよ。もう少し見つけるのが遅かったら、本当に城の兵士たちに見つかるどころだったんだよ」

ネイが、自分のお手柄だと言わんばかりに、自慢をしてみせる。

「うん……」

ルナは焚き火の炎を見つめながら、記憶を辿る。。

どこで倒れたのか、途中からの記憶がなかった。

ただ、ほんの一瞬訪れた夢の中の自分は、とても幸せだったような気がするだけだった。

ルナは、ネイとロツシュに倒れているところを見つけられてから二日の間は、森の中から一步も出ることのないまま過ごした。

疲労で起きれなくなった体が回復するのを待ち続けたのだ。

「エーツ山脈を越えようっていう奴が、何の用意もないまま、その使いもんにならない体を引きづって歩いてみる。ボロボロの帆すら張つてない穴のあいたグート船で大海を航行するようなもんだ。一発である世行きだ。無謀以外のなにもんでもないぞ」

ロツシュの言葉に、ルナは黙ったまま静かにうなずくしかなかった。

リンセンテートスに向かったテセウス皇太子の軍に、兄がいるかもしれない。王を殺した犯人と間違われた自分の無実を晴らすには兄に助けてもらおうしかない。

ルナは山を越え、ノストール軍を追う理由をそう説明した。

ダーナンと戦さになることもあるかもしれないって、城で兵士が話してるのを聞いた。兄の身に何かあつたら自分の無実は証明できなくなる。だから、すぐに後を追いたい……と。

ネイとロツシュはルナの言葉に、それならばなお、体力が回復するまで動かないよう寝ているようにとルナを諭した。

そしてロツシュたちは、その間にいろいろと山越えの準備を整えくれたのだ。

「結局、海賊協定状を盗む作戦は当分無理になっちまったし、お前が兄貴をさがす旅に出るのを止める理由はない。でもよ、別にこっちからあわてて行かなくても、国王が死んだとなれば、世継ぎの皇太子は速効で引き返してくるんじゃないのか」

ロツシュのその言葉にルナは、緑色の瞳を丸くした。

ロツシュの言うとおりならば、ルナはノストールで待っていれば兄に会えるはずだった。

そして体調が回復する間、三人は、ひたすら皇太子帰還の報を待ち続けた。

しかし、ネイが町や村の兵士たちや村人たちからその話を聞き出そうとしても、人々は戸惑ったように黙り込み、表情を曇らせた。

カルザキア王の逝去後、瑞獣は現れず、新王となるべきテセウス皇太子は帰還しない。

しかも、王崩御をテセウスに知らせるために後を追った早駆けの兵さえ帰って来ないのだ。

城下はもちろん、町では人々が皇太子テセウスやアウシユダールの身に何かが起きたのではないかという不吉な噂が流れ始めていた。

王の葬儀は、皇太子がいなくては執り行えない。

即位の式もまた、テセウス本人がいなくては執り行えない。

ひと月をおいて、なお皇太子の行方がわからない場合は、第二王子であるアルクメーネ王子が、その代行にあたることになる。

そして、その後も皇太子の行方が不明のまま、一年が過ぎた場合、アルクメーネが即位の式に臨むことになるのだ。

たとえ第一王子が帰還したとしても、新王がその座から降りなければ王位は変更されない。

ノストール王国ラウ王家の『王訓書』には厳しくそう説かれていた。

『民あつての王あるが故に、王不在にて民の不安まねくは、非情の罪なり。』

ラウ王家の祖始ラウ一世の残した『王訓書』に記された一節である。

アルティナ城で暮らしていた頃、ルナはその『王訓書』を見たことがあつた。

城の図書室で『王訓書』を読んでいるアルクメーネをみつけて、何を読んでいるのかお話してほしいとせがんだのだ。

アルクメーネはよくいろいろな本をルナに読み聞かせてくれた。

アルクメーネは、四方の壁一面に隙間もなく本が詰め込まれている空気が好きだと言って、よくここで時間をすごしていた。

二番目の兄は微笑みながらも真剣なまなざしで、内容の一部をわかりやすくルナに話してくれた。

この意味はね、『王はいつでも、どこにいても、みんなにわかるように自分のいる場所を知らせていなければいけません』ということなんですよ。たとえ、よその国に行くときでも、みんなを心配にさせてはいけません、王がどこに行ってしまったかだれにもわからなくなつて、民に心配をかけてはいけません、という意味です。父上や母上がわたしたちに黙つて、どこかへ行つてしまつたら困つてしまつてしょう。

うん……。

ルナは素直にうなずいた。

それと同じように、民の不安を招くものは、王の資格に欠けるということが書かれているんです。

ふーん……。

わたしたちの祖始である、ラウ一世が書き現して下さつたこの『王訓書』があるおかげで、小国であるノストールは永い間、他国

の侵略から国を守り、王家の存続をかなえていつているのですよ。

じゃあ、ルナはこのご本をちゃんと守ります

ルナは、アルクメーネのかたわらで心地良さそうにくつろいでいる兄の守護妖獣に、まじめな顔をして宣言した。

守護妖獣カイチ。

金色に輝く長い体毛、大男ほどの大きさ、そして角を除けば、その姿形は山羊に似ていた。

しかし、一本しかないその角はまさに一角獣の種族であることを示す証しだった。

どれほどの偉大なる書も、また幼子の落書きの書も、ただ書棚に収まっている限りでは、路傍の石と同じこと。読む人間の心ひとつで、難しくも、また楽しくもあるものです。

うーん……。

ルナは小首をかしげた。

カイチはどんなときであっても、静かに淡々とした態度で接した。ただ、ルナに語る時も、大人に語りかけように話すので、難しい言葉や言い回しが多く、ルナは困ると上目づかいで兄に助けをもとめた。

アルクメーネがその様子にすぐ気づくと、ルナの銀色の髪をくしやりとなでた。

ルナももう少し大きくなれば『王訓書』のお勉強を始められますよ。この本には、どうして王家があるのか。なんのために王がいるのか。そして、なにをしていくことが国にとって一番大切なことなのかを……わたしたちに教えてくださっているのですよ。ルナはかしこいから、すぐに読めるようになりますよ。

笑う兄と、すました顔のカイチを交互に見てもう一度、小首をかしげた後、ルナは再び兄の手の中にある『王訓書』に視線を戻す。

ね、兄上、ここ破ったの？

ルナはパラパラと『王訓書』をめくる兄の手を止めて、不思議そうにたずねた。

どうしちゃったの？

ルナが見つけたのは、一枚だけ破り取られたページのあとだった。どうして、ここ、ないの？

ルナに指摘されて、真剣にうなずいたアルクメーネの瞳をルナはよく覚えていた。

わたしもここを見つけて、父上に聞いたことがあるんです。でも、父上が子供の時にこの本を見たときには、もうこのページはなかったと言われていました。なにが書かれていたのでしょうかね。

ルナの忘れていた記憶がよみがえる。

「民ありて王あるが故に、王不在にて民の不安まねくは、非情の罪なり……」

ルナは、わけもわからず覚えた言葉を口の中でゆっくりとつぶやいた。

もしも、一月以内にテセウスが帰還しなければ、さらに一年を過ぎても行方がわからなければ……行方がよとして知れない時は、新王の座にはアルクメーネが就く。王の亡き後の後継者の不在は、それ自体が不吉な暗示を予感させる。

しかし、いまのルナにとって大切な問題は、テセウスの身になにかが起きているのではないかということだった。

兄上は、すぐに帰って来られる。帰って来ないはずがない……。だって……。

ルナの脳裏に、竜巻さえ起こすという噂の王子、ルナのいるべき場所にいるアウシユダールの影がよぎる。

あいつが、何者かわからないけど本当にすごい力をもっているなら、どこにいても日が暮れないうちにノストールに帰って来れる。兄上だって守護妖獣のザークスがいるんだから……。

守護妖獣。

だが、ルナの守護妖獣リユーザはルナのそばから消え、父の妖獣イルダーグは死んでしまった。

守護妖獣とて、無敵ではないことをルナ自身がよく知っていた。そう思うと、嫌な予感だけがジワジワとはい上がってくるようで、ルナは身をすくませる。

さらにマーキツシユの村で村長の言葉を聞いたときの、底冷えのする感覚がよみがえってくる。

なんでも、アウシュダール様と同じ年の男の子らには、アル神のお力が注がれているといわれてのう。ビアン神とお言葉を交わすためにも、その子たちの力がどうしても必要じゃと、その子らをリンセンテートスへ赴く特別軍に加えられたんじゃ。

ルナは、心のどこかで悲鳴を聞いたような気がした。

どれほど、耳をふさいでも、決して消えることがない、ルナの心をかき乱し続ける恐ろしい悲鳴を。

どうして、悲しいことばかりが起きるのか。どうして大好きな父や母、兄たちと一緒にいることができないのか。まだ幼い心は、頼もしくやさしい兄のテセウスが、父のようになってしまったら……という、拭うことのない恐怖心で覆われはじめていた。

待っていたら、兄上にお会い出来なくなるかもしれない。

ルナは、待つのをやめた。

エーツ山脈を越えることを決めたのだ。

「行く……」

ルナの決して揺れることのない翠の瞳が真っすぐにロツシユとネイを見つめた。

「ここからは、一人で行く……」



一人で行くという、言葉をルナの口から改めて聞いたロツシュとネイは、引き留めはしなかった。

そのかわりに、エーツ山脈への外門までは、絶対に見送ると言い張ったのだ。

ネイとロツシュと再会してから三日後、ルナはシャンバリア村を越え、いまエーツ山脈へと行くための外門近くの林の中に潜んでいた。

そして、「その時」が来るのを息を殺して待っていた。

ルナのそばではネイが馬をなだめながら、付近の様子を鋭い瞳でうかがっている。

暗かった空が、陽が昇りはじめると徐々に青い光であふれていく。雲一つない青い空が、今日という日のはじまりをつける。

「もう少しだ……」

ネイが自らを励ますようにささやいた。

陽が完全に昇りきったそのときが、門を守る兵士たちの交替の時だった。

待ち切れずに、ルナが腰を浮かせた、そのとき。

「いたぞ！ 銀色の髪の子供だ！！ 陛下を襲った子供がいたぞ！」  
耳に飛び込んできた叫び声に、ルナとネイが顔を見合わせる。

「捕らえる！ 絶対に逃がすなー！」

外門を警護する兵士たちの様子がたちまち殺気立った。

次々と怒号が上がり、馬のいななきと、蹄の音が辺りに響き始める。

「ジーン……」

硬い表情のネイが、ルナの肩に手をおきつなずく。

「見つかった……」

「銀色の髪の子どもがいたぞ　！　陛下を襲ったふとどき者だ！」  
門を警護する兵士たちは、声の導く方へ走りだした。  
ルナとネイの隠れる森とは、反対の方角へ。

「うまい具合に、見つかったくれたね」

ネイが瞳を輝かせて、馬の背にルナを乗せる。

それはロツシュが仕掛けたオトリ作戦だった。

ロツシュは外門の警護兵たちすべてを、門のそばから引き離すため、ルナと同じ体格の子どもに金を与えて、銀に染めた布を頭にかぶらせ、門の兵士たちからやや離れた場所を見つかるように走らせたのだ。

あとは『銀色の髪の子どもがいる』と叫び、兵士たちの注意を子どもに集めて、追わせればよかった。兵士たちが、持ち場を離れるのを確認してから、ロツシュはルナ役の子どもを逃がせばいい手筈になっていた。

「ロツシュが時間を稼いでくれている間に、行こう」

ネイは、ルナの後ろに飛び乗ると馬の横腹をかかどで強く蹴った。

「門のところまで、いい。あとは一人で行く」

ルナが念を押すように言う。

「わかつてるって」

二人を乗せた馬は、ものすごい勢いで森の中から飛び出した。

一路、無人となった外門めがけて突き進む。

ノストールを出るための門がルナの目に近づいてきた。

リンセンタートスとノストールの間に横たわるエーツ山脈、自然の国境。

その山を越えるための、いまは故郷を出るための扉。

父から預かった即位の証しである『アルディナの指輪』を兄に渡すために、ルナはこの扉をくぐり抜けなければいけなかった。

「ジーン、門をあけるよ」

ネイが馬から飛び降り、門の大きなカンヌキを外していく。

「ジーン！」

ネイが呼びかける。

だがルナは後ろ髪をひかれるように、ここからでは見ることもさえ出来ないアルティナ城を見ようとするとその視線をさまよわせる。

母上……。

ルナの耳には、ネイの声も、門の異変に気づいて引き返して来ようとする兵士たちの叫び声も、なにも聞こえていなかった。

母上。ルナはテセウス兄上と一緒に、必ず母上のところに戻って来ます。帰ったら、もう母上のそばから離れません……。

城での、つかの間の母との再会。

父との死別。

ルナは、身につけている肩から下げた袋の紐を堅く握りしめた。

きっとテセウス兄上だって、ルナのことを覚えていてくださる。忘れるなんてわけない。

キュツと口を結ぶと、ルナは前方を向いた。

門が開かれていた。

馬一頭が通れるほどのわずかな隙間がルナに何かを語りかけるように、その口を開いていた。

行つてきます。

ルナが力を込めて馬の手綱を引こうとした瞬間、背後から誰かが馬に飛び乗った。

ルナがギョツとして振り返る。

「行くよ！」

ネイだった。

ネイが、ルナの手から手綱を奪い取ると、片方の手で、きつい鞭を馬の尻に打ち込んだ。

「だめだ！」

ルナは、叫んだ。

ネイがこうした行動をとるとは、ルナは考えてもいなかった。

驚きでどうしたらよいのかわからないまま、ルナは同じ言葉を繰り返すしかなかった。

「だめだ！ 帰ってよ！」

肩越しにネイを振り返っては、そう叫ぶ。

「ネイ、一緒に来たらだめだ！ 戻って！」

振り返り叫んだルナの目に、門破りをした自分たちに気づいて追って来る兵士たちの姿が見えた。

「ネイ！」

「あなたさ、いまここであたしが引きかえしたら、どうなると思う？ 確実にあなたを脱走させた共犯で捕まっちゃうんだよ。それでも、帰れって？」

そう言われて、ルナは言葉を失った。

ネイのいう言葉は正しかった。

国境の門を破る。王を襲った人間を逃がす。

それに協力した人間がどうなるか、ルナはこの瞬間まで考えたことがなかった。

ただ、テセウスに会わなくては、という一心で、門を目指してここまで来たのだ。

「でも……」

「ほら、喋ると舌かむ」

ネイは珍しく感情を見せない声で、だが手綱さばきだけは海賊暮らしの島の中で身につけた荒々しさで、茂みの中に入り込み、小川や崖を次々と飛び越え、追っ手をぐんぐんと引き離していく。

その間、ルナは馬の首に必死にしがみつinaながら、ネイの言葉を繰り返し繰り返し考えていた。

そして、自分のためにオトリになってくれた子どもとロツシュたちが、兵士たちに追われて行く姿を思い出す。

捕まっていたらどうしよう。ルナのせいで死んじゃったら……殺されてたら……。

心の不安をルナは声にした。

「ロツシュたちは、捕まったら殺されるの？」

ネイに何度もそう問いかけた。

だが、彼女はルナの問いに答えることもなく、ただひたすら前方だけを見つめて馬を走らせ続ける。

雪を頂くエーツ山脈のふもとの斜面はゆるやかで、外門付近はまだしばらくは馬で走り続けられそうだった。

青々とした木々も多く茂り、その険しさは感じることもさえできない。

どれほどの時間が過ぎたのか、馬の走りが快走からゆったりとして歩調にかわったのは、陽がすっかり上りきり、空が眩しいほど明るくなったころだった。

ネイは、比較的背の低い草が茂る森の中を馬を走らせ、小川の流れている場所にでると、はじめて馬の足を止めさせた。

「もう、ここまでくれば追って来れないね」

馬から降りて、そう言葉をかけるネイの顔をルナは見ることで、きずに、うつむいていた。

「捕まったら、ロツシユは……殺される？」

「……大丈夫さ。あいつ、逃げ足早いし、そんなドジは踏まないよ」  
「でも、だったら、ネイもここで帰って……馬は使っていていいから……島に帰って……。一緒に来たらだめなんだ」

泣きそうな表情で、ルナは懇願するようにネイの顔を見つめた。

本当は、ネイと一緒に来てくれたことは嬉しかった。ずっとそばにいてほしいと思った。

けれど、そう望むことは許されないのだと、思いはじめていた。

一緒にいると……今度はネイが死ぬかもしれない……。

ハーフノームの島のイリアの死、アルティナ城での父の死、父の守護妖獣イルダークの死、そしてラクスという少年から聞いたセレナの死。

差し伸べられるはずの温かな笑顔を、大切な存在を予告もなく次々と奪っていった「死」。

立て続けに起きた出来事は、いつ「次の死」が起きてもおかしくない予感をルナに感じさせる。

その恐怖は、小さな心を言いようのない恐怖で締め上げていた。

「お願いだから……帰って……一緒にいたら……ネイが……」

ルナはそこまで言うと言葉を詰まらせた。

「死」という言葉を口にすることが本当に恐ろしい事態を引き起こしそうで、思わず口をつぐんでしまったのだ。

「あはははははー！」

突然ネイが大声で笑い始めたので、ルナは馬上からぼうぜんとした表情でネイを見下ろしていた。

「なに、深刻な顔してんの！」

ネイはおかしそうに笑うと、ルナに手を差し出してその小柄な体を馬から下ろさせた。

次いで肩にポンと軽く手を乗せると、クスクスと笑った。

「それじゃ立場が逆だよ。普通はさ、幼い子が山越えをするなんて言い出したら、そんなことは危険だから里に帰りなさい。あたしが兄さんを必ず連れて来てあげるからって、説得してあんたを追い返す立場なんだよね」

笑いながら言うと、ネイはきびすを返して、小川のそばですたすたと歩いて行った。

そして、水際に両膝をつくと、顔を洗いはじめる。

「ほらジーン、あんたも顔を洗いなよ。気持ちいいよ」

川のせせらぎ、風にゆられる木々や葉のざわめき、顔を水で濡らしたまま笑いかける楽しげなネイの姿。

二人の周りには、静かな時間が流れていた。

鳥のさえずりと、木々の香り。

先程まで兵士たちから追われ、必死に逃げていたのが嘘のような光景。

これも……夢……？

その静けさが、ふとルナの心に不安というさざ波を起こした。

また……夢を見るの？

現実と夢の境目が一瞬わからなくなる。

奇妙な非現実感が広がっていく。

その立ち尽くすルナの背に、馬が顔を擦りつけてくる。

温かな感触とかすかに残るその荒い息遣いが、あの激しい逃走は夢ではないと教える。

足をしっかり大地につけていないと倒れそうだった。

本当に自分もネイも無事に逃げられたのだろうか……。

また夢の中にいて、目が覚めると逃げ惑っている自分がいるのではないだろうか。

ルナは急に自分の足元がぐらりと大きく揺れたような気がした。  
夢じゃない？

けれど、こんな穏やかな時間の後には嫌なことばかりが起きた。  
「ジーン？」

ネイが不思議そうな顔で、自分を見つめていた。

また、これも……夢？

ルナは、自分の背中に顔をよせてくる馬の体温をどこか遠く感じながらも、目が覚めるとそこにはネイの死体があつて、闇の中を泣きながら一人でさまよい続ける自分があるような気がした。

「ネイ……死んじゃったの……？」

ルナはそうつぶやいていた。

「？」

ネイが碧い瞳を大きくして、自分を見ていた。

「ネイも、ルナといたから……死んじゃったの？」

夢なのか、現実なのか、もう自分がどこにいるのか、どうしてここにいるのかさえ、ルナにはわからなくなりはじめていた。

風のささやきも、木々のざわめきも、恐怖心だけをあおり続ける存在と化していく。

ルナは、体中の力が抜けて、今にも倒れてしまいそうだった。

「ルナといると……みんな死んじゃうんだ。ごめん……ごめんね……」

……

初めて声に出した自分の言葉に、ルナはそうだったのだと感じた。

「ルナといると死んじゃうんだ。だから、みんな……みんな……ルナと一緒にいちゃ、いけないんだ……！」

ルナの大きな翠色の瞳に涙があふれ始める。

ネイは無言のまま、すたすたと歩み寄ってきた。

そしてルナの片手をとると強引に川岸まで引きずっていき、川辺に立たせると、その背中を思いきり突き飛ばしたのだ。



「？」

気がついたときには、水しぶきの音とともにルナの体は川の中に沈んでいた。

「ネ、ネイ!？」

見た目によらず意外に深い水底と、突然川に放り込まれたことに驚きながらも、ルナはあわてて水面に顔を出して、必死にネイの立つ岸まで泳ぎはじめた。

山から流れて来る雪解けの冷たい水が、上流からゆっくりと流れ込み、体を押し流して行く。

海水とは全く違って、泳ぐには体は重かったが、目を開けても水を呑みこんでも、真水は痛くも辛くもなかった。

ようやく岸にたどり着き、川から這いあがったルナは、全身びっしょりと濡れた姿でネイの前まで戻って来た。

「どお? 冷たくて気持ち良かっただろう」

その問いかけに、ルナは大きなクシャミをひとつした。

気持ちいいというより、震えがくるほど水は冷たかった。

けれど、不思議なぐらい頭の中はすっきりしていた。

「ほら、風邪引くから、服を脱いで体を乾かし、さつさと着替える」  
ネイは笑いながら、馬の背から荷袋をほどいて、山越えのために用意してきた厚手の服を次から次にルナの足元に投げつけた。

乾いた服に着替えながら、ルナはふとあることに気づいて体をまさぐった。

袋が……!

「はいよ」

何かを探しているしぐさに気がついて、ネイが袋をルナの顔の前にぶら下げた。

「それ……!」

ルナはあわてて袋を奪うように取ると、胸の前で抱きかかえる。

指輪とイルダークの牙、ハーフォームの海賊仲間達から餞別に届けてくれた金貨が入っている袋。

「悪いとは思ったけど、流されちゃったらやばいからさ、体からはずしといてやったんだよ。そんなことにも気づかないんだから、よっぽどほうけてたんだ」

ネイは、にっこり笑った後、急にまじめな顔になった。

「ジーン。あんたは一体、どうしちゃったんだい？」

ネイは座り込むと、不思議そうな顔でルナの緑色の瞳をじっと見つめた。

ルナは、その視線から逃げるように着替え終わるとネイの横にひざを抱えて座り、たった今放り込まれた正面の川の流れに目を移した。

「言つとくけど、あたしはまだ死んでないからね」

「ごめんなさい」

ルナは川を見つめたまま素直に謝った。

さつきまでの現実と夢とが一緒になったような非現実感、きれいに消えていた。

ネイの自分を見つめる瞳は、確かに生きてルナの前にあった。

「あのさ、あんたいリア姉さんが亡くなった時も、かしらから出て行けつて言われたときも、随分冷静だった。あたしは、そのことがずつと気になってた」

ネイも、ルナの見つめる川を見ながら、言葉をつないでいく。

「それに……ノストールに来てからは、ただごとじゃない様子だったしね。なにかあったことは間違いないって、ロツシユとも話してたんだ」

ルナは視線を落として唇を結んだ。

本当のことを話したい衝動に駆られた。

しかし、それが間違っていないことなのかどうかわからなかった。話しても大丈夫だと思ふ心と、テセウスに会って指輪を渡すまでは、誰にあつても絶対に言つてはいけないという気持ち、振り子のよつに大きく揺れ続けた。

「でも、とりあえず、あたしはずつと決めてたことがあるからさ」

ネイはルナの言葉を待たずにそう言った。

まるで告白するような、きまじめさと照れ臭さが一緒になったような表情で空を仰ぎ見ながら、つぶやいた。

「あたしの居場所はあんたのそば。ジーンがどこへ行こうが、何をしようが、そばにいるって決める」

思いがけないその言葉に、ルナは驚いてネイを見つめた。

その大きな翠色の瞳を受けて、ネイは少しだけおどけたような表情をつくり、すぐに静かにほほ笑んだ。

「だって、当然だろ。あたしはあんたに命を助けられたんだ。あんたが、かしらに頼んであたしの命を救ってくれなかったら、あたしの魂はとうにヴァン神のもとだ。なのに……あんたといると人が死ぬなんて、そんなことあるわけじゃないか。あんたがそんなこと考えてるって知ったらイリア姉さんが悲しむよ。イリア姉さんは短いはずの命の時間を、療法師のテルグが驚くほど、延ばすことができたんだ。あの弱すぎるほどの体がどうして元気になれたんだろうって、テルグがいつもあたしに言ってた」

ネイは真剣な表情で言った。

「でも……それはね、ジーン、あんたがいたからなんだよ。あんたがイリア姉さんに生きる力と幸せな時間をつくったんだ。あたしに、生きる時間と自由を与えてくれたんだ。それを忘れるんじゃないよ」  
ネイの言葉のすべてを受け止めることはいまのルナにはできなかった。

だが、ネイ自身がそう信じているのだという思いが心に伝わってきて、ルナは反論せずにならずにいた。

「イリアかあさんと……ネイの命……」

「そうだよ。ま……そういう意味では、あたしは確かにあの海で一回は死んでるんだらうけどね。おまけの人生だから、迷惑かも知れないけど、恩人のそばにいさせてもらうよ」

恩人という言葉に、ルナの心がチクリと痛む。

でも……父上の命……イルダークの命……が亡くなったは……ル

ナのせいだ。

決して消えることのない心に刻まれた深い後悔の傷が表情を曇らせる。

それでも、ルナは自分に向けられたネイの言葉に励まされた。

ネイとともにテセウスのもとへ向かってみようと心に決めた。

ルナにとっては大きな賭けであった。

もし、万が一この旅でネイが死ぬようなことがあれば、もう自分  
はもう誰とも一緒にはいられないかもしれない。そう思いながら。

エーツ山脈を越え、リンセントースへと向かうノストール軍。その姿を、エーツ山脈の山の一角から見下ろす人影があった。

占者をあらわす薄紫色の女性用の長衣を身にまとい、厚手のマントとフードを羽織ったその人物は、碧く澄んだ瞳でしばらく前からその行軍を見送っていた。

数日前の……あの山の異変はただごとではなかった。

手にしたナーラガージュの杖を握り締め、占者の装束に身を包んだその容姿は、まだ若く華奢な風貌をあたえる。

「もしかすると……」

頭を覆っていたフードが外されると、色白の可憐な美しい面立ちがあられた。

エリル・ラント・ソーレ

いまエーツ山脈に静かにたたずむ人物こそ、三年前から行方不明となっているハリア国の子の成長した姿だった。

エリルは、ノストールの軍の姿が完全に視界から消え去ると、それを待つていたかのように、ノストール軍の進んで来た方向を戻る道を探して歩き始めた。

エリルはすでに十五歳を迎え、王位継承の年齢に達していた。

国へ帰れば、王の座が彼の手にゆだねられることは間違いないはずだった。

けれど、いまエリルは国からはあまりにも遠い場所にいた。

実母ミディール妃は自らが招いた反逆行為により自決し、父ヘルモーズ王は病身の身として王位から退けられている。

指輪を得る資格をもつ者は、民の安らぎを求める王。その誓約破られし時、国は滅びます。

王宮の地下牢で出会った魔道士ディルラの言葉が、エリルを『エボルの指輪』を探す旅に駆り立てた。

エリルの曾祖父が、国から葬り去ったといわれる王家伝承の指輪。国を守り、王家を守るエボル神より与えられし誓いの指輪。

だが、行方がわからなくなった。その指輪の石には、ハリア国が戦さを起こし、民に圧政を強いはじめたころから亀裂が入り始めていると、デイルーラは告げた。

国を救うために。『エボルの指輪』の亀裂をくい止め、エボル神に許しを乞うても、国が破滅から救われるかは……わかりません。魔道士はその言葉を残して生命の火を消した。

それでもエリルは旅立った。

『エボルの指輪』があると示された、ハリア国よりもはるか南の山を目指して。

この三年間、さまざまな占者や魔道士に出会い、道を求め、不思議な指輪や宝石の隠された方角の山に登っては、捜し続けて来た。

旅はけっしてエリルに優しいものではなかった。

国を出てからは、善人を装った親子に、もっていた全財産をだまし取られたこともあった。道を歩いていただけで、突然襲われ命から逃げ出したこともあった。

山の中で足を滑らせて谷底へ落ち、あやうく命を落としそうになったことも、そこでさまざまな人々と出会い、助けられ、ともに過ごした日々もあった。

そして、エリルは、ラーサイル大陸最南端にあると人づてに聞いていた巨大山脈にたどり着いたのだった。

「今度こそ、ここが、終点になってほしいけれど……」

そう願いながらエーツ山脈に足を踏み入れたエリルは、ある日奇妙な光景に出会った。

山中に入って三日目の午後のことだった。

山の中にも続く一本の道だけを基たよりに、指輪の気配を求めて歩き続けていた時だった。

突然天候が変化した。

頂上付近に雪雲が現れたと思ったのもつかの間、一帯は猛吹雪に

襲われた。

それまでは、雪化粧ははるか彼方の頂上付近に見えているだけだったので、エリルは、まさか豪雪に見舞われるとは思ってもしなかったのだ。

エリルは突然の吹雪にあわてて近くにあつた小さな洞穴に逃げ込み、難を逃れた。

その夜のことだった。

寒さに震えながら、吹雪がおさまるのをまつていると、急にナーラギージュの杖が振動をはじめたのだ。

それはエリルの身に危険が近いことを知らせるものだった。

外に出て見ると雪はやんでいたが、空が妙に明るかった。

かといって晴れているわけではなく、上空には白い雲が覆っている。

雲全体が発光しているようにもみえる。ぼんやりとした明るさがエーツ山脈のうえに広がっていた。

しばらくその様子を見てみると、雲は徐々に、まぶしく感じられるほどの異様な光の輝きとなった。

エリルは、その光の正体を見極めようと、目を凝らしたまま立ち尽くしていた。

闇であるはずの夜空が輝いた。

光は上空から一筋の矢を放った。

その光の矢は、エーツ山脈の中で最も高い山といわれるエーツ・エマザー山めがけその山裾へと突き刺さった。

次の瞬間、夜空へ届かんばかりの閃光が、まがしくもまばゆい輝きを放ったのだ。

「指輪の……光……なのか……？」

エリルは、振るえ続けるナーラギージュの杖を再び、堅く握り締めた。

やがて……求めし祖先の形見に……出会つたろう……だが……闇は道を失い……道を照らす光は消えた……。闇に包まれし空は……



…やがて、そなたにひとつの道を示すだろう。

この半年以上前、ともに旅をして来た占術士リア・アンナ一族の長ジーシュから告げられた 先読み の言葉だった。

エリルは一年前に、山中の崖から落ちて倒れているところを、アンナの一族に助けられ一命を取り留めた。

だが、自分の出自を含め、目的も、地下牢で死んだアンナ一族のディルラの話も、エリルは一切話すことをしなかった。

ディルラのことかわかれば、自らの出生が知られるのは必然だったからだ。

エリルはしばらくの間、彼らと生活を共にし、占術の一端をも学んだ。

この杖があなたを導くでしょう。高貴なお方よ。

ジーシュは別れ際にそつと頭を下げると、この杖をエリルの手に握らせた。

われらが一族の者を見取っていただき、ありがとうございます。われわれの感謝の心をおくみ取りいただき、このナーラガイジュの杖をおもちください。この杖は持つ者に危険を知らせる術が施されております。あなたの旅にきつと役立てるはず。杖が震えたならば、一刻もはやくその場からお立ち去り下さい。決して近づいてはなりません。

ジーシュはそう言い渡した。

エリルはすべてを見通していたアンナの長・ジーシュの能力に驚きと畏怖を覚え、全身が震えたのを覚えている。

「危険を知らせる杖……」

そのナーラガイジュの杖がエリルの手の中で、全身に響き渡るほどの激しさで警告を発し続けていた。

長の言葉が、杖が、ここから立ち去れとエリルに訴えかけていた。

しかし、エリルはその奇妙な光を見た瞬間、鼓動の高鳴りを覚えた。心が吸い寄せられた。今までの旅では、決して出会うことさえなかった出来事に心が惹きつけられたのだ。

気がつくともエリルは、闇の中、降り積もった雪の上を歩いていた。呼び寄せられるように剣難な山の中をひたすら、光を放つその場所をめざして歩いているのだ。

やがてその眩しいほどの光が消え、夜が明けて、陽が上るころ、エリルはある行軍を目にした。

それは、昨夜の光が放たれていた方角から進んで来た。距離にするならばエリルのいる場所からやっと見分けられるほど離れており、人数までは見てとることができない。

しかしエリルは、旅の中で、ノストールの第四王子アウシュダールの噂を聞いていたので、それがノストールの援軍であることに、すぐに気づいた。

ビアン神の怒りをとくために、またダーナンの侵略から友好国リンセンテートスを守るために、アル神の息子であり、シルク・トトウ神の生まれ変わりであるアウシュダール王子が、リンセンテートス王の要請にこたえて出陣したと。

ノストールの軍列を見たその日、エリルは一時歩みを止めて、ノストール軍と出会わず、なおかつその全貌を見られる場所を捜しもとめた。

噂の王子は今年八歳になったという。

南方の小国、ハリア国からは遠い国であり、視野にも入れられていなかったノストールの軍だったが、エリルは興味を抱いて様子を探ろうと決めていた。

もし、ビアン神の怒りを静め、リンセンテートスを砂塵の嵐から解放するほどの力をもつ、真にシルク・トトウ神の転身人ならば、わがエボル神のお怒りをとく力を持っているかもしれない。もしくはその方法をご存じかもしれない……。

ならば、その王子の顔を見ておこう。

エリルはノストール軍を待った。半日、一日、翌日と。だが、不思議なことに気づいたときにはノストール軍はエリルの待つ場所とはまったく別の道をたどりリンセンテートスへの道を下っていた。

それに気がついてエリルは急いでその後を追ったものの、軍列の影はすでに遠く、アウシュダールを間近で見るとは叶わなかった。

ならば……まずは、あの光の場所まで行ってみよう。

エリルは再び山の奥深くへと歩きだした。

止むことのない、ナーラガージュの杖の震えを感じながらも。

エリルが目指す場所。

エーツ・エマザー山の光の発せられたその場所に、小さな人影があった。

エーツ山脈の壮麗な姿を目の当たりにしながらも、まったくその風景に心奪われることなく、感情の欠落した表情のまま人形のように立ち尽くす、一人の少年の姿。

オモシロイ光ダッタ……。

ヴァルツは、愉快そうにクククとまるで喉で笑うかのように音を発した。

サトニは、その言葉にコクリとうなずく。

……美シイ闇ノ輝キ……

サトニの胸元に輝く、首から紐で結ばれている黒曜石の指輪からは妖しい輝きが発せられていた。

才前モ見ルガイイ……ココニハ、才前自身ガイル。アノ光ハ、我ノカトナリ、心ヲ満タス……。

サトニの足元には、切り立った崖が続いていた。

「ヴァルツがいた場所だ……」

抑揚のない乾いた声がそうつぶやいた。

サトニはこの崖の下。深い谷底で胸元に輝く黒曜石の指輪を手にした。

だが、それは緑が山々を覆っていた季節であり、いまは真っ白な雪景色がエーツ山脈を包み込んでいる。

「あの光が必要なの……？」

サトニはうつろな表情でヴァルツにたずねた。

復讐のみを生きる目的としていた少年は、ノストールのカルザキア王を自らの手で殺し目的を遂げたことで、すべての生きる力を失

った。

そして今度は、王殺害の力を自分に与えた不思議な指輪の望みを叶えるために、その身をヴァルツに与えたのだ。

サト二の心はすでに閉じられていた。

ヴァルツの声に従い、動く。いまはそれだけの存在となっていた。だが、ヴァルツはなぜかサト二から心や体を完全に奪い操ることも、意識や感情を消し去ることもしなかった。

時に苦しい夢を見てうなされ、おののき、時に忘れかけていた愛情を渴望し、また恐怖から逃れるようにおのれの殻に閉じこもるサト二の感情を楽しむように、ヴァルツは少年のそばに影そのものとして存在しながら、その体を支配していた。

「光八消工去ツタ。ダガ、ココニイレバ、アレガ来る……」

クククという奇妙に楽しげな笑い声が、サト二の耳元に響く。

「ココハ我が領土。子供ダマシノ結界ナド、ナイニ等シイ。行コウカ。ココノ闇ノ底ニハ、面白イ光景ガ広ガツテイル……」

サト二の乾いた心に、ヴァルツの毒々しい感情が流れ込み、染み込んでいく。

その感触は決して心地のよいものではなかった。けれど、拒むことが必要だとは思わなかった。

傍観者のように、自分の心が汚されていくのをただサト二は見つめていた。

けれどこの日、ヴァルツに導かれ、その光景を目にした時、サト二から感情を奪わなかったヴァルツの残忍さを呪わずにはいられなかった。

陽の届かない深い闇の中に存在する谷底。

決して人の訪れることもないはずの、死の谷。

ヴァルツはサト二を導いた。

目の前にあるものの正体を知った時。

気がつく、サト二は悲鳴を上げていた。

暗闇の中で、少年の恐怖に満ちた叫びは幾重にもこだまし、響き

渡る。自分自身から発せられる絶叫が、さらなる恐怖を呼び起こしサトニは全身が震え上がり、体が崩れ落ちるのを知った。

クククククク……

ヴァルツは、サトニのその驚愕に心底満足を得たように笑っていた。

倒れ込み、地にはいつくばり、全身を震えさせながら胃の中のものをつき続ける少年に、影はやさしく話しかける。

我コソハ、コノ地ノ主。コノ闇ガ、見聞キシテイタコトヲ、オ前ニ見セテヤロウ……。

ヴァルツは笑っていた。

サトニがおびえの瞳を見せるたびに。

そのヒナのような、やわらかな心が打ち震えるたびに、ヴァルツは満足そうに笑っていた。

エーツ山脈に足を踏み入れてから、五日目の朝をルナは迎えていた。

本当であれば一人で歩き続けているはずのルナの傍らには、この秘境ともいべきエーツ山脈の難路の山越えさえ楽しんでるらしいネイがいた。

馬という足があるおかげで、子供の足だけであれば数倍も時間がかかるはずの道も、比較的順調に進んだ。

それでも、先は長い。

山の天候は突然変わり、晴れ渡っていた空が突然雲に覆われ、豪雨が豪雪に変わることもあり、一日足止めされた日もあった。夕暮れには寝所にするための洞穴を探し、なければ穴を掘り、体を寄せ合い寒さをしのいだ。干し肉や木の実をかじり、時に小川の魚を取っては食料にした。

ネイの言うとおり、子供一人でこの山中を越えるのは無謀だったのだと、実際に山に入ってルナは改めて実感した。

「こんなに山ばかりに囲まれてると、海が恋しくなるよ」

ネイは大きなあくびをしながら、身支度を整え、先に馬の上にいるルナの後ろにまたがった。

「雪も山の上で降ってるぶんにはいいけど、道の上にまで降り積もるのは勘弁だね」

ネイのかかどが軽く馬の腹を叩くと、馬は軽快な足どりでゆっくりと走り始めた。

背中越しに、彼女のひとり言を聞きながら、ルナは美しい山の姿に見ほれていた。

山に入ってから一日中山ばかりを見ているのに、決して見あきるといことがなかった。

「ノストールの軍もジーンと同じ年の子供を連れての行軍なんだ

から大変だっただろうに。全員馬に乗せてやるわけには行かないだろうからね」

何げなくつぶやいたネイの言葉に、ルナははっとした。

兄のテセウスを追うことのみに関心を奪われて、そのことを忘れていたのだ。

「……………」

ルナの無言を勘違いして受け取ったネイが、あわててルナの横顔をのぞき込み、誤解をとこうと肩をポンポンとたたく。

「え、いや、あのさ、言っとくけど、ジーンのことじゃないよ。あんと一緒にいるのはあたしの勝手で、あたしは楽しいんだから。ちっとも大変じゃないよ」

「うん……………」

ルナは 上の空だった。

ネイと一緒にいることで楽しささえ感じはじめていた心が、重く沈んでいく。

「わかってる……………」

ルナの言葉を最後に、ふたりはしばらく無口になった。

だがそれは決して険悪なものでも、気まずさからきたものではなかった。この旅の中で、そうした時間は増えつつあった。

ルナは山々の風景に心を奪われ、ネイもまた長い乗馬を楽しんでいるようだったからだ。

「いよいよこの一番高い山のエーツ・エマザー山の峠を越えれば、リンセンテートス側だ」

ネイとルナは、眼前にそびえるエーツ・エマザー山を見上げた。

だが、ある地点に差しかけたとき、馬が立ち止まった。

「どうしたんだい？ まさか、もう疲れたのかい？」

二人を乗せて来た馬はまるで目の前に見えない壁があるように、ある地点へ来ては立ち止まり、引き返してはまた進むうとしたり、ぐるぐるとその場を言ったり来りするだけで、そこから先に進めなくなっている様子だった。



休息はとつたばかりであり、疲れた様子は感じられないのだ。

「どうしたんだい？」

ネイが様子を見るために、馬上から降りようとした時、突如として馬がいなくなき走りはじめた。

「ネイ！」

ルナは、バランスを崩して落ちかかるネイのからだをあわてて押さえながら、手綱を絞る。

だが、馬は山道ではなく、エーツ・エマーザに向かって、まるで何かに憑かれたように走り続けた。

あやうく落馬しかけたネイが、なんとか体勢を整え、手綱を絞つても、馬は何かが乗り移つたように走り続け止まらない。

クククク

ルナの耳元で笑い声がした。

ゾクリと背筋に悪寒が走る。

いやな予感が襲いかかった。

ルナは唇を堅く結んだ。

それは忘れもしない声だったからだ。

父カルザキア王の守護妖獣、イルダークを死に追いやつた謎の影。  
(オモシロイ。モット怒レ……)

あの夜の出来事がよみがえり、ルナは狂つたように激しく走り続ける馬の背の上で、イルダークの牙を入れた袋に手をのばした。

イルダーク……助けて！

それは、無我夢中の行為だった。

袋から牙を取り出すと、ルナはその牙の先端を思い切り馬の背に突き立てたのだ。

馬は悲鳴まじりのいななきを上げ、突然走りだした時と同じように、いきなり止まった。

「うわあっ！」

「わーっ」

突然の急停止に、馬上で揺られてたルナとネイは、対応できずに、

勢いのついたまま馬の背から落ちてしまった。

「痛ったーい！」

ネイが抗議の声を上げる。

「なんなのよー、この子はあ」

腰をさすりながら立ち上がり、馬の背をピシリと叩く。馬は申し訳ないというように、しゅんと首をうなだれた。その背には、ルナが突き刺した牙がそのままになっていた。

「これ、あんたがやったの？」

ネイが、仰向けに転がっているルナを見下ろし、馬の背から抜いた牙を手渡した。

馬は痛がったが、暴れはしなかった。不思議なことに牙の突き刺さった部分には傷跡さえない。

「ジーン……」

倒れたままのルナの顔色が、青ざめていた。

「大丈夫？ どこか痛むのかい？」

「違う……。ネイ、変だよ。こここの地面……熱い……」

「え……？」

ルナに言われて、地面に手をついたネイは不思議な表情をしながら、今度は周囲を見渡した。

「ここだけ……雪が降らなかったのかな……」

ルナたちが馬に連れられて来た場所は、不思議なことに雪の降った後がどこにもなかった。

雪だけではなく、乾いた土が剥き出しになった地面が広がっており、草一本生えていないのだ。

「ネイ……早くここから出よう」

ルナは立ち上がると、ネイの腕をきつくつかんだ。

嫌な予感がルナを襲う。

ネイが死ぬのは嫌だ。

幼い心には、いつしか死が常に自分の隣に寄り添っているもののように感じられていたのだ。

ルナのせいで、誰かが死ぬのはいやだ。

「でも……どっちに行こうか……」

ネイの言葉どおり、二人の立つ場所から進んで来たはずの山道は見えなかった。どこをどう走って来たのかさえ、見当がつかない。

「とにかく、山を右手方向に進み続けて、夜になったら星で方角を確認するしかないな」

ネイはため息をついた。

そのとき、二人の耳に悲鳴が聞こえた。子供のよような甲高い声。

「！」

ルナとネイは顔を見合わせた。

だが、その悲鳴がどこから聞こえるものなのか全く検討がつかない。

ただその声は、あまりにも恐ろしい意味をもっているようにルナには聞こえた。

全身の毛が逆立ち、得体の知れない恐怖が襲いかかって来る。

「ネイ……早く行こう！」

「でも、だれかが襲われてるんじゃない……それに、子供の声だった……」

ルナは、一刻も早く立ち去ることしか考えていなかった。

ネイは死なせない……。

「ひよつとして、ノストールの軍からはぐれた子供がいるんじゃないのかい」

その言葉に、ルナの手がネイから離れた。

嫌な予感はいくらみ続ける。

山道での立ち往生、突然の馬の暴走。草さえ生えていない地面。

熱い地表。そして、子供の悲鳴。

「誰かいるのかい？」

ネイは、ルナの不安を知らずに大声をあげ、声の主を探そうとしていた。

イルダークの牙が、馬を正気づかせなければ、自分たちはどこへ

行ったのか。

何が起きようとしているのかわからない。

ただ、ルナはここから逃げ出すことだけしか考えていなかった。

恐ろしい出来事が近づいている予感が、現実のものとならないうちに。

エリルもその悲鳴を耳にしていた。

光の落ちた場所を追い求めて、道を外れ、吸い寄せられるようにエーツ・エマザー山にたどり着いた時、その悲鳴を聞いたのだ。

「子供の声？」

ナーラガージュの杖は、いま静かになっていた。

あれほど、警戒を発していた杖が、まるでただの棒になってしまったかのように、何の変化も示さない。

その静けさが逆にふと嫌なものを感じさせた。

別の意味での危険がその悲鳴のする場所にあるかもしれないと思えたのだ。

指輪とは違うものなのか……？

だが、リア・アンナの一族はエリルが、ハリア公国の失われた《エボルの指輪》を捜し出せると告げた。

その言葉を信じたいと思った。

危険を避けていたら、国を救うことなんて出来はしない。

エリルは山を見上げた。

そして、自らの意志で悲鳴の聞こえた方へと向かって歩きだして行った。

エーツ・エマザーの深い谷底へ続く崖のそばに、彼らは近づいていた。

ルナとネイが。

そして、エリルが。

はるか地底深く、陽の光さえ届かない暗黒の空間。

そこにサトニはいた。

目の前には、子供の倒れている姿が広がる。

一人、二人、三人……数えたならば、その数は数百近くにとなっ

たに違いない。

それは、ルナ、そしてサトニと同じ年に誕生した、幼い生命たちの亡骸だった。

アウシュダール、そしてテセウスとともに、リンセントースへ向かうノストールの特別軍として、家族たちから笑顔で見送られて旅立ったノストールの少年たちの無残な姿だった。

第10章 神の怒り - 14 - (後書き)

第10章 神の怒り 終了

青空の下、壮大な姿をたたえるエーツ山脈。

なかでも、そこにたたえずむ美しくも険しい山々とは一線を画す最高峰の山をエーツ・エマザーと、人々は呼んだ。

一年のうち三分の二を、頂に白銀を冠した美しい姿をたたえるエーツ山脈の象徴的存在。

ノストールの人々は、自然の砦として国を守り続けるこの山脈を愛し、時に畏怖心をもって仰ぎ見、そして祈った。

月の神アル神が息子のシルク・トトウ神を宿したと伝えられるエーツ・エマザーに向かって。

だが、いまその美しい銀嶺のエーツ・エマザーの山裾に、まがまがしい空気が漂っていた。

「だれかいないの？」

ルナのそばで、ネイが大声を張り上げる。

「おーい、どこにいるのー？」

少し前に聞こえた子どもらしき悲鳴。

ネイは、その声の持ち主を求めて呼びかけ続けていた。

そのそばにいるルナは、ネイが大声を出すたびに身がすくみ、自分の耳を押さえたい衝動に駆られていた。

ネイ、早くここから離れようよ。

本当はそう言って、一刻も早くこの場所から立ち去りたかった。

馬の奇妙な行動と暴走。

一瞬間こえた、聞き覚えのある妖しい影の不気味な笑い声。

雪景色の中で雪も草一本すら生えていない、地表がむきだしになった熱をもった場所。

そして、どこからともなく聞こえた子供の悲鳴。

「ひよっとして、ノストールの軍からはぐれた子供がいるんじゃない



いのかな」

その言葉に、悲鳴の持ち主を探す行為を反対すべき言葉を失い、ルナは唇を噛み締めた。

ノストール軍が、アウシュダールの意のもと特別軍として行軍に加えた八歳の少年たちの数は、三百人とも四百人ともそれ以上とも言われている。

ネイが言うように、行軍に加わっているうちの中の何人かが山の中で迷子になったとしても、不思議ではなかった。

親恋しさに軍から逃げ出すものがないとも限らないからだ。

でも……いやだ……。

ルナの心はそれ以上前へ進むことを拒む。

だが、どんどん先へ歩いて行くネイから離れることも出来ずに、馬の口輪をとったままついて行くしかなかった。

崖沿いに続く雪のない地表を歩いていると、先を歩いていたネイが何かを見つけたように、振り返りルナに声をかけた。

「ジーン、いたよ！ あそこに誰か倒れてる！」

ネイの指さす前方に、崖からはい上がって来たような体勢のままうつ伏せに倒れている少年の姿があった。

ルナは高まる不吉な予感に思わず足を止めた。

足が動かなかった。

子どもに駆け寄るネイの後ろ姿を見ていることしかできなかった。

ネイは少年の倒れているそばに走り寄ると、ひざまづいてその子供がケガをしていないかを確認する。

衣服にも破れたような部分もなく、見た目には傷のような部分もなかった。

口元に耳を寄せると、規則正しい呼吸をしている。意識を失っているだけのようだった。

ほっとしたような表情で、立ち尽くしたままのルナに向かって大きくうなづいて見せた。

「大丈夫。息があるよ」

「……………」  
ルナもつられてうなずき返したが、逃げ出したい不安な気持ちがさらに増していた。

体が石になったように動けない。ネイのいる場所まで数歩の距離だが、そこへ向う気持ち起きないのだ。

「大丈夫？ あたしの声、聞こえる？」

ネイが呼びかけると、意識を失っていた子供の口元がかすかに動いた。

「え…？ なに…？」

ネイが再び口元に耳を寄せる。

「……………の……………」

「何か言ってる？」

だが次の瞬間、ネイの表情が凍りついた。

「ネイ？」

全身が一気に鳥肌立つ感覚に身を震わせた。

ネイはルナを見る。

「『あのまま……馬ともども谷底へ落ちれば、よかったのに……………』  
つて……………」

ルナの顔が青ざめた。

「ネイ、離れて！ こっちに来て！」

ルナは大声で叫んだ。

ネイをあの少年のそばにこれ以上いさせてはいけないという直感が働いたのだ。

「ネイ！ そいつから離れて！」

「ああ……………」

さすがにネイも気色悪くなったようにうなずく。

「ネイ！ 離れて！ 早く！」

だが、ネイは立ち上がりかけたもののその場から動こうとしない。

「ネイってば！」

「ジーン……………」

ネイの驚いたような小さな声に、ルナはさらに声を振り絞って叫んだ。

「早く！」

「手が……」

ネイが困惑したように、自分の右腕を目で示した。

手が、少年の手がきつくネイの手首を握りしめていたのだ。

「……………！」

しまった……と、ルナは言葉にできずに叫んでいた。

それまで石のように重かった足を、自分の気持ちで振り切るように一歩前に踏み込む。

二歩目は地面を蹴り、そして走りだした。

「ネイ！ 早くこいつから離れて」

ネイにかけ寄ると、ルナはネイの手首を掴んでいるその手を引き剥がそうとその手に触れようとした。

まさにその瞬間、ネイの手首を掴んでいた少年の体がゆらりと身を起こした。

「あ………！」

青くやつれた顔、くぼんだ生氣のない瞳がルナの顔を真っ直ぐに見つめていた。

無表情なその少年の顔をルナは知っていた。

いや、決して忘れまいと心に刻んだ顔がそこにあった。

「お前……」

「また会ったね」

感情のない言葉で、口元にうつすらとほほ笑みをつくりながら応えたのは、まぎれもなくアルティナ城で出会った父カルザキア王を殺した少年 サト二 だった。

ルナの体中の血が一気に熱く上昇していく。

「どうして…… あんなことをしたんだ!!」

悲鳴にも似たルナの：激昂する叫び声に、ネイがビクリと震えた。怒気を含むただならぬ空気に、ネイの視線は自分の手を握んだまま離さないサト二へと向けられる。

「……………」

サト二は一瞬口を開きかけたが、そのまま唇を閉ざした。

そして、忘れかけていたものを思い出したように、瞳に憎悪を浮かび上がらせた。

「ノストールの王家が、民殺しの一族だからだ」

思いもかけない言葉に、ルナは困惑した。

その言葉の意味するところがまったく理解出来ないものだったからだ。

「あいつらは村人を殺すのも、たくさんの子供を殺すことも、なんとも思っていないんだ。なにが、王家だ。シルク・トトウ神だ。アル神だ。ただの人殺しと、それを指図してる奴らじゃないか」

血の気のない顔が、憎悪の灯火を瞳に宿したまま、ルナにはなんのこともわからない言葉を吐き出す。

「何言ってるんだ。人殺しって…… そんなのウソだ……」

「ウソ……？ 信じられないっていうのか？ じゃあ、見せてやるよ。どうせ、おまえも……… すぐにあいつらの仲間入りだ………」

サト二はすくっと立ち上がると、ネイの手首をつかんだまま、断

崖絶壁の崖へ体を向けた。

「やめろ！」

ルナは叫んで、掴んでいたネイの左手を引っ張る。

ネイもルナとともに少年から逃げようとするのだが、サト二は子供の力とは思えない力でネイの手首をしめつけていた。

逆らおうとしても、足がサト二の方に徐々に引きずられてしまう。

「ジーン！」

「ネイ！」

渾身の力でネイを取り戻そうとひっぱるルナの耳元に、突然それは聞こえて来た。

ククククク

「?!」

ザワリと全身の毛が総毛立つ。

ルナの体が凍りついた。

「ヴァルツが、真実を見せてくれるよ」

サト二の抑揚のない声が、怒りと、悔しさで泣きそうな表情のルナに意味ありげな言葉を投げつける。

「おまえたちなんて……本当は、あのまま馬ごと崖から落ちて死んじゃえば良かったんだ。今だって……楽に死なせてやろうと思ったのに……そしたら、ただ死ぬだけで良かったんだ。あんなの……見ずにすんだのに……。逆らったおまえたちが悪いんだからな……」

サト二の言葉とともに、ヴァルツと呼ばれるものの低い声が響き渡る。

オ前二……マタ会エタ……。モウ……。逃ガシハセヌ……。闇ノ中ニ行クガイイ……。ソコデオ前八……。恐怖ニ震エ……。ソノ心ヲ闇ニ染メルダロウ……。死ヨリモ大キナ闇ヲ見ナガラ……。さとにノヨウニ、我ガチカラヲ望メ……。オ前ガ望メバ……。復讐ノチカラヲ……ソノ手ニ与エテヤロウ……

まるで真後ろにいるように、ヴァルツの低い楽しげな声がルナの耳元でささやいた。

そして、その声が終わると同時に、ルナの目に映る地面が地が大きく揺れ動いた。

「……」

周囲に見える山々の輪郭がダブリ、体の自由が奪われる。

ルナは足をとられてネイとともに地面に倒れ込めた。

なにがあつても、この手だけは離さないとルナは自分に言い聞かせた。

「ジーン！」

ルナとネイ、そしてサト二のいる大地が突然、崩れ出した。

見ルガイイ。ソシテ……。ソノ心ノ奥ニ潜ム才前ノ闇ヲ、ワガ前ニ解キ放ツガイイ……。復讐ノ心ヲ解キ放ツガイイ……。

ヴァルツの笑い声が、崩れる地面とともに崖下へ飲まれていくルナの耳元で、愉快そうに笑い続けた。

見ルガイイ。闇ニ吞ミ込マレタ同胞タチノ姿ヲ……。

気がつくと、ルナはそこに存在していた。

(あれ……?)

何度も、何度も目を瞬かせながら周りを見回す。

ルナはいつの間にか、同じ年の頃の少年たちに囲まれて雪の中を歩いていた。

(夢……?)

最初に浮かんだのはそんな疑問だった。

「もう少しだからな。みんな頑張るんだぞ！」

前方から、大人の声が励ますように呼びかける。

(ここは……?)

ルナは自分がなぜ、ここでこうして歩き続けているのかまったく思い出せなかった。

夢というには、現実感が強すぎて、納得させることが出来ない何かがあった。

吸う息は冷たく、身を切るような空気が顔にぶつかり痛みさえ感じる。

だが、一方で別の意識が、それを当然のこととして受け止めているのを感じる。

山を越えるんだ。歩かなきゃ……歩かなきゃ……。

心の中で、そう自分に言い聞かせるもう一人の自分を感じたとき、ルナは突然、自分が今まさにエーツ山脈を越えようとしているノストールの特別軍の一員として歩いているのだということに気づいた。だが、何が起きたのかは思い出せない。

自分をここに存在させている力の存在があることを、ルナは心のどこかで感じていた。だが、そのことすら吹き飛ばしてしまう思いがわきあがる。

(テセウス兄上と一緒に、リンセンテートスに行く友軍だ……)

今、この軍の先頭にいるだろうテセウスがいると思うと、ルナはこみ上げる思いで、ほかのことは考えられなくなりはじめていた。低く垂れ込めた灰色の雲と、雪景色に染まった銀嶺の山々に囲まれ、膝近くまで降り積もった雪の中を、白い息を吐きながら少年たちは黙々と歩き続けた。

(兄上がいる……)

心は今すぐにでも隊列から飛び出して、テセウスを探し会いたいと突き動かされた。だが、その一方でぼんやりとした意識が全身を支配し、体はただ前へ前へと歩き続ける。

ルナは体が思うようにならないもどかしさに異常を感じはじめた。身体はルナの心など無視するように、隊列を乱すことなく歩き続ける。

疲れさえみせない一系乱れぬ、規則正しい行進。

だが、歩き続ける疲れを見せない足取りとは裏腹に、疲労は蓄積し、雪の中を長時間歩き続けた足は重く、鉛のようになっていた。濡れた靴の中の足はすでに冷たく、指の感覚はすでにない。

足に訪れるのは絶え間なく訪れる痛みと麻痺。

顔も手も全身が冷えきっていた。

息があがり、冷たい空気を吸い込むたびに、胸は悲鳴を上げ、苦痛でその場にうずくまってしまいたくなる。

それはルナだけではないはずだった。

なのに、誰ひとりとして立ち止まる者も、倒れる者も、泣き出すものさえいない。

(変だ……)

ルナの脳裏に危険信号が点滅していた。

(こんなの、変だ……)

やがて低く垂れ込めた雪雲から、白いものが舞い降りてきはじめた。

それは風とともに増えはじめ、気がつくとも周りが見えないほどの吹雪へと姿を変えた。



「もう少しで、今夜休息をとる洞穴だ！ 前を見失うな！ 声をあげろ！」

突然、凜とした張りのある少年の声が響き渡った。

(……?)

ルナは声の主を探した。

だがその姿は、吹きつける雪に阻まれてどこにいるのか、どこから呼びかけているのかわからない。

なのに、声だけはどこにいるだれよりも近く、鮮明に聞こえるのだ。

その時、ルナは自分の体に不思議な異変が生じたことに気がついた。

声が聞こえたと同時に、全身を包んでいた苦痛と疲労感が一瞬にして消え去ったのだ。

まるで今までの疲労が嘘だったように苦痛は取り払われ、体温が上昇し、全身に活力がみなぎっていく。

期せずして、少年たちの間から歓声がわいた。

これを、待ってたんだ。

ルナのもう一方の意識が、思い出したようにつぶやくと、それに連動するようにルナも思い出す。

そう、これまでもこうして苛酷な険路を乗り切って来たのだ。

アウシュダール殿下の不思議な力が、ずっと守ってくれる。

自らの別の心の声に、ルナは震え不安を覚えた。

アウシュダールの与える力が、この隊列に満ちあふれていた。

恐怖感も感じず、隊列を乱すことさえなく少年兵たちが、何度も死地をかくぐって来たのはすべて、この力があればこそなのだ。

ルナはそれを知り、感じながらもますます不安を募らせた。

あの声が子供たちを、兵士らを励ますたびに、ノストール軍は生氣を取り戻し活気づき、すべてを乗り越える力を得ていたのだ。

山越えがはじまって以来、少年兵は誰一人として荒れ狂う吹雪に怖じけづくことなく、脱落者さえ出さず、果敢にここまで来た。

長い夜も、少年たちの間では王子の不思議な力や、その勇姿を間近で見た者たちの話でもちきりだった。

親元を離れた寂しさなど微塵も感じることのない、興奮と楽しい日々が過ぎるだけ。

だから、いま吹雪は目の前にいる少年たちは互いの姿をかき消すほど苛酷な状況のなかに身を置いていても、だれも歩みを止める者はいない。

ルナは自分にどれほどの身体の自由がきくのか試すように、首に巻き付けた緑色の厚い布でできたマフラーを鼻の上まで引き上げ、同じ色の帽子を目深に被った。

針のような雪が、露呈した顔に突き刺さるのもこれで多少は防げる。

全身はすでに真っ白く雪に染まり、衣服に降り積もる。

一面の白い世界。視界はないに等しい。

前を歩く少年の足元だけを追って行くのだけが、精一杯だった。

ふと見上げると、周囲は徐々に暗闇へと変じていった。

日が暮れたのかもしれない。

吹雪はさらに強まり、白銀の世界をただ黙々と歩き続けるルナの意識もぼんやりとはじめていた。

どこかで何かを考えることを放棄しようとしている心があった。

考えること自体が面倒になる。

その中で、ルナはいくつもよぎっていく疑問に心を集中しようとした。

(どうして、誰も歩くのをやめないんだろう……。どうして、ぼくは兄上を探しにいかないんだろう……。なんだか……。心が、消えちゃいそうなのに……)

人形のように歩き続ける少年たちの中で、ルナは一人、雪を降らせる暗闇の空に垂れ込める灰色の空を見上げた。

あの励ましを送るアウシュダール王子の声を聞いてからは、雪の中を歩いていることに心地良さをさえ感じていた。

(本当に……なんだか夢の中にいるみたいだ……)

ルナが、ほほ笑みさえ浮かべてそう思ったとき、突然目の前を歩く少年の体が消えた。

(え……?)

ルナは驚いて顔を上げた。

しかし、次の瞬間ルナの体もその場からかき消えたのだ。

(な……に……?)

歩いていたはずの地面が消えていた。

体は反り返り、両手は投げ出されていた。その手の向こうに細長い白いものが見えた。

(空……?!)

支えになるものが何ひとつない中、体の自由が効かないルナは闇の中にいた。

(どうして……?)

自分の身に何が起きたのか、夢見心地のぼんやりとした思考と、視界がきかない漆黒の闇の中では、何が起きたのかさえわからなかった。

だが、呼吸ができないほど体に加えられる圧迫感と耳元で叫び続ける轟音が、突然ルナの意識を鮮明にした。

過去の記憶がいきなり蘇ってきたのだ。

五歳のとき、メイベルに追い込まれ崖の上から飛び降りたときの感覚　五感に刻みつけられた恐怖の記憶が、「落下」を知らせた。

その先には、ただ死が待っていることを。

「リユーザああ ！！」

墜落する恐怖の中で無意識のうちにルナは叫んでいた。

いつもそばにいた、いまはもういない自分の守護妖獣の名を。

その時、まるで声に反応したように、ルナの体がグンと反動をともなつて止まり、そして急速に上に引き上げられていった。

「……………」

一瞬、分離したような奇妙な感覚が残る。

助けて……………！

(……………?)

ルナは、あわてて闇の底へ目を向けた。

だが、見えない力は自分の体をぐんぐんと引き上げ、目で追おうとするものから引き離していく。

ルナは、この力がリユーザのものではない別の力であることに気がついていった。

幼いころからいつもそばにいたリユーザの気配を、一瞬であれルナが間違つことはなかった。

追うべき何かから引きはがされ上昇していくルナの目に、次々と闇の中に落ちて、そして闇の中へ消えて行く少年たちの姿が映し出される。

顔を引きつらせたまま、驚いた表情のまま、あるいはほほ笑みを浮かべながら、落ちて行く少年たち一人ひとりの顔が大きく、鮮明に見える。

(な……………に……………? 何が起きたの……………?)

何も知らない彼らが絶壁に踏み出し、上から落ちて来る姿に、ルナは恐怖で叫び出しそうになった。

だが、ルナにそれを見せつけている力は、それを許す間もなく、闇の中からルナの体を雪荒れ狂う空中へと引き上げる。

そして、崖下から地面、そして宙に舞い上がった瞬間、ルナはそれを見てしまった。

切り立った崖に向かって真つすぐに突き進んで来る少年達の隊列。何も知らぬまま絶壁に足を踏み出し、滝のように次から次へと落ちて消えて行く大勢の少年たちの姿を。

思わずそらしたルナの目が、吸い寄せられるようにある人物をとらえた。

行進してくる少年達と反対側の崖にいる人物。

落ちていく少年達を冷徹な瞳で見ているだけの、馬の背にまたがった少年の姿を。

(あいつ……！)

その顔を見た瞬間、ルナの全身の血が逆流した。

驚きと、怒り、恐怖と疑惑　あらゆる感情が次から次へと沸き起こり、戦慄が走る。

ルナがアルティナ城から追われる数日前に、城で出会った少年。村人がすべて惨殺されたシャンバリア村で、ただ一人生き残ったというあの少年の姿があったのだ。

城の園庭でのたった一度だけ出会う。

だが、ルナの心に言い知れぬ恐怖を植え込んだ少年。

その姿が、いま目の前にあった。

アレガ、ノストール第四王子アウシュダール。

突然、耳元でヴアルツの声がルナにささやきかけた。

ルナは声に脅えながらも、必死に否定しようとした。

「違う……違う。だって、あれは……あいつは……」

だが、喉になにかが詰まったように言葉にならない。

ある神ノ息子……しるく・ととう神ノ転身人……破壊ノ神……

スベテヲ己ガ望ムママ、争イヲ起シ闇ニ変エル神ノ化身……。

声は、楽しげに告げる。

どこかでやはりそうだったのかという思いと、絶対に認めたくないという拒絶する思いが交錯する。

受け入れれば自分が誰なのかわからなくなってしまうそうだった。ルナに、ヴァルツの言葉は届いていなかった。

「違う……あいつだけは違う！ あいつだけは、絶対に違う！！」  
僕のを……返せ……！」

ルナの耳の奥に、城で出会ったとき投げかけられた声が蘇る。

(あいつが……)

ルナは、何度も何度も首を思いきり横に振った。

「……本当の王子なら、こんなことはしない。ノストールの民だ。こんなひどいことをどうしてするんだ？！」

カルザキア王が予言にしたがって殺したという第四王子の影が、アウシュダールと重なっていく。

馬上で、絶壁に踏み出し落ちて行く少年達の姿のを楽しんでいるように、口元に笑みを浮べるアウシュダールの姿に重なっていく。

「みんな……ノストールの民なのに……友達なのに……」

ルナは、自分のつぶやきに、あの中にマーキッシュの村で遊んだ友達がいるかもしれないことに気がつく。

父や兄たちと訪れた町や村で出会った子供たちがいるかもしれないことに。

そう感じた瞬間、ルナは見ているだけの自分にハツとした。

「助けないと……みんなを助けないと……！！」

今は自分にとってのアウシュダールの存在を気にしている場合ではないと、迷う心を断ち切るように、大声で叫んでいた。

「あいつが、みんなをあんな崖に誘っているんだ。やめさせないと！」  
だが、ヴァルツは耳元で意外な言葉を口にした。

クククク……無駄だ……。コレは過去ノ記憶……。吹雪ヲ起コシ、子供ダケヲ……。コノ死ノ谷ヘト導キ殺シタ……。アノ王子ハ、モウココニイナイ。才前ガ見テイルノハ、闇ガ見テイタ、過去ノ記憶……。才前ニハ……。何モ出来ナイ……。見テイルダケダ……。

「何言ってるんだ？ だって今……！！」

見下ろすルナの目にアウシュダールの笑みが妖しく映る。

「さあ、もう少しだ。もう少しで全員が眠る場所にたどり着けるよ」  
アウシュダールは、透きとおった声で少年たちに呼びかける。  
その声はどれほど離れていても吹雪であっても、少年たちの耳に  
心地よく届くことをルナは知っている。

声は導く。

少年たちが雪の中へ、まっしぐらに断崖へ向かって歩み続けるよ  
うに。

「やめろおー！」

ルナは叫びながら、目の前で起き続ける惨劇をこれ以上直視する  
ことに耐えられずに、両目を閉じた。

しかしヴァルツが見せる闇の記憶は、ルナがどれほど目を閉じよ  
うとも消えることなく、閉じたはずのまぶたの中にさえ映し出し続  
ける。

少年たちが足を踏み出すたびに、その姿が崖の中に呑み込まれて  
いくたびに、闇が少年たちの姿を隠してしまうたびに、ルナの心に  
激痛が走った。

まるでいくつも鋭い刃が、体を貫くような激しい痛みが走り抜  
ける。

落ちていく少年たちの数だけ、ルナの上げる悲鳴の数だけ、繰り返し  
返し繰り返し深い傷その心に刻み込んで行く。

(どうして……)

ルナの綴じた瞳から、涙が流れていく。

何もできずに見つめている自分の無力さが悔しかった。

(どうして、こんなこと。こんなひどいことをするんだ……)

冷笑を浮かべながら見つめているアウシュダールに対して、ルナ  
は憎悪を抱いた。

(あいつ……絶対に許さない……)

やがて、長い隊列を組んでいた少年兵たちの姿はどこにも存在し  
なくなっていた。

真っ白な雪のなかに踏み締めた多くの足跡だけが、そこに少年た

ちがいたことを示す唯一の証しだった。

その足跡さえ、やがて降り積もる雪が覆い隠してしまう。子供たちはどうなったのだろうか、思いを走らせた時、アウシユダールの左手がスツと上にあがった。

ルナは、はつとして綴じていた翠色の大きな瞳を開いた。  
(終わらない？ まだ……なにかしようとしている……?)  
アウシユダールの声が、無人となった断崖で響き渡る。

「我、これよりいよいよ待ち望みし災いの種を断ぜん。大いなる力の源よ、闇の主よ、われに誓いの力を与えたまえ。今まさに、われが主となる光！ いまわしき災いに楔を打ちつけん！ 未来の祝福の光を、ここに下したまえ！」

アウシユダールの言葉が告げられると同時に、突然真つ暗な天空が青白く光った。

不気味な光は渦を描き出し、雷鳴がとどろく。

次の瞬間、渦の中から光の柱が出現したかと思うと、吸い込まれるように少年たちが消えた死の谷めがけて堕ちていった。

「……！」

一瞬の静寂　そして爆音と閃光が巻き起こった。

さまざまな光の渦が谷底からあふれ出していく。

ルナはあまりのまぶしさに手で顔を覆い隠すが、光は目の奥にまで強烈な閃光でルナを貫いていった。

膨れ上がった光は、膨張し炸裂すると、天空へ向かって光を放ちはじめた。

熱風が爆風によって、崖周辺一帯に襲いかかる。

高熱が一面にあった雪を消し去り、草や木を焼き払い、なぎ倒す。その強烈な爆風と光の中で、アウシユダールは涼しげにほほ笑んでいた。

「これでいい。これで……終わりだ。すべては、おれのもの……」  
ちいさな呟きが、はつきりとルナに届く。

アノ王子八、皇太子軍カラ少年兵達ノ存在ソノモノソヲ記憶力



ラ失ワセテシマツタ。クククク……面白イ奴……。マサニ破壊ノ神……。  
ルナはアウシュダールに怒りや憎しみ以外のなにも感じなくなっていた。

クククク……アノ王子ガ憎イダロウ……。  
ヴァルツは、ルナの感情を逆なでするように、惨劇を楽しんでいた。

ルナは声に反応示さないまま口を固くむすんでいた。

クククク……。カラチヲ貸シテヤロウトイウ我ガ手ヲ、マダ拒モウトイウノカ……。ナラバ、見セテヤロウ……。アノ王子ガ残シタモノヲ……。

言葉が終ると同時に、巨大な力がルナの背中を押した。

すると、今まで宙に浮かんでいたルナの体は、糸が切られたように真つ逆さまに落ちはじめた。

少年たちが消えていった崖の奥底へ向かって。

ソコデ……。怒リヲ満タシ……。己ノ心ヲ見ツケヨ。恨ミヲ募ラセヨ……。復讐ノ炎デ、ソノ身ヲ焦ガシ……。己ノ無カヲ知ルガイイ。我レニ呼ビカケヨ……。カヲ与エヨト……。のすとーるノあうしゅだーる王子ヲ殺スチカラヲソノ身ニ与エテヤロウ。

闇の中でヴァルツの声だけがルナを包む。

ククククククク……。

闇の妖獣の笑い声は、闇に落ちて行くルナに向かい幾重にもこだましていった。

どれほど長い時間が過ぎ去ったのか、倒れていたルナの緑色の瞳が開いた。

最初にその目に映ったのは闇と、闇の彼方に川筋のように見える上空の細長い光。

ぼんやり見ていると、それが青空だとわかる。

暴走する馬。子供の悲鳴。先を歩くネイ。倒れていた子供がネイの手首を掴んだまま離さない。

おまえたちなんて……本当は、あのまま馬ごと崖から落ちて死んじゃえば良かったんだ。

父カルザキア王を殺した少年がいたのを思い出す。

ルナの意識は一瞬にして覚醒した。

「ネイ？」

ルナは、体を起すとネイの姿を探した。

どこまでが現実で、どこまでが夢だったのか、いまのルナにははっきりしない。

それでも、目覚めて真っ先に浮かんだのはネイのことだった。

立ち上がるうとして、自分の手が何かをつかんでいるのに気がつく。

「……………」

目が暗闇になれるのを待ち、手をたどり横を見るとそばで倒れている人物がネイだとわかる。

「ネイ……………」

自分がネイの手を離さないでいたことに安堵する。

安心をすると同時に、ルナはネイに声をかけた。

「ネイ、大丈夫？ ネイ……ネイ？」

反応しない状態に、ルナの声は自然に大きくなる。

ネイの体に手をかけた身体をゆする。

「ネイ！ ネイ！ 起きてよ、ネイ！」

まさかという恐怖感と、握りしめた手の温かさに、そんなことはないという思いが交錯する。

「ネイ！」

「……ジーン？」

やがてネイの唇から自分の名前が呼ばれると、ルナはほっとして力なくその場に尻もちを着き、崩れるように座り込んだ。

安堵感が胸に広がる。

「あれは……夢だったのかな……」

目を閉じたまま、両手で顔を覆うネイの言葉に、ルナは顔をこわばらせた。

「ジーン……あたしさ、目を開けるのがこわいよ……いまこの場所に、あの子たちの姿があるんじゃないかって思うと……あの夢が、現実に来きたことなんじゃないかって思うと……」

ルナは、その言葉に胸を突かれた。

闇が見せた少年たちの記憶を、ネイもまた共有したのだ。

「だ…大丈夫だよ。ここは崖の底みただけで、ケガもしてないし、それに誰も……」

誰もいない……と、闇の中を見まわしたルナの視線が凍りつく。

「ジーン、どうしたんだい？ なにかあったの……？ ジーン？」

ネイの手が、ルナの手を強く握り締めた。

「……」

ルナはぐつと息をのみこむと、震える声で告げた。

「暗くて見えないけど、でも目を……あけちゃ、だめだ……」

その言葉に、ネイの声は震えた。

「ジーン……？」

「ネイは、ここにいて……」

ルナはゆつくりと、ネイの手をほどくと、痛いほど唇をかみしめながら、一步、また一步と乾いた地の底を歩きはじめた。

その視線の先には、いくつもの闇の塊が見える。

ルナはまだそれを確認する前から、震え出す体をどうすることもできなかった。

クククク……。

あの声が耳元で笑う。

だが、ルナはそれを無視するように、その闇の塊を凝視しながら、近づいていく。

闇の中で、ルナの小さな靴音だけが響き渡る。

その足に、何かがあたった。

「……………？」

顔をこわばらせたまま、ゆっくりと視線を降ろしたルナの目に飛び込んで来たのは、全身を真っ黒に焦がしたまま目を開け息絶えている少年の骸だった。

夢は、現実だったのだ。

その少年の足元にも、その横にも、その先にも、焼け焦げた少年兵たちの無残な姿が続いていた。

「……………」

ルナの脳裏に、崖下へ落ちて行く少年たちを笑いながら見つめるアウシュダールの顔が蘇る。

激しい怒りが込み上げてくる。

「ひどい……………」

ルナと同じ年の、故郷の子ども達だった。

王家を信じて、アウシュダールを信じて、家族と別れてエーツ山脈の険しい山々を越えていた少年たちだったのだ。

「あいつ……………」

ルナの緑色の瞳が怒りに満ちていく。

ククク……………ソウダ……………モット怒ルガイ……………。

ヴァルツは、じつとその時を待っていた。

ルナがアウシュダールへの復讐に、我を忘れ、怒りに満たされるのを。

ルナの中の潜んでいる闇の深さをヴァルツはイルダーグと闘った

一瞬にかいま見ていた。

ルナの心の闇を引きずり出したいと待ち受けていたのだ。

だが、次の瞬間ルナが取った行動は、ヴァルツの予想もしていないものだった。

ルナは、少年の体にひざまづく、開いたままの少年の瞳に手を当てて、まぶたをそつと綴じたのだ。

一人終わると、その横の少年、またとなりの少年と、何かを探すように形の残る少年たちの中をさまよい歩き始める。

折り重なりあっている死体を、抱き降ろしては地面に横たえ、まるで一つ一つの遺体を確認するような行動。

……………。

影は、ヴァルツは沈黙した。

少年たちの死骸の山を前にした時のサトニのように、恐怖に打ち震え泣き叫ぶことを望んだのだ。

怒りに我を忘れ、闇に心を染める時を待っていたのだ。

だが、ルナはヴァルツの計画を裏切るように、死した少年たちの骸に向きあい続ける。

ナニヲ……シテイル……？

ルナの耳元で、低く脅迫するような声が響く。

「……………」

しかし、ルナはその声を無視したまま、手や体が汚れるのも構わず、焼け焦げ、顔の判別さえつかない少年たちをそつと横たえ続けた。

アウシュダールの最後に放った落雷のような光りを受けて、多くの子ども達は全身が炭化してしまっていた。

なかには焼けていない死体も存在したが、それさえも体の一部が欠けてしまった者、首や腕が崖から落ちたときの衝撃で折れ曲がったものなど、直視出来ない地獄絵図がそこに繰り広げられていた。

「……で……いて……」

ルナは、大粒の涙をボロボロとこぼしながら少年であった者たち

を横たえて行く。

恐ろしさや気持ち悪さといった感情は、いまのルナの中に存在しなかった。

時に自分よりも大きな体の死体が、体中の水分をすべて奪われ異常に軽くなっていることに驚きながらも、炭化し崩れていく体に悲鳴を上げそうになるのをこらえながらも、ルナは骸を横たえ続けた。

「誰か……生きていて……」

少年たちの無残な死体の山を目にした瞬間、アウシユダールに対する怒りが込み上げた。

だが、それ以上にルナの心を占めたのは、「生きていてほしい」というその願いだけだった。

そう思ったときは、体が動いていた。

「生きていて……」

無駄ダ……生キテイル者ナド、一人モイナイ。

声はすべてを見通しているような、尊大な口調でルナにささやきかける。

だがルナは、何度も何度も子どもたちを抱きかかえては、地面に横たえ続けた。

鼻をつく肉が焦げて炭化した異臭も、自分の体に付着する死臭や肉片や血や汚れも、今のルナには意識の外だった。

「生きててよ……生きてるなら……いま……助けてあげるから……」

涙と汗で、顔を濡らしながら、しゃくり上げながら、ルナは遺体たちに声をかけていく。

その時、

「いやあああああつー!!」

突然響き渡ったネイの悲鳴が、ルナを凍りつかせた。

「ネイ？」

振り返った闇の中に、立ち上がったままルナを見つめているネイの姿があった。

いや、目を凝らしてみるとその姿は少し宙に浮いているようにも見える。

闇で見えないはずなのに、そこだけがまるで薄明かりがさしたようにつま先立ちをしたまま、両手を上に引き上げられ苦しげに顔をゆがめているネイの姿が見えるのだ。

生キテイル者ガ、目ノ前デ死ンデイク……。怒リガ心ニ満チル。才前ガ我ヲ選ブナラバコノ者ヲ助ケヨウ。我ニ「力」ヲ求メヨ。才前ハ、ソレデ解放サレル……。死ンデイツタ子供ヲノ為ニ復讐ヲ叶エテヤル。さとにノヨウニナ。弱キ存在ヨ……。ヴァルツの聲が耳元で響き、ルナに答えを迫る。

「ネイを放せ……！」

ルナは大声で叫んだ。

ココハ、我が領域。光ノ神ルーフ、サエ、片目ヲ綴ジテ覗キ込マネバ見エヌ深淵……。興味ガアルノハ、才前ノ心……。

「ネイをはなせと、言っているんだ!!」

クククク……ソウダ……ソノ調子ダ……。

ヴァルツの聲が嬉しそうに笑う。

ネイのいる場所から、ルナは離れ過ぎていた。

ネイを捕らえているのが父とイルダーグを死に追い込んだあの影、ヴァルツそのものなのか、闇が濃すぎてルナには見ることが出来ない。

まして妖獣に、ルナが闘いを挑んで勝ち目があるとは到底思えなかった。

それでもルナは、ネイに向かって猛然と走り出していた。

走りながら、斜め掛けをしている身につけた袋の中をまさぐり、唯一の武器である木製の短剣を取り出す。

ヴァルツが指したサトニという名があの子ならば、その剣はサトニが父を殺した城の中で落として行ったものだった。

最初のヴァルツとの遭遇のあと、ルナは初めてこの短剣は刃の部分さえ木で作られた剣だと知ったのだ。

そうとは知らずに闘ったあの時、この木の短剣は確かに影の体に突き刺さった。

父カルザキア王の守護妖獣イルダーグさえ死に追いやった妖獣の体を。

妖獣と呼ぶべきなのか、異なるものなのか、それさえルナはまだ知らない。

唯一の武器であるその短剣の柄をルナは握りしめた。

「ネイを離せ！！」

暗闇の中、少年たちの死体を飛び越えて、天から覗く細い青空を頭上に、ルナは無我夢中でネイに向かって走った。

「ジーン！」

「ネイ！！」

ネイのもとへたどり着いたルナは、上昇していくネイの足に抱きつくくと、必死に下ろそう力いっぱい引つ張る。

と背後の闇に向かって剣を突き付けた。

その手はむなしく空を切る。

ククククク……。

ヴァルツのあざけるような笑いが闇に響く。

ルナはそれでも、あきらめずに何度も、何度も闇を切りつける。

「ジーン……」

ネイは自分の足に必死にしがみつくるルナを見下ろしながらただ、その名を震えながら呼ぶことしか出来なかった。

「ネイを降ろせ！ ネイはだめだ！」

ソウダ……モット、モット……怒レ……。



声はルナの心を激しく揺さぶり続けた。

我レニ、『力』ヲ授ケルト告ゲレバ、女八解キ放ツ。

「やめろ！」

望ムナラバ、さとにヲソノ手デ殺サセテヤル。

「うるさい！」

声は、ルナが怒り、あがき、苦しみの感情を出せば出すほどそれを喜んでいた。

「ジーン、絶対にいうことをきくんじゃないよ！」

突然襲撃されて混乱しながらもそう叫ぶネイの声が、ルナの心を締めつけた。

「魂を売るのはだめだ。そんなことをしたら、イリア姉さんが悲しむ」

ルナはどうしたらよいのかわからないまま、ヴァルツの体を求めて闇を切りつけ続けた。

だが、やがてネイと、しがみつくルナの足さえ地面から離れ始めようとしていた。

「やめろ！ もう……やめろー！！！」

ルナの声が悲鳴に変わった。

我レ誓エ。スベテヲ与エル、ト。

「う……」

ルナの言葉が詰まる。

もうこれ以上、自分のせいで誰かが死ぬのは見たくなかった。

怒りと、絶望で心に迷いが生まれたその時、

「誰かいるのですか？」

何者かの声が響き渡った。

「?!」

ルナが声の方を振り返ろうとするよりも早く、ネイが大声で叫んでいた。

「ここにいるよー！ 誰でもいいから、早く助けてよー！」

振り絞るような絶叫に、あわてて駆けてくる足音が響き出す。

「どうしたのですか？」

男とも女ともとれる声呼びかけた。

「あたしはいいから、この子を受け止めてよ！」

声がすぐそばまで近づいて来たのを確認すると、ネイはしがみついているルナを振り落とそうとするように体をよじり始めた。

「ネイ、だめだよ！ 絶対に離さない！」

ネイが、ルナの身だけでも助けようとしているのを感じて、ルナは驚きながら振り落とされないように残る力を出してしがみつく。

「命じます！」

突然あらわれた人物は、ルナたちを危険に陥れようとしているヴァルツに対し、まるでその姿が見えているかのように毅然と言い放った。

「闇に似せし存在よ！ すぐに戒めをときなさい！ 影なる者よ！ 深淵と暗闇の神の眠りを盗む者よ！ いますぐこの場におり伏せよ！」

朗々と響く力強くも、澄んだ美しい声が叫んだ瞬間、

……！

急にヴァルツの持つ力が弱まった。

「わが祈りにその力を閉ざせ！」

な………?!

次の瞬間、突然ルナたちを吊り上げていた力が消滅し、糸が切れたようにネイとルナは落下し、勢いよく地面にたたきつけられた。

……邪魔が……

苦しい声が確かにそうつぶやいたかと思うと、ヴァルツの気配が一瞬にしてかき消えた。

「大丈夫ですか？」

思ったよりも遠くにいた人物は、駆け寄って来ると心配そうに二人を交互に抱き起こそうと手を差し伸べる。

ルナはその人物を確かめなくてはいけない気がして、地面に打ちつけられた痛みとショックに耐えながら、起き上がるうと地面に手

をつけ力を込める。

そのルナの目に飛び込んで来たのは、意外なことにアンナの一族の装束だった。

「……？」

緑色の瞳を大きく開きままポカンとした表情のまま、動かなくなってしまうルナに、その人物はほほ笑みかけた。

「私は、ソル・アンナの一族の者で、エリルといえます……」

エリルはそう名乗りながら、涙と泥で汚れ切っているルナの頬にそっと触れた。

暗闇の中なのに、心配そうに見下ろす瞳がはつきりと見えたような気がして、ルナの張り詰めた気持ちがち落ち着きを取り戻していく。エリルと名乗った人物は、ルナの横で苦痛に声を上げながら身を起こしたネイに心配そうに声をかける。

「お怪我はありませんでしたか？」

「うん……ちょっと、あちこち打ったけど……平気……助けてくれてありがとう……」

ネイは感謝の言葉を口にした後で、しばらくじっとエリルを見つめた後、不思議そうに質問をした。

「でも、あんた一体どこから来たの？」

ネイは、サト二のことがあって間もないことから、この崖底に突然現れた人間に対し、思わず警戒をする口調になっていた。

「私はずっと、この場所を求めて今日まで旅をしてきました。そして、やっとたどり着いたこの地で、子供の悲鳴を耳にしました」

思わずルナとネイが顔を合わせる。

その悲鳴　サト二の声　　がふたりをこの場所へ導いたのだ。

「ですが、どこにも声の持ち主を見つけることができませんでした。あきらめ機種依存文字にかけていた時、わたしの目の前に一頭の馬が現れたのです。その馬が私を、この死の谷へと続く洞窟の入口へと導いてくれたのです」

「死の谷……？」

「馬が私の背を押して、洞窟に入れと言うように背中を顔でグイグイ押すものですから、早く行けと命令されてる不思議な気分でした。でも、その洞窟はここにつながっていました。リンセントースの国境で聞きました。エーツ山脈には死の谷と呼ばれる巨大な裂け目がある。そして、その谷底に通じているいくつかの洞窟がある。あの馬にはそれがわかったのでしょうか、あなた達がここに迷い込んで危険な状態にあることを」

小川が流れるような静かに語られるエリルの透き通ったような声と言葉に、ルナとネイは言葉を信じられない話しに互いを見るだけだった。

「主人思いの良い馬をお持ちになられましたね」

ほほ笑まれて、ネイは頭上彼方にある空を仰いだ。

村から盗んで来た馬だとは……言えないよなあ……。

「あ、あたしはネイ。この子はジーンっていうんだ。ありがとう。助けてくれて、本当にありがとう」

ネイはエリルの両手をとると、心底ほっとしたように笑った。

その笑顔がけっしてネイ自身が襲われて助かったことに対する喜びではなく、ジーンに向けられたものである様子に、エリルは不思議な思いで二人を見つめていた。

「とにかく、早くここから出しましょう」

エリルが立ち上がると、ルナははっとした表情で少年たちの骸のある場所を振り返った。

「いいよ。待つてるから……あんたの気が済むようにしてきな」

ルナの心を察するようにネイが声をかけると、ルナはエリルにペコリとお辞儀をして、身軽に起き上がるやいなや、そのまま闇の中に走り出してしまった。

「あの？」

戸惑うエリルにネイは目を伏せた。

「あの先には、この崖の上から落ちて死んだ子供達の死体がある……」

「……………?! まさか……………あの……………夢。幻じゃなかった?」

「え? あんたも見たの? あの化け物が見せた何時間も前の、落雷が落ちたときの……………」

ネイの問うような表情に、エリルは悲しげにうなづいた。

「私はここへ降りてくる途中で、起きているにもかかわらず、ずっと幻を見続けていました……………。雪の中を歩き続ける少年たちが、崖下へ落ちて行く光景……………そして、落光。夢なのか現実なのか……………、あまりの悲惨さに震えが止まりませんでした……………」

ネイはそう語るエリルの顔をじつと見つめると、声を詰まらせながら言った。

「あたしも……………あの子も……………その幻を見たんだ。でも幻なんかじゃない。現実を起こったことだったんだ……………なのに……………」

ネイは何度も何度も唇をかみしめ、深呼吸を繰り返してから次の言葉を、やっと口にした。

「あの子は、全員の死を確認するまでここから出ないと思う……………」  
その言葉に驚いたように、エリルはルナの去って行った暗闇を見つめた。

「誰か生きているかもしれないって、そう信じてるんだ。一人でも生きている子がいるかもしれないって。だから、その思いを残したまま立ち去ることは出来ないらしい。けど……………あたしには出来ない。あの死体を見るのが、怖くて怖くて……………一緒に……………一緒に探してあげられないんだ……………」

ネイはそこまで言うつと、ひざを抱えたままうずくまり、声をこらして泣きはじめた。

「手伝ってやりたいのに……………」

ネイの言葉に、エリルは信じられない表情で立ち尽くしていた。  
深淵で出会った少女と少年の素性も、雪深いエーツ・エマザーのふもとにいる理由も、なぜ妖しの者に襲われていたのかも、そして生きている可能性などない死体へ向かう少年の思いも、いまのエリルにはすべてが謎だった。



テセウスはエーツ山脈を越えた日の夜から、奇妙な夢にうなされ続けていた。

『テセウス殿下、子供達の姿がどこにもありません！』

『探せ！ あの子たちを置いたままこの山を進むことは出来ない！  
なんとしても捜し出すんだ！』

前さえ見えない吹雪の中でテセウスは声をからして叫んでいた。

『アウシュダール！ アウシュダールはどこだ！』

兵士たちが、慌ただしく馬首を引き返して行く。馬のいななき、蹄鉄の音。騒然とした状態に包まれる中で、テセウスはアル神に強く強く祈り続けていた。

我が民とともにある神よ！ 子ども達を守りたまえ！ この身に代えても守りたまえ！

ノストールの軍に前後を挟まれ、守られるように歩き続けていた多くの少年兵たち。

その隊列が、アウシュダールの姿が、吹雪とともに、忽然と姿を消してしまつたのだ。

アル神よ！ 子ども達を守ってください！ どうか！！  
荒れ狂う雪に阻まれ、視界はきかない。戻るも行くも危険であつた。

引き返す！ このまま一步も前に進むことなど出来るか！

馬から降りて、歩きだそうとするテセウスを、引き留める腕が左右から伸びてくる。

おやめください！ 一步間違えば殿下のお命にかかります！

子ども達の命は？ 離せ！ 行かせてくれ！

顔をたたきつける雪の痛みに耐えながら、テセウスは叫んだ！

「……行かせてくれ！」

自分の叫び声に目を覚ますと、シンとした空気がそこにあつた。

夢の中の喧噪がかすかに耳に残る。  
見上げているのは薄暗い天幕の布。  
テセウスは、ぼうぜんと目の前の光景を見つめた。よけいなもの  
などない殺風景で静かな天幕の中を。

「まただ……」

テセウスは両手で顔を覆った。

全身からは滝のように、吹き出した汗が流れ落ちている。

どのような夢を見ていたのかはまったく思い出せない。

だが、忌まわしいほどの罪悪感、嫌悪感が全身にまとわりついて  
離れなかった。

『テセウス様……』

簡易寝台の横で、テセウスの守護妖獣がじっとテセウスを見つめ  
ていた。

「ザークス……」

ふだんは主人であるテセウスの前にさえ実体を現さない守護妖獣  
が、この旅の中ではしばしばその姿を見せた。

一見すると、犬や狐にも似ている。だが黄金色の体毛と、その背  
にある羽と長い尾は明らかにふつうの獣ではないことを示していた。  
丸いクルクルとした瞳と、小動物のような愛らしい表情をテセウ  
スは気に入っていたが、両親や他の兄弟たちの守護妖獣と異なって、  
ザークスは主人に対してもほとんど姿を見せない。

常にそばにいるはずなのだが、テセウス自身ザークスの姿を長い  
時間見ていたという記憶がないのだ。

だから、幼いころは自分には守護妖獣がないのではないかと思  
いかけたこともあった。が、そういうときザークスは必ずテセウス  
の前に姿を見せて主人を安心させた。

また、ザークスは主人であるテセウスの名を呼ぶ以外の言葉を発  
することが稀にしかなかった。

『姿を見せないというのは、その必要がないということだろう。守  
護妖獣は、お前自身よりもお前のことをよく知ってるものだ。すべ



ては意味のあることだ。ささいなことも見逃さないようになる』  
父カルザキア王は、悩んでいるテセウスにそう語ったことがあった。

そのザークスが、このところ頻繁に姿をみせるようになった。もちろん、テセウスが一人だけの時に限られていたが、それは間違いなく意味のあることのように思えた。

『テセウス様……………』

様々な色に変化するザークスの瞳が、警告を示す赤に輝く。

この数年間、ザークスの見せる瞳はずっと赤色のままだった。

穏やかな青や緑色の瞳を見たのはいつのことだったか、テセウスは思い出せない。

普通の獣のように無邪気に戯れる姿を見たことがあった気さえする。

その時、ザークスの瞳は黒く、そして茶のかかった美しく穏やかな色に輝いていたはずだ。

(そんなこともあった……………でも、いつだっただろう……………思い出せない……………)

ザークスが何を警告し続けているのか、テセウスはその意味するものが、わからない。

言葉を話せないわけではないのに、語ろうとしない。

エーツ山脈を越えてリセンステートスへ行く命を受け旅立つ朝も、ザークスは枕元でじっとテセウスを見つめていた。

「教えては……………くれないのか？」

テセウスは問いかける。

『……………』

だが、いつものように守護妖獣は何も答えぬまま主人の瞳を見つめ続けるだけだった。

ノストール軍はミゼア砂漠にいた。

どこまでも黄砂の大地が続く場所。

生と死を感じさせずにはいられない世界。

照りつける日差しは剥き出している肌に容赦なく突き刺さり、痛みを与える世界に身を置いていた。

砂よりもなお細やかな黄砂は、目や耳、そして鼻と口にまとわりつき、襲いかかる。

「雪といい、砂といい、たまりませんな。一步進むたびにノストールが恋しくなりますわい」

テセウスの横で、全身を一枚の布で身を覆ったシグニ将軍が言った。シグニだけではなく、テセウスもアウシュダールも皆が砂漠の照りつける灼熱の暑さと砂から身を守るために布を身につけている。馬も国境を越えてからは、砂漠に強いというトウという砂漠馬に乗り換えた。

「殿下……何か気掛かりなことでも？」

シグニ将軍が、朝から黙り込んだままのテセウスを怪訝そうにのぞき込む。

「いや……、ただ前に来たときと、違う道を進んでいるような気がするんだが……」

リンセンテートスの国境で、テセウスたちノストール軍を出迎えたのは国境警備に当たっているラシル王の娘婿にあたるドューグ公爵だった。

前回の結婚式のときにテセウスたちノストールの一行を迎えたのもドューグ公爵だったこともあり、互いに面識はあったが、ノストール軍が援軍として多くの兵を引き連れてやって来たというのに、表面上はともかく心から喜ばれているといった様子が感じられなかった。

もつとも、今回の要請自体がリンセントースからのものではなく、ナイアデスのフェリエス皇帝からのものであり、ひよっとするとリンセントースのラシル王はノストールの介入を快く思っていないのかもしれないと、テセウスは考えはじめていた。  
(ザークスはそれを教えようとしたのだろうか……)

どこかで自分を見守っているだろう守護妖獣の赤い瞳が、頭から離れない。

テセウスがなおも思い詰めた表情をしていると、シグニ將軍の伝言を受け、先頭を案内していたリンセントースのデューグ公爵の乗る馬がやって来た。

「言葉が足りずご心配をおかけしたようで、おわび致します」

デューグはやや神経質そうな面立ちで、テセウスに事情を説明した。

「殿下が前回おみえになられたときと、今とでは途中で水を補給するための湖の場所が移動しております。我々も城へ戻るのは半年ぶり。湖とともに移動する砂漠の民がこの先にいるはずですので……」

「湖が動くのか？」

テセウスは驚いた表情でデューグ公爵を見つめた。

「ミゼア砂漠は神秘の源です。湖が消滅や移動、そして突然現れることは驚くべきことではありません。砂漠の底に豊富な水が流れているという噂さえあるのですからな」

テセウスよりもふたまわり年上の公爵は、抑揚のない言葉でそう言うと、ちらりとアウシユダールに視線を投げた。

シルク・トトウ神の生まれ変わりであり、偉大な力をもつという王子を見る視線は、明らかにテセウスに対するものとは違う。

探るように、かいま見るのだが、けっして視線を合わせることはしない。

「興味深いお話ですね」

テセウスはデューグの話にあいづちを打ちながら、アウシユダールに声をかけようとして、その横顔がいつもと違う表情をみせてい

ることに気がついた。

「アウシュダール、気分が良くないのか？」

「いえ……大丈夫です」

うつむいたままそう返事をするアウシュダールの横顔は青白かった。

顔を覆っているフードでそれまで気がつかなかったのだが、声もどこか弱々しく、表情が固い。

「暑いのは皆も同じこと……気にせずに……」

言葉が終わらないうちに、アウシュダールの体がグラリと揺らぎ、砂漠馬から砂上に崩れ落ちた。

「アウシュダール？」

テセウスが驚いてトウから飛び降りると、デューグ公爵やシグニ將軍も、次々と馬からおり、アウシュダールを抱き起こすテセウスを取り囲む。

「……大丈夫……」

アウシュダールは朦朧とした意識で、テセウスを見つめた。体に力が入らなかった。

（山で……力を消耗し過ぎた……）

アウシュダールは、思うようにならない自分のからだを感じながら、内心皮肉な笑みを浮かべた。

（雪山を越え……あいつらを始末したまでは予定どおり……だが……この体力の消耗は……計算外……だった……）

目を閉じると、前後左右の感覚が失われた。

体が宙に浮きながらも、地面の上をはいずるような体の重さが苦痛だった。

全身はだるくほてるように熱い。

だが、それが砂漠の暑さなのか、自分の体の発熱なのかさえ区別がつかなくなっていた。

喉が焼けつくように熱かった。

「水を……」

求めるとすぐに水が口に注がれた。

アウシュダールは注がれるままに、体が求めるままに水を飲み干したが、どれほど飲んでも喉の乾きは癒されない。

(少しの辛抱だ……ほんの少し休めば……)

そう自らに言い聞かせる気持ちとは裏腹に、全身を襲う高熱の中、アウシュダールは意識を失っていった。

果てしなく続く砂漠の夜空に、輝く月が浮かんでいた。

銀盤の光が照らさなければ、煌めく星々と地上の区別さえつかなくなりそうな闇の中、地上に小さな灯火がひとつ落ちていた。

その火をいくつもの人影が取り囲み、夜の神のほほ笑みをえようとすのかのように、笑いさざめき、陽気な踊りを披露する。

褐色の肌と黒い髪をもつ砂漠の民ヤクンカの夜の宴だった。

大家族と家畜を連れ、オアシスと湖を追いながら砂漠に生きる人々。

彼らは、この日三年ぶりに雨に出会った。

ほんの一瞬の通り雨であったが、それは大いなる幸運を意味した。雨は彼ら砂漠に生きる者にとつて、首長の幸運、一族の幸運、そして食べ物に恵まれる幸運を予告する兆しだからだ。

「彼らは、私たちのことを ランレイ 幸運を運ぶ旅人 と呼んでいるのですよ」

薪の炎に顔を照らされながら、エリルがルナにはほほ笑みながら説明をする。

ようやくエーツ山脈を越えて、リンセントースへと出たルナたちは、兵士たちの目をかいくぐりながら国境を越えた。

そこには見たこともない一面の砂の大地が広がっていた。

時に黄色く、また白く、黄金色へと砂は太陽の光を受けてその色を変化させ、風の動きにあわせて緩やかに、激しく踊るように、優雅に風紋を作っていく風景。

初めて出会う穏やかで一面に広がる果てしのない砂漠の美しさに、ルナはしばらくぼかんと口を開けたまま見つめていた。

しかし、やがて風の向きが変わると同時に、ルナたちは手荒い砂漠の洗礼を受けた。

強風に舞い上がっ高と思うと、まるで吹雪のように襲いかかって

来たのだ。

砂は、目や口や鼻、髪の毛や服の中に飛び込み、全身を砂色に染め上げた。

目に入った砂の突き刺さるような痛みにも、手でこすろうとするルナたちをエリルの鋭い声が止めた。

「こすってはいけません。涙を流すのです。こすり続ければ失明しますよ」と。

死の谷から奇跡的に脱出することができたルナたちは、ミゼア砂漠を越えるというエリルと、道を共にすることになった。

「わたしは砂漠を越えた経験もあるので、お邪魔にならないと思いますよ。それにアンナの占者は存在自体が、魔よけですからね」  
そう言うのにこりとほほ笑まれると、ルナもネイも拒むわけにはいかなかった。

自分たちを死の谷から助け出してくれた恩人であったし、特にルナはアンナの一族に対して、特別な存在であるだけになおさらだった。

たとえエリルが、ルナの良く知っているアンナの一族たちとまったく異なる容姿をしていたとしても。

そして、砂漠の旅の第一歩目から、言葉どおりエリルは貴重な存在となった。

灼熱の砂漠を越えるすべを何一つ知らないルナたちは、結局エリルに案内されながら砂漠を進むしかなかったからだ。

リンセンテートスの国境沿いの村で商人や兵士たちから占術を行う代価として、トウラという大きな砂漠犬と、フードのついた薄い布地の長衣を調達してきた。

「遠慮は無用です。あなたたちといえることが幸運を呼ぶと、占術で出ているのですから」

エリルは、ルナが困ったように硬い表情を見せるたびに、そうほほ笑んで煙に巻いてしまった。

だが、当のエリルは 先読み の占術などできるはずもなかった。

村で行ったのは、顔見 や 言葉読み という占術とはいえない。それは、人を読む力をつけるために学ぶものであり、初歩中の初歩であり、こつを掴むとエリルでもある程度は言い当てるのが可能なものだった。

先読み はアンナたちにとっても習得するまでに長い時間が必要され、またすべてのアンナが習得できるというものではなかった。また、先読み にも種類があり、天の声を聞く 先読み は長や上級アンナに限られてきた。

むろん、エリルの手が届くようなものではなかった。

（あの闇の中にいた者は、また必ずこの子を襲ってくる）

ただ、エリルはルナを見ながらそう確信することができた。

（あのヴァルツという影が遠ざかるときのあの感覚は、これまでになかった。言葉が、思わずあの影に投げつけた口にしたこともない不思議な言葉が、奴にぶつかり、響きながらぼくの中に返ってきた……。あの感覚……。『エボルの指輪』はあの影に関するはずだ。ならば、この少年から離れるわけにはいかない……）  
そう決意をしたエリルの秘めた思いなど、ルナが気づくはずもなかった。

リンセンタートスの都を目指して旅を続ける途中、ルナたちは砂漠の民ヤクンカと出会った。

突然の雨に降られて、逃げるように近くに見えたテントの村へ駆け込んだのだ。

恵みの雨を連れて来た者 ランレイ 幸運を運ぶ旅人 と  
して、ルナたちは想像もしていなかった歓待を受けた。

彼らは雨水で得た貴重な食料や水を惜しむことなく、ルナたちに差し出した。

ヤクンカ族の言葉がわからないルナは、感謝を意味するカタコトの言葉をエリルから教えてもらい、それを繰り返すだけだった。

その夜は砂漠の神ハブンカと雨の神ミーナンデイ、そして旅人の守り神ビアン神に感謝を捧げる踊りが焚き火を囲んで盛大に行なわ



れた。

「ジーンは、ネイのように踊らないの？」

ヤクンカ族の人々にまざって陽気に踊るネイを見ながらそうエリルはほほ笑みかけるが、ルナが笑顔を返すことはなかった。

ただ、かたわらの少年に、絶えずあたたかな眼差しだけを注いでいる。

エリルはルナの横に座っている無表情な少年の顔を見ながら、自分が見た光景をいまだに信じられないでいた。

あれを奇跡と呼ばないで、どう説明したらよいのだろうかと思う。顔を照らす炎の先端を追っていくと、月が煌々と輝いていた。

（あの夜も、目映いほどの月の光が注がれていた……）

エリルは、ルナたちと出会った日のあの暗闇の中での出会いを改めて振り返り思い出していた。

死の谷で、ルナが少年たちの遺体に声をかけながら、生きている者を捜し始めて長い時間が過ぎていた。

最初はルナを手伝おうとしたエリルも、その異様なまでの死体の光景に手を差し伸べることもすらできなかった。

闇の中で、誤って踏みつけた固まりがあっけなく碎け散ったとき、それが子どもの一部だったと気づいたエリルは正気を保つのが精一杯だった。

どれほどの熱で焼かれればこれ程までになるのか、というほど炭のように積み重なった、人間であったはずの者たちの残骸。

全身が震えた。

目の前に、ルナの姿がなければこらえることさえできなかったかもしれない。

(一体……何者なんだ……あの子は……)

月の輝きが、その行動を助けるように、はるか彼方から深淵の闇へと光を注ぎ込み、ルナの銀色の髪をぼんやりと浮かび上がらせる。

「誰か……生きていて……助けてあげるから……助けてあげるから……」

焦げた死体は、触れたとたんに崩れていく。

まるで、炭の塊の中に自分が埋まって行くような錯覚がルナを支配していた。

どこかであきらめようと呼びかけている自分がいるのはわかって

いた。もう、どれだけの遺体の塊をはがし、横たえてきたのかわからなかった。

「生きてるかもしれない……んだ」

ルナは、自分自身に言い聞かせる。

涙はすでに乾ききっていた。動かす手も足も重く、体は疲労の限

界に達していた。

それでも、やめるわけにはいかなかった。

だが、突然ぐらりとルナの体が大きく揺れた。足元がふらついていたのだ。

次の瞬間、ルナは死体の中に倒れ込んでいた。ルナの体の重みであっけなく崩れるもの、嫌な感触を残して受け止めるもの、それらの中にルナは呑み込まれていった。

「もう……動けない……」

少年たちの死体の中で、ルナは目を閉じた。

闇の中に静寂が満ちあふれていた。

恐怖感はどこにもなかった。

不思議と穏やかな気持ちになり、疲労が深い眠りへと誘おうとする。

(ここでなら……死んでも寂しくないかな……)

ルナがそう思ったとき、瞳の奥に母ラマイネ王妃のほほ笑みが浮かんだ。

次の瞬間、消え入りそうなたつばやきが空気を揺らした。

「助け……て……」

ルナは目を開けた。

緑色の瞳に、遠く夜空に輝く満月が映る。

「母上……!」

ルナは跳び起きると、月の光の照らす場所を探しはじめた。

「母上……ごめんなさい……あきらめません……。だから、もう一

回、教えて……」

死体をかきわけながら、乗り越えながら、ルナは大きく瞳をこらして求めるものを探した。

その目に月の光に照らされた、何かが光っているのが映った。

急いで近づくと、先端のところがった何かが、死体の中から突き出しているのだ。

「……………」

ルナは、息を飲むとそれをつかんだ。  
するとルナとは別に、それをつかんでいる手が現れた。  
焼け焦げていない、子どもの手が現れたのだ。

ルナは、さらにその下にあるはずの腕、そして体を引き出した。  
月の光が、ルナを助けるように光を注ぐ。

ルナの異変に、遠くで見守っていたネイとエリルが立ち上がった。  
「生きてる……！」

ルナの声は確信にかわった。

少年の顔を覆っている緑色の布をはずそうとして、ルナは一瞬その手を引っ込めた。その布に見覚えがあったのだ。

闇が見せた、あの雪の中を歩き続ける少年たちの夢の中で、ルナはこれと同じ緑色のマフラーと帽子を身につけていた。

ルナは静かに布をとると現れた少年の傷ひとつない顔を見て、なぜだかわかってしまった。

自分が見たあの恐ろしい体験は、すべてこの少年のものだったのだと。

しかも、少年の手の中に握られていたのは、ルナが身につけていたはずのイルダーグの牙だった。

父、カルザキア王の守護妖獣であり、ルナを守り、絶命したイルダーグの牙。

わが一族は……雷獣……

イルダーグの最後の言葉が聞こえた。

アウシユダールの放ったあのすざましい光。その中から、雷獣イルダーグは少年を守ってくれたのだ。

「イルダーグ……守ってくれたんだね……」

ルナは、立ち上がるとイルダーグの牙をそっと両の手のひらにのせて、月にかかげた。

死してなお、ルナを守る力を感じながら。

「一体……何者なんだ……」

ルナと少年を見つめるエリルの疑問は深まるばかりだった。しかもルナが助け出した少年は、すべての記憶を失っていた。

エリルもかいま見た、あれほどの恐怖を味わって正気でいられる方が不思議であり、記憶を失うのも無理はないと思う。

「彼の名前だけどね……」

エリルはなんとか、ルナの気を引こうと思いついたようにルナに声をかけた。

「ランレイ……というのは、どう？」

その言葉に、ルナは驚いたようにエリルを振り返り、じつとぞき込むように緑色の瞳で見つめ続けた。

「えっ……と……気に入らない？」

エリルは初めて見せるルナの反応に、内心気後れしながらも、ほほ笑みを絶やさなかった。

「それって……『祝福』？」

「え、う……うん」

ルナの言葉の意味することがよくわからないまま、とっさにエリルはうなずいていた。

するとほどけるように無垢なルナのほほ笑みが、エリルの前にあらわれた。

「ありがとう」

「え……」

それは、エリルが初めて出会うルナの笑顔だった。

月の光の中、トウに乗った男たちの姿が砂漠に散って行く。

「皇太子殿下はおとどまり下さい」

シグニ将軍が、トウに騎乗するテセウスに天幕へ戻るように説得するが、テセウスは静かに横に首を振った。

「ここ毎晩、皆がアウシュダールのために危険を顧みずに交替でオアシスを探しに行ってくれている。兄のわたしが眠っていられるわけがないだろう」

「お気持ちはわかります。ですが、アウシュダール殿下のご病気に皆も動揺しております。今、万が一、殿下の身にもしものことがあつてはいかがなされますか。アウシュダール殿下もご自身の病のためにと、深く嘆かれますぞ。お憤り下され」

幼い頃からテセウスを知っているだけにシグニ将軍は、テセウスの気持ちを押さえるツボを心得ていた。

「だが……水も食料もあとわずかだ。このまま、ここに留まり続いても兵たちの体力も厳しくなるだけだ。アウシュダールの体ももたない。なにもせず、ここで待てというのか？」

テセウス率いるノストール軍は、アウシュダールの病の為にに足止め状態となっていた。

案内をつとめるデューグ公爵は、アウシュダールを日中でも日陰のできる岩場へ非難させた後、療法師を連れてくると行って戻ったまま、まだ戻ってはきていなかった。

「わたしのことは心配するな。べつに敵の中へ一人で切り込んでいくというわけじゃない。アウシュダールのために、皆のために、水のある場所を探しに行きたいだけなんだ。それに、わたしには守護者がいつもいる。たとえわたしが迷っても、守護妖獣はここまではわたしを連れて帰ってきてくれる。あの星が地平線に隠れるまでには必ず帰ってくるから、行かせてくれ、シグニ将軍」

頭を下げるテセウスに、さすがのシグ二將軍も言葉を詰まらせた。「で、では……わたしが供を……」

「シグ二將軍はわたしの留守を兵たちに気づかれないようにしてほしい。それに、いつデューグ公爵が戻られるかもわからないし」

テセウスは渋るシグ二將軍を残して、従者もいらないと断り、月の光だけが頼りの砂漠へと、星を頼りに進んでいった。

「ああは言っただけ……」

テセウスは銀色の月を見上げて、ため息をついた。

ザークスがどのように守ってくれるものか、テセウスには検討がつかなかった。

実際に自分自身が真に窮地に陥るといった場面が今までないだけに、自分の守護妖獣の力がどれほどのものかさえも知らないのだ。

クロトの黒馬ダイキのようにいつもベツタリそばにいて、じゃれあうこともない。

アルクメーネのカイチのように家庭教師役をつとめるわけでもない。

アウシュダールの……ように……。

その瞬間、テセウスは意識が霧散し、自分が何を考えていたのかを忘れてしまっていた。

「まただ……」

大きく首を振りながら、再び、ため息をつく。

そしてふと、気づく。

こうして一人でなにかをゆっくりと考える時間がずっとなかったことに。

星の瞬きを見上げながら、夜は寒いほどに冷える砂漠の砂上を進み続けた。

テセウス様。

突然、前方にザークスが姿を現した。

だが、テセウスの乗るトウには見えていないのか、歩調はかわらないままだった。

「ザークスはテセウスの前方の右手に視線を投げかけていた。湖を見つけたのか？」

テセウスは右方向に曲がるとザークスに指示に従い歩を進める。その後も守護妖獣は何度も現れては進むべき方向を示していた。すでもといた場所がどこだったのか、方向感覚は失われている。

(本当に……皆のところに帰れるだろうか……)

約束の星は、地平線に沈みつつある。

シグニ將軍のイライラしている顔が浮かんで来て、テセウスは焦りはじめた。

だが、ザークスが水のある場所へ連れて行こうとしているのだという確信が、ためらうことを禁じた。

やがて、テセウスは小高い砂丘を見上げる場所へ出た。

ところが、そこから先へ進むうにもザークスは姿を消したまま現れない。

「ザークス、次はどこへ行くんだ？」

テセウスが声をかけるが、静けさだけが応えた。

「ザークス！」

呼ぶ声は、空しく消えていく。

テセウスはトウから降りると、夜の砂漠に立ち尽くした。

暗闇の中で置き去りにされたような心細さが不安を膨らませる。

(なにか……意味があるはずだ……)

守護妖獣は主を守るために存在する。

だが、ザークスの瞳の意味するところをテセウスはまだ、読みきることができない。

それはザークスが意図していることなのか、なにかほかの理由があつてのことなのか、主人のテセウスにさえわからなかった。

途方に暮れたように、月を見上げた。

(アル神よ……我らが、守りの神よ……。ザークスはなにを示そうとしているのですか)

テセウスが祈りをささげたとき、風の音と、どこからか砂を踏む



ような音が聞こえてきた。

（人がいるのか…？ 獣か……？）

テセウスは物音がした砂丘の反対側へと静かに近寄っていった。どこか海のざわめきにも似た砂の舞う音が聞こえていた。

遠くに聞こえていた波のような砂の音は、闇で見えなかったこともあり、気づついたらときには目の前に迫っていた。

逃げる間もなく、テセウスは前方から壁のように押し寄せてきた強風と黄砂に襲われた。

あわててトウの体を低くさせ、その体を楯に身を守るようにうつすくまり、それが通り過ぎ去るのをじつと待つ。

夜の冷たい風と砂が全身を打ち付け、やがて離れていった。

風は一陣の名残を残して去ると、何もなかったような静けさが再び辺りに訪れる。

ゆつくりと目を開けたテセウスは、丘の上に月の光の中、女神が舞い降りる姿を見た。

(な……?!)

銀色の輝きをうけ突如夜の砂漠に現れた乙女。

テセウスは何度も瞬きをしながらも、引かれるように近づいて行った。

長く風に舞う銀色の髪。

白い長衣に身を包み、軽やかなしぐさで砂漠の風さえ心地好さげに受け、数歩あるいて立ち止まると煌々と輝く満月を見上げる。

軟らかに波打つ長衣を纏う細くしなやかな肢体は、女性でも男性でもない中性的な存在にさえ思える。

風の音。

砂の流れる音。

暗闇の中、頭上に煌く無数に点在する星々と月。

そのすべての存在が調和したような神秘的な空間がそこにあった。顔がようやく見えるところまで近づいたとき、再び強風がテセウスを襲った。

砂が全身を打ちつけ、あわてて砂漠衣で顔を覆う。

一瞬なにもかもが見えなくなる。

(あの人は……?)

風が止むのを待ちきれずに前へ進んだテセウスは、丘の上にたえずんでいる乙女を探す。

さきほどまでの神秘的なまでに心を奪った空間はもう、見つかることはできなかった。

かわりに乙女のいた場所には、なぜか別の存在がいて戸惑う。

(幻……だったのか……? 見間違っわけは……)

混乱する頭の中、じっとテセウスはその人物を見つめた。

丘の上に立っているのは、人間の子供の後姿だった。

特別なものなど、なにも存在しない夜の砂漠の風景。

次第に現実感が戻ってくるのを感じる。

砂漠では、そこにはないはずのものを見るとのデューグ公爵の言葉を思い出した。

あらゆる幻覚が旅人を悩ませ、死の淵へといざなうというのだ。

自分の見たものが幻なのかどうかはわからなかったが、テセウスは二、三度小さく頭を振ると、大きく深呼吸をした。

人間が砂漠にいるのは、当たり前ではないか、と。

そして、子どもがいるということは、近くに家族や仲間がいるはずなのだ。

（水を持っているかもしれない。湖の場所も教えてもらえるかもしれない）

目的を思い出して、自分でも驚くほど速い足取りで砂丘を駆け上る。

「ねえ、きみ……」

テセウスは、まだ自分ま存在に気づかず背を向けている子供に、できるだけ優しく声をかけた。

驚いて逃げられてしまわないように。

突然声をかけられた子供が、一瞬びくりとした様子でゆっくりと振り返る。

テセウスはほほ笑みながら、子供に近づいて行った。

「この近くに水のある場所はないかな？」

大きな瞳に銀色の月を映していた少女が、驚いた表情で彼を見下ろしていた。

テセウスは困ったように立ち止まった。

「驚るかすつもりはなかったんだ。言葉が……通じないのかな……？」

知っているいくつかの言葉でテセウスは話しかける。

だが、少女は固い顔をしたまま彼を見ていた。

テセウスは怯えさせてしまったのかと、不安になる。両手を広げて敵意のないことを見せるのが精一杯だった。

少女に、彼の言葉は届いていた。  
意味も理解していた。

だが、何が起きたのか少女……ルナには理解できなかった。

(テセウス……兄上……?!)

砂漠の幻が、輝く月が、ルナに兄の姿を見せてくれているのではないかと、ルナは思った。

まるで時間が止まっているような長い間、心臓が止まったようにルナは目の前に立つテセウスを茫然と見つめていた。

「きみは、砂漠に住んでいるの？」

テセウスはルナの驚きを知る様子もないまま、ただこのきまらずい沈黙をなんとかしなければと優しく話しかける。

「なんとか少女の警戒心をやわらげたかった。」

「旅の途中で、弟が熱を出して倒れてしまったんだ。水がほしいんだ」

そのテセウスの言葉で、ルナははっと我に返った。

目の前にいるのが、まぎれもなくルナが捜し求めてきた大好きな兄の姿なのだとわかったのだ。

全身に鳥肌がたち、頬が紅潮してくるのが感じられた。

やっと会えたという感激と、驚きと、安堵感が、乾いていた心を潤していく。

「兄上……」

そう呼びかけようとした時、テセウスの後ろにたたずむ獣の瞳が赤く輝いたのを見て、ルナはその言葉を呑み込んだ。

「ザークス……だ」

ザークスはルナが口をつぐむのを見ると、その瞳を緑色へと変化させた。

それは、ルナが城にいたときルナとザークスの間でかわしていた合図のようなものだった。

ザークスの緑色の瞳は、あきらかにルナを認めていた。

だが、それはすぐに赤へと変化し、静かな警告をうながしていた。ルナは兄の名を叫びながらその胸に飛び込み、抱き締めてほしいという気持ちをこらえて、テセウスにゆっくりと近づいた。

「きみはこの砂漠の子なの？」

そう話しかけてくるテセウスの言葉を耳にして、ルナは心が締め付けられた。

泣き出しそうな自分を押さえて、大人になった兄の顔を見つめていた。

会えなかった時間がどれほど長かったのかを感じずにはいられない。

国の人々は銀色の髪の王子のことは忘れ去り、アウシユダール様を末の弟王子と信じています……

イルダーグの言葉が心の中に思い出された。

信じたくなかった。

そんなことはないはずだと、ずっと自分に言い聞かせて来たのだ。会えば絶対に自分を思い出してくれる。笑顔で、抱き締めてくれる、と信じて追いかけてきた。

だがいま目の前にある笑顔は、見知らぬ子ども、他人に見せるほほ笑みだった。

ルナは唇をかみしめながら、助けを求めるようにザークスを見つめた。と、その瞳が金色に輝く。

その闇夜に輝く双眸が、ルナに忘れてはいけないことを思い出させた。

(指輪……を……)

ルナは、身につけている袋をあわててまさぐると、大切に指輪を包んだ布を取り出し、テセウスに差し出そうとして、手を止めた。

父、カルザキア王から託されたこの継承のアルディナの指輪を、なんと言って兄に渡せばいいのか、わからなくなったのだ。

ザークス……。

ルナが目には涙をためてザークスを見つめると、テセウスの守護妖

獣は金色の輝きを徐々に落としていく。

そして、ついとテセウスの前に歩み出たのだ。

守護妖獣の出現に気づいていなかったこともあったのだが、ザークスの突然の行動に、驚いたのはテセウスだった。

たとえテセウスが命じても、両親や兄弟の前にさえ、ザークスは必要がなければ己の姿を見せることはまずない。

ましてや初めて会う異国の人間に守護妖獣が己の存在を明かすなど、ありえないことなのだ。

「これ……」

ルナは、近づいて来たザークスに指輪を見せてそう言つと、もう喉がつまって言葉が出なくなっていた。

父上が…… 兄上に届けなさいって……

言葉に出せない思いを、目の前に立つザークスに告げる。

兄上…… どうして父上が亡くなったのに、母上のところに帰らないの？ どうして…… ルナのこと忘れちゃったの？ ザークス…… 父上と…… イルダーク…… 死んじゃった……。涙があふれて声にならなかった。

「ザークス……？」

テセウスはザークスが、なにかをしたのではないかと突然なき始めた少女にうろたえた。

いや、突然現れた妖獣におびえてしまったのかもしれないと思っていた。

「今…… 必要なのは、その指輪のみ……」

ルナは、初めて聞くザークスの言葉に驚いて、緑色の瞳を瞬かせる。

驚きすぎて涙がひいたのに、自分では気がつかない。

ルナを見つめるザークスの瞳が青色に光り、眼が細くなった。

「時が来るまで……」

その言葉は、なぜかルナの中に重くのしかかった。

ルナは、目の前で困った顔をしているテセウスに、ポツリとつぶ

やいた。

「これを……渡すように頼まりました」

「わたしに？」

ルナが差し出した布を、ザークスが口にくわえてテセウスの前に突き出した。

これまでにしたこともない、犬のような行動であったが、テセウスはなにかしら不思議な空気を感じていた。

「それと……湖はこの丘の先にあります……」

布を解こうとしたテセウスは、ルナの言葉に顔を上げて、その小さな指の指し示す方角を見た。

テセウスは慎重に自分がいた場所と、今いる場所を星を見上げながら確認する。

その時、また強風と砂塵が二人に襲いかかった。

「だ、大丈夫かい？」

強風がやんで、テセウスが少女に問いかけたとき、そこにはもう誰もいなかった。

ザークスもまた姿を消していた。

「……………」

半ば夢を見たような気持ちで、テセウスは少女から渡された布をといった。

そして、そこにあるものを目にした瞬間、テセウスはあわてて何度も姿を消した少女を捜し求めた。

『アルディナの指輪』

ラウ王家の後継者の証し、それがテセウスの手の中に収まっていた。

黄金色に輝く王の証。

テセウスはその指輪を目にしたとき、恐ろしい事実とその場に立つてられず、砂漠に膝をついた。

「父上が亡くなられた……………」

まるでたった今訃報を告げられたかのような衝動に、テセウスは

滂沱として流れる涙に顔を濡らした。

自分が父の死すらさえ忘れかけていたという恐ろしい事実こそが  
衝撃だった。

（わたしのなかで……何かが狂っているのか……？）

テセウスは震えながらその指輪を右手の中指にはめる。

すると同時に、頭の中に常に漂っていた濃い霧が散っていき、冷  
たく清廉とした力が注ぎ込まれてくるのを感じた。

「ザークス……」

そばにいるはずの守護妖獣につぶやく。

どこかで新たな時を告げる瑞獣の鳴く声が聞こえたような気がし  
た。

「アル神が……あの少女に身を変えて、この指輪を届けてくれたの  
だろう……」

テセウスはいとおしそうに指輪をはめた手を月にかざした。

そして、銀色の指輪がかけていることに気づき、いつも父の指に  
あった『アルディナの指輪』を思い描く。

アルディナの指輪 は金と銀の二組の指輪が一体となるように  
つくられている。

「銀の指輪は、この手で捜し出せということですね……父上」

金の指輪をはめた瞬間、銀の指輪は自分が見つけるべきものなの  
だと、そう思えたのだ。

それは確信に近い不思議な確信だった。

ノストールの新王テセウス・デ・ラウは、見守る者もない異国の地  
で アルディナの指輪 継承の儀式を一人行い、その宣誓を月の女  
神と亡き父に捧げた。



第11章 邂逅 - 12 - (後書き)

第11章 邂逅 終了

リンセンテートスのミゼア砂漠から、暴風に巻き上げられ、首都に襲いかかった砂嵐。

神の怒り、黄色い悪魔 そう人々が恐れた砂塵の鉄槌は、ラシル王とハリア国の王女シーラとの婚儀の日を境に、突如都に襲いかかり二年の月日が過ぎた。

その永く続いた砂嵐の猛威が、人々の寝静まった夜、月の輝きに見守られる中で突如その命が尽きたように途切れた。

幾百の日々、昼夜を問わず、一日も風の止む日がないままに、目を開けることも息をすることさえかなわぬほど吹き荒れた国に、静寂が戻った。

街の姿が見えなくなるほどの砂の幕は、激しい風と砂を含んで、すべてのものに襲いかかった。

人々は食料を求める時以外の外出はあきらめた。

その止むことのない激しい風と砂の音が、前触れもなく消え去ったのだ。

二年ぶりに訪れた静寂な夜。

だが、多くの人々はまだ深い眠りの中にあつた。

その夜の街で、一軒の家の扉が開き、子供が姿をあらわした。

それは家族がぐっすりと眠りにについている真夜中の部屋の中で、異変に目を覚ました幼い男の子の姿だった。

家をも破壊しかねない砂嵐や、戸や壁をガタガタと揺さぶり続ける強風を子守歌として育った子どもが、初めて自分の足で戸外へ飛び出したのだ。

初めて見る家の外の風景。

風のない静かな夜の町に、はだしそのまま飛び出した少年は、澄んだ夜空を見上げたまま目を大きく見開いた。

「うわぁ……」

水を打ったような静けさの中で、少年の眼に明るく輝く満月が飛び込んでくる。

初めて出会った月を少年は眩しそうに見つめた。

そして、思わず美しい月に向かって両腕をさし出した。

「おいでよ！　ここまでおいでよ！」

天に浮かぶ銀盤に幼い声が呼びかける。

「おいでよ！　おいでよ！」

二年余りの歳月をおいて、砂嵐の脅威から解放されたリンセントービスの城下に、小さな声が大きく大きく響き渡った。

リンセンテートスの砂嵐を止めるために、シルク・トトウ神のお力をお借りしたい。転身人アウシュダール殿にビアン神との対話を願いたい。

ナイアデス皇国のフェリエス帝王が、姉の嫁ぎ先であるリンセンテートスの嵐を収めるための請願の親書が届いたことから、それに応えるべく、リンセンテートス入りしていた皇太子テセウス率いるノストール軍。

だが、ミゼア砂漠でシルク・トトウ神の転身人とうたわれる第四王子アウシュダールが急病に倒れた。

アウシュダールを休ませるために、軍は今、砂漠の中に見つけた湖のあるオアシスで休息をとっていた。

昨夜、テセウスは砂漠の中に湖を求めて探し回った。

その真夜中の砂漠で彼は不思議な少女と出会う。

彼女が教えてくれた湖のある場所を信じてテセウスは隊を率いて進み、ようやく熱風の中休息のできる湖にたどり着いたのだ。

湖に向う途中、テセウスはヤクンカという砂漠の民に出会った。

おそらく少女はこの民の子供だったのだろうと、少女のことが頭から離れないままだったテセウスは、砂漠の民ヤクンカの長に銀色の髪をした少女に会わせてほしいとたずねた。

だが、帰ってきた言葉は意外にも、自分たちの民にそのような少女はいないという答えだった。

「ランレイ 幸運を運ぶ旅人 の中に、銀髪の男の子がいたよ」  
長と一緒にいた子供がそう教えてくれたが、テセウスはやりばのない気持ちにかられた。

そんなはずがない、出会ったのは確かに女の子だった……。同一人物なのだろうか……。

疑問を抱きながら、テセウスは真夜中の砂漠で出会った銀色の髪

と翠色の瞳をもつ少女の顔を思い浮かべる。

『これを……渡すように頼まれました』

涙をこぼしながら、ノストール・ラウ王家の継承の証《アルディナの指輪》をテセウスに届けるために突如として、テセウスの目の前にあらわれ、そして消え去えたその姿を。

名前を聞いておけばよかった……。

テセウスの脳裏から、少女の顔が離れなかった。

守護妖獣ザークスが、ラウ王家以外の人間に、ためらうことさえせずに姿を見せ、近づいていった銀色の髪の少女のことが。

もつと、なにかを言いたそうだった。大きな瞳がとても辛そうだった……。

湖にたどり着くまでの間も、テセウスは右手の中指に収まった金の《アルディナの指輪》を見るたびに、少女の泣き顔を思いださずにはいられなかった。

もうひとつの銀の指輪のことを知りたい。あの子はそのことも知っているのだろうか……。

テセウスは、十五歳の誕生日の第一王位継承者承認式の日、ラウ王家の王の指輪《アルディナの指輪》の話之父カルザキア王から聞いたことがあった。

ノストール国の平安と、ラウ王家の存続の願いが込められた王の指輪には、先王の意志が強烈にかかわってくるというのだ。

平和な時代の継承には、指輪に変化は起こらない。いたずらにどれほど二つに分けようと試みても《アルディナの指輪》は変化することはない。

しかし、ひとたび王家や王位継承の存続に危機が迫るとき、ときに指輪は金と銀の二つの指輪に分かれる　　というのだ。

カルザキア王はその話をしながら、自分の指にはめていた《アルディナの指輪》をテセウスに「確かめてみなさい」と差し出した。

もちろんそのときは、何度見つめても触ってみても、指輪は一個の指輪でしかなかった。

けれど、今ここにあるのは確かに《アルディナの指輪》の半身……。

分かれてしまった指輪の意味を考えると、テセウスは、父が亡くなるときどんな想いをこの指輪に託したのか、一刻も早く知らなくにはいけないとの強い危機感に立たされた。

《アルディナの指輪》が分かれるほどの重大な意味。ノストールの危機を警告しようとしているのか……？

半身の金の指輪を受け取ってから、心をよぎる不安は時間を追うごとに強くなる。

だが、どれほど問いかけようとも黄金に輝く《アルディナの指輪》は、テセウスに語りかけてくることはない。

まるで、自分の守護妖獣ザークスのように。

「あの子を……探せと……言うことだろうか……」

ふとテセウスはそうつぶやいてから、はっとして思わず自分の頬に手を当てた。

「涙……？」

その指には、テセウスの瞳から流れ落ちた涙の滴が光っていた。

テセウスが指輪を受け取った翌朝、湖のほとりの天幕の中で高熱で病に伏していたアウシユダールが目覚めた。

気に入らないな……。

朝、様子を見に来たテセウスの指に光る金の指輪があるのを目にして、アウシユダールは、自分が高熱にうなされ眠りにについている間にテセウスの身になにかが起きたことを知った。

「父上の指輪をアル神が届けて下さったんだよ」

アウシユダールの視線が《アルディナの指輪》に注がれると、テセウスは静かにほほ笑みながらそう答えた。

しかし、ノストールにあるはずの王位継承の証し《アルディナの指輪》が、なぜテセウスの指にあるのかまでは詳しく語らなかつた。さらに、それを不思議と思い追求する臣下もまたまたいなかつた。ノストールの民は、王家と指輪を守る守護妖獣の存在、そして神の加護をあたりまえのように信じている。

その強い絆があるかぎり、王の崩御と王位継承者への指輪の継承が、自分たちの知らないところで行われたとしても、驚くことはあつても、疑うことはないのだ。

だが、アウシユダールはその指輪を目にした時から、見えない何かを見ようとするかのように意識を集中させていた。

嵐は止んだ……。どこかに……。干渉者が……。？

その瞳がすつと細くなり、幼い顔に険しい表情が浮かぶ。

やがてなにかに思い至つたのか、瞳に伶俐な光がよみがえつた。

ピアンは眠ったまま。すべてはこれからだ……。

唇がゆつくりと吊り上がり、笑みをかたどつる。

干渉者などに……。邪魔はさせない……。

テセウスの許しを得て、身支度を整えてテセウスの天幕を訪れたアウシユダールは、そこで、將軍たちのほかに、リンセントーリス

のデューグ公爵らに迎えられた。

デューグ公爵は、数人の部下をともなつて現れたアウシュダールの姿を見るや、座っていた椅子から立ち上がり、うやうやしく頭を垂れた。

だが、アウシュダールの視線はデューグを通り越して、テセウスに向けられた。

自然に視線はテセウスの右手の指輪に吸い寄せられる。

(……………)

しかしテセウスは、自分に向けられた視線を、デューグ公爵が先日とは打って変わった態度とっていることにアウシュダールが驚いているものと受け取ったらしく、苦笑いを浮かべながらアウシュダールに自分の横の席をすすめた。

「殿下！ お加減はよろしいのですか？」

目の前を通り過ぎるアウシュダールに向かいデューグ公が、挨拶をする。が、アウシュダールは指輪から目をはなさないまま、面倒臭そうにうなずいた。

「砂嵐は止んだだろう。ビアンも眠りについたから、城が砂漠に埋まる危険は去った」

ざわり、とその場にいたシグ二将軍をはじめとする人々の顔色が変わった。

「アウシュダール……？」

驚いた様子のテセウスの問いかけに、シルク・トトウ神の転身人と自ら名乗るノストールの第四王子は、そこでようやく《アルディナの指輪》から目はずすと、優美なほほ笑みを兄に向けた。

「ビアン神は旅人を見守る神。ビアンと意志を触れ合わせるには、旅人となつたわたし自身の意識を、肉体から切り離す必要があります。神々との交流は、常に肉体の干渉しない世界でおこなわれるのですよ。兄上」

その言葉を聞いたデューグは、「おお」と感嘆の声を漏らすと、興奮さめやらぬといった面持ちで叫んだ。



「殿下！ まさしくお言葉どおりでございます。わがリンセントー  
トスを苦しめていた砂塵の嵐が、昨夜より突然止んだとの報告をつ  
いいたしがた受けたのです。ビアン神のお怒りがとかれたと！ ま  
さか……いや、さ、さすが、アウシユダール殿下。さすがは、シル  
ク・トトウ神の転身人であらせられます」

アウシユダールを見つめるデューグの眼は異様に光り輝いていた。  
「神の転身人……まさか、本当にいらつしやるとは……。シルク・  
トトウ神、アウシユダール殿下……！ わがリンセントートスの嵐  
は、殿下のお力で消し去っていただいたのですか？」

「ビアンに、怒りを解いて少し休むように言っただけのこと」

デューグはアウシユダールの言葉に息を呑み込んだ。

転身人　という、言葉は三年前の大国に大きな衝撃を与え、色  
めき立たせた。

だが、リンセントートスは　先読み　の噂は聞いてもそれがどの  
ような内容と意味であるのかさえ知らなかった。

ノストールの第四王子がシルク・トトウ神の転身人と聞いた時も、  
小国が自らの国を守るための虚栄として風聞を流しているにすぎな  
いと思っ込んでいた。

特にデューグ公爵は、懐疑的な人物の一人であった。

だが今、神秘的な空気をまとい、ほほ笑みを向けるアウシユダ  
ールの前のデューグは、感激に頬を紅潮させている。

「アル神の御子であるシルク・トトウ神の殿下と……わがリンセン  
テートスのビアン神が……言葉を交わされたのですね……」

うわ言のようにそうつぶやいたデューグはアウシユダールと瞳が  
出会った瞬間、心が捕らえられたような感覚に陥っていった。

砂漠で出会ったときは、ほんの子供にしか思えなかった王子から、  
大いなる力がデューグの中に注がれていくのを感じたのだ。

これまで感じたことのない自分を圧倒する見えない力。

デューグはその心地よさに酔った。

「お聞かせください……それが、どのようなものなのかを……」

テセウスは、公爵を魅了してしまったアウシュダールの神の子としての力の大きさを改めて感じながら、砂嵐の終息という吉報を得たことで、当前のようにデューグ公爵に告げた。

「では、私たちは国に帰らせていただきます」

突然のテセウスの言葉に、デューグはもとより、アウシュダールも少し意外そうな表情をみせた。

「今……なんと？」

デューグ公爵は、驚きのあまり目を大きく見開いてテセウスに向き直った。

「嵐が止んだのでしたら、役目は終わりました。われわれはこのまま帰路につかせていただきます」

「そ、その……先日までの私の落ち度により、殿下方に誠にご不自由をおかけしましたことは、どれほど詫びてもお詫びしきれるものではございません。し、しかし、わがリンセンテートスを救っていただいたノストールの方々をこのままここでお帰しすることはできません。ラシル王とてお許しにならないでしょう。どうか、わたくしをリンセンテートス城までの案内役として務めさせてさして頂けないでしょうか。このまま殿下方をお帰ししたとあつては、私も城には戻れません」

頬を紅潮させ、額に脂汗を浮かべながら、デューグは必死にテセウスに訴えかけた。

「私は、テセウス皇太子殿下、アウシュダール殿下を城にお招きし、ゆつくりと長旅の疲れを癒していただくように……とのラシル王の伝令を受けております。国を思われるテセウス皇太子殿下のお気持ちには重々お察します。が、しかし、アウシュダール殿下はわが国を救われるために、高熱に伏されたばかりのお体。どうか、リンセンテートス城で休んでいただきたく存じます」

すがりつくような瞳と、徐々に青ざめひきつっていくデューグの様子を見て、テセウスはまぶたを閉じた。

他国の人々はいまだ、ノストール王カルザキア・デ・ラウが何者

かに殺害されたという事実を知らない。

もちろんテセウスが指輪を受け取り、事実上ノストール王となったことも。

一刻も早くノストールに帰らなくては。

テセウスは、昨日まで、自分がなぜ父の死を意識の外にいたのか理解できなかった。そしてその自分自身を許せなかった。

父王の葬儀のことも気にかかる。

早馬に対し、国に一報もいれていなかった不手際も悔いても悔いきれない。

弟王子たちの心配している顔が目に見えた。

一刻も早く戻らねばならないという焦りと、デューグの言葉どおり病み上がりのアウシュダルを連れてこのままエーツ山脈を越える危険を侵すようなことも避けたかった。

「それに、城にはわが王だけではなく、ナイアデス皇国のフェリエス皇帝もお待ちです」

「な……?!」

テセウスはデューグが、何を言ったのか一瞬わからなかった。

「確かに……貴国リンセンテートの砂嵐を止めるために、アウシュダールの転身人としての力を貸してほしいと、フェリエス王からの親書があり、こうして赴きました。が……ナイアデス皇帝は本国にいられるのでは……」

テセウスの脳裏に、ラシル王の結婚式の日々にテセウスとアウシュダルのもとを訪れたフェリエスの姿が蘇る。

そのフェリエスにアウシュダルは何かを告げた。

ピアン神の怒りにふれるようなことをすれば、その身に災いが起こる……と。

「まさか……」

テセウスが思わずアウシュダルを見ると、まるでその気持ちを察したように、アウシュダルは嬉しそうに兄にはほほ笑みかけた。

「兄上は覚えていて下さいましたね」

テセウスは、自分に向けられたそのほほ笑みに、なぜかひどい違和感を覚えた。

アル神の息子シルク・トトウ神の転身人として、時に人知を越えた力を示し、神秘的でさえあるアウシユダールの存在を誇りに思ってきた。

だが、いま自分の目に映る弟の姿は、なにか微妙に異なっていた。

「ビアン」の怒りをつつしたのは……ほかでもないナイアデスのフェリエス。だから、彼は国に帰れなかった。そして、ついにわたしに頭を垂れた」

天幕の中にいたテセウス、デューグ、そして側近らの表情は、その言葉の意味を理解すると、一変して凍りついた。

「い、今、なんと……」

さすがにデューグ公爵が、おびえを隠せない表情でアウシユダールに問いかける。

「ビアンは裏切り者を許さない。たとえば、それが他国の皇帝であってもね」

感情のない、裁きを下すようなアウシユダールの言葉が静かに響いた。

「フェリエス皇帝はどのような怒りかわれたのですか……？」

恐る恐るデューグがたずねるが、それには答えずアウシユダールはにっこりと笑った。

「でも、安心していいよ。ビアン」の怒りは静めたから。ナイアデス王も国に帰ることができる」

大国ナイアデス皇国の皇帝を歯牙にもかけていないような、シルク・トトウの転身人の言葉に、デューグ公爵は心酔した。

それはデューグ公爵だけではなかった。

その場に居合わせた将軍や兵士たちもまた、自国の王子の言葉がすべてを知り、決める、解決する力を持つことを当然のように受け取っていた。

テセウスもそうだった。

リンセンテートスへ行くときも、エーツ山脈を越えるときも、父の死を耳にしながら帰国を決断しなかったときも、アウシュダールの言葉に耳を傾けることが当然であり、それがすべてだった。

だが、いまは違っていた。

テセウスは感情に流されることなく、冷静に現状をみつめることが可能だった。

目の前の人々の酔ったような表情に、違和感を感じずにはいれないのだ。

(アウシュダールに何かあったのか……それとも、わたし自身に……?)

見るものすべての変化に戸惑いを隠せないまま、深いため息を吐き出す。

特に、ナイアデス王がこのリンセンテートスに滞在していて、テセウスたちを待っているという言葉は重くのしかかった。

ナイアデスは、このラーサイル大陸の東を支配する大国であり、ノストールは大陸のはずれにある小国に過ぎない。

そのフェリエスがノストールに頭を下げるまでにどれほどの感情を抱いたのか、想像することが恐ろしくもあった。

その証に、自分がリンセンテートスに留まっていることを示すような言葉は、その書面にまったく触れられていなかった。

ノストールに助けを求めたナイアデス帝国の皇帝がリンセンテートス城にいる。

その事実を、テセウスの帰国への決意をためらわせるのに充分だった。

唇を閉じたまま考え込むテセウスを見て、アウシュダールは立ち上がると、兄の隣に立ち、天幕の中の人々と向き合う。

「わたしたちは兄上の言葉に従う。リンセンテートス王でも、ナイアデス王でもない。ノストールは、わが母アル神の加護受けしラウ王家の言葉にのみ従う！ シルク・トトウは、ラウ王家を守護する

ために。ここに存在する！」

アウシュダールの言葉に、天幕の人々は歓喜にどよめく。

テセウスは大きく息きを吐き出すと、故国にいるアルクメーネ、クロト、そして母ラマイネ王妃の顔を思い浮かべながら、それをふりきるようにデューグに告げた。

「わかりました。ラシル王とフェリエス皇帝にお会いします。ですが、それを終わればすぐに帰還させていただきます。よろしいですね」

その言葉にデューグは満面の笑みをたたえた。

そして、アウシュダールもまた、その言葉が告げられることを知っていたかのように満足げにうなずいていた。

リンセンテートスを二年もの間、襲い続けた黄砂の嵐が止んだ朝。リンセンテートス城や城下の街の人々は、頭上に青空と輝く日ざしを求めて、我先にと砂だらけの道に飛び出し歓声を上げていた。憔悴しきった顔に、安堵と笑みを浮かび上げながら、大声を上げて街や野を駆け巡る者、抱き合い涙する者、歓喜の歌を唄う者、踊り始める者、そして神に感謝を捧げる者。

みなそれぞれが数年ぶりに見る、晴れ渡った空を喜び合った。

その城下の風景をリンセンテートス城の一室から見降ろす瞳があった。

「陛下……」

オルローは窓際から離れると、ベッドに横たわるフェリエスに呼びかけた。

「これで、ようやく国に帰ることができます」

「そうだな……」

オルローの弾んだ声とは反対に、フェリエスの声には力がなかった。

「砂嵐が止んだからには、このオルローが必ずや陛下を無事ナイアデスへお連れし致します」

一礼すると、オルローはフェリエスの寝室となっている部屋を出て、謁見の間に向かった。

ラシル王からの直々の呼び出しは、砂嵐がやんだことに関わる要件であることはわかっていた。

オルローは、砂まみれになっている通路を数人の部下と歩きながら、疲弊しきった神経を集中させることに努めた。

黄砂に侵略された城。

この砂を踏み締めるたびに、オルローの意識は、決まってあの悪

夢の日に帰ってしまう。

ミゼア砂漠での何者かによる襲撃、フェリエスの花嫁としてラシル王から譲り受けたシーラ王女を奪われたこと、そしてそのまま悪魔のような砂嵐に襲われ、リンセンテートスに引き返さざるをえなくなっただけのこと。

まさに異常な天候と言うしかなかった。

そして、なによりもオルローを不安にさせたのは、主君皇帝フェリエスがこの半年の間、原因不明の病にかかり、床に就いたままであることだった。

城内の空気はもちろんのこと、どれほど室内や家具を衛生的に保とうと努めても入り込んでくる無数の細かな砂粒。砂の混ざったパンやスープは、不衛生であるとともに精神的な苦痛を与え、体力の回復の妨げになった。

術士モラシル王の配慮で何度か療法にあたったが、ナイアデスにいるような力のある魔道士はリンセンテートスにいるはずもなく十分というる療法は受けられなかった。アンナの一族は砂嵐のため呼び寄せることもできず、結局、原因もわからないまま、今日を迎えたのだ。

（天候が回復したからには、陛下のためにも一刻も早くこの国を出なくては……）

オルローの頭の中は、より早く、かつ安全に、フェリエスの身を本国ナイアデスに帰すためになにをすべきかということ、頭の中はいつぱいだった。

（まさか……二年余りもこの国から出られなくなるなど、誰が予測できたものか……）

この国の人々が口にするようにピアンという神が起こした災い、という言葉がよぎることもあった。

だが、オルローはそれを強く否定したかった。

『予言をあげるよ。あなたが神にそむく行為をひとつでも行ったな



らば、国には簡単に戻れなくなる。ぼくの助けなくしてはね<sup>『</sup>  
シルク・トトウ神の転身人といわれる幼い王子の口から告げられ  
た言葉。

就寝時、砂嵐が城壁を激しく打ち付ける音を毎夜耳にするたびに、  
二年前に出会ったノストールの第四王子アウシュダールの言葉がよ  
みがえった。

オルローはその言葉をどうしても覆したかった。

（陛下は、神に背かれてはいない。これは、ただの自然の仕業だ）  
そのために、何度となくリンセンタースを出ようと試みた。

だが、まさに悪魔とも言うべき黄砂の嵐に阻まれて、脱出するこ  
とがかなわぬまま、ついにフェリエスは倒れ、アウシュダールに親  
書を送ることを決断することになった。

この砂嵐がビアンの怒りなのか。アウシュダールが本当に転身  
人なのか。見極める方策だと考えればいいではないか。

フェリエスは案ずるオルローに憔悴の笑顔を見せた。

もし、本物の転身人ならば、私は神に頭を下げただけだ。小国  
の王子に頭を下げたわけではない。

黄金色の瞳が強い光を失っていないのを感じられて、オルローは  
逆に励まされた。

そして、アウシュダール率いるノストール軍がエーツ山脈を越え、  
ミゼア砂漠に足を踏み入れたという情報がつい数日前にもたらされ、  
今朝砂嵐は止んだ。

輝く青空に、アウシュダールの顔がじっと自分たちを見ているよ  
うな錯覚がオルローを襲う。

（神に背く行為……）

全身がざわりと総毛立つ感覚に包まれ、言いようのない不安に思  
わず立ち尽くす。

（陛下が、神に背いた……というのか？）

蒼ざめた表情のまま、微動だにしないオルローに背後の部下が声

をかける。

「將軍、体調がよろしくないのですか？」

「いや」

はつとして、オルローはすぐに歩き始めた。

「帰国の準備について考えていた」

そう、自分は他国の神についてではなく、フェリエスとナイアデス皇国のことを第一に考えるのが優先だ、とオルローは自分自身に言い聞かせる。

いまは、ナイアデス皇国の状態も、フェリエス不在が実際にどのような影響を与えているのかも定かではない。

ただ、フェリエスの実母であるロマーヌ皇太后が政務に長けており、国を守る力をもつ大きな存在であることだけが、心強かった。

今日の今日まで、リンセンテートス城での暮らしは、悪夢の日々といつてよかった。

食事も水も、砂の混ざらないものはなにひとつない。

王の食卓にも、部屋にも、あらゆる場所に黄砂は侵入した。

肌に、髪に、服に付着し、目に砂が入れば激痛が襲った。

城の中にいながらまるで砂漠の民のように一枚の大きな布を体に巻き付けて、砂から身を守る姿がどこにいても当たり前のようになっていた。

今日はその姿が消え、身軽な服装の兵士たちが、晴れ晴れとした笑顔で城の汚れを落とすために懸命に働いていた。

彼らの口から「シルク・トトウ神の転身人のおかげだ」とその名を称える言葉が交わされている。

それを横目にオルローはため息を吐く。

喜ぶべき青空は、アウシユダールの転身人の力を証明し、フェリエスの過ちを示す結果となる。

二年分の疲労が、一気にオルローの全身に重くのしかかってきたようだった。思考力が働かなくなりそうだった。

(あの馬鹿でもいれば少しは役に立つんだが……)

オルローの脳裏に、幼なじみのイズナの顔が浮かぶ。行動力と直感、機動力、そして人を動かす能力の秀逸性は、人並みならないところがあるイズナの姿を。

平民兵の中から、力のある者を見つけ出し、自分の部隊に引き抜く早さは軍でも周知の事実であり、真似しようともできるものではなかった。

また戦さの時は、突発的な事故や奇襲に見舞われ味方が窮地に追い込まれたときも、一見無謀と思える行動で、フェリエスをはじめとする多くの味方の命を救ってきた。

イズナがいてこそ、オルローも戦略がたてやすく、いざというときの手を何通りも打つことができたのだ。

懐かしい顔を思い出しかけたとき、オルローはラシル王の待つ謁見の間の扉の前にたどり着いた。

「どうぞ、陛下がお待ちかねです」

この二年ですっかり顔なじみになった王の側近が、兵に命じて扉を開かせた。

オルローはうなずくと歩き出す。

正面中央の奥、王座に座っているラシル王の前まで歩みを進めると、挨拶を交わした。

「オルロー將軍、フェリエス皇帝の体調はいかがかな」

ラシル王が最初に口にしたのは、フェリエスの病状のことだった。

「今日はひさびさに体調もよろしいようです。やはり、待ちに待った砂嵐が止み、青空の下、穏やかで暖かな日差しに包まれたためでしょうか。この天の祝福を、大変喜ばれていられます」

儀礼的に応えながら、オルローは自然と自分の口調がラシル王を責めているのを感じていた。

王自身も、それを甘んじて受け止めているのを承知の上でのやりとりだった。

その顔は細かい皺が増え、髪も白くなり、実際の年齢よりもはるかに老いてしまったようにも見える。

オルローはフェリエスに代わりラシル王と対面するたびに、文字通り砂を噛むような思いをして来たのだ。

「將軍もすでにご存じの通り、わが国を襲い続けた砂嵐が止んだ。これもフェリエス皇帝陛下がノストールのアウシユダール王子に親書を送ってくださったおかげ、とお伝えを。本当に申し訳ない事態になってしまったことを、改めてお詫びしたい。それしても、もうすぐこの城に神の転身人をお迎えするのだが、どうおもてなしをすればよいやら、みな大騒ぎでな」

ラシル王は、疲労の色も濃いなかに、安堵と上機嫌な表情を浮かべて笑ったが、オルローの突き刺すような視線を正面から受けて、咳払いをして改まった表情をつくった。

「大国の皇帝を、つまらぬ惨事に巻き込んでしまったこと。詫びても詫び切れるものではない」

ラシル王の口から謝罪の言葉がはじめると、オルローはしまつたと内心舌打ちをした。

この二年というもの、ラシル王はひたすらフェリエスとナイアデス側の人間に詫び続けてきた。

フェリエスが元気なときには、その詫びの言葉をやんわりと制しては早々に切り上げていたが、フェリエスが病に伏してからは廷臣であるオルローが同じような態度で接するわけにもいかず、結局延々と続くラシル王の謝罪の言葉に耳を傾けなくてはならなかった。

オルローは自分の失敗を悔やんだ時、扉が開き、クラン皇太子と皇太子妃セラが現れた。

セラはフェリエスの実姉であり、五年前にクラン皇太子のもとに輿入れし、二人の王子をもうけている。

フェリエスが倒れてからは毎日のように部屋を訪れては、弟の体が少しでもよくなるようにと、さまざまに気を配ってくれていた。

「オルロー將軍」

皇太子夫妻は、ラシル王に話を中断させた詫びを述べた後、久々にみせる明るい表情でオルローのそばに歩み寄った。

「あなたも見たでしょう。砂嵐が止み、太陽と青空が私たちを見つめています。今日は素晴らしい日です。そして、わたしの故郷がナイアデスであることを誇りに思える日になりました」

ロマーヌ皇太后よりも亡きオリシエ王に似た面立ちのセラ皇太子妃は、女性らしいというよりは、やや気の強そうな性格を漂わせていた。

ラシル王に嫁ぐことになっていたハリア国のシーラ王女を、フェリエスの王妃に言い出したのは、このセラ皇太子妃だと最近になってフェリエスから聞いた。

『シーラ王女は物分かりのいいおとなしい性格といわれているから、人質としては申し分ないはず。ハリア国の王女がナイアデスの王妃になれば、妹のミレーゼ女王は今後簡単には、ナイアデスの同盟国のリンセンテートスに牙を剥くような真似はしないはず』

リンセンテートスを守るため、セラは弟を平気で巻き込んだともいえる。

「朗報なのよ」

まるで自分の手柄を誇るようにセラは、オルローにほほ笑みかけ、出口に立つ兵に呼びかけた。

「お入りなさい！」

セラが片手を軽く挙げると、オルローが入って来た扉からまた別の人物が入ってくる気配がした。

振り返ったその目にナイアデス皇国の軍服が目に見え込んで来る。無口な夫のかわりに、セラが驚くオルローに肩をすくめてみせる。「信じられて？ ビアン神のお怒りがとかれ、砂嵐が止む日がナイアデス皇国で 先読み されていたというのよ。今日のこの目を見てナイアデスから、フェリエス陛下のためにたった今到着したばかりなのですよ」

セラに改めて紹介されるまでもなかった。

「おまえ……」

驚くオルローの視線を受けて、オルローと並びナイアデスの双壁

と称えられるもう一人の人物が現れた。

「元気そうだな」

イズナは真顔でうなずき、再会の言葉を発した。

ラシル王と皇太子夫妻との謁見を終えた後、部屋を出たオルロ―とイズナの二人はそこで改めて言葉を交わした。

「少し痩せたか？」

イズナは戦友の肩を軽く拳でたたくと、そのまま互いの肩をかたく抱き合った

「すまなかった……わたしがついていながらこんなことになってしまった」

フェリエス皇帝の親衛隊長として今回の任務に就きながら、オルロ―は結果的に何もできなかった。

しかもこの二年の間、病に倒れたフェリエスはもとより、部下やリンセントートスの誰人にも自分の心痛を微塵たりとも悟られるわけにはいかなかった。自分がフェリエスを守り、ナイアデス皇国の面目、強さを常に示し続けることが国を守ることだとわかっていなかった。

フェリエスの片腕である自分が弱気になっていることを見破られれば、その隙を狙ってリンセントートスの中にいる反ナイアデス体制の人間に付け込まれる恐れがあったからだ。

常に冷静沈着な表情を顔に貼り付け、皇帝の補佐役として、大国の將軍として、振舞い続けた。

時に崩れそうになる自分の心を奮い立たせ、どのようなことがあってもフェリエスを国に無事帰還させることのみを誓い、今日まで来たのだ。

しかし、イズナが目の前に現れたことにより、寄りかかる杖を見つけた旅人のように、オルロ―は幼なじみの腕に身を任せた。

そのイズナは、これまでみせたことのない友人の疲れきった姿に、想像以上の心労が彼らの上に襲い掛かっていたことを感じる。

だが……。

「まだ気を許すなよ。ここはおれ達の国じゃないからな」

耳元でささやくと、オルローはハツとしてイズナから離れた。

その顔に一瞬にして、緊張感とポーカーフェイスがよみがえる。

ニヤリ、とイズナは口元に笑みを浮べてうなずいた。

「わが皇帝陛下のご様子は？」

「ああ」

声のトーンに影が帯びる。

イズナの表情は曇った。

オルローを疲れ果てさせた一因がフェリエスの病気だということを知っていたが、予想以上に深刻なのではないかと察し、表情を硬くする。

今度は、オルローがゆっくりとうなずいた。

「これからすぐに陛下の所へ案内する。ただし、あまり大勢ではフェリエス様がお疲れになるから、出来る限り少なくしてほしい。ほかにだれか同行させるべき人間はいるか？」

「魔道士を一人」

「キリカか？」

「ここで待っている」

そう言って去って行ったイズナが、再び現れたとき連れて現れた魔道士を見た瞬間、オルローは、驚愕のあまり腰の帯剣を抜きそうになった。

年老いた風に見える面立ちをした長身の白髪白髪の男は、ナイアデスの魔道士が与えられる深い青紫色に金の刺繍で縁取りをした長衣を身にまとって立っていた。

伏せ目がちにイズナの後ろに立つ姿は、どこか奇妙な妖気さえ漂わせる。

「その男は、ダーナンの捕虜を乗せた船に乗っていたというナイアデスの宮廷魔道士……なぜ、そんな男を……」

「名は、ラージ・ディルムッド。今はロマーヌ皇太后から許しを得て、わが国の宮廷魔道士としてこの度の陛下ご帰還のための随員に



加えられた。リンセントートスの砂嵐が止むという 先読み もデイルムツドが行った。陛下の病氣治癒の療法を行う」

ラージ・デイルムツド。

オルローの記憶が、デイルムツドに関する記憶を拾い上げて行く。始まりは、ノストールに誕生したという、月の女神アル神の息子シルク・トトウ神がノストールに五歳の少年として誕生しているという 先読み がキリカから告げられたことだった。

戦いの神シルク・トトウ神であるその少年を手に入れれば、ラーサイル大陸統一がかなうかもしれない。

黙って見過ごしている大国などない状況だった。

ナイアデス皇国でも使者をノストールに使わせ、同盟を求めた。

その矢先、ダーナン帝国が大船団を率いてノストールの港に突如として現れ、シルク・トトウ神の転身人を引き渡さねば力づくで奪うと宣戦布告を行なったのだ。

だが、突然次から次へと出現した幾つもの大きな竜巻がダーナン軍を襲い、船団は壊滅状態となった。

その時、ノストールに探索部隊として隠密に派遣していた偽装船が、海に投げ出されたダーナンの兵達を救い出し、捕虜として連れ帰ったのだ。

ラージ・デイルムツドがダーナン帝国のロディ・ザインス王の宮廷魔道士であることは、捕虜の口からほどなく判明した。

「おまえも知つてのとおり、頑固な魔道士だ。ダーナンに関することは、どれほど問い詰めても口を割ろうとしないしな。まいった、まいった」

苦笑いを浮べてデイルムツドを目で示すイズナ。

なにが、まいったものかと、オルローは冷ややかな目で相棒を見ながら、表情ひとつで話の先を続けるよう促した。

ローマ又皇太后が許した以上、むやみに意をとなえるべきではないことは心得ている。

フェリエスの部屋へ向かう途中の通路で、オルローはデイルムツドにしばらくここで待つように伝えて、イズナを中庭にさそった。本来であれば美しい花と緑の庭園であるはずのリンセンテートス城の中庭は、今は黄沙に埋もれてしまい、見る影もない。

遠くで庭師たちが、砂を取り払う作業に取りかかっている姿が見える。

「あの男はダーナン側の人間だろう」

「デイルムツド云く、己の主人の秘密は他言しないのが魔道士の掟だというんだ。これについては、キリカも同じことを言っている。『魔道士が行うべきことは、先読み、占術、呪術、治癒術。それを願い出た者のことは、たとえどのような場合であれ、他者に告げることは許されるべきではない。もしそのために己が生命を落とすような場合があったとしても、天と地の声に耳を傾け天の声を聞くことを許された者は、それも覚悟のこと。最初の主のみが己が命の主。そしてまた代々の主に関して一切他言はしない』と言って譲らない。だから、試みに、先読みを行わせてみた」

イズナは、そう言っただけで肩をすくめてみせた。

「もちろん俺の勝手じゃないぞ。深く興味をもたれたロマー又皇太后殿下のお知恵をいただいでのことだ。だが……もつと早くさせておくべきだった。陛下がリンセンテートスへ旅立たれる前に……」

「おい……まさか……」

オルローはその口調に嫌なものを感じて、思わず口を挟んだ。

「そのまさかだ」

イズナの髪に隠されていない左目が辛そうに視線を落とす。

「デイルムツドは『皇帝はリンセンテートスへ行っただけじゃない。もしも、入国したならば、その帰還は思いがけず長いものになるだろう』と言った。しかも『その闇の中へひとたび身を置いたならば、たとえ守護妖獣の力を得たる指輪といえど、その加護も力およばず。天の意志に任せるのみになる』と、先読みをした。もちろん最初は、陛下がリンセンテートスへ行くことを阻止しようとの思惑が

秘められているかと疑りもした。だが……現実に、それは起こった。

先読み は的中したんだ」

イズナの真剣な眼差しがオルローを見つめる。

「先読み の内容の報告を受けていられたロマーヌ皇太后は、リンセンテートスの砂嵐の事を知られ、直々にデイルムツドに会われたのだ。そして陛下がご不在の間、デイルムツドはロマーヌ皇太后に尋ねられるままに 先読み を行い、国政を補う一助を担ってき

た」

イズナの語る言葉に、オルローは戸惑いを禁じ得なかった。  
「そして数カ月前から、リンセンテートスの砂嵐が止むこと、だがその時、陛下は病で床に就かれたままとなっていることの二つをデイルムツドは告げたんだ」

「だが……仮にも、ダーナンの帝王に使えた男だ。しかも陛下はご存じない」

宮廷魔道士ともなればナイアデス皇国の内情に精通する存在となる。オルローはイズナがなぜデイルムツドに 先読み をさせたのか理解ができなかった。

たとえ、先読み が的中しても、危険な存在に変わりはないはずだった。

けれどそうしたオルローの危惧を見抜いているのかいないのか、イズナは大きく息を吐き出した。

「あの男、デイルムツドは、ある意味ただの……というか、真に魔道士だ。ダーナン王に仕えたのは、放浪の旅を続けていた王が自分を招いた。ただそれだけだと言つてのけた。農民に請われれば、農民に必要な 先読み を行い、旅人に請われれば旅人が知りたい先読み を与える。それが自分の道だと、な」

「それは宮廷魔道士として召抱えられたことがないからだろう。一介の力自慢の男を將軍に迎えるのと、他国で將軍だった人間を、將軍として迎えるのではまったく異なる」

「ダーナンのロディ・ザイネスは、あの男の風貌、出身、過去、ど

こでなにをしていたか、アンナの一族のものだったのか、またはどの魔道の一族に属するのかを問いかけた。しかし、デイルムツドはすべてを語らなかつた。にも関わらず、こだわり続けることなく、直々に宮廷魔道士に任じたと、ダーナンの兵士たちは口々に言っている。あの男は事実ダーナンでロデイ・ザイネスの側近だつた。おまえは知らなくて当然だが、先読み の鮮明さ、正確さはキリ力をはるかに凌駕するぞ。ローヌ皇太后はあの男の力を見過ごすことは、国の損失になると考えられた。第一、わがナイアデスは、ダーナンよりも器が小さいと思われたいか？」

庭を前にたたずみ、青空を眺めている通路のデイルムツドを目の端でとらえながら、オルローは深々とため息をついた。

「信じるに値すると……？」

「先読み は的中した。だが、陛下が直接お会いになられて、気に入らないと言われればそれまでのことだ」

その言葉を耳にして、やっとオルローの表情に穏やかさが戻つた。「それにデイルムツドに関しては、ローヌ皇太后より直々に陛下宛の書簡をお預かりしている。俺が口をだす立場でもないしな。そうだ……」

イズナは別のことを思い出したように、懐から封筒に入った手紙を取り出し、それをオルローに差し出した。

「これはお前宛だ」

「皇太后陛下から……か？」

驚きの表情を浮かべる幼なじみに、イズナは呆れたようにその手紙を胸元に突きつけた。

「リンドからだ。このまま放っておかれたら俺のところへ嫁に来るって言ってたぞ」

「！」

その言葉に、イズナの手から手紙を奪うように受けとると、オルローは咳払いをひとつして、なにこともなかったように背を向けた。「気持ちわかるが、手紙を読むのは後にしてくれ。」

イズナが咳払いをひとつして冷やかすような口調で言うと、オルローは封を解こうとしていた手元を隠して手紙を服の中に納めた。

「読むわけがないだろう」

「どうだかな」

「行くぞ」

オルローはイズナの背を押して、通路へ戻るよう促す

「陛下もおまえの顔を見れば、少しは喜ばれるだろうしな」

「もつともだ。ところで、おまえは喜んでくれたか？」

「当然だ」

「リンドに伝えておくよ」

「手紙のことは違う。お前と再会できたことだ」

「いいわけとは珍しい」

イズナのからかうような言葉も、いまのオルローの耳には心地よく響いた。

リンセントートス城の一角を居城として譲り与えられたフェリエスは、その一番奥の寝所で、近従の少年兵に命じ、テラスの扉をすべて開放させていた。

「空が……眩しいな……」

窓を開けるのも、青い空を見るのも、陽のまぶしさに目を細めるのも、すべはあの結婚式以来だった。

二年ぶりに部屋の中に飛び込んで来た新鮮な空気は、さわやかな風に乗って、重くよんだ空気を一気に外へ押し出していくのがわかる。

同時にフェリエスは、左手をゆっくりともちあげ中指の《ラーヴの指輪》を見つめた。

この半年前から、フェリエスは突然体調を崩した。

その理由はフェリエス自身が誰よりもよく知っている。

《ラーヴの指輪》に全魂こめて、注ぎ続けてきた力が失われはじめたからだ。

フェリエスの守護妖精ミュラも、父オリシエ王の守護妖獣大鷲ダヌも、彼が十八歳の初陣の時にセルグ国で命を落とした。

だが王が代々受け継ぐ《ラーヴの指輪》は、守護妖獣を失った新王に新たなる守護妖獣を与えた。

王の指輪が存在する限り、王が指輪を守り続ける限り、たとえ守護妖獣が命を落としても、指輪が新たなる守護妖獣を、王とその継承者である家族に守護妖獣を与えるのだ。

守護妖獣テオドル。

フェリエスの新しい守護妖獣は、母ロマーヌ皇太后の守護妖獣と同じ白竜の種族だった。

同種族の守護妖獣は、どれほど場所が離れていてもある程度の会話をすることが可能といわれている。

この二年数カ月の間、フェリエスはリンセントースに身を置きながらも、ナイアデスにいる、母ロマーヌ皇太后と互いの守護妖獣を通してわずかな時間ではあったが言葉を交わすことができた。

しかし、このリンセントースを長い時間、襲い続けた砂嵐は、その守護妖獣の能力を弱める力をも、もっているようだった。

フェリエスが精神を集中させ、テオドールに意識を重ねれば重ねるほど、自らの体力を消耗させる結果となったのだ。

すでにこの半年以上、ベッドから起き上がる体力さえ失いかけているだけではなく、守護妖獣を通してロマーヌ皇太后と連絡をとることさえもできなくなっていた。

だが今日だけは、どのように体力を失おうともリンセントースの嵐が止んだことを一刻も早く祖国に伝えなければという使命感がフェリエスをベッドから起き上がらせようとしていた。

オルローが戻って来たのは、そんな時だった。

「陛下、無理をされてはいけません」

驚きながら駆け寄り、フェリエスの背中に手を添える。

「いや、大丈夫だ」

フェリエスが左手の指輪を包むように手を重ねているのを見て、オルローは何を行なおうとしているのを知った。

守護妖獣に力を与えるために意識を集中するとき、フェリエスはいつもそうしていたからだ。

「陛下、ご安心ください。ナイアデスより迎えが参りました」

「？」

フェリエスの怪訝な顔が、オルローを見る。

「イズナ將軍がまいりました」

一瞬、驚いたような表情がフェリエスに浮かんだ。

守護妖獣はそれすら知らせられないほど弱っていたのだ。

「まことか？」

扉から現れたイズナの姿のを目にして、黄金の瞳が力を取り戻したように輝いた。

「イズナ……」

名を呼ばれ、そばへ歩み寄ったイズナは、フェリエスのあまりの憔悴ぶりに浮かびかかった狼狽の表情を隠し、片膝を床につけ深々と頭を下げた。

「陛下、お迎えが遅くなり申し訳ございませんでした。ロマーヌ皇太后陛下の命を受け、イズナ部隊お迎えに馳せ参じました」

イズナは下げた頭を、そのまま上げることができなかった。

本来であれば、病に伏している姿など、誇り高いフェリエスが臣下に見られたいと思うわけがないのだ。

また、自分も見たくはなかった。主の姿に思いがけなく衝撃を受けた自分の心に、イズナは目を背ける。

(どれほどのお苦しみが、あられたことか……)

自分の気持ちなど捨てておけ、とイズナは強く下唇をかみしめた。フェリエスの受けた苦しみをどうするかが最優先のはずだった。

自分が、もっと早くリンセントート行きを止めることが出来さえすれば、フェリエスをここまで苦しめることにならなかったのだ。そう思うとき、イズナの目頭は熱くなり、悔し涙を止めることができなかった。

「母上から……ある程度のこととは伝わっている……魔道士のこともな。イズナ、お前が日々、自分のことを責めていることも……。頭を上げてくれ、お前に非はない。本当によく来てくれた。感謝する」  
そう語りかけるうちに、心なしか全身に力が蘇りつつあるのを、フェリエス自身は不思議と感じていた。

「私は……そう感謝を口にせぬのは知っているだろう。今日の太陽と青空が言わせたと心得ておけ」

横に立つオルローもフェリエスの蒼ざめた顔色に徐々に血色が戻り、声に力が戻ってきているのを知って、目を瞬かせた。

笑顔さえ浮べる様子に、オルローもまた静かな笑みが自分に浮かぶのをしって嬉しかった。

イズナは涙を袖でぐいとぬぐうと顔を上げ、厳粛な面持ちで、口



マーヌ皇太后からの親書をフェリエスに差し出した。

「陛下……これを。皇太后陛下からお預かりしてまいりました」

うなずきながらその手紙を受け取り、流れるように読み終えたフェリエスは、デイルムツドを室内に呼ぶようにイズナに命じた。

親書にその存在がイズナと共にあることを知ったのだ。

ナイアデスの宮廷魔道士のフードをまとったデイルムツドは、ゆつくりとした足取りでフェリエスの前に現れた。

「ラージ・デイルムツドでございます」

しかし、そう名乗りフェリエスと顔を合わせたデイルムツドは意外なことに、驚愕の表情を浮かべたまま、その場に立ち尽くしてしまっていた。

「どうした？」

フェリエスに問われてもしばらく微動だにしなかった魔道士は、突然低い声で言葉を紡ぎはじめた。

「神々の宴が、はじまりを告げる」

神々の宴が、はじまりを告げる

闇と光の目覚めの宴。

眠りにつく神々は、

宴のためにその印を自らにとどめる。

闇を統べし神は闇の印を。

光を統べし神は光の印を。

黄金の瞳持てる者

貴き光を放つ者。

無数の神を統べし者。

宴の主人の証しなり。

言い終わるとデイルムツドは、ベッドに座るフェリエスの前で両膝を折りひざまづいた。

そして、眩い光を見るように、ナイアデスの皇帝の顔を仰ぎ見、

平伏した。

「いかがした？」

ただならぬものを感じて、フェリエスはじっとデイルムツドを見つめる。

「おそれながら、陛下はご自身の真のお姿を御存じではございません。その両眼の黄金の瞳はこの世界に唯一無二の神の証。それを思い出されれば、その程度の病はたちどころに消え去り、大いなる光を御自らが人々にお与えになることは明らか」

「それは……先読み なのか……？」

突然のデイルムツドの言葉に、オルローもイズナも言葉を失う。

室内が静まり返った。

「わが 先読み など……陛下の存在を前にした今、意味などなしませぬ……」

デイルムツドの低く抑揚のない、神聖さをおびた声が、部屋の空気に緊張感を張り巡らせる。

フェリエスは、デイルムツドの姿を見つめたまま微動だにしない。

「私の目が神の証とはどういう意味だ？」

「陛下……転身人はシルク・トトウ神だけではありません」

間髪入れず放たれた静かな言葉に、誰もが息をのんだ。

自分を見つめる黄金の瞳に見つめられる中で、デイルムツドはフェリエスの身にかかわる神の名を告げた。

リンセンテートス首都の砂嵐が止んだその日、ハリア国との国境近くの古城に、馬に乗った一人の男が姿を現した。

ベーリント城。

緑豊かなミゼア山と、その足元から広がる砂の大地ミゼア砂漠の狭間に隠れるように建てられた城館は、すでに人々の記憶から忘れられて久しい。

一見、平地の中にあるように見える無防備な城だが、その周囲には深い掘が二重に城壁を取り囲み、容易には侵入出来ない造りとなっている。

城門側からゆっくりと降ろされた跳ね橋をわたり、男は城壁の内側へと入って行く。

城の正面玄関ではすでに厩番が待機しており、男は馬から降り、なれたしぐさで手綱を渡すと言葉もかわさず城館の中に入っていた。

静かな城内に男の靴音が響き渡る。

すぐに、少し背を丸めた年配の厳格そうな顔立ちをした執事がどこからともなくあらわれた。

男の脱いだ外套を受け取り、ささやくように三言、二言告げ、一礼をすると再びうす暗い通路の中に消えていく。

男は、正面に大階段をしつらえた広いホール中央に立つと、三階まで吹き抜けになった高い円形の天井を見上げた。

そこには、高みからほほ笑みかける天上の神々の姿を描いた一面の天上画が広がっていた。

光の衣をまとい、暁を懐に抱き、星々の子を従えながら、ほほ笑みをたたえる幸福そのものの神々の姿。

それらが、側面から採り入れられる外光に照らされて、今も鮮やかな色彩を浮かび上がらせる。

いにしえの神々との対話を楽しむように静寂の中に身を浸し、天井画を見つめ続ける男の姿は、まるで彫像のようでさえあった。その男の背後に足音を忍ばせて近づく影があった。

しかし、男は天井画に魅入られたかのように微動だにしない。

名前さえ忘れられた神々の姿を、その藍色の瞳に焼き付けようとするかのように、天井を仰ぎ見ている。

「ガーゼフ！」

彼の名を呼びながら、後ろから抱きつこうとした細く白い腕が伸びた。

ガーゼフは振り返りながら、さりげなくその腕をかわし、かわりに優雅にその手の平をとって、しなやかな白い指にそっと口づけをした。

「ごきげん麗しく存じ上げます。アイン嬢」

ガーゼフは、頬をバラ色に染めているアインに儀礼的にほほ笑むと、触れていた指をゆっくりと離れた。

その藍色の視線は、アインの瞳に一瞬留まり、流れるようにそのまま大階段に立つ人物へと向かう。

「ただいま戻りました。シーラ様」

そこには薄い若草色のドレスに身を包んだ、美しい女性が緊張した面持ちで立っていた。

二年前に、リンセントースのラシル王の側妃として結婚式を挙げた直後、ミゼア砂漠で何者かにさらわれ、消息を絶ったハリア国の王女。

そのシーラの姿がここベールリント城にあった。

シーラはガーゼフの瞳と出会うと、唇を静かに噛み締め、琥珀色の美しい瞳を曇らせた。

二年前。

ハリア国の隣国であるラシル王の側妃として嫁いだその夜から、シーラの運命は思いもかけない方向へと転じた。

初夜の寝室に現れたのは、なぜか夫であるラシル王ではなく、ナイアデス皇国のフェリエス皇帝だったのだ。

『あなたは、このナイアデスの皇帝フェリエスの后となるのです』  
当然のことのように告げられても、シーラはおびえるだけでどうすることもできなかった。

フェリエスの側近であるというオルロー將軍から、皇帝が十八歳で皇帝の座に就き、既に八年の月日を経たこと。まだ正妃を娶ってはいないこと。ハリア国の王女であれば皇后として不足はないこと、等々、説明は受けた。

しかし、それがハリア、リンセントース両国の同意のもとで決められた取り決めなのかをたずねても、それに対する回答はなかった。

(そういえば……)

時間が経過するに従い、冷静さを取り戻したシーラはあることに気がついた。

いや、もつと早く気づくべきだったのだ。

王室の婚礼 という、神々に祝福されるべきその場に、アンナの一族が一人もいなかったことを。

大国であれば、宮廷魔道士や占術士が結婚の儀の宣誓の儀式を行う。それ以外のリンセントースのような中国、小国では、アンナの一族が司祭士をつとめるべき人物として立ち会はずなのだ。

(いなかったわ……立ち会うべき司祭士が……どこにも)

自分一人だけが何も知らされぬままの出来事なのか、リンセントースとナイアデス皇国との謀なのか、それともフェリエスの独断

での行動なのかシーラは何ひとつ知ることができない。

シーラの必死の問いかけに誰もが口を閉ざした。そしてそのまま、シーラは別の住まいへと身を移された。

数日後、遂にフェリエスがナイアデス皇国への帰路につく日が訪れた。

結婚式の後、一度もラシル王と対面することのないまま、祖国ハリア女王である妹のミレーゼに連絡もとれないまま、シーラとアインは砂嵐の中、連れ去られるようにしてフェリエスと同じ馬車に乗せられた。

リンセントースが、シーラを完全に無視しているのは明確だった。

あの寝室に一步入った時から、リンセントースの者は姿を消した。

シーラを助けにくる者はだれもいない。

居城となる場所から連れ去られる時も、また強引とも言うような方法で馬車に押し込まれた時も。

シーラが絶望のふちに立たされたとき、ミゼア砂漠で、ナイアデスの一行は突然何者かの襲撃を受けたのだ。

馬車の外で何が起きているのか、砂嵐の吹き荒れる音と馬のいななきにかき消され、まったく知ることができなかった。

時折、剣の激しくぶつかり合う音が聞こえてくるだけだった。

シーラは、ハリア国からシーラの話し相手として付き従って来たアインと二人、震えながら身を寄せ合っていた。

そこに突然、襲撃者が馬車に乗り込んで来たのだ。

怯える二人を守るようにして、襲撃者と剣を交えながら馬車の外に飛び出していったフェリエス。

馬車は走り出した。襲撃者たちから逃れるように、馬車は砂漠の中を走り続けた。

どれほどの時間が過ぎたのか、気がつくときシーラはアインと抱き合ったまま眠ってしまったっていた。

馬車はまだ休むことなく走り続けていた。

叫び声も、喧噪もない。砂を蹴る蹄と車輪の独特の音がどこまでも続く。

襲撃者の手から逃れたことはわかったが、今度は別の不安が首をもたげ始めた。

布でふさがれている扉の小窓を覗いてみても、見えるのは果てしなく続く砂漠の風景だった。

馬車と騎兵で大勢いた隊列はどこにも見当たらない。

シーラの乗った馬車だけが、砂漠を走っているのだ。

(どうして？ 他の人達は……)

シーラの心に、別の恐怖心が芽生えかけた。

何度も御者に声をかけるが、声が届かないのか振り返りもしない。やがて陽が傾きかけた頃、馬車はゆっくりと車輪を止めた。

「シーラ様……ここは？」

肩にもたれたまま眠っていたアインが目を覚ました。

アインは、シーラの体が緊張でこわばっているのをすぐに感じ取ったのか、その視線の先を追う。

ふたりの瞳の見つめるなかで、馬車の扉が開き、明るい光が差し込んだ。

「ここは……？」

アインにそう問いかられ、シーラは厳しい顔をして首を横に振った。

馬車の外には、御者らしき人影が頭を低くしたまま立っていた。

「無礼を承知の上で、長旅にお付き合いました。さようなら」

帽子をとった長身の男の顔を見た瞬間、シーラの心臓は凍りつきそうになった。

だがアインの反応は、別の意味でシーラを驚かせた。

「ガーゼフ！」

アインは顔をパツと輝かせると、馬車から飛び降りた。

「助けに来て下さったのね？」

長旅の疲れも吹き飛んだように、ガーゼフに歩み寄る。

ガーゼフはそのアインに一礼をすると、シーラが馬車から降りるための介添えをするために、黒い手袋をしたままの手を差し伸べた。「メイヴ妃殿下より、お二人をフェリエス皇帝の手よりお守りするように、との密命を受けて参りました」

「メイヴ妃が……」

信られない言葉に、シーラは次の言葉を失った。

そして一瞬、躊躇しながらも、一步前に踏み出し、体を硬くしながらその手に支えられて、シーラは馬車から降り立った。

シーラに向き合ったガーゼフは一步下がり、再び深々と頭を垂れ臣下の礼をとると、自分のとったこれまでの経緯を説明しはじめた。「婚礼前の暴漢たちによる襲撃はもとより、ラシル王の非礼な態度にミレーゼ陛下は大変にご立腹されております。その上、リンセンテートスのラシル王は、わがハリアに一言もないままに、姫様をナイアデス皇国のフェリエス皇帝に差し出すという暴挙に及びました。メイヴ妃は、このままお二人をナイアデスへ連れ去られるのを看過するわけにはいかないと、密命として私に、お二人をお救いするよう命じられました。ただし、ハリア国がシーラ様を奪い返したと知られば、友好の為の婚礼が争いと変じます。ですからこれはあくまでも私個人が行なったこと。ミレーゼ陛下にもお知らせしないこととなるということです」

母国からの突然の救出劇に安堵しつつも、戸惑いながらシーラは、目の前の男の藍色の瞳をじっと見上げる。

ガーゼフ伯爵。

ミレーゼとエリルの母、ミディール妃と深い仲にあった男。

ミディール妃の三番目の子供、グリトニル王子は、ガーゼフとの間にできた子ではないかと宮中では囁かれている。

そのガーゼフは、ミディール妃の陰謀が露見する直前に突然行方をくらませた。

そんな男が、一体どうしてメイヴ妃から密命を得て、自分を救い



に現れたのか混乱してしまっていた。

この状況をどう受け取ればいいのか、まったく理解ができなかった。

だが、シーラの戸惑う表情を見て、二人の様子を見ていたアインがそつとその手をとる。

「心配なさらないで、シーラ様。ガーゼフ伯爵は、メイヴ妃の母国、ナクロ公国がまだあったときからの臣下です。信じて大丈夫ですわ。私もよく存じておりますもの」

アインのガーゼフをかばうような言葉も、シーラの不安を静める効果はなかった。

(信用してはいけない男……)

ハリアの王宮にいるときから、シーラはできるだけガーゼフと関わらないようにしてきた。

ミディール妃とおよそ穏やかでない噂話の主であることはもちろん、ミレーゼやエリルにとっては仇敵ともいえる存在だったからだ。

だが、いまの自分のおかれている立場を振り返って見るとき、シーラはあまりに無力だった。

ガーゼフが譬えどのような男であったとしても、ハリア国の廷臣であり、しかもメイヴ妃の意向でシーラたちを救いに現れたというならば、今はその言葉を信じてみるほかはなかった。

(ミレーゼ……エリル……)

シーラは心の中で、半分だけ血のつながった妹と弟を思い浮かべながら、出来る限り毅然とした態度で、ガーゼフに問いかけた。

「私は、これからどうなるのですか？」

「本来であれば、出来る限り早くハリアにお帰りいただくのが、最善のところではありますが、たとえばどのような事情があったとしても表面上はシーラ姫は、ラシル王の側妃。勝手にリンセントスを出るわけにはまいりません。メイヴ妃殿下は今回の件を内密にラシル王に問いただされる意向です。それまでは、ハリアの国境近

くこのベーリント城に身を隠していただくつもりです」

ガーゼフに言われて、シーラは初めて今いる場所が古い城の前だということに気がついた。

狩場用につくられた貴族の館のように、こじんまりとした造りの建物だったために、城だとは思わなかったのだ。

そんなシーラの様子に、ガーゼフは片手を上げて城を示す。

「この城は、はるか遠い昔、忘れられし太古の神々が、新しい神々に祝福を与えるために集ったという伝承が残っている城です。ハリアとリンセントース、そしてセルグという三つの国の境に位置するミゼア山嶺のふもとに建てられた城。それぞれの国がミゼア山嶺を居軸に戦さを行うことが絶えて久しいのは、このベーリント城に住む太古の神々の眠りを覚ますことを恐れるためともいわれています」

端正な顔立ちに浮かぶ微笑からは程遠い、瞳の奥の無表情な光が、その伝承を素直に信じている訳ではないようにシーラには思えた。

「リンセントースの城なのでは？」

「すでに遙か昔に人々は去り、ここに城があることさえ知っているものはおりません」

シーラは、古城に視線を向けるガーゼフの背中を怪訝そうに見ていた。

「ご安心を」

まるでその表情を見ているかのように、ガーゼフはゆっくと振り返りシーラを見る。

「シーラ様をいつでもご案内できるように、城の中は狭くはありませんが心地好く過ごされるよう修繕し、整えました。警護の兵、執事、侍女たちもおります」

「他国でそのようなこと」

「亡国ナクロ国の血筋の姫、と信じております」

シーラは顔をこわばらせる。

「ここにいる者たちは、ハリアに滅ぼされ、リンセントースに落

ち延びたナク口国に縁ありし者。メイヴ妃と私が信頼をしている者たちばかりです。が、シーラ様がハリア国のお方だとわかればお命の保証はございません。絶対に、口外なされませんように」

「……………」

シーラの震える琥珀色の瞳を、穏やかな瞳で受け止めるかのよう  
にガーゼフは魅惑的に微笑んだ。

「私はシーラ様のお味方です。祖国に戻られる日までご不自由とは存じますが、しばしのご辛抱です。許可が出るまで、この城にご滞在いただけますようお願い申し上げます」

「いつまでなの？」

シーラは、再びベーリント城を見つめた。

ハリアの王女として生まれ、リンセントースの側妃として生きるのだと信じていた自分の運命が、途切れてしまった気がした。

今は助けられたが、相手は警戒をするべき男であり、古城の中にいるのはガーゼフの息のかかったものたちばかり。

シーラの本当の味方は誰もいない。

寂しく惨めな自分の状況が、この人々から忘れ去られた古城と重なり、気がつくとい筋の涙が頬を伝わっていた。

「私は、すぐにメイヴ妃にシーラ様を保護出来たことをご報告にあがります。内密に動きますので、すぐには難しいでしょうが、そうお時間はかからないと思います。おそらく半年ほどで状況は動き出すでしょう」

ガーゼフは、感情の読めない表情でゆっくりと一礼をした。

そう言われて、すでに二年以上の月日が経過した。

リンセントートスを襲った巨大な砂嵐はおさまるところか、日を追うにつれその勢力を増し、城とその一帯が孤立してしまったのだ。ハリア国と交渉をもつどころの騒ぎではなくなってしまった。

シーラは、ガーゼフが城に姿を現すたびに朗報を待ち望んできたけれどその一方で、シーラはいつしかこの城での暮らしを失いたくないという思いはじめている自分の心を否定できなかった。

華やかな王宮での暮らしとは比べようがなかったが、ベーリント城での毎日には心地よい穏やかな日々があった。

人々の口さがない噂話や視線に悩まされることも、朝から晩まで大勢の侍女たちに囲まれながら、決められた単調な一日を過ごすなぐてはいけない苦痛も、ここにはなかった。

窓辺に訪れる小鳥たちの歌声で目を覚まし、時を忘れるまでアインとおしゃべりをしたり、一人で好きな本を何度も読み返したり、絵を描いたり、中庭で美しい花を育てるといふ楽しみも覚えた。

そうした暮らしがいつまでも続くものではないとわかっていても、シーラはガーゼフが城を訪れるたびに、複雑な思いにかられた。

「砂嵐が止みました」

ガーゼフがその言葉を告げたとき、シーラは時間が止まったような奇妙な錯覚を覚えた。

(ついに来てしまった……)

待ち望んでいたはずの言葉を聞いたとき、シーラは心臓を矢で貫かれたような痛みを覚えた。

「どうなりますか……？」

やっと出た自分の声が震えているのに、シーラは気づいた。

だが、ガーゼフはそれに反応を示すことなく、言葉を続けた。

「メイヴ妃殿下には、人を送りました。シーラ様は、祖国よりの指

示が出るまでしばらくはこのままここで静観していただくのがよろしいかと思われます。いかがでしょうか？」

ガーゼフは、シーラに対し礼を失することのない廷臣として接しているように見えた。

常に敬意を込めて接し、王族への親愛の表現も忘れることもない。ベーリント城には居住せず、時折、城に現れては、外の様々な状況を報告しては再び帰っていった。

誠実な姿　どれほど猜疑の目でみても、ガーゼフはそう呼ぶにふさわしい人間であるようにシーラには映りはじめていた。

時にどのような人間ですら魅了するような笑みと、甘く心地のよい低い声。

執事と使用人たちをのぞけば、アインと二人きりの暮らしの中で、ガーゼフは自分たちを庇護し続けるにたりる存在だった

しかし、それでもなおガーゼフが現れるたびにシーラの目には自分を守るように立ちはだかる存在を、感じずにはいられなかった。

『あいつだけは、死んでも許さないわ』

憎しみの瞳でガーゼフを睨み続けるミレーゼ。

『姉上様、お気をつけ下さい。決してお心を許してはいけません』

ガーゼフに階段から突き落とされ瀕死の怪我を負ったエリルが、悲しげな瞳で訴えかける。

なにも知らずにガーゼフに出会ったならば、彼ほど頼りになる信頼できる臣下はいないのに……と、シーラは悲しく思う。

「私は、このままずっとここにいたいわ」

二人の会話が途切れるのを待つて、アインが会話に加わってきた。この二年ですっかり女性らしくなったアインの、ガーゼフに対する想いをシーラは知っていた。

妖精のような可憐な美しさを全身にあふれさせた乙女は、栗色の長い髪を揺らし、碧い瞳を輝かせてガーゼフのそばに歩み寄る。

「そうすれば、ずっとそばにいてくれるのでしょうか？」

遠慮する様子もなく、ガーゼフの手を白く細い指でからめるよう

に包みこむと、その瞳に視線をあわせて愛らしいほほ笑みをみせる。  
「姫様もきつとそう思ってたわ」

アインがガーゼフとメイヴ妃の関係がどのようなものなのか知っていることは確かだったが、シーラがその話をするアインは別の話題にするりと切り替えてしまうので、結局シーラはなにひとつ知ることができずにいた。

(ミディール妃とメイヴ妃……両方の側妃に取り入っていた男……)  
決して感情を露にすることなく、礼儀正しく振る舞う姿に、策謀に加担するような影は見当たらない。

『でも、信じちゃだめよ』

『うん、僕もそうしてほしい』

気の強い妹と、賢くやさしい弟の心配気な声がささやく。

「ガーゼフ」

シーラはためらいを捨てて、ガーゼフを見つめた。

「リンセントースとハリアの間で話がどのように進むのか、わたしにはわかりません。ただ、戦さにはならないようにと願います。どうかメイヴ様によろしくお伝え下さい。そして……」

シーラは、穏やかな表情でガーゼフに告げた。

「これまでどおり、わたしたちの身の振りかたは、すべてあなたに一任いたします」

果てしなく続く漆黒の闇。

その空間に光の壁が浮き出していた。

「嵐が止んだ……」

声の主がその壁にそっと手を触れると、壁の中にリンセンタートス城の姿が浮かび上がった。

青い空のもと、砂に覆われたかつては白亜の城が、心地よさげに静かな風に吹かれている。

「この何もない小さな国は、人を引きつける興味深い舞台だな」

クスクスと笑いう声が響き、壁の光を受けて闇の中に美しい若者の姿が浮かび上がる。

「ですが……気がかりなことも」

若者のそばで、闇そのもののように動かない黒装束の魔道士が、ひざまづいたまま主に声をかけた。

「時は来るものだ」

若者の魅惑的な声が優しく応える。

「シルク・トトウがピアノに呼びかける……次に、目を覚ますのは我が仇敵……。役者が揃わなくては、幕はあがらないだろう、イルアド」

「ですが……暴走の気配がごぞいます」

「心配性だな……」

陶酔したような美しい瞳が、極上のほほ笑みを浮かべた。

陶器のような白い肌に、ほんのりと血の色が浮かび上がる。

「ユナセプラの時が訪れる……それを知っているものだけが、この世界を導くことができるのだよ。名前だけの亡霊たちが、どれほど蘇ったところで、我に対治できるものはどこにもいない……愚かな目覚めだ」

「はい」

ゆっくりと長い睫を閉じ、闇に抱きかかえられるように、若者は  
うっとりときささやいた。

「もうすぐだ……もうすぐ……光の世界がこの身を招きよせる……」  
妖しく濡れた紅い唇が、魅力的な笑みをかたどった。



リンセンテートスの砂嵐が止んだという情報は、瞬く間にダーナ  
ンにもたらされた。

「時がまいりました。今が千載一遇の時です。リンセンテートスに  
は病に伏したナイアデスの皇帝あり。ラシル王ともども一網打尽に  
粉碎すれば、わがダーナンにとって恐れるものはなくなります」

軍義室で、軍師のカラギが熱弁をふるっていた。

「だが、われわれの目的はフューリー様をお救いすること。病人同  
様のリンセンテートスに今すぐ攻め入ることは……」

ジュゼールが、カラギの意見に意を唱える。

「ナイアデスのフェリエスをこのまま国に帰えしてしまえば、フユ  
ーリー様の行方はあの皇国の奥深い場所に隠されてしまう。そうな  
ってからでは、手遅れなのだぞ」

褐色の肌をもつ若い軍師に、鋭い言葉を突きつけられてジュゼー  
ルは言葉を詰まらせた。

そのカラギに同意するように、宰相のグラハイドが椅子から立ち  
上がって、その場の全員に語りかけた。

「我々はこの二年余り、今日まで国の機能を失ったリンセンテート  
スに進攻することをよしとせず、指をくわえて見ておりました。  
それは、なぜか？ 思い出していたください。皆も知ってのとおり、

そのような主がないも同様の国を襲うのは卑怯である、との陛下  
のお言葉があったからです。逆に陛下は、穀物などの食料をリンセ  
ンテートスの急使に伝えて援助をなされ、人道に尽くされました」

グラハイドは、長方形の卓に座っている一人一人に語りかけるよ  
うに、言葉をつむいだ。

「嵐は去った。慈悲は十二分にかけてのです。リンセンテートスの  
両目を閉ざすものはなくなりました。いや、むしろナイアデス皇帝  
との仲がより親密になったと考えるべきです。リンセンテートスを

このままにしておいたならば、ナイアデスの同盟国として、やがて我々に牙を向ける先鋒隊となるのは必然のこと。いまずくに攻め入れば、双方共に流血は最小限度にとどめられるはず」

宰相は、中央奥の席に身をおいているロディイに向き直った。

ジュゼールは、すでに自分の言葉はだれの耳にも届かないことを理解していた。

（わかつていたことだ……この二年、リンセントースへの進攻を一番望んでいたのは俺自身だ……）

ダーナンの若き帝王と称えられ、また恐れられているロディイ・ザイナスは、ジュゼールの視線を受けてその碧い瞳でじつと彼をみつめた。

『あれは、間違いなくフューリーだった』

ミゼア砂漠で、ナイアデス皇帝の馬車に急襲をかけ失敗をした後、ロディイは共にいたジュゼールにそう漏らした。

その時の、悔しさに満ちたロディイの瞳をジュゼールは一日たりとも忘れたことがない。

リンセントースのラシル王の結婚式に、ハリア国のミレーゼ王女が国賓として招かれることを知ったロディイは、危険を承知でわずかな部下を連れてリンセントースに潜り込んだ。

そこで得た信頼に足りる情報は、「シーラ王女の侍女が、フューリーに似ている」というものだった。

ならば、後日ラシル王に交渉し、フューリーと思われる侍女との対面を申し出ればことを荒立てずに済むはずだった。

だが、事情は一変した。

ラシル王の花嫁となるべきシーラ王女を、賓客として来ていたはずのナイアデス皇帝にラシル王が極秘に譲り渡したという噂が、城に忍び込んでいた部下からもたらされたのだ。

『どうやら、リンセントースの年寄りには、ハリア国王ヘルモーズの病気による事実上の権力失墜を知り、すでに取り交わされていたシーラ王女との婚儀を、ナイアデスとの関係強化に利用することを

思いついたらしい。ハリアに内密に、若く美しい姫をフェリエスに差し出せば、ナイアデスは勞せずハリア王国から人質を手に入れられる。しかも、皇帝の後として迎い入れれば、ハリア国も先々の思惑も生まれて、ナイアデスと親密な関係を結んだリンセンテートスへは簡単には進攻することができなくなる……というわけだ』

そうした政治的複雑な背景と少ない情報を分析して、そうロディはジュゼールに自分の推測を語った。

もちろん、それはロディにとり憶測の域をでないものだったが、シーラ王女がナイアデスに連れて行かれるとなれば、侍女として一緒にいるはずのフューリーの行方が問題となった。

『ナイアデスの動きから目を離さず、国に帰るその時を狙って、シーラ王女ともどもフューリーを奪還する。』

その後でシーラ王女を、リンセンテートスに恨みがあり余っている、気の強そうなハリアの女王にお返しすれば、借りは返して、恩がつけれる』

ジュゼールに熱く語る思いつめた深く憂いを帯びた瞳には、妹を取り戻すための決意がみなぎっていた。

だが、フェリエスの馬車に奇襲をかけながら、ロディとジュゼールたちはフューリー奪還に失敗をした。

砂漠に消えていく馬車の姿は、砂漠の砂塵に行く手をふさがれ追いつくことも、どこに向かったのかを知ることすらできなかったのだ。

残された唯一の手掛かりは、ナイアデスの皇帝フェリエスだった。フューリーを乗せた馬車は、フェリエスの指示を受けてリンセンテートスのどこかへ匿われていると読んだのだ。

だからこの嵐が止み、フェリエスがナイアデスに帰る機会を逃せば、王女フューリーの居場所は永遠にわからなくなるかもしれない。ロディを取り巻く人々の心にはそうした不安が、重くのしかかっていた。

ロディの苦渋と決意に満ちた瞳に射られて、ジュゼールはうなず

き、カラギに向き直った。

「流れる血が最小限で済むならば、私が最前線に立とう。軍師殿の知略を信じて」

「歴戦の英雄であるジュゼール將軍は、勇猛果敢にして情に厚きご性格。このカラギ、ご期待に必ずやお応え致しますよう」

カラギは涼やかに笑った。

「異存はなくなったようだな」

ロデイの言葉に、その場の全員が立ち上がり、一斉に敬礼をした。黄金色の髪を揺らしながら、ロデイもまた椅子から立ち上がり、

机の上に両手をおくと、氷のように澄んだ碧い瞳で一同を見渡した。

「これよりわがダーナンは、我が妹である王女フューリーを奪還すべく、リンセントートス王および、ナイアデス皇帝の身柄拘束をすべく、リンセントートスを攻め落とす」

ロデイ・ザイネス　ダーナン帝国の若き帝王の静かなる声が、いま開戦をつげた。

「城の姿がなんにも見えなくなるほどのひどい砂嵐がずっと続いてね」

ミゼア砂漠を越えてきたという旅の一行に、宿のおかみが笑顔をふりまきながら飲み物を運んで来た。

「あなたたちは運がいいねえ。ここ数日は、ようやく嵐が止んで平穏が戻ったお祝いに、城下へ行けば商人たちが大判振る舞いをしてくれているらしいよ。これで活気が戻ってくれたら言うことないんだけど」

頑丈そうな丸い木製のテーブルを囲んで、乾いた喉に水分を流し込んでいる旅人の一人に、おかみが、そつと耳打ちをした。

「ねえ、ビアン神のお怒りがとかれたのは、やっぱり月の神の息子を王子様のいる、ノストールっていう国の一行が来てくれたおかげなのかねえ」

突然問いかけられた薄紫色の長衣を身にまとったアンナは、驚きながらも静かにほほ笑みを浮かべた。

「シルク・トトウ神の転身人は、いくつもの竜巻を同時に起こすお力をお持ちですから」

「シルク・トトウ神……って、いうの？ へえー」

妙な感心の表情を浮かべて、おかみは四人から離れていった。

「あんなことって、大丈夫なの？」

ネイが小声で、エリルに言う。

「いまこの国の関心は自国ビアン神のことだけのようです。知らない他の国の神の名を出されると、逆に関心が薄れるようです。さつきも同じ質問を受けましたが、皆、ビアン神のことにしか関心がないうですよ」

「自分達の国を助けてくれたのが他国の神じゃおもしろくないもんなのか？」

「さあ。聞いたこともない神の名でしょうからね」

占術士アンナの女性と、若い女、そして少年二人の旅の一行は目を引きやすい。

特に、アンナがいるというだけで、人々は畏敬の念をもちひと目見よう、先読み をしてもらいたいと集まってくることも少なくない。

だが、幸いなことに彼らが足を運んだ宿には、他の旅人の姿はなかった。

リンセントートスを襲った砂嵐の影響で、訪れる者がほとんどいなくなつたのだと、おかみはこぼした。

「ジーン……？」

ネイがこの数日間黙つたままのルナに、声をかける。

ヤクンカ族と別れた日から、ルナの様子がおかしいことに気がついたので。

砂漠を歩いていても、目がうつろになり、すぐに座り込んでしまつたり、今までのルナからは考えられない行動だった。

病気かとも思ったが、それも違うらしく、遠い目をしては唇を噛む姿が、痛々しくネイの目に映つた。

「今日は、早く休もうね」

声をかけると、力無くうなづく。

「ねえ、占者ならなんとかできないの？」

ネイが不満そうに、エリルをにらむ。

「わたしは治癒術を学ぶまでの、修行は積んでいないので……」

エリルも出来ることなら元気づけてあげたいのと思うのだが、なにしろルナとは数えるほどしか言葉を交わしていないので、なにをどうすれば喜んでくれるのか、まったく見当がつかないのだ。

エーツ山脈から助け出したランレイと名付けた少年も、何も語らない。

ただ、片時もルナのそばから離れようとしなない。

ネイが明るい性格なのがエリルにとっての唯一の救いだったが、

エリルは自分が男であることを話す機会を失ったままだった。

『一人旅は危険に満ちあふれている。だが、アンナを襲う者は稀だ。特に女のアンナを襲った者は、天と地の呪いを受け体中から血を吹き出しながら死に至ることは、幼子でも知っている』

リア・アンナの一族と別れるにあたり、長のジーシュはまだ若いエリルの身を案じて、女性用のアンナの装束を与えてくれたのだ。

「とりあえず今日はここで休んで、明日その城下に行こうよ。ノストール軍がリンセントースの城に入ったのは確かみたいだし、まさか今日来て明日帰るなんてことはないだろうからさ」

「そうですね」

ネイの言葉につなずきながら、エリルはルナにちらりと視線を走らせた。

砂漠を越えるまでの案内役としてついてきたが、捜し求める指輪と出会うためにも、この先もルナと一緒に旅を続ける必要があると思えた。

そのために一緒にいる為の理由を考えなくては……と、心の中で腕を組んだ。

人々が寝静まった夜、ルナは一人宿を抜け出して、町外れにある大きな木の下にやって来た。

高く高く厚い雲に覆われた夜空に向かって伸びる木を、ルナは上っていった。

そして、一番上の体を支えられる枝に腰掛けると、リンセントース城があるという方角をみる。

暗闇の中では、城の姿さえあるのかわからなかったが、ルナは兄の面影を求めて、テセウスがいま眠りにについているだろうリンセントース城を見られるかもしれないと思って、木にのぼったのだ。

城が見えないとわかってても、ルナはその場から離れられなかった。砂漠での突然のテセウスとの再会。

けれど、テセウスはルナを覚えていなかった。

その衝撃は時間が経てばたつほど、ルナの心に重くのしかかり、体から力を失わせていった。

父カルザキア王との約束である王位継承の《アルディナの指輪》も、テセウスに渡した。

兄と会い、指輪を渡す。

ルナは、自分のすべきことをしてしまったことで、無気力になっていた。

テセウスと会えば、絶対に自分を思い出してくれる。ノストールの母の元に帰ることが出来る。という望みが、粉々に打ち砕かれてしまったのだ。

しかも、ルナを城から追い出し、ラウ王家の四番目の王子となつたアウシユダールが、ノストールを救い、今またこのリンセンタートスの危機さえも救ってしまった。

それも、アル神の息子シルク・トトウ神として。

「ルナ……いないほうが、いいのかな……」

ぼつりと、言葉が出た。

『時が来るまで……』

テセウスの守護妖獣ザークスの声が浮かんだが、今のルナには慰めにもならなかった。

「今すぐじゃなきゃ……いやだ……」

そうつぶやくと、ポロリと大粒の涙がルナの緑色の瞳からこぼれ落ちる。

その時、ガサガサと葉音がして、ランレイが木の葉の陰から顔を出した。

「ランレイ……」

ルナがあわてて涙をふくと、ランレイは首にぶら下げたものはずして手のひらにのせ、ルナに差し出し、渡そうとする様子を見せた。

その手にはイルダーグの牙が乗っていた。



「いいよ、それはランレイのだから……もっていいよ」

ルナはそう言いながら、イルダーグのことを思い出した。  
ルナの耳に父の声が響いた。

ディアードを探せ。

雷に打たれたようにルナは、イルダーグの牙を見つめた。

「ディアード……」

ルナの瞳がランレイを見る。

「父上との約束がまだあった……」

少年は、何も言わないままにゆっくりとイルダーグの牙を自分の首に戻した。

ルナは自分の体に再び力が戻ってくるのを感じた。

「これはね、父上とルナだけの約束なんだ。ルナが会いに行かなかつたら父上に叱られる」

ルナは少し嬉しそうに微笑むとランレイに語りかけた。

父カルザキア王との約束　今のルナにとって、自分と父とを結ぶ唯一の絆だった。

「ディアードに会って、父上の言葉を伝える……」

ルナはランレイと共に空を見上げた。

雲の向こう側にあるはずの星々と美しい銀盤の月に誓うように。

第12章 嵐の終息 - 12 - (後書き)

第12章 嵐の終息 終了

湖畔に暁が訪れる。

深い闇と、白い光の気配があたりを包み、一種独特な荘厳な世界をかもしだす。

その湖の岸辺に、長い黒髪の少女がたたずんでいた。

朝の震えるほどに突き刺さる寒さも感じていないように、紫色の澄んだ瞳は闇から光へ転じる光景に見いつていた。

「エデイス」

少女は突然、名を呼ばれて、驚いたように後ろを振り返った。

「サーザキア様」

エデイスはアンナー族の長であるサーザキアの姿に驚いたように瞳を丸くした。

そして、あわててひざを折り深々と礼をする。

「いよいよ……じゃな」

杖をつきながら、歩み寄ってくる年老いた長の姿に、エデイスは少しはにかみながら返事をした。

「はい」

「……」

サーザキアはその笑みを不思議そうに見つめている。

「怖くはないのか？」

「どうしてですか？」

問われた少女は、小首をかしげて、その問いの意味を考えるように長を見つめながら、澄んだ瞳で何度も瞬きをした。

「辛くはないのか？」

再びそう問われて、エデイスははじめて長の言わんとしていることに気がつき、視線をゆっくりと草で覆われている地面におとした。

「お氣にとめて下さっていたのですか？」

「もちろんじゃない」

エディスは長の言葉に紫色の瞳をゆつくりと上げ、自分と同じ色の瞳と視線を合わせた。

長と二人で話をすることは数えるほどだった。

アンナの中でも、一族を治める長の存在は特別の存在であり、畏敬の念をもって接せられた。

周囲には、常に複数の人々が従い、気軽には話かけられない雰囲気があった。

エディスは長の問いかけに、明るく応えた。

「怖くはありません。辛くありません。ただ……」

風がエディスの長い黒髪をそつと揺らす。

「ただ？」

「私のことで周りの人達に心配をかけてしまうのが、申し訳ないと思っっています」

「ふむ……」

サーザキアは孫娘のようなエディスを見下ろして、考え込むように目を閉じた。

風に揺れる、木々のざわめきが二人を包む。

空を舞う鳥の声にエディスが顔を上げると、朝のまばゆい陽が闇を払い青い空を照らしはじめてはじめていた。

「私は、夜と朝が一緒にいる風景がとても好きです」

エディスが朝日を見ながら無邪気に長に話しかける。

その言葉にサーザキアは、白く長い髭をゆつくりとなでつけ、眩しそうに空を仰いでいる少女の横顔を無言で見つめる。

「本当に、とても美しい光景ですもの」

感動に頬を紅潮させ瞳を輝かせる少女の輝く笑顔を、複雑な瞳で見つめていた。

エディス・ラ・ユル・アンナ。

アンナの一族の少女は十三歳の誕生月を迎えていた。

「サーザキア様」

森の中にいくつか点在するアンナたちの天幕。その中でも、ひときわ大きな天幕では、いま七人のアンナの家長たちが長サーザキアを中心に円陣を組み座っていた。

その中で長に次いで高位にあるイリユーシアが厳肅な口調で告げた。

「ほしも星守りの旅 への旅立ちの 때가近づいております。このたび十三の誕生月を迎えた者は、オージー、マティス、そしてエティスの三名でございます」

「先の二人は特に問題はないでしょうね。あるのは……エティスです。すね」

静かで軟らかな年配の女性の声が響く。

「わが一族では極めて稀なことではあるがな……」

古老の懸念を含ませた声が応じる。

「アンナとしての資質は皆無といえよう」

その言葉のため息混じりに同意する空気が流れる。

「長」

別の声がサーザキアに問いかける。

「十三の儀式を終えると、三人は 星守りの旅 へ出なくてはなりません。ですが、まだエティスには厳しいものと思われます。もう二年待つてはいかがでしょうか」

アンナの一族の者は、十三歳を迎えると一族から離れ、二年近い間 星守りの旅 に出なくてはならなかった。

それは占術士として最も芽を伸ばす時機に、さまざまな諸国を巡り、各王家の指輪が安定しているか確かめ、また求められれば王家に限らず、占術を行い能力を高めていく旅であった。

時には、占術や祈祷の効力が得られなかった場合や、治癒の術が効かなかったことが原因で、相手から恨みや怒りをかい、命を失っ

た者もあつた。

そうした厳しい旅を終え、一族に戻つたアンナの若者たちは、能力と共に精神面でも大きく成長するのだ。

「二年待てば芽が出るか。否か。引き止めるのは思いやりか。後に本人が苦しむのを長引かせる所業か。里により早く入れるのが良策か。否か。われらはアンナだ。道を知る立場にあるものが、一族の娘の行く末が見定められないと言うのか？」

サーザキアの感情の見えない、だが厳しい問いかけが家長たちに投げかけられる。

アンナであつても占術や祈祷、治癒等の資質がみられない者は、一族から離れアンナの名を捨てなければならなかつた。

アンナを離れ、普通の人々と生活をするもの、旅人として流浪するものなど、その後の生き方は様々であつた。もちろん、仲間や家族と離れる道を余儀なくされた者が一人で生きて行くということは、想像もできないほど苛酷なものとなる。

そうした元アンナたちが集まり、共に暮らす集落がわずかだが存在した。サーザキアのいう里とは、そのことを言っていた。

アンナとしての資質がない、そう家長らが認めることは、本人の意思にかかわらず一族から放出されることを意味した。

サーザキアの問いに、長い沈黙が訪れる。

「アンナの家長として、エデイスにはアンナとしての資質がないと断言する……と、とらえてよいのだな」

家長たちは、静まり返つたまま口を閉ざした。

サーザキアはイリユーシアに問いかける。

「イリユーシア、そなたもやがてアンナを率いていく立場になる日がくるやもしれん。どう見る？」

イリユーシアはサーザキアの感情の見えない瞳が自分に注がれると、真つすぐに顔をあげて明瞭な口調で答えた。

「わたくしの 先読み ……つまり、エデイスに関する 先読み はすでに終えております。その結果、彼女にはアンナとしての道は

見えませんでした」

「つまり……？」

サーザキアは先を促す。

「彼女はあまりにも平凡すぎます。アンナとしては不適合。ユルの流れを汲む者とは到底思えないほどです。非情ですが、この旅が彼女自身にアンナを離れる覚悟を自ら決めさせるよい機会となるのではないのでしょうか……」

イリユーシアの言葉に、それまで黙って何かに耐えていたような青年が、我慢しきれなくなったように、大声で笑い出した。

「なにがおかしいのです？ セルジーニ」

鋭い声でイリユーシアに名を呼ばれた青年は、そう問われてさらにおかしさが込み上げたように笑い続ける。

「セルジーニ！ やめんか」

別の家長から、笑いを止めさせようと声が飛ぶ。

「失礼ですが……」

セルジーニはあはあと息をしながら、自分の口元を拳で押さえ

「失礼ですが、イリユーシア殿は 星守りの旅 に出てはいられない」

「当たり前です」

すました表情に怒りを秘めた細長い目が、セルジーニを一瞥する。

「私はまだ七歳ですもの」

その言葉に、再びセルジーニは吹き出した。

「よさんか、セルジーニ。イリユーシア殿に失礼だぞ」

困ったようなくつもの声がセルジーニを制止する。

「失礼、失礼」

セルジーニは何度も大きく深呼吸を繰り返すと、ようやく改まった表情で、イリユーシアではなく、サーザキアに向き合った。

「アンナとしての資質は占術や祈祷の能力に限られたものでしょうか？ エデイスはおとなしい子だ。自分からは口にしないが、ラウ

王家の四人の王子たち全員が、特別な友人として認め接していられるのは彼女に対してだけだ」

まるでその話を耳にしたのは初めてというような驚きの表情が何人かの家長の上に現れる。

「王家と個人的な絆をつくり、さらに友人として好意をもたれているアンナはそう多くはいない。残念ですが、イリユーシア殿にもそうした絆はない」

サーザキアの次に最高位をもつイリユーシアにとって、一番触れられたくない部分をセルジーニは気の毒そうに、さらりと云ってのける。

「まだとても、お若いですからね」

冷やかな表情で自分を睨んでいる視線を感じながら、セルジーニは笑みを浮かべる。

「と、いうことで、この 星守りの旅 の影守り役、私に任じてはいただけないでしょうか？」

ざわりとした空気が流れた。

「なにを言い出すかと思えば……」

イリユーシアは細い瞳を大きくあけて、呆れたようにセルジーニを見つめた。

影守りとは、 星守りの旅 にでる若者達を常に影から見守り、旅の様子を家長たちに伝え、指示を仰ぐ者のことであった。

影守り役が力不足であれば 星守りの旅 の若者達を導くことも、災いから守ることもできない。

「セルジーニ、言わなくともわかっておるだろう。影守り役は長が直々に選定される。それに家長が一族を離れるわけにはいかないのは、自分自身がよく知っておるはずだ」

「そうですね、特に今はノストールに大きな星が流れ落ちた印が出ているのです。いつノストールから使いの者がくるかもしれないのですよ。家長のあなたがいま旅に出るなどもつてのほか」

セルジーニの思いつきを考え直させようと、次々と説得の声が飛



ぶ。

「それはどうでしょうかね」

セルジーニは、ニヤリと笑いながら片目を閉じてみせた。

「ノストールの地には、掟に逆らい王家に残った離反者がいるじゃないですか。国にアンナがいる以上、わざわざ我々を呼ぶ必要はすでになくなったのでは？」

彼は自嘲めいた口調で、ゆっくりと一同を見渡した。

「しかも、危険極まりない神の転身人が出現されている。ノストール以外にもわれわれを必要としている諸国は多くあるではありませんか。ノストールを優先する理由は何故ですか？ その理由をわれわれ家長に話してはいただけないのは何故なのですか？」

あまりにも率直な問いに、その場の空気が水が打ったような静けさになる。

アンナの一族の家長たちですら、考えてみたこともないような、あるいは考えることを避けている疑問を投げかけたのだ。

「『王の星落ち。濃い霧が国を包みし時。われらが一族と王家の絆霧の中に消えゆく』。そう占術では結果が出ているではないですか。占術でわかっているのですから、迎えをまっっているまでもなくノストールへ向かうべきです。しかし、噂ではリンセントスを砂嵐から救い役目も果たしたというのに、ノストールの二人の王子たちが国に帰ったという話は聞かない」

「だからこそ、待つのがじゃ」

サーザキアの重々しい声が、セルジーニの言葉を断ち切る。

「星は流れた。しかし、王についての知らせはどこからも聞こえてはおらん。存命であるからこそ、王子たちは王の名代としてリンセントスに留まっているという可能性もありうる」

サーザキアの言葉に、その場の空気が重たいものにかわる。

長がその言葉を本気で言っているとはだれも受け止めていなかったからだ。

ノストールの方向で星が堕ちた。

アンナの一族の人々は、その夜、奇妙な空気が彼らの中に満ちて行くのに気づいた。

原因のわからない不安と緊張。ただならぬ気配と予感  
占術はすぐにとり行われた。

王の星墮つ。

それが最初に出た印だった。

特に、カルザキア王と幼い日から出会いを重ね、ノストールの大神官の座を与えられたサーザキアは、その流れる星を目にした瞬間、星を見上げ立つたまま意識を失ってしまったのだ。

「ですから、この旅はいい機会なのです。アンナは戦さの中には身をおかない。けれど、星守りの旅はすべての掟から解放される。最初の旅の地が、いまをときめくかの地であっても問題はないわけです。三人は自分たちの目的を果たせばいい。ノストールの王子の身に何が起き、諸国で真に起こっていることがなんなのか、わたしが見極めてまいります。旅の二年の間、逐次ご報告は欠かしません。わたしの家族たちのことはロイスにまかせます。もともと、二年前までは彼が家長だったのですから問題はないでしょう？」

セルジーニの提案は、家長たちを黙らせた。

「おまえは……いろいろな疑問があるようじゃな……それもわからぬではない……」

サーザキアの鋭い眼光が、おだやかな光に変化していく。

「王家につながりのあるエデイスに関心を寄せるかと思えば、ラウ王家との関係を疑う……星守りの旅で能力は一族のだれよりも抜きん出たが、自ら求める答えは出なかったか」

すべてを見通しているかのような長の言葉に、セルジーニは一瞬ぎよっとした表情をみせた。

「帰って……来てくれるのだろうか」

サーザキアの意味ありげな言葉に、セルジーニは悪戯っ子のような瞳でうなずいた。

「ご安心ください、敬愛する長よ。わたしはユク・アンナの血を愛

しております。同様に、わが一族を大切に思っております。将来のアンナを担っていく者を育成する試練の旅、星守りの旅 に出る子らを見放すことなど考えてもおりません。約束致します、ともに帰ってまいりますことを」

その言葉に、サーザキアはイリユーシアを見て、うなずいた。

イリユーシアは何事もなかったような冷静な顔で、一同に告げた。

「セルジーニ・リド・ユク・アンナ。長の命により 星守りの旅の影守り役に任じます」

ダーナンのロディ・ザインスの十万ともいわれる大軍がリンセントートスの国境付近に姿を現したのは、リンセントートスに砂の嵐が襲いかかった時のように突然の出来事だった。

ダーナン帝国、リンセントートス間には、カヒーローネ国が存在する。

リンセントートスと風土も似てその国土の南半分以上は砂漠地帯であり、その上、北側にはダーナンとハリアの中央に壁のように連なるカヒーロ連峰が雄大にそびえ立っていた。

そのカヒーローネという国の存在があることで、ダーナンがリンセントートスに進攻することはないと誰もが見ていた。

なぜなら、カヒーローネは民にとつても隣接国にとつても常に不穏な空気を含ませた国であつたからだ。

もともとは九つの少数部族が大国に抗するために、ひとつの国としてまとまつた経緯があつた。

しかし、それが原因で同部族出身の王が長く続いたことがないほど王の在位は短いのが常で、王位争奪、権力闘争、血なまぐさい闘争が日々勃発していた。

当然、治安は最悪であり、盗賊は昼夜を問わず横行し、リンセントートスやダーナンの国境付近の集落にさえ姿を現すことさえあつた。

だが、これらの現状が逆にダーナン帝国がカヒーローネを越えて、リンセントートスに進攻することはいえないう理由と誰もが信じてた。

ダーナンの帝王ロディ・ザインスは、万軍を率いて次々に近隣国を侵略し続けはしたが、それまでの間には、相手国に使者を送り時間の猶予を与え、宣戦布告をして後に開戦する、というように、ダーナン側としては手続きを踏んだ上での正当な戦さを行っている

いう自負がある。

しかし、カヒーネは、今日の王が明日も王であるという保証はなく、歴代の王の名は似たものが多く、複雑な人間関係を形成している上、過去の王の出身部族が不明瞭である場合も多く存在した。

このような不安定な国に攻め込めば、カヒーネの難民が逆にダーナンになだれ込む危険性もあつたために、非常にやっかいな国といえた。

仮にカヒーネの進攻に成功したとしても、リンセントースへ手を伸ばすにはその地を統制して後となる。

ナイアデス皇国が援軍を派遣するのに十分な時間を与える結果となり、そうなれば、簡単にはリンセントースを攻めることは適わなくなる、そう誰もが考えていたからだ。

リンセントースにとつては、そのような起こりえない事態に気を揉むより、長年の仇敵である、隣国ハリア国こそが日々の脅威であつた。

それだけに、ダーナンとカヒーネの間に戦があつたという話を耳にしていなかったリンセントースにとり、国境に突然出現したダーナン軍の出現は、まさに天地がひっくりかえつたような衝撃だつた。

だが、さらに人々を驚かせたのは、その宣戦布告もなく現れたダーナン軍が一日にして破れ、撤退してしまったことだつた。

そして、この戦さはラーサイル大陸全土にある者の存在を知らしめることとなる。

リンセントースの都へ向う街道を、兵士を乗せた馬が猛烈な速さで駆け抜けて行く。

昼夜、眠ることなく馬を変えて走り続ける早駆けの馬だつた。

馬に乗った若い兵士は、疲労こんぱいといった表情で、次に乗り換えるため用意された馬に乗るべく、村の宿場でその走りを止めた。男が馬から降りると同時に、走り続けた馬が崩れるように倒れた。「水を……」

つかの間の休息とわずかな食事をとると、立っているのさえままならない様子でありながら、兵士はしがみつくように次の新しい馬の背にまたがった。

「なあ……」

馬の世話を任されていた村人が心配そうにだが、やっとの思いで兵士に言葉をかける。

「戦さは……どうなってるんだい……」

その問いに、目さえ虚ろだった馬上の若者ははっとしたように目を見開き村人を見返した。

「勝った……」

兵士は、どこか遠くをみつめるように視線を天にむけてさまよわせる。

「シルク・トトウ神が勝利を与えてくださったんだ」

「シルク・トトウ……神？」

村人は、初めて耳にする異郷の神の名に戸惑ったような表情をする。

「エーツ山脈の彼方にあるノストールという国のアウシュダール王子は、月の神アル神の唯一の息子シルク・トトウ神の転身人であられたのだ。その神としての力でビアン神の怒りをおさめられ、我が国を砂嵐から救い、そして再び、ダーナンの侵略から我々を救ってくださいましたのだ」

兵士はアウシュダールのことを語っているうちに、気分が高揚してきたのか、笑みさえ浮かべながら村人に別れをつげた。

村人は、走り去って行く早駆けの馬を見送りながら、不可解な表情で立ち尽くしていた。

「ビアン神じゃない……？ よその国の神が……おれたちの国を助

けた……？」

尊は、瞬く間に人々の間に広まっていった。

ノストールという国の王子がダーナンの大軍を追い払ったんだ  
つてよ。

ビアン神の怒りを解いたのも、その王子らしい。

まだ十歳に満たない幼い王子らしいぞ。

エーツ山脈の向こうにある海のある国からわざわざ来たんだ  
つてよ。

ダーナン帝国の十万の大軍があつという間にいなくなったんだ  
と……。

その神は、アル神の息子らしい。

でも、神が、人間に生まれてくるもんなのか……？

転身人というらしい。

転身人？

神の転身人が……おれ達のリンセンテートを守って下さった  
……つて言うのか？

国境をダーナンから守ったリンセントース、ナイアデス、そしてノストールの三国軍からなる対ダーナン連合軍が、リンセントース城に帰還すべく向かっている間にも、人々の興味と注目はアウシユダールに注がれはじめていた。

混合軍の姿をひと目見ようと街道沿いには、多くの人々が集まりだすほどだった。

特に、リンセントース城に到着するまでの最後の宿泊地となるテューラの町郊外で野営をした夜は、国を守った兵士たちをもてなそうと、野営地へ食料や酒樽が次々と差し入れが運び込まれた。

なかでもシルク・トトウ神の転身人アウシユダールがいるノストール軍に対しては、自国の軍や大国ナイアデス軍以上に関心は高く、その雄姿をなんとしてでも見ようと大勢が押し寄せ、その夜は町の人々も交えた賑やかな酒宴がいたるところで繰り広げられた。

「昨夜からずいぶんと忙しそうだな」

テューラの町に前夜から宿泊をしている客のサンが、宿に戻って来た主人の顔を見るなり話しかけた。

「おお、サンか」

宿の主人は不精髭の伸びたあごをさすりながら、サンに愛想よく返事をする。

「いやなに、ダーナン軍を打ち倒した連合軍がこの町の郊外で野営をしているんだよ。それで、差し入れだなんだで大忙しだ」

サンと顔なじみらしく主人は、世間話を三言、二言話すと、サンの隣にいる連れの人物を見て、やや遠慮気味に丁寧な挨拶をした。

「よくお休みになれましたか？」



「はい」

挨拶を返したのは占術士アンナの女性の装束を身に着けたエリルだった。

アンナ独特の装束である薄紫色の長衣を身をまとい、薄いフードで頭からつま先まで全身を覆っている。

宿の主人は、アンナの一族の人間に会うのは生まれて初めてだった。

噂では耳にするアンナは天の声を聞き、その目は過去や未来さえ視透すと聞く。

自分の考えていることはすべてわかってしまおうのだろうか、自分の過去の悪事や、これから先の未来も見えるのだろうか、あれこれ考え、畏怖心が先立ちどう接したらいいのかわからなかった。

「で、会えたのか？ その噂の王子様に」

「馬鹿いえ。俺達みたいな人間がおいそれと近寄れるわけないだろう。自国の王子様のお顔も存じ上げないのに」

「でも、ビアン神の怒りを解き、砂嵐を止める力とは途方もなさすぎるよなあ」

「俺なんぞ、おつかあの怒りさえ止められないのに」

「まったくだ」

サンとは気軽に冗談を言えても、このアンナの客人には、挨拶が精一杯で気軽に話しかけることもできない。

しかし、自分とサンの会話を興味深そうに聞いているアンナの女性の様子に、語る口調にも熱が帯びる。

「ノストールの守護神アル神の子が王子様として生まれ変わって、リンセンタートスを救ってくれた。そして、さらに国境近くまで大軍を率いてやって来たダーナンの軍をあつと言う間にやつつけてリンセンタートスを守ってくれたんだっていうんだから。我々が出ることとはなんでもして差し上げたってな、みんな顔は澄ましているが、先を争って家や見せのものを持ち出している有様だ」

主人はサンに話しながら、ちらちらとアンナの方を意識しながら

話す。

「それと、さつき小耳にはさんだが」

顔を少し紅潮させつつ、声を潜める。

「町長がクラン皇太子をお願いをして、今日の夜に歓待の宴を盛大に行うらしいんだ」

「ノストールのその噂の王子様もいらっしやるのですか？」

耳を傾けていたエリルが何げなく口にした言葉に、宿の主人はわが意を得たりと言わんばかりに目を輝かせてうなずいた。

「もちろんですとも。そうですねえ、アンナの方々はいろんな国の王家を訪ねては占術をするんだって聞いたことがあります。そう  
だ、町長にあなた様のことを話したら、きつとぜひ屋敷へご招待したいって話になりますよ」

言葉をかわして感激した面持ちで、主人は自分にできることがあれば何でも言っただけと言つと、満面の笑みをたたえて、宿の奥へ消えて行つた。

宿を出て歩き始めた二人は、しばらく進んだところに現れた分かれ道で立ち止まった。

「サン、わたしはこちらの方に行きます」

エリルが、ナーラガージュの杖で右手の道を示した。

「夕暮れまでには戻ります」

「ああ」

サンは口元に笑みをつくつてうなずいた。

「買い出しも今日で終わりだ。俺はこれからもう一軒寄つて、町に戻るのに荷物を運ぶ人夫を雇ってくる。明日は夜明けと共にここを  
発つから、あまり遅くならんようにな」

「はい」

そう言つとサンは反対側の道へと歩きだした。

サンの後ろ姿が去って行くのを見送ると、エリルはナーラガージュの杖を握りしめる。

杖から振動が伝わっていた。

「間違いない……この方角だ」

エリルは手にしたナーラガージュの杖から伝わる振動のより強くなる方へと歩き始めた。

テューラの町は商人たちが集まり、様々な食べ物や珍しい品が集まってくる町だった。

エリルは、二カ月前からルナたちと一緒にミゼア砂漠を越えて最初に着いた町ブレアにいた。

ブレアの町は、リンセントース城から砂漠に出るために最もよく利用される街道沿いにあり、ノストールの軍は城に赴くときもその道を通ったと聞き、滞在することに決めたのだ。

ジーンの肉親捜しの話をネイから聞いた宿の女主人が、アンナの姿をしたエリルの存在も手伝って、ジーンやネイたちが店の手伝いをするのを条件にしばらく泊めてくれるということになりブレアに留った。

最初はノストール軍にいるルナの兄を探すために、すぐにでも城下へ行くことも考えていた。

だが、道程も遠く、たとえ到着してもリンセントース城にいるノストールの兵士たちと会うのは難しいかもしれないという結論に達した。

それよりもノストールに帰るときに通る、街道沿いで待とうとエリルが提案しブレアに腰を落ち着けたのだ。

ところが、状況は突然国境に姿を現したダーナン軍により一変する。

ノストール軍はリンセントースやナイアデスの軍と共に、国境防衛の戦さに向ったという噂が流れてたのだ。

しかも、その数は大挙して攻めて来たダーナン軍と戦うにはあまりにも少なすぎる兵力だと人々は不安気に口にささやきあったが、何が起きたのか戦わずしてダーナン軍は撤退した。

エリルがそのブレアの町を発ったのは、ダーナン軍が撤退する三

日ほど前のことだった。

宿の使用人であるサンが買い出しにテューラという大きな町へ行くと聞いたエリルは、リンセントス国内や戦さの情報を収集したいからと、サンと共にこの町まで来たのだ。

しかし、エリルが町を出た本当の理由は別にあつた。

ナーラガージュの杖が微かだが震え出したのだ。

持ち主の身に訪れる危険を知らせる杖。

アンナの長ジーシュがゆずってくれた杖が、あきらかに危険の接近を知らせる反応を示しはじめた。

エリルは危険から身を遠ざけることが可能だった。振動が弱くなる方角に身を置けば良いからだ。

けれどエリルはそうはしなかった。

逆に、自身に迫るその危険の正体を見極めようと、危険を覚悟で振動のより強くなる方向　テューラの町　へと、その足を向けたのだ。

(それに、あの子に何かあつたら困るものなあ……)

エリルはずっとふさぎ込みがちだったジーンを思い浮かべる。

町に実を落ち着けたこともあり、最近はずいぶんだがエリルと言葉を交わす機会も増え、わずかだが、時折静かな笑顔を見せるようになってきていたのだ。

エリルはその笑顔を見るのが不思議と嬉しかった。

出会いの奇妙さからも、ただの兄探しの子供とは思えなかった。

だから、もつと言葉を交わしたかつたし、もつと笑顔を見たいと思つた。

そんな矢先にナーラガージュの杖は震えた。

自分が招くかもしれない災いの為に、あの笑顔を失ってしまうのを見たくはなかったのだ。

必ず帰ってきますから、待っていて下さいね。

エリルが町を出るときそう言うと、ジーンは黙つたまま遠くを見るような瞳でエリルを見つめていた。

その翠の瞳の中に潜む色は、エリルにある人の瞳を思い出させた。  
（あれは……シーラ姉上の瞳の奥にあった色とよく似ていた。なにかをあきらめてしまった人が宿す……深い悲しみの色……。あの子は、まだあんなに幼いのに何をあきらめてしまったというのだろうか……）

テューラの町に立つエリルは、杖の警告に逆らい、さらに強くなり続ける振動の方角を探り歩き続ける。

歩きながら、不思議と思い出すのはジーンのことばかりだった。

ブレアの町に着いてから、ジーンは目立たないようにと木の葉で染料を作り、銀色の髪の毛を緑色に染めた。

それを目にしたとき、エリルはなんだか残念な気分になった。

珍しい銀色の髪がとても気に入っていたのだ。

ジーンに関しては、一緒にいるネイから少しずつだが教えてもらうことができた。

ノストールの村で生まれたが、事情があり海賊の島で育ったこと。育ての母が亡くなりノストールへ渡り、実の兄が生きているかもしれないとルナから告げられたこと。

だが、その兄はリンセントスへの援軍としてリンセントスへ向ったと耳にし、戦さでもしものことがあれば、天涯孤独になつてしまう。兄に会うためにエーツ山脈を越えようとしたのだ、とネイはやや脚色をつけてエリルに話した。

その話を聞いても、エリルにとってジーンは謎の多い子供だった。

妖しの者からネイを守ろうとしていた姿。

あの光も差さない深淵の闇の中で、黒焦げた死体に臆することなく生あるものを探し求め、ついにランレイを救い出した姿。

荒くれ者の海賊の頭の子供として暮らしてきたというが、エリルだからこそ感じ取ることの出来る、ふとした時に垣間見える品位。

ネイには悪いが、聞かされた内容をすべてと捕らえるには謎が多すぎた。

何かに恐れながらも、あきらめながらも、それでもまだ必死に追い求めようとしている翠色の瞳。

その瞳が何を見つめようとしているのか、エリルは知りたいと思っただ。

だから、ナーラガイジュの杖が危険を知らせる振動を伝え始めたとき、少しでもジーンを危険から守るために町から遠ざかろうと考えたのだ。

（不思議な……子……）

エリルは思わずほほ笑んでいた。

（あの子の無邪気に笑う顔が見てみたいな……）

危険を知らせる振動が強くなるにつれ、エリルは恐れよりも不思議な高揚感に満たされている自分を感じていた。

ナーラガージュの杖が知らせる危険の正体を求めて歩き続けたエリルは、やがて町のはずれにある小高い丘に出た。

緑が広がる草原、そのはるか彼方に砂漠が見えた。

エリルがこのトゥーラ町にくる時に通った道も細い糸のように見える。

ブレアの町もまた、砂漠と隣接しているのだが、この場所からは見ることはできなかつた。

視線を左側に転じると、ダーナン討伐軍の野営地が目にはいる。

（確かに、討伐軍というにはあまりにも規模が小さい。国を守る攻防戦であり、敵が十万ならば最低でも同等の兵力は必定。けれど、砂嵐に二年も侵されていたこの国にそれだけの兵力も国力もなかつたはず……。一体、どうやってあの常勝を続けるダーナン軍を封じたんだ？）

エリルの瞳は自分でも気がつかないうちに、国を統べる者のそれへと変化していく。

（ダーナンがこの地リンセントスを奪ってしまったら、やがてはハリアにその牙を向けてくるだろう。もしそうなれば、わたしも指輪捜しの旅を続けてはられない……）

《エボルの指輪》に思いを馳せた時、エリルは言いようのない違和感が全身を襲うのを感じた。

「なんだ……？」

背中から突然、射抜かれたようなその感覚は、やがて胸騒ぎへと変化していく。

エリルは思わずナーラガージュの杖をブレアの町のある方角にかざした。

杖は一度大きく震えてから、急にその震えを止め、静かになった。「たしか……前にもこんなことがあった……」

エリルはそれがいつのことだったのか、思い出そうとした。

（あの山で杖が初めて震え出した……。そして、子供の悲鳴が聞こえたとき、杖は静かになった……）

「！」

エリルは大きく瞳をあけて、ジーンたちを残してきた町の方をじっと見つめた。

（杖の震えは……私への警告だと思っていた……。わたしは何か大きな勘違いをしているのかもしれない……）

エリルは原因のわからない焦燥感に、身をひるがえし来た道を宿に向って走り出した。

（早く町に、みんなのところに戻らないと）

自分を駆り立てるものの正体がわからないまま、エリルは走りだした。

一刻も早くブレアの町に帰らなくてはという思いだけが、膨らみ続ける。

とにかく一度宿に戻って馬を借りなくてはと考えながら急ぎ、エリルはサンと別れた道である人物を目にして思わず足を止めた。

（今は……まさか……）

遠目ではあったが、エリルはその人物が誰なのかすぐにわかった。たとえ後姿であろうと見誤るはずがなかった。

鼓動が激しくなる。

（ガーゼフ伯爵。あの男がどうしてここに……）

茫然と見ている間にも、ガーゼフの姿がどんどん遠ざかっていく。ブレアの町に戻らなければという思いと、意外な場所で意外な人物を見た驚きに、エリルは頭の中が一瞬、真っ白になった。

だが気がついたとき、自分の足は、ガーゼフの後ろ姿を追いかけていた。

（噂では、シーラ姉上はわたしが国を出てしばらくしてリンセントートスに嫁がれたが、その後行方不明になっているという……。まさか、あいつが関係しているわけじゃ……）



ガーゼフの後を追うエリルの脳裏に、三年前の記憶が次々とよみがえる。

愛人と策謀し、国を操ろうとして失脚し自害した母ミディール妃。そして、その母の愛人でありながら、事件の直前に消息を絶ったガーゼフ。

エリルは鋭い視線で男の後姿を見つめながら、薄布で顔を隠した。アンナの全身を隠す装束が役に立つ。

七歳の時、エリルは王宮宮殿の大階段の一番上から突き落とされ大怪我を負い、死の淵をさまよった。

ガーゼフは、その倒れている王子を発見し助けた人物として、宮廷でも特別な地位を得たのだ。

エリルは決して忘れることはできなかった。

幼い自分を突き落とし、口元に笑みを浮かべて階段の上から見下ろしていたガーゼフの冷え冷えとした瞳を。

（母上を奪い。今度は、まさか……姉上まで……）

ガーゼフがリンセントースにしていると知った時点で、心の中にガーゼフがシーラの失踪に深く関係しているのではないかという疑問が沸いた。

（突き止めたい……あいつがここで何をしているのか）

エリルは目立つアンナの装束を身に着けていることから、細心の神経を払い、決してガーゼフに気づかれないように尾行を続けた。

陽が傾きはじめ頃までガーゼフは、何人かの人物をたずね、やがてある大きな屋敷の門の中へと消えていった。

「ここは……」

エリルは思わずその屋敷を見渡す。

町の中心からやや外れに位置するものの、二階建ての広い庭もある立派な屋敷だった。

（ガーゼフが、この屋敷に住んでいるのか？）

ガーゼフが屋敷の中に消えていくのを確認してから、エリルも急いで門の前へと近づく。

門番は特に見当たらず、門も開け放たれ、大勢の人々が自由に歩きかっていた。

門を抜け、屋敷に近づくとつれ庭から陽気な音楽と笑い声、大勢の人々のざわめきが聞こえてきて、エリルは戸惑った。

よく見ると、様々な人々が飲んだり、踊ったりしている姿があった。

町の人々はもちろん、服装の異なる大勢の兵士たちの姿を目にして、エリルは町長の屋敷で今宵凱旋歓迎の宴が行われる、と言っていた宿屋の主人の言葉を思い出す。

（ここが町長の屋敷なのか？ でも、どうしてあいつが……？ いや、ここにはリンセントースのクラン皇太子や、援軍のナイアデス、ノストールの誰かがいるのかもしれない。極秘に会うのかもしれない）

エリルはそう思うと、屋敷の正面玄関に足を踏み入れた。

こんな時は、堂々としているほうが怪しまれないはずという、エリルの考えは見事に的中した。

紫色のアンナの装束は庭で酒宴に酔う人々の注目を集めはしたが、正門から入って行く姿に、誰もが招かれて訪れたのだろうとしか思わなかったのだ。

おかげでエリルは誰にも見咎められることなく屋敷の中にはいりこむことができた。

人気のない場所で屋敷の使用人に出会い、不審そうに問われたときも『ラシル王よりお声があり、私が一族の代表としてまいります。のちほどクラン殿下より内々にお話を承るお約束となっておりますゆえ、宴の席はご遠慮させていただきます』と、ゆっくりと一礼して見せると、相手は恐縮してしまい自分の非礼をわびて、屋敷の中を案内してくれてたほどだ。

（正気を失った王子役も演じごたえはあったけど、アンナを演じるのもなかなか面白いよなあ……）

エリルはもう少しこの状況が楽しめるといいのと思いつつ、探

している相手があのかーぜフであることを自分に言い聞かせ、気を引き締める。

ひと気の多い場所を避けながら、大勢の人々が酒や踊りで賑わっている大広間を上から見渡すことのできる場所を探して二階へ上がって行った。

エリルがアンナとして足を踏み入れたテューラの町長の屋敷では、三日月が静かに輝きを放つ夜空の下、賑やかな宴が催されていた。町長の館とはいえ、多くの商人たちが行き交う交易の町だけあり、小領主の館にも引けをとらないほど広い敷地と立派な館をもっていた。

二年間の砂嵐の間も、城への物資調達に尽力を尽くすなど、近郊の領主たちも一目置くほどの力がこの町にはあった。

陽気な音楽に、華やかで美しい女性たち、この辺り一帯の有力者らしき人々、そしてリンセントス、ナイアデス、ノストール軍の中からそれぞれ招待されて宴を楽しんでいる兵士の姿に混ざり、ナイアデス皇国のイズナ・マイリージアの姿も大広間にあった。

イズナは、リンセントスのクラン皇太子、テセウスとアウシユダールとともに劇的勝利を祝う賓客として招かれていた。

病み上がりのフェリエスに代わり、ナイアデス皇国からイズナが従えて来た部隊を指揮してきたからだ。

「気にいらんですな」

にぎやかな宴の席を離れ、グラスを片手に涼しい風の流れるテラスへ出たイズナは、隣でぼやく副隊長のレイリングの言葉に苦笑する。

「独り言なら、俺にも聞こえないところで言えよ」

テラスにもたれ掛かっているレイリングの隣で、イズナは頭上に輝く三日月を見上げながら乾いた声で苦笑する。

「しかし、あのような人智を超えた力を目にしてしまったら、もし敵に回すようなことがあったら勝つことなど考えられない……」

吐き捨てるようにつぶやく部下の言葉に、イズナはため息を吐くかわりに、手にしたカカスという赤い液体の酒を仰ぐように飲み込

んだ。

「まったくだ……な」

月から視線を離して、大広間で町長や領主らと談笑するアウシユ  
ダールに視線を向ける。

イズナの目に映るノストールの幼い王子は、大人びた表情で悠然  
とほほ笑んでいた。

その隣には、テセウスが立っている。

イズナは、月のない数日前の夜のことを一生忘れることはないだ  
ろうと思った。

ダーナン軍と向き合い、刃を交えることなく勝利を迎えた不可思  
議な夜の戦を。

すべては、イズナがリンセントースに到着した日から始まった。  
砂嵐が止み、イズナがフェリエスに再会したあの日だ。

城に到着したばかりのイズナは、休む時間を惜しんでフェリエス  
の体調が良くなり次第いつでも帰国の出立が出来るよう部下に命じ  
準備をすすめさせ、逐次報告を受けていた。

本来ならオルローの方が適任ではあったが、気を失ったような  
顔と再会した後では、さすがに休ませてやりたい気分にかられたの  
だ。

そうした中、フェリエスから呼び出され部屋を訪れると、魔道士  
デイルムッドから相次ぐ 先読み を聞かされた。

道を埋め尽くす大蛇の如き大軍が、この地リンセントースを  
目指し、カヒーローネを通過してくる様が見えます。

軍勢で埋め尽くされ、分断されたカヒーローネの道。

その場の誰もが言葉を失った。

フェリエスは誰にともなく問いかけた。

「私がこの国に留まっていることを、知っての上だろうな。リンセントレートスもろとも、という宣戦布告か」

フェリエスは、イズナとオルローに命じて、すぐにこの先読みをラシル王に直接知らせるようにと命じた。

二人がラシル王と謁見し、話を切り出そうとした時、突然ノストール軍が間もなく城に到着する知らせが告げられたのだ。

イズナは、フェリエスがアウシュダールに助力を求めた経緯を知らなかった為、何事かといぶかしんだのだが、すぐにオルローから砂嵐の終息を求めたラシル王とフェリエスが、シルク・トトウ神の転身人であるアウシュダールにビアン神の怒りを静める力を貸してほしいと要請したこと。その求めに応じノストール軍がリンセントレートスに入国して間もなく、砂嵐がおさまったという話を、耳打ちされてふいに不愉快な感情が沸き起こった。

デイルムツドの先読みは、アウシュダールの転身人としての力を前提にあつたことを意味したからだ。

使者はアウシュダール王子から、ロディ・ザイネス率いるおよそ十万のダーナン軍がリンセントレートスを侵略すべく進軍していることを、王に直々に伝えるように命じられたと、告げた。

驚きおののくラシル王だったが、やがてテセウスとともに到着したアウシュダールから、自分が兵を率いて国境に行けば、ダーナン軍を壊滅できると約束したことで態度は一変した。

ラシル王は、アウシュダールの進言をすべて受け入れ、自国の皇太子を名目上の討伐軍の大將には立てたが、総指揮はアウシュダールに委ねた。

砂嵐の為に、エーツ山脈の険しい山々を越え、リンセントレートスにたどり着いたノストールに対し、フェリエスもラシル王の決定に快諾した。

そしてイズナ部隊に対しては、アウシュダールを中心としたリンセントレートスの援軍を務めるように命じたのだ。

リンセンタートス城内の人々は従卒から王に至るまで、誰もがアウシュダールをシルク・トトウ神の転身人としてその言葉に耳を傾け、畏敬の念をもって接した。

城内に漂う空気がアウシュダール一色に染め上げられていた。

砂嵐終息後、体力を回復したフェリエスがラシル王に、単独で話し場を設けるよう求めたが、王は神の転身人という特別な存在に心奪われたようにアウシュダールのそばから離れなかった。

フェリエスの実の姉であるセラ皇太子妃でさえ、アウシュダールのもとへ理由をつけては足しげく通っていると噂も流れ、フェリエスのもとへ訪れる回数が減ったほどだった。

三国で編成されたダーナン討伐軍の国境防衛は、時を置かずして城を出立した。

国境まではミゼア砂漠を通過しなければいけなかったが、砂漠の民達でさえ驚くほど天候に恵まれた。

砂漠の激しい砂風や熱砂に阻まれることもなく、珍しいまでに曇天の空に守られ、時折雨に恵まれ、砂漠特有の灼熱地獄に苦しむことがなかった。

軍は記録的な最短期間で、カヒローネとの国境地帯の山岳にたどり着き、国境防衛部隊と合流したのだ。

一日でも遅れをとれば、国境は破られる。私の言葉の真実を証明する。猶予はならない。

そう敵命をして出発を煽り立てたアウシュダールの言葉に嘘偽りはなかった。

万軍を率いたダーナン軍が、平原のはるか彼方に姿を現したのは夕日の沈む刻限だった。

高台で微動だにせず見張りに立っていた国境防衛兵は、地平線から夕日を背景に湧くように続々と現れるダーナン軍の延々と続く隊列に度肝を抜かれた。

「これは……」

あらかじめ襲撃を知り、待ち構えることができたとはいえ自軍は

わずか総勢五百余り。

国境を守るなどということは絶望的な数だった。

崖下に進み来るダーナン軍は、崖の上から自分たちを見下ろしているリンセントートス軍に気づいた様子だったが、まるで挑発するように、対治する国境でもある河を挟んだ平地から奥まった森の中に陣営を張った。

大部隊であるだけにその森をはみ出した街道にまで人馬が埋め尽くされているのがわかる。

ダーナンは本気で、リンセントートスを侵略し、支配をするために来たのだ。

無敗を誇る、ロディ・ザーネスがカヒーローネさえ支配下に治めたのだろうか、リンセントートス兵は恐怖で震え出した。

その様子に、イズナ部隊でも動揺が広がる。

あの大軍が堰を切ったように一気に向かって来たら、大海に揺れる小舟のように自分たちは戦いさえできぬまま、のみこまれ海底に沈められてしまうだろう。

イズナもまた死を覚悟せずにはいられなかった。

魔道士デルムツドは、「大いなる力が勝利だけを運ぶ」と言って送り出してはくれたが、目の前の敵を見て、これでどう勝算がたえられるのか教えてほしいものだと思つた。

(異郷で死ぬためにわざわざ来たわけじゃないんだ……)

睨み合うこと数時間、その日は、互いの様子見といった状態で空は闇に包まれ、一日が終えようとしていた。

時間が経過するにつれ、兵たちは落ち着きを失いつた。

クラン皇太子までが恐怖に蒼ざめ全身を小刻みに震わせているのを、兵士たちが目撃してからは、その恐怖が伝染し、リンセントートスの兵の中には脱走をする者さえ出るなど異様な空気が影を落とし始めていた。

幸いイズナの部隊は冷静さを保ってはいたが、イズナもなんとか自分たちの部隊だけでも撤退できないものか真剣に考えていた。



このままダーナンの侵略を許すことがあれば、フェリエスの身が危険になるのは自明の理だった。

最悪自分の部隊が壁となりこの地で果てるようなことがあっても、フェリエスだけはナイアデスに無事送り届けるのが自分の役目だ。

イズナはその機会をうかがい始めていた、

だが、張り詰めた空気の中、軍議の場でアウシユダールが軽やかにほほ笑んで言った。

「心配はない。明日にはすべて終わるよ。リンセントースへは一步も踏み込めない」

言葉はそれだけだった。

やがて松明だけが唯一の明かりと、すべてが闇に包まれたとばかりの中で最初の異変が起こった。

真つ黒な空に光の亀裂が走ったのだ。

次の瞬間、空を裂くような大轟音が響き渡った。

陣営にいたイズナたちは、突然の閃光と大地を震わせる轟音に、驚いて外に飛び出した。

見上げた闇夜には暗雲が立ち込め、生あたたかい風が肌からみついた。

大粒の水滴が数滴、イズナの顔を打ったかと思うと、それは瞬間に地面を激しく打ちつける豪雨となった。

遙か彼方まで空を埋め尽くした灰色に広がり続ける暗雲からは、稲光が閃き、地上に向かって光の矢を放ち続け始めた。

突然、空が明るくなつては次の瞬間、大地を揺るがすほどの轟音が響き渡る。

稲光と轟音が止むことなく繰り返した。

空は立て続けに起こる閃光のために昼間のように明るくなり、鳴り響く轟音に誰もが身をすくませた。

ただでさえ怯えていた兵士達を、最大の恐怖に陥れるのには十分だった。

松明の火が消えると、兵士たちは一斉に浮足立った。

突如、意味のわからぬ悲鳴のような叫び声を誰かが放った。

集団恐慌状態に陥いるうかというまさにその時、突然、アウシユダールの声が陣営中に響き渡った。

「心配はない！ これは勝利の雨だ」

兵士達の動きが止まる。

そして、声のする方を誰もが迷うことなく振り向いた。

稲光を背に、一頭の馬の背にまたがったアウシユダールがそこにいた。

落雷と激しく打ち付ける雨の音だけがあった。

はるか遠くにいるはずの人間までが、アウシユダールを見ていた。

「風雨を司り神ドルドアーガイア」

闇の中で、だれもがアウシユダールの微笑みを自分の目に映していた。

「ドルドアーガイアはどの国にも属せず、誰の支配も受けない。だが、シルク・トトウの転身人たる私が招きよせた。リンセンテートスを守る天の援軍だ」

さきほどまで、イズナたちとともにいたアウシユダールは、突然鳴り響く轟音にさえピクリともせず、人差し指を頭上高く差し向けた。

「天は」

その指がゆっくりと弧を描いてある方角を指し示す。

「ダーナンに断罪を下す」

それは、ダーナン陣営のあるカヒーローネの方角だった。

耳を澄ますと、ダーナン軍の陣営のある方角から、轟音と雨の音に混じり、悲鳴のような音が確かに聞こえていた。

人の叫び声、馬のいななきのようにも聞こえる。

だが、暗闇と激しい雨が視界をさえぎり、何が起きているのかまったく様子はわからなかった。

それでも、先ほどまでの自分達の陣中同様のただなことではなにかが起きていることは確かだった。

翌朝、見事な朝焼けの中で、一睡もすることのなかったイズナたちはダーナン軍に何が起きたのかを知ることになる。

ダーナン軍が陣営を張っていたその平原一帯が湖に変貌していたのだ。

リンセンタートスとカヒーネを隔てる大河が、昨夜の豪雨で氾濫し大地を呑みこみ、陸地がわからないほどの巨大な湖と化していた。

昨日まで、万軍を従えていた陣営は影も形も失われているようだった。

奇跡的に助かったダーナンの兵士もいるようだったが、腰や肩まで水に浸かっているものは平地を指して歩き続け、浮き木や背の高い木々に身をあずけたままの者は呆然とした様子で周囲を見ていた。

ダーナン軍の陣営は一夜にして壊滅状態となったのだ。戦うことなくしてリンセンタートスは勝利を手にした。

そして、アウシュダールはその名、その力をリンセンタートスとナイアデスの兵の目に焼き付けたのだ。

イズナはあの夜のことを回想するたびに全身に鳥肌が立つのを覚えた。

「まあ、霸王とうたわれるロディ・ザインスの初撤退、初敗北の相手が我々だったこと。こうして命を永らえているのが、せめてものなくさめっていうやつですかね。それも転身人様の存在のおかげ。帝王は生きてますかね」

「時期にわかるだろうな」

イズナの返事に、レイリングは大きなため息を吐いた。

「砂嵐の件、あの戦の件。すべてが転身人のあの王子の力。ナイアデス皇国は、小国ノストールに助けられたとすでに揶揄する者もおります。腹立たしいやら、はがゆいやら。悔しくてなりません。我々の国に、転身人は現れないのでしょうか」

イズナは、黙ったままレイリングの言葉にうなずいてはいたが、その言葉にデイルムツドの言葉を思い出す。

「陛下……転身人はシルク・トトウ神だけではございません」

デイルムツドとフェリエスが初めて出会い、そう告げた場面。

「ナイアデスの守護神はユク神。その座に列する光の守護者リーフイス神の転身人は……あなた様でございます」

突然告げられた予期せぬ重大な言葉に、フェリエスは微動だにせずじつとデイルムツドの目を見つめていた。

長い沈黙が訪れた。二人の時間が止まってしまったかのようにだった。

やがてフェリエスがゆっくりと閉じていた唇を開いた。

「その神の力は、シルク・トトウ神に対治できるものか？」

他人事のような口調だった。

「おのが力に目覚め、おのが心を取り戻し、おのが目的を見いだしたときに……」

フェリエスはさらに問いかけた。

「アウシュダール王子には、そのこと……わたしが転身人ということなら……そうしたことわかるのか？」

「人の身である私が、神の心まで察することはできません」

「もし、わたしなら……」

フェリエスは、デイルムツドから視線を外すと、部屋にいるイズナ、オルローら一人一人の顔を生氣をとりもどしつつある黄金の瞳でゆっくりと見つめていった。

「わたしがシルク・トトウ神なら……自然さえ自由に操れる力を持

つているのだとしたら　自分以外の神の転身人の存在をどのよう  
に感じるものなのだろうか。手をとるべき友人と考えるのだろうか、  
それとも……」

フェリエスは最後まで言葉にはしなかったが何かを感じとった目  
をしていた。

『砂嵐を起こし、その御身のある場所に縛りつけ、力を失わせよう  
とすることも可能でしょう。あくまでも凡人の推測に過ぎませぬが』  
デイルムツドは齒に衣着せぬ言葉で、その場の誰もがぎよっとす  
るような言葉を口にした。

『ですが、救出されました。それも二度。凡人には計れませぬ』  
『確かに』

そう言っつてフェリエスは口をつぐんだまま、しばらく一人になり  
たいからと全員を下がらせた。

イズナはアウシユダールの自然を思いのままに操る恐ろしいまで  
の力を実際に自分の目で見た時、いつか自分の王も同様の力を現す  
のだろうかと考えると、複雑な気持ちにかられた。

それが嬉しいことなのか、畏怖の為に感情が混乱しているのか、  
自分ではわからなかった。

(フェリエス陛下が……転身人……)

カカス酒を飲もうとグラスに口をつけたとき、視線を感じてイズ  
ナは、ふと二階の回廊を見上げた。

しかし、そこは暗闇の空間で人のいる様子はなかった。

(気のせいか……?)

イズナは視線を戻すと、考えるのが面倒と言わんばかりに一気に  
それを飲み干した。

エリルがあわてて闇に隠れたのにも気がつかないまま。

「あ……危なかった……」

イズナの視線から間一髪逃れたエリルは、閉めたドアにもたれかかり暗闇の中で胸をなでおろした。

一階の大広間での宴の賑やかさ明るさとは反対に、二階は灯りがほとんど灯されていないために、闇と化している。

それを利用してエリルは大広間の二階の回廊から人々の中にガ―ゼフの姿を探したのだが、その中には見つけることができなかったのだ。

（見まちがいではなかったはずだ……）

エリルは回廊に通じる小部屋をでると、通路に出て部屋をひとつひとつ確認していった。

ドアに鍵がかかっている部屋には、耳を当て人の気配や声がしないか、鍵のかかかっていない部屋は細く隙間をあけて人がいないのを確認しておく。いざとなった時の逃げ場を確保しておくためだ。

明かりが漏れている部屋を見つたときは、注意をしながら中の人物を確認するために、ドアをそつと押し、隙間を作つてのぞき込んだ。

そうして何室目かのある部屋をのぞき込んだとき、エリルはキャンドルが幾重にも明るさを放っている部屋を見つけた。

が、その部屋に人のいる気配はなかった。

それでもよく耳を澄ますと、その部屋の奥の別の部屋から男の低いぼそぼそとした声が聞こえ、エリルは胸元に手をあて深呼吸をひとつすると用心しながら、その部屋に入り込んだ。

息を殺し、足音を忍ばせ、声のする奥の部屋のドアの前近づき、そつと耳を押し当てる。

これから……戻られるんですか……？

しゃがれた声は老人のものようだった。

揃えた品は今申し上げた通りです。いつもと特に変わったものはございません。砂嵐が止まりましたので、次の時までにはもつと揃えられる品数は増えるかもしれませんが、まだ最低限の状態です。問いかける声に別の声が答える。

問題はない。では、すぐにいつもの場所へ行ってくれ……と言いたいところだが、今日は無理そうだな……。

その声を聞いた瞬間、エリルの顔は凍りつき、背筋を冷たいものが流れた。

(ガーゼフ……！)

決して聞き違えることのないガーゼフの声だった。

明日の日の出とともに出発いたします。今日は国を守って下さった兵士さんたちの祝いの宴ですからね……でも、むしろ年寄り夫婦にとつての恩人はだんなです。むしろがこうして町長様のお屋敷で下働きをさせていただけているのはだんなとお会いできたからです。この老体でお役に立つことでしたらいつでもおおいつけください。さつそく家に戻って馬の様子を見て参ります。

だんなは下に、お呼ばれになっていらっしゃるんじゃあ？

男の低い忍び笑いが漏れた。

あいにくわたしには不釣り合いな場のようだからな。

さようですか……？ では、失礼します。お嬢様方にご伝言はありますか？

いや、多分わたしのほうが先に着くだろうからな。いつものようにあせらずに、慎重に確実に運んでくれればいい。

続けられていく会話よりも、老人の口から出た『お嬢様』という言葉にエリルは息をのむ。

(まさか……シーラ姉上のことじゃ……)

冷静に会話を聞き取るうと意識を集中させた時、緊張のあまり堅く握りめていたナーラガージュの杖の先が木の壁に触れた。

微かな音だった。

だが、エリルの心臓は飛び出すかと思うほど大きく鼓動を打った。

……………。

部屋の中の話し声が途切れる。

椅子から静かに立ち上がる音がする。

一步、二歩、足音がドアに近づく。

ノブが回り、ドアが勢いよく開き、黒い服に身を包んだ長身の男、ガーゼフが現れた。

部屋の中には誰もいなかった。

ガーゼフは藍色の鋭い視線で部屋の隅々を見回す。

部屋の蝋燭の炎が激しく揺れていた。

棚に置いたランプがわりの燭台を素早く手に取ると、廊下へドアを開け暗闇の通路に出る。

同時に、どこかで扉のしまるわずかな音がした。

いくつか並んだドアの向こう側、暗闇の部屋の中に爆発しそうな心臓を抱え、息をひそめたエリルがいた。

(どうか……見つからないように……)

足音はゆっくりと確実にエリルが隠れている部屋に向って近づいてくる。

ドアノブを回す音、扉を押し開けていく音が聞こえる。

侵入者に気がつき、探しているのは間違いなかった。

開けては閉じ、次の扉へ向う靴音。

それは果てしなく長い時間のように思えた。

壁に背中を強く押し付けていないと、足から崩れ落ちてしまいそうだった。

エリルの心の奥底には、ガーゼフに対する恐怖心が根付いている。

(今ここであいつに見つかったら、今度こそ殺される……。杖は、このことを警告していたのか?)

エリルは杖の呼びかけを無視したことを悔やんだ。

足音はエリルの立つ扉の前で立ち止まった。



扉のノブに手をかけるわずかな音を耳にして、エリルは目を閉じ、ナーラガージユの杖を強く握りしめた。

永遠に思えるほどの恐怖と静寂。

しかし、扉は開かれることなく、やがて足音は去って行った。

(や……やりすぎせたのか……?)

それでもいつ引き返してくるかわからない。

息を殺したままエリルは身動きすることができなかった。

「どなたですか？」

突然、正面から声をかけられエリルは心臓が止まりそうになった。見ると、暗闇の中、テラスに立つ人影があった。

エリルよりも背が高い男のシルエツト。

灯火ひとつなく、鍵もかかっていなかったのだから、人がいるとは考えてもいかなかったのだ。

「あ……」

頭が真っ白になった。

逃げようドアに視線を送った瞬間、その視線も固まる。

部屋の向こうにはガーゼフがいる。

死への恐怖がエリルの動きを封じた。

「アンナ……ですね」

思いがけない相手の穏やかな口調に好意的なものを感じて、エリルの限界に達していた緊張の糸がほどけそうになる。

テラスにいた人物は、窓際におかれた燭台の蝋燭に火を灯した。部屋に小さな明かりがともり、そこに立つ人物をほのかに浮かび上がらせる。

穏やかな瞳をした青年が、そこにいた。

「驚かせてしまいましたか。月がきれいなので、部屋の明かりを消して見ていたのです。あなたはどのアンナの一族ですか？ 長の名は？」

声の主は落ち着いた口調でエリルに話しかけた。

アンナのことをよく知っている人物の言葉だった。

「わ、わたしは……」

エリルは名を告げようとして、再びためらった。

ガーゼフが近くにいる以上、自分の正体を気づかれるような真似だけはしたくなかった。

「リリー……」

エリルは緊張でかすれた自分の声に、落ち着けと言いきかせる。

「リリー・ド・リア・アンナと申します。一族の長の名はジーシュ・ド・リア・アンナ。大地をことほぐ一族です」

咄嗟に出たのは、リア・アンナたちと一緒に過ごした時、仲良くなった少女の名前だった。

「大地をことほぐ……。ああ、王家ではなく、自然と大地のあらゆるもののために、その息吹を人々に語り継ぐ一族がいると聞いたことがあります」

目の前の青年は、エリルよりもやや年上のように見えるのだが、その物腰からはるかに大人びた印象を受ける。

「そのアンナの女性が一人……ですか？ ほかにもだれか一緒に？」  
「いいえ……あの……私は 星守りの旅 り途中ですので」

星守りの旅 のことはアンナたちからよく聞かされていたので、とにかく、この場をやりすごすために何でも言ってしまうという思いで、その言葉を口にしたのだ。

「一人で……？」

その人物は、やや不思議そうな表情をしたが、部屋の長椅子を手で示しエリルに座るようにすすめた。

自分は月が見えるテラスの窓際に手をかけたまま立っている。

「あの……あなたは……？」

エリルは、長椅子には座らずその背もたれに手を置いて正面に立つ青年を見つめた。

アンナをよく知っているこの人物は何者なのだろうと純粹に興味があったのだ。

アンナはふつつ、ひどく近寄りがたい存在として扱われる。

天の声を聞く者。人の心を見抜く者。未来あきを見る者。

畏怖心をもたれ、警戒されることはあっても、このように初対面から親しく語りかけてくることはまずないといってよかった。

「わたしはノストールから来ている者です。下があまりにも賑やかだったので、少しゆっくりと月を見たくなって上に上がってきました。あなたも同じですか？」

「え、いや、その……」

うす暗くてよくわからないが、衣裳は簡素ではあるが高価な生地で作られているように見えた。

また、この集まりに招かれているのだから、將軍以上の人物なのだろうと推測できる。

相手はアンナであるエリルを怪しんでいない。ならば、と、エリルはこの機会をのがす手はないことに気がついた。

「ノストール……あの、険しいエーツ山脈を越えていらしたんですよ」

思いきって聞いてみようかと心に決める。

脳裏には、忌まわしい場面が浮びあがる。

エーツ山脈の吹雪の中、崖から次々と転落して行く幼い少年たちの姿。

それを見つめる少年の妖しい笑み……。

「ええ、山越えは大変なことです。わたしたちにはあの山をよく知っていますから、危険を回避するためにいろいろな工夫をしています……」

「子供たちのことをお聞きしたくて……」

「子供たち？」

子供たちをどうしておいて来たのか、どうして探さずに山を越えてしまったのか聞こうとした瞬間、ナーラガージユの杖が震えた。

エリルは開けていた唇を閉じ、言葉を飲み込んだ。

口にははいけなさと、杖が警告したように感じたのだ。

（でも……彼がノストールの人間なら、将校なら、ジーンの兄やランレイのことを知っている人を見つけ出せるはずだ。それを聞ける絶好の機会なのに……）

エリルはゆっくりと息を吐き出し、言葉を慎重に選びながら再び口を開いた。

「ある……噂を耳にしたのです。あなたがたノストール軍とともにエーツ山脈を越えて来たという少年たちの噂を……。行軍の途中の山の中で、吹雪に遭ってはぐれた少年が、ノストール軍を探しているらしいと……。そして、軍にいる兄を追いかけた別の少年がいることを」

「……………」

青年は、エリルの言葉にじつと耳を傾けていたが、途中からあきらかに不思議そうな表情を浮かべた。

「私たちが子供を連れて山を越えた？ そんな噂があるのか？ 今回の援軍に子供は連れて来てはいない。その噂は間違いです。なぜそんな噂が……」

「え……？」

今度はエリルが驚く番だった。

しかし、その青年は別になにかやましいことを隠しているといった様子は見られない。

むしろ、エリルの言葉に困惑している様子さえうかがえる。

「そんな……覚えていないのですか……？　だって、あなたたちは一番下の王子様と同じ年の少年たちを大勢連れて国を出たんじゃ……」

エリルは、ジーンやランレイ、そして死んで行った子供達の姿を思い浮かべながら、気分が悪くなりそうだった。

「どういうことだ？」

突然、部屋続きの隣の部屋の扉が開いた。

「……！」

エリルは隣の部屋に人がいたことに驚き思わず息を飲み込んだ。

だが目の前に現れたのが、ジーンと変わらない年頃の少年であることに気づいて胸をなでおろす。

少年は背後にいる複数の大人たちに、待つようにと短く命じてエリルを見上げた。

エリルは凍りついた。

あの豪雪の中で崖から落ちて行く少年たちを笑いながら見ていた馬上の少年の顔が、目の前にあった。

似ているとか、酷似しているとか、そのような次元ではなかった。

あの少年冷酷な笑みをたたえて、崖下へ落ちていく子供達を冷徹に見下ろしていたあの子供だった。

「……」

軽い痺れと、自分を包み込んでいくような息苦しい空気、頭が締め付けられそうになってエリルはナーラガージュの杖を握り締めた。

エリルの体を圧迫するような奇妙な力が部屋の中に流れ込んでくるのが感じられる。

「いまの話は……本当か？」

高圧的な言葉が向けられる。

とても強い瞳だとエリルは思った。

しかも、その瞳を見つめた時、エリルは頭の中の自分がかき消え、すべての記憶が真っ白になっていくような錯覚と衝撃に見舞われた。

(この力は……?)

「その噂は本当なのか？」

たたみかけるように問われて、エリルは自分の意志とは関係なくうなずいていた。

「本当です」

心なしか少年はひどく動揺し、そしていらだっているように見えた。

それを見ているエリルの意識は朦朧としはじめていた。

頭の芯がくらくらとし、立っていることがひどく辛くなっていく。少年が口を開いた。

「わたしはノストール、ラウ王家の王子アウシュダール。わたしが問う。その噂はどこで広がっている？ どのような噂なのだ。申してみよ。アンナはノストールの王家の問いに答えるのがつとめ。

答えよ」

『答えよ』

エリルの意識に、アウシュダールの声とは別のもう一つの声が重なり、直接響く。

(なに……?)

眠りに誘うような甘美な心地良いしびれが頭の中に広がり、考えることを放棄したくなる。

その一方で眠ってはいけないと懸命に警告をする自分の声が邪魔をしていた。

ナーラガージュの杖に両手をあずけ、重く閉じそつになる瞼を必死で見開く。

(なにが……起きて……)

自分の体を支え切れずに倒れそうになった時、テラスから動いた影が、その体を抱きとめた。

「大丈夫ですか？　しっかりなさい」

それはもう一人の青年のものだった。

その声が消えそうなエリルの意識をわずかにだが、呼び覚ます。

「アウシユダール、彼女はサーザキアのアンナではないのだよ」

ノストールの王子を敬称もつけずに若者はたしなめた。

「ですが……、ノストールに関する悪しき噂を看過するわけにはま  
いりません。それに、サーザキアの一族ではないアンナと兄上が、  
どうしてここで会って話をされているのですか……。アンナが招か  
れていることなど、わたしは聞いていません。それに、いつも申し  
上げていますが一人で動かれてはわたしの気が落ち着きません」  
「ややすねたような口調と会話の内容から、二人が兄弟なのだと思  
づく。」

「月を見たくなってね。彼女も、同じようにこの部屋へ来ていて出  
会った。それだけだよ。名前もたったいま知ったばかりだ」

エリルは自分を支えているこの腕の持ち主がノストールの皇太子  
テセウスであることを悟り、偶然とはいえ、すごいことになったと  
消えそうになる意識に抵抗しながら、他人事のように驚いていた。

（次期国王同士の初対面がこれじゃ……。さまにならないよなあ……。）

そんな場違いなことを考えた時、ナーラガージュの杖が一瞬大き  
く手の中で震えた。

エリルの意識が目を覚ましたように鮮明になる。

（ジーシュ……？）

エリルは杖を託してくれた長の顔を思い出すと、エリルは一礼を  
してテセウスの腕から身を起こし、立ち上がるうとするが、まだ体  
に力が入らなかつた。その腕に支えられながら、片手を胸に当てて、  
何度も深呼吸を繰り返して息を整える。

「噂では、ノストール軍にいる兄を追いかけてこの国に旅して来た  
という少年と、ノストール軍と共にエーツ山脈を越える途中ではぐ

れたという二人の少年がいると聞きました」

「……」

エリルは薄明かりの中、なぜかアウシュダールの顔から血の気が引いていくのをはつきりと見た。

「山ではぐれた？ そんなことはありえない。だが、噂だとしてもその子供の名前は聞いたことはあるのか？ 噂はどこで聞いた？」

感情の見えない冷静な言葉の奥に、違和感があった。

『子供の名を答えよ』

頭の中で命じる声があった。

(ランレイのことを知っていたがっているのか……？)

エリルは、エーツ山脈の深淵でただ一人奇跡的に生き残ったランレイの顔を思い浮かべた。

堅く閉ざした心は、まだエリルやネイにはどうすることもできないが、命を救ってくれたゾーンに対してだけは、まるで親鳥を追うひなのようにいつもゾーンを目で追い、離れようとしない。

その姿が一筋の希望のようだと笑いかけけるネイの言葉に、エリルがうなずいたのはついこの間のこと。

「その少年がいまどこにいるのかは知りません。ただ、二人ともノストール軍を探して後を追っているらしいと……」

「二人とも？ 兄を追ってノストールからリンセントースに来たという子供の話が一人歩きしたのではないのか？ もう一人の名は？」

「噂ですから、名前までは」

「噂はどこで耳にした？」

「それは……」

「ただの流言だ」

遮ったのはテセウスの声だった。

「リリー・アンナ。名乗るのが遅れましたが、わたしはノストールのテセウス・デ・ラウ。ラウ王家の人間です。ここにいるのは弟のアウシュダール。わたしたちは子供を連れてエーツ山脈を越えるよ



うな無謀なことはしない。アウシュダールは姿は幼いが、シルク・トトウ神の転身人。リンセンタートスのピアン神とも言葉を交し、あの砂嵐を終らせるように導いた特別な力をもっている。アウシュダール以外の子供を連れて来るような危険な真似はしない。嘘ではありません」

テセウスの断言する言葉に、エリルはあっけにとられた。

（知られたくないことなのか？ それとも、本当に知らないとしてもいうのか？）

少年達が死んでいく残酷な光景は、夢や幻ではないはずだった。

炭化した子供の亡骸、ネイを襲った妖獣、それらをエリルは実際に見ている。

ノストールの子供達の死を、アウシュダールは誰よりも知っているはずなのだ

（いや……）

アウシュダールはエリルの瞳をじっと見つめていた。

（この目は人の心に入り込む……）

だが、その瞳から放たれる奇妙な力は、ナーラガージュの杖に守られ、心に警鐘をならすエリルの心に入り込めない。

やがて力が及ばないことに気がついたのか、圧迫がふっと消えるのをエリルは感じた。

「リリー・アンナ。私たちは下に戻ります」

アウシュダールの様子に気がついていないのか、テセウスはエリルが立ち上がるのに手を貸しながら、自らも立ち上がるとその手を離した。

「アウシュダールと私が姿を見せないとなると、今度は別の者が探しまわるだろうから」

テセウスが側近達が控えている隣の部屋に行こうと促すと、アウシュダールの表情が微かにゆがんだ。

そして、その視線は、扉が閉められるまでエリルから離れることはなかった。

(面白いアンナがいたもんだ……)

テューラの町から離れた場所にある森林の高い木の梢に腰掛け幹にもたれかかったセルジーニは、一人楽しそうに笑っていた。

その木の下には、簡素な天幕を張り、眠りについてる 星守りの旅 の若いアンナたちがいる。

セルジーニは、エデイス、オージー、マーティスの三人の 星守りの旅 を見守りながら、このテューラの町に導いてきたのだ。

ところが思念体で町の様子を先にさぐっていたところ、テューラの町には、すでに自分たち以外のアンナが来ているらしいという噂を知った。

アンナの存在を知って放っておく権力者はそういない。

町長の屋敷で今宵行われる祝宴の席に招かれているに違いないと見張っていたのだ。

予想通り、アンナの装束を身にまとった人物が現れた。

「金色の髪に碧い瞳、女性用の装束を着た男。なのに、手にしているのはアンナの一族が特別に用いるナーラガージュの杖。しかも、アンナー族の守りがあの男の為に施されている。宴には出席せずに何かを探っているようだし、奇妙な奴だ」

セルジーニは独り言をつぶやく。

そのうち、予想もしていなかった場面に出会うことになる。

エリルとテセウス、アウシユダールの様子を、思念体で肉眼で見られるように観察していたのだ。

「ラウ王家の王子のエーツ山越えの話は何のことだ……？ 子供たちを連れて出た……って」

セルジーニは、夜空を見上げた。

「ラウ王家のテセウス皇太子、あと一緒にいた王子は……。アウシユダールと名乗ったが、誰だ……？ それに、ノストールの兵士た

ちを取り巻いている奇妙な霧のようなもの……」

（テセウス皇太子の指にあったのは王の証しの《アルディナの指輪》……しかも金の指輪の片方。あの指輪は即位の証し。すると、カールザキア王はすでに逝去……。そして、おそらく皇太子と一緒にいたのはシルク・トトウ神が転生したという王子　　勇気と戦さの神……いや、破壊の神……。山で消えた子供たちの話……。二重三重と町に張り巡らされている奇妙な霧……。あれには意志のようなものが確かに存在した。俺以外の他の人間だったら、あの力にとりこまれてしまったかもしれない）

疑問を指折りながら確認していく。

額にうっすらと汗がにじんでいた。

アンナの家長がもつ力は、大神官であるサーザキア長に次ぐべき能力と多くの家族たちを導いて行く力である。

まだ十代のセルジーニや、七歳のイリユーシアが家長であるのはそれなりの理由が存在する。

家族たちが認めなければ、力だけがあっても、家長にはなれないからだ。

（ジーシュの一族というあの言葉に嘘はないだろう）

セルジーニは、《星守りの旅》の途中で世話になったジーシュ一族の人々の顔を思い浮かべる。

（リリーは、俺を大好きだと言ってくれたちっこい女の子だったはずだが……）

アンナの一族は、占術士たちの総称だった。

サーザキア率いるユク・アンナとユル・アンナの系譜を持つ一族。リア・アンナの系譜を継ぐジーシュの一族。

他にも、ソル・アンナ、アル・アンナ、ディア・アンナ、ユマ・アンナを系譜とするアンナたちが存在する。

なかには、占術以外の魔道と呼ばれる道へ踏み出して行った者、別の小人族の魔道士と交ざりあった者など、様々に枝分かれをしていった者も多かった。

その中でも最大最高の力を持ち、中心的立場にあるのがサーザキアの一族だった。

星守りの旅の影守り役は、そのように散っていたアンナたちの足跡を辿ることも目的の一つとされている。

セルジーニは四年前、前回の自分の星守りの旅の時に、ジーシュの一族と数日一緒に過ごしたことがあった。

(あいつはそのときにいなかった……)

これは今までになく波乱に満ちた旅になるかもしれないという予感が高まる。

(そういえば、この旅のイリュシアの先読みは、ひどく歯切れが悪かった。俺にも旅の色がみえなかったし……)

セルジーニの瞼に、アウシュダールと名乗ったシルク・トトウ神の転身人の姿が浮かぶ。

(思念体のままでは、顔さえ見ることができなかった。神の力だからか?)

神が相手では、自分たちでは読み切れないのは当然かもしれないとセルジーニは思う。

(これは……旅の場所を変更させたほうが安全だな……)

自分の好奇心だけで若いアンナを巻き込むには、危険すぎる空気の重さが、このリンセントースという国にはたちこめていた。

思索を終えたセルジーニが幹に体をあずけて眠りにつくこうとしたとき、下の天幕から誰かが出てきた気配を感じた。

下をのぞきこんで見ると、人影が森の奥へと歩いて行く姿があった。

三人のうちのどれかなのだろう。

肉眼では闇中の状況がつかめないため、一度肉体に戻ったばかりだが、再度思念体としてその人物を確認する。

寝つけないのだろうかと思いつつ様子を見ていたセルジーニの表情が変わった。

(浮かんで……いる……?)

その人影は、暗闇の中で浮いているように見えた。

「やべえ……」

セルジーニは術をつかって思念体で追いかけてしようとしたが、疲労が蓄積していて飛ぶことができない。

のんびりした時間がないことに気がつき、肉体に戻ると慌てて大木から降りようとした。

だが、突然吹きつけた強風が体の自由を奪い、身動をとれなくする。

「いまのは……」

セルジーニが大木から降り立ち、天幕の前に立ったときは、その人影はどこにも見当たらなくなっていた。

『覚えていないのですか？ だって、あなたたちは一番下の王子様と同じ年の少年たちを大勢連れて、山を出たんじゃ……』

人々が寝静まった真夜中。

屋敷の寝室で、テセウスは眠れない時間をすごしていた。

リリーというアンナの女性の言葉が、耳朶に焼き付きはなれないのだ。

あの時は、強く否定したもののそれは、まるで自分がその話から逃れようとしているかのようにだった。

(エーツ山脈の中での記憶が……あまりにもぼやけている。国を出るときはどうだっただろうか……)

時間をさかのぼろうと試みるが、人々の歓声や笑顔、父王と弟王子たちの顔しか浮かんでこない。

けれど、繰り返し自分を襲う悪夢はあのエーツ山脈の山越えのものに間違いはなかった。

いつも吹雪の中で、テセウスは叫びつづけ、自分の声で目を覚ましたことも幾度もあった。

息苦しさにベッドから起き上がると、水差しから水をグラスにつぎ、そのままガウンを羽織って窓辺に近づく。

銀色の三日月が地上に近い場所で輝いていた。

その光が残る闇の輪郭をうつすらと感じさせる。

グラスに注いだ水をすべて飲み干すと、静かなため息を吐き出しながらテセウスは地上に視線を落とした。

が、そこにいたあるものの姿を見てはっとした。

(ザークス……！)

屋敷の門の前に、赤く輝く瞳だけを浮かび上がらせたテセウスの守護妖獣の姿があった。

それは、テセウスに外へ出てくるようにと呼んでいるように見え

る。

「あの子がいるのか……？」

テセウスの脳裏に咄嗟に浮かんだのは、砂漠で出会った少女のことだった。

あの夜も、ザークスは何も言わずにテセウスを導いた。

そして出会ったあの少女からノストール、ラウ王家の継承の証である《アルディナの指輪》を受け取ったのだ。

テセウスは急いで着替えると、警護の兵の目を盗んで屋敷を抜け出した。

嚴重に警備をしているはずの部下達の姿が見当たらないのもこの時は気にならなかった。

もう一度あの少女に会いたいという気持ちと、銀色の指輪のことをたずねたいという気持ちとが、テセウスをつき動かす。

ザークスのいた場所へ行くと、馬具をつけた馬がゆっくりと姿を現した。

「なぜ？」と、考えている余裕などなかった。

テセウスはその馬の背に飛び乗った。

あの時のように、はるか先に姿を現し続けるザークスのあとをひたすら追う。

奇妙な既視感が全身にまといつく。

砂漠の時ではないと感覚が訴える。これと似たことがずっと過去にあったのではないかと。

誰にも見咎められず、さえぎられることなく、ただ何かを追いかけた感覚が。

天空にはまばゆいばかりの星が輝き、冷たい空気と土を蹴る馬の蹄の音だけが、この世の生のように響き渡る。

星空の下を一頭の馬に乗り走り続けながら、テセウスは自分の存在の小ささを感じずにはいられなかった。

国を離れて既に半年近くを異国で過ごしている。

その旅の途中で父の訃報を知り、砂漠の夜に《アルディナの指輪

《の半身である金の指輪を受け取った。

そして、今日はアンナのリリーから奇妙な問いかけをされた。

子供達はどうしたのですか？

繰り返し、繰り返し、責めるようにその問いかけはテセウスの中で響き続ける。

テセウスは何度も小さく頭をふってその言葉を追い出そうとした。

「子供達を連れてくることなどありえない」

否定しても、否定しても、声は消えることはなかった。

やがて馬は、木立の中を走り抜けた場所で急に止まった。

「？」

テセウスが驚いて、だが目をこらしてゆっくりと周りを見渡す。

いつの間にか町の外に出ていた。

暗闇の為にはつきりはわからないが、周囲に木々が点在する草原だと認識する。

草原を見渡すと、視線の先、なだらかに下る斜面の先に、闇が広がっていた。

馬がその闇に向いゆっくりと歩き出す。

近づくほどに、闇は小さな湖なのだということがわかってくる。

馬上で揺られながら夜空を映し出す黒い湖面湖を見ると、視線がある場所で止まった。

湖のほとりに、人がいた。

それが人だと気づいたのは、闇の中で、その人物の輪郭がうっすらと輝いているようにみえたのだ。

既視感はますます強くなる。

テセウスは、過去のある場所へと記憶が引き戻されて行く感覚に陥った。

心がざわめいた。

その人物は湖を見ていた。

髪の高い少女のようだった。

暗い闇の中で、一人たたずんでいる。



いや、たたずんでいるというより、その足元はわずかに大地から離れて浮いているようにも見えた。

（人間ではないのか？）

やっぱり、お化けなのかな？

記憶の中で、誰かの声が問いかける。

（昔……似たようなことが……？）

テセウスは馬を降りると、一步、二歩と、足を踏み出した。

（そう……同じことがあった……）

だが、思い出そうとすると霧がかかったようにすべてが遠のく。

パキリ、と小枝を踏みつけてしまいその音が響いたとき、浮かんでいた人物の足下がゆっくりと地面に降り立った。

「ここは……？」

長い髪の少女は我に返ったかのように自分のいる場所を見渡していた。

どうして、自分がこの場所にいるのか驚いているようだった。

その心の動きがテセウスには不思議とわかった。

少女は、すぐ後ろに誰かがいる気配を察して、振り返り、声を上げそうになる。

「ひさしぶりだね。エディ」

「え……」

叫ぶ前に、名を呼ばれてさらに驚いたのか口元を両手の指先で隠したまま、目にうつすらと涙を浮かべている。

あまりに驚いた様子にテセウスは苦笑交じりに、エディスに笑いかけた。

「わたしはテセウスですよ。ノーストル国ラウ王家の王子の……」

からかい半分で名乗った言葉が、いつかの同じ場面を繰り返している錯覚を呼び起こす。

「テセウス様……？」

ようやく目の前に立っている人物がテセウスに間違いないことを知って、エディスは紫色の目を丸くした。

「あの、どうしてここに……」

「君こそ？」

「え……」

答えに窮するエデイスに、テセウスはくすくすと笑いかけた。

「また寝ぼけたのかい？　これで二度目だ」

そう言ったあと、当のテセウスの表情が凍りついた。

「二度目……？」

自分で自分に問いかける。

「テセウス様？」

テセウスの様子に、今度はエデイスのほうに心配そうに近づき顔を見つめる。

「エデイスは……二度目なのか？　いや……その……前にも……いまと同じことが？」

エデイスは、テセウスの問いかけに嬉しそうにうなずいた。

「はい。忘れはいたしません。テセウス様方と初めてお会いした夜は、私が初めてノストールに行った時で、月がとても美しい夜でしたもの。大切な思い出です」

「そうなのか……。それで、エディはどうしてここにいるんだ？　サーザキアたちも一緒に来ているんだろう？」

テセウスは自分が何を言っているのだろうと、思わず喉元に手をおいた。

話を逸らそうとする自分の奇妙な心に疑問がわく。

「長はここにはいらっしやいません。私は他の二人と共に　星守りの旅　の途中です」

「ああ、エデイスは十三歳になったんだね。そういえば今日、星守りの旅　をしている別のアンナの女性にあつたよ。名はリリー、ジーシュの一族と名乗っていた」

その名を口にした瞬間、リリーの責めるような声がよみがえる。覚えていないのですか？

直後、吹雪の中で叫び続ける自分の声を聞いたような気がした。

「……………」  
大勢の子供たちの瞳が嬉しそうに誇らしげに、そして自分を尊ぶように見つめている場面がよぎる。

(いや、そんなことはありえない)

「ありえない……………」

「テセウス様……………」

ぐらり、と体が傾くのをエディスが支える。

「エディ……………」

テセウスは、エディスの小さな両肩にすがるように手をおいた。

「私はどうかしてしまっている……………父が死んだという報を受けても、国に帰ろうとせず。前へ進むことしか考えなかった。砂漠で銀色の髪をした少女から《アルディナの指輪》を受け取るまで、どうしても、父の死さえ忘れかけていた。毎晩ひどい悪夢にうなされるのに、夢の内容も思い出せない……………」

自分より年下のアンナの少女に、訴えるようにテセウスは苦しげな声で続けた。

やはり、まえにもこうしてエディスにだけ、自分一人の心におさえておけない思いを聞いてもらったことがあるのだという感覚がよみがえってくる。

だが、どうしても思い出せない。

「いまも……………自分で知らない間に、本当に聞かなくてはいけないことから逃げようとしている。この指輪を受け取る前は……………それを考えることすらできなかった」

「テセウス様……………」

エディスは悲しげな瞳でじっとテセウスの瞳を見つめていた。

その視線が夜空の月を見上げ、再びテセウスに戻った。

「きつと……………すべて思い出せます。ただ……………」

「ただ？」

エディスの小さな口元が、きゅっと固く結ばれるのを見て、テセウスは目で続きを促した。

「思い出した時、お辛くなった時、その先にあるものを見つめる努力をしてください」

エディスはサーザキアがいつも言っている言葉を思い出しながら、胸元に両手をあてて、ゆっくりと言葉を綴る。

「逃げることなく、自分のいま行わなければいけないことを、お苦しくても見つけてください。陛下が、お父上様がそうしてこられたように。テセウス様が、今までそうして来られたように」

エディスは、二人にささやきかけるように吹き抜ける風が、少しでもテセウスの悩みを軽くしてくれたならと祈るような思いで語る。「大丈夫です。テセウス様にはそのお力がありますもの」

エディスのあたたかい言葉が染み込んでいく。固く凍りついた心の一部を包み込み、全身に染み渡っていくような安らぎがテセウスの心を満たしていく。

テセウスはゆっくりとうなずいた。「エディは覚えているんだろう？ どんなことがその時にあったのか」

「でも、わたしの思い出とテセウス様の思い出は、一緒ですけど、違いますから」

「違う？」

テセウスはエディスの肩からゆっくりと手を離すと、困ったようにエディスの見ていた月をみつめた。

「はい。テセウス様の思い出は、テセウス様のものですから」

「エディのとは違う、と？」

「はい」

紫の瞳はまっすぐに、テセウスの瞳を貫くように見つめる。

「同じ場所にいても、同じものを見ても。同じ記憶ではありません」「記憶……」

「そして、それはどなたも奪うことも、消し去ることもできません」「奪えない？」

なぜエディスがそうした話をするのか、奇妙に思える。

エデイスが知っていることを、ただ、教えてほしいだけなのだ。  
「テセウス様のお心に刻み込まれた思い出は、例え思い出せない出来事があったとしても無くなりはいしません。テセウス様だけのものです」

「私だけの？」

「はい。良いことも、お辛いことも、お心と共にある、テセウス様だけの記憶です」

エデイスの凜とした声が、その言葉が、一瞬にしてテセウスのなかの何かを断ち切った。

「……！」

同時に、それは恐ろしい記憶の蘇生の波となって、テセウスに襲いかかった。

突然、崩れるようにその場に膝をつき、前のめりに倒れるそうになるのをエデイスが支える。

「テセウス様？ ご気分が？」

「エディ……」

テセウスは口元を固く握りしめた拳で押さえつけていたが、やがてその唇から押さえ切れぬ慟哭と、嗚咽とが漏れだした。

「わたしは……」

その青ざめた顔に悔恨と悲しみと苦痛が沸き上がる。唇がわななき絞るような言葉が喉の奥から漏れた。

「わたしは……子供たちを……雪山で見捨てて来てしまった……」

その言葉にすると、テセウスは拳を激しく地面に打ちつけたまま固く目を閉ざした。

その瞼からは、とめどもなく涙があふれ、地面へと吸い込まれていく。

エデイスはそのテセウスの傷ついた拳に、そっと自分の小さな手を重ねた。

そして、テセウスの背後に青い瞳を宿した妖獣がいるのに気がつく。

「うん……」

エデイスは、テセウスの守護妖獣ザークスにうなずいて見せ、その背にそっと手をふれた。

テセウスは夜な夜なうなされる悪夢の正体を思い出した。

子供たちのけなげな笑顔、送り出す家族たちの心配そうな、それでいて誇りにみちた表情を。

けっして泣くこともせずに、雪をかき分けエーツ山脈を幼い体で必死に歩いていった子供たちの姿を。

テセウスは、子供たちの姿を吹雪の中見失ったという報告に、子供たちを見失った場所まで引き返そうとした。

見つけれなくては、このまま前へ進む訳には行かなかった。

元気な少年たちの顔を思いだし、自分だけでもと周囲の反対を振り切り、吹雪の中、飛び出そうとしたはずだった。

だが、いまその少年たちはどこにもいない。

エデイスと、守護妖獣の瞳に見守られながら、テセウスは苦悩の渦の中で突きつけられた真実から目をそらしたかった。

だが、逃げてはいけなかったエデイスの言葉にしがみつく。

「忘れてしまったほうが楽なのに」「忘れていいんだよ」と、囁き続ける甘美な声とに葛藤しながら、戦い続けた。

長い夜が過ぎて行く。

空が明け始めるころ、テセウスはエデイスと共に湖を静かに見つめていた。

その表情は、昨日までの穏やかな瞳の青年から、苦悩を瞳に宿す厳しい男性のものに変わっている。

（取り返しのつかない残酷なことを……非道なことを……私はしてしまっただが、テセウスはおぼろげに感じていた。

取り戻したのは、失った記憶のほんの一部に過ぎないということ  
を。

ルナは、木の一番高い場所に入ったまま、遠く砂漠の方向を見ていた。

(兄上……)

ミゼア砂漠を越えて、最初にたどり着いたブレアの町にルナたちはいた。

(もうすぐ、兄上がノストールに帰られる日が来る……)

ルナは、リンセンテートスに訪れたノストール軍が国に帰還する姿を見届けてから、父カルザキア王と約束をした人物を探そうと決めていた。

ところが、ノストール軍はいつまでたっても姿をみせず、帰国する様子はなかった。

それどころか、リンセンテートを侵略しようとして来てたダーナン軍と戦うためにリンセンテートス軍と共に出陣したという噂が流れてきたのだ。

(兄上はご無事だろうか……。みんなは大丈夫だろうか……)

ルナは、穏やかな表情のテセウスを、そしてノストールの人々を思い浮かべる。

全員の無事。気掛かりはそれだけだった。

やがてその戦いも、一夜にして奇跡がおこり、ダーナン軍が撤退したという噂が都から離れたこの町に早馬の如く流れてきた。

ただ、どれほどの被害があったのか、何が起こったのかまでは、まったくわからない。

それでも奇跡の勝利が、砂嵐の止んだ直後の侵略という脅威から人々を心から安堵させたのは間違いないかった。

そして、この二つの出来事に転身人が関わっていたことがブレアの町に伝わるのはまだ先のことだった。

ルナは旅人達が話すのノストール軍の噂に耳を澄ましながら、朝

と夕、町で一番背の高い木にのぼってはリンセントス城のある方角を見続ける日々を送っていた。

今日もノストール軍は姿を表す気配はなかった。

だが、奇妙な渦を描くような強風がルナの髪を吹き上げた。

ふとエリルが向った町はどの方角なのだろうかと視線をさまよわせる。

アンナの一族の装束を身にまとったエリル。

青みがかった髪の色、澄んだ碧い瞳。

ベールで隠しているとわからないが、黒い髪、紫の瞳を持つアンナとは明かに違った。

けれどあのエーツ山の崖底で、父と父の守護妖獣イルダーグを死に追いやった妖獣を、言葉だけで追いついてネイを救ってくれたのを、ルナは目の当たりにした。

自分だけでは、あの時どうなっていたかわからない。

ネイを失っていたかも考えると、今でも心の底から震えが走る。エリルがアンナとは何か違うと思いつながら、ルナはそれでもいいと思っていたし、女性の装束を身にまとっているが男性であることも気がついていて。

ネイが裸でいる場面に遭遇すると、冷静を装ってはいるが明らかに動揺して視線をそらすのを何度も目にしてきたからだ。

アンナではないのにアンナの一族になっていて、男なのに女のふりをしている。

ちよつと同じかも。

ノストールの王子ではないのに、王子として育ち。女なのに男として過ごしている自分。

きつといるいろいろな理由があるのだろうと考えると、何を話しているかわからなくて、話しかけられてもなかなかきちんと言葉を返せないでいた。

助けてくれた日、ありがとうと言ったが、どれほど感謝をしているか、エリルが、テューラの町に出かける日が来てもなかなか伝え



ることができなかった。

いつも気づかうようなやさしい眼差しで話しかけてくるエリルの顔が浮かぶ。

帰ってきたら、ちゃんと伝えよう。

エリルがいなくなってから、風が強くなっていた。

「ジーン！」

下の方からネイの呼ぶ声が聞こえて来て、ルナはあわてて下を見る。

「ご、ごめん…今行く」

そこには腰に手をあてて待っているネイがいた。

枝から枝に飛び降りながら、地面に着地する。

「うん、だいぶ元気になったね。マストから降りてくる時のあんと重なったよ」

ネイはルナの頭をぽんと軽くたたいてにこりと笑った。

その言葉にルナは海賊島での暮らしを思い出し、風の吹く蒼穹を見上げた。

どこまでも続く青い海原と大空の下で暮らした日々。

気の荒い仲間たちの豪快な笑い声や、船を襲うときの勇猛な様子、戦利品の酒に酔って大暴れをしている光景が懐かしい。

随分と遠い日のことのように思える。

まだ、イリアの死から、父の死から半年も過ぎていないというのに。

「ネイ……」

ルナは、ネイの笑顔を見上げた。

「ん？」

「ありがとう」

「ジーン？」

ネイはルナの唐突な言葉に目を瞬かせた。

「ずっと、一緒にいてくれてありがとう。それから……ずっと何も聞かないでいてくれたことも……」

ルナの精一杯の思いを込めた言葉に、ネイはとびきりの笑顔で応えた。

ネイは、ルナが自分のことを「ジーン」ではなく「ルナ」と言ったことも聞いているはずだった。

唐突に兄がノストールにいると言い出した時も、疑うようなことや、どうして今まで言わなかったのかも一言も聞くようなことはなかった。

ただ、ルナが行くという場所に、笑顔で励ましながらそばにいてくれた。

「やだなー、突然何を言い出すかと思ったら。あたしはあんたと一緒にいたいからいるんだってばあ。まあ、いいってことさ」

少し照れながら頭をかくと、それを隠すように片手を上げた。

「さ、これから畑仕事だよ」

最初に訪れた宿の女主人とネイとエリルが意気投合し、旅の事情を話したところ、畑の仕事を手伝うかわりにただ同然の宿代で泊めてもらえることになったのだ。

「それと……出ておいで、あんたも行くよ、ランレイ」

ネイに名を呼ばれて、木の後ろ側からランレイが姿をみせた。

ネイは、ルナとランレイと歩きながら、時折風に吹かれて乱れるルナの深い緑色に染めた髪を、すくようになでる。

「早く、兄貴に会えるといいな」

「うん」

ルナはノストール軍を見送った後、ノストールには帰らずにデイアードを探す旅に出ることを、どうやってネイに話そうかと考えながら、畑へ向かって歩き続けた。

吹き付ける風の乱れが気になりながら。

エリルは幌馬車の荷台の中で揺られていた。

(もう……何日走ってるんだろう……)

エリルはガーゼフに雇われていると思われる初老の男が、荷物を運ぶために町を出ようとしているのを見つけて、こっそりと幌の張った荷馬車の中にもぐりこんだのだ。

(うまくいけば、シーラ姉上のいる場所に運んでいってもらえるかもしれない……)

期待に胸を弾ませての出発だったが、テューラの町から出た馬車は、馬も老人ものんびりした足取りで移動よりも休憩が多い旅路となった。

走っては休憩、少し走っては休憩の連続で、いつ目的地につくかまったく見当がつかない。

途中、小さな村や町に宿泊したりするのだが、顔なじみの人間達と酒を飲んだり、親戚らしき家族と会ったり、本人なりに急いでいる様子はあるのだが、距離はいつこくに稼げない。

(サンにも何にも言わないで来てしまったから心配をかけてしまっているかもしれない)

時折、アンナの衣装はさすがに目立つので、外へ出るときだけは老人の着替えを拝借して、食料調達のために馬車から降り、固まった体をのびしながらエリルはため息を吐き出した。

冷静になった頭で考えると、後になって気がつくことがどんどんできてきて、さすがのエリルも焦り始めた。

(ガーゼフに頼まれたのはこのおじいさんじゃなかったのかな……。いや、そんなことはないし……。それとも、ガーゼフの知り合いのところへ荷物を届けに行くだけなんじゃあ……)

考え始めると、不安の要素が次々と浮かんで消えて行く。

けれど、今から引き返すのも中途半端な気がして、もつとついで

もなれという気持ちでエリルはひたすら荷物が降ろされるその日を待ち続けた。

老人のゆっくりとした、そしてエリルを悩ませた旅もやがて終点を迎えることになった。

「荷を降ろすぞ」

老人が誰かに呼びかける。

その声に、エリルはやっと到着できたことを知る。

荷物の奥に体を隠していたエリルは、老人の荷降しをする隙を狙って、あとは馬車から飛び降ればいいと考えていた。

幌の透き間から外を見ると、小さな古城らしき建物が見える。

老人のゆっくりとした足音が、幌に手をかける影が見えたとき、女性をあわてて制止する声が出た。

「お待ちください」

「どうしたんだい？」

いぶかしむ老人とその女性は顔見知りのようで、特に名乗るようすもなく会話を始めた。

「荷物は降ろさなくて良くなりましたの」

「じゃあ、どこで降ろせばいいんだ？」

「降ろす必要もなくなりました。もう……お嬢様方の荷は必要なくなつてしまつたんですの」

女性は力無く、詫びるように老人に告げた。

「そりやまた……でも、変だな。荷を届けるようにと旦那からことづかつたんだよ」

「それが……」

女性は弱々しげに声を落とした。

「つい三日前のことです……突然、ナイアデス皇国の者と名乗る一行が現れて、お二人を無理やり連れて行かれてしまったのです」

エリルは、はっとして二人の会話を一言も漏らすまいと聞き耳を立てた。

「旦那はご承知だったのかい？」

「とんでもありません。ガーゼフ様はその翌日到着されて事情をお知りになりました。執事が説明をしますとたいそう驚かれて……すぐにそのまま出て行ってしまわれたんですの。あとから荷が届くけれど、そのまま帰ってもらおうようにとだけ言い残されて。きっとお嬢様方の後を追って行かれたに違いありません。なにが起こったのかわたしたちには……」

そう言っ使用人らしき女性の声は涙声になった。

「あんなに心穏やかな日々はございませんでしたのに……。あの日から、お二人のことがずっと気になって私は一睡もできませんでした」

ナイアデス皇国、そしてガーゼフという言葉が、不吉な予感を募らせていく。

「でも、なんでナイアデスの人間が……。ここはリンセントーアの人間だってまず知らない場所だ。どうやって……」

「わかりません。ただ、シーラ様はナイアデス皇帝の花嫁になるのだからと……。意味のわからないことを言っていました。一緒にいた魔道士のような男が不思議な術を使って、私たちの体は動けなくなり、お嬢様方をお守りすることができませんでした……」

その言葉にエリルは頭を殴られたようなショックを受けた。

使用人は確かに『シーラ』と言った。

なんらかの事情で、ガーゼフの保護下におかれていた、もしくは軟禁されていたシーラを、ナイアデスの者が捜し出して連れ去った、ということになる。

それも、皇帝の花嫁にするために

エリルは、話の内容からそう推測した。

(けれど……姉上がどうしてナイアデスに……)

数日前まで、姉のシーラがこの場所にいたことを考えるとエリルは、こののんびりとした旅さえなければ、自分の手で救い出せたかもしれないと知り愕然とする。

重い心を抱えながらも、エリルは帰路についた。

帰りの途中で停泊した町で老人の馬車から降り、別の馬を手に入れて憔悴しながらも、なんとかルナたちのいるブレアの町に帰り着くことができた。

だがそんなエリルをは迎えたのは、嵐の直撃を受けたようにに家屋が破壊され、残骸が放置され、無残な姿をさらした町の姿だった。道に人の姿はなく、静まり返っている。

エリルは、自分たちの泊まっていた宿が見る影もない姿で無残に荒らされているのを目にして呆然と立ち尽くした。

自分が不在にしたこの数日間で、町に一体何が起きたのか。

杖の知らせた危険がこのことなので、そう思うとエリルは血の気を失った。

崩れ落ちそうになる体に鞭を打って、近隣の家々の扉をたたいた。だが、中から人は出てこない。中に人がいる気配はあるが、固く閉ざされたドアは開かない。

何軒も回り、やっとのことで顔見知りになっていた店の主人が扉を開け、エリルの顔を見ると引きこむようにして家の中にいれてくれたのだ。

「なにがあつたんです？」

そう問いかけようとして、主人の示した隣の部屋を見たエリルは、息をのんだ。

その目に、ひとめで重傷だとわかる布でいたるところを手当てされているネイの横たわる姿があつた。その横には比較的軽症の宿の女主人の姿。

だがそこに、ルナたちの姿はない。

「話せますか？」

家の主人がうなずくと、エリルはネイの横たわる床に腰をおろした。

「ネイ！ 何があつた？ 体は大丈夫なの？ ジーンは？ ランレイはどこに出かけている？」

「あいつが……」

「え……？」

ネイは震える手で、エリルの手を握りしめた。

「あいつが来た……。町に……。あたしたちを襲った……。あの化け物が……」

「！」

エリルは全身が総毛だった。しまったと心の底から後悔の思いがこみ上げる。

あのエーツ山脈で、ネイを襲った正体不明の妖獣のことだと、すぐにわかったからだ。

「ヴァルツが……」

エリルは失念していた。

ヴァルツというあの妖獣の存在を。

まさか、あのあともずっと自分達を付けねらっているとは考えもしていなかったのだ。

「……………」

そう、エリルはこの時初めて気がついた。

ヴァルツは、エリルがいたからこの町に近寄れなかったのだ。

そして、ずっと待っていた。エリルがルナから離れる日を。

「わたしは……」

エリルは自分が引き起こしてしまった取り返しのつかない事態に、言葉もなく、ただ立ち尽くすしかなかった。

第13章 警鐘 - 11 - (後書き)

第13章 警鐘 終了



ぬけるような青空の下、ナイアデスの首都コリンズの街は、その日多くの群衆で沿道がひしめき合っていた。

色とりどりの花や花びらを入れた籠を手にした人々は、花や草、木の蔓で編んだ手製の冠を頭に被り、一番お気に入りの服に身を包み、その時が訪れるのを今か今かと待ちこがれていた。

家々の屋根の上からは、気前よく菓子を沿道の人々にふるまう商人ら男たちの姿があり、また、道の中央では清めの水を踊りながらまき清める何組もの若い男女の姿があった。

彼らは、楽士らの吹く笛の音と、人々の手拍子に合わせながら、誇らしげに笑顔をふりまき、軽やかに踊り続ける。

青年が手にした水桶から、娘たちが両手で水をすくい道に撒き散らしてしていくのだ。

水の都コリンズでは、祝いときには庶民も王族も儀式には必ず水を用いた。

やがて道のはるか彼方からざわめきが起きだすと、瞬く間に大きなどよめきとなり、沿道の人々を呑み込んでいった。

「フェリエス皇帝陛下の馬車だ」

「花嫁の馬車がくるよ」

興奮状態で叫ぶ数人の声をきっかけに、沿道の両端に立ち並ぶ人々の熱い視線が一点へと注がれる。

やがてはるか遠くから鐘の音が聞こえ出すと、道の上に行列の先頭が姿を現した。

《ファルカナン》の演奏者の姿だ。

王族の祝賀行事のみに用いられる縦に左右四個ずつ、計八個の金の鐘が並んだ楽器ファルカナンを手にした四人の宮廷奏者が、美しい音を奏でる。

その後から、皇帝旗を掲げた衛兵の行進が続き、次に黒地に金の刺繍を施した礼装に身を包んだ皇帝の近衛騎馬連隊が、美しい式典

用の馬にまたがり壮麗な姿をみせると、人々の間から感嘆のため息がもれた。

美しい気品に満ちた凜々しい青年たちの姿は、一枚の絵のようである。さえあつた。

やがて、六頭だての美しい白馬に引かれた豪華な馬車が遠めに現れるとどよめきと歓声が沸き起こる。

群衆は羨望の視線をすべてジェンフォーデ王家の紋章を金で浮き上がらせた白い馬車一点に向けた。

そして、その中で幸せに満ちた笑顔の皇帝の姿を求め、一斉に身を乗り出し、声をかけ、手を振る。

最初の馬車には、黒い漆黒の髪に黄金の瞳をもつ皇帝フェリエスの横顔が、群衆の視線をくぎづけにした。

彼らが自分たちの王の顔を間近で見ることができるのは、婚儀の前後に行われる祝賀行列の時に限られていた。

フェリエスの乗る馬車には、リンセントース皇太子クランと皇太子妃セラが同乗していた。

二番目の馬車が近づくとつれ、群衆の熱狂はさらに高まり、一段と大きな歓声に包まれる。

人々は、フェリエス皇帝の妃となる美しい異国の姫の姿を一目間近で見ようと競い合うように身を乗り出した。

青い空に向かって投げられた色とりどりの美しい花びらが花吹雪となつて馬車と人々の頭上に降りそそぎ、白亜の馬車を包み込む。

はじめて花嫁の姿を目にした人々の口からは、思わずため息がもれた。

シーラの輝く瑠璃色の長い髪と琥珀色の瞳、白い肌に人形のように整った美しく優しげな顔立ちは、まるで妖精が地上に舞い降りたのではないかと人々を錯覚させるほど、街道を埋め尽くした群衆の心を魅了した。

そしてさらに、明日の結婚式が終わったあとのパレードで見られるだろうフェリエス皇帝とシーラ皇妃の揃った姿を思い浮かべて、

大声で祝辞を叫ぶ者の声であふれ、興奮が熱を帯びるように高まっていく。

「いかがいたしました？」

街道の群衆にほほ笑みかけていたシーラに、正面に座るロマーヌ皇太后が、手をふりながらシーラにだけ聞き取れるほどの低い声で問いかけた。

「その……あまりの歓迎に驚いております……」

馬車の中でシーラは、時折ふと視線を落とす瞬間がありそこを見とがめられたのだ。

だが、その行動が緊張のためのものであると受け取ったロマーヌ皇太后は、満足そうな笑みを口元に浮かべた。

「無理もないでしょうね。ナイアデス皇国の民はよく皇室を敬い、慕っています。ゴラ、セルグ、エルナン、リアド、リンセンテートの諸国もわが国と同盟を結び、さらなる繋がりを強めるための努力は惜しまないのです。他国を侵略する野蛮な西の国々や民とは天地ほどの差がありますよ」と

シーラは、儀礼的にほほ笑みを返しながらロマーヌ皇太后からは見えないように、震える手を儀式用の長い手袋と淡いクリーム色のドレスのシヨールの下に隠した。

皇帝の行列は、翌日の婚儀の為にユク・セルピヌス大聖堂へと向かっていった。

そこで、シーラは二度目の結婚式を挙げるのだ。

リンセンテートの時とは、較べようもないほどの国民の歓迎を受け、誰からも羨まれる豪華で華やかなナイアデス皇国正妃としての輿入れ。

しかし、この結婚式にシーラの祖国ハリア公国の人間は誰一人として出席していなかった。

いや結婚式の案内、そして招待自体を受けていなかったのだ。

かわりにリンセンテートス国の皇太子夫妻がシーラの親族同然に振る舞い、ナイアデス側もそれを当然のこととして受け止めていた。

シーラはロマーヌ皇太后の刺を含んだ言葉にわずかに同意をみせるようにうなずくと、視線を馬車の外に向けた。

そして、好意的に歓声をあげて出迎えてくれる大観衆に、ほほ笑みを浮かべて応えながら、孤独な馬車の中でリンセントースでのつかの間の穏やかな日々を思い返していた。

リンセンテートスでの結婚式から数日後、ナイアデス皇国の皇帝フェリエスにさらわれるようにナイアデスへ向うため、ミゼア砂漠を馬車に乗せられ揺られていたフェリエスとシーラの馬車は突然何者かの襲撃を受けた。

だが、御者に扮していたガーゼフにシーラとアインは救い出され、リンセンテートス領内の古城・ベールinton城にかくまわれる。

シーラはそこで、ガーゼフの言葉通り母国ハリアからの迎えを待ちながら、アインと共に静かで穏やかな日々を過ごしていたのだ。

ところが、ある日突然、前触れもなくフェリエス皇帝からの迎えだと名乗るナイアデス皇国の将校と魔道士たちが現れ、シーラとアインを強引に城から連れ出した。

「あなたには約束どおり、わたしの妃、ナイアデスの正妃となつていただきます」

二年ぶりに再会したフェリエスは、ラシル王との結婚式の後、初夜を過ごすはずの寝室に現れたときと同様、耳を疑うような言葉を繰り返してシーラに告げた。

何故フェリエスがいまだリンセンテートスにいるのか、その表情がひどくやつれて見えるのか、どうして自分に執着するのか、なにも知らないシーラには理解できなかった。

「お言葉の意味がわかりません」

シーラは理由さえ説明しない乱暴な申し出に首を横に振った。

「わたしは、ラシル王と結婚をした身。あなたの国に嫁ぐことなどできません」

だが、フェリエスは何も説明をしないまま、シーラをリンセンテートスから連れ去った。

そして、ナイアデス皇国に連れて来たのだ。

ハリア公国の人間はもとより、リンセンテートスの者もない見

知らぬ異郷の地。

シーラになす術はなにもなかった。

せめてガーゼフがこの事態に気がついて、ミレーゼに知らせて救出してくれることを一縷の希望として託すだけだったが、すべてがあのガーゼフの仕業ではないという理由も考えらなかつた。

ナイアデスに到着したシーラは、ロマーヌ皇太后の居城に身を移され、その監視下におかれた。

そして、結婚式の挙式の日程を告げに訪れたフェリエスに対し、シーラは二度否定の言葉を繰り返したとき、皇帝は初めてシーラの言葉に答えた。

黄金に輝く美しい瞳は彼女をじっと見つめながら自信に満ちたほほ笑みを浮べる。

「王族の婚儀は国同士の結婚と言える、だが、その一方で神々が交わる儀式であることはあなたも当然ご存じのはず。当然そこには、神の言葉を告げるアンナの一族をはじめとする占術士らの存在は不可欠。しかし、覚えておいでだろうか。あなたとラシル王の婚儀の場にアンナの姿はなかった。占術士、魔道士の類の者の姿もだ。当然《祝福の儀》そのものが執り行われてはいない。神よりもたらされる指輪を護持する王の后は、たとえ側妃であろうとも子をなし指輪を守る責務を担うことから、アンナの一族により《祝福の儀》を受け守護妖獣を得る。あなたはあの式で、いつ、ラシル王から守護妖獣を得ましたか？」

やさしい口調とは裏腹に、あの婚儀は正式なものではなかったのだとフェリエスは告げる。

「あの式は、表向きは婚姻のためのもの。しかし、実際にはあなたがラシル王の養女となる契約の儀式だったのです。シーラ姫、あなたはその契約同意書に自らの手で署名をしたのですよ」

シーラはフェリエスの口から語られる言葉に言葉を失う。

結婚式当日のさまざまな出来事が次々と思ひ浮かぶ。

（そんなことはありえないわ。ハリア公国とリンセントースとの

正式な、国同士の婚礼なのだから……)

しかし、アンナの一族と思われる者と出合った記憶はなかった。もちろん、シーラは守護妖獣を得てもいない。

曾祖父の王の時代に指輪を失ったハリアでは、指輪と守護妖獣に關しては書物の上での知識であり、リンセントースに国入りしてからは、『祝福の儀』に關することを誰からも告げられなかったために、フェリエスに指摘されるこの時まで、すっかり失念していたのだ。

結婚式のこととは繰り返し思い出すことはあったのに、守護妖獣に關してはその存在そのものが記憶から抜け落ちていた。

徐々に、その指摘が正しいことに気がついた時、足元がぐらつき、天地が逆転したような錯覚に見舞われ、思わず悲鳴を上げそうになった。

口元を押さえた重ねた両手の指が震える。

もっと冷静であつたならば、シーラはそのことに気がついたはずだった。

だが結婚式の朝、シーラは、自分の乗る馬車が森の中で襲われ命を落としかけた。

危ういところを助けられたものの、その恐怖ですっかり気が動転してしまい、冷静な状態ではいられなかったのだ。

シーラはラシル王との結婚式の間、人形のようにただ指示されるままに歩き、うなずき、行動しただけだった。

目の前に現れては去って行く人々を、絵でも眺めているようにぼんやりと見つめ、儀礼的なほほ笑みを浮かべて見つめていただけだったのだ。

アンナの一族やそれにかわる占術士の不在も、『祝福の儀』が執り行われなかったことも、フェリエスに指摘されるまで気がつきもしなかった。

もっと冷静だったならば、もっと婚礼に際して注意を払っていれば当然気がつくべき事柄だったのだ。

たとえ、リンセントートスの策略にせよ、婚姻の署名の文章にすっかり目をおしていけば、式が終わった時、異変をミレーゼやメイヴに知らせることができれば、ハリア国が動くことはまだ可能だったのだ。

いや、書面は前もってハリア公国側でも厳重に確認を行なっているはずだ。

シーラが署名をするのは、あくまでも形式的なこと。たとえ異議があってもその場で、申し立てすら許されない状況だったはずだ。

そしてもうひとつ、シーラは冷静さを失った原因が、まさに自身にあることを知っていた。

あの時、ノストール皇太子テセウスの存在がシーラの心を大きく揺らしていたのだ。

シーラは、自分たちを暴徒の手から間一髪、救い出してくれたテセウスの馬で送られ、無事結婚式を行なう大聖堂に到着することが出来た。

あの時

シーラは口元にあてた手を、胸元に落としそっと押さえる。

走り続ける馬から落ちないように、テセウスの体にしがみつくようにしてつかまっていた緊張と不安の中、身をすくめていたシーラに、テセウスは温かな眼差しをたたえてほほ笑みかけてくれた。

「そんなに脅えられると、まるで私が花嫁のあなたをさらったみたいだ」

「え？」

シーラは驚いて、テセウスに脅えているわけではないことを、誤解を解こうと、どう言葉にしているかわからなくて何度も首を横に振った。

それを見たテセウスは真面目な表情で、シーラに聞こえるように独り言を口にした。

「それとも、本当にさらっていきこうかな。エーツ山脈の向こうの小国までは誰も追ってこないだろうから」



あまりの唐突な言葉にシーラは目を丸くする。

「でもその前に、花嫁に断られそうだ。『豪華な馬車のない男はだめです』って」

間近にある端正な顔はそう言ったあと、驚くシーラの顔を見て破顔した。

「まあ……」

それが、テセウスの冗談であると知ってシーラも思わず声を上げて笑った。

揺れる馬上で、青ざめたままのシーラの緊張をほぐそうとしての言葉だったのだ。

その後は短い会話をかわしながら、シーラはテセウスの体につかまったまま、胸に頬をあずけ目を閉じた。

しがみついているその体の温かな体温と鼓動、そして触れている体から直接響いてくる低い声に、今まで出会ったこともない不思議な感情が自分の心の中に沸き出すのを知った。

頬が上気し、鼓動が高鳴った。

この道が永遠に続いてくれたならばいいのにと、いつしか願っている自分に気づき戸惑った。

式典を行う大聖堂についてからも、その後の盛大な晩餐会の時もシーラの視線は、気がつけば、ただテセウスの姿だけを追っていた。それが恋だと気づいたのは、ベールントン城に来て、しばらくたってからだだった。

ガーゼフに連れられて二年を過ごしたベールントン城でも、テセウスが現れることがあるかものしれないという現実には起こりえない期待に胸をときめかせ、芽生えたばかりの淡い恋心をあたたため、夢見る日々を過ごしていた。

ガーゼフ以外、訪れる者のほとんどいない心寂しい古城で、アイロンと過ごす日々の中、その想いはシーラを慰める優しい木漏れ日の光のようだった。

今でも目を閉じると、あの馬上でのひと時を、テセウスの広い胸

のあたたかさ遅しさとともに、その誠実な焦茶の瞳をあざやかに思  
い出すことができた。

だからこそ、シーラはその想いが、自分から二重三重に冷静さを  
失わせる結果となったことに激しい衝撃を受けずにはいられなかつ  
た。

「あなたは正式な結婚などとしてはいない。おわかりいただけました  
か」

フェリエスの念を押す言葉に、シーラはぼう然としたまま目の前  
の黄金の瞳を見つめていた。

シーラは、黄金の縁取りで飾られた白く美しい馬車の中から、歓  
声に沸き返る群衆に小さく手をふりながら、結婚式を明日に迎えた  
今となつては、リンセントースでの出来事をすべて忘れなくては  
いけないと思ひ始めていた。

「これからは私が直接、あなたをナイアデス皇妃の名に恥じること  
のないよう教育をします。あなたは私の言葉に従い、立派な男子を  
産んでくれさえすればよいのですよ」

ナイアデスへ来てから、何度となく繰り返されたロマーヌ皇太后  
の言葉にも、シーラはただほほ笑みを浮かべ、うなづくことしかで  
きない。

求められているのは従順な皇太子妃。  
よき皇妃として、子を生み、国民に愛されること。

それはどの国や貴族の家に嫁いでも変わらないことなのだろうと、  
シーラは心を定める。

リンセントースでラシル王の側妃として、敵国の中で非難と中  
傷、あざけりの中で過ごすことを考えれば、ナイアデス皇国の正妃  
としての地位は求めて得られるものではないと、シーラは自分に言

い聞かせる。

だが、同時に宝石をちりばめた豪華な純白の花嫁衣裳に身につける時、シーラの心の奥底に封じようと努力し続けた淡い想いを孤独の中でよみがえらせるに違いなかった。

結婚式の日に出会ったあたたかな木漏れ日の想い。

誰も助け出してくれる者のいない異国の地で、思い浮かんでしま  
う面影。

あの時のように、救い出してくれたらと、起こるはずのない幻を、  
叶うはずのないなにかを望んでいる自分を感じている。

それでもシーラはいま、花嫁となるべく場所へ向う馬車の中で繰  
り返し儚い想いを懸命に封じ込めようとしていた。

自らの意では何も望んではいけない。

それが皇女として生まれた自分の道なのだ。

何度となく自らに言い聞かせながらも、淡い初恋を断ち切らなけ  
ればいけない瞬間が刻一刻と近づくにつれ、シーラは震える体を、  
その手を懸命に押さえつけていた。

決して流してはいけない涙が心の奥底に染み込んでいく痛み能耐  
えながら。

：結婚式を翌日に控えたその夜、ユク・セルピヌス大聖堂の居館の一室ではフェリエスが、皇議院議長のウイルシップ、ロロノア、オルロー、イズナら数名の側近らとともにいた。

そこは結婚式を控えた皇帝の部屋とは、思えないほどのものものしい雰囲気だ。

「ダーナンがカヒローネと協定を結んだというのは、ほぼ確実のようです」

トルク材質の豪華な彫刻が施されている肘あて付の椅子に座り、ゆったりと背もたれに体をあずけているフェリエスは、探索部隊長ロロノアが報告するのを、両手の指を組んで聞いていた。

「その協定が、リンセントートス急襲を可能にしたようです。ですが、どのような条件のもと協定が可能となったのかは、現在のところ皆目検討が付きません。まるで砂嵐の中の向こう側の出来事のように見ることさえ困難かと」

「砂嵐の中の向こう側」という表現は、ナイアデスでもよく「何も見えない」との譬喩として使われる言葉だったが、フェリエスの片方の眉がピクリと動いた。

時折、ロロノアは意識せずに、相手にとっては皮肉となる言葉を使い、抗する言葉を封じてしまうことがあった。

今回の情報収集に関しても、わからないで済むものではなかった。以前のフェリエスであれば、そうした言葉を報告とは認めず、厳しく叱責してきた。

だが、ほぼ二年という年月を砂嵐の中に閉じ込められたフェリエスは、「砂嵐」という言葉を耳にした瞬間、責任を問うべき言葉を呑み込んだ。

「わかった。ダーナンとカヒローネの関係については続けて調査しろ。カヒローネが組んだとなれば、ダーナンがいつまたリンセンテ

「トスに現れてもおかしくはない。入ってくる情勢は逐次知らせてくれ。式の最中であろうと、ほかの者に気づかれなければ構わん」

「はい」

「しばらくは静かにしていると思ったが」

ロロノアの返事に、イズナの声が重なった。

「ダーナンの坊やの眠りは浅いらしいな。わが国きつての精鋭探索査部隊が、砂漠で砂遊びをしていると知ったらさぞかし喜ぶだろうな」

フェリエスが言葉を詰まらせた様子を察知したイズナが、わかりやすい嫌みでロロノアをちらりと見る。

「そうだな。砂で目がやられるなら、海から乗り込めばいいだけだ。今後は『砂嵐』という比喩は禁止するでしょう」

オルローが応じ、冷たい視線で突き刺すように睨みつけると、ロノアは自分の過ちに気がついたのか、はっとしたように蒼ざめた表情を浮かべ、ソファから立ち上がった。

「も、申し訳ございません。陛下、うかつでした……」

フェリエスに頭を下げる。

フェリエスは黙ってうなずくと、ため息を吐いて先を促した。

ロロノアは、自分の失態に唇を噛みながらノストールに関する報告に移った。

「ノストールの災害のほうは、かなり落ち着いたようすです。ですが、港、城や町、川の土堀の修復など、地震後の完全復旧には少なくとも五年は要すると思われます。いまラウ王家は、王族自らが国の村々に出向き直接指示を行なうことさえしている様子。アウシユダール王子が国外訪問をするようなことは、当面は難しい状態であるかと思われます」

「そうか」

フェリエスは、この報告に自然に笑みを浮かべた。

「あとは、アルクメーネ皇太子の到着を待つばかりだが、入国はしたのだろうか？」

フェリエスが、ロロノアを見る。

ロロノが返事をしかけた時、ユクタス將軍の来訪が告げられた。ここ数週間姿を見せていなかった老將軍が姿を現すと、フェリエスとロロノア以外は意外そうな表情をする。

「陛下の命で、アルクメーネ皇太子をエルナン公国まで出迎えに赴いており、ただ今帰還しました。皇太子は、約束通り、一年の留学の件を快諾しておられ、すべて準備も整っております。到着が大変遅れましたことはおわび申し上げます。エルナン公国のカーデイス公王の病が重く、縁戚関係にあたるアルクメーネ殿下とエルナン公国のたつての願いで出立がぎりぎりとなつてしまいました」

「では、エルナンから王族の出席はないのですか？」

オルローが、ユクタス將軍に一礼をする。

エルナン公国はナイアデス皇国の南に下った砂漠と海を有した隣国になる。

ユクタス將軍はオルローの質問にうなずくと、フェリエスに向き直った。

「陛下、それに関しては問題はありません。予定どおり、オルニツク皇太子夫妻も一緒に到着されましたので、リージュ宮にご案内をいたしました。ただし、式が終わり祝宴に顔を出した後、そのまま帰国したいとの申し出を受けております」

「わかった。止むを得ないだろう。了承したと伝えてくれ」

フェリエスは、満足気にうなずきつつも、大きなため息をつき、天井を仰ぐ。

リンセントーロスでの二年の閉鎖された日々から解放された日を思い浮かべる。

砂嵐を止めるために、フェリエスの要請に応じてリンセントーロスを訪れたノストールのアウシユダール王子と再会した日を。

「あの時あなたは、わたしが神に背く行為を行ったならば国には帰れないと告げた。わたしの犯した罪を教えてほしい」

フェリエスはリンセントートス城で、砂嵐終息の感謝を述べるために、まだ回復していなかった病身の体でアウシュダールの部屋をたずねた時に、二年間抱き続けた疑問を口にしたのだ。

そのフェリエスを見て、アウシュダールは大人びた表情に笑みを浮かべながら答えた。

『それはね。ビアンの花嫁を奪ったからだよ』

フェリエスは瞬時、体が凍りつくような気がした。

『リンセントートスの神ビアンの前で誓いを交わした花嫁を、あなたは略奪した。そして、結婚式という偽りの儀式のために、僕らを招いた。雪のエーツ山脈を越え、ビアン眠っている過酷な砂漠を越えさせ、呼び寄せた。シルク・トトウ神の転身人に会いたいのなら、自らがノストールに足を運ばないだけで。人間のこざかしい真似には、眠りを妨げられたビアンも怒っている。そして僕もね。それが、理由だよ』

アウシュダールは、すべてを見通していた。

リンセントートスとナイアデスの密約を。

結婚式が偽りのものであり、それを利用し招待させれば、ノストールは必ず列席する。

ノストールに誕生したシルク・トトウ神の転身人がどのような人物なのかと自分の目で確認しておこうと考えていたことも。

そして、出来るならばナイアデス皇国に従わせようとしていたフェリエスの策謀を、アウシュダールは看過していたのだ。

神を侮った行為。

それが、ビアン神と、シルク・トトウ神の転身人である自分の怒りに触れたとアウシュダールは明言した。

その強烈な光をもつ瞳にじっと見つめられると、フェリエスは自分の中の芯が焼ききられ、消えていきそうな恐怖を感じた。

瞳の放つ力に逆らえなくなり、命じられるままに従いそうになるのだ。

自分がリーフィス神の転身人であるのだと告げられていなければ、

あの時アウシュダールに従う身となっていたかもしれないと、正直なところフェリエスは思っている。

神の転身人がアウシュダールだけではない。

自分にもその力が宿っているのだと知らされていたからこそ、フェリエスはアウシュダールの言葉とあの瞳にあらがうことが出来たのだと思う。

ひよっとするとアウシュダールは、すでにフェリエスの中に眠る転身人の気配を感じ取っていたのかもしれない。

もしも、フェリエスがあのだらから脱出し、国に帰っていたならば、アウシュダールは、フェリエスを疑い、自分以外の転身人が目覚めるのを許そうとはしなかったに違いない。

フェリエスはアウシュダールの目をこまかすためにも、自分が転身人であるというデイルムツドの言葉を、極秘事項として固く伏した。

また、それを知っている部下にも決して他言しないことを誓わせた。

なによりフェリエス自身にまだその自覚がなかった。

当分の間は、アウシュダールに恭順をみせるふりをしながら、ノーストールの地に留まってもらおうと考えたのだ。

その間にフェリエスはリーフィス神としての記憶と力を蘇らせ、アウシュダールに対抗するべき力を得なければいけなかった。

アウシュダールは、いつか必ずナイアデスに対して牙を向ける。それはフェリエスの確信となっていた。

アウシュダールがノーストールを出ることもなく一生を終えるなら、目をつぶるのもかまわなかった。

だが、あの野心を秘めた瞳はいつかフェリエスに向かい、再び牙をむくに違いない。

その前に、すべての局面で慎重に手を打っておかなくてはならなかった。



まず、帰国したフェリエスはノストールにビアン神との仲介を行ってくれたことに感謝を述べる親書とともに、リンセントートスに至る間にかかった経費をすべてナイアデス皇国が負担するむね申し出で、支払った。

対ダーナン戦に関する助勢に対しても、リンセントートスにかわり、ナイアデス側が謝礼金を支払うことも申し出た。

さらに、フェリエスにとって幸いだったのは、テセウス不在の間に、ノストールではカルザキア王が急死し、また大地震に見舞われ大勢の死傷者を出すなどの混乱があったことだった。

そのことが一年以上経過した現在も、国内の安定に心血を注いでいるノストール及び、アウシュダールが他国へ進出する機会を失わせているように思えた。

この機会を逃すことなく、フェリエスは、困窮する新王テセウスに、多額の見舞金と食料を船で届けさせた上で、二回目の食料支援の時に王の親族、兄弟の留学を求めたのだ。

フェリエスは、新王となったテセウスに対し、より強固な絆を深めるためにと、フェリエスの末の妹で十九歳のルディーナとの婚約も考えてもいる。

「テセウスとわが妹ルディーナを結婚させ、男子が生まれさえすれば王位継承権優先順位は移行する。仮に、王位争いが起きれば、あのアウシュダールはどちらにつくだろうな。内側の守りが固い場合は、外からどれだけ責めても崩れないが、中から崩せば案外もろいものだ」

フェリエスの黄金の瞳が獲物を捕らえたように鋭く光る。

まだ覚醒というまではいかないものの、フェリエスの中にも確実な変化は起こり始めている。

自分に対し悪意をもった人間を峻別することが容易になっていた。「アルクメーネ皇太子が留学で過ごす一年の間に、できるだけ自然に野心を吹き込み、国から心を離し、最初の突破口を作ってもらおう」フェリエスはイズナを見る。

「予定通り、イズナにはこれからの一年、アルクメーネ皇太子のよき友人役を努めてもらう。頼んだぞ」

「わかりました。」

悪戯っ子のような視線でイズナはフェリエスに感じる。

そして、

「陛下におかせられましたは、明日からの結婚式を無事終わられ、美しい花嫁を奪われませんよう十分にお気をつけください」

リンセンタートスで、フェリエスが寝室からシーラを連れ出した一件を聞いたイズナが、深いエメラルドグリーンの瞳に楽しげな口調で、からかう。

「十分気をつけるとしよう」

フェリエスも笑顔で応じると、なにやら一人笑っているウイルシップに発言を促した。

「どうした？」

「その、シーラ姫の守護妖獣が楽しみですね」  
ウイルシップが顎にたくわえた豊かな口ひげをなでつけながらにこやかにほほ笑む。

「稀なる姫君、との 先読み ですからな。ローヌ皇太后陛下のご決断には恐れ入りました。まさか、本当にあのハリアからわがナイアデスにお連れ出来るとは」

「ああ」

フェリエスは黄金色の瞳で、じっと見えないものを見るように宙を仰いだ。

デイルムツドは、類稀なる『闇と光に守られし姫』を得たものが大いなる力を得る、と 先読み を行ないました。その姫は、どのような手段を使っても、フェリエス、あなたの妃にしなければなりません。それが、母としての私の務めです。諸国の占術士や魔道士に気づかれてからではことをおこすのが、むずかしくなります。

母ローヌ皇太后の決断が、シーラをフェリエスの手の中に捉えさせた。

「私も楽しみにしている」

力ある言葉に、フェリエスを眩しげにあおぐ、その場の誰もがうなずいていた。

翌日の結婚式は、澄んだ空気と高く晴れ上がった悠久の青空の下、ユク・セルピヌス大聖堂で滞りなく進められていた。

画家たちが半世紀をかけて完成させたという見事な絵画が描かれている高い丸天井と、金を基調とした壁の模様が、巨大なシャンデリアの蝋燭の灯火でより輝き、より幻想的な空間を造りだす。

やがて「祝福の儀」が告げられると、紫色の長衣をまとった宮廷占術士が現れた。

フェリエスの横に並び、既に婚姻の儀を終えたシーラは、司祭と入れ替わりに現れた宮廷占術士から一人だけ前に進むことを求められ、それに応じた。

「皇妃シーラ。そなたにフロイの名を授けよう。今日、この日、この時、この瞬間よりそなたはナイアデス皇国皇帝フェリエス・ジェンフォードの妻であり、皇妃であり、ナイアデス皇国の母、シーラ・フロイ・ジェンフォードとなる。聖なるナイアデス皇国の守護神ユクの名の下に《祝福》を授ける」

占術士の手にした小さな《ファルカナン》の音が鈴のように美しく響く。

「これより祝福の儀」

シャン、という音が続けざまに聖堂のいたるところから鳴り響く。その《ファルカナン》の音がシーラを取り巻く空間を変化させていった。

美しい大聖堂の輝きが遠のき、周囲が闇に覆われていく。

「大丈夫」

驚いて周囲を見回すシーラの腰に手が回され、見るといつの間にか横にフェリエスの姿があった。

そして、皇太后ロマーヌ、フェリエスの末妹ルジーナ皇女、先王オリシエの弟ライサー大公とウエラー大公の四人が闇の中に浮かび

上がり、シーラとフェリエスの目の前に立ち、その場所だけが光を  
発していた。

「皇帝フェリエス陛下」

どこからともなく聞こえてくる占術士の声に、フェリエスがうな  
ずき、自分の守護妖獣に向かい告げた。

「わが守護妖獣ランドールよ。聖なる儀式に命じる。我がユク神よ  
り受け継ぎし聖なる指輪ライヴの名の下に、わが花嫁の守護者を導け」

『御意』

低い声が響き渡ったかと思うと、シーラは突如として視界いつぱ  
いに現れた巨大な白い竜に目を見張った。

その白竜は人間の三倍以上の体長で、二本の角と背びれは金色に  
輝いている。

すべての者を見下ろすような白竜は、その場の一人一人を見つめ  
ながら、次々と守護妖獣の名を呼びはじめた。

『ロマーヌ皇太后に従いしヤーナ、皇女ルジーナに従いしリユート  
ン、大公ライサーに従いしゾマ、大公ウエラーに従いしミロガ。《  
ラーヴの指輪》の守護の御為に、シーラ・フロイ・ジェンフォーデ  
を王妃と認める誓いをたて、新たな守護者を招く道を開き、正当  
なる守護者であることを認めよ』

名を呼ばれた守護妖獣はそれぞれの主の背後にその姿を現し、誓  
いの言葉を発していく。

シーラはその現実離れした光景と、はじめてみる異形の姿の妖獣  
たちに圧倒された。

そして、まるでその情景を見知っているように占術士の声が響く。  
「我らが暁の神ユクよ。《ラーヴの指輪》よ。新たな守護者の誕  
生を導き、わが主の王妃、闇の神エボルに庇護されしシーラ・フロ  
イ・ジェンフォーデの前に降り立ちたまえ！」

シーラは、エボル神の名が告げられたことに違和感を覚えた。だ  
が、占術士の声に続き、守護妖獣たちが口々に咆哮を放ち、シーラ  
はそれを口にするにはできない。

『《ラーヴの指輪》。ユク神の御名のもと捧げられし我らが誓いの絆よ』

『ナイアデス皇国皇帝の皇妃となりしシーラ・フロイ・ジェンフォードに、《ラーヴの指輪》の守護者を降りたたせたまえ！』

鳴り響く声は、振動し空気を震えさせた。

すると、まるでその咆哮に呼応するかのようにはるか天空からまばゆいほどの黄金の光が降り注ぎ、シーラとフェリエスを包みこんだ。

光りはさらに輝きを増し、二人を光の壁で包み込んでいく。

やがて洪水のように満ちはじめた光の中で体が上昇していく。

目の前に立つフェリエスが、シーラの手をとった。

「シーラ・フロイ・ジェンフォード。ナイアデスを守護せし《ラーヴの指輪》に誓い、その皇帝に口づけを捧げよ」

宮廷占術士の声がシーラに命じる。

光の輝きと守護妖獣たちとロマーヌ皇太后らに見守られる中、シーラは戸惑う間もないまま、フェリエスの手に引き寄せられ、その唇に口づけをした。

その瞬間、シーラとフェリエスを包んでいた光の壁が弾け飛び、幾筋もの閃光が弧を描いて彼方へ散って行った。

シーラはあまりのまぶしさに目を閉じてたが、異変を感じとってそつとまぶたをあけた。

「君の……守護妖獣だ」

フェリエスの声に促される前から、なぜだかシーラはそこにいるものを知っていた。

翼のある茶色い毛をもつ子犬が目の前にいた。

「まあ……」

シーラが膝をおつて、その子犬に手を差し出すと、守護妖獣はその瞳をシーラに注ぐ。

『ハティとお呼びください』

守護妖獣に畏怖心を強く抱いていたシーラの心がほどけるように、

ハティを受け入れていた。

シーラが思わず抱き上げたハティを、ロマーヌ皇太后らが固い表情で見つめていた。

その様子に、シーラはあわてて横に立つフェリエスに視線を向ける。

しかし、そのフェリエスの黄金の瞳もまた大きく見開かれハティの額を見つめていた。

「瑞獣だ」

フェリエスは驚いたようにつぶやいた。

ハティの額の中央には、長い毛に覆われるようにエメラルド・グリーン  
の宝石が、体の一部として存在していたのだ。

夜になり、宮殿の大広間では、千人近い人々が集う大舞踏会が行われていた。

ここにはナイアデス皇国と親交のある多くの各国の王侯族らがその婚姻を祝うために訪れ、あふれていた。

控えの間や従者の間では、その人々に随行してきたさらに大勢の従者たちが、祝いにふるまわれる特別な酒や料理を求めてひしめき合っていた。

ナイアデス皇国では、これから数千人もの内外の来賓貴族らが祝いの挨拶に訪れることもあり、一カ月近くかけて結婚式の行事が行われる。

第一日目の結婚式に招かれるのは、同盟国をはじめ親交のある諸国の王侯族など、限られた者だけだった。

アルクメーネは、そこでナイアデスまで同行して来たエルナン公国オルニツク皇太子夫妻と別れを惜しんでいた。

「陛下の身に万が一のことがあれば必ず、ご一報ください。私にとって大切なお爺様です」

深い碧色の瞳と、金色のくせのない肩まで伸びた髪をした凜とした表情をたたえる美しい青年は、母方の伯父にあたるオルニツクにそう言いうと、残念そうに瞳を伏せた。

「もちろんだ」

オルニツクも、末の妹ラマイネによく似た美しい面差しのあるアルクメーネをいとおしげに見つめながら、沈んだ声で応えた。

エルナン公国のカーデイス公王が病床の身であることは、エルナン公国に立ち寄り、滞在期間を延ばしてまで何度も見舞いを重ねたアルクメーネにも、充分わかつている。

初めて対面した祖父は、アルクメーネの見舞いに涙を流して喜び、ナイアデス皇国から迎えに来たユクタス將軍を待たせ続け、ついに



は結婚式にぎりぎり間に合う期日まで、その身を引き留めたほどだった。

「もつとも、父に万が一のことがあっても、私はまだ用無しだがな」  
四十歳半ばを過ぎたオルニツク皇太子は、横に立つ妻のジリアン妃に苦笑いを向けた。

エルナン公国セリア家の直系はジーナ公妃であり、カーデイス公王が亡き後は女王の世となることは国民も熟知している。

「それより」

オルニツクは妻に周囲へ注意を配るように目で合図をしながら、世間話をするような笑顔でアルクメーネに語りかけた。

アルクメーネは、身分を伏せている。エルナン公国王族遠縁の子息として留学することになっている。

「ナイアデスにいる間、君の側に連絡役を用意した。いざと言うときはすぐに私に連絡をしなさい。それから、テセウスとアマリエの件だが」

「切り出すのが遅くなってしまい。大変ご迷惑をおかけしました」  
アルクメーネはそのことに話題が移ると、申し訳なさそうに頭を下げた。

実はアルクメーネが、母の祖国エルナン公国へ立ち寄ったのには、兄テセウスと婚約を交わしているアマリアとの婚約解消の話をおこなうためでもあった。

だが、エルナンに着いてカーデイス王重病の報に触れ、見舞いに出向いているうちになかなか切り出すことが出来ずに、出立の挨拶の時にやっと祖母であるジーナ公妃に、テセウスからの書状とその理由を申し出ることが出来たのだ。

ふたりの婚約は、テセウスが十歳、アマリエが三歳の時に決められたものだが、お互いの面識はまだないままだった。

アマリエはジーナ公妃の兄の娘で、十四歳になったばかり。

「実は」

アルクメーネは、アマリエとの初対面の出来事を思い出しながら、

ややためらいとともに堅い口調でカーデイスを見た。

「あのようなお話しをおもちした後で正直気が引けるのですが、私もやはり父の子だったと思ひ知らされることがありまして、若き日の父に習おうかと考えているのですが。もちろん簡単には行かないことは承知しております。ですが……伯父上のお考えをお聞きさせてはいただけないでしょうか」

その情熱的な光を帯びた碧い瞳に、カーデイスはふと眉をひそめた。

だが次の瞬間、自らがアルクメーネに語り聞かせたカルザキア王の話を思い出し「おお」と声を上げ、顔を輝かせた。

ジリアン公妃も驚いたように目を大きくして、嬉しそうにアルクメーネを見上げる。

オルニツクが語ったのは、今から三十七年前の話だった。

ナイアデス皇国オリシエ王の結婚式に父王の名代として出席するために、当時十七歳だった青年は船を乗り継ぎエルナン公国に立ち寄った。

しかし、悪天候に見舞われた船旅の疲れから体調をくずし、青年は挨拶に訪れた王宮の大階段で倒れてしまったのだ。

その時、それを目にした幼い王女が、夢中で階段を駆け降りて異国の青年に寄りそい、そばでうるたえている従者や女官らに次々と指示を出して客室に運び、薬師を呼び、介抱をした。

小さな王女は異国の青年が目を覚ますまで、片時もそばから離れようとせず両親である公王夫妻を困らせた。

『だって、よその国で病気になってしまって、お父様もお母様もいらっしやらないのですもの。きつと目が覚めて誰もいなかったら、寂しいと思いますもの』

涙を浮かべて懇願する末娘に両親は折れるしかなかった。

高熱がおさまり、若者が目を覚ましたのは、倒れてから三日目の朝だった。

明け方に目を覚ました青年は、自分の寝台のそばに、大きな長椅子を寝台にしてすやすやと眠っている美しい少女の姿を目にする。少女は、青年がナイアデスへ向けて旅立つ時、泣きはらした真っ赤な目に精一杯の笑顔をつくって見送った。

やがて、結婚式の帰りに再びエルナンに立ち寄った青年は、その優しい心をもつ美しい少女に小さな約束をしたのだ。

「君が十四歳になったら、迎えに来てもいいかな」と。

それが、当時十歳のラマイネ姫と十七歳のカルザキア皇太子の馴れ初めだった。

四年後、カルザキア皇太子とラマイネ公女は結婚式を挙げる。

オルニツク皇太子が話したのは、アルクメーネの知らない両親の出会いだった。

父と母が恋をした相手と結婚をしたなどは、まったく想像さえしていなかった。

海洋国同士のつながりを持つため決められた結婚だと信じ、疑うこともなかった。

アルクメーネは、カルザキア王に習うと言った。

その言葉の意味に、オルニツク皇太子は当時を思い出しながら深々とうなづく。

「それで、じゃじゃ馬との約束は？」

オルニツクのおどけた口調に、アルクメーネは微かに頬を上気させながら、長い睫を伏せる。

思い出すのは、初めて会った日のアマリエの姿だった。

エルナン公国の港に着いたアルクメーネは、船から降り立つや否や「カーデイス王重病」の知らせを、栗毛の馬に騎乗した黒髪の娘から知らされた。

最初は、噂に聞く女性貴族部隊かと勘違いをしたのだが、娘はほとんど強引にアルクメーネを、もう一騎の白い馬に乗るようにせかす王宮まで走り出した。

黒い美しい瞳と、人形のように白い肌、腰まで伸びたくせのある黒髪が印象的な娘だった。

しかし、その娘が兄の婚約相手だとは気がつきもしなかった。

一年に一度ノストールに届くアマリエの肖像画はよく知っていたが、髪を結び上げ着飾った人形のように表情のない美しい娘と、自由な風のように馬を操り駆け巡る生き生きとした表情を見せる娘とはまるで別人だった。

二度目に会ったとき、アマリエは初対面とは人が変わったように、アルクメーネと視線が会うと逃げるように姿を消した。

そして三度目、ナイアデスに旅立つ前日、カーディス公王の見舞いに向かう途中のアルクメーネを呼び止め、思い詰めた表情で婚約者であるテセウスのことをたずねに現れたのだ。

アルクメーネは、婚約解消の件を本人に直接伝えることはしなかったが、その美しい黒い瞳がテセウスの横に並ぶべきなのだと思いつつも、婚約解消を知らされたときにこの娘がどれほど悲しむだろうと思うと、すまない気持ちでいっぱいになった。

アルクメーネは、テセウスのことから話題をそらすと、アマリエに微笑みかけた。

「わたしは明日出立します。次に会うときは、また馬で迎えに来てもらおうかな。女性騎馬隊長殿」

するとアマリエの目が驚いたように大きく見開かれ、その瞳が涙で潤みはじめた。

「冗談です。その……ちょっと言葉が過ぎました」

突然の反応にアルクメーネがうろたえていると、アマリエは一通の封書押し付けるように渡し、ドレスの裾をひるがえして走り去ってしまったのだ。

その夜、アルクメーネは、アマリエの辛そうな表情と涙をためた黒い瞳が脳裏に焼き付き、なかなか眠ることができなかった。

封筒の中には、馬のたてがみで編んだトークといわれる栗色の紐が入っていた。

ナイアデスに旅立つ日、見送りの人々の中にアマリエの姿はなかったが、やがて馬車が国境が近づいたとき、小高い丘の上に馬に乗る黒髪の乙女の姿があるのにアルクメーネは気がついた。

乗っていたのがナイアデス皇国の馬車でなければ、無理にでも止めて声をかけたかった。

その時、アルクメーネはアマリエと自分の間に互いを意識する気持ちが生まれていたことに気づいたのだ。

アルクメーネは真つすぐにオルニツクの瞳を見つめ、帯の間からアマリエから渡されたトークを取り出して見せた。

オルニツク皇太子夫妻は、トークを見たあと、互いの顔を見つめた。

「本人には、まだなにも話してはいません。が、若き日の父にならないナイアデスからノストールに帰国する時、正式に申し出たいと考えております。ですから……」

「わかった。あとのことは私にまかせておきなさい」

オルニツク皇太子とジリアン妃は、思いやりに満ちた表情でアルクメーネを見る。

ノストール国王となったテセウスが、アマリエとの婚約解消を申し出たと聞いたときは、亡きカルザキア王とラマイネ妃の不仲説がエルナン公国にも聞こえていたこともあり、シルク・トトウ神の転身人を得たノストールがエルナン公国を軽視しはじめたのではないかと考えていたのだ。

特に、テセウスの婚約解消の理由が、当面の間、地震後の国の復旧のために心血を注がねばいけないこと。今は経済的にも、精神的にもその余裕がないこと。また、これ以上結婚を延ばすことはアマリエに対して非礼に値すること等、エルナンにとっては釈然としない理由が並べられ、怒りを持つ前に困惑が先立っていた。

しかし、アルクメーネとアマリエが結婚をすとなれば、王妃にはなれなくとも、ラウ王家との絆がある限り、ノストールとエルナ

ンの絆は途切れることがない。

それは、海の航海で海賊から襲われる危険が多少なりとも減少する可能性をもつことを意味した。

ノストールと、ニユウズ海洋の海賊間での協定が昔のこととはいえ、ノストール王国とエルナン公国の旗を半分づつ折り込んだ海上船旗を掲げた船が、海賊に出会いながら無事に助かったという例は現実にあるのだ。

ノストールは海に強いとのエルナンの評価は、徹してかわることがなかった。

「あとは君が、この一年の間、ナイアデスの美女にほだされないことを祈るとしよう」

「そのトークは、想い人に渡すお守りなのよ。女性が言葉に出来ない想いを自分の愛馬に語りかけながら、そのたてがみを譲ってもらい心を込めて編み込むののですよ」

「そういえば、ラマイネが婚約中に自分の馬がなかったので、私の馬を強引に自分の馬に欲しいとダダをこねたことを思い出すよ」

オルニツクは、当時を思い出しながらくすくすと笑う。

「私は嫌だと断ったのだが、外出先から戻ったある日、私の愛馬のたてがみがトークだらけになっていてね。根負けして譲るはめになったんだ」

「まあ、その話は私も初耳ですわ」

声をひそめて笑いあう二人を見ながら、アルクメーネは笑うことのなくなつた母を思い浮かべる。

いつも物静かな母と、情熱的に想いを貫こうとする幼い少女が別人のようだった。

(いや、以前はもつと明るくされていたこともあった。あれは……)  
母が楽しそうに微笑んでいる時は、必ず誰かがそばにいた。

「危うくテセウス王と后をめぐつて仲たがいをするとところだったな」  
オルニツクから肩をたたかれ、アルクメーネは我に返る。

しばらくするとオルニツク皇太子夫妻は、ナイアデス皇国を去り

エルナン公国に帰っていった。

大広間で別れを告げて去っていくオルニツク皇太子夫妻の後ろ姿を見送っていたアルクメーネは、人込みの中から背の高い黒髪の男が自分に向かって近づいて来るのに気がついた。

男は、リュタニー産の金色に輝くプラナ酒が注がれたグラスを二つ手にもち、アルクメーネの前に来ると片方のグラスを差し出した。「ナイアデス皇国陸軍大将イズナ・マイリージアです。長旅でお疲れではないですか？」

人懐こそうな深い緑色の瞳が、アルクメーネを見つめる。

右目が隠れる長い前髪と、後ろでひとつに束ねられた黒髪。黒地に金の縁取りの礼装に身を包んだ自分より年上の男からグラスを受け取ると、アルクメーネは静かにほほ笑んだ。

「さすがに王の中の王とうたわれる品格に満ちたフェリエス皇帝の姿と、美しき皇妃にお目にかかれて喜んでいきます。わが父も、オリシエ王の結婚式に参列したと聞いております。そこに今わたしが立っている……感慨深いものを感じておりました」

アルクメーネの落ち着いた物腰に、イズナは口元に笑みをつくり、うなずく。

表面的には、フェリエスがアウシュダールに膝を屈した形となっているだけに、どのような態度で望んでくるのか関心が大きいにあった。

アウシュダールという転身人を盾に、ナイアデスでも我が物顔して歩くのか。

それとも、表面上はおとなしいそぶりをしつつ、情報収集に努めるのか。

または、自分の身を人質同然の立場と悟り、恭順に徹するのか。

だが、イズナが見る限り、アルクメーネという人間は、そのどれにもあてはまりそうになかった。



一見、女性のような美しい容姿をもつ皇太子は、王が亡くなり皇太子テセウスが不在だった空白の半年以上を、すべて代行したとも聞いている。それだけに、あなどることは決して出来ない。

イズナは、敵国の中に身を置く「留学」を承諾し、限られた従者だけを連れて来た皇太子の警護を務めることもあり、その人となりやだれよりも早く知らねばならなかった。

アルクメーネの身分は、留学の間エルナン公国夫妻の遠縁の子息ということになる。

ノストールの皇太子の存在を知れば、シルク・トトウ神の転身人と関わりを望む者が大物小物かまわずアルクメーネに近寄ってくるのは火を見るより明らかだったからだ。

「殿下」

イズナは声をひそめ、ささやく。

「ご留学中はどのようにお呼び致しましょうか」

「アルクメーネと、そのままに。わたしもあなたをイズナと呼ぶことにしましょう」

透きとおるような笑みに、イズナは調子が狂う。

身分の違う自分の問いかけにさえ、ていねいな言葉で答える王族などイズナは出会ったことがなかった。

ラウ王家四兄弟のうちテセウスとアウシュダールは知っている。

テセウスは一見物静かだが、王としての資質を持ち合わせた人物だと感じた。

アウシュダールは、子供とは思えない人智を越えた存在感を漂わせていた。

彼らと比較すると、アルクメーネは女性的で繊細な雰囲気や漂わせている。

けれど、それはあくまで外面的な部分にすぎない。事実ナイアデス皇国の威信を誇り列強に力を示す盛大な結婚式やその空気にもまれる様子もなく、決して強がっているわけもなく、自然体で自分の場所を作り出しているのだ。

隣国の諸国の王らは、この婚礼に穏やかならぬ複雑な思いを内心に秘めながら、決して顔には出さずに緊張感に笑顔を貼り付けている。

ハリアの王女をリンセントースから奪い取り、ハリアに口を出させずに皇妃に迎えたことは、それだけの代償を払ってでも得たいものがシーラにあるのではないかと当然のように憶測を呼んだ。

裏でハリアと密約が結ばれているのではないか、リンセントースはナイアデスの属国に陥ったのか等々。

清楚で美しい妃ではあるが、決して類稀なる美女ではないことを自身の目で確かめては、不服気に首をひねる姿をイズナは鼻で笑いながら横目で見ていた。

気がつけば、アルクメーネに向けられる女性の視線が増えており、美しい貴公子の正体に関心が集まり出している様子だった。

フェリエスとは、違った意味で、華があり人を魅きつけるものをもっているようだった。

生まれながらの王族というものはこういうものなのかとイズナは思う。

アルクメーネと肩を並べたまま、舞踏に興じる男女を眺めるイズナの目に、オルローとリンドの姿が目に入る。

が、それを無視して、アルクメーネと踊りたがっているだろう令嬢を探す。

今日は、諸国の王族を招待している舞踏会であるため、国内からは側近中の側近の貴族しか招かれていない。

今後のナイアデス皇国での生活にあたり、紹介をしておく必要があった。

特に、ここにいる令嬢たちとはぜひとも親密になる縁を作らせておきたかったのだ。

だが、イズナの申し出にアルクメーネはそれをやんわりと辞退した。

「踊りも音楽も、服装も容姿も、いろいろ違うものだ」と感心してい

ます。恥をかかない程度にこれからいろいろ学びたいので、今日は見学に留めましょう」

イズナはアルクメーネの海のように静かな横顔を見ながら、奇妙な胸騒ぎを覚えた。

なぜかこの出会いが自分の足場を危うくするものになるような気が、一瞬だが感じたのだ。

きっと、この不安はアルクメーネの背後にいるアウシユダールの存在にある、そんな気がしてあの転身人の姿を思い浮かべる。

あの闇夜にかいま見た忘れることの出来ない妖しい笑み。

この不安感は、警鐘なのだとイズナは自らに言い聞かせ、アルクメーネから視線をそらせた。

一方、アルクメーネはオルニツク皇太子が去った今、文字通り自分が孤立した現実を受け入れていた。

これからすべきことは、兄テセウスの立場を有利にすること。そう、アルクメーネは改めて自分自身に言い聞かせる。

リンセンテートスからノストールに帰国したテセウスは、以前の朗らかでよく笑う穏やかな兄とは別人のように、思い詰めた堅い表情しか見せなくなっていた。

「まるで、父上が乗り移られてしまったようだ」

クロトの指摘に、アルクメーネもそれが的を得ていることに気がつく。

確かに、リンセンテートスへ行っている間に父王が亡くなり、テセウスたちの帰国直前にノストールに大地震が起き、大量の死傷者が出る大惨事があったのだから、思い詰めるなというほうが無理ではあるが、テセウスたちは凱旋をしたのだ。

リンセンテートスでシルク・トトウ神としてのアウシユダールの力を行使し、二年も続いた砂嵐を止め、リンセンテートスをあの無敗のダーナン帝国から救ったのだ。

その出来事は、瞬く間に、ラーサイル大陸の諸国を駆け抜け、衝

撃を与えた。

長く閉じ込められていたナイアデス皇帝フェリエスを助け、帰郷を助成した。

さらにノストール王の後継の証しである《アルディナの指輪》を得て、瑞獣の咆哮を轟かせることが出来たのだ。

眠り続けていた母ラマイネも、不思議なことに父の死を知ったようにあの日、長い眠りから目覚めた。

自然災害は、王家と民が力を合わせて乗り越えて来た。

アウシユダルが帰国してからは、その神の力でノストールに恩恵を与え、天候もこの一年穏やかで状況は確実に好転の方向にあった。

加えて、ナイアデス皇国からは謝礼を含めて多額の見舞金が出せられ、国力が衰える心配はなかった。

だが、テセウスの表情は日増しに厳しくなっていく。

常に張り詰めたような緊張感を全身に漂わせ、ある日意を決したようにアルクメーネを呼び出し、こう告げたのだ。

「国のすべてが落ち着いたら、出来るだけ早い時期に、わたしは、わたしのもっているすべての権利をおまえに渡す」

「兄上？」

アルクメーネは、自分の耳を疑った。

だが、テセウスから放たれる殺気とさえいえるような鋭い空気に、その言葉が本気だと直感する。

しかし、だからといってアルクメーネは、それを黙って受け入れるわけにはいかなかった。

「どういうことですか？ 納得がいきません。わたしたち長兄以外の弟は、王となる、また王である兄を補佐するために生まれて来るのです。国を統治するのは兄上です。王が王妃を娶り、世継ぎを生む。わたしたちはその流れを守り、途絶えぬために、補佐し、守って行く。それがラウ王家の王訓書にも定められた道筋ではないですか」

長兄が、王訓書を理解出来ない病や、不慮の死で亡くなることがない限り、正当な王権は長兄にあると王訓書には明記されていた。

ラウ王家は、この言葉に従い、受け継がれて来ているのだ。

たとえ資質が劣っている者が王でも、兄弟が補佐をする。過去に揉め事がなかったかと言えば嘘になるが、大筋では王訓書は守られてきた。

そして、目の前にいる兄は間違いなく、王としての資格を兼ね備えていた。

「だが、わたしにはその資格がない」

アルクメーネの思いをまるで見透かすように、そして自分自身に怒りをぶつけるようにテセウスは、背を向けた。

その肩が小刻みに震えているのに目をとめ、アルクメーネは悲しくいたたまれない気持ちになった。

いつもそうなのだ。

いつも父や兄は苦悩を自分一人で背負い込み、苦悩や悲しみをその厳しい表情という仮面に置き換えて、決してアルクメーネに明かそうとはしなかった。

「理由を教えてくださいただけなければ、そのような話しは承服しかねます」

アルクメーネは、兄が苦悩の理由を話してくれることを願いながら訴えた。

「教えてください。兄上が抱えられている問題を。王位継承にかかわるほどの重大なことがあるのなら、わたしにも知る権利があります」

テセウスがゆっくりと振り返る。

その顔が、父カルザキア王の厳しい顔に重なり、アルクメーネはただならぬ秘密がそこにあることを改めて感じる。

「もう少しだけ待ってください」

テセウスは自嘲するように悲しげに笑った。

「本当なら、わたしは今この瞬間でさえ王であることすら許されな

い身だ。けれど、いま逃げ出すことは許されない。課せられた責務を果たさなければならぬ」

テセウスはそこまで言っただけで声を詰まらせた。

リンセンテートの小さな森でエデイスと再会し、自分がエーツ山脈でアウシユダールと同じ年の少年たちを遭難させたまま置き去りにしたという、失っていた重大な記憶を思い出したテセウスは、ノストールに帰国し、さらに追い打ちをかけられるような出来事に直面した。

ノストール全土へ波及するような大地震が起き、国中で被害がでたのだ。

その被害の報告書である領地別、村別の死亡者名簿を手にしたテセウスは、愕然とした。

衝撃のあまり、体中の血液が凍りつくような悪寒に襲われた。

そこには、山で行方不明になったはずの少年たちや、その家族の名が列挙されていたのだ。

だれも、リンセンテートへ子供達が行ったことなど覚えていなかった。

アルクメーネも、クロトも、アウシユダールも、シグ二將軍も、兵たちも、少年らの親族ですら誰も覚えていないのだ。

それをアルクメーネに話して、信じてもらえるとは思えなかった。

テセウスは、自分の心臓に深く突き刺さった大罪と言う名の幾百もの矢を引き抜くことをせずに、一生その痛みに向き合う道を選んだ。

《アルディナの指輪》が片方しかない理由も、指輪が王としての資格の欠如を指摘していたからだと思えば納得も出来た。

テセウスは、エデイスの「逃げてはいけない」という言葉を思い出しながら、決してこの苦しみから逃げ出すことだけはすまいと言いつつ聞かせ、そしてようやく、自分がすべきことを見出したのだ。

国王の地位を、財産を、資格を、すべてをアルクメーネに譲り渡

すことだった。

そのためにはもう片方の銀色の《アルディナの指輪》を見つけださなくてはならなかった。

唯一の手掛かりである砂漠で出会った少女を捜し出さなくてはならなかった。

「アルクメーネ、時が来たら必ず理由を話す。だが、覚えていてくれ、わたしはこの先、結婚はしない。子もつくらない。そして、王の座を退いて後は、民にこの身を捧げ尽くし続ける。それがわたしに出来る許された償いだからだ」

衝撃的な宣言に、アルクメーネは言葉を失った。

テセウスをここまで追い詰めた理由を、兄の背負う巨大な闇を、アルクメーネは知りたかった。そして、その少しでも自分が背負いたいと願った。

だから、ナイアデス皇国留学の話がもちこまれ、アルクメーネがクロトのいずれかをという話になったとき、進んでその話を受けたのだ。

「国造りを学ぶよい機会だと思って、一年間辛抱してくれ。アウシユダールが、ナイアデスに常に意識を向け見張り続け、危うい事態になりそうな時には、自らが兵を率いて出迎えに行くと言っている。すまない」

一切を託すその理由を、アルクメーネは知らなくてはいけないと思っただ。

ノストールの王はテセウスが存在する限りテセウスでなければならぬのだから。

カルザキア王が逝去し、皇太子であるテセウスが不在のときも、兄とノストールのために、アルクメーネは力の限りを尽くして国を支え、留守を守り続けた。

そして、今再び自分が、ナイアデス皇国で培えることがあるならば、どのような妨害や苦勞があろうとも、それを得て帰ろうと、アルクメーネは心中深く決していた。





光のない闇の中、氷のように研ぎ澄まされた美しさをもつ青年は存在していた。

やがて、闇の中に光の線が浮き上がり、青年の姿をかたどりはじめる。

その線が冷たい光を帯びて輝き一枚の光の壁となる。

青年はその姿から抜け出し、再び闇の中に身を置くと、光の中に映し出され情景をくすくすと笑いながら眺めていた。

彼は、やがてある名を呼んだ。

「イルアド」

美しい主に名を呼ばれた全身黒装束で身を覆った男が、少し距離をおいた闇の中に姿を現れた。

「上出来だよ」

血のように紅い唇が笑みを形づくり、闇のように深みを帯びた美しい碧い瞳が怪しげに輝く。

「すべてはわたしの手の中にある。わたしはここにいるのに、いまだ誰もそのことに気づく者はいない」

開かれていた白い指が闇の中で、そつとやわらかに握り締められていく。

次にその指が開かれた手の平の中には、いくつもの指輪があった。色とりどりの光を放ち輝いている指輪は、リングだけのもの、石がはめ込まれているものなど形状は様々だった。

だが、ただの指輪でないことは二人はよく知っている。

「おのれの目覚めを、おのれの力の増幅を、そして、おのれが得た者を。すべてを自分の力だとして考えない浅はかで哀れな者たち。だが、それはいたしかたのないこと」

青年の瞳が哀れむように、指輪を見つめ、再びその指が閉じられ、次に開いたときは指輪は消えていた。

彼はその手から視線を離し、闇の中に視線をさまよわせる。

そして、ふと光の壁の中に何かを見つけたのか、妖しくも楽しげな表情が口元に浮かびあがってくる。

「次は、あれに力を与えておこう」

光の中には、フェリエス、グリトニル、そしてその他の王族の人物の顔が映し出され、彼はその中の二人を指差した。

「ですが……」

イルアドの息を飲む声に、若者は優しさに満ちた瞳を注ぐ。

「より強く、より高みへ引き上げねば、面白くないだろう。己が力に酔いしれ、過信し、高みに上ればのぼるほど、すべてが幻と気づいた者の落ち行く姿、絶望の悲鳴は、魅力的だ。苦しみ、嘆き、もがく姿」

恋焦がれるような甘いため息が唇からこぼれる。

「流れはすでに ユナセプラ に向かつて突き進んでいる。この千載一遇の機会をわたしがどれほど待ち望んだことか。 ユナセプラ の到来を知っている者のみが、すべてを制することができる」

ユナセプラ と、その言葉を発するたびに彼は胸元に手を当て、瞼を閉じた。

「そして、わたしの手で美しい世界が生み出される」

青年は夢見る者のように恍惚の表情を浮かべた。

「一人には私に近づく力を、そしてもう一人にはエボルの涙を」

「では……指輪を」

「面白だろう」

くすくすと笑いながら、青年は魅力的な声でイルアドにささやく。

「同じ世界の住人というのに、エボルは認めないから」

わずかにその声に憂いが含まれる。

しかし、ゆっくりと首を横に振ると、光の中に浮かび上がった次の顔を静かに見据えた。

「イルアド。あれには、まだ動いてもらわねばならない。力を与え、さらに畏怖されるべき存在に導く」

見守るような眼差しがわずかによぎる。

「あれの力を極限まで高めてやろう。すべてを忘れ去った愚かな生き物に」

「御意」

イルアドは主の示唆するところを悟り、その彫像のような美しい横顔に深々と身を屈した。

陽がまだ昇らないダーナン帝国の早朝。

リレイン城の皇帝の居館に呼び出されたジュゼールが、ロデイの寝室を訪れた。

「ジュゼール、ついに使者がきたぞ」

寝台の上で半身を起こしていたロデイが開口一番そう告げた。

軍師のカラギや宰相のグラハイドらの姿がまだの見えないことから、どうやら自分が一番乗りだったらしいことに気がつく。

「では、カヒーネへ行かれるのですか？」

ジュゼールはロデイの言葉から、カヒーネからの親書が届いたことを知る。

「ああ。約束を違えることはできない」

憂いを秘めた碧い瞳が、覚悟を決めたようにジュゼールにほほ笑みかける。

「一年も待たせてしまったからな」

「ですが、その間にあの国では、王は三人も変わっております」

「言うな。カヒーネにはわたしの代わりに残っている者たちも多い。代が変わるうとも、その間、手厚く遇してくれていのもまた事実」

ジュゼールは、自分が言おうとした言葉をロデイに遮られて、視線を足元の毛の長い絨毯の上に落とした。

一年前、リンセントースへ進攻しようとしたダーナンは、攻めべき国を目の前に、突然の豪雨と川の氾濫に襲われ、戦う前に多くの兵を失い撤退を余儀なくされた。

最前線にいたロデイは、乗っていた馬が流木に巻き込まれて沈み、自身も豪雨の中で濁流に呑み込まれる寸前、ジュゼールによって間髪救われた。

だがその時に、両足を骨折するという大怪我を負ったのだ。今では乗馬もできるほど回復したが、まるでそれを知っていたかのように、カヒローネから使者が訪れたことになる。

あの進行に際して、ダーナンがリンセントスを攻略する足掛かりとして不可欠だったのは、二国の間に位置するカヒローネの協力だった。

リンセントスでフェリエスにさらわれたままのロディのたったひとりの妹フューリーを救い出すためには、砂嵐の去った直後のリンセントスを攻め、城に滞在しているナイアデス皇帝フェリエスの帰還前に、その身柄を確保する必要があった。

そのためには、カヒローネとことを荒立て無駄に戦力を消費するよりも、多少の困難があろうとも協力を得ることにロディはかけたのだ。

だが、国の王が目まぐるしく代わっていくカヒローネに安定した権力というものは皆無に等しかった。

そこで、ロディはカヒローネの全九部族に使者を送り、カヒローネ国内をダーナン軍が通過する許可と、その際の補給等の協力を要請した。

当然、戦さの勝敗にかかわらず、補給に費やした経費と謝礼金は九部族平等に渡すこと。そしてその協力あった上でリンセントス攻略に成功した暁には、ダーナンは、リンセントス全領地の権利すべてをカヒローネに委譲する約束を申し出たのだ。

意外なことに、カヒローネから訪れた使者は全九部族の返書をもつて現れた。

そこには、「カヒローネ、ダーナン二国協定を結ぶことを同意する。だが、もう一つ項目を増やすことが条件であり、これを快諾されれば喜んで道を開こう」と記されていた。

全部族の長が望んだ条件とは、カヒローネの塔姫と呼ばれているミア・ティーナ姫との婚姻だった。

その条件を耳にしたとき、ジュゼールをはじめ全臣下たちが反対

を口にした。

カヒローネに伝わる塔姫の不吉な噂は、ダーナンにも聞こえ広まっていた。

王位争いが耐えないのも、どの部族がひとつとして権力を維持し続けることができないのも、理由が存在する。

それは十六年前に誕生した塔姫にあるというのだ。

遠い昔、カヒローネと国名が統一される前、ある小国の王にターヤ神から《ミア・レルゼの指輪》が贈られたといわれている。

だが、歴史の流れの中で、国が分かれ、また侵略が繰り返され、ついには九つの部族の勢力が均衡となった緊張状態が続いた。

そのような中で、大国の台頭により九部族はひとつの国として大國から身を守ることでまとまりをみせる必要性にかられた。

首都をつくり、指輪は新たに築かれたターヤ神殿の塔に祀られることとなった。

そして、九部族の族長が交互に王位を持ち回りをし、指輪を守るという取り決めがされたのだ。

たとえその王の在位期間がどのようなものであろうと、王の死後は約束に従い次の部族の者が王になる。

そのことを、九部族の族長はカヒローネの守護神ターヤに改めて誓約をした。

だが、ある王の代になった時、秩序を破った別部族の者が指輪を奪い、王を名乗る事件が起きた。

誓約が反故にされたのだ。

だが、当然神の怒りをかうと思われたこの行為だったはずだが、奇妙なことに指輪は新しい王に守護妖獣を与えた。

裏切り者が王の座を得たのだ。

それがターヤ神の意志だと誰もが絶望の中で、そう認めるほかなかった。

この出来事がきっかけとなり、以来、指輪を得た者が王であるとの不文律が生まれ、王位を狙うものは指輪を狙い、王に就く者は常

に命を脅かされた。

王位を血と血で争う。

終わりのない交代劇が繰り返されたそんなある時、その時は突然訪れた。

前触れもなく《ミア・レルゼの指輪》の紫の石が砕け散ったのだ。そして、カヒーローネのすべての守護妖獣は消え去ってしまった。

その時、うろたえ騒然とする族長たちの前に一人の男があらわれた。

「ターヤ神が盲いの神であるのをよいことに、誓いを破り、欺き、裏切り、王の座に就いた部族は一人残らず根絶やしにされるでしょう。それを防ぐには一つの方法しか残されていません。砕けた石を集め《ミア・レルゼの指輪》の石と指輪の台座を一つの器に容れ、最初の王の部族の姫に守らせるのです。部族を統べることのできる真の王が国をつかさどる時、慈悲深きターヤ神はあなたたちを許し、指輪はもとに戻り、そして、守護妖獣はその王の下に降り立つでしょう。」

アンナの一族の者であったその占術士は、言葉少なにそう先読みを告げると、いずこへともなく去っていったという。

驚いた九部族の人々は、その言葉に従い最初の王となったゾルガ部族の長の娘に指輪を守らせ、ターヤ神殿の塔へ幽閉し、その生涯をターヤ神への謝罪にあたらせたのだ。

アンナの言葉どおり、カヒーローネの九部族は一時は神への感謝と贖罪に静かな時間を送ることができた。

だが、時間の経過とともに贖罪の意識は風化し、王となった者は当然のように指輪と守護妖獣を欲しはじめ、塔姫のもとに自分こそがカヒーローネの王と名乗り、指輪を渡すように要求するようになった。

だが、《ミア・レルゼの指輪》は塔姫に守護妖獣を与えていたために、王となっても力づくで指輪を奪うことは叶わなかったのだ。

歴代の王たちは、塔姫を指輪から引き離す策を模索し続けた。

やがて、ミア・ティーナが塔姫となつてから、この十六年の間に状況はさらに悪化の一途をたどり、森羅万象に至るまで国は荒れ、絶えることのない戦乱の世が続いた。

更には、人々の口にその災いのもとこそが《ミア・レルゼの指輪》の守護妖獣とミア・ティーナにあるのではないかという噂がたちはじめたのだ。

その理由となつた最も大きな原因は、塔姫ミア・ティーナの守護妖獣ウエバーが、戦乱を招く魔獣ドールの種族だと言われているからだ。

誰もが見たこともないはずの守護妖獣の姿が、どうして人々に知られたのかは謎であつた。

守護妖獣ウエバー。

その姿形は一見、小さな幼女の姿をしているが、真っ白な長い髪と、虎のような体毛、蝙蝠こうもりのような黒い翼、白目のない赤い瞳を持っていた。伝承に謳われる魔獣ドールの姿そのものだという噂がいつしか人々の間に流れた。

指輪の守護妖獣が魔獣とは、カヒローネもいよいよ終わりだ。

王が安定した王政が行わず王権争い続ける九部族に対し、守護神ターヤが、魔獣を遣わしその手で国を滅ぼさせようとしているのではないかという噂が輪をかけて広まっていた。

この時、カヒローネ王を名乗っていたのは、ゾルガ部族のイオ・ゾルガであり、ミア・ティーナ姫の父であつた。

「最初の王であつた一族」という理由だけ為に、ゾルガ部族の族長は最初に生まれた姫を指輪を守る塔姫として生け贄同然に出さなくしてはならなかつた。

歴代のゾルガの族長は、なぜ自分の部族だけがという疑問と腹立たしさと恨みを、目を閉じ、心の奥深くに押さえ込みながら、従い続けるしかなかつた。

イオ・ゾルガの五歳離れた妹は、乳飲み子のうちに一族から引き離され塔姫となつた。



だが、その姫が亡くなると、十六年前に初めて生まれた娘のミア・ティーナを、自身の手で差し出さねばならなかったのだ。ターヤ神の塔姫は、外へ出ることもなく指輪と守護妖獣のために一生を終える。

しかも、不幸なことにイオ・ゾルガはミア・ティーナ以外、子を授からなかった。

男子が生まれなければ、ゾルガの直系は絶える。

九部族の長らは、この事態を目前にしてさすがに憂慮し、ミア・ティーナを結婚させ、子を生ませることを決議した。

けれど、その相手を選定する段階でこの話は行き詰まる。

相手は誰でもいいと言うわけには行かない。

王になる約束はその婚姻には存在しないが、王位継承の資格をもつ血筋が必要だった。

そして次の塔姫をその身で産み落とさない限り、ミア・ティーナは塔姫として存在し続けなければいけない。

ただ塔姫の血を絶やさぬために、魔獣と醜い塔姫を后きとし、生まれた娘は塔姫として差し出さなくてはならなかった。

通常の婚姻ではない。生贄そのものだ。

さらに、凶事をつかさどるといふ魔獣を伴ったミア・ティーナその人の容姿が、より花婿選びの困難さに拍車をかけた。

皮と骨だけの醜い姫　そう囁かれていたからからだ。

花婿候補に名を上げられた若者は、次々とこの婚約から逃れようとしたりした。

突然結婚してしまう者、失踪する者、命を自ら絶つ者。悲劇はすでに結婚話の段階から起きていたのだ。

犠牲者はあとを絶たなかった。

すべての族長達は、自分の身内に悲劇を生み出すこの事態に気も狂わんばかりであった。

疑心暗鬼の恨みが、国を安定に導くはずもなく、傾国の一途をたどるかにみえた。

まさにそのような状況の中、ダーナン帝国の帝王ロデイが、カヒローネに接触を図って来たのだ。

ダーナンから舞い込んで来た使者の言葉に、イオと全部族長は飛びついた。

千載一遇の機会と確信したのだ。

カヒローネは、ロデイとミア・ティーナと結婚を条件に加えた。

イオ・ゾルガはダーナンに対し、ロデイが自分の実の娘であるミア・ティーナと結婚するならば条件はのむ。

そして、その話しは好意をもってまたたく間に国中に広がるだろうこと。

その上で、ダーナン軍が大軍を率いてカヒローネに現れても、塔姫の婚約者の軍であるならば国に混乱は起きず、民も進んで補給に協力するだろう、と。

また、ダーナン帝王ロデイ自身がその姿を現し、カヒローネで婚姻の手続きを終えれば、結婚式自体はリンセントロス攻略後でかまわないという内容だった。

ロデイは、全廷臣の反対を押し切り、カヒローネ王イオ・ゾルガの提案を受け入れた。

だが、書類上の婚姻は成立し、カヒローネに入国したもののリンセントロスの国境前線で、ダーナン軍は突然の川の氾濫に襲われ撤退を余儀なくされた。

しかもその時、ロデイ自身が負傷したため、婚約者ミア・ティーナに会うこともないままにカヒローネを去ったのだ。

「カヒロローネからは、毎日のように結婚式の日取りを正式に決めるよう矢の催促なのは、知つてのとおりだ。しかも、カヒロローネ王以下、八部族の族長たちすべてからだ。すごい結束力だろう」

ロディはジュゼールを見ながら苦笑いを浮かべる。

「もしわたしが約束を破り塔姫を娶るのをやめて、他の姫を後に迎えたなら、いまのカヒロローネは死に物狂いで一致結束してダーナンに襲いかかり、わたしに塔姫を押しつけて去って行くに違いない」

ロディは笑いながら、寝台から降りると、ジュゼールの差し出すガウンに袖を通し、窓際に歩み寄った。

「戦さに裏切りや策謀はつきものだ。けれど、国同士の結婚には、神の交わりが伴う。これを裏切ることは、わたしが神を裏切る行為となる。それでも、おまえは今も反対か？」

カーテンに手を添え背を向けたまま、ロディはじっと立ち尽くしていた。

ジュゼールの瞳にその姿が、幼い日のロディの姿と重なる。  
十九歳の青年。

今やだれもがロディをダーナン帝国の帝王と認める。

この日をジュゼールはどれほど待ち焦がれたことか。

侵略した国々に対してでさえ、抵抗をせずに降伏したキルルーサには元の王をそのまま選定王として領土を管理させ、それ以外の国にも選定王として人望のある故国の人物を配置した。

ダーナンに牙を向けたハスラン、ゼルバは別として、イーリア、キルルーサに対してはその名を残し、国自体の状況が急激に変化をおこさないよう、領民が安心して暮らせるよう配慮を怠らなかつた。

それらは、一見理想を追うだけの無謀なやり方であり、いつイーリア領とキルルーサ領の選定王らが反旗をひるがらさないとともに限ら

ないことから、側近たちからも無謀であると抗議を受けたが、結果的にはロデイのとった政策は好意的に迎入れられる結果を得たのだ。「カヒローネはわたしを妹に近づくと道を開いてくれた恩人だ。結果的にあのように戦えぬままに引き上げざるを得なかったけれど、他国の大軍が国の中を大手を振って歩くのを、わたしとの約束を守り耐え忍んでくれた。領民たちも温かく協力してくれた。わたしはターヤ神にも誓ったのだ、いまさら約束を違えるなどではいけない」

「陛下……」

皆が心配しているのは、ミア・ティーナ姫のダーナン入りは、そのまま凶を呼び、今度はダーナンがカヒローネのように王権争いの場と化するのではないかという危惧だった。

自分の背丈に近づくほど伸びたロデイの後ろ姿を見つめていたジュゼールは、意を決したように言葉を告げた。

「カヒローネ行きの準備、整えてまいります」

振り向いたロデイの碧い瞳が、ジュゼールを見つめ輝く。

「ジュゼールがそう言うってくれると、私は安心できる」

ロデイはほっとしたように、ジュゼールにゆっくりと歩み寄る。

そしてその肩に額を預けた。

「ふと不安になるんだ。わたしは王になるべきではなかったのではないかと。フューリーを捜し出したい気持ちは、あの時から変わっていない。いや、強くなる一方だ。しかしその為に、多くの者たちを犠牲にできてしまった。戦さでは何千人と死んでいった。時々、帝位を捨て、ただの兄として妹を探す旅に出られたら、どれほど心が休まるだろうと思う」

「陛下……」

ロデイの言葉に、ジュゼールは唇を噛み締めるしかなかった。

王位継承を嫌がるロデイに、フューリーを取り戻すためにも、その王になってほしいと言ったのは、ジュゼールだった。

今になって、それを止めることなどジュゼールには出来なかった。「フューリーは、あのフェリエスにナイアデスにつれ去られたに違

いない……。あの時、あの馬車から連れ出させていれば今頃は……」  
ロディは顔を上げると、間近にあるジュゼールの瞳をじっと見つめた。

「だから……あの姫もカヒーネの指輪の戒めから解き放ってさしあげたいのですか？」

ジュゼールのなにげなく放った言葉に、その瞳がふつとゆるむ。  
その澄んだ眼差しに出会いジュゼールは、ロディの揺れる様々な想いを感じ取ったような気がした。

「すまないな」

「陛下」

「笑ってくれていい……。わたしは私情ばかりの王だ。おまえが笑うなら許せる」

ロディはジュゼールから手を話すと、穏やかにほほ笑んだ。

ジュゼールは姿勢を正すと、再度カヒーネ行き準備を整えるについての指示を仰ぎ、退出しようとして、思い出したように問いかけた。

「陛下。イーリアの姫のことですが……」

ジュゼールが言いかけたとき、突然部屋の扉が勢いよく開きけ放たれ、息を乱した美しい女性が現れた。

「リリア」

「陛下、申し訳ございません」

リリアの後ろから、カラギが現れ、こわばった顔でロディに頭を下げる。

「お止めたのですが……」

ロディは、胸の前で両手を握りしめて涙を浮かべているリリアにほほ笑みかけると、カラギに小さく首を振ってみせた。

それを見てカラギが一步後ろに下がる。

「カヒーネに行かれるのですか？」

前イーリア国の王女であり、いまはイーリア領選定候の姫の身となったリリアは、数年前からダーナンの帝都ディアサのリレイン城

の宮殿内に居殿を与えられて暮らしていた。

リリアは国や家族を奪ったロディ殺害を誓い、ロディがダーナン領に来て一人になったときにその命を断つために近づいたのだ。

リリアがロディめがけて、短剣をその胸に突き立てようとした時、ロディは無防備にリリアを見つめていた。

襲いかかって来る剣先から逃れようともせず、切なそうな碧い瞳で、父と国の仇をとろうとしているリリアを見つめていただけだった。

リリアは、ロディを殺すことも出来ずその足元に崩れて泣きじゃくるしかなかった。

その時の出来事をきっかけに、逆にロディとリリアの仲は急速に近づき、今ではロディの恋人として自他共に認められる存在となっていた。

ジュゼールは、あの時二人の間にとのようなやりとりがあったのか、くわしいことまでは知らないのだが、一見はかなげでいながら、強い意志と瞳をもつリリアが、ロディの心を温める存在となったことを嬉しく思っていた。

そして、いつかは正妃の座につくのではないかという噂がささやきはじめられた矢先に、リンセンテートス進攻が決行されたのだ。

「悪いが、二人きりにしてくれ」

ロディは、涙ぐみながら駆け寄ってくるリリアを腕を差し出し優しく迎えいれながら、ジュゼールに命じる。

ジュゼールは青ざめているカラギの肩に軽く手を添え、その背を押すようにロディの寝室から外へ出た。

「わたしの失態だ。陛下の出立まで、リリア殿の耳にミア・ティーナ姫の話が漏れるのを阻止することができなかった」

いつもの自信に満ちた様子からは、信じられないほど落ち込んでいる軍師に、ジュゼールは苦笑いを浮かべる。

「女の勘は軍師殿をも勝るといふ教訓だな。一年近く隠し続けただけでも、見事だったよ。時期も悪くはなかった」

怪訝そうな顔を向けるカラギに、ジュゼールはまじめな表情をつくった。

「いよいよカヒーネ行き決行だ。陛下が準備をすぐに進めるようにとのことだ」

「本当か？」

「ああ、今日の呼び出しはその件だ」

「実は陛下からの伝令を受ける前に、その前に、リリア殿に呼び出されて真偽を問い詰められていた」

「そんなに早朝にか？」

「真夜中だ。ずいぶん前から嫌な予感がしていたらしい。それで昨夜はいよいよ眠ることもまならなくなったらしくて、呼び出しをくらった。おかげで一睡もする時間がなかった」

褐色の肌をした鋭い瞳のカラギも、今日ばかりは不機嫌極まりない顔で何度となく、ため息をつく。

リリアのことを思うと気は重いが、それはロデイが解決することだった。

「陛下は今日にでも、直接リリア殿に話そうと考えていたようだから、時期的には調度よかつたんじゃないか」

ジュゼールの言葉に、みるみるうちにカラギの顔に生気がよみがえってくるのがわかる。

「本当か？」

だが、やや言葉を押さえて疑るように問いかけるカラギにジュゼールは、わざと視線を合わせない。

「カラギ、陛下がお出ましになるまでに、かねてから進めていたカヒーネの塔姫ミア・ティーナ姫との結婚式に必要な算段を再度調整してくれ。災いを呼ぶ守護妖獣を飼い馴らすことはもう考えてあるんだろうな」

カラギは、早朝の失態がロデイから許される状況にあったことを知って、嬉々とした様子で自分よりやや背の高いジュゼールを見上げる。

「もちろんだ。カヒーネの王族どもの度肝を抜くほど豪華な結婚式を成功させて見せる。いそがしくなるぞ」

すでに頭は切り替わったのか、楽しそうにさえ見える様子に、ジュゼールは回廊の高い天井を見上げて、一人そつとため息をついた。

一カ月後、カヒーネの神タワーの指輪が守られているタワー神殿の塔の中、最上階にある部屋の扉の前に、ロディは立っていた。塔姫に会うことを許されたものだけが通ることのできる扉であり、

これまでのカヒーネの王のほとんどは、この扉の先に進みミア・ティーナの顔を見ることができないといわれていた。

多くの場合、守護妖獣が現れ、用向きを聞き、ミア・ティーナの返答を伝え、去るように命じるのだ。

ロディが扉の前に立ち名乗ると、両開きの扉は、いざなうようにゆっくりと奥へと開いて行った。

扉の奥には闇の世界があった。

かすかな蝋燭の炎が瞬くのが感じ取れる程度の、光の射さない真っ暗な空間。

ジュゼール、カラギの二人は、ロディの後ろでその様子を見守りつづける。

『ダーナンの帝王か』

その闇の中から突然、幼女のような顔が現れ、赤い瞳がじつと三人を見た。

ジュゼールとカラギはその衝撃に息を呑む。

「そうだ。わが后ミア・ティーナを迎えに来た。今日はその挨拶にジュゼールの前にいるロディの後ろ姿は、動じることもなくその出迎えに応えているようだった。

一見、白い髪をした人間の子供に見えるのだが、白目のない赤い瞳と、その体の虎のような黄色と黒色の体毛と背中の中翼から、噂に聞く妖獣に間違いなかった。



妖獣は子供のように無邪気そうに笑う。

その姿に、魔獣の忌まわしさは感じ取れない。

「改めて確認したい。ミア・ティーナ姫との婚儀は、成り立つか？」

ロディは、妖獣に向かい静かに言葉を告げた。

『いいよ。ダーナンの王なら申し分ない』

ミア・ティーナの守護妖獣は、くるりと背を向けるとロディについて来いと促す。

『ミアは奥にいるよ』

ロディは一步踏み出した。

一緒に部屋の中に入ろうとするジュゼールたちを片手を上げて制止する。

「おまえ達そこで待っている」

そう言っつて、部屋の中へと進んでいく姿は闇の中に消えていく錯覚を生む。

ジュゼールは、一瞬、何かが変わっていくような奇妙な空気の歪みを感じた。

陛下！

ロディを引き留めなければと突然思った。

だが、体は動かず、声もでない。

ジュゼールは自分に言い聞かせる。

大丈夫だ。陛下は闇の中にいるミア・ティーナの手をとり、再びこの扉から現れる。なにも心配することはない、と。

だが、魔獣を守護妖獣とするミア・ティーナをダーナンに迎えること。

得体の知れない塔姫を正妃として向いいれるこの婚礼は、正しい道であるのか、そう考えれば考えるほど、自分は取り返しのない事象に立ち会っているようで、底知れない不安に、ただ、守護神ゼナに祈りを捧げるしかなかった。



第14章 守護を得る者 - 9 - (後書き)

第14章 守護を得る者 終了

ダーナン帝国ロディ・ザイネス帝王が、カヒローネの塔姫ミア・ティーナを正妃として迎えたという噂は、衝撃的な事実としてたちまちのうちに近隣諸国へと広がった。

ダーナンは、中央と東大陸へ進出する道を手に入れた。そう言っただけはダーナンの進出を危惧しはじめた。

特に、カヒローネの隣国であるリンセントートスは二年もの間、砂嵐に襲われ続けるといふ大災難に見舞われ、これから復旧という矢先に飛び込んで来た不吉な知らせだった。

「まるで、我がダーナンがラーサイル全大陸の制覇、侵略を目指しているような言い方だ」

ジュゼールは、ロディとミア・ティーナの帝王夫妻のために建築中の居城の敷地を歩きながら、横を歩くカラギに不満をぶつけるように言う。

「いいではないか」

軍師は、褐色の肌に不敵な笑みを浮かべて、横目でジュゼールを見る。

「内乱で傀儡の女王を立てているハリアや、でかい顔をして自分こそが諸国の王だと言わんばかりの善人気取りだが、実情は皇太后が握っているのナイアデスなんぞ、きれいさっぱり消してしまえばいい。陛下の民となった方が幸せだ」

戦さの話になると、まるで自分が剣を手にしたように瞳を輝かせ、頬を上気させるカラギにジュゼールは複雑な思いを抱く。

確かに、ダーナン支配下におかれた国々の民に対してロディは自国の民と変わることのない暮らしを与えた。

それは、敗戦国の民には予想もしなかった恩恵であり、不満の声を上げる者がないばかりではなく、ロディに対し感謝と賛辞の声を

が日増しに広がった。

また、貴族や兵士たちの多くは、ダーナン軍の厳しい規律に最初強固に抵抗をみせたものの、戦さにおいて功績のあったものには公平に褒賞を与え、登用を行うロデイに対し、彼らは次第に競うように忠誠を誓い、功を立て、名を挙げることを目指すようになっていった。

『ロデイ帝王の民となるものは、幸せである』

『病に倒れし父の前王をいたわり、唯一の妹君であらせられるフーリー王女を捜し続けられている、我らが慈悲深き帝王』

ダーナンの民は、若く美しい帝王に絶えず称賛を送り続けた。

もちろんその声に誰よりも安堵し喜んでるのはジュゼール自身だった。

ロデイがあらゆる階層から慕われ、王としての揺るぎなき地位を築き上げたことに対しては、心から満足している。

だが、ジュゼールにはそれがロデイの望んだ道だったのかと、いつも自問自答する。

それとも自分たち臣下が強いて歩かせた結果なのだろうか、と。

特に、塔姫ミア・ティーナを花嫁として迎えることになってから、その悶々とした思いはジュゼールの中から消えることがなかった。

盛大な結婚式の時も、ミア・ティーナは顔を黒いベールで覆い、枝のようにやせ細った腕も、体も、全身を黒い布地に豪華な刺繍で仕立てられた花嫁の衣裳に身を包んでいた。

ジュゼールさえ、いまだ正妃の顔を間近で見たことが一度もない。「人前に出ることに慣れていないからな」

十六年もの歳月を日の差さない塔に閉じ込められていたミア・ティーナは、人前に出ることを極度に嫌い、ロデイもまた無理をしいることは避けているようだった。

その代わり、常にロデイの隣にはリリアの姿があった。

リリアは側妃の座についてはという帝王や側近たちの度々の勧めを断り、その身を包むドレスを捨てて、軍服を身につける生き方を

選んだのだ。

臣下としてロデイの身边を世話をする為に。

「これで、いつでも陛下のそばにいますもの」

そうほほ笑むリリアの健気さに、人々は圧倒された。

彼女を愛妾と呼ぶものはなく、また、いたとしても、それを口に  
した者に対しては、ロデイが国のために帝王としていわくつきの姫  
を娶らなければならなかった事情も、リリアの純粹な愛情をわから  
ぬ、『無粋で馬鹿な田舎者』として、一笑に伏されるまでとなつて  
いた。

当初、リリアがそのような突飛もない話を持ち出したとき、だれ  
も本気にはしていなかったのだが、軍師のカラギが側近入りに真っ  
先に賛成を示したことで情勢は変わった。

意表を突かれて異を唱える者は表立っては少なかった。

反対したのは、ジュゼールと数人の臣下、そしてロデイ本人だっ  
た。

ジュゼールは、リリアとロデイとの関係が恋人から臣下となるこ  
とで、これまでの良好な関係が壊れることを望んでいなかったし、  
また軍の規律が乱れることを避けたかった。

そしてなにより、ロデイ自身が、リリアを前線に立つことのない  
安全な場所で守りたいと、その申し出を拒んだのだ。

だが、カラギは今後の戦いにおいて女の目と直感が欲しいと力説  
した。

軍の規律の乱れ、陛下への謀反、危険人物を見分ける鋭い目と勘  
は男よりも女が勝っており、いずれはナイアデス皇国を凌ぐ女性部  
隊をつくることを視野に入れていること。

しかし、現在すべてが男だけの軍に女を入れた場合、その身边を  
守れるか保証できない。

だが、陛下の恋人であれば、身边は安全であり、また兵士たちも  
リリアを守る立場に立つであろうこと等を、カラギ得意の『所説』  
を山ほど引き出して熱弁をふるった。

そして、結局側近として、また参謀としてリリアをロディの恋人のままそばに置き続けることに成功させたのだ。

「おい、陛下だ」

カラギに呼びかけられ、考えごとをしていたジュゼールは視線を上げて、建築中の居城から出て来たロディとリリアを見つけた。

「リリア殿は気丈だな」

「ああ、なんせ前は陛下のお命を奪おうとしたほどの女傑だからな。そして」

ジュゼールの言葉に、カラギは口元に笑みを浮かべる。

「今は、命を懸けて陛下を守られようとしている。その心、さつするに余りあるがな」

ミア・ティーナのことを知った日の騒動を思い出して、カラギの笑みがため息と苦笑いに変わる。

「まあ、陛下を守るために発揮される女の直感という奴を大いに期待させてもらうさ。それをどう判断するかは、おれ次第だからな」

小声でささやきながら、カラギはジュゼールと共に臣下の礼をとり、ロディを迎える。

「どうした、二人揃ってとは珍しいな」

ロディはからかうように、二人を見る。

「実はハリア国より親書が届きました。一刻も早く陛下にお届けしなくてはと思ひまして」

「ハリアから？」

ロディは、いぶかしみながらカラギの差し出した白い封を受け取り、中の手紙を読むとくすりと笑ってから懐かしそうな視線を空に投げた。

「陛下？」

ジュゼールが問いかけるとロディは紺碧の美しい瞳でうなずく。

「ハリア国のミレーゼ女王からだ。『様々な噂が耳に飛び込んでくる。そこで直接質問します。ダーナンは、ハリアに戦さを仕掛ける気ですか？』との問い合わせだ」

ジュゼールとカラギ、そしてリリアは驚いたようにロディの手にした親書を交互に見つめる。

「単刀直入なところは、相変わらずのようだな」

そんな二人の様子にかまうことなく、ロディはあの夜の出来事に思いを馳せる。

姉シーラの婚儀の為にリンセンタートスに来ていたミレーゼの寝室に、単身ロディが忍び込んだ時の、生意気な少女の顔。

突然の侵入者にも、毅然と気丈な態度をとったハリア国のならたての幼い女王。

ロディはあの時交わした会話に、小気味よささえ感じていた。

「さっそく、帰って返書をしたためよう。カラギ、美しい宝石を用意してくれ、わたしの大切な友人への贈り物だ」

リリアの物言いたげな視線に、ロディは静かに笑う。

「大丈夫、ハリアとは争わない。ミレーゼはフューリーを探す協力を約束してくれた私の友人だ。それに、私たちは共通の敵をもっている。ミレーゼは姉のシーラ王女を、私はフューリーを略奪された君子気取りの暴君に、私たちは肉親を奪われた。敵は、東にしかないんだよ」

静かに語るロディの美しい横顔に、ジュゼールは、ふとフューリー王女がロディを新たなる戦さへと誘っているような錯覚を覚えた。だが、フューリーがいなくなったのは八歳の幼い時だ。

結果としてそうなったかもしれないが、それはフューリーが望んだわけではない。

(いや……そんなことは)

フューリーを探し出すために帝位に就くよう強いたのは自分なのだ。

たとえ錯覚だとしても、一瞬でもそんなことを考えた自分に、ジュゼールひどい嫌悪感を覚えた。

そしてしばらくの間、リリアやカラギと談笑するロディと、目を合わせることさえできなかった。





ナイアデス皇国で、毎晩のように催される晩餐会や舞踏会。

そこに訪れる婦人たちの間で、このところしきりと囁かれているとある貴人の名を知っているか、とフェリエスが口にしたのは、イズナが朝の挨拶に訪れたときだった。

毎朝、皇帝から指名のあったものだけが朝議の前の最初の挨拶に皇帝の寝室に訪れることが許される。

多くの貴族達は、前の夜に指名をもたらず皇帝の使者を待ち焦がれた。

それは皇帝の厚い信頼を得たものとして、周囲の見る目かわる「儀式」でもあったからだ。

その中で、数人の人間だけは「朝の挨拶」に出ることが約束されており、イズナとオルローもその中の皇帝の信頼厚き將軍として、訪ねる朝は常に定まっていた。

ところが、珍しく前の夜に皇帝の使いがマイリージア家に訪れ、イズナに朝の挨拶に訪れるよう指名があったのだ。

「その貴人は、どうやらおまえの友人らしいぞ」

皇帝の寝室に足を踏み入れたイズナは、上機嫌のフェリエスのいたずらっぽい口調にやや驚いたような表情で応じた。

「アルクメーネ皇太子、ですか？」

片方の眉を上げて、黄金色の瞳がそうだと笑う。

「しかし、あの方は舞踏会にはあまり足を運んでおりませんが」  
「だから、噂になりはじめています」

フェリエスは片目を閉じてみせる。

「一体何者なのか、どこの国の者か、どの舞踏会に現れるのか。どうすればその手に導かれ、その腕の中で踊ることができるのか、と  
な。」

イズナはフェリエスの意外な言葉に、どう応じたものか逡巡した。

一年の留学に応じてナイアデス皇国で過ごしているアルクメーネの監視役として、この半年近く、常に行動を共にしている。

だが、舞踏会に行った時でも、その行動や様子にとくに突出したものを感ずることはなかった。

それどころか、アルクメーネは礼を失しない程度に様々な催しや式典には出席するが、その行動は常に控えめであり、長居をすることを嫌った。

その為、むしろ彼の存在に誰も気がつかないのではないかと、逆の意味でイズナは心配しているほどだったからだ。

「己の存在を知られることを望んでおられない様子の為、少し意外でした」

「その幻の貴公子の噂が、逆に乙女たちの心に火をつけたらしい」  
イズナは、フェリエスの言いたいことを察したように笑った。

「陛下がお妃様を娶られて、失ってしまった恋の相手を……と、いうところですか」

イズナの言葉に、フェリエスが朝の日差しをうけてほほ笑む。

フェリエスが結婚して以後、開催される宮廷舞踏会は変わらないものの、やや精彩を欠いていたことは否めなかった。

美しい似合いの皇帝夫妻を一目見ようと訪れる人々は日を増すごとに増えてはいるが、社交界の華ともいうべき貴族の娘たちが病気などを理由に舞踏会を欠席することが、目に見えて多くなっていたからだ。

「では、アルクメーネ皇太子に舞踏会で姫君や令嬢たちの相手をするといわれるのですか？　しかし、それでは目立ち過ぎてしまい、やがてノストール王国の皇太子だということが知られてしまう恐れが……」

普段よりもややむきになっているイズナを見つめながらフェリエスは、片目を閉じて悪戯っ子のような表情で笑いかける。

「だから、昔やったあれをやるう」

幼なじみの謎掛けに、イズナはフェリエスの言わんとすることを

頭の中で巡らせる。

「あれ？」

「そう、お前とオルローが私の誕生日に行ってくれた、あれを」

「ああ！」

イズナは、フェリエスの提案に思わず破顔した。

「仮面舞踏会か」

フェリエスが十五の誕生日を迎えたとき、イズナとオルローはその贈り物として「仮面舞踏会」を開催したことがあった。

それは、夜ごとの舞踏会であまりに皇太子を射止めようと、下心をむき出して競い合う貴族の娘たちや、他国の姫君の着飾りすました姿に辟易したフェリエスが嫌気をさして「自分が皇太子でなければ、近寄りもしないくせに」とイズナとオルローに言い放ったのがきっかけだった。

フェリエスの言葉が正しいか、ただの思い込みかを論じていた二人は、ならば身分を隠した舞踏会を行えばいいと、賭けをすることを思いついたのだ。

結果は、「身分がなくては女は近寄らない」というフェリエス自身を裏切り、気がつけば舞踏会で淑女たちの一番の関心を集めたのはフェリエスだった。

「女というものは、恐ろしいな。殿下は皇太子でなくても、女には不自由しないということが今宵証明されてしまった」

翌日、自分たちの計画が功を奏し、フェリエスから賭け金を手に入れたことに満足して喜んでいるイズナの横で、仮面を付けていながらあっけなくリンドに見つかり、ほぼ一晩中踊りの相手を努めさせられたオルローは、「まったくだ」とうらめしそうに二人を見てため息をついたものだった。

その後、オリシエ王がなくなるまでの三年間、三人は機会を見つけては「仮面舞踏会」を開催し、令嬢たちの間で囁かれる自分たちの噂を耳にしては楽しんだ。

イズナは、フェリエスの『仮面舞踏会』という一言でなつかしい

十代の青春の日々を思い返していた。

「な、やろう。あれなら正体を明かすことなく、姫君たちも舞踏会に訪れるだろう。『仮面舞踏会』に出席すれば、他の舞踏会を断ることもできなくなる。主催は館の主の名。だが、実は噂の貴公子の主催だと風の噂にのせれば、なおさらいい」

肩を軽く叩き、笑いかけるフェリエスから、以前と変わらぬ友情が伝わってくるのを感じて、イズナもまたうなずいていた。

「仮面舞踏会ですか？」

遠乗りの支度を整え現れたアルクメーネは、馬の手綱を従者から受け取ると、隣で馬首を並べたイズナからフェリエスが計画した舞踏会の話聞き、静かにそうつぶやいた。

遠乗りの為にイズナがアルクメーネを迎えに来たのだ。

「明日後、謎の貴族の主催で行う、ということになっています。アルクメーネには、その主人として参加してもらおうことになりました」  
イズナの言葉には、舞踏会から抜け出すことはできないという意味が含まれていた。

どういう反応を見せるだろうかと期待していたのだが、イズナの予想に反して、アルクメーネは特にそのことを問うこともせず、馬に騎乗する。

「でしたら、明後日には戻って来れる村まで案内願います」

「大丈夫だ。先方の領主には知らせてある」

友人の口調でそう応えると、アルクメーネは少し嬉しそうに笑みを浮かべる。

護衛兼監視役なのは重々承知しています。ですが、一年の期限付きの友人として過ごすのも悪くはないでしょう？　あまり無口な護衛役が傍にいと逃げ出したくなってしまう。

美しい顔立ちに温かそうな微笑みが浮かぶ。

思わず一瞬見とれてしまい、それを咳払いでごまかした。

王が亡くなり、世継ぎの兄が不在の中で、すべての代行を成し遂

げた人物と聞いていた。

会う前までは、豪腕な人物像を描いていたのだが、実際にアルクメーネに会うとそれとはあまりにかけ離れていたのだ。

豪腕との噂は作り上げられたものでは、と。

「平和な小国で穏やかに国民に愛されて育った美しい王子様」、それが正直初対面の印象だった。

イズナに見せるアルクメーネの表情は、大国の貴族と比べるとあまりに穏やかで、素直で、穢れていなかった。

自分が庇護しなければ、あつと言う間に欲深い人間達に食いものにされてしまいかねない弱い存在に思えたのだ。

けれど、日を追うごとにそれが間違いであることを知ることになる。

この遠乗りもアルクメーネの素顔を知る機会のひとつだった。

「出発するぞ」

イズナは、恒例となったアルクメーネの国巡りの案内人としての役目を果たすべく、部下に命じて先導の馬を前に走らせる。

「向うのはハイド領。織物が主産業のヤタ村をお見せする」

「わかった」

仮面舞踏会の話など嫌がるのではないかと暗に思っていたのだ。

だが、いつもと変わらぬアルクメーネの様子に、イズナは何故か安心し、また何故か不安になる自分の奇妙な心を感じていた。

アルクメーネが、ナイアデス皇国に来て最初にイズナに申し出たのは、町や村を巡ることだった。

「町や村には、何も見るもの学ぶものなどありません。まだ来たばかりなので、歴史ある建築物や議会の見学、名門の貴族との対面、夜会への出席など、行くべきところは山ほどあります」

イズナは、そうしたアルクメーネの申し出を聞いたとき、内心呆れながらラーサイス大陸から外れた辺境の小国の皇太子を説得しようとした。

王族や高級貴族が、村を見たいなどという話は聞いたことがなかった。

小国の王族は国が狭すぎて農作業でもしているのではないだろうな、と内心本気で思ったほどだった。

「王族には王族の、民には民の居るべき場所というものがあります。村や町などは、その領主が管理をしています。わざわざ、その足を汚される場所ではありませんよ」

「では、フェリエス皇帝は民の暮らしを御存じないのですか？」

イズナの言葉に、やんわりとだが驚きをもって逆にアルクメーネがたずねる。

「もちろん民の暮らしは領主から直接、定期的に報告を聞いていてご存じだ。領主はその為に皇帝より領土を授かっている。そのようなことは、あなたがよくご存じのはず」

「ご自分で視察することは？」

「近隣諸国へ赴かれる際に立ち寄ることもあります。しかし、わざわざ皇帝が足を運ばれる必要はまったくありません」

アルクメーネの思索するような表情にイズナは、いらだちにも似た思いで、丁寧の説得を続けた。

「それよりも、明日は狩りにいきましよう？ 今の季節だと……」

「明日は日帰りで、行ける村に案内して下さい」

イズナの言葉を遮り、アルクメーネは穏やかながら凜とした口調で命じた。

「もちろん、決められた日程と公務、行事にはすべて従います。ですが、私のための時間は、私が自由に使ってよいと約束もいただいております。明日は誰とも約束をしてはけませんので、よろしくお願いいたします」

イズナは開けた口を閉じるのを忘れたようにノストールの皇太子を見つめた。

そして、しぶしぶながら翌日アルクメーネと同様、旅人の服に身を包んだイズナはわずかな部下を連れて不承不承近くの村へと案内することになった。

できれば、アルクメーネが二度と村を見に行きたいと言い出さなくなるような村がいいだろうと思いつき、部下から聞いて名前だけは知っている悪路ばかりを通る小さなゴルタという村落を訪ねることにしたのだ。

しかし、その村へ着いてからのアルクメーネの行動は、逃げ帰るのではと期待していたイズナの予想をはるかに越えたものだった。

村の入り口で馬から降りたアルクメーネは、その村のあまりの貧しい様子に立ちつくしたまま動けないでいるイズナの脇を通り過ぎ、斧で薪を割っている泥だらけの子供に近寄ると、自然な様子で水を求めたのだ。

だが子供は首を激しく横に振った。

そして、一件のあばら家へとアルクメーネを案内した。

その家から出て来たのは、骨と皮だけの青白い顔をしたみすばらしい老女だった。

老女は、水汲みに出た女子供は昼過ぎにならなければ帰って来ない。

男たちは、今年は雨が少なく不作だったために、食べる物も残り少なく、食料を求めて山に入ったが十日も帰って来ていない。



しかも、自分は年老いて家の外には出られないので家の中で商人に売るための織り物を手縫いしていたところなのだ、目をきよるきよるさせ、乾いた表情で話し出した。

イズナは、村の現状に少なからず衝撃を受けたものの、一刻も早く異臭さえ立ち込める、埃だらけの汚く貧しい村から立ち去りたかった。

当然アルクメーネもそうするだろうと、少し離れた場所から我慢して老女とのやり取りを見ていたのだ。が、イズナが待っている目の前で、アルクメーネはそのまま老女の壊れそうな小さな家の中へと入って行ってしまった。

慌ててその後を追って、アルクメーネを引きとめようとしたのだが「少し、待つててください」というアルクメーネの命令ともいえる言葉に止められ、再び外へ出て待つしかなかった。

しかし、どれだけ時間が経っても、待ち続けても一向にアルクメーネが出てくる気配がなく、しびれを切らして再度、その薄汚れた木の扉をゆっくりと開けた。

すると、薄暗い部屋の中で、老女の代わりに機織りの前でなにかにしているアルクメーネの姿が見えた。

「なにをしているんですか？」

足を踏み入れるのさえ避けたい、ひどく汚れた敷物に腰を下ろしているアルクメーネの背に向かって、イズナは思わず叱るような口調で呼びかけた。

だが、アルクメーネは先程と変わらぬ「もうしばらく待っていてください」と、振り向きもせずと言っただけだった。

イズナは絶句するほかに、相手が王族でなければ襟首を掴んで引きずり出したいほど見たくもないほどの衝撃的な光景だった。

あばら家の前をいらいらしながら、行ったり来たりとろろろするしかないイズナは、自分をおびえたような表情で見つめる部下に八つ当たりし、また覗き見する子供達を睨みつけ、ただただアルクメーネが一刻も早く扉を開けてその姿を見せてくれることを祈るし

かなかった。

やがて、家の中で老女の歓声とも叫びともつかない奇妙な声が響き、イズナは驚いて家の中へ駆け込んだ。

するとそこに一枚の織物を手に抱きしめ、背を丸くしてむせび泣く老女の姿があった。

そして、そつと家を出て行こうとするアルクメーネに気づいた老女は、あわてたように追いつがり、その手をとり、何か言いたそうに口を開けるのだから、声が出ない。

「お元気で、長生きしてくださいね」

アルクメーネが微笑みながら、老女の手を両手で包み込む。

そして、帰って行く彼らを、老女は深く深く頭を垂れ見送っていた。

「何をしたんです？」

怒りを押し殺しながら不審そうに聞くイズナに、アルクメーネは瞳を閉じながら静かに答えた。

「壊れた機織りを直しました。それできちんと織れるか、一枚織ってみました。そして、おばあさんにも織ってもらいました。あとは、簡単な染料の作り方を説明したぐらいです」

「な……」

馬に乗ろうとしたイズナは、信じられないものを見るような目でアルクメーネを見つめた。

「なにを……やってる……んです」

それは、イズナが自分自身でも驚くような怒気さえ含んだ低く押し殺した自分の声だった。

「あなたは農民ですか？ 違うでしょう？ その手をそうしたことに触れさせないで頂きたい。機織り機が壊れているなら直せと領主に命じればすむことです。老婆が哀れに思うならリーダでも恵んでやればいい。こんなことは止めていただきたい」

イズナは眉間にしわを寄せ、アルクメーネを説得するようにその手をとり、叫ばんがばかりに何度も自制をしながら低い声で言い寄

る。

「あなたはその手を汚す必要はないのです。たとえあなたの国ではそれが許されても、ここはナイアデスです。ナイアデス皇国の貴族はあのようなことはしない。そんなことをさせるために、私は連れて来たわけじゃない。私がそばにいます。命じればいいじゃないか。ただ『やれ』と、王族たるものの権利でしょう。あなたに何かあれば、私の責任でもある。いや、そんなことは問題じゃない。選ばれた人間がどうしてもわざわざあんな汚い場所で、地面に座って職工のようなことをするんだ。こんなところに、つれてきた自分が馬鹿だった」

イズナは耐え切れぬように訴えながら、自分が何を怒っているのか、何に興奮しているのか、分からなくなっていた。

ただ、今見た村の悲惨な状況に自分がひどく動揺していること、その中に恐れることもせず自然に溶け込んで行ったアルクメーネに、反発せずにはいられない感情が、そうさせた。

あの行動は認めてはいけない。

あつてはいけないものだ。

そうアルクメーネにも認めさせ、自重させなければ、自分の価値観が崩れそうだった。

叫び、怒鳴らんばかりのに肩で荒く呼吸をするイズナを見つめ、手をゆっくりとイズナから離しながらアルクメーネは静かに言う。

「ここにいる私は、ただの旅人なのです」

「……………」

イズナはアルクメーネがなにを言い出したのかわからなかった。

「時に、わたしの国では、王の血を引く者は王族という衣服を城に残して、旅人となります」

「……………」

「その旅人は、貴族であったり、商人であったり、遠くの村からたずねて来た人間だったりします」

イズナは、アルクメーネの言葉に困惑する。

「旅人は、特別な人間ではありません」

「だから……？」

イズナの言葉に、アルクメーネは寂しそうに微笑むとその先を告げずに馬の背に騎乗した。

「待ってください。私には意味が……」

「今日は帰りましょう。また折を見て、別の村へ案内をお願いします」

イズナに反論をする間を与えず言い残すと、アルクメーネは金色の髪をなびかせて先に走りだした。

別の日も、そしてまた次の日も、時間が許される限りアルクメーネはイズナを案内人としてに町や村を訪ねまわった。

行く先々で、アルクメーネはイズナの制止を振り切り、また耳を貸さず、最初の村で老女に接したときと同じような振る舞いを繰り返すばかりで、イズナを怒らせ、困惑させ、呆れ返させた。

村への案内を止めたいと説得するが、「では、フエリエス殿にお願いをして別の者を案内役につけていただきます」とやんわり微笑まれて、イズナは頭を抱えた。

だが、やがてその行動の真意を徐々に知るようになり、また村々を訪ねる数が増すごとに、イズナは自国の民のあまりの貧しさを知らなかった自分に気がつきはじめた。

領主からの報告とはかけはなれた実態にしばしば我が目を疑い、絶句した。

皇都で一年のほとんどを過ごす領主である貴族たちの言葉を、今までは疑ったことなどなかったが、農民や農奴たちは定められている税や穀物以上の重税に苦しみ、飢餓や疫病に苦しめられていた。しかも、そうした地域があまりに多いことを知ったのだ。

だが、不思議なことに悲惨な状況の村の隣村は、通例の税を納め農民が苦しんでいないところが多い。

それだけではなく、年毎に収める税の量がかわるといふのだ。

重税の事実が皇都コリンズに伝わらないように、そして、農民た

ちが結束して首都に抗議をすることがないように領主たちが交互に納税の比率を変えて、自分たちが私腹を得ているからではないか、いつしかそうした疑念をイズナに抱かせるようになっていった。そして、アルクメーネが村人に対して示す行動は、彼が去ってもなお村に利益となることばかりだということは後になって気がついた。

最初のゴルタ村で老女に対して行った行動は、機織り機を直しただけでなく、老人でも簡単にかつ色鮮やかに仕立てられる織り方だったということの後から知り、それを覚えたあの老女は村でもまた必要とされる人間になっていくに違いなかった。

二人が訪れた村はナイアデス皇国のわずか一部に過ぎない。

だが、イズナはアルクメーネの行動に興味を抱き、仕事以外の時間でも、ともに過ごす時間が多くなっていた。

そんな矢先、フェリエスに呼ばれ、仮面舞踏会の話もちかけられたのだ。

仮面舞踏会の日が訪れた。

「見てみる。噂の貴公子が来るという話は、効果絶大だ」

マスクを片手に持ち、バルコニーの窓から外を眺めていたフェリエスはイズナとオルローに満足そうにうなずいて見せる。

窓の外には、次から次へと正門をくぐり抜けて来る馬車が行列をつくり、盛装した貴婦人や紳士たちが舞踏の間へと城の石階段を上ってくる姿があつた。

「陛下のご考案どおり、ひさしぶりに華やかな賑わいが戻りました」  
「今日はわたしも、久々に一人の貴族としてご婦人たちの手をとろう。シーラも招待しているあるから、おまえたちが踊る機会に恵まれてもあまり私の悪口を吹き込むなよ」

いつになく上機嫌のフェリエスは手にしていたマスクを顔に取り付け、舞踏の間へと続く通路へと歩き出す。

扉が開かれる。

「今日はわたしも楽しむかな」

フェリエスと肩を並べて廊下を歩き始めたイズナはその横のオルローの言葉に、おやという目でそのすました横顔を見る。

「珍しいことを言うじゃないか。仮面舞踏会に限らず、パートナーはいつもリンド嬢と決まっているんじゃないのか」

「リンドは今日は来ない」

「お？」

「ユクタス將軍と共にトルフェ領へ出ている。帰って来るのは当分先のことだ」

「なるほど、そこで今宵はおおいに羽を伸ばそうというわけか」

「人聞きの悪いことを言うな」

オルローがややばつが悪そうに睨みつけるが、イズナは一向に気にする様子もなくマスクを付ける。

それを見ながら、オルローも同じように顔の半分を隠す仮面を取り付けた。

三人は笑いながら、舞踏会開始の王宮楽団によるファンファーレが鳴り響く舞踏の間へと消えて行った。

大きな広間の高い天井には天井画が描かれ、蠟燭を三重に立てた水晶の大きなシャンデリアが中央に、二重立てのシャンデリアが煌々とした輝きをはなっている。

その下では、華やかに着飾った貴族の男女が宮廷楽団の奏でる音楽に合わせ楽しげに踊っていた。

皆、マスクをつけ、仮面をし、ベールでその顔を覆い、かつらをつけ、盛装に身を包み美しく装った貴婦人の手を取り優雅に踊りながら、密やかに交わす会話の中から互いの正体を探り合う。

また、踊らずに壁際で飲み物を手にその様子を見ている者もいるが、そのほとんどは気になる女性の手を取るために、次の曲までその機会をねらっているのだ。

「金髪の貴公子」と貴族の娘たちの間で噂になっているアルクメーネも、フェリエスの命ということもあり、この夜は覚悟を決めて主催者としての挨拶をし、次々とその手を求めて来る積極的な令嬢たちの相手をしていた。

なかには、若い娘たちだけではなく、明らかに人妻とわかる婦人までもが、今宵の逢瀬をアルクメーネと過ごそうと様々な言葉をささやき、手紙をそつと忍ばせて来る。

やがて集団舞踏に入ったのをきっかけに、アルクメーネはそこから抜け出し、シャンデリアの光が届かない壁際に逃げるように身を隠した。

長い髪を掻き上げるように大きく息を吐き出した時、アルクメーネの目の前にプラナ酒の注がれた美しいグラスが差し出された。

驚いてその手の主を見ると、小柄な若い青年がそこにいた。

踊りに加わることもせず、この闇の中にいたらしい青年は、疲

労の色を浮べて闇に休息を求めにきたアルクメーネを見て、ほほ笑みながらグラスを差し出してくれたのだ。

「ありがとう」

アルクメーネはそう礼を述べると、カラカラに乾いた喉にプラナ酒を注ぎ込んだ。

「あなたは、踊らないのですか？」

人心地ついたアルクメーネが尋ねると、その若者は口元にはほほ笑みを浮かべたまま首を横に振った。

その瞬間、奇妙な感覚がアルクメーネの全身を通り抜けた。

それは、その青年も同じだったらしく、二人は互いの姿をじっと見つめたまま、意外な出会いにしばし言葉を失った。

「あなたは王族の方ですね」

体を駆け抜けた感覚は、守護妖獣を持つもの同士が出会った時に感じる特別な気配だった。

「……………」

アルクメーネの問いに若者は、小さな唇を堅く閉ざし困ったようにうつむく。

「私は、アルクメーネといいます。ノストールが私の国です」

青年は驚いたように、アルクメーネの瞳をじっと見上げた。

仮面舞踏会では互いの名を告げないことが暗黙の約束事となっている。

だが、アルクメーネは自分が名を明かさなければ、青年も警戒し続けるのではないかと感じ、思わず名乗っていたのだ。

国名を名乗ったことは、軽率だったかと一瞬後悔した。だが、

「わたしは……………」

戸惑ったように開いた口元から出た言葉に今度はアルクメーネが目を見張った。

それは女性の声だった。

「シーラ・フロイ・ジェンフォーデです」

アルクメーネは、男装の麗人に驚き、さらにそれがフェリエス皇



帝の正妃シーラであることに言葉を失い、仮面の下で輝く琥珀色の美しい瞳をじっと見つめた。

「あなたがノストール皇太子でいらっしやっただので、わたくしも名乗りました」

囁く小さな声に、アルクメーネは驚きを隠しながら周囲に気づかれないように男装したシーラと壁にもたれるようにして並び、自然な様子を心掛けた。

シーラとは、結婚式の日とそして数ある公式の場で会ってはいるものの、個人的に言葉を交わすのはこれが初めてだった。

しかも、皇妃が舞踏会で影に身を隠すようにして暗闇に身を隠し壁際に一人立ったまま、しかも男装でいることに驚きと意外性を禁じ得なかった。

「失礼ですか、どうしてあなたのようなかたが、そのような服装でいらっしやるのですか？」

アルクメーネの問いに、シーラは少し顔を赤らめながら説明をした。

顔を隠しているとはいえ男装しているのが他人にわかってしまった瞬間、身の置き場もないほど恥ずかしくなってしまったのだ。

「どうしても出席するように陛下から言われたのですが、このような舞踏会は初めての経験ですし、どのような方かも分からない人と踊るのはとても私には無理でしたので、困ってしまいました……その、友人に相談をしたところ男装をすればよいと……」

「友人？」

「ええ、あそこで踊っている青い髪飾りと、青いドレスを着た娘です」

震える小さな声で、自分から視線をはずさせようと、楽しげに集団舞踊の軽快な音楽にあわせて、ひとつひとつの仕草をくりかえすアインをそつと指さす。

アルクメーネは集団の中でもひとときわ活発そうな輝きをみせて踊っているアインを見つめ、再び視線をシーラに戻す。

男装を見られて羞恥心でいっぱいの様子の子のシーラに、アルクメーネは耳打ちをする。

「なるほど、男装とは考えましたね。わたしも今度の仮面舞踏会ではドレスを着て出席しましょう。その時は、ぜひあなたに手を取っていただくのも楽しいでしょうね」

「まあ」

ドレスを来たアルクメーネを思い浮かべて、シーラは思わずくすくすと笑った。

そして、以前にも同じように自分の緊張をほぐそうと、温かな言葉をかけてくれた人物の声と似ていることに気がつく。

「あの……」

シーラはためらいがちに声をかけた。

「テセウス様はお元気ですか？」

「兄ですか？」

突然シーラの口から出てテセウスの名に、アルクメーネは戸惑ったが、以前リンセントース王の結婚式へ参列したテセウスが、ラシル王の花嫁となるハリア国のシーラ姫を暴徒たちの手から助け出したという話をしてくれたことを思い出す。

「ええ、元気ですよ。リンセントースでお会いした時の話は聞いています」

「あの時、危険な中を助けていただきましたのに気が動転してしまい、お礼をテセウス様に申し上げられなかったことがずっと悔やまれておりました。どうか帰国されましたら、よろしくお伝えください」

シーラはアルクメーネのナイアデス皇国入りを知ったときから待っていたのだ。

もし機会があるものならば、自分の口から直接伝えたいと。

しかし、自分を伏せているアルクメーネの立場もあり、うかつな場所で口にするればどんな噂になるかわからず、今まで心の中に押し留めていたのだ。

今日の舞踏会も、アルクメーネと会話が出来る絶好の機会があるかもしれないと思っではいたものの、その為に見知らぬ男性と踊る勇気もなく、けれど舞踏会には参加しなければならず、アインに相談した結果、男装して舞踏会に参加しそのまま終わるのをただ待ち続けていたのだ。

シーラは、アルクメーネと期せずして出会えたことに心から感謝していた。

「あなたは幸せになってくださいね」

アルクメーネの慈しむような言葉に、シーラはハツとしてアルク

メーネを見上げた。

「お辛いこともあったと聞いています。でも、この大国の皇妃として、お幸せになられることを願っています」

シーラは一瞬自分の心の中を見透かされたのではないかと思った。だが、アルクメーネの瞳は別のだれかを思い浮かべるような遠い目をしていて、シーラはそれがテセウスの身に起きたなにを語っているように思えて、つい問いを発していた。

「テセウス様に何かあったのですか？」

シーラの言葉にアルクメーネは、大きく目を見張った。

自分の言葉が迂闊にも兄の身に起きた異変を悟らせてしまったのではないかと一瞬危うんだのだ。

しかし、そのシーラの揺れる心配そうな眼差しを間近で見ても、それが見当違いだと気がつく。

彼女が、命の恩人であるテセウスを心配して心から発した言葉なのだと気がついたからだ。

「ご安心ください」

アルクメーネはほほ笑む。

「兄は元気です。それに、私が帰郷しました折りには、兄にもあなたのようなすばらしい后を迎える用意致します。シーラ様がとても心配していらつしやったことも伝えておきます」

「そんな……」

シーラは、その言葉にこれ以上伝える言葉を無くして唇を閉ざした。

アルクメーネの脳裏に、兄の厳しい横顔が浮かぶ。

苦悩の理由を語らぬまま、王としてのすべてを捨てようとしている兄の後ろ姿。

あの背中が出立するときから今も尚、焼きついて離れないのだ。

わたしはこの先、結婚はしない。子もつくらない。そして、王の座を退いて後は、民にこの身を捧げ尽くし続ける。それがわたし出来る許された償いだからだ。

苦悩を一人で背負っていくことを決意したに違いないテセウスの  
厳しく悲しみに満ちた瞳を、アルクメーネは片時も忘れることが出  
来ない。

あの時、兄の痛みの激しさは、理由はわからなかったがそのまま  
アルクメーネの痛みとなった。

やさしい兄の明るく逞しい笑顔をどうしたら取り戻せるのだろう  
かと、願わずにはいられない。

その日が来るまで、きつと自分自身も心から笑うことは出来ない  
だろうと、アルクメーネは思う。

だからこそ、兄の優しさに触れたことで、ノストールから遠く離  
れたこの地に、兄のことを心配してくれる人間が一人でもいること  
が、嬉しかった。

曲が終わり、集団舞蹈から再びワルツに変わろうとしていた。

今日は主催者の立場であり、ワルツに自分がいなければ逆に目立  
つだろう。

このままここには、シーラに迷惑がかかってしまうかもしれない  
ことにアルクメーネは気がつく。

「そろそろ戻ります。今日は女性の手をとらないで隠れているとフ  
エリエス陛下にお叱りを受けるらしいので」

空になったグラスを給仕に渡すと、軽く左胸に右手をあてシーラ  
に一礼をする。

「……………」

シーラは止めるすべもなく、ただその後姿を見送るしかない自分  
に唇をかむ。

するとアルクメーネが、途中でなにかを思い出したようにシーラ  
の元に引き返して来た。

「そういえば兄が、あなたをリサの花のようだと言っていたのを思  
い出しました」

「リサの花？」

シーラはテセウスが自分のことをそのようにアルクメーネに話し

ていたと知り、驚いて息をのんだ。

「厳冬の季節を越えて咲く美しい花です。エーツ山脈の麓の一角で木に咲く、ノストールの民から愛されている花。兄がとても好きな花です」

アルクメーネは、冒険談を話すように楽しそうに目を細めて話していたテセウスを思い浮かべる。

美しく可憐な花嫁だったよ。なぜカリサの花と重なってしまうそんな人だった。

数えるほどしかない自然な笑顔がこぼれていたひと時。

「リンセントースで花嫁を助け出した話をしてくれたときに、あなたのことをそう言っていました。今日、あなたとこうしてお話しが出来て、その意味がおぼろげに分かったような気がします」

儂げで、すぐに散ってしまいそうな美しい花。だが、リサの花は厳寒を越えて優しく咲き香る。

ハリアからリンセントース、そしてナイアデス皇国へと翻弄され皇太子妃となったシーラの中に、アルクメーネもまたリサの花を思い浮かべる。

どんなに厳しい雪や風雨にさらされても、耐え続けて咲く淡紅色の花に似ている微笑に。

「では」

アルクメーネはそう言ってほほ笑むと、身をひるがえし、彼を探してざわめいて女性たちの待つ華やかな空間へ流れるように吸い込まれて行った。

「あ……」

シーラはアルクメーネの言葉に何も返事を返せないまま、その背中を目で追っていた。と、その視線が踊っているアインの姿をとらえる。

その手をとって踊っている相手は、仮面をつけていてもシーラにはそれがフェリエスだとすぐにわかった。

シーラは二人から視線をそらせた。

結婚式を終えた夫婦としての初めての寝所で、フェリエスはともさりげなくではあったが、アインの処遇に関してこう言った。

彼女は君の大切な友人だ。ハリア国への帰国は当分先に延ばさせ、皇妃の客人として、このラシュール城に居室を与えることにした。どのような場所へでも皇妃と共に出入りができるよう、すでに通達はすんでいる。

この言葉は、自分の運命をフェリエスに託して生きていこうと結婚式までの準備の間、自らに言い聞かせていた心を瞬時に冷やす言葉となった。

(この方は、私を見てはいない……)

それは直感だった。

すると、アインという時のフェリエスの態度の違いや、彼女をなんとかハリアに帰してあげたいと願い出るたびに様々な理由をつけては延期させる理由が、ある独特の意味を含んでいたことに思い当たる。

あの言葉を聞くまで、すべてはシーラの寂しさを考えての思いやりだと素直に信じていたのだ。

しかし、今こうして二人の踊っている姿を見ると、それは疑いようのない確信へと変わっていく。

アインの手をとり踊っているフェリエスからは、シーラや、ほかの誰にも見せないような優しさが満ちあふれていた。

皇帝は一人の男としてアインと踊るために、この仮面舞踏会を開催させたのではないかという憶測まで沸き出して、シーラは考えるのを止める。

自分の心が醜く思えて苦しくなったのだ。そして、耐え切れずに舞踏の間を後にした。

フェリエスに対して、まだ愛情という感情を抱いてはいなかったが、信じるべき相手に裏切られた思いは、頼るべき人もいない場所で置き去りにされたような孤独感で、シーラの心を傷つけた。

『シーラ、月を見に行こうよ』

ふわりと温かな感触がシーラを包み込み、子供のような声がすぐそばで聞こえた。

(ハティ……)

『シーラは一人じゃないよ』

それはシーラの守護妖獣ハティの声だった。

(そうね……)

その言葉に従うように、シーラは城の庭に出る通路に向かって歩きだした。

シーラにとり、ナイアデスへ来て心から良かったと思えることがたつたひとつだけあった。

それは守護妖獣ハティを得たことだった。

皇妃となつてからは、どんなに辛くとも、悲しくとも決して絶望的な孤独に襲われることはなかった。

つねにハティがそばに付き従い、守り、そして声をかけてくれる。実体の姿は、シーラの部屋の中でしか現れないものの、こうして男装しているとはいえ夜の園庭を一人で歩くところができるのも、ハティの存在があるからだつた。

(私はハティと出会えたから、ナイアデス皇国に感謝し、皇妃として精一杯の努力しなくてはいけないわね)

シーラは心の中で守護妖獣に呼びかけ、フェリエスとアインのことも許してしまいたいと思つた。

アインがフェリエスに対して、どんな思いを抱いているのかわからなかったが、ハティを与えてくれたことを考えれば、例えフェリエスの愛情が皇妃の自分に向けられなくとも、あきらめられるような気がした。

なにも望まずに生きていくことには、慣れているはずだった。

だが、毎夜いとおしむようにシーラに口づけ、ほほ笑み、やさしく抱き締めるフェリエスに対して心を開きかけていただけに、今日の二人の楽しい様子は耐えられない光景だったのだ。

シーラは、時折ハリア国の異母妹であるミレーゼやその弟のエリ



ルのことを想う。

三人で城を抜け出して森の中でいろいろな話をしたことなどが、  
たまらなく懐かしかった。

あの時はそう思うことはなかったが、いまでは幸せな思い出として蘇るのだ。

そしてハリアアを離れる最後の時さえ、重病を理由に会うことも許されなかった大好きな父は元気だろうか、思いを馳せる。

「帰りたい……」

出来ないことはわかっていた。

だが、言葉に出した瞬間に涙があふれ出て止まらなくなり、自分がどれだけハリアア国に帰りたがっていたのか、シーラは初めて知った。

「シーラは一人じゃないからね」

夜気がシーラを包む。が、ハティの力がシーラを守り、冷たい空気が肌に触れることはなかった。

「ずっとそばにいるからね。だから、大丈夫だよ。それにもうすぐ、時が来る」

「時……？」

「大丈夫」

ハティは見えないものを見ているかのように時折、「時が来るよ」と囁いた。

その言葉に戸惑いながらも、シーラはうなずき、涙を拭いながら闇の中に輝く三日月を見上げた。

月は、不思議な存在だとシーラは思う。

神々の物語りの伝承はいまではわずかな数しか伝え残されていないが、そのなかの月の物語があったのを思い出す。

世界の起こりのはじめの時。

昼の世界と夜の世界とを行き来していた月の神アル神に対し、闇の神エボル神はその輝きを愛しみ、夜の世界に留まるように願った

という。

しかし、昼の世界では夜の世界に行つたままのアル神の姿を求めて、光の神リーフィス神があらゆる世界を強烈な光で照らし出し、多くの神を困らせた。

そのために、エボル神はアル神がほんの一時、昼の世界へ行くことを許すことにしたのだという。

ただし、突然夜の世界から消すことだけはやめて欲しいと悲しむエボル神のために、アル神は昼の世界へ行く日を知らせることを誓った。

月の光を徐々に細くしてその日が近づくことを。

だから、月は夜の世界で輝きその姿を変え、時折昼の世界を訪ねてはまた戻って来るのだと。

シーラは闇の神のもとから、光の神に会いに行く時が近づいたことを示す月の神が、二つの国を行き来する自由な姿に見えて、羨ましく思えた。

シーラの祖国ハリア公国の守護神、夜と闇を司りし安らぎの神・エボル神。

一度は嫁いだはずのリンセントースの守護神、旅人の守り神・ピアン神。

ナイアデス皇国の守護神光を司りし神、リーフィス神。

自分は三つの国を渡ったが、月のように帰ることは出来ないのだ。そして、その月に、月の女神アル神を守護神とするノストール国のテセウスを想い重ねる。

兄が、あなたをリサの花のようだと言っていましたよ。

先程のアルクメーネの声が蘇り、シーラは目を閉じてその声に、テセウスの声と顔を重ね繰り返す思い出す。

テセウスが自分のことを覚えていてくれた。

好きな花にたとえてくれた。

その言葉だけで、シーラは痛みに満ちた心が癒されるような気が

した。

その言葉だけで、寂しさを紛らわせることができるような気がした。

シーラは月に祈るような気持ちで、もう一度だけでもいいから、あの時のようにテセウスに会いたいと心から思った。

馬の背の上で二人きり、あの腕の中で守られ、言葉を交わすことができたならと儂く夢見る。

ナイアデス皇国の王妃となった身では叶わない夢であることはわかっていた。

それでも、エボル神がアル神を求めたように、シーラは願う。

こうして一人きりの夜だけは、テセウスの記憶が薄れるまで思い起こすことを許されたいと。

月の神アル神を守護神とするノストールのテセウスが、この夜の月を共に見上げていてくれはしないかと、シーラは知らず知らずのうちに祈りながら、ただ月に見入っていた。

数カ月後、ナイアデス皇国でのアルクメーネの留学期間も残りわずかとなり、今日もイズナは村を巡るために、馬車でアルクメーネを迎えに城へ向かっているところだった。

昨夜は、ダーナンの動向があやしくなりつつあることや、国境近辺に盗賊団がひんばんに出没しているなど、夜まで長びく会議となつたためにひどく寝不足だった。

イズナは会議自体が苦手な方で、長い時間椅子に座っているのは拷問に等かった。

しかも、加えてフェリエスからはアルクメーネ皇太子攻略は万全だろうなと報告を求められるなど、それは当然の質疑のだが、イズナは自分でも珍しいほど不機嫌になっていた。

イズナの乗るマイリージア家の馬車が、城の正門をくぐつたところで、まるでそれを待っていたかのように数人の騎士たちが馬車目指して駆け寄ってきた。

そして両手を広げて止まるように命じ、馬車を取り囲んだ。

「イズナ將軍！」

オルローの側近のコノーノフらが血相を変えて駆け寄り、大声でイズナの名を呼ぶ。

「どうした？」

窓が開いて不機嫌そうな顔が現れる。

「大変です！ 剣術場でオルロー將軍とリンド隊長が……」

「夜中越の逢引きでも見つかったか？ 会つのも剣術場じゃ色気もないな」

大きな欠伸をしながらコノーノフをチラリと見る。

「いえ、そつ、それが、本当に大変なことに。とにかくお止め出来るのはイズナ將軍でなければと」

「……俺が？」

イズナが、首を一、二度回しながら面倒くさそうに、それでも馬車からおりると、コノーノフと一緒に来た若い兵士が、自らの馬の手綱をイズナに渡す。

「お使いください」

「はいはい」

イズナはだるそうに馬に飛び乗ると、わき腹を軽くひと蹴りし剣術場に馬を走らせた。

剣術場近くの建物まで近づくと、話題の二人に見つからないように、身を隠しながら渡り通路の方を見ている人ばかりが現れた。

彼らはめつたに見ることのできない二人のケンカを好奇心を高まらせ見ていたのだ。

憶測と噂のささやき声が、あちこちでひそひそと囁かれている。

そこへイズナが現れ、一瞬場の空気が緊張したのだが、馬から降りて鼻歌交じりにやじ馬の集団に加わろうとしているのを見て安心したように野次馬達の視線が二人に戻る。

「盛況だなあ」

ちいさな欠伸をしたとき、リンドの良く通る声が響いた。

「つまらな言い訳は、聞きたくないの。わたしがいない間になにをやっているかという事実を聞いているのよ」

言い争っているリンドとオルローは、共に帯剣しており、リンドはすでに抜き身の剣を右手にもっていた。

「お、ついに仮面舞踏会の一件がばれたか」

腕を組んで楽しそうに眺めていると、別の馬で追いついたコノーノフが、止める気のなさそうなイズナを見てあわてて馬から下りて横に立つ。

「將軍……」

「なにかと思つたら舞踏会の一件か」

「はあ……、その……お相手がリンド様の隊のものだったとか」

コノーノフが、ヒートアップしていく二人の様子におろおろしながらも答える。

「お相手って言ったって、踊っただけだろう」

「それが、オルロー様がそのような舞踏会には行っていないと最初に答えられたのが……どうもいけなかったと申しますか……」

「はーん。オルローを追いつかけて軍隊に入り、女性部隊を作り上げたほどのやきもちやき屋を相手にすぐばれるような嘘を……馬鹿だな。リンドにはあらかじめ予防策を貼っておくべきなんだがな。やましい想いでも見透かされたか」

イズナは呆れたように、バンダナをした黒髪を掻く。

「おれ、帰るわ」

「イ、イズナ將軍！」

背を向けるイズナに、ふだんはきりりとした表情で女性受けしているコノーノフが情けなさそうにその腕を取り引きとめる。

「オルロー様のあのような醜態、これ以上人目にさらすわけにはまいません。お願い致します。お引き止めください！」

泣き出しそうな表情のコノーノフに、イズナはあきらめたように大きくため息をついた。

そして、おもむろに両手を口元に当てて大声で叫んだのだ。

「踊っただけじゃなかったのか？ 堅物のわりには珍しいこともあるもんだなあ！」

その声に二人は振り返り、イズナと自分たちを遠目に見ているやじ馬に初めて気がついたように、表情を引きつらせた。

「お前らも、めずらしいな！ 二人で剣の練習に客を集めてるのか？ それとも俺が、痴話ゲンカの見物代でも取っていいかあ？」

イズナを見たオルローが舌打ちをしつつも、あきらかにほっとした様子でイズナに向かって歩き出した。

だが、その背にリンドの鋭い声が飛ぶ。

「自分に都合が悪いと、そうやって逃げるのね。イズナに助けを求めてないで、自分に偽りがないというなら、私の剣を受けなさい」

背中を貫く罵声に、オルローの眉間がピクリと動く。

「それとも、フェリエス皇帝の親衛隊長は浮気がばれてしっぽを巻

いて逃げるふぬけなの？」

オルローの目がすっと細くなる。

「ウソを言わないと、舞踏会にも行けない。いつだって、あたしには面と向かって何も言わないものね。行つたなら、行つた。本当は行きたかつたと言えればいいじゃないの。弱虫」

その足が止まる。

「女が相手じゃ、剣は抜けない？ それとも、部下やみんなが見てる前であたしに負けるのがこわいんじゃないの？」

オルローの手が腰の剣に伸びかけ、止まる。

「いいわ、お逃げなさい。あたしの剣を受ける勇気がない弱虫男なんて用はないわ！ こっちからお断りよ。もう顔も見たくないわ」  
叫んで帰ろうとするリンドの背に、オルローは振り返ると鞘から剣を抜き放って呼び止めた。

「わかった、こいよ。受けて立ってやる」

そのオルローの言葉に、リンドは振り向き様に間髪おかずに突進する。

リンドの剣がきれいな弧を描いてオルローに襲いかる。

見守っていた人々はぎょっとして息を呑みこんだ。

冗談ではすまない事態に、数人がイズナに救いを求めるように駆け寄ってくる。

「イズナ様、お二人を止めてください」

「これで将軍が、リンド様を傷つけられでもしたら大変なことになります」

コノーノフをはじめ、オルローの部下が、剣を抜いてリンドと剣を交えているオルローに目を走らせながら、顔から血の気をなくしてイズナに訴える。

「お願いでございます」

真剣な懇願にも、イズナはわざと大きなあくびをして、人だから離れようとすする。

「イズナ様ああー!!」

「將軍！」

「痴話ゲンカに付き合ってたらこっちの身がいくつあってももたない」

「しかし……」

「心配するな。オルローは受けて立つだけだ。あいつはそう言っただろう」

その言葉にコノーノフがおろおろしながら二人を見る。

周囲はしんと静まり返り、ただ二人の剣の打ちあう音だけが響き渡っていた。

全身で怒りを現し、剣をぶつけていくリンドの動きは俊敏な中に華麗さがあり、その美しさには思わず見ている者にとって息をこぼさせた。

一方、その繰り出される鋭い剣先をかわし、また受けながら、防戦一方のオルローのにも見ているものを安心させるなにかがあった。イズナが言った通り、オルローはまさに「受け」のみの姿勢を貫き通していたのだ。

その剣先は、リンドに牙をむいて襲いかかることはなかった。右手に構える剣は攻撃のため武器ではなく、身を守る盾となった。決してふざけているわけではないのはわかっていても、二人の動きはそれ自体が一つの剣舞のように、見ている者を圧倒し、また魅了していく。

「あれが、あいつらの愛情表現だから放っておくのが一番なんだ。下手に仲裁にはいたり、どっちかに加勢してみろ、ナイアデスの女傑リンドの鋭い剣先が俺の喉元にくいこむぞ」

コノーノフが「はあ」と戸惑った表情で、疲れたように首を前後左右に振っているイズナの横顔をじつと見る。

「まあ、それでもだ。もしもオルローがリンドに負けることがあったら、技量や力じゃないことは確実だな。自分に後ろめたさがあるか、もしくはリンドの『気』に負けたときだ。つまり、女の気迫だ」



「そうなのですか？　そ、それで、どうなるのですか？」

「そりやおまえ、その瞬間からリンドはナイアデス皇国一の『かかあ天下の名取り』になるんだな、うんうん」

イズナが楽しそうに大声で笑ったとき、

「だれが『かかあ天下』ですって！！　イズナあ　！！」

リンドの鋭い叱責とともに黒い物体がイズナとコーノフ目がけて飛んで来る。

風を切って襲いかかる影をイズナは振り向きもせず片手で受け止める。

受け止めたときの衝動が思い音となって周囲に伝わる。

「そうか……」

イズナはポツリとつぶやいた。

「剣が飛んでくるとは限らないか」

引きつった表情のコーノフに、それを渡すと、にっこり笑う。

「結婚式まで、花嫁はなかなか花婿に会わせてもらえないからな。いろんな邪推もするさ。それまで、がんばって大将のおもりに励めよ」

イズナはからからと笑うと、青ざめているコーノフを置いてその場から立ち去っていった。

コーノフが自分の手に残されたものをまじまじと見ると、それは、リンドの剣の鞘だった。

「あの騒ぎは私も別の場所から見ていましたよ。早朝から賑やかでしたね」

馬車の中で、アルクメーネがおかしそうにくすくすと楽しそうに笑う。

今日は、かねてからの約束でイズナがアルクメーネを案内をすることになっていた。

ネルネーゼ地方の一带は、最近盗賊が出没するようになっていて噂のあるマイリージア家と縁戚関係にあたるロゼリア伯爵の領地だった。

三日はかかる行程でもあり、到着まではマイリージア家の馬車で領地に赴き、その後いつものように旅人を装おい視察をすることにしたのだ。

「ああやって、ひと目につくような場所でケンカすることはそうないんだけどな」

イズナは独り言のようにそう言ってため息を吐く。

「子供のころからの腐れ縁で、あいつらのケンカの仲裁に入ると、あとから必ずリンドに叱られる。だから、極力首は突っ込まないようになっているんです」

「どうしてですか？」

不思議そうにアルクメーネが正面に座るのイズナの顔を見る。

「オルローは普段から感情を表に出さない。ただ、ケンカになると本音が見える。それを知っているリンドはその本音を聞き出したからケンカを仕掛けているんだと言っんです。自分を無視するのか、きちにと最後まで相手をしてくれるのか、いつも確かめていたらしい。あいつは関心のない奴を相手にするほど優しくないのでリンドは知っているから……。そのケンカにおれが口を出すなってね」

「なるほど、では今回も？」

「あの二人が婚約しているのは周知の事実。オルロー・サンクロア将軍は、使者を出して、リンドの父ユクタス・ボーデン将軍に結婚の申し入れをした。ユクタス将軍はそれを承諾し、晴れて二人は婚約。結婚式の準備も着々と進んでいる。ナイアデス皇国では貴族同士の結婚は、それが正式な手続きで問題はどこにもないんだ。けど、相手が相手だ。政略結婚なら問題はないが、オルローは、いまだにリンドに対して直接何も言っていないらしい。それが、主な原因。リンドは言いたいことが山ほどあるが、この国のしきたりとかで今までみたいには自由に会えなくなるし……」

「しきたり？」

「結婚が決まると、女は結婚準備にはいる。男にはわからないほどの準備があるらしい。一方、男には猶予期間が与えられる」

「？」

「正式に婚約を発表する責任を負えば、結婚式までは他の女性と遊んでも暗黙の了承の下許される。その代わりに結婚後は、自重が求められると言っわけだ。ただし、自重している優等生を俺はあまり知らないけどな」

言いながらイズナは、そんな優等生がいたことを思い出す。

女遊びの誘いにも、目の色を変えて香水を撒き散らしながら近寄ってくる女性にも、興味をしめさない目の前のアルクメーネを。

「ま、いずれにてもリンドはそこらへんのおとなしい貴族の令嬢とはわけが違っけからな。家同士の決めた結婚と同じ扱いは許せないんだろっ」

「それに、直接言っしてほしい言葉もあるわけですね」

イズナは、肩をすくめて見せる。

「そんなところだ。そんなケンカに仲裁に入ったら、おれが八つ裂きにあっ」

「なるほど」

楽しそうに笑うアルクメーネを見ながら、イズナは昨日の会議を思い出す。

『イズナ將軍の奇抜なもてなしが、ノストールの皇太子の心をとらえたいらしい。あとは、大事な仕上げをしていってくださることを期待している』

最後にそう言ったフェリエスの言葉が、頭から離れない。

確かにアルクメーネがイズナを信頼してくれているだろうという自信はある。

だが、この皇太子にノストールの王権を狙わせる野心を持たせ、かつナイアデス皇国に愛妾をつくらせる作戦において、イズナはことごとく失敗している。

アルクメーネにとり、ノストール王国の兄テセウス王は尊敬してやまない人物であり、またその兄の信頼を得られるだけの自分になりたいと折りあることにイズナに語った。

アウシュダールという神の転身人となった弟に対しても覇道を求めず、王のため、祖国のため、民のためにその力は存在することを信じている。

そして、アウシュダールの力が、苦しんでいる人々を救うならば、リンセントートスの時と同様、他国に対してもその力を貸すことも今後あるだろうとさえ、言っているのだ。

皇都コリンズにいる間、イズナは狩猟や夜会、賭け事や酒、女、食事などと、人間を欲望に浸らせる様々な手段を講じた。が、アルクメーネは表面的には興味を示し、つき合いもするが、深みにはまることが一度としてなかった。

その強固な自制心には、イズナも舌をまくしかなかった。

それよりも、この皇太子と一緒に過ごす時間が残りわずかであり限られたものであることの方が、イズナには憂鬱だった。

いつの間にかフェリエスと会っている時間より、アルクメーネとこうして村を巡る旅に出るほうが楽しくなっている自分がいるのだ。都にいては、知らずにすんだかもしれないことをアルクメーネを通して、冷水を浴びせられるように現実を見つめさせられた。

だから今回イズナは、やがては自分の領地となる約束を受けてい

るマイリージア家の縁戚ロゼリア伯爵の所領に赴き、自分の目確かめたいという気持ちになったのだ。

子供がないこともあり、ロゼリア伯爵夫妻は、多くの貴族がそうするように、一年の三分の二は首都コリンズで過ごしている。

今もイズナの暮らすマイリージア家の広い領地内の居館に暮らしており、数ヶ月ぶりに会って用向きを伝えたときは快く応じてくれたのだ。

「あなたは恋人はいないのですか？」

アルクメーネに問われて、イズナは思わず苦笑いする。

「俺はおそらく貴族らしい結婚をしますよ。結婚式当日に花嫁に会う。それから、恋人を山ほどつくるって奴を」

そう言いながら馬車の窓の向こうに視線を走らせたイズナの横顔が、すこし寂しそうにアルクメーネには見えた。

旅の目的地であるロゼリア伯爵の館に到着したその夜、アルクメーネは奇妙な夢を見た。

気がつくともアルクメーネは、子供の頃によく内緒で城を抜け出して遊びに行ったマーキッシュの村に立っていた。

「クロトたちはどこかな」

自分の隣には兄のテセウスと一緒に並んでいた。

ああ、父上から命じられて、弟たちを村まで迎えに来たんだ。

ナイアデス皇国から、転身人を引き渡すように使者が来た日。私が十四歳、兄上が十七歳のあの日……。

「それにしても、誰もいないな」

テセウスが眉をひそめて静まり返った村を見渡す。

「様子がいつもと違いますね」

二人は無人の村を歩きながら、手分けをして弟たちを捜し回った。

「アルクメーネ」

テセウスの声に振り返ると、兄のそばにクロトがいた。

「クロト！ おチビはどうしました？」

クロトを見て喜んで戻ろうとするのだが、走っても走ってもなぜかアルクメーネは二人に近づくことができない。

それでも駆け寄ろうとするアルクメーネを止めるように、テセウスは固い表情のまま首を横に振る。

「どうしたのですか？ 兄上」

「私はここから先に進めない。おチビはおまえが連れて来てくれ」「え？」

わけのわからないテセウスの態度に、アルクメーネが驚いて再び二人のもとへ戻ろうと一歩踏み出した時、マーキッシュの村が突然かき消えた。

そして辺りは、一面背の高い草木の生い茂る深い森へと変貌していた。

「兄上？ 兄上？ どこですか？ クロト！ 兄上！」

目の前の異変に茫然としつつも、とにかくここから出ようと、長い草木をかき分け、アルクメーネは森をさまよった。

するとその目に、今度は、遙か先を歩く父カルザキア王の後ろ姿が飛び込んで来たのだ。

「父上！ 父上！ 待ってください！ 父上！」

叫びながら走りだすアルクメーネの声に、カルザキア王が立ち止まりその横顔を向けた。

「父上！」

父に追いつき、ほっとして言葉をかけようとしたその時、カルザキア王の左手がスツと上がり、何かを指し示した。

アルクメーネがその指を追うと、そこには草むらに覆われた古びた馬のいない馬小屋があるだけだった。

「頼んだぞ」

「え？」

父の言葉にその理由を問いかけようとするが、目の前にいた父の姿はもうどこにもなかった。

「父上？ 父上？ どこですか？ 父上？」

大声で叫ぶが森の木立の中、返ってくるのは自分の声だけだった。

アルクメーネは暗闇の中で目を覚ました。

「……………」

夢を見ていたことを知り、上半身を起こす。

全身にひどい汗をかいている自分に気づき、顔を両手でおおっと大きくため息を吐き出す。

「カイチ」

「ここに」

アルクメーネの呼びかけに、守護妖獣カイチの静かな声が即答す

る。

「いまの記憶を忘れないように、留めてください」

『御意』

不安を消すような冷静な守護妖獣の返事に、アルクメーネは今度は少し安心したように深く息を吐き出した。

いつの頃からか、何がきっかけだったかはわからないが、アルクメーネは自分の記憶に疑いを抱いていた。

奇妙な喪失感がつきまとい、違和感が消えないのだ。

何かを忘れてしまっているような気は確かにするのだが、それが何かさえわからない。

そのいらだちを時折、守護妖獣のカイチに訴え、問いかけ、対応を求めた。

お前ならわかるだろう？ と。

しかし、妖獣は『あなたの主旨、質問がはつきりしていないのに、どうして答えられるでしょう』とつれない返事をするだけだった。

だから忘れてはいけないと思う出来事に出会うたび、アルクメーネはカイチに命じて自分の記憶を保つよう、またその一日の行動をカイチに確認をさせ、努めて記憶の整理を行なって来たのだ。

「亡くなられてから、初めて父上の夢を見ました」

ベットからおり、窓のそばに立つ。

闇が世界を支配していた。

まだ朝になるまでにかなり時間はあったが、アルクメーネは眠らずにこのまま過ごそうと決めた。

カイチに命じながらも、なぜか眠りについて今見た夢を忘れてしまうのがこわかったのだ。

翌日、アルクメーネはイズナとともに領地内のラタ村とコウ村、

テナイの里を訪れた。

村の様子は、イズナが心配していたような深刻な問題を抱えている様子はないようにみえた。



「なに、キヨロキヨロしてるんです？」

いつもと違う様子のアルクメーネに、イズナが不思議そうに声をかける。

「いえ、このあたりに森とかはないのかと思って」

「森？」

不思議そうなイズナの声に、アルクメーネは困ったように軽く唇を噛む。

「森ならずつと南の方にリムルの森があったはずだが。ここからは遠いし、最近では山賊どもがうるついていると報告を受けている。行くなら小隊を整えないと危険です。今回は供の数も少ないし、行って帰ってくるだけで日が暮れてしまう」

二人のそばで、太縄を編んでいたテナイの里の若者が、その会話を耳にして眉間に皺を寄せて忠告する。

「そのお人の言われる通りだ。しもリムルの森近くの。あそこの力カル村の連中はよそ者は特に毛嫌ってる。行くもんじゃないねえ」

その声を聞いた別の男も、顔を上げて渋い顔をする。

「あの村は、変なお告げのおかげで村がさんざんな目にあっただ。家も畑も、山も荒らされ続けた。だから今じゃ、日が沈んで旅人が一晩だけ泊めてくれと頼んでも、どんな家も絶対に戸を開けない。村人同士以外とは口もきかん」

その話に、イズナとアルクメーネは興味をひかれて、思わず互いの目と目を合わせていた。

「どんなお告げなんだ？」

里の男たちは、イズナの問いかけに複雑そうなため息を吐く。そしてゆっくりと話し出した。

それは、百年以上昔のことだった。

カカル村は『見捨てられた村』という名のとおり、昔から大地が荒れ果て、土壌が悪くとも農地には適さない地にある村だった。

当時の領主が、他の村への見せしめとして、不平不満を訴えるもの、気に入らないものなどを、その土地に追放したのだ。

何もない荒れ果てた広野に人々は身を寄せ合い、一つの村を築き、無駄だとはわかっても懸命に畑を耕した。

リムルの森には食用となる山草も多くあったが、凶暴な野生動物が多く出没し、山へ足を踏み入れるのは常に命懸けだった。

また、水を得ることの出来る一番近い川はその山向こうの谷川だった。

日の出とともに村を出ても、足場が悪いために時間がかかり、日暮れまでに村に戻るのは常の戦いだった。

村人たちは日々の暮らしを石に噛りつくような思いで過ごしていた。

そんな村に、ある時一人のアンナが訪れた。

男だったのか、女だったのか今ではもう性別さえ定かではないが、長旅の疲れと飢えと喉の乾きで倒れるように村にたどり着いたアンナを、ある一家があたたかくもてなした。

自分たちのわずかな水を分け、食料を分け与えて、アンナが回復するまで世話を見続けたのだ。

やがて元気になったアンナは、その家族に感謝の思いを込めて二つの 先読み を残して旅立った。

決して他言はしてはいけないと固く忠告して。

そして数カ月後、これまでに出会ったことがない、破壊的な嵐が 一帯を襲った時、家の主人はひとつ目の 先読み を思い出した。

『汝が家々を嵐が襲う』

なにも見えなくなるほどの

大なる嵐 激しい嵐 すぎまじき嵐

その風が行き過ぎし日暮れ

静かなる夕暮れ

茜差す燃ゆるがごとき陽の中より

幸いなる一群現れ出る。

その群れは大なる森を目指し訪れる

汝らはそれをとらえ

力を蓄えるだろっ』

その家族は、村人たちには理由を告げずに、協力を仰ぎリムルの森でさまざまな武器を手に待機した。

そしてアンナの言葉どおり、現れたのは野生のトウ馬の一群だった。

あらかじめ罫を仕掛け、準備を整えていた彼らはトウの群れを捕まえることに成功したのだった。

砂漠地帯でも生命力の強いトウを手に入れることが出来れば、ある者は家畜とし、またある者は町で売却し、ひと財産を得ることができたのだ。

主人は、村の英雄と称えられた。

だが、調子に乗った主人は、アンナが決して人に話してはいけないと約束させたもうひとつの 先読み をつい話してしまう。

『しばらく先の時間』

銀盤の輝きに守られし旅人現れり

かの者に汚れなき小さな宝を施すとき

かの者 そこに眠りし宝を指し示し

汝らに 子々孫々にわたる

絶えることなき宝を与えるだろっ』

村人たちは、この 先読み に目の色を変えた。  
村に宝が眠っている。

一刻も早く手に入れ、自分の物にしてしまおうと、仕事を放り出し宝探しに血眼になり始めたのだ。

噂は村だけではなく、近隣の国にまで流れた。

当然、ひと山儲けようという人々が次から次へと押し寄せる。

最初は、「旅人が宝を見つける」との 先読み があつたことから、村人は期待を胸に快く彼等を向いいれた。

だが、ならず者の男たちは宝探しをする一方で、村人たちの人の良さにつけ込み、生活用品、財産を巻き上げ、暴力のをふるい、宝が見つからない代わりにと奴隷商人に売りつけるために女子供をつれ去っていったのだ。

予想もしていなかった惨劇に村人たちは茫然とした。

そして、怒りはこのような事態を招き入れたアンナを助けた家族と男主人に向けられた。

村人たちはと一家ををなぶり殺しにし、死体をリムルの森に捨て去った。

それ以降、彼らカカル村の住人たちは、よそ者を拒み続けるようになったというのだ。

「だからその村に行っても、旅人は宝を狙って来た盗つ人と思われ  
て追い返されるだけだ。あいつらは口もきかんよ」

「おお、村を高い塀で囲っていて、夜は門を閉ざしちまう」

テナイの里の人々からもそう言われ、イズナはカカル村の一角は、  
山賊も多く非常に危険であることから、これ以上アルクメーネを連  
れて行くことはできないと説得を繰り返した。

だが、いつにも増してアルクメーネは、頑なにリムルの森に行く  
と言いつ張った。

アルクメーネ自身にも確固たる理由があるわけではない。

危険を犯して行くべき意味も説明できない。

ただ、そのリムルの森が夢で見た森と、父の姿に関係があるように思えてしかたがなかったのだ。

胸をざわめかすあの夢との関係を確かめずにはいられなかった。そして、行かなかったことをあとあとまで後悔したくはなかった。

ついには、イズナが行かなければ自分一人でも行く、ここで別れましょう、と言い出され、イズナも折れるしかなかった。

そして、翌日早朝からカカル村へと向かうことになったのだ。

馬でほぼ半日を要して、一行はカカル村にたどり着いた。

そこは噂に違わず荒涼とした大地にポツリと存在する奇妙な村があった。

その村の背景となつている山々の麓にある森がリムルの森だった。カカル村の居住区は、話で聞いた様に木の柵がぐるりと延々と村全体を囲んでいた。

一カ所だけある出入り口となる頑丈な門扉があった。今は開け放たれているが、日が暮れるとこの扉が村を守るのだらう。

周辺の畑では、村人たちが黙々と農作業をしているのが見える。

「お前たちは見えない様に隠れている」

イズナは部下達を村から遠ざけ、待機させた。

ただでさえよそ者を嫌う村人たちのもとに、集団で押しかけるわけにはいかないと判断したからだ。

村には、アルクメーネとイズナの二人で訪れた。

だが、噂で聞いた通り、旅人姿のアルクメーネたちが村人に声をかけても、ジロリと一瞥しただけで、まったく応じる気配はない。

二人は村で話を聞くことをあきらめて、そのまま畑伝いにリムルの森に向かい馬を進めることにした。

イズナとしては、森を見渡すところを見せて引き返す予定だったのだ。

ところが、アルクメーネは併走するイズナを追い越すようにリム

ルの森へと近づいていく。

「待って下さい。近づきすぎるのは危険だ。部下たちとも距離が開いてしまった。アルクメーネ！」

イズナの声が聞こえないのか、アルクメーネの背中が遠ざかる。

「くそっ」

イズナは馬のわき腹を蹴ると、速度を上げてアルクメーネの馬に追いつき、追い越し、そして立ちふさがった。

「お待ち下さいと、申し上げている」

森を背に、イズナはアルクメーネに怒りにも満ちた表情で振り返る。

「森はお見せしました。ここから先は危険です。どうしても進むと言うのなら私が納得できる説明をお願いしたい」

イズナのこれまで見せたことのない真剣な表情に、アルクメーネも言葉を詰まらせる。

ところが、森の入り口にさしかかったところで、予測しない事件が起こった。

突然巨大な一頭の犬が森の中から飛び出し、襲いかかって来たのだ。

イズナは、咄嗟にアルクメーネの前に飛び出し、飛びかかってくる巨大犬を鞘ごと剣で殴りつけた。

だが、野犬が森の中から次から次へと現れ、一行に飛びかかろうと取り囲み低く唸り、吼え始めたのだ。

馬たちの足が乱れ、混乱し始める。

さすがのイズナたちも、面倒な相手に舌打ちをした時。

「カイチ！」

アルクメーネの鋭い声が守護者の名を呼んだ。

同時に、イズナたちの目の前に突然馬ほどの大きな背丈をもつ一角獣の毛の長い白い山羊が現れた。

それまで狂ったように吠えていた野犬たちは、声を失い凍りついたようになり、やがてその場にへたりこんだ。

『去るがいい』

アルクメーネの守護妖獣カイチは静かに告げる。

『汝らのいるべき場所へ帰るがいい』

妖獣の言葉に、犬たちは尻尾をだらりと下げ、ふらふらとした足取りで、森の中へと去って行ってしまった。

その様子を犬達と同様凍りついたように見ていたイズナは、守護妖獣の突然の出現に心臓が跳ね上がりそうになった。

ナイアデス皇帝一家の守護妖獣を間近で見たこともある。

だが、それでも守護妖獣そのものの存在を見ることは畏怖を禁じえない。

しかも、初めて見るアルクメーネのカイチは、想像を超えてあまりの迫力と神々しさに胸を打たれ、動くことも目を離すこともできない。

(神の加護を受けた王の一族……)

それは、どれほど親しくなり、友人となっても、彼等が遙か遠い存在であること思い知らされる瞬間だった。

「カイチ、森の中を進みます。道を開いてください」

『御意』

「イズナ」

名を呼ばれて、ぎこちなく振り返ったイズナに、アルクメーネが静かな表情で視線を向けた。

「先に進みます。カイチがいれば危険は回避できます」

「あ、ああ」

声がかすれた。咽がカラカラに渴いていた。

これまで、身分を隠し、旅人であることにこだわってきたアルクメーネが、ここに来て初めて王族の証でもある守護妖獣を全面に出したのだ。

(何があるというんだ?)

こうまでして、この森にこだわる理由をイズナは知りたくなった。守護妖獣カイチが、一步踏み出すごとに、波紋を描くように昼で

も薄暗いリムルの森に、光量が増していく。

遠くで吠えていた獣の声はいつしか止み、風と葉のざわめく音だけが波音のように流れ、森全体が静寂が荘厳で清浄な空気に変化をしていく。

(凄い……)

イズナは、フェリエスの守護妖獣の亡き守護妖精ミュラを思い出す。

何度か見る機会があったが、そのほとんどは戦いの中での出現であり、ナイアデス皇国勝利をもたらす勝利の女神の如き象徴であった。

イズナはカイチのすぐ後を歩きながら、神々しさと重厚さに圧倒され、後ろにいるアルクメーネに話しかけることさえできなかった。守護妖獣から放たれる光は、ミュラの放っていた戦場での高揚感とはまったく異なる厳粛な気持ちをもたらせる。

守護妖獣の後ろを歩き、その主を背後に森を進み続ける。

神秘的で現実味のない夢の中にいるような時間だった。

その守護妖獣の足が静かに歩みを止めた。

「……………」

「どうしました？」

動かないカイチにアルクメーネが声をかけたとき、一行の前に四、五人の子供達が現れた。

大きく手を広げて、イズナたちが前へ進もうとするのを阻み立ちふさがったのだ。



「帰れ！ ここから先にはいるな！」

一番背の高い少年が、精一杯アルクメーネ達を睨みながら大声で叫んだ。

「帰れ！ 帰れ！」

全員が必死な形相で、絶対にここから先は通すまいと両手をいっぱい広げて、子供達が口々に叫ぶ。

初めて見るだろう守護妖獣に怯えた表情を見せながらも、真剣に瞳にただならないものが感じられた。

「帰れったら、帰れ！」

勝ち気そうな顔をした少年が怒鳴る。

「カカル村の子供か？」

さすがのイズナも意外な森の出現者にどうしたものかアルクメーネに視線を送ろうとするが、イズナの後ろにいたアルクメーネは、馬から降りて、イズナの横を通り抜けて行くところだった。

「おい」

イズナも、あわてて馬からおりる。

アルクメーネは、カイチの前に立ち、少年達と向かい合うと真摯な表情と言葉で話しかけた。

「わたし達はあなた達に迷惑をかけません。だからここを通してはもらえないでしょうか」

「ウソだ！」

即座に別の子供が叫ぶ。

「大犬のトトを殺したじゃないか！」

「大丈夫、気を失っただけです。ですが、あれはあなた達の仕業ですか？」

穏やかなだが、まっすぐに一人一人の目を見つめるアルクメーネに、子供達は興奮した様子から戸惑ったように互いの顔とアルクメ

「ネの顔を見る。

あきらかに予想外の反応にどうしていいのか探っているようだった。

「だって、森に入ろうとするよそ者は、追い返すって決めてるんだもん。帰ってよ」

大きな目をした幼い少女が自分達を弁護するように必死に叫ぶ。

「馬小屋……」

アルクメーネの一言に、子供達は全員はっとしたように表情を変えた。

その反応に、アルクメーネ自身も驚き、そして確信をした。

この森に、あの夢で見た馬小屋があることを。

「馬小屋を探しています。どこにあるか教えてくれないでしょうか？」

「……………」

アルクメーネの問いに、高いに「どうする？」「いや、だめだ」と小声でやり取りをしている子供達に、イズナが動いた。

「安心しろ。おれ達は、旅人でも盗っ人でもない。皇都コリンズから、このあたりに盗賊団が出ると聞いて調べに来た皇帝の使いだ」

イズナは腰の短剣を鞘ごと抜き、そこに記されている美しい鳥の舞い姿を印したマイリージア家の家紋を見せる。

本来なら、子供など無視して進むことなど容易かったが、アルクメーネの態度からそれは許されないことを感じていた。

「おまえ達を盗賊から守るために来た。だから……」

イズナが、子供に家紋を見せても通じるか半信半疑でとつた行動だったが、効果はてきめんだった。

「人買いじゃないんだな？」

「本当に、悪い奴を捕まえに来たの？」

「あの子を追いかけて来たんじゃないの？」

「悪い人じゃないの？」

「本当に？ 本当なの？」

子供達は、イズナの言葉に呼応するように思った言葉を口々に声に出し、叫び出した。

そして、それまでのこわばった表情が消え、求めすぎるような顔になる。

「この動物は、守護妖獣といって王の使いの証しです」

アルクメーネが、カイチを示しさらに子供達の警戒を解こうとする。

その言葉にカイチが従う。

ひと声高く吠えたと、突然風が起こった。

森の木々が揺れ、葉がまるで波音のように一斉にざわめいたかと思つと、彼らのいる場所が眩しいほど光に満たされ輝いた。

「すげえー」

「……………」

「まぶしい」

目を真ん丸くしたまま、口をぽかんと開けてカイチに目を釘付けにしている子供達に、アルクメーネが誠実に再度言葉をかける。

「お願いします。その馬小屋に案内してください」

アルクメーネの必死な様子に、子供達は守護妖獣とアルクメーネを交互に見つめた。

「どうして馬小屋を探してるんだ？」

「それは……………」

「理由をちゃんと言え」

背の高い少年が、ゴクンと喉をならしながら睨むように問いかける。

「夢で……………」

アルクメーネは言うしかないと思った。

「夢で、私の父がそこへ行けと……………」

「……………」

背の高い少年がクルリと背を向る。

（だめなのか？）

アルクメーネの中に一瞬失望感が漂う。

その時。

「こっちだ」

少年は固い声でそういうと走り出した。他の子供達は戸惑った顔で互いを見詰め合ったが、すぐにその少年の後を追って走り出す。

「感謝する」

アルクメーネも子供達の後を追って、走りだした。

「おい！」

この状態がわからず取り残されたイズナが、あわてて馬に飛び乗ると残されたアルクメーネの馬の手綱を取り、どんどん走って行く子供達の後を追いかける。

深い迷路のような森だった。

カイチはアルクメーネの脇にびたりと付き従い、森の獣が姿を現すことさえ禁じるようにさらに一度吠えた。

すると見る間に、必死に走る子供達と主人の行く手にある背の高い草木が左右に倒れるように傾き、障害物が取り去られ、馬が通れるほどの道ができる。

やがて、アルクメーネはたどり着いた。

夢で父カルザキア王が示したとまったく同じ、古びた馬小屋を。

「おれ達、村から水を汲みに出た山の中で、人さらいに捕まって、ゴラに連れてかれて、人買いに売られるところだったんだ」

先頭を走っていた少年が振り返り、息を切らし、目に涙を浮かべてアルクメーネに話しかけた。

「その時、助けてくれた奴がここにいます。でも、村には、どんなことがあってもよそ者は家の中に入れない掟がある。だから、だれも助けてくれないんだ。親父も関わるなって言う。あいつら、ケガしながら、必死にここまで、森までおれ達を助けて連れて来てくれたのに……。だから、ここに入る前に約束してくれ」

少年は、唇を噛み締め、じっとアルクメーネの碧い目を見つめた。本当にこの人物を中にいれてもいいか最後の決断をしようとして

いるようだった。

「あいつは……ケガをしてる。熱もずっと出てる。でも、もう六日も何も食べていないんだ。食べると吐くし……。このままだと死ぬかもしれない。だから、絶対に助けてほしいんだ。おれ達、子供で何もしてやれないから、あんたに助けてやってほしいんだ……」

少年の目からも、そばにいる子供達の目からも涙がポロポロとこぼれ落ちる。

「助けて」と嗚咽しながら涙を両手で拭う。

(この中に誰がいるというんだ?)

夢に導かれるようにたどり着いた森の中の馬小屋の前に立ち、アルクメーネは木の扉をゆっくりと開けた。

最初に飛び込んで来たのは、真っ暗な小屋の中央に立っている少年の黒い双眸だった。

「!」

ドクンと大きな鼓動がアルクメーネの全身に響き渡った。

その強烈な意志を感じさせる瞳はアルクメーネを凝視していた。

しかし、アルクメーネが一步、狭い馬小屋の中に足を踏み入れると、ガクリとその場に両膝を着き、そのまま崩れるように倒れた。

「おい」

アルクメーネは慌ててその子を抱き起こそうと手を伸ばす。

だが、少年はその手を拒み、弱々しい動きで、光の差さない小屋の隅を指さした。

「?」

そこに積まれたワラの中に埋もれるように、ぐったりと横たわっている子供の姿があった。

アルクメーネは近寄り、思わずその頬に触れる。

触れる前から指先に熱が伝わり、その子供がひどい高熱に襲われているのがわかる。

「……………」

アルクメーネはどうして自分の鼓動がこれほどまでに波打ち、響

き、焦燥感に駆り立てるのか分からなかった。

「おい、なにがあつたんだ？」

外から、追いついて来たイズナが飛び込んで来る。

アルクメーネはワラの中の子供を自分の両腕で抱き上げると、もう一人の倒れている黒い瞳の少年をイズナに目で示す。

「この子達を連れて帰ります。一刻も早く薬師の療法をうけさせなければ……」

腕の中の意識のないぐったりとした重みのある小さな体は、湯気がでるほどの熱さを放っていた。

アルクメーネは自分でも理由の分からない心と体の震えに、不覚にも涙が込み上げて来そうになり、思わず叫んでいた。

「急ぎます。このままでは、この子は……この子は……死んでしまいます！」

アルクメーネの腕の中で、ルナは死の淵をさまよっていた。

第15章 導き - 10 - (後書き)

第15章 導き 終了

澄んだ深夜の空気が満月の瞬きを一層美しく輝かせる満天の夜空。月の光がなければ、歩く道先さえ見えない漆黒の闇の世界。

人々は闇の訪れとともに、常に月の輝きをその目で追い求めた。

その夜、静寂さが包む満天の星空の中、月はより冴え冴えとした銀色の輝きで地上を照らしていた。

ナイアデス皇国の地方領口ゼリア伯爵の館の庭に螢火のような松明の頼りなげな灯火が揺れ、真夜中の静寂を打ち破る馬車の車輪の音と、馬の蹄鉄の音といもなく声が響き渡った。

正門の警備兵をけちらすばかりの勢いで駆け込んで来た口ゼリア家の紋章の入った馬車が止まり、正面玄関の前に止まると扉が開く。中から、イズナとアルクメーネの姿が現れた。

二人は、馬車から降りると大声で使用人たちを呼び、部屋の用意など次々と指示を言いつける。

アルクメーネとイズナの腕の中には、ぐったりとした二人の子供の姿があった。

偶然森の馬小屋の中で瀕死の状態にあった子供達をアルクメーネが見つけたのだ。

高熱におかされ一人は瀕死の状態であり、もう一人もまた意識はあるものの体力を失い動けないでいた。

どこの国の人間なのか、身元さえもわからない子供を連れ帰って薬師に見せる、とアルクメーネが言い張り譲らなかつたのだ。

イズナは関わりたくはないのが本音であったが、見つけてしまった以上放っておくわけにもいかず、やむを得ず従う形になったのだ。国境を越えて来たという二人の子供に興味も関心もないイズナとは対照的に、アルクメーネは蒼白になるほど心配し、助命しようと



必死だった。

その様子は本来なら奇妙ともいえるのだが、これまでのアルクメーネの突拍子もない行動を見て来ただけに、イズナ自身感化されてしまったのか、気がつけば自ら馬を飛ばし寝ていた薬師をたたき起こし、館に連れて来たところだった。

「アルクメーネ、いま帰ったぞ」

子供を寝かせている部屋に、やせた中年の薬師を引きずるようにして部屋に入って来たイズナの目には、死んだようにベットに横たわっている深緑色の髪の子供と、離れずそばにいた様子のアルクメーネの姿があった。

そして長椅子の上には、ぐったりと横たわっている黒髪黒瞳の少年が映る。

黒髪の子供は、別部屋に寝かせるよう指示をしたはずなのだが、別々にするのをひどくいやがり抵抗し、今いる場所から動こうとしないのだと執事がイズナに説明した。体は動かないはずなのに、その強固な意志の強さに誰もが手を出せないというのだ。

少年はイズナが入って来たときも、動かない体でありながら警戒するような鋭い視線を向け続けていた。

「お願いします」

アルクメーネは、自分の座っていた椅子から立ち上がると薬師を座らせる。

しかし、思い詰めたようなまなざしは、薬師が脈を取り、熱を確認する様子を見ながらも、苦しげな呼吸をする子供　ルナ　から視線を話せない様子だった。

「お二人は、部屋を出ていただけますように」

薬師の言葉に、イズナはハツとした様で、あわててアルクメーネの腕を強引に掴み部屋から出るよう促す。

「出よう」

しかし、アルクメーネはその手を拒む。

「嫌だ。わたしはここに残る」

「それは認めません」

イズナは今度は従わないという意志をこめてアルクメーネを掴む腕に力を込め、他の人間に聞こえない程度の声で強い口調で言う。

「このガキ共が変な流行病にかかっていたらどうするんです。失念していたおれも悪いが、帰国間際の皇太子殿下を病気にさせるわけにはいかないんだ。薬師は連れて来た。あとは彼にまかせればいい、これ以上そばにいる必要はない。さあ」

イズナは、留まろうとするアルクメーネに互いの立場を認識させようとした。

「わがままはここまでだ。おれの立場も考えてほしい！」

身長体重、体力ともにアルクメーネよりも勝っているイズナは、アルクメーネの抵抗を完全無視して、強引に部屋から連れ出した。

部屋の扉が閉まるのを確認すると、イズナは再び厳しい顔でアルクメーネを見た。

「冷静になつたらどうなんです。あなたとあの子供らはなんの関係もない。助けてやる義理もない。なのにこうして、屋敷に連れ帰り薬師に診たてさせているんです。特例として、回復するまでこの館で面倒をみてやっても構わない。しかし、これ以上あなたがこの件に関わるのは、やめていただきます」

いままで村や町の人々に示して来たアルクメーネの数々の行動に、驚きながらもイズナは徐々に共感を寄せ始めていたのも事実だった。だが、今回の件は別だった。

アルクメーネの身に万が一のことがあれば、ナイアデス皇国とノーストル王国の外交問題に発展する。

理由はともあれ、アルクメーネがイズナと訪れた館で、病気になる仮に死亡でもするようなことがあれば、それがすべてアルクメーネの希望だったとしても、真偽は問わず二国間の関係が悪化することは想像するに難くない。

そうなれば、ノーストルのテセウス王をはじめシルク・トトウ神の転身人アウシュダールの逆鱗に触れ、再び敬愛するフェリエスを、

ナイアデスを危険な立場になる。

そんなつまらない賭けは御免だった。

「ご自分の立場をお考えください」

イズナの繰り返し諭し諫める言葉に、アルクメーネは沈痛な表情を浮べて目をそらし、背を向けた。

「あとは、お願いします」

そうつぶやくと、静かに自分の部屋へ向って歩き始める。

「……………」

イズナは、ほっとしたように小さく息を吐き出し、その後ろ姿を見送りながら、心配そうに様子を見ていた執事に声をかけた。

「こんな時間の上、あわただしくてまいった。食事は用意できるか？」

「はい」

「では頼む。簡単でいいからな」

着替えるために自分も部屋に向かいながら、イズナはバンダナをしっかりと結びなおした。

「やっかいなことにならないといいんだが……………」

そう独り言をつぶやきながら。

自分の部屋に戻ったアルクメーネは、窓辺に近づくと夜空を見上げた。

宵闇の空高く、遠い異国にあってもノストールの民を見守り続ける守護神・アル神の銀盤の姿が輝いていた。

「今日は天満月でしたね」

アルクメーネは途方に暮れたように、月を見上げたまま、深いため息を吐き出す。

イズナの言葉はもつともだった。

適切な処理だということは痛いほどわかっていた。

王家の人間は、たとえ肉親であっても流行病を患っている者の病床には一歩たりとも近づくことは許されなかった。

感染し次々と病人や死者が出れば王家の存続はもとより、国の安定を揺るがすことになるからだ。

「わかっています……でも……」

アルクメーネは、自分の体を両手で抱き締めるようにしてきつく目を閉じた。

しかし、心の奥底から自分をつき動かす激しい感情にあらがうことは不可能に近かった。

「あの子のそばにいてあげたい……助けたい……死なせたくない……」

ただの通りすがりの存在のはずなのに、アルクメーネの心はひどく動揺していた。

その理由を何度も考える。

亡き父王が夢で示した場所にあの子たちがいたからなのか？

死にそうな子供だったからなのか？

いくら考えても説明はつかない。

それ以上に説明のつかない激しい感情が自分を突き動かすのだ。

そばにずっとついていてあげたい。離れたくない、と。

高熱に苦しんでいた少女を馬車の中で抱きかかえながら、アルクメーネはあらゆる感情が沸き上がり心を支配していくのに戸惑った。嬉しさと喜び、悲しさ、辛さ、怒り、悔恨。

腕の中のぐったりとした少女の顔を見つめっていると、心が苦しくなった。

見知らぬ国で病になり、あの暗い小屋で倒れたまま心細くはなかつただろうか。

熱で苦しくはないだろうか。体力はあるだろうか。

ひよっとして、このまま死んでしまうのではないだろうか。

そう思うと、屋敷に運び、薬師がそばにいる今も、いても立ってもいられなくなる。

「どうしたら……」

その言葉に出したとき、アルクメーネは今と似たような出来事が幼いころにあったことを突然思い出す。

遠い記憶の中で、アルクメーネは、やはり今日のように病気の誰かに会うことを堅く禁じられたことがあったことを。

(あれは……誰だった……?)

濃い霧の中で、微かな記憶が蘇る。

小さな小さな手がアルクメーネの差し出した人差し指を堅く握り締めたことを。

その手があまりにも熱くて、アルクメーネは次に額に触れ、頬に触れ、燃えるような熱い肌に驚き、叫ぶように兄の名を叫んだのだ。

「すごい熱がある。セレに知らせよう」

テセウスの声はつきりとよみがえる。

その後、アルクメーネたちはその部屋に近づくことを許されなかった。

「冷たすぎます。どうして父上はそばにいてあげたいという気持ちをおわかってくださらないんですか？」

父カルザキア王にどれほどそばにいたい、顔が見たいと、訴えて

も聞き届けられなかった苦しい日々。

早く会いたいと祈り、願い、静寂に城中が満ちたあの時。

アルクメーネにとつての衝撃は、そのあと知ったある出来事だった。

病気が回復し、もう会ってもよいと父から告げられ喜んで部屋に飛び込み、小さな寢床をのぞき込んだ時のことだった。

まだ言葉さえまならない小さな弟が、なぜか父と母の守護妖獣の名を何度も何度も楽しそうに呼んでいるのだ。

あとで、父と母の守護妖獣、イルダーグとネフタンが夜の間ずっと付き添っていたのだと知って、アルクメーネたち兄弟はひどく怒った。

それが許されると知っていたら自分たちも同じことをしたのに、と。

(あの時は、悔しくて、悔しくて眠れなかったな……)

自らの守護妖獣を、自分のそばから別の人間のもとへ付き従わせるとというのが、容易なことではないと知ったのは間もなくだった。

守護妖獣にも意志がある。主人のそばから離れる必要がないと判断した場合、命令であっても決して受け付けない。

逆に、その命令が主人にとり必要性が生じたとき、守護妖獣は自らの意志で行動を決めることもあるのだと。

だから、その後両親の真似をしようとカイチにいろいろなことを命じたものの、無視されたことが幾度もあった。

それがある時、自分が知らない間に弟がカイチと言葉を交わしていたことを知った。

「嬉しいのにとっても複雑な心理でした」

月に語るようにアルクメーネはそうつぶやいた。

いまの自分になら可能かもしれない、たったひとつの事をアルクメーネは実行しようと守護妖獣を呼び出す。

「カイチ」

一角獣の白い山羊の姿をした妖獣は暗い部屋の中央にその姿を現した。

『ここに』

「お願いがあります。わたしの代わりに、いま病で苦しんでいるあの少女のそばにいてあげてほしいのです。ノストールの民とは関係のない人間かもしれない。守護者のもとを離れないのが守護妖獣だとわかっています……でも……」

『御意』

カイチの返事に、アルクメーネは呆気にとられたように言葉を失った。

無理を承知で、しかしなんとしてでも説得して命じ従わせようと覚悟を決めていたのだ。

それが、予想していた拒否にあわないどころか、カイチは即答で受けたのだ。

「カイチ……？」

いつもはなにかと教訓や難しい理屈を並べ、その命令が過去の王の行動と照らし合せて正しい方向であるかなど、感情のみに支配された行動を慎むように促すことが当たり前の、そのカイチの快諾とも言える返事に、アルクメーネは嬉しさよりも、やや呆然として自分の守護妖獣を見つめた。

『アルクメーネ様』

カイチは重々しい響きのある声で主人の名を呼んだ。

『あなたはわたしにこの数年、「なぜ、主の質問に答えないので？」と問いかけを続けて来られました』

アルクメーネは、命じたこととは掛け離れている唐突すぎるカイチの言葉に、なにを言い出すのか見当もつかないままうなずいた。『あなたは、忘れている記憶を教えてくださいと、わたしに問い続けて来られました』

わたしには忘れている記憶があるはずです。カイチは知っているはずです。それを教えてください。

アルクメーネは問い続けてきた。

いつの頃からか、城の中に漂う空気が変わっていた。

国全体の雰囲気も、人々の表情も、気が付いたときにはなにかが変わっていた。

それは、父カルザキア王が亡くなる前からだった。

アウシュダールがアル神の御子シルク・トトウ神だと名乗ったことによる高揚感があっても、なにかを失っているような欠落感が付きまとった。

そしてそれを感じる時、はるか遠くから自分を呼んでいる誰かの声を感じていた。

ずっと心の中でうずき続けていた感情が、アルクメーネを時折、わけもなく不安にした。

その理由を知りたくて、カイチに問い続けて来たのだ。

だが、カイチはその質問を無視し続けてきた。反応をみせる素振りさえしなかったのだ。

それなのに、なぜこんな時にカイチがそのことを口にするのかわからなかった。

ただ、黙ったままその先の言葉を待つ。

『時に…… 答えない、ということが、そのまま答えである場合があるということだ』

「答えないことが…… 答え？」

カイチの言葉を繰り返したとき、それを確認したように守護妖獣は姿を消した。

「答えないことが…… そのまま答え……」



アルクメーネは、守護妖獣が意味のない悪戯な問いかけをするなどないことを十分わかっている。

カイチが去った後、アルクメーネは月を見上げながら、心に渦巻く疑問をすべて鮮明にしたいと願わずにはいられなかった。

「熱さましの薬草を与えておきました。が、残念ですがわたしの出来ることはここまでです。他に打つ手立てはもうありません。高熱の上、衰弱が激しく今まで持ちこたえていたのが不思議なぐらいです。すからな。この様子では、一晩もつかどうか……」

イズナは自分の部屋の長椅子に体を投げ出すように座り、この地方の白水酒を大きめの細長い透明なグラスにたっぷり注ぎながら、帰りにそう告げた薬師の言葉を思い返していた。

「もう一人の子供の方は、病気というより旅の疲労と睡眠不足、そして極度の空腹が原因です。食事をしてぐっすり眠れば、すぐに元気になるでしょう。それにしても、子供にしては強靱な精神力をもっている。ふつつなら、意識を失ってもおかしくないほど、衰弱しているんですね」

（死んでくれたほうが……面倒はないな……）

イズナは白水酒を一滴のこらず飲み干すと、大きく息を吐く。

あの子どもたちを見つけてからのアルクメーネの様子は、どう考えても尋常なものとはいえなかった。

ふだんの冷静沈着な仮面を投げ捨てたような取り乱し方だった。

それも、身元もわからない死にかけた子供に。

（まさか、ノストールからの密使か？）

そう考えるとなんとなくしっくり来そうだったが、アルクメーネをこの地へ誘ったのはほかならない自分自身であり、出発先さえ直前まではつきり告げていなかったことを思い出して、イズナはその考えを打ち消した。

密使と考えるのは、どう考えても不自然だった。しかも子供だ。

（いっそのこと、このまま死んでくれれば、いい。なにも起きな

ったこと出来る)

ふと、イズナは、緑色の髪の子どもが死んでしまっただらアルクメーネは今以上に取り乱すような予感を覚えた。ひどく悲しむような気もした。

(まあ、年老いた他国の年寄りを放っておけない王族らからぬ部分はあるし……)

とにかく、面倒なかかわりだけはゴメンだった。

アルクメーネに何かある度に、イズナは何故だか目に見えない不安に陥るのだ。

護衛、監視、友人。それ以上の感情が芽生えるのは危険なことだった。

アルクメーネの背後には、フェリエスを危険に追い込んだあのアウシュダールがいるのだ。

(明日は強行軍で城に帰ってやる)

アルクメーネに傾く情、そして自らの中の混乱した感情を打ち消そうとするように、イズナはグラスに白水酒を注いでは、あおるように飲み続けた。

ルナは高熱にうなされながら、悪夢の中をさまよっていた。それは、ハーフノーム島で暮らし始めた最初のころに見ていた夢によく似ていた。

だが、繰り返される悪夢は現実にかけてしまった出来事だった。破壊、人の悲鳴、血飛沫、横たわる亡骸、そして黒い影。ブレアの町に突然襲いかかった悲劇。

黒い影の妖獣。

そして不吉な予言。

ルナは夢の中で自分の身に降りかかった出来事にうなされ続けた。いた。

あの日、畑仕事を終えてランレイと二人で町に戻り、ネイの待つ宿に近くまで来た時、町の空気が変わった。

逃げ惑う人々の恐怖に満ちた顔。

何かが破壊されている轟音が響き渡り、空気を揺らし、地鳴りが体を揺らした。

(あいつだ…)

ルナは直感した。

何故かはわからない。

だが、あの妖獣・ヴァルツが町を襲っていることを直感したのだ。

(まさか、追いかけて来た?)

イルダーグを襲い、殺した妖獣。

父を殺したサトニとともにいた存在。

あの時、ヴァルツはルナの怒りに興味を示し、その怒りをさらに引き出そうとネイを殺そうとしたのだ。

(また自分のせいで、誰かが死ぬ…)

忘れようとしていた忌まわしい記憶が蘇り、ルナは、ランレイと

ともに逃げてくる人々に逆らうようにネイの待つ宿へ向かって走り出した。

宿まで一本の道を全速力で走っていたルナの体が突然吹き飛ばされた。

真横からいきなり飛び込んできた来た黒い影に襲われたのだ。道からはずれた高い草むらの中にたたきつけられたルナの体は、立ち上がる間もなく再び大地に叩きつけられた。

目の前に現れた強大な黒い影がルナの体を押さえつけていた。人間でも、動物でも、見知った妖獣でもない妖しい黒い影。

獣の影に酷似しているが、それははつきりとした輪郭をもたない黒い霧のような存在だった。

ククククク……見ツケタ……

「！」

何度も耳にした聞き覚えのある声にルナは一瞬にして血の気が引いていくのを感じた。

父の守護妖獣イルダーグさえ、死に追いやるほどの瀕死の重症を負わせた相手。

エーツ山脈で出会ったときも、アンナー族のエリルが現れなければ助からなかったかもしれない。

だが、その頼みのエリルは隣町まで行っていて、今はいない。

才前八、我ニフサワシイ心ヲモツテイル。同ジ心。誰ニモ必要トサレナイ苦シミニ満チテイル。ソシテ全テヲ失ウ恐レの心。

その言葉に、ルナはカツと目を見開いた。

怒りが体を支配していく感覚が熱さを生み、ヴァルツを睨みつける。

「お前と、同じだなんていうな！」

ソノ怒リハ、忘レラレタ恨ミ。捨テラレタ恨ミ。闇ノ心ハ、我ニ同調スル。モット怒ルガイイ、我ニモソレヲ望メ。ソノ苦シカラ解放シテヤル。楽ニナレル。

「うるさい……」

ルナはヴァルツが自分の心を見透かしているのではないかと恐れながら、叫んだ。

「誰も恨んでなんかいない。忘れられたのは悲しいけど、恨んだりしていない。捨てられたなんて思っていない！ お前なんか、楽にしてもらわなくていい！」

この妖獣に恐怖は感じなかった。それより、突きつけられる言葉がこらえてきた心に突き刺さって痛い。

「おまえと同調するくらいなら、楽にならなくてもいい！」  
全身全霊で叫ぶ。それが、精一杯の抵抗だった。

デハ、死ノ間際ニ許シヲ乞ウガイイ。死ニタクナイト心ヲ渡セバ、許シテヤロウ。 助ケテヤロウ。

ヴァルツはそう告げると、ルナの首筋めがけて大きく口を開く。鋭い牙が襲いかかるうとしたその時、悲鳴が上がった。

「ヴァルツ！ 助けて！」  
黒い妖獣を呼ぶ子供の声が聞こえた。

その声に反応してヴァルツは攻撃を止め、消え去った。  
ルナは慌てて立ち上がり声をした方を探す。

町と反対方向の一面畑が広がるその場所に、あのサト二の姿があった。しかも、サト二はランレイに追いかけて捕まる寸前だった。

「ランレイ？」

ランレイがサト二を追いかけていることに驚いたものの、ルナはすぐに気がついた。ヴァルツが突然ルナを襲うのを止めた理由を。

ヴァルツにとって、サト二は庇護すべき存在なのかもしれないとルナの視界で、サト二の腕をつかみ飛び掛ったランレイと、そのランレイに襲いかかるヴァルツの影が一つになる。

「ランレイ！！」

ルナは悲鳴を上げて走り出した。

（サト二が、ヴァルツの主人なの？ ヴァルツは守護妖獣なの？）  
守護妖獣リユーザの主であったルナに浮かぶのは、それしかなか

った。

「ランレイーっ!!」

叫びながら、ルナは必死に走った。

草の背が高く、消えた三人の姿はルナからは見えない。

不安と恐怖が広がって行く。

あの妖獣に襲われたら、ランレイは助からない。

なのに、ランレイはルナを守るうとサトニを見つけて囿になろうとしたのだ。

(死なないで！ ランレイ、死なないで！)

ルナの緑色の瞳から涙があふれていく。

その時、青い閃光が走った。

光は、ランレイ、ヴァルツ、サトニがいたはずの地点に達すると、光の渦を巻き起こし、音もなく消滅した。

「?!」

ルナは光の放たれた方向を反射的に見る。

数人の人影がそこにあった。

「おーい！ 大丈夫かい！」

若い男の声が遠くからルナに向って呼びかけていた。走ってくる様子がわかる。

ルナはそれを認めながら、ランレイの姿を探し続けた。

「ランレイ!!」

ようやくたどり着いたその場所に、うずくまって倒れているランレイの姿があった。

サトニとヴァルツの姿は消えていた。

「大丈夫？ ランレイ、大丈夫？」

真っ青になって駆け寄るルナに、ランレイは両手に持ったイルダグの牙を見せながら、大丈夫と示すように体を起こし立ち上がった。

「よかった」

安堵したのか、体から力が抜けてしまいルナの方がランレイの手

をとつたままその場にひざを突く。

しばらくすると、さきほどの男性の声と共に人影が現れた。

「大丈夫だったかい？」

声にふり返り顔をあげたルナは、驚いたようにその人物を見た。意外にも若者の姿がそこにはあった。

十代半ばのまだ少年のようなあどけなさが残る顔立ち。

だが、ルナがその緑の瞳を丸くしたのは、それだけではなかった。黒い髪に紫の瞳、そして紫の長衣に身を包み杖を手にしていたその姿だった。

それは、アンナの一族の者である証だった。

「こんなところに妖獣が出るなんて聞いたこともないから驚いたよ。本当は捕獲しようと思っていたんだけど、まだまだ力不足らしくて逃げられてしまった」

少し悔しそうに穏やかな表情をした若者のアンナは、ルナとランレイを交互に見ながら、安心させるようにほほ笑む。

「わたしはアンナの一族の者。名はオージー。怪しいものではありません」

礼儀正しく挨拶をしてみせると、後ろを振り返り、後から追いかけて来た同じ年頃の二人の女性のアンナを杖で示した。

「彼女たちは、わたしの仲間なんだよ。マティスと、エティス」

そう紹介されたアンナを見たルナの表情が固まった。

思わず目が会う前に視線をそらせてしまう。

最後に紹介された女性を、ルナは知っていた。

年月を得て、背も高く、髪も伸び、大人びた姿になってはいるけれど、ひと目でルナの名付け親のエティスだとわかった。

思わず、その名を呼んで抱きつきたい衝動に駆られる。

だが、動けなかった。

兄のテセウスでさえ、自分を忘れていたのだ。

自分はもはや、ノストールの第四王子ではない。

エティスもまた、自分を忘れているかもしれないという不安に、

ルナは呼びかけることも、立ち上がることができなかった。

「大丈夫かい？」

妖獣に襲われた恐怖に身をすくませているのだと勘違いしたオージーが、穏やかな笑みをつくって歩み寄り、ルナに手をさしだして立ち上がらせる。

「あ……」

ルナは、エディスに気をとられていてオージーにお礼を述べていないことに気がついた。

「ありがとうございました。その……助けていただいて」

礼を言ったものの、視線を下ろしたまま顔を上げられなかった。

ルナは、自分を見ているだろうエディスの顔を見るのが怖かった。エディスが自分を忘れているならば、兄のテセウスに会った時と同様、自分はただの見知らぬ人間なのだ。

名を呼んで駆け寄ることもできない。

テセウスの時のように、他人を見るように自分を見つめる瞳に出会うのは嫌だった。

ルナは恐怖と動揺を隠そうと必死に耐えていた。

だが、涙は自分の意志と関係なく瞳にあふれて、頭を上げれば涙は間違いなくこぼれ落ちてしまいそうだった。

「怖かったでしょう？ でも、あの妖気はただの妖獣じゃないわね。とっても離れた場所にいたのに、鳥肌がすごかったんだもの。ケガははなかった？」

マティスと呼ばれたアンナが、ややこわばった声でランレイにたずねる。

ランレイはコクリとうなずき、気遣うように隣のルナを見つめる。「どうしたの？」

エディスの声が自分に向けられたのを知って、ルナはより一層身を固くした。

懐かしい声の主は、心配そうにそう声をかけ、ルナの前まで来ると顔をのぞき込もうとする。



ルナは反射的に、エデイスから顔をそむけた。

同時に、涙が滴となって地面の上に落ちる。

この場から逃げ出してしまいたかった。

エデイスの目に他人として写る自分を見たくなかった。

「どうしたの？」

再びエデイスのささやく声がルナの耳元にとどく。

「わたしの名付け子」

はっとして、ルナは顔を上げた。

そこにエデイスの紫色の美しい瞳があった。

心配そうに、けれど懐かしそうにルナを認める瞳がそこにあった。

「エデイス……？」

エデイスは、ほほ笑みながら慈しむようにルナをそっと抱き締め  
た。

ルナから町が襲われた話を聞いた三人のアンナたちは一緒にブレアの町へ同行した。

町は半壊状態だった。

ケガ人も多数出していたが、幸い死者はなく、妖獣を退散させたアンナたちを連れて戻って帰って来たルナたちを町の人々は褒めたえた。

だが、ルナたちが世話になっていた宿は、元の姿が跡形もないほどの壊滅状態だった。

呆然と立ち尽くすルナとランレイを、顔見知りの住人たちが、ネイと宿の女主人が運ばれたという家に案内してくれた。

そこには、腕から足にかけて、全身を幾重にも布で傷口を覆われ、苦痛にうめいているネイの姿があった。

家の主人は「ネイは、突然現れ襲ってきた黒い影に、逃げずに必死に町の人々を安全な場所に逃がすために働いてくれた」と、涙ながらにその時の状況を話してくれた。

全身は血に染まり、蒼白な顔のネイの姿に、泣き崩れんばかりのルナを、アンナたちは口々に励ました。

「マティスは療法術を心得ているんだ。旅の必需品の薬草もたっぷりある。痛みもすぐに消えるから安心していいよ」

オージীর言葉にうなずき、マティスも術を行使すれば、翌日には意識も回復するとの太鼓判を押ししてくれた。

また、負傷した多くの人々の為に、エティスも薬草でケガの手当てを行い、オージীরは、今後妖獣が町を襲わないように、町の東西南北にラジ紫水晶石を用いての結界をはるなど、町の人々から少しでも恐怖を取り除こうと、全面的に協力をしてくれた。

それでも人々の恐怖心は簡単に拭い去れるものでもなく、町の通り昼間になっても静まり返っていた。

翌日の夕方、ルナはエデイスに声をかけられて、町の高台にある一番高い樹の下に二人きりでやってきた。

「あの……エデイ……ス……」

ルナは、どう言葉を切り出していいかわからない不安な表情でエデイスの名を呼んだ

再会した後、エデイスはほほ笑みかけてくれるもののルナの名を呼ぶことはなかった。

もちろん、ヴァルツに襲われた人々を手当するのに寝る間もないほどの多忙さで、ルナは邪魔をしないように遠くから見ておくしかできなかったのだ。

大木の下に共に並んで腰を下ろすと、エデイスは優しい眼差しでルナを見つめた。

「ジーンという名前と呼ばれているのですね」

その問いかけにルナはうなづく。

「ルナ様」

エデイスにそう名を呼ばれ、ルナの心臓の鼓動が全身に大きく響き渡った。

ずっと誰かに、その名を呼んでほしかったのだ。

願いが叶えられた喜びにルナは心が満ち足りていくようだった。

「私は、名付け子のあなたのことを忘れたことはありません」

自分の名を呼んでくれる人がいることが、こんなにも嬉しいことなのだ。ルナは改めて知る。

エデイスを見つめるルナの翠の瞳から大粒の涙がこぼれ頬を伝う。

「教えてください。なにがあったのですか？」

エデイスの問いかけに、ルナは涙を拭いながら大きく頷いた。

そして、これまで誰にも語る事の出来なかった話を、堰を切ったように話はじめた。

シャンバリアの村での大火災の時、助けられた子供と城で出会ったこと。

それがアウシュダールだったこと。

アンナのメイベルにさらわれ、崖に追い詰められ、飛び降りたこと。

ハーフノーム島で助けられ、海賊の頭夫妻の子供として育てられたこと。

その母イリアの死後、ノストールへ帰されたものの、父カルザキア王がサトニに殺され、その殺害者と間違われたこと。

エーツの山でアウシュダールの手にかかり死んでいった多くの子供たちと、その記憶をルナに見せ襲い掛かってきた妖獣ヴァルツのこと。

砂漠で兄テセウスと出会い指輪を渡したが、テセウスの守護妖獣ザークスが「時が来るまで」と名乗るのを止めたこと。

今は、父との約束である、カルザキア王の祖父に一族が追放されたディアードをノストールに呼び戻すために、父からの伝言を伝えるために旅をしていることを。

話を聞き終わったエデイスは、ルナの頬を両手でそっと包み込んだ。

「大変なことばかりでしたのね」

ルナはずっと胸の奥にしまっていた苦しい思いを打ち明けることが出来たことで、救われたように安堵の表情を浮かべていた。

「エデイスも……ぼくのこと忘れてると思った」

「忘れはいたしません。ただ、ノストールへ入国したのは、ルナ様とお別れしたあの時が最後でした。あれから私たちはノストールから入国要請を求められていませんし、使いの者さえ受け入れられなかったと長サーザキアは話しています。ルナ様がいらっしやらなくなつてからのノストールの様子は風の便りでしかわかりませんでした」

ルナは、初めて聞く話にじつと耳をすませた。

「ある時期から、シルク・トトウ神の転身人と名乗るアウシュダール王子の存在が聞こえるようになった時、奇妙な胸騒ぎを私達一族の者は誰もが感じておりました。私たち一族の知らない王子の名前

があらゆる国に広まっていくばかりで、ルナ様がどうしていらつしやるのかと、私はずっとルナ様の身を案じていました」

アウシュダールのことに話が及んだとき、ルナは自分の顔がこわばるのがわかった。

「エディは知ってたの？　ぼくが本当は捨てられていた子どもだったっていうこと」

ルナは、アウシュダールに告げられ、父カルザキア王から聞いた真実を、どうしても確認せずにはいらずに意を決して問いかけた。

「捨てられていた子ではありませんよ」

エディスは、夜空に輝く満天の星空と、煌々と輝く銀盤の月を見上げながら、ルナの言葉をそつと否定する。

「四番目の王子様が生後間もなく亡くなられた時、クロト様は大切な弟王子を返してくださいとアル神にお願いをされました。大好きなおやつを抜いて、弟を返してくださいと。その姿を見て、アルクメーネ様も、テセウス様もお兄様方は三人で共にアル神に祈られ続けたとお伺いしました。そして、私が初めてノストールへ行ったその日の夜。アル神の光りに導かれて、森の中の湖で、私たち四人はルナ様と会うことができました」

「ドルワーフ湖？」

「はい」

ルナは、満月の夜や、何かあったときには必ず兄たちが城を抜け出してドルワーフ湖に連れて行ってくれたことを思い出す。

「お兄様方は、アル神が大切な弟を返してくれたととても喜ばれていました」

「でも、ぼくは……男の子じゃない……」

複雑そうなるルナの表情にエディスは首を横に振る。

「クロト様は『男の子の体が死んでしまったから、女の子の体になつたんだ』『銀色の髪はアル神が帰してくれた証だ』って言われていました」

「クロト兄上が……？」

ルナの脳裏に、大好きな兄たちと過ごした日々が津波のように押し寄せて来る。

「カルザキア王もラマイネ王妃も、あなたをあたたかく迎え入れられたと、テセウス様から伺いました」

「みんな知ってたんだ……」

不思議なことにエディスが語った言葉は、いままで重くのしかかっていた出生の秘密という戒めから、ルナを解放した。

「でも……本当は生きていたんだよね。死んだと思っていた弟の王子が……。だから……。あいつ、すごく怒っていたんだ」

ルナはアウシュダールと初めて出会ったとき、自分がなぜ憎しみを込めた瞳で見つめられるのか理解が出来なかった。

『僕のを……返せ』

『返せ！ 返せ！ 返せ！』

耳から離れない怒声。

「アウシュダール……あいつが王子だったのに、ぼくが全部自分のものだと思っていたから怒ってたんだ……。そっか……。そうだよね。だからルナ、罰があたったんだ。アウシュダールがずっとみんなから忘れられていたみたいに、今度はルナがみんなから忘れられる番だったんだ」

自分を納得させようとするように、そう言って固く唇を噛み締めるルナにエディスはささやく。

「逃げないで下さいね」

「？」

ルナは、アウシュダールの存在を認めようとしている自分に対して、なぜエディスがそう言うのかわからず、その顔を見つめ返した。

「ルナ様を罰する者なんておりません。次はご自分が忘れられる番だというのは変な気がします」

エデイスは月を見つめながら、何かを感じているかのようにその光りに目を細める。

「月の光が弱くなっています」  
「光？」

ルナも月を見上げるが、エデイスの言ったようには感じない。

「いつも優しく、母上が見守っていてくれるみたいな光だよ」

「そうですね。ラマイネ様はルナ様を覚えていてくださっているのでしょうか？」

エデイスの言葉に、ルナは母とのつかの間の出会いを思い出す。

しかし、今ノストールから遠く離れたこの地にいると、それさえも夢の中の出来事だったような気さえする。

「それに……ルナ様のことを忘れて苦しんでいる方もいらっしゃるかもしれません」

「そんなことないよ。忘れてるのに、苦しいなんてことないよ」

エデイスの意外な言葉に、ルナは思わず反発するように叫んでいた。

「だって、テセウス兄上は『砂漠の子？』って聞いた。ルナのこと忘れてた。覚えていないのに、忘れてるのに、どうして苦しむの？ どうしてそんなことわかるの？ アルクメーネ兄上だって忘れてる。クロト兄上が覚えていたらダイキと一緒にエーツ山脈をあっという間に越えて探してくれる。だれも覚えてない。忘れてて、苦しいわけない」

エデイスの言葉ひとつひとつに敏感に反応を見せるルナを、切なそうにエデイスは見つめる。

「大切な人を忘れた人の心も、とても苦しいのですよ」

数日前出会ったテセウスの苦渋に満ちた顔が蘇る。

雪山でノストールの幼い少年たちの命を守れなかったこと。

その記憶を失っていたことを思い出した時の様子は、見ているエデイスの心さえ押し潰されそうだった。

そして、いまだ思い出せない記憶があることをテセウスは気づきはじめていた。

その思い出せない「なにか」を懸命に思い出そうとしている。

「そんなことないよ！ だって」

「ジーン」

おもむろにそう呼ばれて、ルナは言葉を呑んだ。

エデイスから別の名で呼ばれた。

その衝撃に声が詰まる。

急に不安が訪れ、顔がこわばった。

「ルナ様の名は、しばらく封印いたしましょう」

ルナの翠色の瞳が大きくなる。

思いがけないエデイスの言葉に、ルナは呆然とした。

「封印……って、何？」

名の封印という、初めて耳にする言葉にルナは戸惑う。

意味はわからないがとてつもない恐怖が襲い掛かり、心臓が突然早鐘のように鳴り出す。

「封印を行なった後は、ルナ様ご自身の口からルナ・デ・ラウの名を名乗ることは出来なくなります」

「そんな！」

悲鳴に近い声が、ルナの口から飛び出した。

「どういうこと？ ルナって言うっちゃいけないの？ 今、怒ったから、エデイスの言うこと違うって言ったから、怒ったの？ ごめんなさい。謝るから……エデイス。ごめんなさい」

エデイスの両方の腕をつかんで懇願するルナを、紫の美しい瞳が苦しそうにみつめる。

「違うのですよ。ルナ様。怒ってなんておりません」



エデイスはルナの感情を落ち着かせようと、静かにほほ笑みかけた。

「よく聞いてくださいね。もしも、テセウス様と砂漠で出会ったのがハーフノームの海賊の頭の子ジーンなら、逃げ出しましたか？」

「？」

混乱するルナには、エデイスの問いかけの意味がわからない。  
「もし、あなたがルナ様ではなくて、ジーンとして出会われたなら、テセウス様ともっとお話しができたのではないのでしょうか？」

ゆっくりと一言一言区切るようにエデイスはルナに語りかける。

ルナが理解できるまで、二度、三度、エデイスは繰り返した。

やがてルナは、瞳を潤ませながらもコクリと頷いた。

「うん……。でも……」

「広い砂漠でお会いできたのは意味のあることです。何かお兄様方の身に起きたのかを知る機会でもあったはずです。ジーンの名をお伝えできれば、ノストールへ戻られた際にお会いする機会を、次のお約束を残すこともできたのではないのでしょうか？」

ルナは、徐々にエデイスの言葉の意味がわかりはじめて、自分を見つめる眼差しをしつかりと受け止めた。

「ジーンとして？」

「お兄様方との新しい絆を、ジーンとして、ルナ様ご自身がつくってください。そのためにも、今のルナ様には、『ルナ・デ・ラウ』の名がご自分を苦しめているように思われます。亡きカルザキア王とのお約束を果たすためにも。そして、これから兄上様方にお会いするときに巡り来ても、ルナ様が逃げ出す必要がないためにも。『ジーン』としてディアード様をお探しになる旅をお続けください」

どうして自分は逃げ出すのだろうか……と、ぼんやりとルナは思う。

「エデイス。海賊の頭の息子のジーンは、兄上方には近づけないよ、ルナ様」

エデイスは静かにその名を呼ぶ。

「テセウス様と出会えたこと。私とこうして出会えたこと。その出

会いは偶然ではないと信じてください。もっとご自分を信じてください」

「でも、いつまで？ 封印って……いつまで？」

エデイスの言葉の意味がわかってても、ルナはもう二度と名乗ってはいけないと宣告されたようにしか受け取れず、震える声で問いかけた。

「三人の兄上様のどなたかが、ルナ様の名を、ご自身の意志で呼ばれるときまで」

「自分で、ルナだって名乗れなくなるの？」

「はい」

絶望の闇が全身に襲いかかってきそうだった。

「嫌だ。やっぱり、名前の封印は絶対いやだ」

エデイスは唇を結んで、首を横に振る。

「だって！ そんなこと無理だよ。忘れちゃってるのに、覚えてないのに、ルナのこと忘れてるのに！ 兄上と会えないかったら、ずっとジーンのままなの？ リューザもいなくなって、ルナの名前もなくなったら、どうやってノストールに帰ればいいの？ アウシユダールがお城にいたら、母上にも会えない。エデイス、待って！」

だが、エデイスは両の手の平を胸の上で軽く交差させ、ルナを見つめながらその桜色の唇をひらいた。

「エデイス・ラ・ユル・アンナの名の下、ここにルナ・デ・ラウの名を封じます。そして、エデイス・ラ・ユル・アンナの名のもとジーンの名に、しばしの 祝福 を与えます。この名が、あなたを守ってくれますように」

エデイスの切なげな紫色の瞳から涙があふれ出た。

ラウ王家の一員としての名を封じられることは、その身を失うに等しいことをエデイスは知っている。

だが、エデイスは封印を行った。

「……………」

ルナは放心状態のまま、名を封じられた衝撃に言葉さえなくして

いた。

「ジーンの名に 祝福 を」

エデイスは、ルナをやさしく抱き締め、輝く月を見上げた。

「時がまいります。それまでどうか、ジーン様をお守りください」

声には出さない言葉がその唇にかたどられていたが、ルナは知ることもなかった。

(ちよつと……待て……よ……)

ルナの知らないところで、宿に帰って行く二人の背中を見つめるある人物が存在していた。

セルジーニ・リド・ユク・アンナ。

星守りの旅 をする三人のアンナに気づかれることなく、導き、守り続ける「影守り役」を自ら名乗り出たアンナの家長の一人だった。

彼はエデイスたちがブレアの町に入ってすぐ子供らに襲いかかる正体不明の妖獣を追い払ったのを知ってから、全神経を張り詰めて様子を見守り続けていた。

特に、エデイスが二人の子供と接触してからは、より注意してエデイスを思念体で追っていたのだ。

セルジーニは今まで、エデイスに対してある思いを抱いていた。それはアンナの一族の者としての資質がないはずのエデイスと、ラウ王家の王子達との間にある特別な絆だった。

ふつうであれば、対面さえ許されないはずの階級の幼いエデイスが、ノストールにいる時は王子たち自ら会いにからに訪れ、連れ出して行ったという。

しかも許可を出した長以外の、誰にも気づかれないうちに。

(何が存在するのだ?)

セルジーニは、この旅を通してエデイスを知り、自分の中に常に存在する疑念を解消したいと思っていた。

できるならばエデイスを一族に残してやりたかった。その為には《星守りの旅》で占術士としての能力が少しでも芽生えることを期待してもいた。

そのエデイスの身に起きた小さな変化をセルジーニは見逃さなかった。

町で出会った一人の子供に対して示したエデイスの感情の波。それが、セルジーニの関心を引いたのだ。

もうひとつ。その子供自身の存在も気にかかった。

思念体のセルジーニが子供を探し、捕捉しようとしてもなぜか見つけ出すことが出来ないのだ。

エデイスとともにいる時だけは、子供の姿も捉えることができるのだが、セルジーニはこれまでに経験のない理解しがたい現象に戸惑った。

（ひよつとしたら子供はすでにこの世のものではない存在か、命尽きる直前の魂なのか？）

自分の肉眼で子供を確認をしたかったが、町を壊滅状態に追い込んだ妖獣が再び町や彼らに近づかないように結界を張っていたため、身動きが取れなかったのだ。

エデイスとあの子供、そして凶暴な妖獣。

（あの妖獣と、一緒にいた子供に主従のつながりはないように思えたが……）

数々の疑問を抱きながら、セルジーニは二人の接触を待った。

そしてこの夜、宿を離れた二人を追いかけ、交わされた言葉を耳にしていたのだ。

しかし、二人の話聞いていたセルジーニは、自分が考えていた予想とはまったく別次元の、想像だにしない展開に衝撃を受けることになった。

（あの子どもが……ルナ王子？ いや……それ以前に……）

二人が大木のそばを去るのを見届け、自分もまた実体に戻ったセルジーニは、町はずれにある宿の自分の部屋で口元に親指をを当てたまま、ゴクリと喉を鳴らした。

（名に封印を施せるのは「名付け人」だけだ。エデイスが、王家の一族の子息の 祝福 を行ったということか？）

祝福 は、アンナの一族の中でも限られたものにしかな行つこと

のできない高度で神聖な儀式だ。

現在は長のサーザキアがそのほとんどを行っていると書いてもよく、ユク・アンナの七人の家長の一人でもあるセルジーニや、長に次ぐ最高位の能力を持つイリユーシアさえ、直系王族に名を与える「祝福の儀」を任されたことはまだない。

子どものアンナなどは、よく真似事で 祝福 として様々なモノに名前を与えるが、それはやはりただの真似事に過ぎない。

考えてみれば、誰もがルナ王子の「名付け人」はサーザキアだと思っていた。

しかし、長は末の王子を一度も「名付け子」と呼びかけたことがないことをセルジーニは思い出す。

（ルナ王子が生まれた年齢を考えると、その時エディスはまだ五歳のはず……。いや、まてまて……）

セルジーニは混乱する頭と心を冷静にしようと呼吸を整える。

（ただの子供の真似事、だという考え方も……）

エディスはこの旅を終えれば、アンナの資質がないとして一族から離れることがほぼ決定づけられている少女だ。

アンナの資質がないということは、 祝福 を司る儀式とは無縁の存在。

エディスがルナ王子に 祝福 を与えたならば、それほど資質を備えているならば、今頃は家長の地位におさまっていなくてはならない。

（エディスにはその力はない……）

しかし、ここに至ってセルジーニは一度自分の先入観を消し去る必要を感じた。

違うと信じる自分の心が、真実を隠す危険性があるからだ。

（エディス、ルナ王子、ラウ王家……）

瞼を閉じて、自分が覚えているノストール王国での出来事。ラウ王家の人間、そして持てる知識を総動員して、すべての情報を整理していく。

(エデイスが 祝福 を行なったとして考える。あの子と王子たちの接点……)

なぜエデイスが、ラウ王家の王子たちから特別な友人としてもてなされるのか。

なぜ王子たちが、愛情を込めて「エディ」と呼ぶのか。

今までどうしてもわからなかった。

もしも、彼女が、ルナ王子の名付け親である「名付け人」と仮定したならば、すべての疑問は氷解する。

だが、その仮説は震撼せざるをえない事実に行き着く恐れを予感させる。

(それでは、エデイスにアンナの資質がないと判断した自分たちに誤りがあったことになる。長のサーザキアも、イリユーシアも、家長たちも。)

アンナとして、《星守りの旅》に出るまでに会得する《先読み》も、占術も、簡単な結界を張る術も、妖獣を操る術も、まったくにひとつと言っていていいほどできないエデイス。

(そうだ……あの子は、ルナ王子は、カルザキア王夫妻の本当の子供ではない。四番目の王子は長の 先読み によって命を絶たれている。王族ではなく、捨て子だったから……エデイスが……)

セルジーニは一族を否定するような自分の推測を覆したかった。

祝福 を行なえるほどの人物を、無能者として切り捨てようとしているとは認めたくない。

それではアンナとしての存在自体に疑惑が生じる。

自分達の 先読み に間違いがあってはならないのだ。

あまりにエデイスに気をとられて、勝手にとんでもない勘違いをしていると、そう思ったかった。

しかし……。

(長は知っておられるはずだ……。王子に、ルナと言う名を冠した者が存在することを……。自分以外の誰かが 祝福 を行なったことを、長だけはすべてをご存知のはず。だが、なぜだ？ エデイス

が「名付け人」と知っているならば、なぜそれを公にしない？)

セルジーニの中に次から次へと新たな疑問が暗雲のように湧き上がって行く。

(それに……真似事で……ただ名を冠しただけで、守護妖獣は誕生しない……。祝福 は王家の一員が守護妖獣を得るための重要な儀式だ)

その答えの入口にたどり着いた瞬間、全身の毛穴から一斉に汗が噴き出した。

(ルナ王子に守護妖獣リユーザは存在した……)

セルジーニ自身、ルナとリユーザの姿を自分の目で見ている。

守護妖獣の存在は、ルナがラウ王家の人間であるという否定しよ  
うのない証。

そのルナの名を封じたエディスは、まごうことなく「名付け人」  
であり、セルジーニやイリユーシアを凌駕する能力をもつ存在であ  
ることを意味した。

(これは……どういうことだ)

長い時間のあと、セルジーニの硬直した頬に、やがて微かな笑み  
が浮かび上がる。

だが、それを知るものは誰もいなかった。



数日後、ルナとランレイはディアードを探すために町を出た。

本当ならば重傷を負っているネイをおいて行くことはできなかったが、自分を付け狙う妖獣ヴァルツからネイを遠ざける為にも、一刻も早く町を出る必要に迫られていたのだ。

ルナは、エーツ山脈から自分達につきまわってきたヴァルツの話进行明かし、オージーたちアンナに良い方法はないかと相談した。

その結果、オージーが提案したのは、自分たちと一緒に町から離れることだった。

まず、ブレアの町には結界を張ったので、妖獣ヴァルツは入り込めない。

しかし、ルナがディアードを探すために安全に町を出るには、アンナたちが途中まで一緒に行き、ルナが町を出たことを妖獣らわざと気づかせるために、ネナの気配を町の外に転々と残しながら、安全な場所まで自分たちが連れて行く方法だった。

ルナは、ネイに相談をした。

もしネイが嫌だと言ったら、ルナはあきらめようと決めていた。

重傷を負って辛い状況にあるネイを悲しませてまで、旅に出たくはなかったのだ。

だが、ネイは「待っているから、行っておいで」と優しく言葉をかけてくれた。

「エリルは帰ってきてとんでもないことになったことを驚くかもしれないけど、話しておく。あいつはあたしと違って旅を続けるだろうから、もう会えないかもしれないけどさ。ちゃんと伝えておくよ。あたしまでいなくなったら、嫌われて置いてかれたら思っただけそうだしな」

そう穏やかに笑いながら。

宿屋の女主人も、町の人々も「ネイのことはまかせておきな」と

口々に行って、ルナを温かく送り出してくれた。

自分達のせいで町が妖獣に襲われたことを、ルナはどうしても彼らに言うことは出来ないかった。

温かく励ましてくれるほどに、心が痛んだ。

「必ず帰るから」と約束を交わし、ルナとランレイはアンナたちと共にブレアの町を後にした。

その後、いくつかの町を共に旅してのち、ルナはエディスたちと別れた。

別れ際、マティスはルナの為に 先読み をしてくれたが、それは不吉な結果だった。

「探し人に関わる道は、いくつもの国の交わるところにあるはずでも……決して、国境を越えてはだめよ。越えればあなたの前には道は見えない。生命を落とす危険があるの」

告げたマティス自身の表情が青ざめていた。

「いい？ 絶対にリンセントースから出てはだめよ。私には暗く日の射さない小屋の中で息絶えるあなたの姿が見える。それはこの国ではない場所。もし探し人が国境外にいたとしても、一度引き返してくること。この国から出てはだめ、絶対に。危険な時期をやりすぎすことが懸念だわ。危険な時期……次の 失月夜 を越えられれば、希望と選択肢はある。けれど、絶対に 失月夜 までにはリンセントースから出ないで。命を落としたりしたらその先は歩めないのよ」

旅を続けるうちに、エディスが知り合いだというルナに対して、オージーとマティスもまた打ち解けて話ができるようになっていた。それだけに、マティスは自分の 先読み で初めて見た「死」に、動揺を隠せずルナに繰り返し忠告を続けた。

だが、ルナは笑っていた。

「ありがとう」

マティスの目が丸くなる。

「自分が死ぬ 先読み ならいいよ。ネイヤ、ランレイやエリルじ

やなくて安心した」

「おまえなあ……」

あまり感情を面に出さないオージーも、安堵したように笑うルナを見て心配そうに緑色の髪をクシヤリと撫でた。

「危なげなくて仕方ないなあ……。ちゃんと自分を大切に生きるんだぞ。自分が死んでもいいなんて考えるな。生きていれば凄いことだつてある」

オージーは話しながら左手に巻いていた黒い布を外してルナの左腕に巻き付ける。

「これを貸してやる。妖獣よけの術を施しておいたから、次の新月の夜までは効果がある。もし他のアンナに会ったらこれを見せて、同じ術を施してもらうんだぞ。再会の術も施しておいたから。本当に……心配なんだ。いいかい、死ぬなよジーン」

「ありがとう」

エデイスから名を封印された衝撃は大きかったが、わずかな間、エデイスと共にいられた旅は、ルナの心を癒す効果をもたらした。

最後にエデイスが別れを告げる時が来た。

エデイスはルナを抱き寄せ、耳元でだれにも聞き取れないほどの声でささやいた。

「あなたにはアル神の御加護が必ずあります。お父上との約束をされた探し人に、ディアードに会えることをいつも祈り続けます。お母上もきつと祈られていると信じます。体に気をつけて下さいね。私の名付け子」

「エデイス……」

「ジーンとして生きて下さい。逃げないで……」

ルナは自分を映す、エデイスの紫色の美しい瞳を心に刻もうと、いつまでもその瞳を見つめていた。

エデイス達と別れて、ディアードを探す旅をしていたルナとランレイは、やがてリンセンテートスの国境近くでゴラ国の人買いに売られる寸前の子供と出会う。

人買いの一味から脱走してきたたという少年を助けたことがきっかけで、仲間を助ける力になってほしいと頼まれた時、ルナはどうしても断ることができなかった。

突然故郷から引き離され、見知らぬ国でなすすべくもなく大人たちに暴力を振るわれ、人として扱われない子供達の姿を自分の目で見て、ルナは放っておくことができなかった。

家族から、故郷からある日、突然引き離された苦しさや悲しみを誰よりも知っていたのはルナ自身だったからだ。

いつも誰かに助けてほしい、迎えに来てほしいと願っていたハーフノーム島での日々。

国境を越えれば「死」が待っていると言うマティスの 先読みが警鐘を鳴らした。

だが、それを振り切って、ルナはナイアデス皇国のカカル村の少女たちを人買いの手から解き放ち、共に国境を越えた。

彼らを執拗に追いかけてくる男たちの追跡を振りきり、ようやく子供達の故郷カカル村の近くまでたどり着いたものの、途中で負った傷が原因となり、ルナは高熱に襲われ倒れてしまったのだ。

マティスの言葉通り、ルナは日の差さない暗い馬小屋で精根尽き果て、全身を蝕む高熱の中で意識を失った。

ランレイも空腹と疲労で体力を失い動くことも出来ないまま、ただルナのそばにいた。

二人は、ともに、やがれ訪れるだろう「死」の瞬間だけを待っていたのだ。

ルナは、高熱にうかされながら長い長い夢を見続けていた。  
ブレアの町をヴァルツが襲いネイが殺される悪夢。

旅を終えてブレアの町にやっと帰り着き、元気になったネイが笑顔で迎えてくれる夢。

エリルが、アンナたちと旅をしている夢。

エデイス、マテイス、オージーと一緒に過ごしたつかの間の楽しい夢もあった。

それらは浮かんではすぐに消え、次の場面へと変化して行く。

どれが現実起きたことで、どれがただの夢なのか、すべてが混沌として区別がつかない。

また夢が訪れる。

ねえ、中にいれてよ！　ぼくが看病するよ！

どこからか心配そうな声が聞こえた。

いけません。どなたも中にはお通しできません。

遠く懐かしい声だった。

いやだ！　部屋の中に入れる！　命令だー！

陛下より、王子様方をルナ様のお部屋にお通ししてはならないときつく言い渡されております。

きつぱりとした口調に、ルナは暗闇の中で、その声の主がクロトと侍女頭のセレナだということを思い出す。

ちよつとでいいんだよ！　ルナ、一人で寂しがってるだろ？

まだ赤ちゃんなのに、熱がたくさんあるのは命に危険だつて。助からないかもしれないって誰かが言ってた。そんなの可哀想だよ！

ぼくがルナをお見舞いしたらすぐに治るんだから！　セレ、開けてよ！

できません。テセウス殿下、アルクメーネ殿下からのお申し出もございしましたが、同じようにお断り致しております。

そう断るセレナの口調も、やや辛そうな響きがあった。

開けてくれるまで、ここから動かないからな！

クロトの宣言にセレナの深いため息がこぼれる。

ルナは苦しさの中で、その不思議な光景を小さな揺り籠の中から見上げていた。

知っているようで知らない空間。

そばには微かに見覚えのある痩せた老人が自分を深刻な表情で見下ろしていた。

これも夢だとルナはぼんやりと思っていた。

そんなに重い病にかかった記憶はない。

けれど、その夢の中でも、ルナは苦しんでいた。

体がほてるように熱くて、全身から汗が吹き出し、けだるくて指一本さえ力が入らない。

(国境を越えたんだっけ……)

夢なのか現実なのか境がわからない。

長い長い時間、夢と現実をさまよい続ける時間がただ繰り返される。

ルナ様。

気がつくのと、何かがザラザラとした感触がルナの頬をなめ、汗をふき取っていた。

同時に、心地よい風が全身に吹き込んでくる。

「？」

ルナが目を開けると、闇の中に、黒い大きな獣の顔が浮かんでいた。

(イルダーグだ……)

ルナはぼんやりとした意識の中で、父カルザキア王の守護妖獣を見つめていた。

王より自分の代わりに、そばについているよう命じられました……。早く元気におなり下さい。

ロウソクだけを灯した薄暗い部屋の中、長椅子には看病に疲れたのか眠っている老人とセレナ、そして数人の侍女たちの姿があった。わたしがいるのに、心配症なのですね。

別の声が割り込んでくる。

ルナはその声に涙がでそうになっている自分を感じていた。

(リユーザ……だ。リユーザがいる……)

病だけは妖獣の力でも適わぬ時もありますから。王妃も眠れぬ夜をお過ごしです。

また別の声が聞こえて来た。

(ネフタンだ……)

イルダーグに代わって、真っ白な長い毛並みをもつライマイネ王妃の守護妖獣ネフタンの顔が現れ、揺り籠から落ちそうになっている掛布を口を使って整える。

こんなときは母親がそばについているのがなにより。ルナ様、母上のお心はいつもあなたのそばにありますよ。

リユーザと、イルダーグとネフタンが、揺り籠の中の幼いルナをあたたかな光を発しながら見守っていた。

(父上……母上……)

守護妖獣に自分の思いを託して、見守っていてくれる父と母の心に触れ、ルナは苦しさから解き放たれる感覚を得る。

だが、返事を返すことはできない。まだ、言葉を話せない自分がいた。

一日も早く、元気になって下さい。

妖獣たちの放つ光が眩かった。

これは夢だとどこかでわかっていても、その光りは全身に染み渡る。

「みんな……ありがとう……」

うわ言のようにつぶやく自分の声で、ルナは目を覚ました。

「……………」

ぼんやりとした意識のなか、うすぐらい静かな暗闇の中で、ルナは自分を見下ろす視線に出会い、何度も瞬きを繰り返した。

まだ夢の続きを見ているのかと思った。

「カイチ…………？」

自分が冷たい土と藁の中ではなく、暖かな寢床の中にいることにすぐ気が付いたが、それがどうしてなのかルナはわからなかった。

「まだ夢みてるのかな……………」

白い毛をした一角獣の山羊は、二番目の兄アルクメーネの守護獣カイチに間違いないはずだった。

『ご心配いたしました。おかげんはいかがですか？』

感情のあまりこもらない冷静沈着な言葉は紛れも無く、ルナのよく知るカイチのものだった。

ルナは混乱した記憶の中で、思わず身を起こしてカイチの顔をのぞき込んだ。

体は軽く、もうどこも苦しくはなかった。

「カイチだ。夢…………じゃないの？ ここはどこ？ どうしてカイチがいるの？」

状況がまったくわからないままカイチに問いかける。

『ここはナイアデス皇国。あなたはカカル村の子供達を助けて、森の中の小屋の中で倒れていました。留学のためにこの国へ来ていたアルクメーネ様が、あなたを見つけられたのです』

「兄上が？ 兄上が…………近くにいますの？」



ルナは、心臓が突然激しく高鳴りだすのを感じた。

「あの……僕のこと……は？」

ルナは、自分の名前を言おうとして言葉に詰まった。

思わず喉元に手を当ててしまう。

『どう致しました？』

「旅の途中でエディスと会ったときに……名前を封印されて……」

『なるほど』

「え？」

ルナは、カイチの納得しているような反応に思わず聞き返す。が、兄の守護妖獣はそれには答えず、かわりに今の名をたずねた。

「ジーン。ハーフノーム島でそう呼ばれてたから。海賊の頭、ジルの息子の名前」

『ハーフノームの海賊の子ジーン。それは良い名です』

「どうして？」

ルナは困ったようにカイチを見つめる。

『アルクメーネ様には、その名をお名乗りください』

「やっぱり兄上も、僕のこと忘れてるから？」

ルナは、カイチの言葉に自分の身の上起こった現実を思い出した。

それは同時に、自分は兄の中から消えているのだということを出すことでもあった。

思わず涙が込み上げてくるのをルナは、懸命にこらえる。

覚悟はしていたつもりだった。

しかし、森の奥の馬小屋の中から、アルクメーネが自分を助けてくれたと知ったとき、ひよっとして兄は自分のことを忘れていなかったのではないかと思ったのだ。

だが、やはりそうではないのだとカイチに告げられ、ルナは全身から力が失われて行くようだった。

「兄上が名前を呼んでくれたら、封印がとけるって……言ってた」  
その言葉を黙って聞いていた守護妖獣は、長い沈黙を保ち、やが

て静かに告げた。

『ここは、ユク神のつかさどりし大地。また瑞獣が王妃の下に誕生し、まだ間もない世界。この地は人間の目には見えなくともまばゆい光にあふれております。さらに今宵は満月、アル神の加護強き夜お会い出来たことは偶然ではないと信じられる夜です』

「うん……」

ルナには、ユク神や瑞獣のことなどまったくわからなかったが、カイチの全身から発せられる白い光に厳肅な気持ちになる。

『一度だけ申し上げます』

カイチは声を忍ばせるように静かに語り始めた。

『我々ラウ王家の守護妖獣は、あなたの名を呼ぶことが出来ません。あなたの証しを示すこと、あなたにかかわる記憶に触れることを、避ける道を自らに課し、律しております』

ルナは、その言葉に凍りついた。

『ラマイネ王妃の守護妖獣ネフタンは、あなたのことを王妃に知らせたために、アンナのメイベルに封じられ、アウシユダールの下に封印されております。王妃はそれにより深い眠りに誘引されました。我々はそれを知っています』

「え……？」

ルナは、カイチの顔を瞬きもせずに見つめていた。

『カルザキア王のイルダグも、最後にあなたの名を呼び絶命した。私たちは知っております』

雷鳴がどこか遠くで響き渡るのをルナは聞いた。

「忘れたことない。覚えてる……」

辛い記憶が蘇り、ルナは頬を流れる涙を拭うことも忘れ、カイチの言葉に耳を傾けた。

『すべてはアンナのメイベルがかけた魔道の呪術。人間の記憶は偽りの記憶を重ねることで人は知らぬうちに、記憶を封じられてしまふ。けれど、我ら守護妖獣は主を守るが故に記憶を失うことはないのです。それが故に、メイベルはわれら守護妖獣を捕らえる罠に、

あなたの名を用いたのです。あなたを思い出させるすべてに封印を施し、守護妖獣が主にあなたのことを一言でも告げれば、その瞬間にメイベルの手に捕らえられる罫を』

「そんな……」

ルナは、カイチの言葉に全身から血の気が引いて行くのを感じた。母のそばにいるはずのネフタンがいなかったのも、イルダーグが最後に息絶えたのも、すべては自分の名を呼んだためであると知って、ルナは心臓が凍りついたように蒼白となっていた。

『エデイス殿はザークスと会っております。あなたの名に封印をかけることで、我々もまたあなたの名を呼ぶ危険から守って下さったのでしよう。お会い出来たのが、このナイアデスであったことは幸いしました』

カイチは、血の気のないルナを、穏やかな瞳で見つめる。

『いまこの地は、瑞獣誕生の巨大な波動が全世界に広がっており、アウシュダールの力も届きにくくなっております。あなたに会い、事実を知らせることが出来るのは、今宵を置いてありませんでした。ノストールでは、あなたの思い出に接するだけでも術は行使される危険があります。アウシュダールは、あなたが死んだと信じながら、あなたを恐れています』

ルナの脳裏に『時が来るまで』と言ったザークスの言葉が蘇る。

『幼子よ』

カイチは目を細め、図書室の時のように、『王訓書』をひもとく時のようにルナに語りかける。

『強くおなりなさい。真実を見極められる目を得えなさい。そして、アウシュダールがなぜ、巨大な力を得ながらあなたの影を恐れ続けるのか、考えることです』

「はい……」

そう言ったきり黙り込むルナを、アルクメーネの守護妖獣カイチは夜が明けるまで見守り続けていた。



アルクメーネは、奇妙な胸騒ぎに明け方目を覚ますと、そのままルナの寝ている部屋に足を運んだ。

静かに扉を開けたアルクメーネは、窓から外へ出ようとしているルナとランレイの姿を見つけて、思わず呼び止めた。

「待つてください!」

ルナの体は背後から聞こえて来た懐かしい声に、窓を飛び越えていかなければと思うのだが、体が動かなくなっていた。

「どこに行こうというのですか?」

駆け寄るアルクメーネの目に、銀色の髪が飛び込んで来る。

ルナは戻ってしまった髪の色を見られたことに、悔やんだ表情を見せた。

守護妖獣たちがルナに向けてその力を放ったあとは、いつもどんなに染めても髪の色は銀色に戻ってしまうのだ。

ノストールにいた頃は、村に遊びに行くときは髪の色を染め、帰りには守護妖獣のリユーザに銀髪に戻してもらっていたのだが、昨夜、カイチの光を浴びて緑に染めた髪の色が、もとに戻ってしまったのだ。

この一晩で変わった銀髪を見られれば、怪しまれるのは想像出来た。

そのことで助けしてくれたアルクメーネに迷惑がかかることが怖くて、ルナはアルクメーネに一目会いたい気持ちを押しさえて出て行くうとしていたのだ。

「病気が治っていないというのに」

アルクメーネは、ルナの腕をつかみ顔をのぞき込む。

だがルナは思わず顔を背け、手を振り切って逃げようと試みた。

しかし、その体をアルクメーネに抱きとめられるように両手で包み込まれ、ルナは動けなかった。

「大丈夫。こわがらないで。危害は決して与えません」

耳元で言い聞かせるようにささやくアルクメーネの声に、ルナは抗えなかった。

懐かしい優しい兄の腕と声に、逃げ出す力が失われてしまったのだ。

ルナの抵抗がなくなるのを感じると、アルクメーネはルナとランレイを窓枠から降ろし、窓の扉と鍵をしっかりと閉めた。

そして、ベッドに並んで腰掛けると、ルナの顔と、昨日までは確かに緑色だった髪の毛を不思議そうに見つめる。

「どうして出て行こうとしたのです？」

「元気になったから……その、助けに来てくれてありがとうございます。……」

ルナは、心臓を打つ激しい鼓動が、アルクメーネにわかってはしまわないかと緊張しながら返事をした。

「完全に治るまでは外に出ないほうがいい。きみは死にかけていたんだよ」

「はい」

ルナは、顔を下げたままなかなかアルクメーネの顔を見ることが出来ない。

「名前は？」

「ジーンです。その……こっちはランレイ、言葉……話せないんです……」

なかなか自分を見ようとしないうるルナに、アルクメーネはそれでも優しい心が広がるのを感じていた。

こうして一緒に座っているだけで、次第に幸せな時間が蘇って来るようで、アルクメーネは自然にルナの銀色の髪に触れていた。

「昔……大病を患うと、髪の色が変わることがあるという噂が流れたことがあります。ジーンはこの髪の方が似合っていますよ」

それがいつ、だれを示したもののなのかアルクメーネは覚えていない。

ただ、その髪に触れたとき、ふと言葉に尽くしがたい感情が膨らんで行くのを感じたのだ。

ルナの肩まで伸びたからまっている銀髪を指ですきながら、ほほ笑んだ。

「熱が引いて良かった。私の父がジーンたちのいる小屋を教えてくださいましたんですよ」

「え？」

思いがけない言葉に、ルナはアルクメーネを見上げた。

「やっと、私を見てくれましたね」

大人びた兄の笑顔に出会い、ルナは視線を外すことが出来ないまま、唇を固く結び、顔をこわばらせた。

(兄上……！)

唇までせりあがったその言葉をこらえるのだけで精一杯だった。

「誰が……知らせてくれたのですか？」

「不思議な話ですけど。信じてはもらえないかもしれませんが、夢の中で、私の亡き父が森の中にある小屋へ行くよう導いたのです。どうしてそのような夢を見たのか覚えてはいないんですけどね」

アルクメーネは「フフ」と、はにかむように微笑んだ。

「ただその夢がずっと気になって、この近くに森があると聞いてからはどうしてもあの小屋に行かなければ、いや……見つけなければという気持ちになっていたんです。父が何を私に知らせたのか知りたかった。死にかけている君達を見つけたときは本当に驚きました」

「……………」

ルナは父カルザキア王が自分を「死」から守ってくれたに違いはないと思った。

アルクメーネが見つ付けてくれなければあのまま死んでいたのかも 싶れないと思う。

マティスの 先読み は当たっていたのだから。

(父上……)

ルナは父の深い愛を感じて雷に打たれたように放心していた。

そのルナを、アルクメーネはなぜだか涙が出て来そうな感情の高まりを感じながら見つめていた。

「窓にいる二人を見たときは、心臓が止まるかと思いました。まるで、手の中で死にそうだった小鳥が、突然手の届かない空へ羽ばたいて行くようで……。変ですよね元気になったことは喜ぶべきことなのに」

自分を覚えていないはずの兄の言葉にも、ルナは温かいものが全身に広がって行く心地よさに、ただ耳を傾けていた。

逃げないで。

エデイスの言葉の意味がおぼろげにわかったような気がした。

新しい絆を作ってください。

「緑色の瞳も声も想像していたとおりでした」

その言葉にルナは、アルクメーネが自分の名を呼んでくれるかもしれないと淡い期待を浮べた。

だが、どうすれば呼んでもらえるのかわからない。

「そうだ、お願いがあります。ある言葉を言ってもらいたいのです  
が……」

ルナはアルクメーネが何を言おうとしているのか、緊張しながら次の言葉を待った。

その時、部屋の扉が勢いよく開き、不機嫌そうな長身の男イズナが姿を現した。

「何をしてるんですか？」

慌ただしく部屋の中に入って来て、ベッドに座っているアルクメーネをあきれたような怒ったような表情で見る。

黒髪の長髪を後ろで束ね、赤いバンダナをして長い前髪で右顔を隠してしまっているような髪型、長身の男の登場に、思わずルナはびくりとした。

「何を……って、あまり大きな声を出さないで下さい。ジーンとラ  
ンレイがおびえます」



毅然と言い返されて、イズナは思わず言葉を詰まらせる。

「どんな病かわからない。病気が移ってはいけなから、部屋には近づかないようにあれほど言ったはずです」

二人の子供に視線を走らせると、病気で寝込んでいたとは思えない程回復している様子に内心驚く。同時に、緑色から変わっているルナの銀色の髪を見てさらに訝しげな目でアルクメーネを見る。

「大病をした子供の中には、一晩にして髪の色が変わることがあるのですよ。そんなに驚いた顔をしては、ジーンが可哀想です」

イズナはその言葉に、そういえばそんな話をどこかで聞いたことがあるような気がして思わずうなずく。

だが、納得いかないのはアルクメーネの保護者のような態度だった。

一体どうやってアルクメーネの関心を引いたのか、と。

だが、最初に関心を持ったのはアルクメーネの方だったことを、イズナは知っている。

それでも得体の知れない子供には違いない。

不審な眼差しを向け、正体を見極めようとするのは当然のことだった。

「よっぽど運がいいガキのようだな」

「女の子です」

中性的ではあるがどう見ても男児にしか見えない子供を、昨日から女だと主張するアルクメーネにイズナは天井を仰いだ。

しかも、そこまでムキになる事情が理解できない。

やっかいなことになりそうだと思った。

熱がひいたなら、とっとと金を渡して追い出してしまうのがあとくされなさそうだと考えていたのだ。

「危ないところでした。わたしが見つけなければ、二人とも黙って出て行くところだったんですよ」

アルクメーネの得意げな言葉に、そうなっていればよかったのと心の中でイズナは思った。



病み上がりではあったものの、埃だらけの体ではよけいにいけな  
いからと、ルナとランレイは使用人たちに付き添われて着替えに連  
れて行かれた。

やがて、二人はイズナ、アルクメーネの待つ朝食をとるための部  
屋に案内された。

使用人たちの手によって、汚れがふき取られ、髪の毛には櫛が通  
された。

ルナの肩まで真っすぐに伸びた銀色の髪には輝きが増し、垢で汚  
れていた肌からは透明な白い肌が現れ、大きな緑色の瞳が実に印象  
深いものであることに気がついて、イズナはやや驚きをもって迎え  
た。

まだ背も低く体の線も細い少年のように見えるが、成長して娘ら  
しくなるとどう変化していくのか自然に興味をさそった。

だが中性的な感じが強い原因に気がつく、イズナはジーンに横  
の椅子を進めているアルクメーネに問いかける。

「なんで、騎士見習いの服なんかを着せているんだ？」

「なんでって……。どうしてですか？」

イズナの質問の意味がわからないという表情でアルクメーネは真  
顔で聞き返した。

ランレイと席を並べて座ったジーンも、不思議そうにイズナを見  
ている。

女だと主張しておきながら、当たり前のように男児の服を用意さ  
せたアルクメーネと、当たり前前のようにそれを着ているジーンの様  
子がイズナには理解できないほど奇妙だった。

「この館には女兒の長衣だつてあるのに、ランレイと同じ服を用意  
するように使用人に言っただろう」

「そうですよ」

イズナは、アルクメーネに、にこりとほほ笑まれてうなつた。

「そいつが女なら、女物の長衣を着せないのかと、聞いているんだ」  
「そうなんですか？」

初めて気づいたようなアルクメーネに、イズナは説得する気を失ったようにグラスに入った水を一気に飲み干した。

一方、ルナはアルクメーネの隣の席について食事ができることが夢のようで、その優しい眼差しと時折、髪にふれてくる懐かしいその手の温もりに、ぼーっとしてしまい徐々に食べ物を目の前にしても、なかなか手をつけれないでいた。

それを優しく食べるように促すアルクメーネとルナの姿は、イズナの目からは、どうみても昨日今日出会った者同士には見えない。

初対面のはずなのに、まるでよく知っている者のような空気が二人を包んでいるのだ。

イズナはふと、アルクメーネはあのアウシユダールともこのように接するのだろうかと考えてみたが、どうしてもその場面を想像することができなかつた。

その日は、アルクメーネのたつての願いで、首都へ帰る予定を一日延ばすことになり、イズナの予定は狂う一方だつた。

そのおかげで、ルナは丸一日アルクメーネのそばで過ごすことができることになった。

カード遊びをしたり、プーガ犬とじゃれあつたりと無邪気な様子に、何がそんなに楽しいのだろうとイズナは三人を見ていたが、気がつくと自分も一緒にその和の中に入ってしまったのに気づいて苦笑する。

「ジーン、おまえさ」

アルクメーネが席を離れた隙をみて、イズナは話しかける。

「なに？」

館で一番獰猛な番犬のプーガ犬とすっかり仲良くなり、戯れているルナから屈託のない笑顔向けられて少々気が引けたが、これも

役目と問いかける。

「故郷はどこだ？ 帰る場所はどこだ？」

その言葉にルナから一瞬にして笑顔が消える。

そして、まわりつく大きなプーガ犬を従えるようにイズナの前までやってくると、意を決したような表情をした。

「助けていただいてありがとうございます。僕たちは元気になったので、ご迷惑をおかけしましたが、すぐに館を出て行きます。ありがとうございます」

今にも身を翻してこの場を立ち去ってしまいそうな空気を察して、イズナがあわててその言葉をさえぎる。

「おいおい、別にすぐに出て行けとか、追い出したいとか言うわけじゃないんだ。ただ、戻る場所や家族はいるのか心配しただけだ。

もう一晩泊まっていけ。どうせ明日は俺たちも帰ることになってる」

イズナは心にもない言葉を口走っていた。

アルクメーネとの親しげな様子に、一線を引いておかなければと思っていたのだが、あまりの引き際のよさに、さすがに焦ってしまったのだ。

「アルクメーネが、あんなに楽しそうに笑うのは初めて見たんだ。

あまりに自然なので知り合いなのかとも思ってたな」

イズナは、ふたりの関係に探りを入れてみる方向に質問を切り替えた。

ルナはその意図をすぐに悟った。

そして、すでに素性不明の上、人目には身分のまったく違う自分が、ほんの少しでも昔に戻ったように錯覚して兄に接したことを悔やんだ。

他国に身を置くアルクメーネに迷惑をかけることは、いけないひとだとルナは気がついた。

イズナが変だと疑うのは当然だった。

それに、もしも、と別の顔を思い浮かべる。

兄の口から帰国したとき、アウシュダールの耳に自分のことが知

られれば、なにがどうなるのか想像がつかなかった。

ルナは自分が何者なのか、危険な存在なのか、迷惑をかける存在なのか、わからなくなりそうだった。

お兄様方との新しい絆を、ルナ様ご自身がつくってくださいそして、これから兄上様方にお会いするときに巡り来ても、ルナ様が逃げ出す必要がないためにも。『ジーン』として……旅をお続けください。

エデイスの言葉が、励ますように耳朵に響く。

「兄さんに……」

ルナは名乗ることの出来ない辛さに唇を強く噛んだ。

自分は、ジーンなのだと言い聞かせる。

海賊の頭の息子ジーン、なのだ。

だが、「兄」という言葉を発した時、沸き上がる感情を止められなくなっていた。

「兄さんに……故郷の兄さんによく似ていたので、つい甘えてしまいました。ごめんなさい」

そう口にしたルナの緑色の瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「お、おい。どうした？」

自分の言葉になぜ突然泣き出したのかわからずに、イズナはうろたえる。

「どうしたんだ？ 兄さんを思い出したからなのか？ 気分でも悪いのか？」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

泣き続けるルナをどうすることもできずにオロオロしていると、アルクメーネの声がしてイズナはさらに冷汗を流した。

「イズナ！ ジーンに何をしたんですか？」

叱責のような声がイズナに飛ぶ。

アルクメーネは二人のそばにやってくるると泣き続けるルナをなだめるように抱き上げ、鋭い視線でイズナを睨みつけた。

「いや、まで……俺はなにも……」

自分が何を聞こうとしていたのかすっかり忘れてしまい、ただ子供を泣かしてしまったたばつの悪さに口ごもっている、アルクメーネはそんなイズナに背を向けて館の中へと入って行った。

「なあ……」

イズナは、そばで黙ってことのみなり行きを見ていたランレイに助けを求めるようにつぶやいた。

「俺が悪いのか？」

ランレイが、やや気の毒そうな表情を浮かべて、テーブルの上の果実水をイズナに差し出した。

翌日の早朝、ルナは皇都コリンズに向け帰路に就くアルクメーネとイズナを見送るために、ランレイとともに馬車の前に立っていた。「本当に、私と一緒に行く気はないのですか？」

アルクメーネは、ルナたちが旅を続けると聞いて、何度となく同じ質問を繰り返したが、ルナは小さく首を横にふるだけだった。

ここでの別れが、もう二度と会えない別れになるかもしれないこともわかっていた。

だから、一緒に行かないかと思いがけない言葉をアルクメーネからかけられたとき、ルナは驚きと嬉しさで泣き出したい衝動に駆られた。

大好きな兄とそばにいられるのなら、ルナとしての自分を思い出してくれなくても、ジーンのままでもいいとさえ思った。

差し出してくれるあたたかい手をとれば、母や二人の兄のいるノストールに帰れるかもしれない。

心が引きちぎられそうになりながらも、ルナはその申し出を断った。

父カルザキア王との約束を果たさなければいけなかった。

死の前に父がルナに託した、ディアードを探してほしいという言葉だけ、何があっても絶対に果たすと自分に誓ったのだ。

自分を死の淵から救い、アルクメーネと引き合わせてくれた父のためにも、やっとディアードのいるかもしれない場所を見つけたのに、それを逃したくはなかった。

(父上……)

厳しくて温かい父の顔を脳裏に浮べ、兄と別れる道を選ぶ決意が揺るがぬように唇を噛みしめアルクメーネを見上げる。

そして、手にした布地をアルクメーネに差し出す。

「これは航海のお守りの旗です。国に帰る船の帆と一緒につけてく



ださい。きつと海の女神ドナ神が守ってくれ無事に故郷に帰れます」  
海の女神が守ってくれるその布は、広げると赤い生地中央に、  
大きな円と砂時計が描かれていた。

ハーフノームの海賊ジーンとして、自分の操る小船につけていた  
旗だ。

この旗が掲げてあればハーフノームの海賊達はアルクメーネの乗  
る船を襲うことはないだろう。同時にハーフノームの海賊の旗は、  
他の海賊への威嚇にもなる。

一方、そばにいるイズナは軽い自己嫌悪に落ちながら、イズナは  
今またアルクメーネとジーンのやり取りを無関心を装いつつ、ひや  
ひやしなから聞いていた。

昨日の夕食のとき、アルクメーネが、自分がもうすぐ故郷に船で  
帰るとい話を始めたとき、余計なことを話すなと制止しかけたの  
だが、ジーンにまた突然泣かれそう途中で止めさせることができ  
なかったのだ。

しかも、今また身元のわからない子供と一緒に連れて行きたいと  
言い出した。

内心、呆れ果ててて天を仰ぎたくなったほどだ。

ジーンが断らなければ、イズナは強引にアルクメーネだけを連れ  
て首都に戻る行動をとらざるを得ないところだったのだ。

「ありがとう」

ルナから旗を手渡されてアルクメーネは笑顔を作ったものの、そ  
れと交換するように、ルナの手のひらに平打ちされた銀色の指輪を  
乗せた。

「お返しに受け取ってほしい。これは私からのお守りです。どうし  
てもお金が必要な時は、これを売って構いません。外からは細工が  
してあり見えませんが中は純金です」

「でも……」

ルナが返そうとするのを優しく押し返し、手の中に握らせてから、  
アルクメーネはルナとランレイの二人を抱き寄せる。

「いつかまた、必ず会えることを願っています。指輪はお金に困ることなく、無事だったらその時に返してください。本当に使っていていいですよ。そして、二人にアル神の守護がありますように私の故郷の守護神は月の女神です。いつも夜の空から見守ってくれるでしょう」

「……」

ルナはアルクメーネの示してくれる優しさが、幼い時の自分に対するものと変わりなく示されているのを十分に感じ取っていた。

自分を、そしてその名さえ忘れてしまっているはずなのに。

兄上、ルナは父上との約束を守って、ディアードを絶対に探します。

心の中でアルクメーネに呼びかける。

ノストールの民を、自分と同じ年の大勢の子供達を大虐殺したアウシユダールに、どう向き合うかはそれからだと思っている。

自分を城から追い出し殺そうとした以上の、けっして許すことのない大罪。

それをアウシユダールは行なったのだ。

「ありがとうございます。お返しできるといいのですが」

母ラマイネ妃似の美しい兄は、一瞬真剣な表情を薄い青色の瞳に浮べて微笑んだ。

「そうですね。でも、この指輪がジーンとランレイの旅に少しでも役立つことの方が私は嬉しいのです」

やがてアルクメーネは馬車の中に先に乗ったイズナから、再三促されてやっと馬車の中にも乗りこんだ。

「ジーン、泣かせてしまったわびに、この国で困ったことがあったら皇都コリンズの俺の館をたずねて来い。一回だけの条件付で、力になってやるからな」

イズナが苦笑いを浮べつつ声をかける。

自分でも社交辞令なのか本気なのか計りかねる言葉だった。

ただ、アルクメーネの申し出を断てくれたことに心底ほっとして

いたのは間違いなかった。

「ジーン、ランレイ。体につけるのですよ」

アルクメーネは、馬車が出る間際までルナから視線を離さなかった。

（兄上……）

ルナは心の中でそう呼びかけていた。

（兄上……兄上……）

御者が鞭をふるい、馬がゆっくりと歩きだし、車輪が動き、馬車が進み出す。

「ジーン、ランレイ。アル神の加護があることを祈っています。いつか、また……」

アルクメーネは小さくなる二人に呼びかけながら、いつかこうして別れてしまったことを後悔する自分がいるような奇妙な予感に駆られた。

「ジーン」

遠ざかるルナとランレイの姿を目で追いながら、アルクメーネはふとノストールで耳にしたあの声を聞いたような気がした。

兄上。

クロトでも、アウシュダールのもでもない自分と呼ぶ声。アルクメーネは、はっとして胸に手を当てる。

昨日の朝、自分はジーンあの声で呼びかけてみてほしかったのだ。

「兄上」と。

あの時、なぜだか、ただそうした衝動に駆り立てられた。イズナが現れて機会を逃し、今思い出すまでは。

アルクメーネは一体ジーンに何を感じ、何を求めようとしていたのか、自分の感情に疑念を抱かずにはいらなかった。

窓から顔を出して後方の景色を振り返る。

だが、もう館も二人の姿も見えない。

（本当にこれで良かったのだろうか？）

アルクメーネは、この時はまだ自分の心が訴えているものの意味に気がつくことはなかった。

「兄上ーっ!」

ルナは、すでに見えなくなった馬車の方向に向かって、大きな声で叫んでいた。

「絶対……ディアードを見つけて、ノストールに帰る。帰るんだ」

ルナは、カイチから聞かされた話から自分の進むべき道が、間違っていないことを言い聞かせた。

「強くなる……。父上との約束を果たすまで、もう……。今日を最後に泣きません……」

ルナは、素晴らしいながらランレイの肩に顔をうずめ、辛い別れにいつまでも嗚咽を漏らしていた。

「なぜその子供たちを連れて来なかった？」

皇都コリンズに戻り、挨拶をするために皇帝フェリエスを訪ねたイズナは、その午後のお茶の席でやや不満そうな皇帝の言葉に、意外なことを言うといった表情をみせた。

「森の中で死にかけていただけの、身元もわからぬ子供を連れて帰れと言われるのですか？」

思わずカップをもった手をとめて、フェリエスを見つめる。

すると、同席しているオルローが、目を細目ながら口を開いた。

「世にも稀な銀色の髪の子供。それは本当に病の為に起きたことなのか？ アルクメーネ皇太子の関心の高さの真意は何故だ？ 美女にも金にも、博打にもなびかないのならば、その子供を利用する方ははいくらでもあつたはずだ」

「おいおい」

まるでイズナをたしなめるようなその口調にイズナは、勘弁してくれというように二人を交互に見る。

「あの二人の子供は、死にかけていただけの親なしのただの子供です。ジーンっていう女の子はやたらと泣き虫だし、ランレイという少年は言葉が話せないおとなしい子だ。俺たちが見つけれなければとつくに死んでいた。そんな子供を連れ来て面倒を見てやる義理が一体どこにあるんです。銀色の髪は珍しいが、重要なこととは思えない」

イズナは、なぜあの子供たちのことをフェリエスが気に留めるのか、まったくわからなかった。

屋敷にいる間は出来る限り、アルクメーネと係わり合いを増やさないように神経を尖らせてきたのだ。

フェリエスは、大きなため息について椅子から立ち上がった。

「以前口口ノアが、ノストールの第四王子は、大病のために銀色の

髪になったという噂があると報告をしたことがあった」

イズナは、はっとして息を呑む。どこかで聞いたとは思っていた話がノストール王国のものだと思い出す。

「民はアル神に愛された王子の証としてしたっていると」

「そして、ノストールの前王カルザキア王は、銀色の髪の子供に殺されたという報告もある。その者はまだ見つかっていないらしい」  
フェリエスは、腕を組み思索するように金色の瞳を閉じる。

「銀色の髪の二人の子供と、おまえが出あった少年のような格好をした少女。この三人とラウ王家には必ずかつながりがあるような気がする。なぜアウシュダール王子は噂に聞く銀色の髪ではなかったのか。そもそも銀色の髪となったという話のは、ただの噂に過ぎなかったのか。銀色の髪をもつ人間などこのナイアデスには存在しない。いや、ラーサイル大陸でも民族としてそうした髪をもつ種族、地域があるという話は聞いたこともない。もし、実在するのなら、そのジーンという子供からなにか糸口が掴めたかもしれない。銀色の髪の子供たち、そして月の女神アル神の息子・シルク・トトウ神の転身人であり、銀色の髪ではないノストールのアウシュダール王子。いまはあのアウシュダール王子に結び付く情報がひとつでも欲しい時だ……」

「陛下……」

イズナは自分の判断に誤りがあつたことを認めざるを得なかった。  
「申し訳ありませんでした」

イズナは席を立つと、フェリエスに頭を垂れた。

フェリエスとオルローに言われるまで、「銀色の髪」のことなど深く考えたことなかった。

むしろ、これ以上アルクメーネを深入りせまいと、厄介払いに懸命になっていたのだ。

「アルクメーネ王子は、銀色の髪の子供に対してなにか言っていたのか？ どんな話をしていた？」

オルローは頭を下げたままにいるイズナに、一見無感情にも思え

る言葉を放つ。

「カルザキア王を殺した者が銀髪であったらしいことは聞きました。しかし、兵士達も混乱していて、見まちがえである可能性も否めないと。ただし、王を殺したものが近くにいれば守護妖獣にはわかると話していました。それに、確かに大病で髪が銀色になることもあるという話もしていましたが、アウシュダール王子のことという話ではなく、ノストールではありがちな一般的なことのように話していました。もしジーンがカルザキア王殺しに関わっていたならば、アルクメーネ王子は私が何を言っても城に連れ帰った上でノストールに連行したに違いありません。また、あれほど親切にはしなかったはずです」

イズナは全身が総毛立つのがわかった。

アルクメーネの守護妖獣が姿を現してまで森の中から探し出した子供を、自分は排除することしか考えなかった。

そして、アルクメーネと一緒に行くこと、二人に言い出したときも、なぜそこまで係わろうとするのか疑問を持つことすらしなかった。

過失としか言えなかった。

「それは偽りなき言葉だろう」

フェリエスは、二人の周囲をゆっくりと一周すると再び肘付き椅子にゆったりと腰掛けた。

「私が同じ立場なら、仮にこの城にその者が侵入しただけでも、守護妖獣は気配を察する」

フェリエスは、亡き父オリシエ王とその守護妖獣ダヌ、そして彼らから王位継承の指輪をフェリエスに渡すために命を落とした己が守護妖精ミュラを想う。

ミュラが生きていれば、父を殺した人間を突き止めることは容易だったはずだ、と。

あの時、なにも出来ずに逃げ帰った自分を思い出し、また、リンセンタートスを出られなかった屈辱に満ちた二年間を振り返っては、

二度とあのような無様な姿はさらしたくないと誓う。

アウシュダール王子は自分に警告し、それは現実のものとなり、リンセンテートスの守護神ビアンビアンの怒りを静めたのも、アウシュダール王子だった。

味方にはしても、敵にだけは絶対に回すべき相手ではないことは肝に銘じている。

その為にもノストールの情報だけは、どんな小さなものでも知っている必要があったのだ。

それがアウシュダール王子に関係することであれば、ささいなことでも知っておく必要があった。

フェリエスは問いかける。

「そのジーンという名の少女の出身は？」

「東大陸ではないのは確かです。ゴラからリンセンテートスの方かも知れませんが。口数がひどく少ないが、アルクメーネ王子と話すときはゆっくりと確かめるようにきれいな共通語を話していました。かと思えば、ランレイに話しかけるときはかなり聞き取れないような荒い言葉も使っていました。そのいずれも中大陸方面独特の発音がありました」

ジーンに「国はどこか」と聞いた途端、泣き出され、アルクメーネに睨まれ、その後は何も聞けなかったことだけは、口が裂けても言えなかった。

「別れた後は、どこへ向かうと？」

「人を探す旅をしていると言っていました。ミゼア山へ行きたいと行って、方向を聞かれたので、簡単な地図を書いてやりましたが」

「ミゼア山？」

フェリエスの表情が変わる。

イズナは頷いた。

「ナイアデス皇国、リンセンテートス、ゴラの三つの国境を有し、かつ無法地帯。多くの山賊たちの拠点とすべき場所が無数にあるから、危険すぎて子供が行くべきではないと警告はしましたが……」



「探すか……」

フェリエスのつぶやきに、イズナは思わず顔をあげる。オルローも驚いたように皇帝の顔を見る。

「銀色の髪をもつ三人の子供の存在と、アウシュダール王子。ノストールでの目撃と、アルクメーネ王子の関心を引くなど、ノストールと深いなんらかの関係があるはずだ。そろそろアルクメーネ皇太子も帰国の途につく。お目付け役から解放されて休暇をやる約束だったが、行ってくれるか？ もちろん探索部隊の人選はお前に任せろ。探索期間は、オルローの結婚式に間に合うようにしてくれればいい。ついでに国境をうるちよろする山賊共を壊滅してくれると助かるんだが」

後半は本気とも冗談ともつかない言葉だったが、イズナは幼なじみである皇帝から汚名返上の機会を与えられて、大きく安堵のため息を吐き出した。

「もちろん行かせて頂きます」

二人のやり取りをみて安堵したのか、オルローがわざとに気難しそうな顔をつくる。

「陛下、このイズナの任務に関しては内密にしておいて頂きたいものです」

「内密にか？」

「はい。陛下が銀色の髪を持ち主にご執心と外に漏れ聞こえたならば、髪を銀粉で散らせた人間が城中を闊歩しかねない」

オルローの言葉にフェリエスはくすくすと笑う。

「それは、私の大切な部隊をあずかるリンド嬢にもかい？ イズナの任務を問われたらどう答える？」

フェリエスにからかわれて、オルローは言葉につまり、その矛先をイズナに向ける、

「なに、無二の親友の結婚式の祝いとして、世にもまれな宝物を探し出すために旅に出たと言っておきますよ」

「あのお……。あいつの嬉々として待っている顔が、嘘とわかって鬼の形相に変わる瞬間を想像してみる。矛先はおれに来る」

リンドの顔を思い浮かべて、イズナは憂いに満ちた表情になる。

「ついでに」

フェリエスはくすくすと笑いながら、イズナに片目を閉じて見せた。

「イズナも、花嫁に迎えられるような令嬢でも射止めてくるといい。ゴラかセルグの令嬢あたりをしとめて来い」

「それを兼ねた旅だとリンドにも言っておく」

イズナの渋い顔を見て、フェリエスとオルローは楽しそうに声をあげて笑った。

数日後、アルクメーネは一年の留学期間を終え、皇都コリンズからノストールへの帰路についた。

そして、イズナはその警護に付きエルナン公国との国境まで送り届けたその岐路、ミゼア山へと向かった。

銀色の髪をもつジーン　ルナ　を探すために。

第16章 封印 - 14 - (後書き)

第16章 封印 終了

水平線だけが見える雄大な大河の流れの中、小さな帆船はリンセントースの岸を離れ遙か先りある対岸のハリア国へと船首を向けて進んでいた。

船の甲板の上には、五人の商人、そしてエリルとネイ二人の姿があった。

「いやあ、ネイさんがいてくれて本当に助かりましたよ。約束していた船長は突然、『やはり夜に船は出せない』と言ったまま行方不明になる、こっちはここ数日の悪天候続きで商売相手に荷物を引き渡す期限が迫っているわけで、あんたたちと会えなかったら、わたしの首が胴体から離れるところでしたよ。これも旅の神ビアン神のお導きとしか言いようがありませんな」

商人のガルロアは、やや太り過ぎる体格を揺らしながらガハハと陽気に笑う。

「いいってことさ」

ネイはニコリとほほ笑むと、エリルに意味ありげな視線を送った。「ちょうど、あたしらはハリアに行きたかったし、あんたたちは一刻も早く船を出したかった。そして、あたしは航海術を知っている。互いの利害が一致したただだからね。お互いの詮索は無用だよ」

自分でもとぼけた台詞だと思いつながらネイは笑顔を絶やさずに、風を読み、舵輪を操る。

すべては、ハリア国に向かう船を手に入れるために、密輸を扱っているとおぼしき商人に目をつけネイが仕組んだ企てだった。

そんな自分達の思惑にまったく気づいていないガルロアの様子に、エリルも内心ほつと胸をなでおろす。

このハリア渡航計画のほとんどは、ネイがたて一人で実行に移した。

金で雇った男に船長と名乗らせ、夜な夜な酒場で「自分は夜に船

を出せる」と吹聴して回らせたのだ。

夜に船を出すなど、神をも恐れぬ無謀な行為であり、よほどの事情が無い限り望む者などいないことは百も承知だとネイは言う。

だが、そこに手を出してくる者は、必ずいるとも断言した。

「金の亡者は神様なんて怖れないからね」

そのエサにかかつてきたのがガルロアたちだった。

打つ手がかつてくつの中して、物事が次から次へと前に進んで行く様子に、そばで見えていたエリルは、ネイに尊敬の眼差しを送らずにはいられなかった。

（本当に、無理を言っ来てもらってよかった）

すぐ真下の船底で艀を漕ぐ六名の雇い人夫たちに檄を飛ばし船を操る生き生きとしたネイの姿を眺めながら、エリルは今、自分がハリア国に向かう船上にいることを実感していた。

（国はどのようになっているのだろうか。ミレーゼ姉上の身は大丈夫だろうか）

エリルは六年ぶりの帰国が、暗雲たちこめてるのである予感を感じずにはいられなかった。

半年前。

ブレアの町に帰ったエリルは、見るべくもない姿に変わってしまった町の様子にただ茫然とするしかなかった。

嵐の被害を受けたように何軒も軒並み破壊された建物と静まり返った人気のない町の光景。

エリルたちが長い間逗留していた宿は跡形もないほどの壊滅状態で人の姿はどこにもなかった。

顔なじみになった人の家を訪ねて、宿の主人やジーンたちのことを聞くと、エリルがアンナの一族だと信じていることもあり、すぐにネイたちが世話になっているという家を教えてくれた。

そして、真つ黒な霧のような正体不明の妖獣が町を襲ってきたことや、ジーンたちが旅の途中のアンナの一族を連れて来て妖獣を追い払ってくれたこと。宿の女主人を守ろうとしてネイが大怪我を負ったことなどこの町で起こった出来事を話してくれたのだ。

エリルは血の気を失った。

動揺しながら、ネイのいる家を訪ねると、彼女は奥の部屋で、重傷を負った姿で横たわっていた。

だがそこに、いるはずのジーンとランレイ、そしてアンナたちの姿はない。

「体の具合はいかがですか？ 大丈夫なのですか？」

エリルが現れ、心配そうに覗き込み声をかける。

そしてその視線が、ジーンたちを目で探している様子に気がついて、ネイが口を開いた。

「ジーンとランレイはいないよ。あたしが旅に出した」

「え？ どういうことですか？」

信じられない顔をするエリルを見ながら、ネイは口元に笑みを少しだけ浮べて、経緯を短く話した。

「でもこんな状態のあなたを置いたまま行くなんて」

重病人のネイを残して町を出るのは、ジーンらしくないように思えてしかたがなかった。

ネイは静かに息を吐くと、エリルに口元に耳を寄せるように合図を送り、他の誰にも聞かれぬように声を出さずに言った。

「あの化け物は、あたしらを追いかけて来たんだ。だから、ジーンは、あたしとこの町から一刻も早くあの化け物を引き離したかったんだよ」

エリルの顔がハツとし、体を引いた。

ネイはエーツ山脈でもヴァルツという妖獣に殺されそうになっている。そして、今回は瀕死の重傷を負わされた。

「でも、あたしがこのザマじゃ、あんたの言うとおりそばからなかなか離れようとしぬい。ジーンはさ、夜もずっと寝ないであたしのそばについていたよ。そんな時に、妖獣を追い払ってくれた三人のアンナの中の、エデイスっていう女の子がいたんだけどさ。その子が、ジーンと知り合いだって言ったんだ」

「え？」

エリルの瞳が大きくなる。

「驚くだろ。あたしだって冗談かと思った。だけど、その子がジーンがいないときにあたしに話しかけてきたんだ。ジーンの詳しい生い立ちは話してくれなかったけど、あいつには、兄貴以外にもう一人どうしても探さなくちゃいけない人間がもう一人いる。けど、手がかりがは名前だけ。それ以外にはまったく何もないから、あたしにらずつと話せずにいるって。そりゃそうだ。名前しか知らない人間を探したいから、なんて無茶な話だ。でも、エデイスは言ったんだ。『ジーンならきつと探し出せる。その為にも、できれば、あなたの言葉でジーンの背中を押してやって欲しい』って」

「お兄さん以外の、探し人ですか？」

「ああ。でも、あたしはなんでかな、直感しちまったんだ。占術士が話してくれたせいもあるんだけど、その人探しが、ジーン

にとつてすごく大切な意味を持つことなんだ、って」

「……？」

エリルは、だまってネイの言葉に聞き入る。

「エデイスってさ、物静かな子なんだけどどこか不思議な子だった。他の二人はいかにも占術士様っていうか、あたしらとは住む世界が全然違う空気をまとっているんだけど、あの子はなんだかふわっとしていて、こつちが逆に守ってやらなきゃ、って思う感じだった。だいたい、あたしみたいのがアンナのあんたらと知り合いになること自体ありえないから、どうこう言うのも変なだけだよ」

エリルはずっと疑問に思っていたことを口にした。

「ネイは、ジーンとずっと一緒にいたのではないのですか？ 会うより以前って……」

ネイは口が滑った、というように苦笑いをする、少し言いにくそうに話し出した。

「あたしとジーンが出会ったのは、二年くらい前だ。親に売り飛ばされて、殺されかかったところをあいづが助けてくれたんだ。詳しくは話せないけどさ。その日から、あたしにとってジーンは命の恩人になった。でも、あたしはジーンのことを知っているようで、一つ知らない。住んでいた場所を父親から追い出されるのを知って、追いかけて、強引にそばにいと決めた。兄貴がノストールにいて聞いてたのも島を出た時が初めてだったよ」

ネイは目を閉じて、ハーフノーム島を出たあの日を思い出す。

楽しかった海賊島での暮らしはジーンがいてくれたからこそだった。

頭のジルと、ジーンが実の親子でないことは島の人間達にとつては暗黙の秘密のようなものだった。

島で暮らすようになったネイは徐々にそうした話を知るようになった。

複雑な事情があったようだが、ジルの妻であるイリアのために、誰もが何も言わずに、ジーンを受け入れたことを。



「ジーンはさ、あんなにチビなのに深い傷を抱えている。あの大きくて綺麗な翠色の瞳であたしにはわからない闇を見ている。あいつに関してはさ、正直、いろいろ奇妙だと思うことはあるんだ。けど、あたしは聞かないと決めてる。話してくれなくてもいいんだ。命の恩人だからね。あいつがいなかったら、あたしはもうこの世にいない。だから、ジーンのために力になれることならなんでもする。理由なんていらないんだ」

命に関わる重傷を負っても尚、力になりたいと言い切るネイの強い意志に触れたとき、エリルは、何かが自分の中で変化するのを感じた。

「兄貴がいるから、会いたいつて言うから助けになりたくて着いてきた。でも、なんでかわからないけど、化け物に二度も襲われちゃった。そのあたしが足かせになって、あいつが身動きが取れなくなるのは嫌なんだ。あたしはジーンを守りたいだけなんだ。兄貴に会うためにも、探したい人間を探すためにも、あいつを自由にしてやらなきゃいけない。なにもかも、万が一、あいつの言葉のすべてが嘘だとしても、いいんだ」

エリルは心が震えるのを感じた。

「ジーンは？」

「あいつは嫌だつて言ったよ。でも、アンナがいなくなつてまたあの妖獣が来るかもしれないことを話したら、泣きそうな顔してた。だから、あたしの怪我が治るまでの間、探したい奴がいるなら、手がかりだけでも探しておいでつて、言ったんだ。もちろん、兄貴に会いに行つてきてもいいからつて」

「でも、あの妖獣はジーンを狙つていたんじゃない……」

「エデイスはわかつていたみたいだ。だから、あの妖獣すべての気配が消えるまでアンナたちがジーンたちと一緒に旅をするつて言うてくれた。町のあちこちにも境界とかいづのを張つてくれたみたいだし」

ネイは話し疲れたように、少し咳き込んで、大きく息を吐き出し

た。

「とにかく、そんなこんなな事情だ」

「アンナは……」

言いかけてエリルは口を閉じた。

アンナの一族は王族に仕える占術士であり、ジーンと面識があること自体が考えにくいのだ。

仮に、旅の途中で出会った可能性があったとしても、二人の年齢は幼すぎる。

それに、アンナが一個人にかかわり、旅の保護を申し出るほど考えられない。

また、《星守りの旅》の途中、妖獣に襲われた町の人々を助け、緊急事態として撃退したとしても、その国の王の許しなく町に結界を張ったり、人々に薬草を与えたり、町の住民に関わること自体が奇妙だった。

その日、エリルは町を歩き回り、惨状を確認するように目に焼きつけ、夜はネイのそばにもどった。

ネイの体は、顔や肌の露出している部分は、あの事件から日も経過し、かなり腫れはおさまっているものの、どす黒いアザや傷の痕がいたるところに残っていてひどく痛々しげだった。

旅人のアンナが置いていたという、薬草を煎じて布に塗りつけ、患部に張り替えてやる。

「怖かったでしょう」

昼間は気が動転して、ねぎらう余裕にかけていたがネイの傷は深部まで達しているものもあり、痛々しかった。

正体のわからない妖しのものに二度も命をねらわれて、平静でいられるはずがないのだ。

自分も城で命を狙われたときは、一日も生きた心地がしなかった。「あたしなら、どうってことないよ……」。あんたが戻って来てくれたしさ。さっき久々にちょっと眠れたんだ」

ネイは力のない声のため息混じりにそう言った。

アンナが施した夢見薬をのみ続けていたが、その薬が切れた後は、ネイは一睡もしていなかったようだ、と世話になっている家の人間が言っていた。

本人の自覚以上に心についた傷痕は深いことはエリルには手に取るようにわかった。

「ばかだな、そんな目で見ないでくれよ。あたしのことは本当にいいんだ。それよりジーンが心配だ。あいつは、自分が傷つくことより、自分と関わると人が死ぬと思いついでいる。極力誰にも関わらないように気をつけているのは知ってるだろう。いつも脅えているのはそのせいだ」

ネイの意外な言葉にエリルは驚きながらも、自分が隣町に旅立つ朝、見送りに出て来たジーンの深刻そうな顔を思い出す。

エリルはアンナだから大丈夫だよ。ちゃんと先読みして、安全な道を選んで。そして無事に早く帰って来て。危険を感じたら逃げてよ。

何度も何度も念押しをするので、ひどく心配屋さんだねと、エリルはからかうように笑って手をふり、背を向けたのだ。

確かにエーツ山脈での「死の行進」とも言うべき大勢の少年たちの死と、ヴァルツという妖獣との遭遇が「死」への恐怖を植え付けたとしても、おかしくはない。だが、それはエリルも同様で、あの時見た地獄の光景を一日たりとも忘れた日はない。だからといって自分のせいで人が死んだとは思ってもよらない発想だった。

エリル自身、王宮にあっては父の側后や母違いの兄たちの相次ぐ死に出会っている。

けれど、それを自分と結び付けて考えたことなどなかった。

考えてみれば、ランレイを死体の山の中から捜し出したジーンの、異常と思えるほどの他者に対する生への執着はエリルには理解しえないものだった。あの場面では、仮に生きている者がいると聞かされても、信じられなかっただろう。まして黒焦げになった遺体を抱

きしめるように横たえ続ける行為など、気が触れたと思われても仕方無い行動と行ってよかった。

戸惑うエリルに追い討ちをかけるようにネイは、言葉を続ける。

「あのエーツの雪山の子供達が行く光景さ、あの化け物はジーンに見せたんだ。あたしは途中から耐えられなくて気を失っちゃまったけど、あいつは最後まで目をそらさなかつたみたいだ。殺された子供らのことを……どうしてそう考えるのか正直わかんないけど、あいつはあの子供達の死も、自分のせいだと思っている」

「そんな馬鹿な……」

エリルは普段ほとんど会話をしないジーンの、心の闇の部分を見つけたようで絶句する。

「本当に馬鹿な話だろ。もちろんジーンはそんなことあたしにも話さない。でも夜になると、うわ言で謝り続けるんだ。『みんなごめん』『助けられなくてごめんなさい』『ぼくのせいだ』って、繰り返し繰り返して、そりゃあひどく苦しそうにね。悲鳴に近い時もある。あの化け物は、あたしの見なかつた何かを見せて、すべてジーンのせいだと言ったのかもしれない」

「だから……あの死体の中から、死んでいない誰か、生きてる誰かを見つけてはもらえなかつた……？ そうなのでしょうか？」

エリルは、月の明かりを頼りに、闇の中、一面の死体の中からランレイを見つけた。後のジーンは表情を思い出す。

ランレイを助けたことで、救われたのはジーンの方だったのかもしれない、と。

「いつも誰かが死んでしまふ、自分といると誰かが死んでしまふって……。あの年でそんなこと考えてるなんて、悲しすぎるだろう。だから、あたしはあいつのそばで生き続ける。簡単には死なないって、決めている。だけど、今回はそのあたしがこのザマだろ。おかげでジーンを傷つけて、見てもらえないほどひどく落ち込ませちゃった。だからさ、ちょうどいい機会だし、その人捜しの旅に行っておいでって目いっぱい明るく振舞って、すすめたんだ。エディスカ

らも頼まれていたからね。あたしはそれまでに絶対にケガを治す。治ったらまたあんたが嫌でも、一緒に旅をしる。離れない、って約束をしてね」

「そうでしたか。そんなことが……」

ジーンの正体も気になり続けていたが、当初感じていたとおりヴアルツという妖獣がジーンを狙い続けるという自分の勘が当たっていたことを知った。

（それに、あの禍々しいまでの妖気はただの妖獣とは思えない）

ダーナン公国にあったという《エボルの指輪》とどう関係があるのか、一番知りたいのはそのことだった。

アンナの一族の長・ジーシュから学んだ知識から考えると、妖獣は王族の守護妖獣を除いては、存在を確認すること自体が難しいとされている。

王族の守護妖獣と単独で存在する妖獣がどのように違うのかまだ明確には判明していない。人里には現れず、住まず、群れず、小動物を餌として命を永らえる、と。

ヴアルツは話に聞いていた迷い妖獣とはかけ離れた存在であり、邪悪さと知能をもっていた。

守護妖獣を有したことがないエリルは、実感として守護妖獣がどんなものなのか想像ができない。

けれど、いつまでもそこにこだわっていられない時が来たことをエリルは感じていた。

(それにしても……)

エリルは唇を噛んだ。

自分さえ町を離れていなければこの事態を回避でき、ヴァルツとの接触が出来、《エボルの指輪》の手がかりをみつけれられたかもしれない。

ジーンたちと一緒にいれば、あの妖獣はまた現れると思い、その為に、ジーンやネイ達と行動を共にしてきたはずなのだ。

エリルは思わず壁に立て掛けたナーラギーユの杖を恨めしそうに見つめる。

(だいたいこの杖がいけないよなあ。あんまり震えるから僕自身に危険が迫っているとばかり思ったんだ)

持ち主の身に危険を知らせるというナーラギーユの杖は、確かにエリルを厄災から遠ざけた。

だが、それはエリルにとっては捜し求める《エボルの指輪》と関わりがあると睨んだ妖獣ヴァルツと巡り会う好機を逃してしまったことになる。

(あの妖獣は《エボルの指輪》に関わりがあるはずなんだ)

ヴァルツと対治した瞬間に感じた直感、アンナの《先読み》に従いエリルはあのヴァルツに出会えた。

《エボルの指輪》に深く係わっている存在だと、エリルは一瞬にして感じ取ったのだ。

「ヴァルツはほかに言ったりしていませんか？ どんな様子でしたか？」

エリルの問いに、ネイは記憶を思い起こそうと目を閉じた。

「エーツ山脈のときは、ジーンに向かって、確か『もつと怒れ、そして自分に？力？を求めろ』と言ってたような気がする。でもそう言いながら、ジーンに『自分に？力？を授ける』って。あの時ジーン

ンは、あたしを見殺しに出来なかったから、懸命に奴と戦おうとしてた。でも、どうにもできなくて……」

ネイは震える唇に自分の指を当てながら、あの時の状況を思い出したように青ざめる。

呼吸の間隔が短くなり息苦しそうにするネイの手に、エリルはそっと自分の手を添えた。

その手の温もりと心強さに、徐々にネイの頬にうつすらと赤みが戻ってくる。

「エリル、あの時にあんたが現れなかったら、あたしたちはどうなっていたんだらう……？」

ネイに問われてもエリルは、静かに首を横にふることしかできなかった。

出会ったときのあの谷底での異様な光景。

そこにそのようなやりとりがあったことは知らなかった。今、初めてネイの口から知ったのだ。

「考えたくないけど、あの化け物はジーンを捜し続けていたんだと思う」

エリルは、ネイの青ざめただが怒りをにじませた強い瞳を見つめた。

「あの化け物はあたしを襲ったときに言ったんだ。『おまえが殺されたら、アイツがどれほどの闇の怒りに満ちるだらう』『早くそれを見たい』って、嬉しそうに薄気味悪い声で笑ってた。あれは、ジーンを苦しめ傷つけたがっている。そして、どうしてだか本気で怒らせたいと思っている。一緒に連れている子供のようには、ジーンにとりつきたがってるんだ」

ネイの言葉にエリルははっとして顔を上げた。

「ジーンにとりつく？」

「うん。よく覚えていないけど、あの化け物が現れる前、崖の上でジーンと同じくらいの子供と会ったんだ。あいつは……サトニって言ってたかな。化け物に操られているように見えた」

エリルは目を細くして考えこんだ。

あのヴァルツが《エボルの指輪》の、ひよつとすると守護妖獣ではないのかと推測していたのだ。

エリルはヴァルツが逃げたのは、アンナの魔よけ降伏の呪文が効いたからではなく、ハリア国の王族の血を引く自分の言葉に逆らえなかったのだと今も思っている。

だが、それではヴァルツは誰の守護妖獣なのだろう。

主人を失った守護妖獣なのか……。

もしも、ヴァルツが指輪の守護妖獣だとしても、守護妖獣自身に主人を決定することはできない。

ましてや王族の人間ではないものにとりつくなど、ありえないはずだった。

サトニという子供が存在するならば、何者なのか。

（わからなくなった……ヴァルツはどんな妖獣なんだろう……そして、《エボルの指輪》はどこにあるんだろう）

エリルが自分の思いの中に浸り込んでいる、ネイが様子を伺うように話しかけた。

「あのさ、あんたジーンを追いかけて行ってくれないかな？」

「あ、そうですね。でも、いいんですか？」

ネイの突然の言葉に、けれど、エリルはそれが当たり前のことであるかのように即答していた。

「よかった。あたしはケガが治るまで動けないし、アンナのおんたが行ってジーンのおそばにいてくれると安心できる。エリルには世話になりっぱなしだし、あんたにも行き先が決まっているだろうから、無理かなと思ったんだけど。よかった」

真っすぐな黒い瞳に見つめられて、エリルはほほ笑んだ。

「安心してください。わたしの用件も若干方向が変更になったみたいなので」





翌日、ジーンとランレイ、そして《星守りの旅》の三人のアンナたちの後を追って、エリルは馬で旅立った。

けれど、アンナたち一行の足取りは容易につかめなかった。

理由はわかっている。

アンナたちは身を守るために道中で、また野宿をする場合では強力な結界を張るのだ。

特に、今回のように付きまとう妖獣がいるとなればなおさらだろう。

もっとも、町や集落などに立ち寄れば、珍しいアンナたちの存在は人々の話題となり、遠くの町にさえ風の便りとなって噂は耳に入る。

エリルはドイという町にアンナたちの一行が向かったらしいという話を聞かや、ひたすらその町を目指した。

内心、もしかやもうその町にはいないのでは……という危惧はあったが、町に到着し、一行がまだ存在していれば、アンナの宿泊している宿を捜し出すのは簡単だった。

エリルはアンナの装束を身にまとっている。

アンナとして、仲間を探していると尋ねれば、人々は畏敬に満ちた表情でエリルと言葉を交わし、丁寧に道案内さえしてくれる。

ただ、途中で何人もの人々に《先読み》を請われることも多かったが、エリルは今までもそうして来たように、アンナとして威厳と慈しみの表情をたたえながらこう言う。

『《星守りの旅》のアンナと違うので、《先読み》は正式な王の招聘がなければできないのです。我々は天に使えるものですから』と。

それでも親切にしてくれた人には、お礼としていくつかの言葉を与えていった。それは《先読み》ではなく、アンナの長ジーシュか

ら学んだ初歩的な占術の一種だったが、人々は喜びと驚きを交互にその顔に浮かび上がらせながら、感謝の言葉を述べ平伏した。

そして、アンナたちが泊まっているという宿にたどり着くことができたのだ。

(これで、ジーンたちと合流できる)

ホツとしながら宿の前に立ったエリルは、宿の扉を押し開いて中へと足を踏み入れた。

するとまるでエリルが来るのを待ち焦がれていたといった表情で宿の主人が姿を現し、エリルの言葉を待たずにニツコリと満面の笑みをたたえた。

「いらつしやいませ。お連れ様が、お待ち兼ねです」

そと言つて、自らが案内に立ち、二階の一番奥の客室の扉を示した。

「あなた様がいらつしやつたら、ご案内するように申し受けていましたんで」

主人はそういつて深々と一礼すると、そのままエリルをおいて去つていった。

「……」

エリルは、少し驚きながらも、ジーンはもしかすると自分が追いかけているのをどこかで知って、待っていたのだろうか？と首をかしげた。

その時、目の前の客室の扉が突然から開き、中から人が現れた。

それは、ジーンやランレイでもなく、またネイから聞いていた十三歳の若いアンナでもなかった。

二十歳頃の青年のアンナだった。

「やあ」

若者は、アンナの装束を身にまとったエリルをしげしげと眺めた後、片手を挙げて知人のように人懐こく笑いかけた。

(アンナ……だ)

目の前の若者の服装は、アンナ一族が身にまとう薄紫の長衣で

はなく、ふつうの旅人と変わらない軽装だった。

だが、黒髪に紫色の瞳、そして腕と腰に巻き付けてある長い組み紐が、アンナであることを示していた。

アンナは正装以外の服装をする時、術をほどこした紫と黒、白で織られた組み紐を身につける。そして、その編み方によりどの部族のアンナなのかもわかるのだ。

今エリルが対面している青年の腕の組みひもの編み方はアンナの一族の中でもっとも基本となる織り方だった。

それは、すべてのアンナの頂点に立つ大長老サーザキアの率いるアンナの一族の者であることを示している。

「あの……」

てつきりジーンと一緒にいるはずの、若いアンナと会うことばかり考えていたエリルは、突然のことにくろたえてながらも、部屋の中にジーンたちの姿が見えないかと、部屋の中を伺う。

青年はその様子を楽しんでいるように余裕のある笑みを浮かべて見ている。

「君は、ソル・アンナの一族のリリーだろう」

「え……」

「ここへは人探しに来たんだろう」

「あの……？」

「まあ、廊下で話というのもなんだから、部屋の中に」

驚くエリルに片目を閉じてみせると、青年は手招きを交えつつ自分の部屋へとエリルを招き入れた。

だが、中には誰もいなかった。

「最初に教えてやるけど、君が追いかけている《星守りの旅》の一行は三日前にこの町を出て行った。この町にはもういない。だが、俺は君を待っていた」

「えっ？」

エリルは思わずよろめきかけた。全身から力が抜け、手にしたナールガージュの杖に思わず寄りかかる。

やっとジーンと会えるとはかり思い込んでいただけに、落胆で全身の力が抜けてしまったのだ。

「俺はセルジーニ。サーザキアの一族に属する者だ。まあ、気落ちしていないで座れよ」

セルジーニは落胆の色を隠さないエリルの様子に苦笑しながら、自分は寝台の上に片足を組んで座ると、エリルにも向かい側の寝台に腰掛けるようにすすめた。

エリルはぼう然として表情をしながら座り込む。

「君がここに来ることは 先読み に出していた」

エリルの頭の前から足のつま先までを何度も視線を往復させながら、セルジーニはくすくすと笑う。

「俺はジーシュの一族も知っているが、記憶に間違いがなければ、リリーは可愛い女の子だったはず。確か十歳くらいになるかな？ 星守りの旅 にもまだ出られないくらいの……」

「あの……」

初対面のアンナの口から、自分が話してもいないことをぼんぼんと言われて、エリルの全身から嫌な汗がどつと出る。

だが、目の前のセルジーニは涼しい顔で、一人喋り続ける。

「ああ気にしないでくれ。君のことを、長のジーシュが一族の大切な客人としてもてなして、しかも君を守るために幾重にも術を施しているはわかっている。アンナの一族であることを示す衣服も、そしてナーラガージュの杖を渡しただけでなく、ささやかな術を教え、アンナと名乗ることを許している以上、君は本物とはいえないけど、見習いの見習いぐらいの資格は得ている。偽者には変わりないけどね。まあ、私のような本物に会ったからといって焦ることはない。私も君をどうしようなんて考えていないから」

「そうなんですか？」

毒気を抜かれたように明るい水色の瞳を瞬かせるエリルに、セルジーニは可笑しそうに笑った。



星守りの旅 の影守役であるセルジーニは、以前エリルが買い物のために出たテューラの町で、エリルを見かけていた。

エリルは偶然、ハリアにいた時幼い自分を殺そうとした男ガーズフを見かけ、後を追ったのだ。

その屋敷で危うく見つかりそうになり、隠れるために逃げ込んだ部屋でノストール王国のテセウスとアウシュダール、二人の王子たちと会っている。

セルジーニはその時から、リリーと名乗った青年に関心を寄せていた。

そのリリーが 星守りの旅 のアンナの一人、エデイスと出会ったルナを探していると知ったのは、この町にたどり着いて 先読みをした夜のことだった。

ジーンを名乗るノストール王国の第四王子だったはずのルナ。ルナとエデイス。

テセウスと、いつの間にかノストール王国の第四王子として存在するアウシュダール。

シルク・トトウ神の転身人といわれるアウシュダール。

ノストールとリンセンタース。

ノストールとナイアデス皇国のフェリエス。

そして、リリーを名乗る妙なアンナの青年と、ルナ。

様々なという図式が絡み合い、相関関係がひどく気になって頭から離れなかったのだ。

一度、リリーを名乗るアンナと直接会ってみたい。

そう思い興味をもち続けていたセルジーニはエリルがドドイの町に近づいたのを知って、自ら会うことを決めたのだ。

そのためにエデイス、マティス、オージーとルナ、ランレイが数日前まで泊まっていたこの宿に移り、仲間のアンナが訪ねて来たら

部屋へ通すように宿の主人に言づけていたのだ。

「さっそくで悪いけど、手の平をあわせてくれ」

セルジーニから手を差し出されて、エリルはごくりと喉をならした。

それはアンナの一族が、その人物の 先読み をより具体的に行う時の正式な形だった。

「いや……わたしは」

知っているだけにエリルは躊躇して思わず手を背中に隠そうとしたが、セルジーニはエリルの右手を半ば強引に引き出すと、自分の左手の手のひらにあわせた。

「ちよつと、待って……」

エリルはあせって止めさせようとしたのだが、セルジーニはそのエリルの水色の瞳を直視したまま、自分の脳裏を走馬灯のように流れ始めた映像に意識を集中させていく。

セルジーニにとっては時間をかけて話すより、自分の知りたいことを知るもつとも効率のよい方法だった。

相手が隠したいことさえも、みる事が出来るのだ。

「真の名は……エリル……」

セルジーニはエリルの正体を探ろうとした。

だが、それは、セルジーニが予期していなかった驚くべきエリルの過去と未来に関わるものだった。

驚きを交えながら見つめていたセルジーニは厳粛な口調で告げた。

「あなた様は長い旅をしてこられました。しかし、国に戻られる時期に入っております」

その口調がさきほどの乱雑なものから、自然に王族と接するときの厳粛な口調に改まる。

エリルの顔から困惑の表情が消え、静かな大人びた表情が浮かぶ。

「汝が求め続けし女神の涙



想いかたどられし誓約の化身  
捨て去りし祖国へ連れ戻されりし時  
眞実の姿は闇の妖しの力に支配され  
慈しみの魂は闇に沈みぬ  
崩れし時間を留めるため  
すべてを覆いし白き聖域に封じ込め  
葬られし女神の涙  
ひとたび祖国の大地に降り立つ時  
女神は裏切りの誓約を思い出し  
国を引き裂く刃を大地に与えん  
天変地天ことごとく招き寄せ  
大いなる災いの元凶となれり  
だが、誓約を再び求めし者  
女神の心なぐさめし慈しみの王  
涙の化身求めて帰還なれば  
封じられし女神の心  
ほんのひととき邪心より光を放つ」

セルジーニは 先読み を終えると、そのままエリルに語りかけた。

「あなた様は急ぎ国に戻られるべきです。今戻らなければ、間に合わないかもしれない……。一刻の猶予も許されません。星の導きに従い、守護者を得られれば微かな光の道が浮かび上がり、時を得るかもしれません。いま帰らなければ、帰る場所が失われるのが見えます」

そう語るアンナの青年を、エリルは愕然とした表情で見つめていた。

「国が……危機に直面しているか？」

これまで出会ったどのアンナとも明らかに違うセルジーニというアンナの言葉に、エリルは深く息を吐き出し冷静になろうと努める。

「はい」

セルジー二の迷いの無い言葉に、いよいよハリアに引き返さなければいけないのだと思った時、エリルはネイトの約束を思い出した。「わたしはその先読みに従い、国に帰らなくてはいけないだろう。しかし、わたしはジーンという子を追ってここまで来た。わたしがこのまま国に帰ったとして……あの子はどうなる？ 無事に尋ね人を探し出し、友の待つブレアの町に帰ってこれるだろうか？」

「では、先読み の続きを……」

エリルの問いに答えようと、セルジー二は意識をジーンに集中しようとした。

(ジーン……。エデイスが名づけ子と呼んでいた子供……。ノストールのルナ王子……。そして、ジーン)

瞬間、セルジー二の五体全身に洪水のような七色の光の波が渦となつて襲いかかった。

手の平を介して、エリルの誕生から出会う人々、風景、記憶、出来事、歴史、現在、そして未来が湧き上がるように現れ消えて行く。それらすべてが順序を乱し、凝縮し、または膨張し、一気に押し寄せて渦となり多様な光の色が交わり凝縮していく。

闇と光がそれらを包み込もうとし、また照らし出そうと拮抗する。その狭間に、ルナとエデイスの二人の姿が浮かび上がる。

セルジー二の意識は、二人に向けようとして白色に染まった。

その目を射る光の洪水は決して触れてはいけない領域へとセルジー二を巻き込み、巨大な力で呑み込んでいった。

「待ってくれ……こんな……」

「大丈夫かい？」

あわててエリルが手を離す。

「う……」

エリルの手が離れた途端、それは唐突に途切れた。

「待ってくれ……」

セルジー二はくずれるように背中から寝台に仰向けに倒れると、

胸を大きく上下させ、両手で顔を押さえ込んだ。

涙があふれ出ていた。

突然襲った経験したことのない異常な恐怖に神経が高ぶる。

汗が全身から噴出し、鼓動が全身に響き渡る。

それをおさめようと、何度も深く呼吸を繰り返し、乱れた呼吸を整えようとするのだが、今度は全身の震えが襲い掛かってきた。

「なにが……見えた？」

エリルは不安に満ちた表情で、セルジー二を覗き込む。

「それが……」

セルジー二は、苦汁の色を浮かべて広げた両の手を見つめる。

自分の手がこんなにも小刻みに震えているのを見たことが無かった。手で押さえても止めることさえ出来ない。

「あなた様に関する、あらゆるものが見えました」

もつと、冷静になりたかったが、その時間が惜しかった。

「けれど、突然光と闇が飛び込んでかき乱し、幾重にも重なり合ったものを生みだし、そして……」

セルジー二は、ありえないという様に顔をゆがませた。

「すべてを消しさつてしまいました。確かに見えたのです。でも、なにも残っていない。白紙に戻ってしまった……。くそっ！」

セルジー二は、上半身を起こすと、手の震えを止めようとするかのように片手で拳をつくって壁を殴りつけた。

たった今確かに見たのだ。

だが、忘れてしまったと答えるしかない自分が悔しく、そして、未知の経験に全身の震えが止まらない自分が腹立たしかった。

触れてはいけない領域に踏み込んでしまったような、恐怖。大いなるなる畏怖の心。

しかもそれは、セルジー二を拒むのではなく呑み込んでいった。脳裏に突如として『聖域』という言葉が浮かび上がる。

(『聖域』?)

その言葉に戸惑い、ゾクリとしたものが背筋を駆け抜けていく。

(ユナセブラ……)

ふいにその言葉が浮かぶ。

(ユナセブラ?)

「ジーンの身になにか起きるのですか?」

「え?」

そう問われて、セルジーニは、エリルからジーンのことを問いか  
けられていたのだと思いつく。

「いいえ……それが、なにも」

セルジーニは、なにも答えられない自分にうろたえ、首を何度も  
横に振る。

実は以前にも、ジーンのことを 先読み したことがセルジーニ  
はあった。

ジーンが、本当にノストール王国のルナ王子なのか、カルザキア  
王の実子なのかを確認したかったのだ。

だが、その時はマティスが 先読み した内容と同様、「死」を  
暗示する漆黒の闇しか見えなかった。

過去も、未来も、正体さえなにも映し出さない深い闇。

漆黒の闇だけだった。

「うーん」

尋常ではない様子のセルジーニを前にエリルは、腕を組んで真剣  
に考え込む。

セルジーニは頭を下げた。

「不甲斐ない姿をお見せして申し訳ありません。私にも初めての出  
来事で……」

混乱がセルジーニの心を支配していた。

「ああ、それじゃあ」

エリルは、思い出したようにセルジーニに笑いかけた。

「ありがとう。お礼を言わなければいけませんでしたね。わたしは  
このまま引き返し、早く国に戻る準備にかかります。それで、もう  
ひとつ頼みたいことがある。重傷の怪我人にとっても効く特効薬と、

術を施した護符を分けてもらえないだろうか。もちろん代金は払う」  
セルジーニの異常な様子や高揚、緊張感が伝わっていないわけがないのに、エリルはまるで意に介さないように自分のすべきことに意識を向けていた。

そのあまりに明るい透明な笑顔に、セルジーニの中に奇妙な感覚が横切り、緊張感が和らぐ。

「もちろん助力は惜しみません。出来る限りのことをいたします」  
エリルはセルジーニの顔に血の気が戻って来る様子を見ながら、改まった口調で告げた。

「自ら名を申し出るのを忘れるところでした。わたしの名はエリル・ルドフィン・ハリア。帰るべき国は、《エボルの指輪》を失ったハリアの大地。アンナの一族セルジーニの 先読み 従い国に帰ることにする。手助けを頼む」

無邪気にさえ見える微笑を向けられて、セルジーニは自然にその前に立ち居住まいを正すと、深くその前に頭を垂れた。

ブレアの町に戻ったエリルは、真つ先にネイのもとに駆けつける  
とセルジーニに調査させた薬と護符を与えた。

そして、自らは一刻も早くハリアへ帰国するつもりで動き始めた。  
だが、王都へ帰る計画を立てるうちに、大問題に直面した。

それは、リンセントースとハリアを隔てる国境の役割を果たし  
ている大河ミナラスを越えなければいけないという現実だった。

エリルがハリア国を出た当時は、王女シーラのリンセントース  
王への輿入れ話も進んでいたことから、両国の間は友好的だった。

商人らの出入りも活発に行われ、規制はあったものの、ミナラス  
河を越えることはさほど難しいものではなかった。

だからあの時、エリルは商人たちに紛れて船に乗り、苦勞するこ  
となく国から出ることができたのだ。

しかし、今状況はまったく異なっていた。

リンセントースは、ラシル王の側妃として入国したシーラを、  
ハリアに無断でナイアデス皇国のフェリエスの妃として差し出した  
のだ。

当然ハリアは激怒し、国交は断絶してしまっている。

港も国境も封鎖され、リンセントースとハリア間を行き来する  
というのは、今では至難の業だった。

ダーナン帝国、リンセントース、ゴラ、ナイアデス皇国、いず  
れも大河を国境として隔てられ、ハリアは存在する。

ミナラス河を越えずして故郷に帰ることは不可能だった。

闇商人たちが漁師を装って両国間を行き来しているらしいという  
噂話は宿で旅人たちから耳にはしていたが、エリルはその闇商人た  
ちを知るつてもない。もし運よく探し出せても、交渉する大金がな  
くては話にさえならない。

それに、アンナと偽ったままでは王家とのつながりを恐れられて、

逆に警戒される。かといつて、この姿を解く気にはなれなかった。アンナの一族としての身分は想像以上にエリルの身を守ってくれる。

ナーラガージュの杖をはじめ、エリルにこの装束を身につけることを許してくれたアンナの長ジーシュの強力な守りの術が施されているのを感じないことがないほど強い護りだ。

(アンナとして、ハリアに渡るべきか、それとも……。いや、その前に入国する途を考えないと)

地図を睨んで、唸り続ける時間をすごしていた。

「今日も成果なし、って顔に書いてあるねえ」

薬を煎じて持ってきたエリルにネイが口元に笑みを作りながら声をかけた。

「わかりますか」

エリルは思わず大きなため息を吐き出す。

エリアが旅を続けたいと話を切り出したとき、ネイは淡白なほどエリルとの別れに驚いていない様子で「目的地はどこなんだい？」と、エリルにヨール羊皮に描かれた地図を広げさせた。

「ハリア公国です」

「ハリア？」

エリルの予想に反して、大陸図に見入ったネイの顔をエリルは思わず覗き込む。

「少しは寂しいとかつて、思ってくれています？ 驚いてますか？」

「もちろんさ。あなたにはずいぶん世話になったし、いい旅仲間だし……。ゾーンも打ち解けていたし……。ああ、ここからだ結構北上して、でっかい河をわたったところにある国なんだな。ミナラス河ってけっこうでかいんだ」

国もでっかいんだなあ、と視線は地図に釘付けになったままで、エリルは思わずネイから地図を取り上げて背中に隠す。

「なにするんだよ」

「ちょっとは寂しがってほしいと思って」

真顔ですねた子供のように自分を睨みつけるエリルにネイは吹き出す。

「あんたを気持ちよく送り出してやるんだ。いいだろう。それとも行かないでって泣いてすがっほしいのかい？」

「そういうわけじゃないけど」

あまりに楽しそうに笑われてエリルはますますむくれた顔になる。

「一人残るのは寂しくないですか？」

「寂しくないとはいわないさ。でも、待っている人間がいれば、ジーンは生きようとする。あたしを置き去りにはしたくない奴だからね。灯台の役を味わうのもたまにはいいさ」

「ネイの中心にはいつもジーンがいるんですね」

「あたりまえだろう」

そんな会話を交わしてから、数日が過ぎた。

だが、ブレアの町にいたままでは、はるか先にある国境近辺の状況や、ミナラス河の港の情報を得られない。

町へ訪れる商人をつかまえてはいろいろと情報を仕入れるのだが、ハリアへ渡る手段は皆無に等しかった。

(まず国境まで行こう)

そう決心をしつつ、地図を凝視するエリルにネイが声をかける。

「あきらめて、ゴラかナイアデスまで行ってから船に密航したほうがいいんじゃないのか？ 封鎖されてちゃ船は出ないだろう」

「時間がないのです。こうしているのももどかしいのに」  
「？」

「ハリア国に厄災が訪れるのです。それを知らせなくてはならないのです」

「あんたはアンナ一族だろう。先読みやら、占術の力で、なんとかできないのか？」

「アンナは基本的に放浪民族のようなものですが、国境を封鎖して



いる国から国に渡るのは、その身分をもつてしても難しいのですよ。しかも、先読み できるアンナが敵国に渡るのを黙って見逃す国なんてないですからね。とくに一人旅ではいろいろ理由をつけて自国に留まらせようという力が働く。私の力はアンナでも下のほうです。先読み なんて・・・一緒にいたのだからネイはわかっているでしょう」

エリルは残念そうにため息を吐く。

「まあ、ね。なんとなくそうかな、とは察してるけどさ。いろいろでも、その国に悪いことが訪れるのはわかってるんだらう？」

「仲間から……」

「ちよつと、貸しな」

言いながらエリルの手元から地図を奪うように取り上げると、ネイは地図をまじまじと見る。

動きも素早くなつて、時折顔をしかめることはあつたが、かなり体調も回復してきたようだ。

「何度見てもすごいねえ。陸地も、海も、山も、国境まで詳しく書き込んである。こんな見事な地図があるなんて信じられないよ。本当すごい。これに海流を書き込めば完璧だよ」

感嘆のため息をもらす。

地図はハリアアから出る時に持ち出したものだった。

「あたしなら渡れるけどな」

散歩に行くような口調でそう言うネイに、少し呆れたようにエリルは力なく首を横に振る。

「現実を知らない人は簡単に考えるんでしょうけど。国境大河を越えるのは並なことじゃない。エーツ山脈を越えるのとはわけが違います」

「だから、でつかい河を渡る話だらう」

「そうです。アンナのわたしが難しいのに、ネイには無理ですよ」

「本当なら、賭けてもいいんだけどな？」

「え？」

反論するエリルを見て、ネイはニヤリと笑う。

「今まで黙っていたけどさ、実はあたしとジーンは海じゃちつとは名の知れた海賊だ」

「はあ？」

意表を突く言葉に、エリルは瞳を見開いてニヤニヤと笑う目の前のネイを、ポカンとした顔で見つめる。

「海賊なんて、そんなこと一度も話してくれたこと……ないじゃないですか。だって、ノストール出身だって言っていたし」

「ジーンの生まれ故郷はノストールだって本人は言ってる。それにランレイはノストールの村の子供だ。知ってるだろう。あたしは、今はダーナン帝国にのつとられた国で生まれた。でも、あたしとジーンの帰る場所はノストールの外海にあるハーフノーム島、海賊島だ」

初めて聞く島の名前に、エリルは目を丸くする。

「ハーフノームの海賊……？　だったんですか……」

エリルも、名前だけなら聞いたことはある。内陸でも有名な大海賊だ。

巨万の財宝を海で稼ぎ、自分達の島々を持ち、南の海を支配する。出会ったが最期、すべてを奪われ、忽然と姿を消す、と。

なにやら想像してみるが、その噂と、目の前のネイやジーンとは重なることもなく、どうもピンとこない表情で首をかしげる。

「もつとも、あたしらはまだ半人前みたいなもんだけどさ。この地図で見る限り、問題はこの大河だろ」

ネイは、リンセントースとハリアを分かち河に指先を落として示し、ゆっくりとなぞる。

「小船でも盗んで夜に出港すればいい。それだけだろう。簡単な話じゃないか」

「夜……？　無茶を言わないでくださいよ」

エリルは脱力したように、首をガクリと前に倒した。

「夜に船を出すなんてそんな話聞いたことありません。ありえま

せん。そんな危険なこと誰もしませんよ。海賊なのにそんなことも知らないんですか？ 名案があるのかと思っただら出来ないことを言わないで下さい」

船を操る者は、決して日の沈んだ海や河に出てはいけない。それは当たり前のことであり、船乗りの掟だった。

夜の水中には魔物が現れる。眠りについたミナラス大河の神を起せば逆鱗に触れると信じられているからだ。

「ミナラスの神は大河の神。けど、女神ドナは海の神だ。

「普通は掟に縛られる。けど、あたしらハーブノームの海賊だ。夜の海をこわいとは思わない。怪物も、嵐も、掟も恐れない。海の女神ドナを恐れない者が、どうして河の神ごときを恐れるのさ。嵐の夜に船を出したこともある。ちっちゃいグート船で月のない闇を抜けたこともある。数えたらきりが無いほどだ」

衝撃的な話にエリルは、ぽかんと口をあけたまま、ネイの自信に満ちたその表情を見ていた。

「あたしだったら、まず適当な船着き所を見つける。船はかっぱらうか、金で動くふきだまりの連中をひっかければいい。それで、月のない夜に出る。夜に船を出す奴はいないから警備は手薄だ。国境警備の奴らは夜はやることがないと信じてるから人数をおいていない」

「まるで見てきたみたいですね」

「言っただろう、あたしらは夜の海を恐れない海賊だって。港町のことなら手に取るようにわかる。でっかい河だって経験してる。この河の神様の名は知らないけどさ。追っ手のかかりにくい確実な方はこれに尽きる。例え見つかったても相手は負ってこないからね。でも、それを実行できるのは、この広い世の中でも、あたしらハーブノームの海賊ぐらいだろうけどね」

「うーん」

「あたしとジーンが手伝ってやれないのが気の毒だけど。闇商人を見つける方法はいくつか伝授してやるよ。そのかわり失敗したら命

は失う」

ネイとの話のあと、エリルは旅支度を整えながら様々に思いを巡らした。

エリルもこれまでの旅の中で、様々な経験は積んで来た。だが、さすがに船を盗むという発想は思いもつかなかった。

（船ってどうやったら盗めるのかなあ……。でも、わたしは操縦できないから、やっぱりだめだ）

（密航させてもらうにも、どんな相手を信じていいのか。それに、闇商人と出会うまでが危険すぎる）

（一か八か、天運にかけてみるか？）

考えれば考えるほど、いかにハリアへの帰路が困難であるかがわかって来て、エリルは頭を悩ませた。

そして、ついに考えに考えたあげく、エリルはネイに同行を頼み込んだのだ。

「ハリア国に渡れたら、絶対に安全にハリア国からリンセントスへ送り届けますから、お願いします。一緒に来てください」と。

もちろん、ネイは断った。

自分の怪我がまだ治っていないことや、自分はジーンの帰りをここで待つと決めた以上、動くわけにはいかないと、冷たいまでにきっぱりと断ったのだ。

だが、「だったら、あたしならできるとか、期待を持たせるようなことを言わないでいてくれたら良かったのに」とか「本当は名のある海賊だっていうのは、冗談だったんですね。暇つぶしの相手にちょうど良かったんでしょう」「別に自分が行くわけじゃないから、夜に船を出せるとか、いいかげんな話ができるんですよ」と、町にも出ないでネイのそばで一日中、繰り返した結果、「行けばいいんだろっ」と苦痛に根をあげたネイの口から、ハリア行きに同行する言葉を引き出すことに成功したのだ。



半年後、エリルは、故郷ハリアへ帰還するための船上の人となっていた。

ネイのおかげでエリルはブレアの町を出て、ハリアに向けて真夜中の密航という形ではあるが、リンセントースを出国しハリアに出発することができたのだ。

十二歳のあの日から、すでに六年もの歳月がたっていた。

《エボルの指輪》を取り戻して帰国するという当初の目的は、現実には果たせなかったもののまったく成果がなかったわけではない。（ヴァルツという妖獣もジーンを見失ったならばハリアに向かっているかもしれない……。約束を違えた戒めに、エボル神はあの妖獣に《エボルの指輪》の力を与えて、ハリアを破壊させようとしているのだろうか……）

セルジーニの 先読み が蘇り、エリルは不吉な予感に駆られる。ネイから仮眠をとるように言われたものの、真夜中に一人舵をとり続けていることを思うと、なかなか眠つけなかった。

船室を出で、甲板に出ようと細い梯子を上る。

甲板に顔を出すと、星が瞬き闇は深いが地平線の色がわずかに変わりつつあった。闇が明けようとしているのだ。

ほっとして微笑んだその時、船尾の方であきらかに人の争う物音と、物が落ちる水音が聞こえた。

エリルはただならぬ心配に、一気に甲板に駆け上がり船尾に走った。

「どうしたんですか？」

目を凝らすと、闇の中にネイの後ろ姿があった。

ほっとしながら近づくとエリルに、ネイは振り返らない。

肩で大きく息をしながら片手を少しだけ上げて、エリルの声にこえるのがわかる。

「なにがあつたんですか？」

「捨てた」

「は？」

ネイは、甲板にしりもちをつくようにドスンと座ると、そのまま上半身を倒して仰向けに寝転び、エリルを見上げる。

闇の中で顔は見えないが、少し苦しそうに呼吸をするネイの様子がいつもと違う。

エリルは奇妙な空気に眉をひそめた。

「なにがあつたんですか？」

かがみこんで心配そうにのぞき込むエリルの瞳を避けるように、ネイは静かに首を横に振った。

「ガロールア、あいつらもうすぐハリアに着くとわかつて安心した途端、あたしとあんたをどうやって高く売るか相談しはじめたんだ。

アンナの女といつても、身ぐるみはいで程度のいい服を着せて売れば、高く売れる。だれもアンナだなんてわかりやしない。自分たちが直接傷つけたりさえしなければ、呪いを受けるのは別人。自分たちは金さえ手に入れればいい、ってね。だから、捨てた」

「は？」

ネイのゴミを片付けたと言っているような言葉にエ、リルは目を真ん丸にしてその顔を凝視した。

「一人ずつそつと呼びだして、にっこり笑いかけながら体に手を回して『目をつぶって』とか言って抱きつく真似事と、甘ったるい声だせば、たいがいの男は引っ掛かるからさ。その気になって目をつぶったところを投げ飛ばしてやった。最後は残った二人に気づかれてちよつと揉めたからさ、やばかったけどね」

当たり前のことを、当たり前のようにしたというような表情には、勝ち誇った様子も、悲嘆する様子も伺うことはできなかった。

ただ、自分の為にネイが人を手に掛けたことに困惑して、エリルは瞳を伏せた。

そんなエリルに、ネイは身軽に体を起こして立ち上がると、その

肩をポンポンと軽くたたいた。

「あんたがやったわけじゃないんだから、そんな困った空気をださないでおくれよ」

「でも」

「どうせ、あたしはあんたをハリアに送ったらこの船でそのままあの町に帰る身だ。あんたとは人殺しとは関係ない。行きずりの人間もろすぐおさらばできるんだからそんな顔しないでよ」

エリルは、人を殺めただろうネイに戸惑っている態度を見せている自分に気がついてあわてた。

「違うんです」

「いいから。想像以上にヤバイ女だろう。海賊だからね。人殺しには慣れてるし驚くのも無理はない」

「私は助けられたのですね」

「あたしも売られそうになったから。それにあんたの薬のおかげでびっくりするぐらい元気になれた。おあいこだろう」

「何も知らずに、命を守ってもらった」

「気にするなつて。ちよつと血が騒いだけだ。船つてやっばいいよ。このままハーフノームに帰りたいぐらいだ」

「ネイ……」

エリルは、暗い闇の中で波音を耳にしながら言葉を交わすうちに奇妙な感覚に包まれた。

闇の中で、ネイの無垢な微笑がはつきりと見えたのだ。

何の駆け引きなく自分を助けてくれたネイの、本当に無欲な心に触れたとき

『守護者』

セルジーニから与えられた 先読み が心に響き渡った。

エリルは、船を世話してくれる人たちを、渡航を手伝ってくれる闇商人たちが守護者なのだろうと思っていた。

エーツ山脈で偶然に出会い、助け合いながら旅をしてきたネイがそうした存在とは考えたこともなかった。



『守護者』

エリルは、その言葉を自分の心に問いかけ、そして刻み付けるようにネイを見つめた。

暗闇の中、扉が一気に開かれるのが見えたような気がした。

そして、自分の肩におかれていたネイの手をとり両手で包み込むと、エリルはあざやかなほほ笑みを向けた。

「お願いがあります。私と一緒に来てください。そして、私を助けてください」

決意にみちた水色の瞳を、前方にうつすらと見え始めた故郷ハリアに向ける。

「あの国に一步入れば、おそらく私は敵の中に身をおくことになると思います。最初は帰国さえ出来ればなんとかなると思っっていました。でも、いまのこのことではつきりわかりました。ネイがいなければどんなに杖が身の危険を知らせてくれようと、私一人ではどうにもできなかつた。杖は私を危険から遠ざける役目は果たしますが、危険の中で戦う力を与えてはくれません。逃げるだけでは勝てません。今の私は無力です。一人ではこれからの道を切り開くことは出来ないでしょう。どうか私のそばにいて助けてほしいのです」

ネイはこれまでにないエリルの真剣な表情に、ただならぬ雰囲気を感じて息を飲んだ。

「エリル？ あんた……一体……」

「私の名は、エリル・ルドフィン・ハリア。現女王ミレーゼの実弟であり、ハリア公国の第一王位継承者です」

目をこれ以上ないというほど大きく開けて固まるネイに、エリルはこれまで隠していたことを語り始めた。

闇は暁を迎え、日の出を迎えようとしていた。

ハリア公国の首都モルカの王宮では、このところまことしやかに囁かれる噂があった。

『数年前から、ミディール妃の亡霊が王宮のあちこちに現れるらしい』

『王宮内の人気のないところに碧いドレスを着た女がいるので見張りの兵が声をかけたら、スーツと目の前で消えたんだ』

『夜ごと、行方不明のエリル王子をさがして城下をさまよっているらしいぞ』

『エリル王子も亡くなったとか……。生きておられれば十九歳だったのに……。』

いつのころからかそんな噂が広がり、兵士たちは不安を募らせていた。

しかし、それはハリア国内の現在を象徴する出来事の一部にすぎなかった。

六年前の内乱に伴うヘルモーズ王の退位と、王太子エリルの失踪、暫定王としてのミレーゼの即位、王女シーラのリンセントスのラシル王との突然の結婚解消と失踪、その後のナイアデス皇国での婚儀にともなうリンセントスとナイアデス皇国との不和、国交断絶、近隣諸国との緊張関係、国政の乱れ、地震と農作物の不作に伴う飢饉など、国中が不安と緊張と、不満の渦に包まれていた。

さらに二十一歳となった若き暫定王ミレーゼ女王の統治に対する国内外の評価は悪評を極めた。

わがまま女王が国を危険な状態にさらしており、このまま婿をとって結婚し、そのうち暫定王ではなく事実上の王位を継承するといいだすのではないか、そうなれば国は疲弊し、自滅していくとの見方をする者も多かった。

そして、王太子エリルがない今は、翌年十五歳を迎えるグリト

二ル王子に王位を継承させてはいかがなものかという意見まで水面下でささやかれる事態となっていた。

「そのようなつまらない噂など気になさってはいけませんわ」

午前の国務を終え、怒りに満ちた形相で食卓の間に現れたミレーゼを見て、メイヴ妃は物静かで冷静な家庭教師のような表情で女王をなだめる。

「陛下が激務に耐えて、国を支えられているのはこのメイヴがおそばでしっかりと見て存じております。民は、王家に不満をぶつけることで個々の怒りを解消しているのですから」

「怒りは次の怒りを生むわ。民の怒りは、私の怒りを呼び起こし、次の怒りを生み出すわ。とめどもなくね。解消なんてするものですか。今日のお茶の様子伺いはだれなの？」

メイヴ妃が食後の午後のお茶の時間に同席するダルクス大臣や貴族諸侯の名をつけると、ミレーゼはありありと不快な表情を浮かべ、座ったばかりの椅子から立ち上がった。

部屋の空気が張り詰めたものに変わる。

「気分がひどく悪すぎるので午後の接見はすべてとりやめにするわ。ダルクスには日をおいて別の日にでも出直すように伝えて」

同席したお付きの貴族達の顔色がみるうちに色を失っていく。

「陛下、お待ちください」

食事に手もつけずに扉に向って歩き出し、立ち去ろうとするミレーゼに側近のレイドリアンが駆け寄り、行く手を遮るように立ち塞がった。

「おどき！」

叱咤するような声に息をのみながらも、ミレーゼの側近となって二年足らずの長身で体型も大型の貴族の青年は、真剣な瞳で主を見つめて小声で諫めた。

「ダルクス大臣は確かにうるさ型の諸公の中に属されておりますが、陛下にとっては必要な方です。どうかご気分をおなおしになってお

会ってください」

「誰にものを言っているの？ たかが護衛のくせにでしゃばらないで。私は気分がすぐれないといっているでしょう。早くそこをどきなさい」

叱責と、大きな碧い瞳から放たれる強い視線を向けられて、大の男はたじろぐ。

それでも、何度も息を整えながら片膝を絨毯につけて、頭をたれる。

「陛下がおかれております現在の状況を考えると、お止めしないわけにはまいりません。これ以上の……」

「レイドリアン」

ミレーゼではなく、背後からメイヴ妃の穏やかな声が言葉を遮る。「陛下は本当にお加減がよろしくないのでですよ。それなのに臣下のあなたが気をつかわずにいかがするということです。ミレーゼ陛下、どうぞ午後の接見はお気になさらずにお休みください。わたくしがいつものように代行を努めさせていただきます」

「よきにはからって」  
ミレーゼは振り返ることもせず、そのまま食卓の間を去って行った。

片膝をついたままのレイドリアンは背後の貴族達の失笑を背に受け唇を噛み締めた。

こうして若き女王ミレーゼを甘やかし続けるメイヴ妃の心境が理解できなかった。

「陛下……」

無常に扉が閉まる音を聞きながら、立ち上がる気力も沸かずレイドリアンはそのまま頭を垂れているしかなかった。

遙か頭上から轟音とともに流れ落ちてくる滝を見上げながら、乗馬服に身を包んだミレーゼは目を閉じて大きく深呼吸をした。

瑠璃色の長い巻き毛が風になびき、勝ち気な性格がすべて現れてしまふ意志の強い碧い瞳をゆっくりと閉じる。

美しく成長しながら、その表情に微笑を浮かぶことは極めて稀だった。

『黙っていてくださればお美しいのですから』とメイヴは言うが、冗談ではないと思う。

姉上のように優しい性格でも、エリルのように芝居上手でもないもの。嫌いな人間にも微笑んで、面白くもないのに笑って接するなんて私には不可能よ。

日々目まぐるしく変わる複雑な人間模様と権力闘争、隣国との領土問題や民族紛争、領地争い、農作地の争い、複雑な訴訟の最終判断と、激務を来ないしてる人間に微笑んでいればいいなんて、本当に冗談ではなかった。

いくらメイヴが表向きはかばってくれていても、背負うものの巨大さにつぶされそうになる。

そんな時、ミレーゼは王宮を抜け出して秘密の場所を訪れるのだ。いつもこの壮大な風景と激しい水音の中に身を置くと、すべての嫌なことから解放された。

緑の木々に囲まれ、小鳥がさえさえずる静かな風景。

そして、その中でただ上流から流れ落ちる巨大な水の流れと轟音に身を浸していると、自分自身が無になる気がする。

なによりも、ここには大好きな人達との思い出だけがあった。

目をゆっくりと開け、上空の青空を見上げると、ミレーゼは、シーラもエリルもいなくなった王宮で、傀儡王としての治世を行いなから、つくづく自分はいくじ運が悪いと振り返る。

この自分が、我慢して我慢して女王陛下を演じ、国務、政務をこなし、会いたくもないおべっかをつかう人間とも我慢をして謁見もしているのに、日々増えていくのは悪評ばかりだった。

「あーあー」

思わず大きく息を吸って大きな声と吐き出す。

すると突然背後から、滝の音をもかき消すような大きな笑い声が聞こえてきた。

ミレーゼの片方の眉がピクリと動く。

「さすがの陛下も、ため息にございますか」

「失礼ね。これは深呼吸というのよ。物知らず」

ミレーゼは横顔を向けて、その人物を軽く睨む。

現れたのは、一見貴族には見えないほど、地味ない装いをしたダルクス大臣だった。

今日の午後のお茶の時間の接見をすっぱかされたはずの老伯爵は、「これは失礼致しました」と頭を下げながら、ミレーゼの座る岩場に腰を下ろした。

「レイドリアンが泣いておりましたぞ。陛下はご自身の身に迫っている危機を寸分も感じておられない。このままでは評判どおり、メイヴ妃の操り人形として大変なことになってしまふ、と」

「ずうたいのでかい割りには素直ないい子で、本人に悪気はないのはわかってるわよ。けど、あからさますぎるのよね。なにもメイヴやその他大勢の噂大好き人間のいる前で、馬鹿みたいに泣きそうな顔して懇願しなくなっただっていいじゃない」

ミレーゼはつまらなさそうにつぶやく。

「ですが、そういう人間こそ大事にすることです。本当に耳に痛いことを告げる人間を遠ざけてはなりません」

手厳しいダルクスの言葉にも、ミレーゼは肩を竦めて苦笑いを浮かべる。

「おかげで、私の周りは減らず口の老人ばかりだらけよ。あつちは耳が遠くて何も聞こえないんでしょうけど、こっちは耳が痛くて聞

こえなくなりそうだな」

両耳を塞ぎ、両目を閉じ、ミレーゼはダルクスに舌をつき出す。「王宮でも亡霊扱いですからな。おかげで関心さえ向けられなくなっってしまった」

ダルクスはカツカと笑う。

ミレーゼが、ダルクスにこの秘密の場所を教えたのは、王位について三年余り過ぎてのことだった。

その間、女王となった自分に対し人々は腫れ物を触るようにミレーゼに接し、また裏ではメイヴ妃のご機嫌をとることに終始していた。

特に、姉シーラの結婚、失踪の際にはどこからも情報がまったくはいらず、ミレーゼが直接命じても、何が起きたのか調査中であり、居場所さえつかめない、わからないの一点張りで本当に調査を行っているのかさえ怪しかった。

また諸公との謁見でも揉め事は不思議なほどなく、メイヴ妃は「陛下にご負担をかけることはほとんどございません。あくまでも形だけのものですから気をお楽になさって下さい」との言葉にしたがつて求められる執政をしてきたつもりだった。

その言葉通り、誰もがミレーゼの言葉に従い、逆らうものなどなかった。

ミレーゼ自身「どうせ、エリルが帰って来れば自由になれるんだから」という思いもあって、さほど深く考えずに日々を過ごしていた。

ただ、その中であってダルクス大臣だけが、煩わしい存在だった。メイヴがそばにいないのを見つけてはミレーゼの前に現れ、うるさいことを言っっては去って行くのだ。

メイヴから「ヘルモーズ陛下の若き時代からの忠臣ですが、お年もお年ですので隠居の話を進めましょう」と勧められたときも、これでするさいのがいなくなると内心ほっとしていたものだった。

だが、メイヴが遠出するのを見計らって、こっそりと一年ぶりに

宮殿奥で病氣療養をしている父ヘルモーズをたずねたとき、意識が混濁している状態の中で父は「ダルクスを側におけ」とミレーゼにしか聞こえない声で囁いたのだ。

その一瞬の瞳は、狂人ではなく正気のものだったのをミレーゼは確かに知った。

ミレーゼは、ひよつとして、父が正気でもあるにかかわらずこの部屋に閉じ込められているのではないかとの大きな疑念が、大きく浮上したのだ。

それを確かめようとしても、その時間もきっかけも得られなかった。

この時になって、ミレーゼは、自分は最高権力者の立場にいながら、父の見舞いさえ自由にいけないことに初めて気がついたのだ。

誰が本当の家臣なの？ 誰が一番父上のお心を知っている人間なの？

ミレーゼのそばにはいつもメイヴが背を向けて守ってくれている。面倒くさいことは全部メイヴが取り仕切り、必要なことをミレーゼに求めた。

また各国要人や国内貴族達との謁見の求めも、重要な事案以外はメイヴが代行を行なってきた。

メイヴのおかげで、ミレーゼは最低限必要なことは務め、本当に必要な人物とだけ会うことで、面倒な宮中の権力闘争の渦中に身を置くことから逃れられていたのだ。

すべては父の元側妃が、母の非業な死の後も、狂人と化した父の後を継いだ、自分を守ってくれているおかげだと信じていた。

だが、父の見舞いをしたあの時から、ミレーゼはすべてを疑うことに決めたのだ。

誰が味方で、誰が敵か、を。

父の言葉を確かめるため、真に自分の味方に値する人物かどうかを見極めるため、ミレーゼはあらゆる手段を講じてダルクスを試し始めた。



人前で暴言を吐き、ダルクスに恥をかかせたことは数え切れないほどあった。

見かねたメイヴが、ミレーゼに苦言を呈することもあるほどだった。

だが、ダルクスはそれでもあきらめなかった。機会を見つけてはミレーゼに国の窮状を訴え続けたのだ。

「王印を押される前に書面にならず目をお通し下さいますよう」

「側近の者の言葉を鵜呑みにせずにご自身でご確認ください」

「おだてられたままドレスで暴れ馬にのれば、大ケガを致します。

たとえどのような名手とて、自らの手には手綱がなければさばけませぬ」

その言葉が、自分にとって必要なかどうか計り兼ねたことも多々あった。

意地と意地との張り合いのようなやり取りが、二人の間にはいつも漂いで、ピリピリとした緊張感を周囲に与えた。

そして、ある時、ミレーゼはダルクスと接見したときに、突然癩癩を起こし、大臣であるダルクスに自分の私室のしかも寝所の掃除を一人で行うように命じたのだ。

これにはさすがのダルクスも、顔を真っ赤にしてミレーゼを睨みつけ、屈辱に身を震わせた。

しかし、それはミレーゼの賭けだった。

寝室の燭台の下に、ダルクスに宛てた最初となる手紙を忍ばせておいたのだ。

「陛下……やりすぎにございます」

後日、手紙に指定した時間通りに、さびれた礼拝室に感激の面持ちをたたえ涙ぐむダルクスが現れた時、ミレーゼは心から安堵のため息をこぼしていた。

「私と父上の側につく人間なんだから、頑固者が必要なよ。でも、よく耐えたわね。ほんとうにあきれるわ」

「陛下は常に私の言葉に耳を傾け、言葉を返して下さいました。ど

んな時も、無視されたことは一度たりともございませんでしたから  
「身分を卑しめられても？」

「さすがに寝所の掃除を命じられたときは、これまでかと。下男下女のごとき扱いを受け生き恥をさらすぐらいならば、隠居をしよう  
と一度は決めました。しかし」

「？」

「ヘルモーズ陛下に命じられたなら、と考えました。それだけでございませぬ」

ダルクスは、ミレーゼの信頼を得た。

ミレーゼが、エリルやシーラと密会していたこの秘密の場所を教えたのは、さらに二年が経過してからのことだった。

ミレーゼはダルクスを通じて、さまざまな国の状況やメイヴ妃がミレーゼに内密で行っていること等、次々と知ることとなった。

特に衝撃を受けたのは、メイヴが行方不明となっていたシーラをリンセンテートの古城で保護していたという話だった。

しかも、失踪したはずのガーゼフが一枚も二枚もこの動きに噛んでいると言う話を聞いたとき、ミレーゼはあまりの怒りと驚きに失神寸前となった。

そして自分が愚かにも、母ミディール妃を死に追いやったも同然のメイヴ妃と、弟を殺そうとしたガーゼフの意のままに動いていたと知って、激しい動揺と自己嫌悪にさいなまれた。

「我がハリアの神、エボル神に誓って、絶対に許さない」

そう誓ったミレーゼは、ダルクスに対しては王宮では相変わらず罵倒の言葉を浴びせながら、真に自分の味方となる人間を選別し、情報を得続けていたのだ。

「レイドリアンは、陛下のお目にはかないませぬか？」

ダルクスに問われてミレーゼは、しばし考える。

「私が聞きたくない嫌なことばかり正義感ぶって言うてくる点では、第一段階は通過なんでしょう。でも、気配りがなさ過ぎて、鈍いし、メイヴの前でわざわざ目立つようなことをするのは問題外。見てい

てこつちがヒヤヒヤするわ」

つんとすまして答えるミレーゼにダルクスは、目を細めて二十歳を迎えた気位の高く美しい女王を眩しそうに見つめる。

亜麻色の美しい長い髪、強い意志を示す碧い瞳。陶器のように美しい横顔。

わがまますぎて、慣れていないダルクスも辟易することも多いが、なによりもヘルモーズ前王の言葉に耳を貸し、老体の自分を切り捨てずにこうして心を開いてくれた若き女王を心から称賛し、敬愛していた。

「レイの話はいいのよ。それよりも、例の話はその後どうなっているの?」

ミレーゼは厳しい顔をしてダルクスを睨みつける。

「グリトニル王子擁立の企て、水面下で動いているのは確実」

つい癖でダルクスが声をひそめた為に、滝の音に消されてしまいうそになる。

「そう……やはり次は、自分の意のままになるグリトニルをかつぎ出そうって魂胆ね」

ミレーゼは、感情をぶつけるように怒りに満ちた大きな瞳でダルクスを睨みつけた。

ミレーゼは目の前にいる相手に感情の矛先を向ける傾向が多々あり、ダルクスから再三指摘をされても、簡単にはなおりそうになかった。

「あの女、ハリアを自分のものにする気だわ」

あまりに強い視線に耐え切れなくなったダルクスは、思わず立ち上がって滝壺の方へと足を向けた。

ミレーゼの弟グリトニル王子は、来年で十五歳の誕生式を迎え、王太子としての認証を受けることが可能となる。

そうなれば暫定王の名称が外れないままのミレーゼは、王冠をグリトニルに譲り渡さなくてはいけなくなるかもしれない。

たとえそれがミレーゼの意志ではなくとも、メイヴ妃が仕組みば

その思惑のまま事態が進んで行くのは予測できた。

そのグリトニル擁立を容易にするために、メイヴ妃はミレーゼ女王の悪評を国民に撒き散らせているに違いないのだ。

「誕生式を迎えなければ、まだ時間はあるのでしょうか？」

立ちあがったミレーゼは、ダルクスの隣に並んで立つ。

「それが……時間は余りないかもしれませんが」

「どうということ？」

ミレーゼは、詰問するようにダルクスを見る。

「はっきり確認したわけではないのですが」

「いいから、答えて！」

「グリトニル殿下がごく最近、《エボルの指輪》を手に入れられたという噂が……。そのようなことはありえぬのですが」

「！」

ミレーゼの顔からみるみるうちに血の気が引いていった。

「まだ、噂の段階ですが」

ダルクスはミレーゼの背に手を添え、その細いからだに倒れてしまわないようにと支える。

「《エボルの指輪》なんて、この国にはもう存在しないってお父様は言ってたわ。ないはずのものが、どうして現れるの？」

《エボルの指輪》は王の後継の証しだった。もしも、本当にグリトニルがその指輪を手にしたのだとしたら、ミレーゼはもとより、エリルが帰って来たとしても、王位はグリトニルのものになってしまう。

「そんなこと……」

ミレーゼは、自分の声から急速に力が失われて行くのを感じていた。

雲がどんよりとたちこめ、星々の輝きもすべてが隠れ、闇の帳だけが降りた深夜、メイヴ妃の居館の一室の窓に灯りがともった。

「ぶしつけ者よのう」

言葉とは裏腹に、テラスに身を潜める人物をガウンを羽織ったメイヴ妃はそつと寢室の中へと招き入れる。

「お人払いは？」

「とうに済んでおる。しかし、こう遅くなつては今宵はもう来ないかと思つていたぞ」

燭台の灯りが届かない部屋の隅に、闇の中に佇む長身の男が、口元に笑みを浮かべる。

「『吉報は、夢見の闇に紛れて』が、よろしいかと」

ハリアの侵略で滅んだメイヴ妃の故国、ナクロ国のことわざを男が口にする、メイヴはふと少女のような表情を浮かべてほほ笑んだ。

「おまえだけが、わたしの心をわかってくれる。のう、ガーゼフ」  
名を呼ばれた男は、静かに一礼をする。

「それで、指輪は手に入ったのじゃな」  
「御意」

メイヴは、満足そうに妖しげな瞳を目元にたたえると、ガーゼフに長椅子に座るようにすすめ、自らも傍らにある愛用の椅子に深々と腰を静めた。

「ただし、ひとつ問題がございます」

蠟燭の灯りがガーゼフの口元を照らす、その瞳は髪影となりはつきりと見ることができない。

「申してみよ」

「指輪には、持ち主が存在致します」

「持ち主？」

「眠りについていた指輪をこの地まで届けた人物。名はサト二と言  
う子供ですが、指輪をこの者から引き離すと、その指輪の力が暴走  
いたします」

「ふむ……」

メイヴ妃は長いため息をつくとき、ガーゼフがどのようにしてその  
指輪をもつ少年を見つけたのかをたずねた。

そしてひと通り聞き終えると、静かに目を閉じ、しばしなにごと  
かを思いを巡らしているようだった。が、再び瞳を開けたときには、  
決意の色が浮かびあがっていた。

「わかった。そなたの長年の努力に報いるためにも、わが積年の思  
いを果たすためにも、私は決断をする時期にきたようじゃな」

「では、いよいよ」

ガーゼフの囁きに、メイヴはうなずきながら、左手をそつと軽く  
持ち上げる。

すると、ガーゼフは流れるような動作で長椅子から立ち上がると、  
メイヴ妃の前に歩み寄り、片膝を絨毯につき、その指を優雅にとつ  
て口づけをした。

「うむ。ただ待つのはもううんざりしたわ」

メイヴ妃の白い指の一本一本を、慈しむように触れては離す行為  
を続けるガーゼフの唇をじっと見つめていたメイヴ妃の瞳に、妖艶  
な光が浮かび上がる。

そして、自分のその手をゆっくりと持ち上げて口元へと近づける。

ガーゼフの顔が至近距離でメイヴ妃の顔と向かい合う。

「人払いは、明け方までじゃぞ」

伏せられていたガーゼフの藍色の切れ長の瞳がゆっくりとメイヴ  
妃の瞳に視線を重ねりあう。

「お心のままに」

低い声でそう囁きかけるとガーゼフはそのままメイヴ妃を抱き上  
げ、闇の中、炎の薄明かりに照らされる天蓋付きの寝台へ向けゆっ  
くりと歩みを進めて行った。



「陛下、最近お元気がないようですが、お身体は大丈夫なのですか？」

「大丈夫だから、散歩をしているのでしよう！ その目は一体どこを見ているの？」

早朝の湖畔の散歩に付き従うレイドリアンを無視するように早足で歩きながら、ミレーゼは半月前に大臣のダルクスから聞いた《エポルの指輪》について考えていた。

もし、万が一、《エポルの指輪》がグリトニルの手に渡っているとしたなら、公王の資格を得たことになり、自分は文字通りおはらい箱になる。

その前に、ダルクスたちが提案して来た案を受け入れるか、それとも別の方法がないものか、と。

どうしたらこれから待ち受ける困難に向かっていけるのか、毎夜眠れぬ夜を過ごして来たのだ。

『グリトニル殿下が前陛下の御子ではないという噂を利用できれば、いくら指輪を手にしたところで、その正当な所有権は殿下にはないことになります』

『お母様は、もういらっしやらない。お父様はご病気でお会いすることも難しいのよ。もしお会いできて、たとえ真実の言葉を語ってくださいたとしても正式な場所での発言でもない限り、誰も取り合わないわ。それに第一、証明のしようがないじゃない』

例え真実がどうであれ、グリトニルとミレーゼ、そしてエリルの母は間違いなくミディール妃なのである。

母亡き後は、メイヴ妃が手元に置きその教育にひとかたならない意欲を注いでいるが、ミレーゼは政務の多忙さも手伝い弟グリトニルと親しく接したことはほとんどなかった。

またグリトニルの評判は、「操り人形としては最適」と影で悪評



を囁かれるほど、自己主張のない物静かな性格だった。

「レイ！」

ミレーゼは、突然立ち止まると叱責するように側近の名を呼んだ。  
「なんででしょうか？ 陛下」

少し遅れて駆け寄って来たレイドリアンは、慌ててミレーゼの前に立つと膝を地面につけ視線を落とす。

日頃よりミレーゼが上から見下ろされるのを嫌うため、前に立つときは腰を落とさなくては叱られるのだ。

「あとで地図を渡すから、朝食を終えたら、印を付けた場所に行きなさい。そこにいる太った店主に『レーゼの小鳥が鳥籠から逃げ出した』と伝えて来なさい」

「はあっ？」

突然命じられて、レイドリアンは思わず顔を上げて、命じられた言葉がまったく理解できずにミレーゼの顔を見たまま固まった。

「あなたのその頭で考えたってわからないわ。命じられたまま従いなさい。意味を知る必要もないし、邪推するのも禁じるわ。それから、絶対に極秘に遂行すること。誰かに見られたり、馬鹿みたいに正体がすぐにわかるような貴族様の格好で行くんじゃないわよ。しくじったら即刻処刑に処すから」

「え？」

ミレーゼの厳しい表情と言葉に、レイドリアンは身を堅くした。

「でも、安心しなさい。その時はきっと私も一緒に処刑台行きだから」

吐き捨てるように言うと、ミレーゼはその場にレイドリアンを置き去りにしたまま、宮殿に向かって歩いて行ってしまった。

「『レーゼの小鳥が鳥籠から逃げ出した』。確かにそうお言葉があったのだな？」

レイドリアンは言われた通りにできるだけ目立たない服装でミレーゼから指示を受けた酒場へ出向いた。

そして、夜通し飲んでいた客が帰っていくのを見送り店主が店の扉を閉めようと扉を閉めようとするのを見て、裏口から忍び込み、後片付けをしている店主に、名を確認してから伝言を伝えた。

「そうだ」

ミレーゼからの暗号というべき言葉を聞いた店主は、血相を変えてレイドリアンを店の中の個室に引きずるように招き入れ、再度言葉を確認した。

そして、店の人間と思われるものを呼びつけるとひそひそと何か言葉を交わし、数人をどこかへ使いに出したようだった。

緊張した雰囲気客のいなくなった店内に広がる。

「どうぞこちらに」

しかも、店主はそのままレイドリアンを地下の一室に連れて行き、返事を渡すのでここで待つようにと言って彼一人を残したまま、姿を消してしまっただのだ。

（私は……しくじっただのだろうか……）

レイドリアンは『処刑』というミレーゼの言葉を思い出し、咽が渴いて行く感覚に陥ちいった。

幸い扉に外から施錠されてはいなかったので、何度も抜け出して帰ろうかとも考えた。

しかし「返事を渡す」と言われた以上、それを届けなければ使者としての役割は果たせない。

手ぶらで帰ったりすれば間違いなくミレーゼの逆鱗にふれるのは火を見るよりあきらかで、レイドリアンはなんども喉元に手をあて

がっつては、大きなため息を吐き出し、ひたすら次の展開を待つしかなかった。

長時間ひたすら待ち続け、待ちされ続けたレイドリアンのもとにやっと店主が顔を見せた時、その背後には数人の男たちの姿があった。

レイドリアンは、そこに見知った人間の顔を見つけて思わず顔をこわばらせた。

（こんな町の酒屋の地下で会うような御仁たちではない・・・）

「レイドリアン……！」

名を呼ばれてレイドリアンは顔は平静を保ちながらも、内心は激しくなる鼓動を抱えたまま自分の名を呼んだその声の主を確認する。声の主は大臣のダルクスだった。

しかもその背後には國務長官のバジルら等、もっぱら反女王派と呼ばれ、ミレーゼに反意を抱いているとささやかれている重臣たちの顔が並んでいる。

「……………」

この事態にどう対応していいのかわからず、レイドリアンは反ミレーゼ派の面々に囲まれてしまっている事実、混乱をきしていた。（私は失敗をしてしまった……）

一方、その額から滝のように汗を噴出させているレイドリアンの引きつった顔を見たダルクスは、軽快な笑い声をたて、その場の全員に木のテーブル席につくように促し、自分もレイドリアンの横にすわった。

「突然の事態で驚いただろう。まあ、安心したまえ、我々はミレーゼ陛下の影の親衛隊だ」

「……………」

そう正面席のバジルに言われても、レイドリアンは何を言われているのかまったくわからなかった。

頭の中は真っ白になり、背中を伝わるのは冷たい汗だった。

ここに居並ぶ人間は、日頃からミレーゼに反抗的であり、またメ

イヴ妃からも煙たがられている。

特にダルクスは、ミレーゼと犬猿の仲と知られる間柄で、「親衛隊」などと言われても皮肉を込めて言われているとしか思えない。

グリトニル王子が擁立されれば、お役ごめんとする候補として名簿の筆頭に並んでいることは間違いないのだ。

「陛下は、暫定王の名を捨てられ真にハリア国の王として君臨されることを決意されたのだ」

隣に座ったダルクスの口から飛び出した言葉に、レイドリアンはその意味をすぐには飲み込めないまま、ぽかんと口を開けていた。

誰の話をしているのかさえわからない。

「例え、もし仮に、『エボルの指輪』がメイヴ妃のもとにあるうとも、まず陛下へのご報告も、お届けもなかったことは臣下として王家への反逆罪を適用できる。また、グリトニル殿下に対しては、ヘルモーズ前王より『わが子にあらず』とのお言葉を書面に綴っていただいております」

「ミレーゼ陛下が、今日レイドリアンを遣わせたということは、明日の合義の場で宣誓をされるということだ」

「では、我々も明日は合議には必ず参加をしよう」

その言葉とともに、用意されていた宮殿の内外と街の詳細が描かれたヨール羊皮の地図が大きなテーブルに広げられた。

次々と交わされて行く言葉と意見、その真剣な表情に、レイドリアンは徐々にここにいる人々がミレーゼの本当の味方なのだ知り、安心をするとともに不思議な気持ちになった。

そして、徐々に彼らが企てている内容が、国を揺さぶる大きな決断と知って、恐る恐るダルクスに疑問をぶつけた。

「こ、こ、これって、内乱になるんでしょうか？」

「なにを言っておる」

ダルクスは厳しい顔でレイドリアンを見つめた。

「これは、我らが女王陛下をおとしめようともくろんでおる輩を一掃する行為だ。本来であれば、このような酒場の地下でネズミのよ

うに額を寄せ合つてこそこそ悪巧みを企てるような真似事は不本意はなほだしい極み。しかし、現状を考えれば、陛下の御意志は宮中では黙殺されるばかり。しかも、貴族はもとより、平民らの間にまではわがまま気まぐれ女王との悪評は高まつており歯止めが聞かない状態なのは、そなたがよく知つておるだろう。我らが表立つて動かなかつたのは、メイヴ妃ら一派に芽を摘み取られまいとしたからだ。しかし、これからは女王陛下の美旗を掲げて、堂々と反乱分子の大掃除をすることが出来る。あのメイヴ妃が権力を手中にしたあの忘れ難き日と同様、一瞬ですべてを我らが手に取り戻す戦いを起すのだ」

ダルクスの視線は、ヘルモーズ王が失脚同様の扱いを受けた六年前を見つめていた。

もつと自分たちが王の異変に早く気がついていればあのような事態にはならなかつた。

この六年の辛酸をなめ続けた日々、あの惨事の日を、片時も忘れる事なく思い続けて来たのだ。

その信念があつたからこそ、ミレーゼから侮蔑の言葉や行為をうけようとも、自分の罪を贖うためにすすんでその怒りを受け、また忠告を発し続け、改心してくれるであろう日々を願ひ続けて来たのだ。

「陛下のこれまでのお振る舞いは、すべてエリル殿下が戻られる日を信じてのこと。エリル殿下ご帰還の折りには何事もなく全てを引き渡すために、ただひたすら王座を守り耐え忍ばれ続けられてこられたのだ。決して、ご自分がこのまま王位を我がものにしようとはお考えになられてはいるわけではない。しかし、メイヴ妃が《エボルの指輪》を何らかの方法で手に入れたかもしれないという噂があり、そのことに対してミレーゼ陛下にはなにも口にされていない。もしも真のことであれば、王の指輪を盗むも同然。王座を盗む輩と疑いを向けられても、仕方のない行為。そこで、陛下はご自身が民のために傀儡ではない真の専制君主を行う王として君臨されるお覚悟を

決められたのだ」

ダルクスの言葉に、その場の人々の顔が上気し、瞳が潤みはじめる。

レイドリアンもまた、あの気まぐれで感情のままに行動しているるとしか見えなかったミレーゼが、そこまで深く考えていたのだと知り、自然に熱いものが込み上げてきた。

「わかりました。女王陛下の為に、このレイドリアン。命を懸けて命令に従います」

青年は誰に問われるともなく、そう決意を述べていたのだった。

その日の夜、事態は一変した。

「陛下、今日は素晴らしいお客様をご招待致しました」

恒例となつてゐる女王主催の舞踏会が宮殿の大広間で繰り広げられていた。

優雅な音楽と、きらびやかな衣裳で着飾った男女が笑いさざめきながら踊り続けているのを、ミレーゼはあくびをかみ殺しながら眺めている。

女王主催とは言つても、それはあくまでも名目上のことで、招待客を決めているのは実質メイヴだった。

メイヴ妃が招く面々は、常にミレーゼにとっては退屈しのぎにさえならない人間ばかりだった。

舞踏会のたびに、結婚相手の候補や、権力を握りたがる諸侯達を紹介される。

それ以外にも、諸侯に取り入ろうと、賄賂を送つて舞踏会の招待状を手に入れたとしか思えない下級貴族や豪族、商人などが何食わぬ顔をして、挨拶に訪れる。

だから、どうせいつものことだろうと、仕方なく応じたのだ。

ミレーゼは、気乗りのしない表情を隠すこともせず、目の前に現れた見知らぬ貴族の子息と対面した。

メイヴ妃が連れて現れたのは、茶色の髪をした青白い顔の十歳くらい背格好の少年だった。

「名は？」

「サトニと申します」

「それで？ どの家の者？」

ミレーゼは貴族姓を名のらない無礼さに、一瞬力チンときたのだが、メイヴが紹介をしていることもあり、ため息を吐きつつそう問いかける。

ずいぶん辛抱強くなったものだと思いで自分を誉めるしかなかった。

本音は怒りをぶちまけて、どなり散らして、舞踏会会場から立ち去りたいのだ。

「彼は、このハリアの恩人となるべく訪れた人物なのでございますよ。ミレーゼ陛下」

いつにないメイヴ妃の意味深長な言葉に、ミレーゼは眉間にしわを寄せる。

「恩人？ 遠回しな言い方じゃわからないわ。はっきり言いなさい」  
「では」

メイヴ妃が片手をスツと差し上げたその時、会場を満たしていた演奏が一斉に止んだ。

「何？」

ミレーゼは突然の出来事に、メイヴ妃を睨みつける。

踊っていた人々は、音楽が止んでしまったことに驚いて、ざわめき出し、やがてミレーゼに向って自然と視線が集まり始めた。

すると、まるで人々の注目が集まるのを待っていたかのように、メイヴは穏やかな微笑を浮かべ少年に合図にも似た視線を送る。

サトニはうなずくと、首にかけていた銀の細い鎖に人差し指をかけて、ゆっくりとそれを引き出した。

少年の取り出した鎖の輪の先端に、黒い石のある指輪が現れる。  
「これは《エボルの指輪》です。ミレーゼ女王陛下」

サトニのそう大きくない声が、シンと静まり返った大広間に響く。その場の空気がどよめいた。

ミレーゼも碧い瞳を大きく見開き、サトニと名乗った少年と、彼の手にする指輪を交互に見つめる。

嫌な予感がした。

だが、初めて目にする指輪に、どう反応すればいいのかわからない。

頭の中に響き渡るのは、「《エボルの指輪》？ 本物？」という



疑問符を投げかけ、問いかける自分の心の声だけだった。

「そう、ここにあるのは《エボルの指輪》。さようですね。サト二」

メイヴ妃のいやに落ち着いた様子に、ミレーゼの椅子の脇に立つレイドリアンもまた嫌な気配を感じていた。

メイヴの言葉にサト二が無表情に頷く。

「ミレーゼ女王陛下に申し上げます」

「……………」

ミレーゼは唇を真一文字に閉じたまま、対峙する少年を睨みつける。

許可など与えるつもりはなかった。

だが、女王の許しを請うことすらしないまま、サト二は口を開いた。

「国の神器である王の指輪をご存知ですか？ 王の指輪には、守護妖獣が従うことをご存知ですか？ 僕が今手にしてるこの指輪を守っているのはヴァルツという妖獣です。この妖獣は人の寄り付かない遙か南方の険しい山々の、さらに陽も差さない闇の中、人も来ないような、谷底深くに捨て去られていました。僕は妖獣の声に導かれて指輪を手に入りました。指輪の妖獣は僕に言いました。指輪を捨てたのはハリアの王。指輪を捨てることは、王座を捨てたも同然の行為だと。自分が目覚めた今、次の王は指輪の守護妖獣である自分が選ぶ、とそう言っています」

少年の感情を表さない淡々としたたない片言の公用語が、その場にいた人々に、今起きている事態の重大さを徐々に知らせ、染み込ませていく。

「みなの方、よく聞くがよい。この少年の手にする指輪は《エボルの指輪》。われらがハリア公国の守護神エボル神から与えられし《エボルの指輪》。そして、ミレーゼ女王陛下の曾祖父ヒューリツヒ王が封じ、捨て去った指輪なのです」

メイヴが、弾劾するように大きな声をあげて、人差し指を突き出

して、ミレーゼを射るように示す。

大広間の人々は、かたずを呑んで玉座のミレーゼと対治するメイヴ妃と見知らぬ少年を見つめていた。

ミレーゼは、おもむろに玉座から立ち上がるとメイヴを睨みつけた。

「ハリアにはもうずっと指輪はないわ。もしも、それが本当に《エボルの指輪》だというのなら、証しを……、証しを見せなさい！ そのサト二とやらがもっている指輪が、本当に《エボルの指輪》だというなら、この場で、今すぐにでも証拠をみせられるはずでしょう？」

《エボルの指輪》のがグリトニルの手に渡ってるかもしれないと噂めいたものは聞いていたものの、ミレーゼは内心ひどく動揺していた。

ミレーゼの頼みとなる人間はすべて晩餐会の会場の端に追いやられており、大臣のダルクスも遠く出入り口の壁際で凍りついているのが視線の端に映る。

側近のレイドリアンに至っては、呆然とした表情で成り行きをみている状態で、ミレーゼの為に機転を利かして、この場から救い出してくれそうなものは皆無に等しかった。

「ああ、証拠が見たいんですね？ 指輪の守護妖獣が現れれば認めますか？」

恐れのない瞳で指輪を手にしたサト二は、立ち尽くすミレーゼを真つすぐに見る。

皆がミレーゼの一挙手一投足をじっと見ていた。

ミレーゼは頷くことしかできない。

（遅すぎた……）

ダルクスと慎重にメイヴ妃一派を追い出すために慎重に計画を進め始めた矢先だけに、先手を打たれたようで戦慄が走った。

動揺を見透かされないよう、いつもの機嫌の悪い表情を保つのが精一杯だった。

「《エボルの指輪》の守護妖獣ヴァルツは、持ち主を女王陛下ではなく、グリトニル王子を選んだ。それでも呼んでいいのですか？」  
「……」

ミレーゼは静かに、ゆっくりと息を吐き出した。  
退くことも、逃げることも、ましては拒否することなど出来る状況にはなかった。

大広間の人々は固唾を呑んでこの成り行きと、《エボルの指輪》という重大な言葉の響きの持つ意味の重要性を感じて、静まり返っている。

「呼びなさい。その指輪が真実、《エボルの指輪》なら証明して見せなさい」

ミレーゼは、毅然と命じた。  
命じるしかなかった。

「ヴァルツ。ここに召喚する。姿を現せ」

サトニは間髪おかずに、その妖獣の名を静かに呼んだ。

突如、まがましい重い空気とともに、黒い霧が部屋の中央に渦を作りながら現れた。

そして次の瞬間、黒い霧の中央には、ミレーゼの弟十四歳のグリトニルが立っていた。

ククククク。

黒い霧が発する低い忍び声に、その場の人々の背筋を凍りつかせる。

我ハ、《エボルの指輪》ノ守護妖獣。指輪ハ、ぐりとなる王子ヲ選ンダ。才前カラ、王ノ権利ヲ剥奪スル。

黒い霧は、今度は一瞬にして巨大な黒い獣の姿を見せた。

「衛兵！」

メイヴ妃は手を挙げて、声高に命じる。

「エボルの神から王と認められし者のみに授けられる指輪が、ここに、王座にいるミレーゼ女王を拒否したのを皆聞きましたね。グリトニル殿下を真の王と認められたのです。なれば、ここにいる者はすでに女王ではない。側近とその周辺に群がっておる死に損ないの老いばれたちとともに、地下牢へ連れて行きなさい」

ミレーゼの睨み据えた先で、メイヴ妃は勝ち誇ったように妖しくほほ笑んでいた。

（あなたのちつぽけなたくらみなど、すべて知っていたのですよ）

その瞳がミレーゼに告げる。

「待ちなさい」

ミレーゼは叫んだ。

「例え、グリトニルが王となるとして、何故私が捕らえられなくてはならないの？ メイヴ、あなた自分が何を言っているのかわかっているの？」

「存じておりますとも。あなた様がナイアデス皇国と密通し、シー

ラ様をリンセントレートスからナイアデスに売ったことも。ダーナン帝国にリンセントレートスを襲わせたことも。この国の財政をあなた様の莫大な贅沢のために瀕死状態追い込んでいることも。王の資質に欠けるどころか、国を滅ぼす極悪人だということを」

「な……」

ミレーゼは、何を言われているのか訳がわからず、怒りに全身が震え出すのを止められなかった。

「なにを……」

「牢がお嫌でしたら、あなたの母上と同様の眠りを献上いたしましたし  
ようか？」

六年前のあの忌まわしい日が、再現されつつあった。

メイヴ妃の息のかかった兵士らが、ミレーゼを取り囲み椅子から立ち上がるように促す。

「あなたって人は……」

ミレーゼは美しい顔に怒りで唇を震わせながら立ち上がった。

それを見て、ミレーゼの身柄を取り押さえようと、その体に手をかけようとした兵士らは、しかし、ミレーゼにその鋭い視線を向けられてたじろぐ。

「皆、聞きなさい。このメイヴという女は、こうやって父上や、私を、そしていつの日かはそこにいるグリトニルさえ騙し、手に掛けて、ハリアの王族の血を絶やそうとしている女なのよ。ナク口国を失った恨みを晴らそうとしているの。この女こそ、国を、私たちの国を滅ぼす売国奴なのよ」

「姉上」

それまで黙っていたグリトニルが初めて口を開いた。

「姉上、よくご覧になってください。このサトニが手にしている《エポルの指輪》の石にはいくつもの亀裂が走っています」

グリトニルはその場にそぐわぬ優しい表情で、怒りに顔を朱に染める姉を見てほほ笑んでいた。

見たこともないその表情にミレーゼは、全身の体温が急に失われ

ていく錯覚を覚えた。

その瞳は、ある人物に良く似ていた。

一見優しげな面差しの中にある、底冷えのするような冷たい瞳を宿した人物に。

「この指輪の亀裂は、姉上が玉座に座られているのが原因です。あなたはエボル神から見捨てられたのです。あなたや父上がこのまま生きていては指輪はもとに戻らない。国はこの指輪と同様、亀裂が走りいつか粉々に砕け散ってしまうかもしれません。どうか、国のためを思うのでしたら、国を愛しておいででしたら、姉上の身をエボル神に献上してください。死をもつて償ってください。お願い致します」

優しい表情は、勝利を確信した人間が見下す、哀れみにも似た眼差しだとわかる。

「よくできた演説ね。心にちつとも響かないわ」

ミレーゼはグリトニルの言葉を、問答無用に切り捨てた。

「なにが指輪よ、なにが献上よ。自分たちがこの国を手に入れたいと言っただの欲望じゃないの！ 私は弁解するようなことも、罪を償うようなことも何もしていないわ。出鱈目を並べ立てないで」

「衛兵！」

メイヴ妃がこれ以上ミレーゼが反論させないよう、再度命じる。

「やめろ！」

ことの次第をやつと飲み込んだレイドリアンの大きな体があわててミレーゼと衛兵らの間に割り込み、その手から主君を守ろうとする。

「陛下は私がお連れする。お前たちは指一本触れるな！」

衛兵らの無骨な手がミレーゼの体を押さえ込み、罪人のように連行するのを想像した瞬間、レイドリアンは無我夢中で飛び出していたのだ。

「レイ！？」

目の前をさえぎるように突然飛び込んできたレイドリアンの大き

な背中があつた。

衛兵らを突き飛ばすようにして、身を挺して彼女を守るように割り込んできたレイドリアンをミレーゼが驚いて仰ぎ見る。

「ミレーゼ陛下、いつまでも、そのようなわがままは通用しないのですよ」

メイヴが、サト二に目で合図を送る。

サト二は頷くと鎖につながったままの指輪を高く掲げて、ヴァルツの名を叫んだ。

「ヴァルツ！」

すると声に同調するように、グリトニルを取り巻いていた禍々しい黒い霧が、ミレーゼとレイドリアン、そして彼らを押さえ込もうとしている兵士らすべてに襲いかかってきたのだ。

ミレーゼは、初めて死を予感した。

万事窮すなのだ実感する。

母のような死が訪れるのだと。

ミレーゼは、レイドリアンの背に守られるようにしながら、悔しさに両目を硬く閉じた。

その時、声が響いた。

「闇に似せし存在よ。影なる存在よ。すぐにこの場の戒めを解き、私の前に膝をつき、頭を垂れ、服従の意を示せ！ 闇にあつて闇ではなく、神の衣に隠れし影よ！ わが前に伏せよ！」

凜とした声が室内に響き渡り、その場のまがましい空気を光を放って突き破った。

舞踏会に集い、この騒動に騒然としていた人々は、衛兵らが開け放ったままの扉の前にたたずむ二人の人物に目を向け息を呑んだ。

一人は薄紫のアンナの装束に身をまとった女性、そしてもう一人は。

青味がかった髪、澄んだ蒼い瞳の青年がミレーゼを襲うように渦を巻いている黒い霧を威圧するように強い眼差しを向けて立っていたのだ。

それは、六年前に宮殿から忽然と姿を消した少年の成長した姿だった。

「エリル！」

叫んだのはミレーゼだった。

「エリルなのね！」

ミレーゼは、突然の出来事に身動きの取れないレイドリアンや兵士らを強引に押し押しのけて、エリルに向かって走り出そうとした。

貴様……

「ヴァルツ」

エリルがその名を呼ぶと、黒い霧は嫌がるような意識を見せる。

「やはり、お前はヴァルツだな。エーツ山脈で出会い、ブレアの町を襲った妖獣。お前とはやはり縁があった。その《エボルの指輪》の正当な後継者こそはこの私だ。お前は知っている」

エリルは手にしていたナーラガーシユの杖を、霧から獣に変化し



ようとしているヴァルツに向けた。

途端に、変化は解かれ霧が薄れていく。

「指輪に取りついていてはお前は何者だ？ 指輪の守護妖獣か？ 否か？ 答えよ！」

チツ……。

ヴァルツは舌打ちを残すと、現れたときと同様に黒い渦を巻き起こして消え去った。

同時に、その場からはサトニとグリトニル王子、そしてメイヴ妃の姿もかき消えていた。

「しまった……」

「逃げられちゃったよ。エリル」

「うん……」

エリルがアンナの装束をまとったネイと視線を合わせる。

その装束はずっとエリルが身にまとっていたものだった。

「エリル！」

ミレーゼの声が響く。

その声を耳にして、エリルは顔を上げてネイをいざなうと歩き始める。

人々は突然のエリルの帰還に、ただただ驚愕の表情を浮かべながら二人のためにその場をからさがり、道を作った。

「姉上様」

ミレーゼの前に進み出ると、エリルは右手を心臓に当て、深々と頭を下げた。

「長らくの留守。ご迷惑をおかけしました。姉上様にはご健勝のようですねによりでございます」

「エリル……」

ミレーゼのこわばっていた表情がエリルが近づくと連れて、徐々に安堵したものに変わっていく。

いつしか自分よりずっと背の高くなった弟の姿を、唇を噛んだまま、懐かしそうに見つめる。

ガーゼフに命を狙われてからは、狂態を演じることでしか生き延びる道がなかった幼い弟。

六年前に突然姿を消し、ずっと安否を心配をしてきた弟。

エリルが帰ってくるこの日が必ず来ると信じて、ミレーゼは己を殺しながらただ待ち続けてきたのだ。

本当は玉座になど座りたくもなかった。

メイヴ妃の正体に気がつき、民の憎しみを引きつけ、操り人形のような役回りを演じ、本当の自身を殺してまで欲しい場所ではなかった。

なにも告げずに姿を消した弟が、笑顔で帰ってくる今日のこの日が来ることを信じて、ミレーゼは玉座に座り続けたのだ。

「顔をあげて、エリル」

「はい。姉上様」

震える声に顔を上げたエリルの目に最初に映ったのは、怒りに満ちたミレーゼの顔だった。

「エリル。あなた……今までどこをほつつき歩いてきたのよ。だいたいあなたがいなくならなかったら、私はこんな目にあわなくてすんだのよ！ 毎日毎日食事もできないくらいの書類に目を通して、サインをして、会いたくない人に会って、笑顔を作って、何の自由もなくなつて、毎日毎日腹の立つことばかりで、あげくの果てには危うく母上のように殺される場所だったのよ。なんで、もっと早く帰って来なかったのよ！なんで……もっと……」

だが、言葉とは裏腹にミレーゼの瞳には後から後から真珠のような涙がこぼれ落ちていた。

「申し訳ありませんでした」

エリルは、自分が気ままに旅をしていたときに姉に想像以上のつらい思いを背負わせていたのだと初めて実感し、自然に手を伸ばす。「本当に、殺されるところだったのよ。エリル……」

ミレーゼは広げられたエリルのその胸にしがみつき泣き続けた。

そして、そのミレーゼを抱き寄せたまま、エリルの突然の帰還と、

後継を名乗りながら消えてしまったメイヴ妃とグリトニル王子に、混乱した表情を浮かべている人々に対し、エリルは振り向き呼びかける。

「私はこの六年、ハリア公国から過去に持ち去られた《エボルの指輪》を探して旅を続けて来た。あの少年がもっていた指輪は多分本物の《エボルの指輪》だと思う」

おお……と、人々の間でざわめきが起こる。

「けれど、指輪はすでに傷つき効力を失っている。あの妖しの獣も、真に指輪の守護妖獣なのか、神の手から離れたただの妖獣なのか、それとも禍々しい力に魅入られた妖獣なのか、今はまだわからない」よく通る声が、この王子が聡明な資質を備えていることを充分に知らしめた。

「ただ一つだけ言えるのは、あの妖獣はわたしがいる限り、ハリアの王の座を脅かすことはできないということだ。あの者は私には近づけない。なぜなら、わたしがこのハリア公国の真の後継者であり、ハリア公王となる者だからだ」

人々の前に立っていたのは、六年前の無知で奇妙な振る舞いをする少年ではなかった。

知的な表情に凜々しさをたたえた理想的な王太子……いや、統治者の姿だった。

王座に触手を伸ばした邪まな者を一瞬にして追い払い、困窮しているハリアを救うために現れた彼らにとっては待ち焦がれていた王の姿そのものだったのだ。

第17章 国境を越える時 - 15 - (後書き)

第17章 国境を越える時 終了

風が吹いていた。

その風は、時を動かす風だった。

ノストールのアルティナ城の回廊に立つアウシュダールは風を受け、はるか遠くのエーツ山脈を見つめていた。

ノストール王国の第四王子の座を人知れず我がものとし、シルク・トトウ神の転身人、と自国は当然として諸国からも畏怖される存在となったアウシュダール。

十歳を迎えたその王子は、吹き付ける風の中から見えないものを感じ取っているかのようにだった。

「もうすぐ、その時が来る」

アウシュダールは、口元に笑みを浮かべる。

けれど、その顔には、まだ幼さを残す顔立ちには不釣り合いな深い眉間の一筋の線が浮かび上がり、焦茶色の鋭さを宿す瞳には鬱陶しそうな感情がよぎる。

「片付けておくべきことがあったな……」

瞳が一点を凝視するように大きく見開いたその瞬間、アウシュダールの栗色の髪がそよぐ風とは反対方向に大きくなびいた。

「……………」

そして、その唇から呪文のような言葉が奇妙な音律とともに静かにつむぎ出されていく。

徐々に、アウシュダールを中心とした空間が、呪文と同調するようにならぬ奇妙に歪みはじめ、目に見えない境界壁に境界を作り上げていく。

境界はアウシュダールをアルティナ城に存在させながら、彼が望む別の場所にその意識を飛ばすことが可能な空間だった。

アウシュダールの眼前には、ノストール王国とはまったく別の光景が広がっていた。

あきららかに、異国の風景が映し出されている。

その場所は点在する民家が遠くに見え、傾斜をした畑が広がっている土地だった。周囲はうっそうとした樹木が生い茂っている。

全体が薄暗いのは、ノストールとは異なる時間帯、夕暮れ間近であることを、すでに何度も訪れているアウシュダールは知っている。

背の高い木々と草が覆い茂る場所にアウシュダールは立っていた。

「我が下僕よ。主の許しの下、我がもとに下れ」

低く響く声が命じる。

声はまるで、アウシュダールの声とは思えないほど、成人した大人の声だった。

空間のゆがみの中から、影が現れ、徐々に青色のマントをまとった一人の男の姿が浮き上がっていく。

男の身に着けている装束はノストールのものではない。

表情というものが無いような無気質な顔をした三十代頃の男は、ゆっくりと腰を折り十歳の王子の前に深々と頭を垂れる。

「ご報告いたします」

「逃がしたのか」

一言も発していない状態で、見通すように言い切るアウシュダールの言葉に男は顔を上げる。

その表情は動かない。

「アンナの介入がありました」

男の言葉に、アウシュダールは怪訝な表情を浮かべる。

「説明しろ」

気になることがあった。

ビアン神の怒りから砂嵐に襲われたリンセントースの国を救うべく、援軍を起こしてノストールを出兵したのは今から、二年近く前だった。

アウシュダールとテセウスはその岐路、偶然リリー・アンナというアンナの者から、ある噂話を耳にした。

それは　ノストール軍には援軍に同行した少年兵団があり、エ

「イツ山脈を越える途中で軍とはぐれたという少年が一人いる、と。名は「ランレイ」。

そして、ランレイと共に旅する子供がもう一人。

ジーンと名乗る少年は、ノストール軍に従軍する兄を追ってリンセントートスに來たという。

アウシュダールは、この二人の子供の素性と行動を探らせていた。「少年兵団に属していたと思われるランレイと、兄を追って旅をしているというノストール出身のジーン。この二名が、ネイという十五歳前後の少女と、エリルというアンナと旅をしていることが事実であるとの報告は、前回報告いたしました通り間違いはありません」アウシュダールはうなづく。

アウシュダールはリンセントートスへの行軍に参加した少年兵の顔と名前をすべてを鮮明に覚えている。

少年兵団　それは、自分と同じ年に誕生した、当時五歳の男児ばかりを集めて結成した少年兵団だった。

本来の目的は、『ノストールに、戦いと勇気の神・アル神の唯一の息子シルク・トトウ神が誕生し。その子が今年五歳の誕生日を迎える』との予言をダーナン帝国とナイアデス皇国の魔道士が同時におこなったことから、当時ノストール王であったカルザキア王が五年前に生まれた男児たちを他国の手から護るために城に集めたのだ。当然、その時に子等の名前はもとより、身分、身体的特徴、両親の出生、一族の系列に至るまで、徹底的に調べられている。

アウシュダールは、その同い年の少年たちを少年兵団として、リンセントートス援軍に参加させたのだ。

だが、その中にランレイという名前はなかった。

すべての少年兵団の子供たちは、あの行軍の中で死んだのだ。

その脳裏には、エーツ山脈で自ら谷底に身を投じて行った少年らの姿が浮かび上がる。

天空に出現した巨大な光の柱がエーツ山脈目がけて突き刺さり、大爆発を起こした光景。

一瞬で、すべての命は灰と化した。  
生命の鼓動は途絶えた。

白雪の中、あの場にはアウシュダール以外に生きている者はどこにも存在しなかった。

あの状況で生き延びる子供がいたなど、ありえないのだ。  
すべての子供の心、命はアウシュダールの手中にあった。

国を出る前から、そしてエーツ・エマザー山脈の山中でも若い少年兵の心はアウシュダールの暗示に深く染まり、その意の下に統一され、命令に従う人形存在と化していた。

自分が死ぬこともわからないまま、夢見心地の状態で、ただ命じられるままに自分の身を深淵の谷底へと投じたのだ。

強力な暗示にかけられた子供が勝手に脱走したり、アウシュダールの命令から逃げることなど出来はしない。

存在しえなかったはずなのだ。

だが、リンセントースで出会ったアンナのリリーは、エーツ越えをした子供がいると確かに言った。

すべてのノストールの民は、のちにノストールに、起こった大地震の時に少年たちは命を落としたと、そう信じ記憶している。

男は報告を続けた。

「リリー・ド・リア・アンナという者はジーシュの一族の者であることは確認いたしました。そのリリー・アンナこそが、エリルという名のアンナであり、ランレイ等と共に旅をしている存在でありました。」

アウシュダールの眼光が厳しくなる。

「ネイという少女に関しては、出身国、身分を含めてまったく判明しておりません。ただし武術の腕はかなりのものようで、用心棒的役割をはたしているようです」

「他には？」

「ランレイたち四名がいたブレアの町に妖獣が出現し、町や人々を襲ったとのこと」



「妖獣？」

「黒い霧が変化し、獣の姿になったと。しかも、その時、村を訪れた《星守りの旅》の途中の三人のアンナが妖獣を撃退し、その後ランレイとジーンの名とともに町を出ております。この三人のアンナはサーザキアの一族の者でした。リリー・アンナは襲撃の前に姿を消し、その後町に戻り、妖獣に襲われ深手を負ったネイと共にブレアの町から北に向けて姿を消しております。ランレイたちを追ったものか、別行動をとったものかは不明。《星守りの旅》のアンナの張り巡らした様々な結界がランレイやアンナたちの記憶を消し、痕跡を絶っております為、追跡に手間取っております」

「アンナの介入か」

アウシュダールは考え込むように親指の爪を噛む。

ランレイが本当に少年兵団の一員であり、ジーシュの一族のアンナ、さらにはサーザキアの一族のアンナと接触し、同行しているとなれば見逃すわけにはいかない存在だった。

アウシュダールはギリギリと音がるほど親指の爪を噛んだ。

リリー・アンナやジーシュや、サーザキアの一族のアンナが、ど

こまで真実を知っているのか調べる必要があった。

アンナの一族がランレイなる少年を守り、助けたのだろうかという考えがよぎる。

しかし、エーツ山脈にアンナは存在しなかった。

介入できるものなど存在しない。

(では……)

アウシュダールは瞳を綴じる。

エーツ・エマザー山脈の彼方から眩い光が放たれていた。

光の源は、ナイアデス皇国。

直視したならば目が眩んでしまっただろう厄介な光が、いやまして大きく波打ちその波状を広げようとしている。

アウシュダールの力をもってすれば、その光がエーツ山脈を越えてノストールに入り込んでくるのを防ぎ、押し戻すことはたやすい。

しかし、光そのものを消滅させることは出来ない。

ナイアデス皇帝のシーラ妃が守護妖獣を得た瞬間、世界は肉眼で見ることの叶わない光の閃光に貫かれた。

守護妖獣の主である者だけが、ナイアデス皇妃が瑞獣を得たことを知る。

瑞獣は、世界の変化を告げる「時の声」そのものだった。

アウシュダールは、瑞獣が守護妖獣として誕生したことは問題視していなかった、遠眼の力に影響を及ぼすことには閉口した。光で見えない部分があるのだ。

だから、遠眼 だけではなく調べさせているのだった。

「妖獣が出現したというのも気になる。主の存在を確認しろ。主を持たない妖獣は守護妖獣ではない。人間や人里を襲う妖獣がいるなど……」

アウシュダールはさらにきつく爪を噛む。

先ほどまでの大人びた表情に、嫌悪感が加わる。

「ハリア公国とリンセントス国の上空に垂れ込める暗雲がピアンの守りの力を薄れさせている。私がいなくてはリンセントスは滅びるだろう。ハリアも、ダーナンもだ。妖獣といい、アンナの介入といい、人を不愉快にさせる」

姿形は少年だが、全身から放たれる「気」は、異様な圧迫感を漂わせる。

「ランレイと、ジーン。見つけ次第消せ……といたいたいところだが、見つけ次第知らせる。私が実際にこの目で見てから直接手を下す」

「御意」

「例えどのような者であれ、少年兵団に存在したものは、偶然に国外に逃れたとしても、一人として生かしておくことは許されない」

青いマントの男は、更にアウシュダールと言葉を交わした後、最初に姿を現した時と同様に出現した空間のゆがみの中へと消えて行った。



アウシュダールは眼を閉じ、意識を集中させる。リンセンタートスの一角に自分の意識を存在させ、投影させることは瑞獣の光が強い今は容易ではない。

ましてや、ナイアデス皇国の瑞獣の光がノストールの国境でもあるエーツ山脈を越え、入り込まないように遮断することに心血を注いでいる今は、危険な兆候を見逃さないように神経を研ぎ澄ませなくてはいけなかった。

(ランレイとは……)

意識を謎の人物に向ける。

その時、思索を途切れさせる艶のある美しい女の声が、アウシュダールの名を呼んだ。

「殿下？」

見えないはずのアウシュダールの気配を感じ取ることができるのは、このノストールの中では数えるほどしかない。

アウシュダールは結界を解き、メイベルに背を向けたままその前に姿を現す。

「殿下、お探ししておりました」

アンナの一族の証である薄紫色の装束をまとったメイベルは、ほつとした様子でアウシュダールに駆け寄る。

「何の用だ？」

アウシュダールは振り返ることなく返事をする。

「陛下がお呼びでございます」

「兄上が……」

その顔から、大人びた表情が消え年相応の少年の表情が現れる。

「わかった。だが……」

横顔を向けて、アンナのメイベルをいちべつする。

「メイベル・ソル・アンナ。先だって行った《先読み》。ここでも

う一度言ってみよ」

唐突なアウシュダールの言葉に、メイベルは瞬間的に不可解な表情を浮かべた。が、すぐに緊張した面持ちでうやうやしく告げた。

「西に暗黒の羽が舞い降り。中央と小国は混乱の渦に消える。そして東は光を得る」と申し上げました」

「そうだ。ダーナンのロデイが手に入れた『暗黒の羽』は『花嫁』。『東の光』とはナイアデスのフェリエスの『花嫁』。どの国にしても得たのは女の力。己の力ではない。所詮、異国の神の寵愛を受けた女がいなければ何もできない非力な存在だ」

「おっしゃる通りでございます」

メイベルは頭を低くし、そう答える。

「けれど、その女たちのせいでダーナンには光をも通さぬ闇が垂れ込め、ナイアデスには光の渦が満ち溢れている。たとえ一時の融合時の力だとはわかっていても気にいらない。」

アウシュダールは不機嫌そうに吐き捨てる、返事に窮している様子のメイベルを横目で見て、「おや」という表情を作って微笑んだ。

それは、十歳の子供のものとは思えない嘲笑を込めた微笑みだった。

「ここにも女がいたな」

メイベルは弾かれたように伏せていた紫色の瞳を上げ、すぐに自分より背の低いアウシュダールの視線よりさらに低く頭を下げる。

「恐れ入ったという真似はやめる。お前も女なら私の役に立ってみよ。ネフタンの調教はどうなった？」

ビクリとメイベルの肩が震える。

メイベルにとり、そのことを問われることは苦痛以外のなにものでもなかった。

彼女は、五年前にアル神の息子シルク・トトウ神の転身人の少年に《祝福》を行い、「アウシュダール」の名を授けた。

アンナが王族に行く《祝福》は、同時に守護妖獣降臨の儀式でも

あつた。

だが、アウシュダールに守護妖獣は降りなかった。

メイベルは守護妖獣の召喚に失敗をした。

理由はわからなかったが、それは致命的な大失態だった。

なぜなら、《祝福の儀》により名を得た者は、名づけ親のアンナ以外の者からは、守護妖獣を得ることができないからである。

メイベルから《祝福》を受けたアウシュダールもまた、メイベル以外のアンナから守護妖獣を望むことができない。

たとえ転身人であつたとしても、アウシュダール自らが守護妖獣を降臨させることは出来なかった。

神と人間、妖獣の世界はもとより別であり、それらを結び付けるのが仲介者アンナの役割とされてきたからだ。

《祝福の儀》は守護妖獣をもたらす高度で神聖な儀式であることから、すべての儀式を司ることができる最高位のアンナで行うことのできない儀式とされている。

そのため、王族に対して《祝福の儀》を行うのは、アンナの一族の長と定められている。

メイベルは、一族の中で誰よりも突出した力を備えていた。

どのアンナよりも行使できる術を多く身につけていた。

にもかかわらず、一族の長老のサーザキアをはじめ、族長たちの誰一人として、その能力を認めてくれる者はいなかった。

《先読み》をわずか三歳で行い、野生の小動物を我が意の下に操ることを得意とし。十歳の誕生を迎えたときには、《星守りの旅》にでなくとも、ほとんどの術は極めていた。

メイベルの能力を認め、様々な術を教えてくれた人物は唯一、彼女の父親だけだった。

だが、その父親は一族が禁じた数々の秘術を用いた為に、メイベルが五歳の時に一族から追放されている。

ある時、メイベルは自分の力を知らしめる方法を思いつく。

アンナにとっては禁忌の術とされる妖獣召喚術を使い、《祝福の

《儀》を行うサーザキアとなんら変わることはない力をもっていることを皆の前で証明することだった。

《祝福の儀》を光とすれば、禁忌の術は一步間違えば邪まな闇の力を呼び込む術と畏れられていた。その一方で、禁忌の術の行使は《祝福の儀》を行える者と同等の高度な力を持つ証明とも信じられていた。

メイベルは、自分の存在を長のサーザキアが無視するのは、自分の力を恐れているからだと思うようになっていた。

自分を認めさせたい　それを証明するために、メイベルは無許可で　祝福　を行った。

一族が招かれたある小国で、王族の末裔として生きる公爵の子息を見つけ出し内密に　祝福　を与えようと持ちかけたのだ。

祝福　も禁忌の術とされる妖獣召還も、メイベルには違いがあるとは思えなかった。

ただ、一族が認める者が王族に行う正式な儀式が　祝福の儀　であり、認められていなければ禁忌の術とされている、と。

だから、人間に対して初めて行った　祝福　は、メイベルにとっては禁忌の術ではなく　祝福の儀　だった。

メイベルは公爵の子息に名を与え、小妖獣を降臨させることに成功した。

これで、証明できる。

もしも、その者がサーザキアと族長らに引き合わせる直前、運悪く病で急死さえしなければ、メイベルは自分の力を認めさせ、今頃は族長の座におさまっていたはずだった。

五年前、アウシュダールに 祝福の儀 を行ったものの、守護妖獣をもたらすことのできなかつたメイベルは、その理由を必死に考えた。

アウシュダールこそが真実の王子であり、拾われ子のルナが偽物だ。

本物が戻って来た以上、当然守護妖獣リユーザは正当な権利者であるアウシュダールのもとに還るべきであるはず。

アウシュダールの守護妖獣はすでに存在している。だからアウシュダールに守護妖獣が降りなかつたのだ、とメイベルは解答を導き出した。

そして、主人を誤った守護妖獣リユーザを捕らえ、正統な主人であるアウシュダールに還すことが唯一、アウシュダールの信頼を回復する機会だとわかつていた。

その為には、慎重に「罨」を仕掛ける必要があった。

失敗を防ぐため、成功に導くために、メイベルはラウ王家一族すべての守護妖獣に《呪縛の術》をかけたのだ。

アウシュダールがルナと入れ替わった以上、「ルナ」は存在しえない人物になる。

いないはずの人物を連想させる全ての言葉、行動、証となるようなものに触れることを禁じたのだ。

守護妖獣は主人にしか関心がないといわれている。

主人の命令なくして、自分の主人ではないルナを思い出させる行動をするとは考えがたいが、アウシュダールを認めない行動に出ないとはいえない。

思考回路がまったく読めない存在だった。

万が一にも、アウシュダールに反抗をしないように、そしてルナを主人に思い出させないようにする必要があった。



「ルナ」の名を告げた瞬間、守護妖獣は主人のもとから引きはがされ、メイベルの支配下に捕らえられてしまう禁忌の術の行使。

彼女が父から学び進化させた高等魔道術のひとつだった。

アンナの中でも、守護妖獣降臨の儀を行なう力がなくては、守護妖獣に術をかけることは出来ないのだ。

術の行使から逃れるためには、「ルナ」を排斥するしか守護妖獣たちに手立てはない。

思惑通り、妖獣たちは動かなかった。

ただし、ルナの守護妖獣リユーザが、主人を無視することはありえない。

ルナのそばにいること自体が「畏」にかかる仕掛けだったからだ。しかし、その絶対に成功するはずの守護妖獣リユーザを捕らえる「畏」をしかけながら、メイベルは愕然とする。

リユーザを捕らえられなかったのだ。

唯一の収穫は、ルナを救おうとしたラマイネ王妃の守護妖獣ネフタンを「捕縛」できたこと。

そして半年ほど後、ルナを襲った海岸の崖の程近い岩場の陰から、白骨化した子供の遺体が発見されたことだった。

背丈、骨格の感じがルナとほぼ同じだったこと。

リユーザのものと思われる無数の羽がその遺骸のそばに漂っていたことから、アウシユダールが起こした巨大な竜巻に巻き込まれて命を落としたルナの屍に違いないと、グシュター公爵とメイベルは結論づけた。

その死骸が、ハーフノーム島の海賊の長ジルとその妻イリアの子ジーンであったことを、メイベルは読むことが出来なかったのだ。

さらに、メイベルは守護妖獣を甘くみていたことを悔いることになる。

ラマイネ妃から引き離されたネフタンは、メイベルの意のままにならなかつた。

妖獣召喚術で、野に生息する小妖獣を何度も捕縛し、調教し、従

者としてきた。

最初のうちは激しく抵抗する妖獣らも、やがては従者と下る。守護妖獣も同様に時間をかけさえすれば下ると信じていたのだ。

だが、使われなくなっている城の郊外の地下牢にある魔石に封じたネフタンは、「主人以外に従うべき者はない」と断言して後、メイベルがどのような術を行使しても、アウシュダールがその力を用いても、まったく反応をしなくなっていたのだ。

予想外の出来事だった。

ネフタンさえ支配下において調教できれば、リユーザの代わりにアウシュダールの従者にもすることも、また王妃のもとに戻し他の守護妖獣の動きを監視する役割を与えることも容易なはずだった。

そうなればメイベルはこれまでの数々の失態を返上し、ノストールの宮廷魔道士の称号を手に出ることが出来るのだ。

だが、守護妖獣を意のままに出来ないまま月日は過ぎ、アウシュダールに責められ、苦悶し続ける日々がメイベルを苛んだ。

一時しのぎの手段としてメイベルが召還した小妖獣をアウシュダールの従者として与える儀式を行ったこともあったが、それも失敗し、面目躍如はままならなかった。

このままだとアンナとしての資質と能力、立場さえ失いかねない状態だった。

無言のままのメイベルの姿を長い時間見つめていたアウシュダールは、諦めたようなため息を吐き出すと、子供らしい表情をつくってにっこり笑いかけた。

「その様子だと、進展はないようだね。もう少し己の存在感を示す働きをしたらどうだい？　良い返事は聞けないようだから、兄上のところに行ってくるよ」

つき放すな言葉を残し、アウシュダールは歩きだす。

メイベルが遠ざかっていく後ろ姿を悔しげに見つめ、唇を噛み締める。

この五年、シルク・トトウの転身人と敬い、奉り、畏怖の念を持って尽くしているのだが、アウシュダールはやさしい言葉のひとつもメイベルに与えることはなかった。

ノストールの人々はアンナの一族を敬うが、アウシュダールというシルク・トトウ神の転身人の前ではアンナの意味などないに等しい。

このままでは、メイベルは長サーザキアらの下にいた時と同様、能力を認められない存在になる。

制しがたい悔しさが心の奥深くからジワリと湧き上がった。

（私がいなくては、祝福も、守護妖獣さえ得られないくせに…）

わずかにそんな想いが横切った。

その時、指を弾く乾いた音が響いた。

同時に、メイベルの身につけている紫の薄いフードが突然フワリと浮いて広がり、花びらのように散り散りに宙に舞い散った。

結界の術を施した頭から足元まで全身を覆うアンナの正装が、一瞬の間に音もなく冷たい床へと布の断片とし化して舞い落ちたのだ。

「その布よりも、人の肌は柔らかい。心しておくんだね」

去って行くアウシュダールの声が静かに冷たく響く。

「申し訳ございませんでした」

蒼白になったメイベルは、その場に崩れるように倒れ込み、ひれ伏した。

切り裂かれた薄布の断片を手に、そして、去って行く足音が消えてしまってもなお、全身が小刻みに震るえ続け、立ち上がることができなかった。

クロトは守護妖獣ダイキと遠乗りに出ていた。

目的地は、エーツ山脈に最も近いシャンバリア村方面だった。

だが、村には立ちよらずにクロトは近くの丘でダイキの足を止めさせた。

いや止めさせたというよりもその先の森へ行くのを、ダイキが頑なに拒むため、しかたなく止まるしかなかったのだ。

『また、あそこに行かれるのですか？』

ダイキが問うと、クロトは「来れないんだから、そこで待ってるよ」とだけ言つて、エーツの裾野に緑豊かな広がりを見せる森に向つて歩きだした。

クロトの守護妖獣・黒馬ダイキは、離れて行く主人の背中をいつものようにだまつて見送っていた。

ダイキの何かを言いたげな視線を充分に感じながらも、クロトはすっかり歩きなれてしまった森の獣道を歩き続ける。

初めてこの森の中に足を踏み入れたのは、子供の頃のことだった。やがて、父が亡くなって自分の務めの一環として意識して視察を始めたのは、アルクメーネがナイアデス皇国に留学したころだったような気もする。

長い間、ずっと心に引つ掛かっているものがあつたのだ。

父カルザキア王が亡くなった後から、守護妖獣ダイキはひどく慎重な行動をとることが多くなった。

今までクロトとダイキは、国の隅々を風のように自由に疾駆した道なき道を越え、山も川も、家々の屋根さえ飛び越え、どこへでも、どこまででも彼等は行くことができた。

ダイキの足にかかればまで行けない場所などどこへもなかった。

早馬さえ十日以上かけるノストール全土を、一日で駆け巡ることが出来る風の足を持つ。

ノストール全土が大地震に見舞われた時も、その復興の柱としてクロトはテセウスの命を受け、伝令と激励の任を引き受けた。

その働きは、民の間から「風の伝令王子」と親しみを込めて囁かれるほど見事な働きぶりを示し、クロトはダイキと共に数え切れないほどのあらゆる道や路地、村、町、畑、森と国中を、何度も、難往復も走り巡り続けた。

その気になれば、夜明けにエーツ山脈を越え、国境を越えて、他国の王に挨拶をして日が落ちるまでにノストールに戻ることも夢ではないとクロトは思っている。

ラーサイル大陸さえこの守護妖獣の足はひと月もあれば縦横無尽に駆け抜け、制覇できると信じて疑っていない。

そのクロトの守護妖獣が、奇妙にも嫌がり迂回する道や場所がいくつもできたのだ。

その一つが、このエーツの裾野一帯に広がるエーツ・ムートの樹海だった。

いたるところに大小さまざまな湖や沼、滝や洞窟があり、季節ごとに見飽きることのない探検にはうつつけの場所だった。

自由に走り抜けていた広大な原生林も本来は危険な場所であり、迷いこんだら生きては出られないと恐れられている場所である。

例え、隣国がエーツを越えてノストールに侵略しようとしても、待っているのはこの樹海の自然の砦。

土地感がないものは迷ったら最後、エーツ・ムートの樹海を抜けるのは至難の技とさえ言われている。

樹海に一番近く、最もよく知っているシャンバリアの村の人々さえも、自分達がわかつている道や場所以外はよほどのことがない限り使わない。

そんな危険と隣り合わせの場所も、ダイキがいるからこそ何の迷いも、不安も持たずに飛び込んでいったのだ。

だが、今のダイキはその樹海の中のリルカという名のついた樹海の中でも数少ない丘から先は、進もうとしなくなっていた。

どんなに命じてもまったくもって頑として聞き入れようとし  
ないのだ。

ダイキが避ける場所。

それが、逆にクロトの強い関心呼び起こした。

「そう簡単に怖気づく守護妖獣かよ」

クロトは、若者らしい精悍な表情をたたえて森を歩き続ける。

ダイキが拒んでも、クロトは何度も丘にダイキを残して森の中へ  
と探索に挑んだ。

何度も、何度も、ダイキが頑なに拒むその理由を突き止めるまで  
やめるものかと、なかば意地になりつつ、時間を見つけては足を運  
んだ。

道のない生い茂った樹木の間を抜け、野原となっている一帯が現  
れると、その奥にぽつんと建っている山小屋が見えてきた。

山小屋に近づくと周りを一周し、クロトは軒下に積んである薪の  
上に腰を下ろす。

小屋の住人はまだ帰って来ていなかった。

ここを見つけたのは半年以上前のことだった。

樹海のかなり奥深い場所だったので、当然そんな場所に山小屋が  
あり、人が住んでいるとは想像すらしていなかったのだ。

初めて見つけたときは驚いたものの、結局その時は小屋の住人に  
も、他に誰にも会うことはなかった。

「ダイキも来ればいいのにな」

クロトは、山小屋の住人との、初対面の出来事を思い出して、く  
すくすと思い出し笑いをする。

(危うく、殺されるところだったっけ)

山小屋を見つけて三度目の訪問をした時に、二人は意外な形で出  
会った。

小屋の回りをうろろろしていたクロトは、いきなり背中から飛び  
かかれ、羽交い締めにあっただのだ。

身の危険を感じたクロトは、こんな危険な状態なのに姿を見せな

い状況に少しばかり苛立ちながら、言葉もなく襲いかかって来た相手に遠慮なく反撃を食らわせ、応酬を見舞わせた。

体を屈めて投げ飛ばし、素早く立ち上がると、相手も飛び跳ね向き合う。

見れば自分と変わらない年頃の少年だった。

「さて」と言える状況ではなかった。

息もつかせぬ速度でクロトの腹部目がけて頭突きを食らわせて来たのだ。

あとは覚えていないほど、殴る蹴るとお互いに一步も引かない攻防が始まり、「攻撃は最大の防御」といわんばかりの攻防が延々と続いた。

やがて、互いの力が尽きかけ、肩で大きく息をしながらクロトは襲いかかって来た若者と睨み合った。

「何者だ」と相手がやつと息絶え絶えにも問いかけてきた時には、もう立っているのが精一杯で、立ち上がるうにも、片膝から力が抜けて両足では立ち上げれない状況になってからだった。

「この小屋の住人に……会いに来たんだ……何度も」

クロトはやつと小屋の住人に会いに何度も来ていたことを話すと、相手も最近出没する野盗と勘違いをしていたことを知ったのだ。

誤解と緊張がほどけた瞬間、二人ともそのまま地面に倒れ込んで起き上がれなくなってしまった。

「なに、ニヤニヤしてるんだよ」

クロトが思い出し笑いをしていると、森の方向から馬鹿でかい声が飛んできた。

顔を上げると、小動物ラドの長い耳を掴んでぶら下げ、背中には薪を背負ったこの小屋の住人が姿を現した。

初対面のときと変わらないふてぶてしい面構えが、うさんくさそうな目でクロトを見る。

クロトはそんな決して愛想がいいとはいえないこの少年が嫌いで

はなかった。

むしろ、城の中では味わえないぶつきらばうに自分に対して接し  
てくる様子が面白くて、むしろ気楽だった。

「へえ、ラド捕まえられたんだ」

クロトはその手にぶら下がってるラドを見て目を丸くする。

小動物のラドは機敏に森を走り抜け、長い耳で危険な物音を察知  
して逃げ、鼻が良くて人の匂いの残る罠にかからない為、なかなか  
簡単には人に捕まることはないのだ。

「十日ぶりの肉だ。まさか、ためえ肉をあてこんで食いにきたわけ  
じゃないだろな」

その言葉にクロトは思わず笑いをこらえる。

自分に向ってそんな言葉を言うのは、彼だけだ。

「俺って、すっげー運がいいんだよ。ラドは俺に食べてもらうため  
にラクスに捕まったのかもしれない」

「ひと口だつてやるか」

ラクスは不機嫌そうにそういつつ、小屋の中にクロトを招き入  
れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1873e/>

---

神々の黄昏《ユナセプラ》

2011年12月11日17時51分発行